

九州横断自動車道関係 埋蔵文化財調査報告

—32—

朝倉郡朝倉町所在 治部ノ上・座禅寺遺跡

1994

福岡県教育委員会

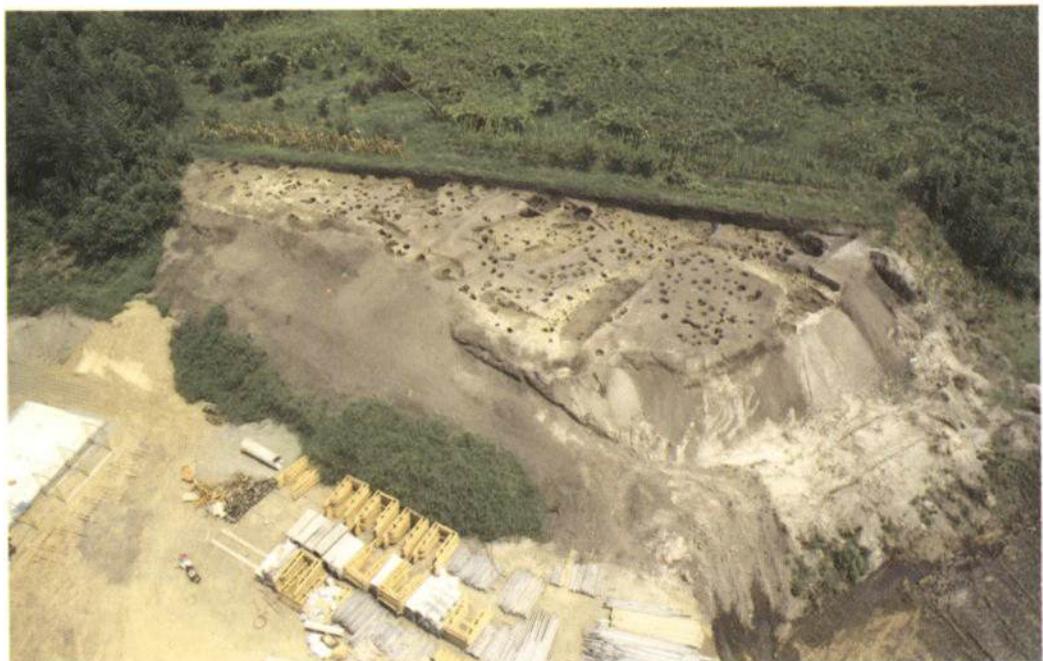
九州横断自動車道関係 埋蔵文化財調査報告

—32—

朝倉郡朝倉町所在 治部ノ上・座禅寺遺跡



(1) 治部ノ上・座禪寺遺跡全景（東方上空から西を望む、右上方に孤塚古墳）



(2) 座禪寺遺跡全景（南方上空から）

序

この報告書は、福岡県教育委員会が日本道路公団から委託を受けて、昭和54年度から実施している九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査の記録であります。

今回の報告は、朝倉郡朝倉町所在の治部ノ上遺跡と座禅寺遺跡についてのもので、その内容は、縄文早期～弥生～古墳～室町期にいたる各時期の集落・墓地等であります。出土遺物についても、貴重な資料が豊富に発見されております。

本報告書を文化財愛護思想の普及、教育・研究等の資料としてご活用いただければ、幸甚に存じます。

発刊にあたり、地元の方々をはじめ、数々のご協力をいただいた関係各位に深甚なる謝意を表します。

平成6年3月31日

福岡県教育委員会

教育長 光安常喜

例　　言

- 1 本書は、昭和59年度に福岡県教育委員会が日本道路公団から委嘱されて、九州横断自動車道建設に先立って現地発掘調査を実施した報告である。
- 2 本書に収録した遺跡は、^{じぶんのうえ}治部ノ上遺跡（第22地点）と座禅寺遺跡（第23地点）（いずれも所在地は福岡県朝倉郡朝倉町大字入地）である。
- 3 本書掲載の現場における実測図は、児玉眞一・中間研志・伊崎俊秋・高田一弘・日高正幸・平嶋文博・古賀勇・半田裕士が作成した。出土遺物の実測は、平田春美・鬼木つや子・原富子・若松三枝子・児玉・中間・水ノ江和同が行った。更に、遺構・遺物の製図等には、豊福弥生・原カヨ子があたった。
- 4 出土遺物の整理は、九州歴史資料館の岩瀬正信氏の指導のもとに、県文化課甘木事務所及び九州歴史資料館にて行った。
- 5 遺構の写真撮影は各調査担当者が行い、空中写真はフォト・オオツカによる。出土遺物は九州歴史資料館の石丸洋氏の指導の下に北岡伸一他が撮影した。
- 6 本書で使用した方位はすべて座標北である。
- 7 本書の編集は児玉・中間が担当したが、執筆分担は以下のとおりである。

I～III……………中間

IV-A・C～I ……児玉

IV-B……………水ノ江

本文目次

	頁
I 調査の経過	1
II 位置と環境	5
III 治部ノ上遺跡	9
A はじめに	9
B 縄文時代の遺構と遺物	10
C 壺穴住居跡	72
D 土壙	134
E 石蓋土壙墓	172
F 方形周溝墓	173
G 掘立柱建物	178
H 落込み	181
I 溝状遺構	187
J その他の遺構と遺物	198
K まとめ	208
IV 座禅寺遺跡	219
A 遺跡の概要	219
B 縄文時代の遺物	222
C 壺穴住居跡	228
D 掘立柱建物	239
E 土壙	240
F 溝	244
G 方形周溝墓	245
H 土壙墓	251
I おわりに	254

挿 図 目 次

	頁
第 1 図 路線図.....	2
第 2 図 治部ノ上・座禪寺遺跡位置図 (1/10,000)	6
第 3 図 治部ノ上・座禪寺遺跡周辺地形図 (1/2,000)	7
第 4 図 治部ノ上遺跡の縄文時代遺構 (1/600)	10
第 5 図 A 1・19号土壤実測図 (1/30)	11
第 6 図 A 1号土壤出土繩文土器実測図 (1/3)	12
第 7 図 A 1号土壤出土打製石斧実測図 (1/2)	13
第 8 図 A 5号土壤実測図 (1/40)	14
第 9 図 A 5号土壤出土石器実測図 (1/2)	15
第 10 図 A11・12号土壤実測図 (1/60)	16
第 11 図 A11号土壤出土繩文土器実測図 (その1) (1/3)	17
第 12 図 A11号土壤出土繩文土器実測図 (その2) (1/3)	18
第 13 図 A12号土壤出土繩文土器実測図 (1/3)	21
第 14 図 A17・20号土壤実測図 (1/60)	22
第 15 図 A17号土壤出土繩文土器実測図 (1/3)	24
第 16 図 A28号土壤実測図 (1/60)	25
第 17 図 A28号土壤出土繩文土器実測図 (1/3)	26
第 18 図 A32・33号土壤実測図 (1/40)	27
第 19 図 A32号土壤出土繩文土器実測図 (1/3)	28
第 20 図 A33号土壤出土繩文土器実測図 (1/3)	29
第 21 図 A35・37・38号土壤実測図 (1/40)	31
第 22 図 A37号土壤出土繩文土器実測図 (その1) (1/3)	32
第 23 図 A37号土壤出土繩文土器実測図 (その2) (1/3)	33
第 24 図 A37号土壤出土繩文土器実測図 (その3) (1/3)	34
第 25 図 A38号土壤出土繩文土器実測図 (1/3)	36
第 26 図 A42・44・45号土壤実測図 (1/40)	38
第 27 図 A42号土壤出土繩文土器実測図 (1/3)	39
第 28 図 A47・B 1号土壤実測図 (1/40)	41
第 29 図 B 1号土壤出土繩文土器実測図 (その1) (1/3)	42
第 30 図 B 1号土壤出土繩文土器実測図 (その2) (1/3)	43

第 31 図	B 2 号土壤実測図 (1/40)	44
第 32 図	B 2 号土壤出土縄文土器実測図 (1/3)	44
第 33 図	A北端谷縄文早期包含層断面実測図 (1/120)	45
第 34 図	A北端谷包含層出土縄文土器実測図 (その 1) (1/3)	46
第 35 図	A北端谷包含層出土縄文土器実測図 (その 2) (1/3)	48
第 36 図	A北端谷包含層出土縄文土器実測図 (その 3) (1/3)	50
第 37 図	A北端谷包含層出土縄文土器実測図 (その 4) (1/3)	52
第 38 図	A北端谷包含層出土縄文土器実測図 (その 5) (1/3)	54
第 39 図	A各ピット出土縄文土器実測図 (その 1) (1/3)	56
第 40 図	A各ピット出土縄文土器実測図 (その 2) (1/3)	58
第 41 図	A各ピット出土縄文土器実測図 (その 3) (1/3)	60
第 42 図	A各ピット出土縄文土器実測図 (その 4) (1/3)	62
第 43 図	B各ピット出土縄文土器実測図 (その 1) (1/3)	64
第 44 図	B各ピット出土縄文土器実測図 (その 2) (1/3)	65
第 45 図	B各ピット出土縄文土器実測図 (その 3) (1/3)	66
第 46 図	B各ピット出土縄文土器実測図 (その 4) (1/3)	68
第 47 図	各遺構出土石器実測図 (その 1) (実大)	69
第 48 図	各遺構出土石器実測図 (その 2) (2/3)	70
第 49 図	各遺構出土石器実測図 (その 3) (2/3, 26のみ1/2)	71
第 50 図	治部ノ上遺跡の弥生～中世遺構 (1/600)	73
第 51 図	A 1 号住居跡実測図 (1/60)	74
第 52 図	A 2 号住居跡実測図 (1/60)	75
第 53 図	A 2 号住居跡出土土器・砥石実測図 (1/3)	76
第 54 図	A 3・4 号住居跡実測図 (1/60)	77
第 55 図	A 4 号住居跡出土土器実測図 (1/3)	78
第 56 図	A 5・6 号住居跡実測図 (1/60)	79
第 57 図	A 5 号住居跡出土土器実測図 (1/3)	80
第 58 図	A 7 号住居跡実測図 (1/60)	81
第 59 図	A 7 号住居跡出土土器・砥石実測図 (1/3)	82
第 60 図	A 8 号住居跡実測図 (1/60)	83
第 61 図	A 8 号住居跡出土土器実測図 (1/3)	84
第 62 図	A 9～11・17・18号住居跡実測図 (その 1) (1/60)	85
第 63 図	A 9～11・17・18号住居跡実測図 (その 2) (1/60)	86

第 64 図	A 9号住居跡出土土器実測図 (1/3)	87
第 65 図	A11号住居跡出土土器実測図 (1/3)	89
第 66 図	A12号住居跡実測図 (1/60)	90
第 67 図	A12号住居跡出土土器実測図 (1/3)	91
第 68 図	A13号住居跡実測図 (1/60)	92
第 69 図	A13号住居跡出土土器実測図 (1/3)	93
第 70 図	A14号住居跡実測図 (1/60)	94
第 71 図	A14号住居跡出土土器実測図 (1/3)	95
第 72 図	A15・16号住居跡実測図 (1/60)	96
第 73 図	A17号住居跡出土土器実測図 (1/3)	97
第 74 図	A18号住居跡出土土器実測図 (1/3)	97
第 75 図	B 1号住居跡実測図 (1/60)	98
第 76 図	B 1号住居跡出土土器実測図 (1/3)	99
第 77 図	B 2・3号住居跡実測図 (1/60)	101
第 78 図	B 2号住居跡出土土器実測図 (その1) (1/3)	102
第 79 図	B 2号住居跡出土土器実測図 (その2) (1/3)	103
第 80 図	B 2号住居跡出土鉄器実測図 (1/2)	104
第 81 図	B 3号住居跡出土土器実測図 (1/3)	105
第 82 図	B 4号住居跡実測図 (1/60)	106
第 83 図	B 4号住居跡出土土器実測図 (1/3)	107
第 84 図	B 6・7号住居跡実測図 (1/60)	109
第 85 図	B 6号住居跡出土土器実測図 (その1) (1/3)	110
第 86 図	B 6号住居跡出土土器実測図 (その2) (1/3)	111
第 87 図	B 7号住居跡出土土器実測図 (その1) (1/3)	112
第 88 図	B 7号住居跡出土土器実測図 (その2) (1/3)	114
第 89 図	B 7号住居跡出土土器実測図 (その3) (1/3)	115
第 90 図	B 7号住居跡出土土器実測図 (その4) (1/3)	116
第 91 図	B 7号住居跡出土鉄器実測図 (1/2)	117
第 92 図	B 8・9号住居跡実測図 (1/60)	118
第 93 図	B 8号住居跡出土土器実測図 (1/3)	119
第 94 図	B 9号住居跡出土土器・砥石実測図 (1/3)	120
第 95 図	B10・11号住居跡実測図 (1/60)	122
第 96 図	B10号住居跡カマド実測図 (1/30)	123

第 97 図	B10号住居跡出土土器実測図 (1/3)	124
第 98 図	B10号住居跡出土鉄器実測図 (1/2)	125
第 99 図	B11号住居跡出土土器実測図 (1/3)	125
第 100 図	B12・13号住居跡実測図 (1/60)	126
第 101 図	B12号住居跡出土土器実測図 (1/3)	127
第 102 図	B13号住居跡出土土器実測図 (1/3)	128
第 103 図	B14・15号住居跡実測図 (1/60)	130
第 104 図	B14号住居跡出土土器実測図 (1/3)	131
第 105 図	B15号住居跡出土土器実測図 (1/3)	132
第 106 図	A 2・4号土壤実測図 (1/40)	134
第 107 図	A 6・7号土壤実測図 (1/40)	135
第 108 図	A 6号土壤出土土器実測図 (1/3)	136
第 109 図	A 8号土壤実測図 (1/40)	137
第 110 図	A 8号土壤出土土器実測図 (1/3)	138
第 111 図	A 9・10号土壤実測図 (1/40)	139
第 112 図	A10号土壤出土土器実測図 (1/3)	139
第 113 図	A13号土壤実測図 (1/30)	140
第 114 図	A13号土壤出土火舍実測図 (1/4)	140
第 115 図	A14・15号土壤実測図 (1/40)	141
第 116 図	A15号土壤出土土器実測図 (1/3)	142
第 117 図	A16・18号土壤実測図 (1/40)	143
第 118 図	A16号土壤出土土器実測図 (1/3)	144
第 119 図	A21~24号土壤実測図 (1/40)	145
第 120 図	A25号土壤実測図 (1/60)	146
第 121 図	A25号土壤出土土器・砥石実測図 (1/3)	148
第 122 図	A26・27・29・30号土壤実測図 (1/40)	149
第 123 図	A31・34・36号土壤実測図 (1/40)	150
第 124 図	A31号土壤出土土器実測図 (1/3)	151
第 125 図	A34号土壤出土土器実測図 (1/3)	152
第 126 図	A39~41号土壤実測図 (1/40)	153
第 127 図	A40号土壤出土土器実測図 (1/3)	154
第 128 図	A43・46・B 3号土壤実測図 (1/40)	155
第 129 図	B 3号土壤出土土器実測図 (1/3)	156

第 130 図	B 4 ~ 7 号土壤実測図 (1/40)	157
第 131 図	B 7 号土壤出土土器実測図 (1/3)	158
第 132 図	B 8・9 号土壤実測図 (1/40)	159
第 133 図	B 8 号土壤出土土器実測図 (1/3)	160
第 134 図	B 9 号土壤出土土器実測図 (1/3)	160
第 135 図	B10・11号土壤実測図 (1/40)	162
第 136 図	B10号土壤出土土器・五輪塔実測図 (1/3・1/6)	163
第 137 図	B11号土壤出土土器実測図 (1/3)	163
第 138 図	B12~15号土壤実測図 (1/40)	164
第 139 図	B12号土壤出土土器・瓦実測図 (瓦のみ1/4, 他は1/3)	166
第 140 図	B13・16・17号土壤出土土器実測図 (1/3)	167
第 141 図	B16~19号土壤実測図 (1/40)	168
第 142 図	B20号土壤実測図 (1/40)	170
第 143 図	B22号土壤(藏骨器)実測図 (1/20)	170
第 144 図	B22号土壤(藏骨器)出土土器実測図 (1/4)	171
第 145 図	A 1 号石蓋土壤墓実測図 (1/20)	172
第 146 図	A 1 号方形周溝墓実測図 (1/200)	174
第 147 図	A 1 号方形周溝墓出土砥石実測図 (1/2)	174
第 148 図	B 1 号方形周溝墓実測図 (1/200・1/40)	175
第 149 図	B 1 号方形周溝墓出土土器実測図 (1/3)	176
第 150 図	A 1 号掘立柱建物実測図 (1/60)	179
第 151 図	B 1 号掘立柱建物実測図 (1/60)	180
第 152 図	A 1・3 号落込み実測図 (1/80)	182
第 153 図	A 1 号落込み出土土器・砥石実測図 (1/3)	183
第 154 図	A 2 号落込み実測図 (1/80)	184
第 155 図	A 2 号落込み出土土器実測図 (1/3)	185
第 156 図	A 3 号落込み出土土器実測図 (1/3)	186
第 157 図	A 1・3・4 号溝土層断面実測図 (1/60)	188
第 158 図	A 1 号溝出土土器実測図 (1/3)	189
第 159 図	A 1 号溝出土土器・石器等実測図 (瓦のみ1/4, 他は1/3)	190
第 160 図	A 2・3 号溝出土土器等実測図 (1/3) (1 のみ A 2 号溝出土)	192
第 161 図	A 4 号溝出土土器実測図 (1/3)	195
第 162 図	A 5 号溝出土土器実測図 (1/3)	196

第 163 図	B 4・5号溝出土土器実測図 (1/3) (1・2: 4号溝, 3: 5号溝)	198
第 164 図	A区各ピット等出土土器実測図 (その1) (1/3, 15・16のみ1/6)	200
第 165 図	A区各ピット等出土土器実測図 (その2) (1/3)	201
第 166 図	A区各ピット等出土土器実測図 (その3) (1/4)	202
第 167 図	B区各ピット等出土土器実測図 (その1) (1/3)	204
第 168 図	B区各ピット等出土土器実測図 (その2) (1/3)	206
第 169 図	治部ノ上A区出土銅錢拓影 (2/3)	207
第 170 図	治部ノ上遺跡出土繩文早・前期土器の分類 (その1) (1/3)	214
第 171 図	治部ノ上遺跡出土繩文早・前期土器の分類 (その2) (1/3)	215
第 172 図	治部ノ上遺跡出土繩文早・前期土器の分類 (その3) (1/3)	216
第 173 図	座禅寺遺跡遺構配置図 (1/400)	220
第 174 図	調査区東壁土層図 (1/100)	221
第 175 図	繩文土器実測図① (1/3)	222
第 176 図	繩文土器実測図② (1/3)	223
第 177 図	繩文土器実測図③ (1/3)	224
第 178 図	繩文土器実測図④ (1/3)	225
第 179 図	繩文土器実測図⑤ (1/3)	226
第 180 図	繩文時代石製品実測図 (1/2・2/3)	227
第 181 図	2号竪穴住居跡実測図 (1/60)	228
第 182 図	3号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	229
第 183 図	3号竪穴住居跡出土鉄製品実測図 (1/2)	230
第 184 図	4号竪穴住居跡実測図 (1/60)	230
第 185 図	4号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	231
第 186 図	5号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4)	231
第 187 図	5・6A・6B号竪穴住居跡実測図 (1/60)	232
第 188 図	6A号竪穴住居跡出土土器実測図① (1/3)	233
第 189 図	6A号竪穴住居跡出土土器実測図② (1/3)	234
第 190 図	7号竪穴住居跡実測図 (1/60)	235
第 191 図	7号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	236
第 192 図	7号竪穴住居跡出土品実測図 (原寸・1/2・1/3)	237
第 193 図	8号竪穴住居跡実測図 (1/60)	238
第 194 図	8号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	238
第 195 図	1号掘立柱建物実測図 (1/100)	239

第 196 図	1・3号土壙実測図 (1/60)	240
第 197 図	4・7・8・9・12・13号土壙実測図 (1/60)	241
第 198 図	7・8・12号土壙出土品実測図 (1/2・1/3)	242
第 199 図	1・3・8・9号土壙出土土器実測図 (1/3)	243
第 200 図	12号土壙出土土器実測図 (1/4)	243
第 201 図	1号方形周溝墓実測図 (1/100)	246
第 202 図	1号方形周溝墓出土土器実測図① (1/3)	248
第 203 図	1号方形周溝墓出土土器実測図② (1/3)	249
第 204 図	1号方形周溝墓出土土器実測図③ (1/3・1/4)	250
第 205 図	1～3号土壙墓実測図 (1/30)	252
第 206 図	1号土壙墓出土土器実測図 (1/3)	253
第 207 図	4号土壙墓実測図 (1/20)	253
第 208 図	4号土壙墓出土土器実測図 (1/3)	253

付 図 治部ノ上遺跡遺構全体図 (1/200)

図 版 目 次

卷頭図版 (1) 治部ノ上・座禪寺遺跡全景（東方上空から西を望む、右上方に狐塚古墳）
 (2) 座禪寺遺跡全景（南方上空から）

本文対照頁

図版 1	治部ノ上遺跡全景（北から）	9
図版 2	(1) 治部ノ上遺跡A区上空から東南方向のB区・座禪寺遺跡を望む	9
	(2) B区全景（上空から）	9
図版 3	(1) A1号土壙（南東から）	11
	(2) A1号土壙土器出土状態（北東から）	11
図版 4	(1) A11号土壙（東から）	15
	(2) A11号土壙土層断面（東から）	15
図版 5	(1) A12号土壙（東から）	20
	(2) A17号土壙（南から）	23

図版 6	(1) A44号土壙（北西から）	39
	(2) B1号土壙（西から）	40
図版 7	(1) B2号土壙（北西から）	43
	(2) A区北端谷縄文早期包含層断面（南西から）	45
図版 8	(1) A1号住居跡（西から）	72
	(2) A2号住居跡（南から）	75
図版 9	(1) A2号住居跡土器出土状態	75
	(2) A4号住居跡（南西から）	78
図版 10	(1) A5・6号住居跡, A16号土壙（南から）	79
	(2) A7号住居跡, A14号土壙（南から）	82
図版 11	(1) A8・9号住居跡（南から）	84
	(2) A10・11・17号住居跡（南西から）	88
図版 12	(1) A12・15号住居跡, A17号土壙（南から）	91
	(2) A13号住居跡（東から）	91
図版 13	(1) B区北半遺構全景（南から）	98
	(2) B1号住居跡（西から）	98
図版 14	(1) B1号住居跡完掘後（南から）	98
	(2) B2～4号住居跡, B1号掘立柱建物, B6号溝（上空から）	100
図版 15	(1) B2～4号住居跡, B8・20号土壙（西から）	100
	(2) B2～4号住居跡, B20号土壙（完掘後）（西から）	100
図版 16	(1) B2号住居跡（西から）	100
	(2) B4号住居跡（西から）	108
図版 17	(1) B6～9号住居跡（上空から）	108
	(2) B6～11・14・15号住居跡, B17・18・22号土壙完掘後（北から）	108
図版 18	(1) B6～9号住居跡, B18・22号土壙（北から）	108
	(2) B12・13号住居跡, B3号土壙（北から）	127
図版 19	(1) B8・14号住居跡, B18号土壙（北から）	129
	(2) B10～12号住居跡, B18号土壙（完掘後）（北から）	121
図版 20	(1) A8号土壙（東から）	136
	(2) A9号土壙（東から）	139
図版 21	(1) A13号土壙（南から）	141
	(2) A15号土壙（南から）	142
図版 22	(1) A39号土壙（北東から）	154

(2) B 7号土壙 (西から)	160
図版 23 (1) B10号土壙 (西から)	161
(2) B18号土壙 (北東から)	169
図版 24 (1) B22号土壙 (蔵骨器) (西から)	171
(2) B 8号住居跡床面検出土壙 (東から)	117
図版 25 (1) A 1号石蓋土壙墓 (東から)	173
(2) A 1号石蓋土壙墓 (蓋石除去後) (東から)	173
図版 26 (1) B 1号方形周溝墓 (上空から)	176
(2) B 1号方形周溝墓西南端土層 (北東から)	176
図版 27 (1) B 1号方形周溝墓北西辺中央部土層 (南西から)	176
(2) B 1号方形周溝墓北東辺中央部土層 (南東から)	176
図版 28 (1) A 1号溝, A12・24・28号土壙 (西から)	187
(2) A 1号溝 (北から)	187
図版 29 (1) A 1号溝 (中途から南を望む)	187
(2) 治部ノ上遺跡から県指定史跡狐塚古墳 (中央の森) を望む (東南から)	9
図版 30 (1) 手向山式土器 (その1)	45
(2) 手向山式土器 (その2)	45
図版 31 (1) 各遺構出土打製石鏃・ナイフ形石器・石匙	68
(2) 各遺構出土打製石器類 (その1)	68
図版 32 (1) 繩文晚期打製石斧	13
(2) 各遺構出土打製石器類 (その2)	68
図版 33 各遺構出土繩文晚期土器, サヌカイト原石, A 2・9・11号住居跡出土土器	11
図版 34 A11・13, B 1・2号住居跡出土土器	88
図版 35 B 2・3・4号住居跡出土土器	100
図版 36 B 4~7号住居跡出土土器	108
図版 37 B 7号住居跡出土土器	111
図版 38 B 7・9号住居跡出土土器	111
図版 39 B 8・10号住居跡出土土器	117
図版 40 B10・11・12号住居跡出土土器	121
図版 41 B14・15号住居跡, A 8号土壙, B12・16・22号土壙出土土器	129
図版 42 B 1号方形周溝墓, A 1・3・4・5号溝, A各ピット出土土器	176
図版 43 A・B各ピット出土土器	199
図版 44 各ピット等出土土器・土錘・砥石	199

図版 45	各遺構出土砥石・鉄滓、治部ノ上遺跡全景（空中写真、東から）	9
図版 46	座禅寺遺跡全景	219
図版 47	(1) 座禅寺遺跡南半部	219
	(2) 座禅寺遺跡北半部	219
図版 48	(1) 4号竪穴住居跡	230
	(2) 5・6A・6B号竪穴式住居跡	231・232
	(3) 5・6A・6B号竪穴住居跡貼床下層	231・232
図版 49	(1) 7号竪穴住居跡	234
	(2) 7号竪穴住居跡貼床下層	234
図版 50	(1) 8号竪穴住居跡	238
	(2) 8号竪穴住居跡貼床下層	238
図版 51	(1) 4～5号土壙	242
	(2) 3・5・8・9号土壙	242・243
図版 52	(1) 3号土壙	242
	(2) 13号土壙	244
図版 53	(1) 方形周溝墓全景	245・247
	(2) 北周溝土層断面	245・247
図版 54	(1) 方形周溝墓土器出土状態	245・247
	(2) 方形周溝墓土器出土状態	245・247
図版 55	(1) 方形周溝墓土器・環状石斧出土状態	245・247
	(2) 方形周溝墓土器出土状態	245・247
図版 56	(1) 1号土壙墓	251
	(2) 2号土壙墓	253
図版 57	(1) 3号土壙墓	253
	(2) 4号土壙墓	253
図版 58	(1) 繩文土器①	223
	(2) 繩文土器②	224
図版 59	(1) 繩文土器③	224
	(2) 繩文土器④	225
図版 60	(1) 環状石斧	227
	(2) 鉄製品・土製品	230・237・242
図版 61	7号住居跡及び8・12号土壙出土石製品	237・244
図版 62	座禅寺遺跡出土土器	231・232・234

図版 63 座禅寺遺跡出土土器	238・244・245
図版 64 座禅寺遺跡出土土器	232・245・240

表 目 次

	頁
第 1 表 手向山式土器各部位の文様組合せ（その1）	209
第 2 表 手向山式土器各部位の文様組合せ（その2）	210
第 3 表 手向山式土器各部位の文様組合せ（その3）	211
第 4 表 手向山式土器各部位の文様組合せ（その4）	211
第 5 表 手向山式土器各部位の文様組合せ（その5）	212
第 6 表 その他の型式土器各部位の文様組合せ	212
第 7 表 手向山式土器各部位の文様組合せ（その6）	213

I 調査の経過

九州横断自動車道の第22地点・第23地点は、昭和58年度の試掘調査の結果、第22地点でA・B・C地区、第23地点で台地上面地区を本調査の対象地点とした。遺跡名を西から順に、狐塚南遺跡（第22地点C地区）、治部ノ上遺跡（第22地点A・B地区）、座禅寺遺跡（第23地点）と命名して発掘調査を実施した。

昭和59年の4月、年度当初の道路公団との工程協議の中で、第22地点AとBの間にある大きな用水路関係の工事と、第23地点南側のC.BOXの工事について優先したいとの意向が出され、その工程に沿うような形で、第22地点A・Bと第23地点の本調査に入った。

調査は、昭和59年5月9日～10月9日の長きに及んだ。当初は、弥生後期住居群のみと、安易に予測をたてていたが、調査が進展するにつれ、稀に見る縄文時代早期手向山式期の多量の出土品や中世遺構等が発見されて、思わぬ程の多大な成果を得ることができた。発掘総面積は治部ノ上遺跡で4,800m²、座禅寺遺跡で2,600m²に及んだ。

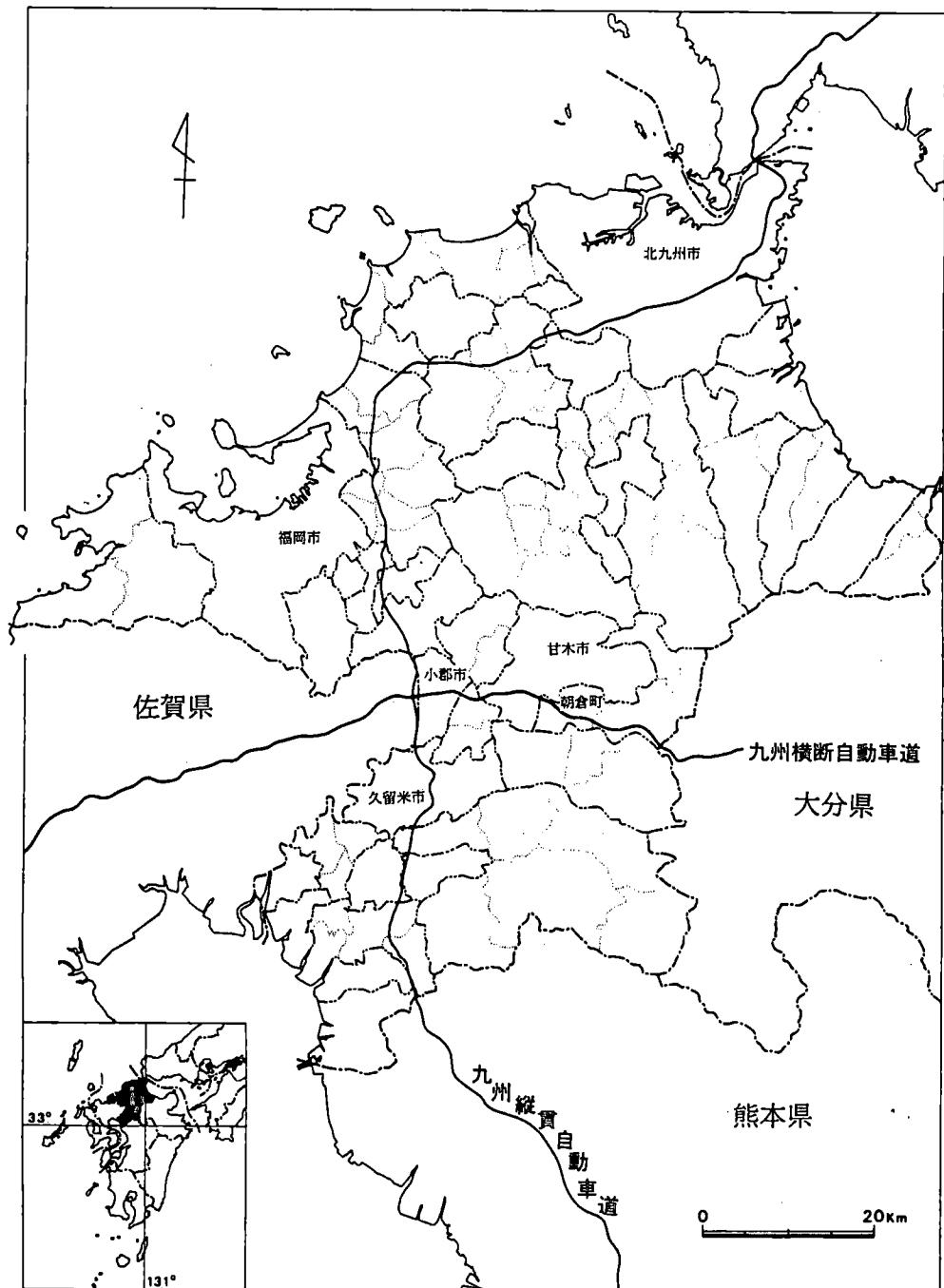
治部ノ上遺跡・座禅寺遺跡における昭和59年度の調査関係者は下記のとおりである。

日本道路公団福岡建設局

局長	今村 浩三
総務部長	菱刈 庄二
管理課長	森 宏之
管理課長代理	野口 利夫

日本道路公団福岡建設局甘木工事事務所

所長	乗松 紀三
副所長	西田 功
副所長（技術）	中村 義治
庶務課長	松下 幸男
用地課長	岩下 剛
工務課長	山口 宗雄
小郡工事区工事長	友田 義則
甘木工事区工事長	猪狩 宗雄
朝倉工事区工事長	平沢 正
杷木工事区工事長	前田 雄一



第1図 路線図

福岡県教育委員会

教育長	友野 隆
教育次長	安部 徹
管理部長	伊藤 博之
文化課長	前田 栄一
課長補佐	中村 一世
庶務係長	松尾 満
事務主査	長谷川伸弘
調査第二係長	栗原 和彦
主任技師	木下 修
"	児玉 真一（座禅寺遺跡担当）
"	新原 正典
"	中間 研志（治部ノ上遺跡担当）
"	小池 史哲
技 師	伊崎 俊秋
専 門 員	木村幾多郎
臨時職員	日高 正幸
"	森山 栄一
"	緒方 泉
"	宮田 浩之
調査補助員	高田 一弘
"	武田 光正
"	佐土原逸男
"	平嶋 文博
"	向田 雅彥
"	田中 康信

なお、本報告書作成に係る、平成5年度の関係者は以下のとおりである。

福岡県教育委員会

総 括

教育長 光安 常喜

教育次長	樋口 修資
指導第二部長	丸林 茂夫
教育庁副理事	河鍋 好一
文化課長	森山 良一
同文化財保護室長	柳田 康雄
同課長補佐	清水 圭輔
同保護室長補佐	井上 裕弘
同調査班総括	橋口 達也
同調査班参事補佐	高橋 章
庶務	
文化課管理係長	毛屋 信
同 主任主事	久保 正志
整理	
文化課文化財保護係参事補佐	児玉 真一 (執筆担当)
福岡教育事務所技術主査	中間 研志 (執筆担当)
文化課調査班主任技師	水ノ江和同 (執筆担当)
整理指導員	岩瀬 正信 (整理担当)
整理指導員	平田 春美 (遺物実測担当)
整理指導員	豊福 弥生 (製図担当)
整理指導員	北岡 伸一 (写真担当)

II 位置と環境

治部ノ上遺跡は、福岡県朝倉郡朝倉町大字入地字治部ノ上2645, 2646-1, 2648-1~3, 2684-1~3, 2685, 2686, 2630の各番地に所在する。座禪寺遺跡は、同町大字入地字座禪寺2585-1番地に所在する。両者は、浸蝕により開析された小さな谷を挟んで対峙する位置にあり、本来同一遺跡と見て良い。谷筋には現在町道西町角等寺線が走り、治部ノ上遺跡はこの町道が東限となっている。

この両遺跡は、筑後川の小支流桂川の右岸500m北側の低位段丘上に位置し、段丘の最南端の縁辺上を占めている。南方2kmで筑後川本流であり、遺跡直下の水田面は、筑後川の旧氾濫原となっている。昭和28年の大水害の際には、濁流が覆いつくした話が、住民の語り草となって伝えられている。

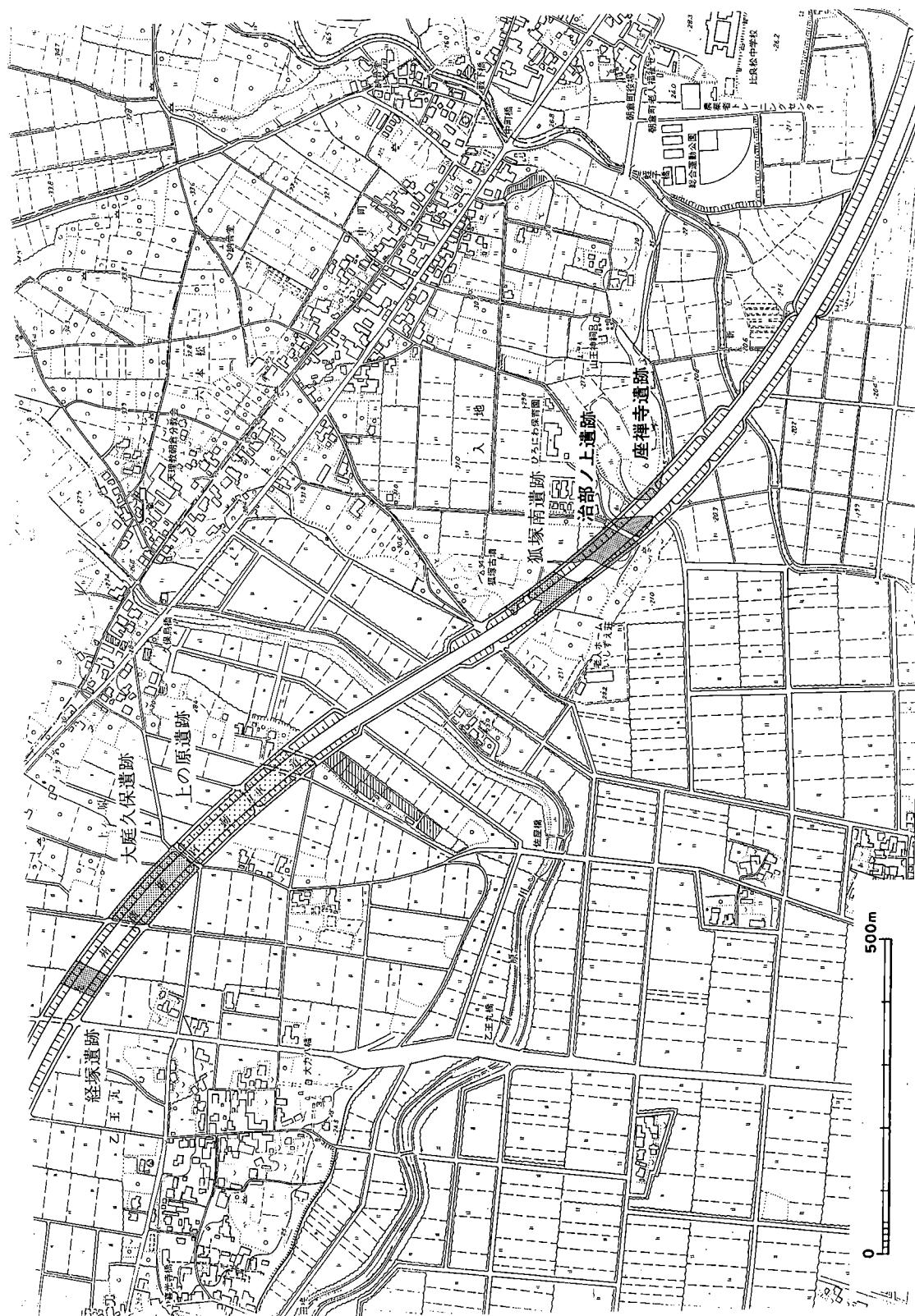
こここの地形を大きくみると、朝倉低山地から発する荷原川と桂川に挟まれた扇状台地南辺にあたる。九州横断道は、朝倉町内においては、大字石成から入地にかけての朝倉扇状台地群を、大字菱野から山田にかけては朝倉低山地（高位段丘）上を通過する。この路線上の甘木市三奈木～十文字～中島田にかけての台地は、遺跡の集中する部分である。

歴史的環境

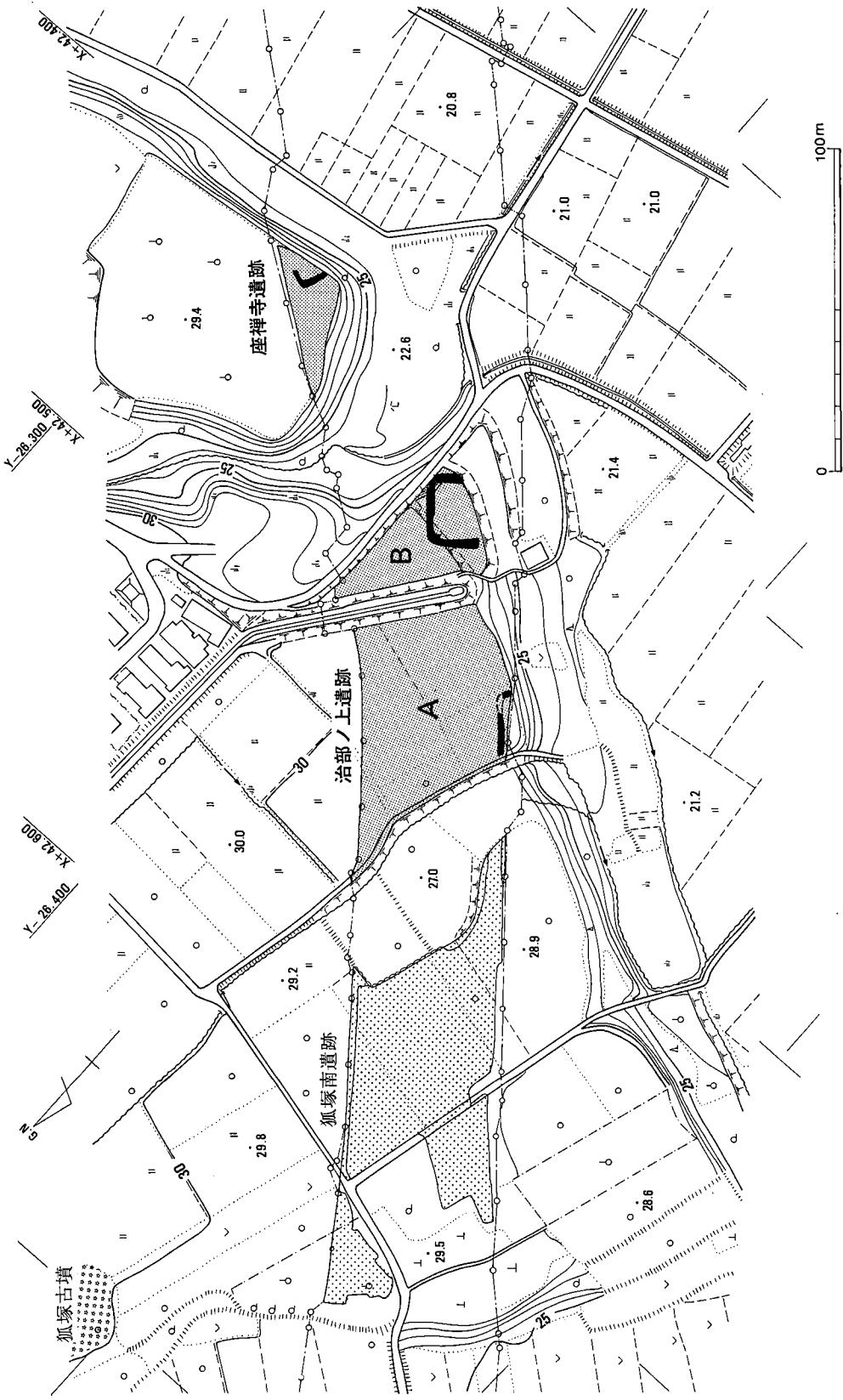
九州横断道は、鳥栖インターチェンジから鳥栖段丘群・城山丘陵を横切り、朝倉扇状台地群・朝倉低山地を抜けて大分県日田市に至る。この路線建設に伴う調査は、低位～高位段丘上を横切る位置関係上、絶好の立地を有する大遺跡に各所であたっている。旧石器時代から歴史時代にわたる、あらゆる時代・種類の遺構・遺物が発見され、夥しい考古資料が蓄積された。弥生時代の環境については、既各報告書中に詳しいので、ここでは、縄文時代の周辺遺跡を主に概観してみよう。

朝倉町内では、当遺跡から西北西へ1.7kmの位置にある石成拝塚遺跡で押型文土器が採集され、県立朝倉高校に保管されているのをはじめ、朝倉山地麓周辺を中心として多くの縄文遺物が採集されている。北東へ1kmの星神塚遺跡では石斧2本が採集され、東方1.4kmの饗田谷遺跡では横型石匙が発見されている。さらに、東方1.5kmの八並遺跡では山の寺式土器と石錐が出土し、東北東2kmの高畠遺跡では石鏃と縄文土器が採集されている。また、北東2.2kmの長安寺遺跡でも石鏃が発見されている。

第2図 治部ノ上・座禅寺遺跡位置図 (1/10,000)



第3図 治部ノノ上・座禅寺遺跡周辺地形図 (1/2,000)



横断道調査分でみてみると、甘木市高原遺跡（第16地点）では、縄文晩期後半の貴重な資料が出土し注目される。東方の朝倉町内の、長島遺跡、上の宿遺跡、稗畠遺跡、金場遺跡、原の東遺跡、鎌塚遺跡などで縄文時代の遺構・遺物が多く出土している。また、押型文土器や、縄文晩期の土器は、朝倉町～杷木町のほぼすべての横断道調査遺跡で散見する状況であり、これらの報告が進めば、全体の立地と変遷がかなり明確になってくると思われる。

なお、治部ノ上遺跡の北々東200mの至近距離には、舟等の線刻による装飾古墳で著名な、県指定史跡狐塚古墳が位置し、古墳時代にもこの地域は、有力豪族の支配下にあったことがわかる。

III 治部ノ上遺跡

A はじめに

じぶのうえ
治部ノ上遺跡は、多時期にわたる複合遺跡である。出土遺物だけからみると、旧石器～縄文早・前期～縄文晚期～弥生中期初頭～弥生後期～古墳初頭～古墳終末期～奈良～平安初頭～平安末・鎌倉～室町後期の極めて長い間、断続的に人々が足跡を残していることが判る。ただし、このうち、旧石器、弥生中期初頭については数点の出土遺物のみで、これらの期の遺構は認められない。以下に、各時代毎の検出遺構をまとめておきたい。

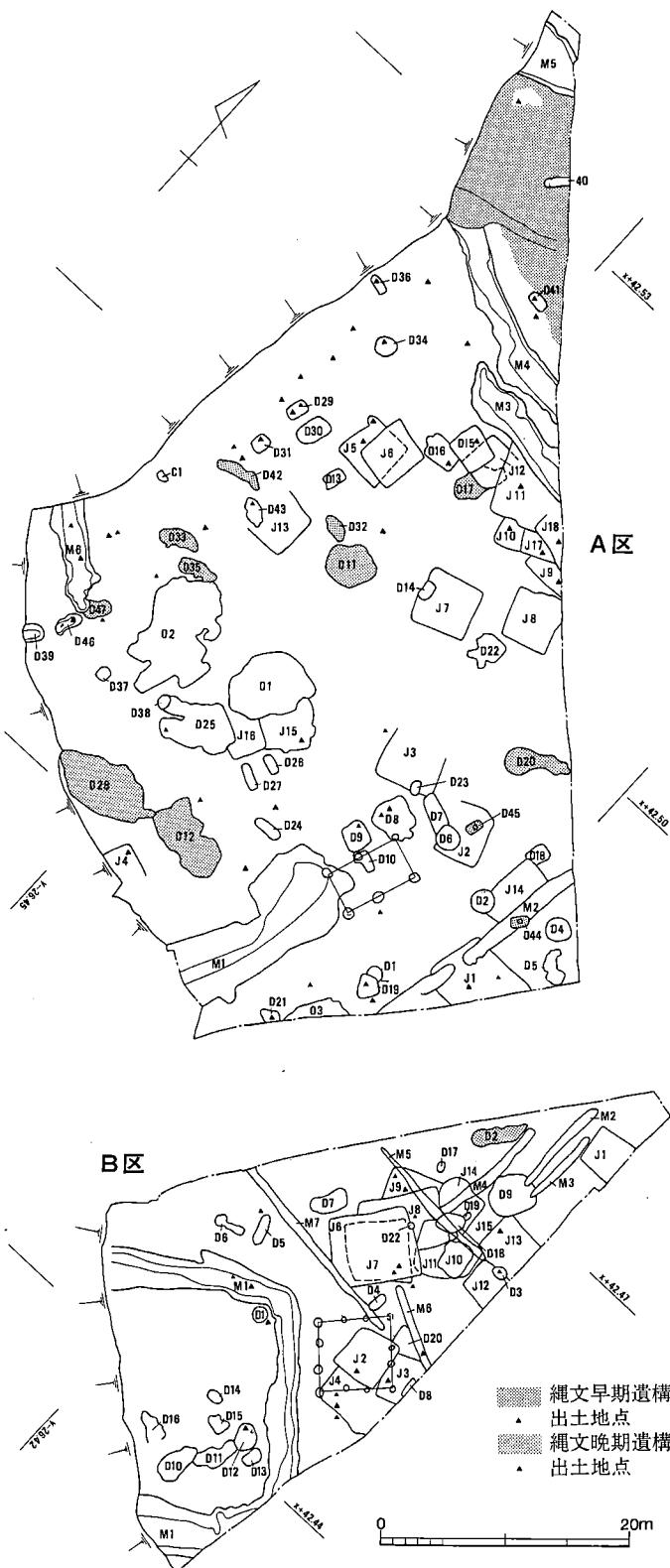
縄文時代早期	土壙	14基
北端谷包含層		
縄文時代晚期	土壙	5 基
弥生時代後期	竪穴住居跡	22軒
	土壙	4 基
古墳時代初頭	竪穴住居跡	4 軒
	土壙	4 基
	掘立柱建物	1 棟
	方形周溝墓	2 基
古墳時代終末	溝	1 条
奈良～平安初	竪穴住居跡	4 軒
	土壙	5 基
	溝	1 条
	掘立柱建物	1 棟以上
平安時代末期	溝	2 条（埋没は室町後期）
室町時代後期	土壙	8 基
	溝	1 条
	落込み	3 基
近代～現代	土壙	2 基
	溝	5 条
時期不明	竪穴住居跡	2 軒（弥生後期～古墳時代か）
	土壙	24基（ほとんどが弥生後期～室町後期）

B 縄文時代の遺構と遺物

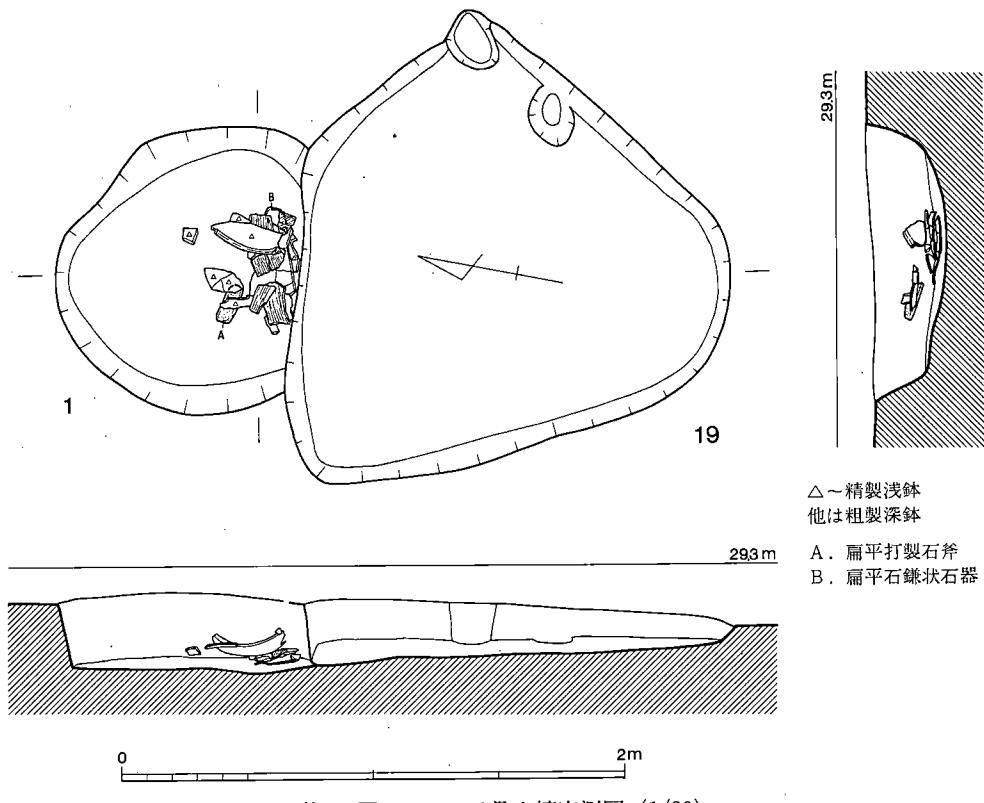
治部ノ上遺跡では、縄文時代早期の土壙が13基検出され、うち4基は風倒木痕で、2基は落し穴状遺構である。また、A区北端谷ではこの期の包含層が形成されている。さらに、全域の各期遺構中に混入した土器類も多い。中には、明らかに旧石器時代と思われるナイフ形石器等もあり、本遺跡の古さを物語っている。このことは、各時代にわたって、いかにこの低位段丘先端部が、好まれた立地条件のもとにあたっかを示すものである。

また、縄文晩期の遺構も、5基の土壙が発見され、思いもかけない良好な土器・石器を得ることができた。この時期の土器片も、早期のものよりは明らかに少ないが、各時代の遺構に混入しているのが知られる。

以下に、各遺構毎に詳細を報告しておきたい。遺構番号順に並べたので、早期



第4図 治部ノ上遺跡の縄文時代遺構 (1/600)



第5図 A1 · 19号土壤実測図 (1/30)

と晩期とが入れ違いになっている部分があるが、ご容赦願いたい。

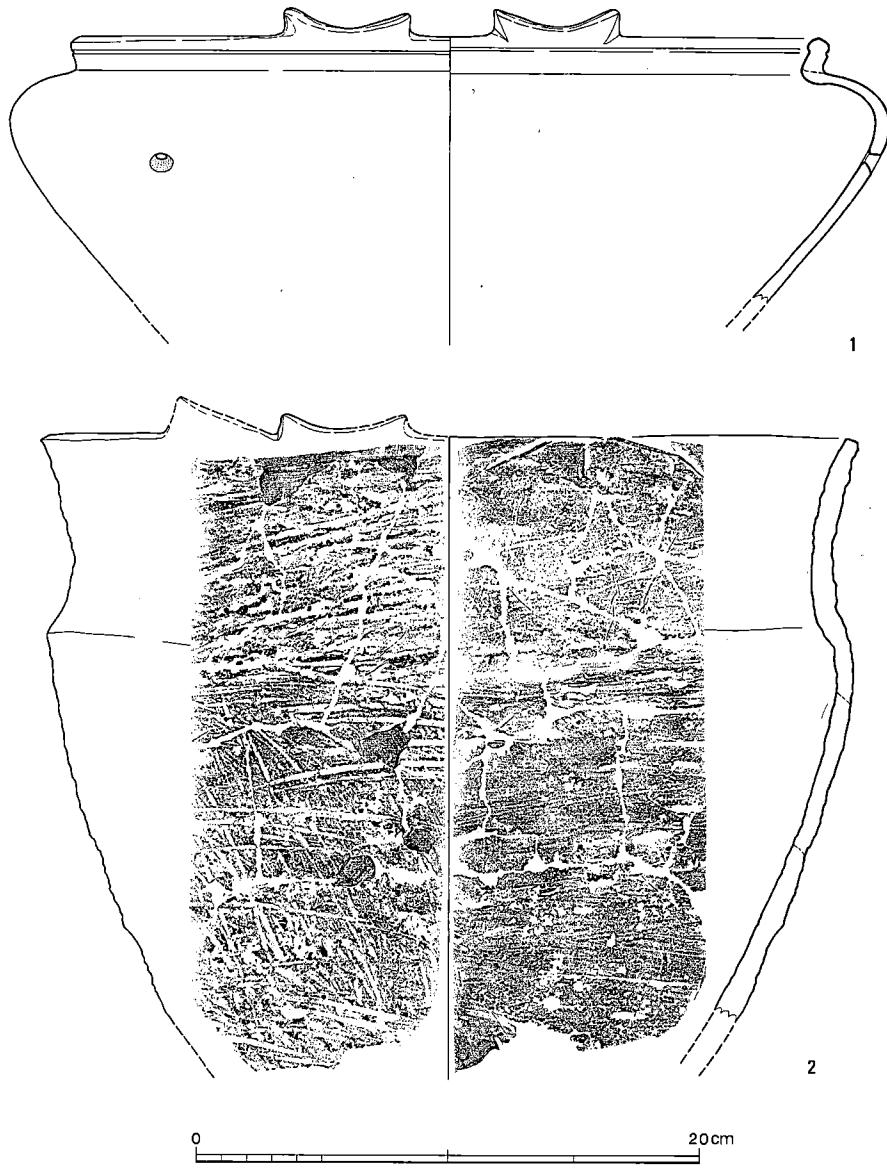
A1号土壤 (第5図、図版3)

A区の南西端近くに位置し、南側を中世の糸切底の土師器片を含むA19号土壤に切られる。略円形のプランとなる縄文晩期小規模土壤で、径 $115 \times 95 (+\alpha)$ cmとなる。深さは30cmで、底面はほぼ平坦である。

底面から僅か3cm程度浮いた状態で、精製浅鉢と粗製深鉢の大破片が重なって出土した。また、その間には粗製扁平打製石斧2点も入っていた。

出土遺物 (第6 · 7図)

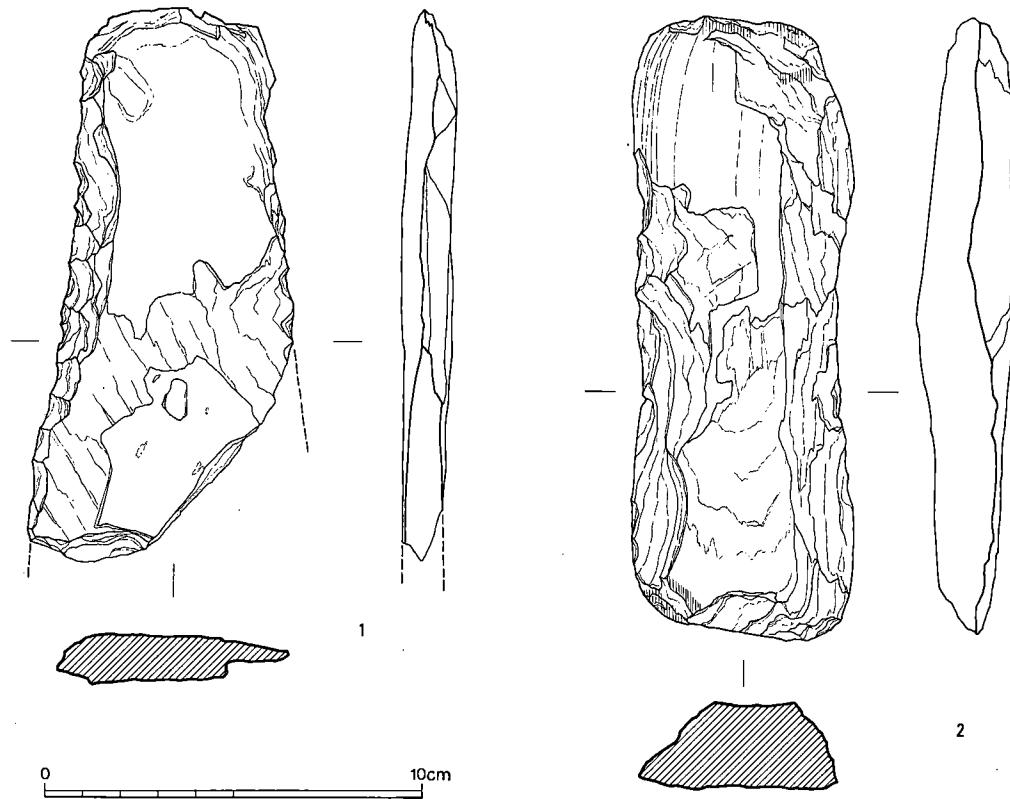
浅鉢 (1) 口径30.2cm、体部最大径35cmの、体部上半で強く張る器形となる。短く立ち上がる口縁の外面には細めのヘラ沈線が巡らされ、内面も凹線状にへこませている。口縁上にはリボン状装飾が付けられるが、1ヶ所しか現存していないが、おそらく対位置にもあったと考えられる。口縁内面から外面の最大径より2.5cm下がった位置まで横ヘラ磨き、それ以下の外面は、



第6図 A1号土壤出土縄文土器実測図 (1/3)

やや右下がりの斜めヘラ磨きを施す。体部内面の最上端には横位条痕が残っているが、それ以下の内面は丁寧なナデで平滑になっている。体部下半には焼成後の外面からの穿孔が1個みられる。補修孔であろう。胎土は精製されており、焼成やや不良で、外面は淡茶～暗褐色、内面は暗灰褐色をなす。口縁で半周弱残存している。

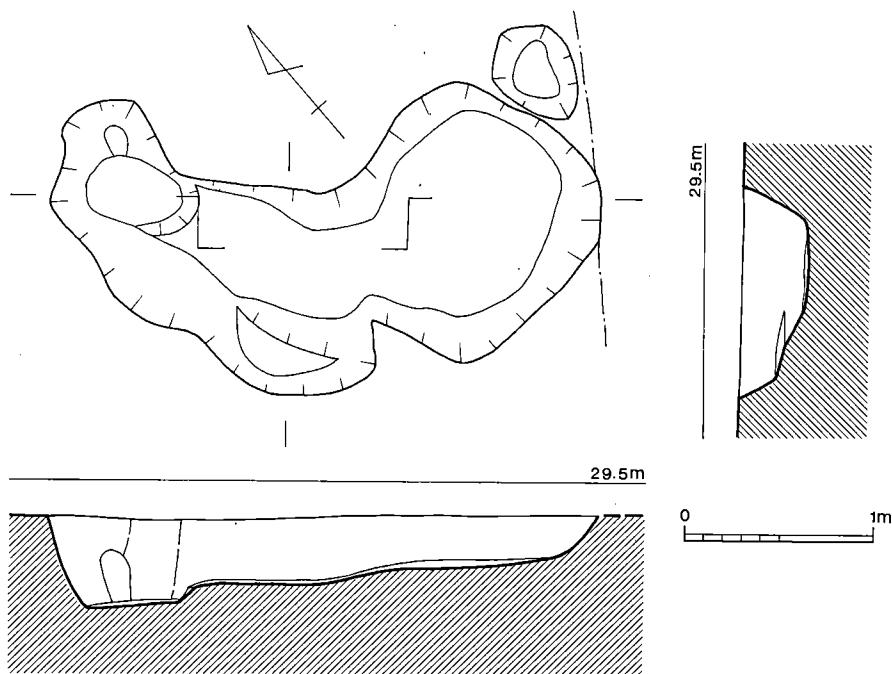
深鉢（2）口径32.4cm、胴部最大径32cmの粗製深鉢である。胴部上半で屈曲し、ゆるやかに開



第7図 A1号土壤出土打製石斧実測図 (1/2)

く口縁となる。口縁上端にリボン状の突起部を付ける。これは全周に1ヶ所のみで、形態の詳細は不明であり、図示した様になるかどうか、若干不安は残る。口縁外面から屈曲部下位までは、粗雑なアナグラ条痕、以下の外面は右下がり斜位の粗雑なアナグラ条痕、口縁内面は横位条痕の上を板ナデ風、以下の内面は横位条痕の上を横位擦過調整で、特に内面下半では板状工具による擦過痕が顕著である。胎土には粗大な石英粒を多く含み、焼成やや良好で暗褐色～黒褐色をなす。上半はほぼ全周残存している。また、外面の口縁部附近と屈曲部稜線から下位は煤が付着しているのに対し、屈曲部稜線から上に4cmの間だけ煤が付着しておらず淡茶～淡褐色をなしており、煮沸容器として用いられたことが歴然としている。

打製石斧（第7図） 1は、灰緑色の片岩系の石材を用いる扁平粗製石斧である。当初、完存品で石鎌状のものと考えたが、撥形の石斧が欠損したものと判断した。現存長14.3cm、基部側の幅5.2cm、厚さ1.4cmで、使用による磨耗痕は無い。表面には広く原石の自然磨面を残したまま、両側縁の調整のみである。裏面も主要剥離面がほとんどを占める。2は、白い筋が入る暗灰緑色の片岩系の石材を用いた粗製石斧である。長さ16.1cm、最大幅5.9cmの短冊形で、厚さは



第8図 A 5号土壙実測図 (1/40)

中心部で2.7cmとなる。上下両端いずれにも部分的に摩耗痕が認められるが、上下いずれも明確な刃部をなしていない。表面の上半には大きく原材の自然磨面を残したままで、裏面はほとんど主要剝離面そのままでいる。側縁の調整は粗く、形状を整えただけという感じである。重さは350gとなる。

以上の出土遺物は、良好なセット関係を示しており、黒川式土器の中でも若干新しい傾向を感じさせる。また、この時期まで扁平粗製石斧が確実に伴っていることが判った。よって、このA 1号土壙は、縄文晩期中葉の黒川式期のものと判断される。

A 5号土壙（第8図）

A区の最東端隅に位置する不整形土壙である。全長2.9m、最大幅は東端で1.5mである。平面形からは、人工的な目的を持った掘削とは考え難く、出入りのある所謂不整土壙となっている。

底面は東端が浅く、北西へ傾斜して、北西端がピット状に落ち込む。深さは、東端で19cm、中央付近で34cm、北西端で47cmとなっている。

出土遺物（第9図）

打製石斧 灰～灰黒色をした黒色片岩製で、長さ11.7cm、幅は上端で4.1cm、中央で3.1cm、下端で4.4cm、厚さは1cmと全体に薄手である。下端の表面のみに使用摩耗痕がわずかに認められ

る。両側縁辺のみを調整して、この端正な形状をつくることのみを意識した感じがする。薄手扁平であることやこの形態からみて、粗製石斧というよりも、十字形石器の亜種ではないかとも考えられる。

この出土遺物と、本遺跡の他の遺物・遺構の状況からみて、このA5号土壙は、縄文時代晩期の遺構と考えられよう。

A11号土壙（第10図、図版4）

A区のほぼ中央に位置する風倒木痕である。断面図の土層横転に明らかなように、地山のうちでも最下層である砂礫層までが整然と順序よく北から南へ横転している。うち1～3層が縄文早期土器包含層であり、横転状態でのこの包含層の厚さが1m強あることから、現状のような後世の削平がなければ、この台地中央部でも、本来、最低50cmほどの包含層があった筈と推定できる。すると、かなりの数の竪穴住居跡をはじめとする各種遺構群、即ち集落が残存していたに違いない。それを思うと、とても残念である。

この穴は直径4.06×3.47mの不整円形に近く、明らかに1本の大木の倒れた痕跡である。深さは、北側が一段深くなっている73cm、南側の浅い部分で25～50cmとなる。

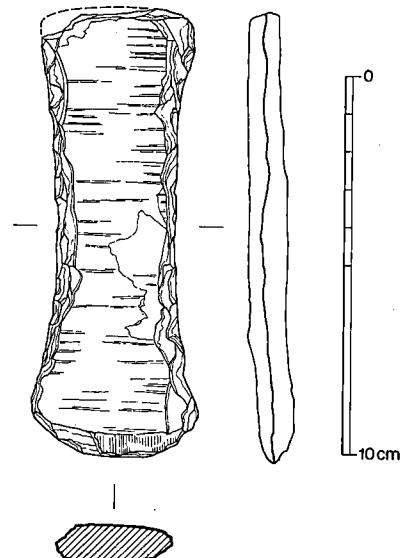
土層観察から、この大木は南からの強い風で倒れたようで、九州西海岸を北上した台風が、当地域の真西方向にあった時の事件のようである。これは、A区南端の大型風倒木痕であるA28号土壙でも全く同様である。

出土遺物（第11・12・47図）

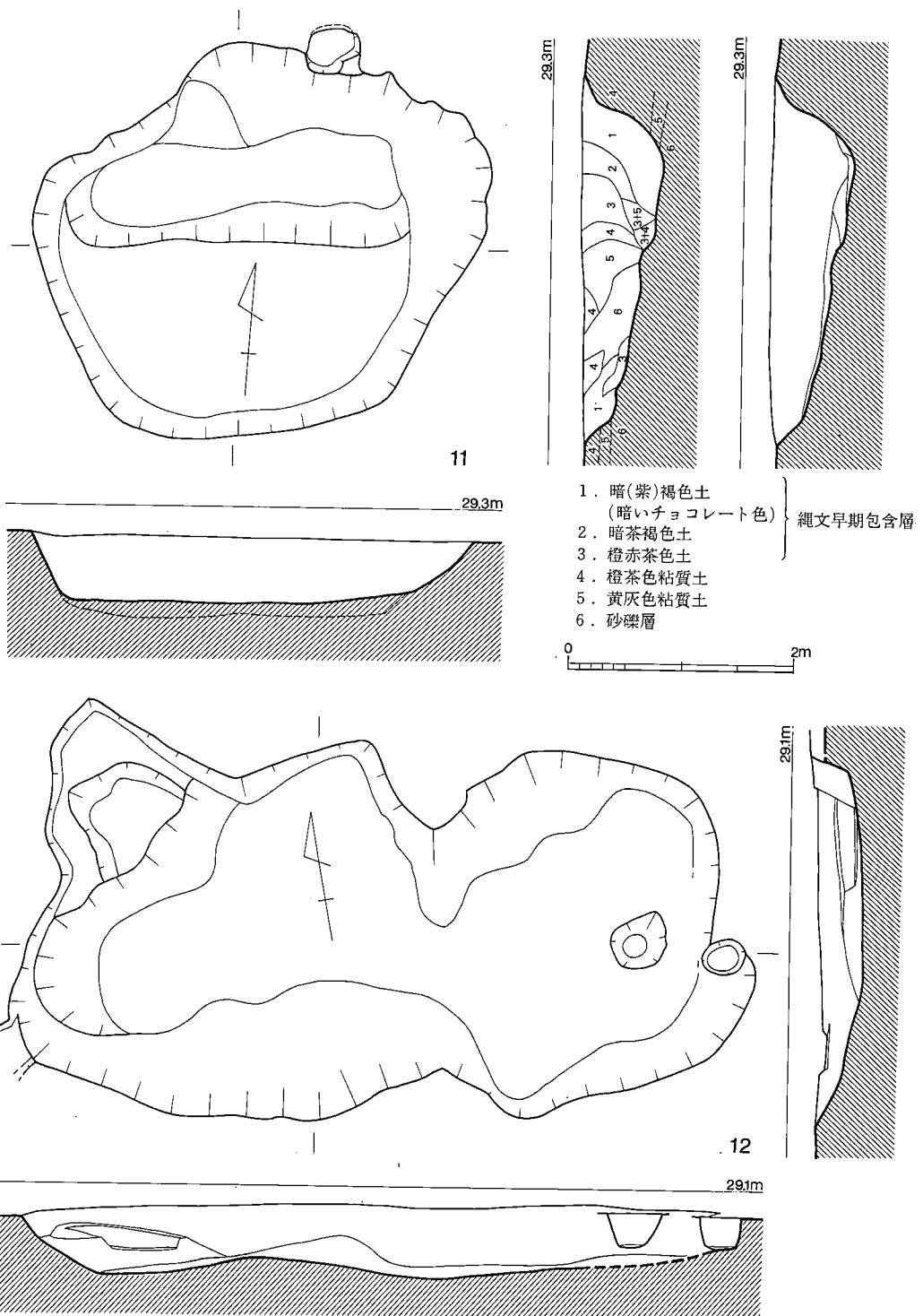
土器（第11・12図） 1～5は、極めて貴重な、壺形土器になると考えられる破片である。

1は、壺の肩部と思われる、やや厚手の破片である。外面に、磨滅気味ではあるが赤色顔料が塗布されている。やや暗い赤色であるが、意図して塗られていることは明らかである。ただ、こういう縄文の古い時期に、所謂丹塗り土器があるのかという点については、不安が無いといえば嘘になろう。内面は強い指オサエナデ痕が残る。胎土には細砂粒を少量、金雲母・角閃石を若干含む。焼成は不良で、内面は灰色をなす。

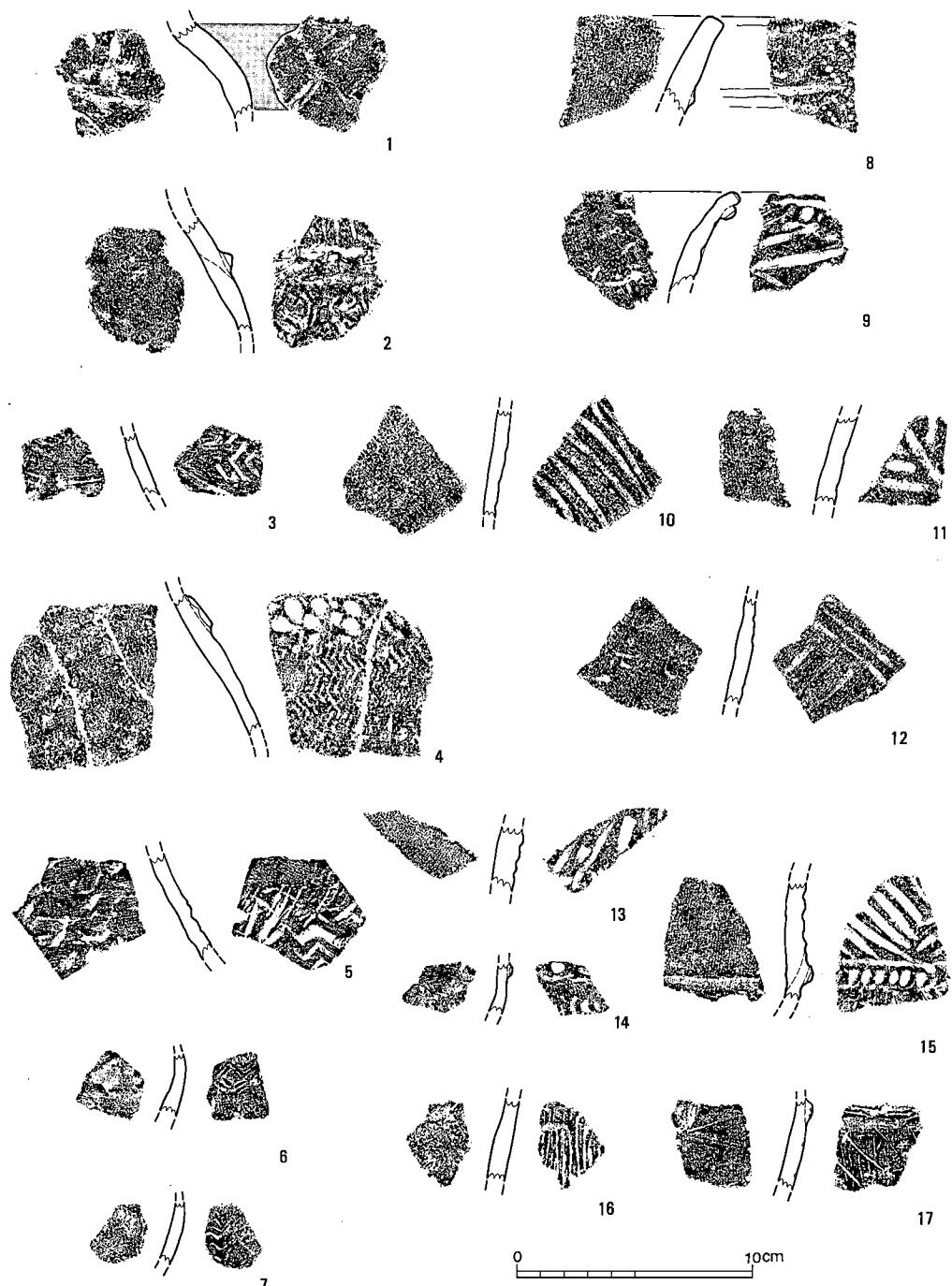
2は、壺の肩部に棒状押圧による刻目を施した断面三角凸帯を付けた類である。凸帯より上にはやや雑な縦位の平行沈線を施し、下には縦位の山形押型文を施文している。内面には指頭



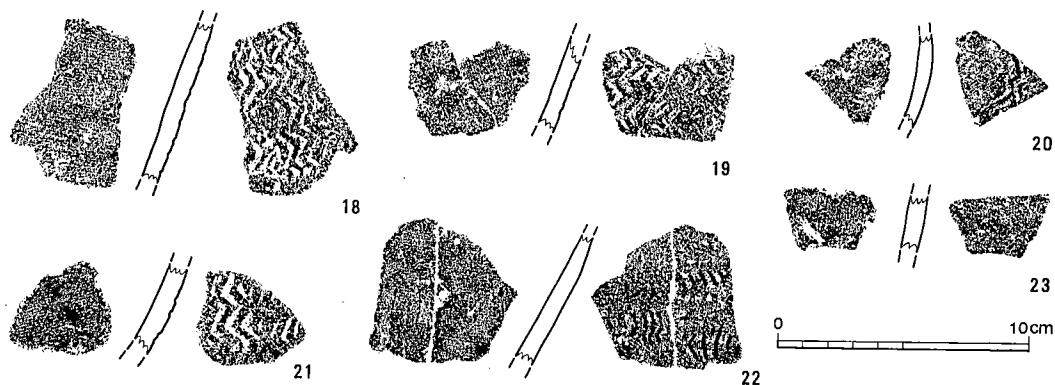
第9図 A5号土壙出土石器実測図（1/2）



第10図 A11・12号土壤実測図 (1/60)



第11図 A11号土器出土繩文土器実測図（その1）(1/3)



第12図 A11号土壙出土縄文土器実測図（その2）(1/3)

押圧痕があり、その上を横方向にナデているようである。胎土に細砂粒を少量、金雲母を若干含む。焼成良好で、内面は黄褐色、外面は褐色をなす。

3は、外面に粗大な縦位山形押型文を施した壺頸部付近と思われる小破片である。内面は横位の板状工具による擦過痕がみられる。胎土に細砂粒を少量、角閃石を多く含む。焼成やや良好で、明褐色をなす。

4は、肩部に低い粘土帯を貼り付け、その上に四点を2段に連接して押圧施文した壺片である。胴部外面には縦位の山形押型文が施され、内面は丁寧な横ナデかと思われる。胎土に細砂粒を多く、角閃石を少量含む。焼成やや不良で、内面は暗褐色、外面は暗～淡褐色をなす。

5は、外面に極めて粗大な横位山形押型文を施す壺頸部片である。内面は横位のヘラ削り状のカキトリ（横位擦過の強い類）がみられる。胎土に細砂粒を少量含むが、かなり精選されている。焼成は良好で、内外面ともに橙褐色をなす。

6は、器種は限定できないが、胴部下半とも思われ、外面に横位の山形押型文を施したものである。内面は横位のオサエナデが施される。胎土に細砂粒を少し含み、焼成良好で、橙褐色をなす。

7は、器種は限定できないが、胴部下半片と思われる。外面に横位山形押型文を施し、内面はナデしている。胎土に細砂粒を少し、角閃石を若干含む。焼成良好で、内外面ともに橙褐色をなす。

8は、厚手の深鉢形土器口縁部で、外面に低い凸帶を付ける類である。凸帶上に刻目が本来巡らされているのかどうか、短い部分だけしか残っていないので不明である。外面には間隔をおいた斜行の縄文がめずらしく施されており、器形的に異類である。内面は丁寧なナデかと思われる。胎土に細砂粒と角閃石を多く含み、焼成良好で、褐色をなす。

9は、大きく開く口縁部で、口唇部とその直下の凸帶上に棒押圧の刻目を施す。口唇部の刻目はやや浅い。頸部外面には太い凹線の斜交する幾何学文が施される。内面は横ナデかと思わ

れる。胎土に粗石英粒等をわずか、角閃石をやや多く含む。焼成良好で、暗褐色～暗茶色をなしている。

10は、頸部片で、外面に斜位の凹線文をやや雜に施している。内面は平滑で、ナデかと思われる。胎土に粗・細砂粒を多く、角閃石を少し含む。焼成不良で、内面は暗褐色、外面は暗黃褐色をなす。

11は、頸部片で、外面に太めの凹線で横位・斜位の組み合わせの幾何学文を施している。内面は磨滅氣味で、ナデかと思われる。胎土に細砂粒・角閃石をやや多く含む。焼成やや良好で、内面は明褐色、外面は褐色をなす。

12は、頸部片で、外面に斜めの平行凹線文を組み合わせた幾何学文を施している。凹線は浅めである。内面は横位のナデ調整である。胎土に細砂粒、角閃石をやや多く含み、焼成はやや良好で、内面は茶褐色、外面は暗褐色をなす。

13は、頸部に斜位の凹線を施したもので、やや雜な施文である。内面は丁寧なナデ調整である。胎土に細砂粒を多く、角閃石を少し含む。焼成不良で、黒褐色をなす。

14は、胴部屈折部外面に凸帶を付け、その上に刺突状刻目を施している。その下には縦位の山形押型文を施している。内面はナデ調整で、胎土に細砂粒・角閃石を少量含む。焼成不良で灰～暗褐色をなす。

15は、頸部と胴部の境の屈折部外面に凸帶を付け、その上に細目の棒押圧による刻目を密に施している。頸部外面は太めの斜行沈線を平行に施して幾何学文様で飾っている。凸帶以下の外面には、縦位山形押型文のような痕跡がみえるが定かではない。内面は横ナデで、屈折部内面には段がついている。胎土に細砂粒を多く、角閃石を少量含む。焼成はやや良好で、内面は黄褐色、外面は黒褐色をなす。

16は、器形は想定できないが、外面に縦位の撚糸文を施す異類である。内面は横方向のナデ調整で、胎土に細砂粒・角閃石を多く含む。焼成は不良で、内面は淡褐色、外面は暗茶褐色をなす。17と同系統の器形だとすると、もっと外傾して、胴部下半となるかと考えられる。

17は、屈折部外面に凸帶を付け、その上端に横方向の撚糸文を施している。胴部外面には縦～斜位の撚糸文を施している異類である。内面は横位ナデで、胎土には細砂粒を少し、角閃石を若干含んでいる。焼成やや不良で、内外面ともに暗褐色をなす。

18は、胴部下半片で、外面には粗い縦位山形押型文を施している。内面は平滑で、丁寧にナデている。胎土に細砂粒・角閃石をかなり含み、焼成不良で、内面は暗～黒褐色、外面は淡茶～暗褐色をなす。

19は、18と同様の胴部下半片で、外面には縦位の山形押型文を施し、内面は丁寧で横位ナデかと思われる。胎土に細砂粒・角閃石を少量含み、焼成はやや良好で、内面は暗褐色、外面は明褐色をなす。

20は、丸味をおびた胴部下半片で、外面には斜位の山型押型文が施されている。内面はナデで、胎土に細砂粒を少し、角閃石を若干含む。焼成良好で、橙褐色をなす。

21は、外面に縦位山形押型文を施した胴部下半片で、内面は丁寧な横位ナデを施す。胎土に細砂粒・角閃石を多く含み、焼成やや良好で、内面は黒褐色、外面は暗褐色をなす。

22は、胴部下半片で、外面は縦位山形押型文の上をナデしており、内面は縦位の丁寧なナデを施している。胎土に細砂粒を少し、角閃石をやや多く含む。焼成は良好で、薄黄褐色をなす。

23は、外面は無文の小片で、内面はナデ調整かと思われる。胎土に細砂粒を多く、角閃石を若干含む。焼成良好で、暗橙褐色をなす。

石器 (第47図17) サヌカイト製スクレイパーで、現存長2.4cm、幅4.7cm、厚さ1.4cmと厚手である。下端には自然面を残し、裏面は大きく主要剝離面を残したままである。両側縁が使用可能で、右側縁には微細な使用刃こぼれがみられる。

この石器の他に、このA11号土壙からは、サヌカイト不定形剥片8点(41.3g)、玻璃質安山岩片2点(39g)、プロピライトの原石に近いもの2点(99.9g)など、注目すべき石材の種類が揃って出土している。

以上の出土土器は、8のような縄文を施す異種や、胴部下年に燃糸文を施す類も少量みられるが、大半は頸部に凹線の幾何学文を施し、胴部下半には縦位の山形押型文を付す典型タイプである。これらのことから、当A11号土壙は手向山式期を主とすることがわかる。また、壺形土器の出土も、とても貴重である。

A12号土壙 (第10図、図版5)

A区の南端近くに位置する、大型風倒木痕である。特に土層図は作製しなかったが、西隣のA28号土壙と全く同様の土層横転がみられた。

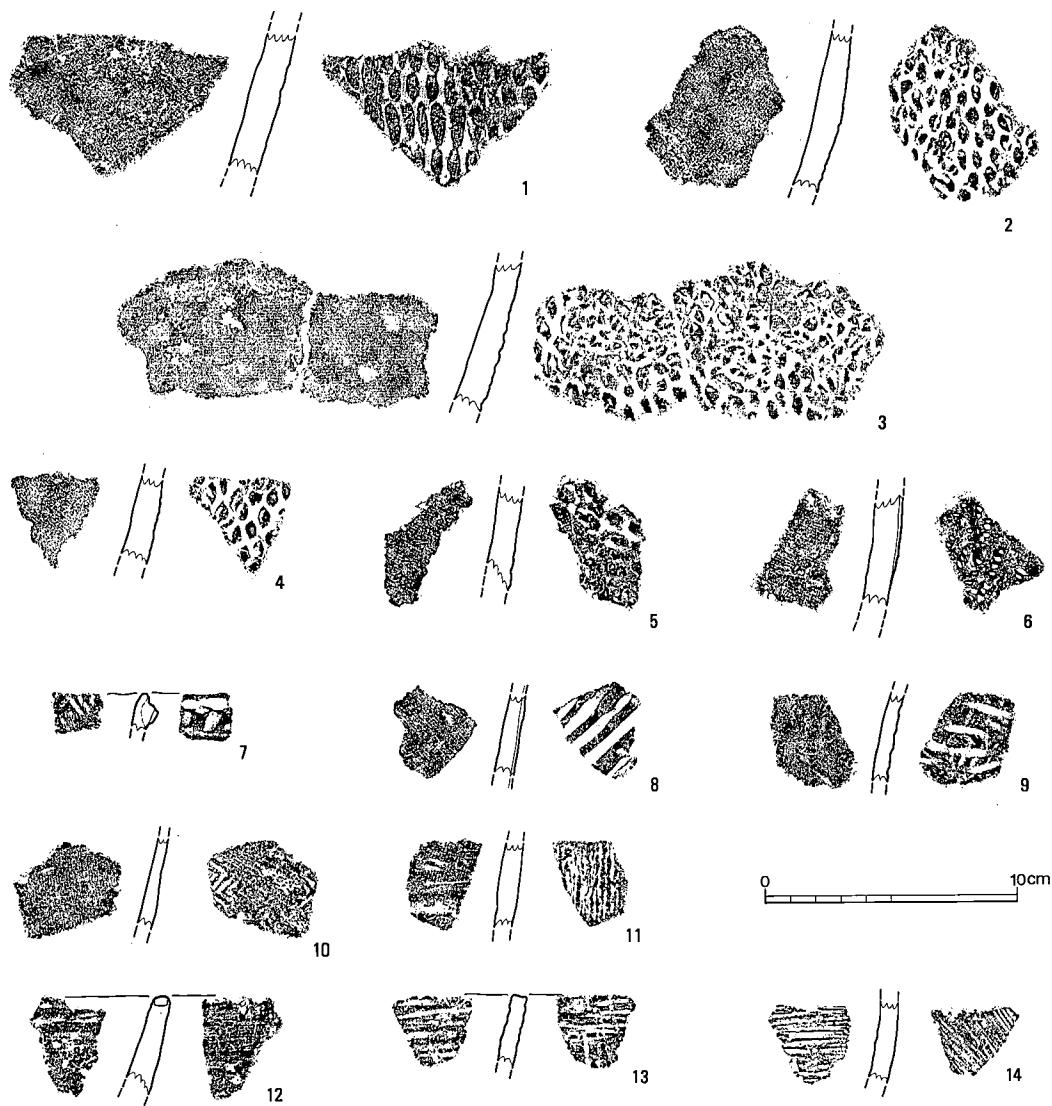
全長6.48m、最大幅3.24mとなる。底面は大きく凹凸がみられ、中央附近で62cmの深さとなる。西端部でも深い部分があり、全体の形状からみて、2(～3)本の大木の倒壊によるものと考えられる。遺構上面での検出時には、同一時期の穴に見え、東西で切り合っているような状況ではなかった。よって、この風倒木痕は、複数の近接した大木が同時に倒れた痕跡と考えられる。

出土遺物 (第13図)

1は、縦長の粗大な楕円形押型文を施した厚手の土器で、内面は横・斜めのナデ調整がみられる。胎土に細砂粒や角閃石を多く含み、焼成やや良好で、内外面ともに暗黄褐色をなす。

2は、楕円形押型文を縦位に施したもので、内面は横位ナデ調整である。胎土に細砂粒や角閃石を多く含み、焼成良好で、内面は黒色、外面は淡茶褐色をなす。

3は、厚手の楕円形押型文土器である。基本的には縦位に施しているが、ちょうどこの部分

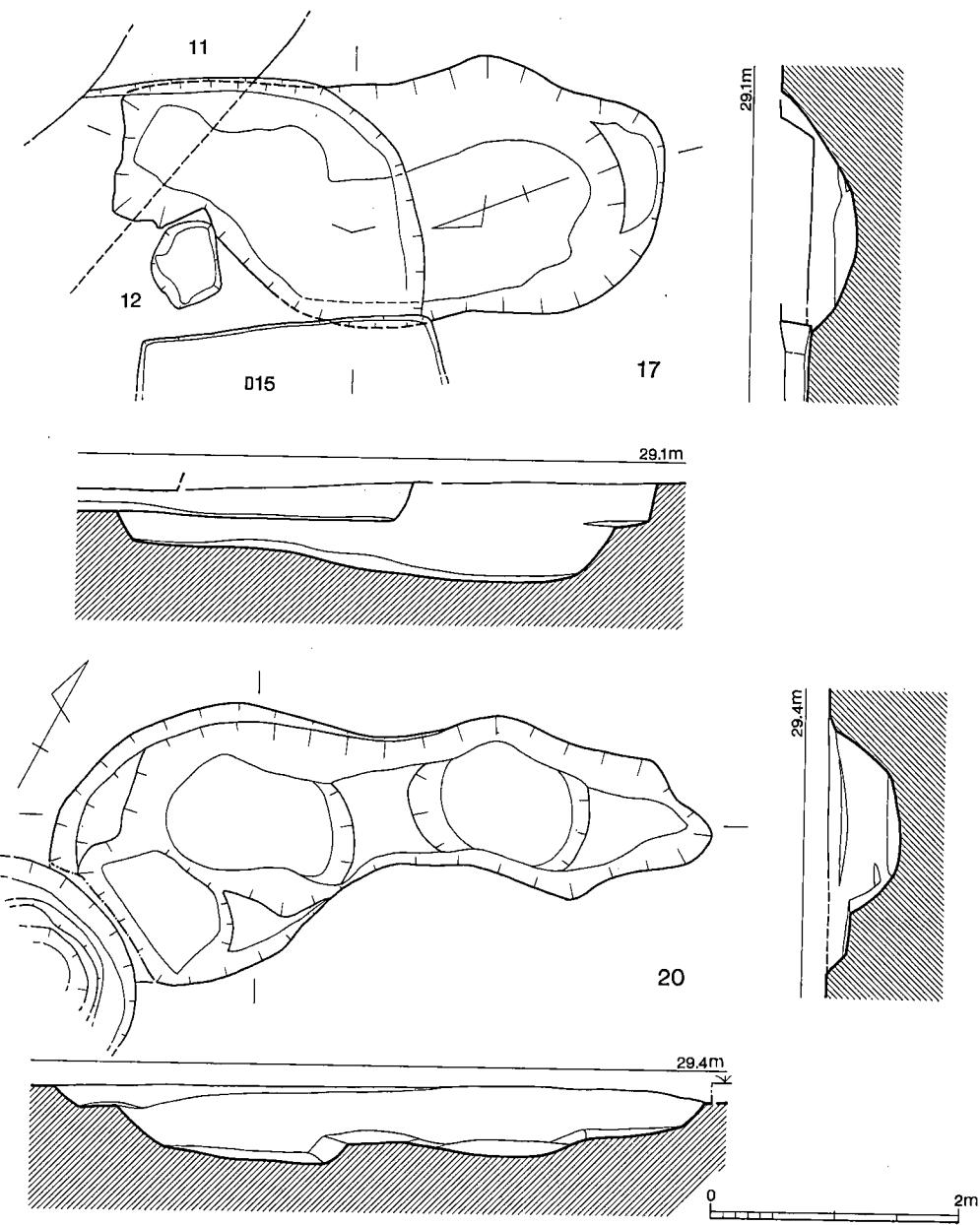


第13図 A12号土壤出土縄文土器実測図 (1/3)

は、上下の施文単位の交錯した部位となっている。内面はナデ調整。胎土に微・細砂粒や角閃石をやや多く含む。焼成やや不良で、内面は黒褐色、外面は橙味茶色をなす。

4は、縦位の楕円形押型文を施した厚手の土器である。内面は横位ナデ。胎土に細砂粒を多量に含み、角閃石もやや多く含んでいる。焼成はやや不良で、内面は黒褐色、外面は明橙褐色をなす。

5は、斜位の楕円形押型文を施すもので、やはり厚手である。内面は斜めのナデ上げ調整で、



第14図 A17・20号土壤実測図 (1/60)

胎土には石英・長石の粗粒を多く含む。焼成良好で内面は暗褐色、外面は淡黄褐色をなす。

6は、中央に縦方向の凸帯を付け、地文には斜位の連続刺突連点文を施した異類である。内面は横位ナデで、胎土に角閃石・石英・長石の細粒をいくらか含む。焼成はやや良好で、肌色

をなす。

7は、口縁直下に凸帶を付け、その上に斜位の棒押圧刻目を施したものである。口縁内面上端部には横位の山形押型文が施文されている。口縁上端は、小片で明確ではないが凹状部がみられるので、本来刻目を施したものと考えられる。胎土に細砂粒・角閃石を少し含み、焼成や良好で、淡黄褐色をなす。

8は、頸部片で、斜位の平行沈線で幾何学文を施す類である。内面は横位ナデ。胎土に細砂粒をいくらか含み、焼成やや不良で、暗茶褐色をなす。

9は、頸部片で、下地に左下がりの斜線がかすかに見えるが、その上に平行沈線をやや雑に施したものである。内面はナデ上げ。胎土に細砂粒を多く、角閃石を少量含む。焼成良好で、内面は橙褐色、外側は灰味橙褐色をなす。

10は、頸部というよりも、もっと外傾して胴部下半と考えた方がよいかもしれない。外側に縦位山形押型文を施し、内面は丁寧に横にナデしている。焼成不良で、内面は黒褐色、外側は暗褐色をなす。

11は、胴部に縦位の撚糸文を施す類で、内面は横位擦過調整である。胎土に石英・長石を少量含み、焼成不良で暗褐色をなす。

12は、口縁上端に不定形の深い刺突文を施す異類土器で、内面は横位条痕の上をナデしている。外側は板状工具による横位ナデがみられる。基本的には、条痕文系土器になるかと考えられる。胎土に粗石英粒を若干、角閃石を僅かに含む。焼成良好で明茶～灰色をなす。

13は、条痕文土器口縁片で、外側はアナグラ条痕の上に下半で縦沈線を入れている。内面はアナグラ条痕のままである。口唇部は凹状になっている。胎土に細石英粒を少し、角閃石をやや多く含む。焼成やや良好で、暗灰褐色をなす。

14は、条痕文土器胴部片で、内面は横位アナグラ条痕が明瞭である。外側は斜位条痕を施す。胎土に粗石英粒・片岩小片をいくらか含み、焼成不良で、黒褐色をなす。

以上の出土土器類の他に、当A12号土壙からは、黒曜石剝片等が少量出土している。

土器は、粗大な押型文土器、手向山式土器、撚糸文土器、条痕文土器など多彩にみられるが、他の遺構等と際立って異なるのは、押型文土器の出土であろう。粗大な縦位楕円形押型文は、押型文文化のうち単独施文土器での最終段階を示しており、この直後の手向山式土器での押型文の残影段階へ移る好資料を示していると言えよう。

A17号土壙（第14図、図版5）

遺跡の北端寄りの住居集中部分に位置する。北半をA12号住居跡とA15号土壙に切られている。埋土は黒褐色～暗褐色土で、南北に長い平面形となる。長さ4.42m、最大幅2.06mで、底面は南半が深くなっている。深さは、北端部で40cm、南半部で80cmほどとなる。



第15図 A17号土壙出土縄文土器実測図 (1/3)

大きくして、わりとしっかりした土壙であるが、性格は判断できない。

出土遺物（第15図）

1は、頸部上半の口縁近くと思われ、指押圧的な太い刻目を施した凸帯を付け、その下方には、太い沈線を縦～斜めに施したものである。内面はナデかと思わせるが磨滅している。胎土に長石・石英・角閃石をやや多く含み、焼成不良で、暗黄褐色をなす。

2は、太い凹線を縦・斜位に平行に施し、幾何学文を構成した頸部片である。内面は粗い横ナデで、胎土に細砂粒・角閃石をやや多く含む。焼成不良で暗褐色をなす。

3は、頸部片で、斜位の平行沈線で幾何学文様を構成する類である。沈線は他例と比べて細めである。内面は丁寧にナデており、胎土には細砂粒をやや多く含む。焼成やや良好で、外面は暗茶褐色、内面は暗黄～灰褐色をなす。

以上のA17号土壙出土の土器は、すぐ北の北端谷包含層出土土器の大半と同様に手向山式土器に含まれる。

A20号土壙（第14図）

A区の東側寄りの、A2号住居跡の北方に位置する。ひょろ長いひょうたん状の平面形の不定土壙である。南西端を柿の木穴のP30に切られている。

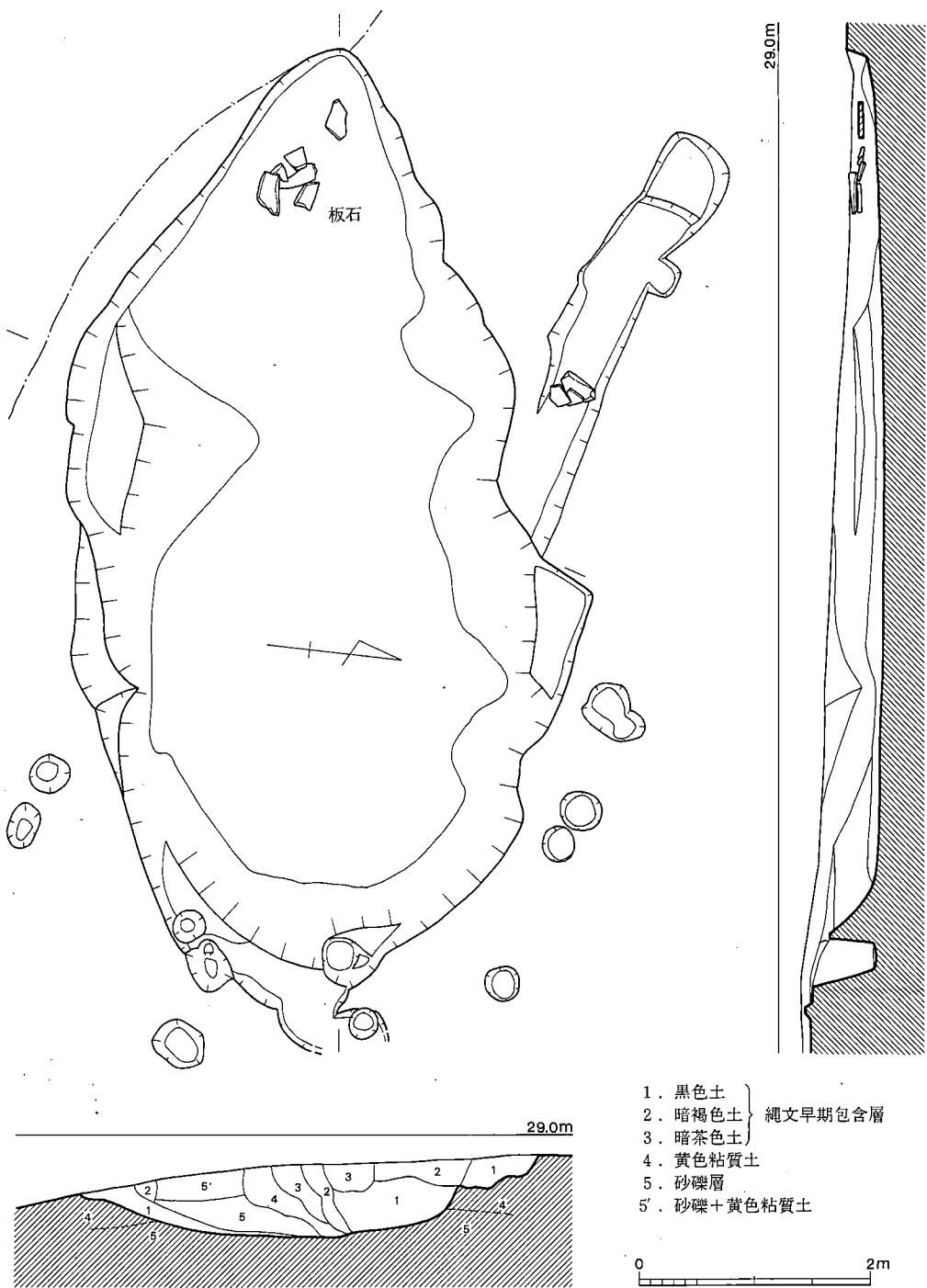
全長5.35m、最大幅2.1mとなる。底面には東西に各々深い部分があり、壁から底にかけて複雑な凹凸をみせる。深さは、東端で20cm程度、東側の最深部で60cm強となる。

出土土器のうち、図示に耐えるものは無いが、明らかに縄文早期土器片のみであり、埋土や遺構の形状からみて、同期の土壙と判断できる。

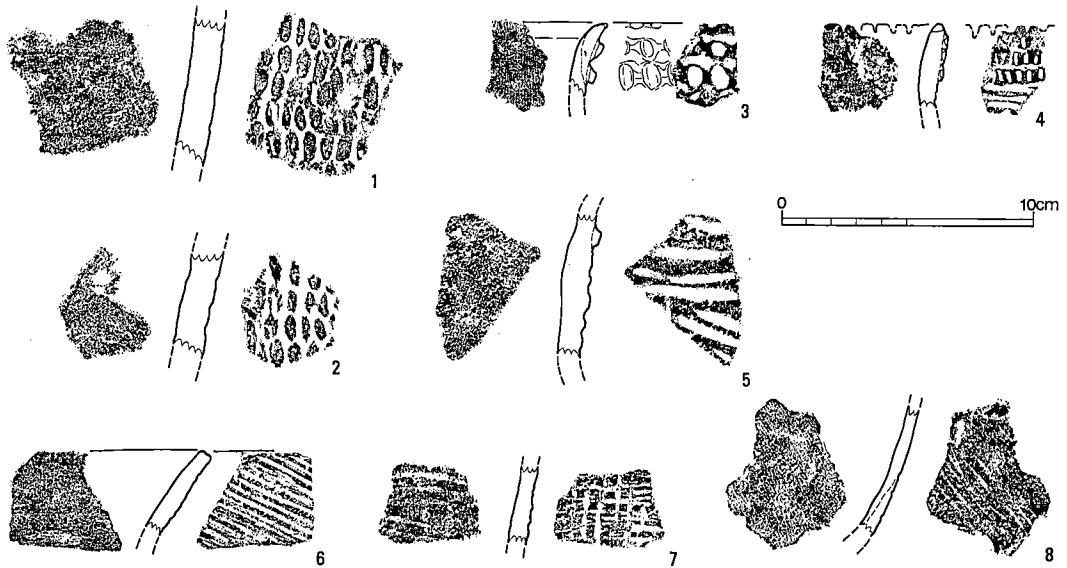
A28号土壙（第16図）

A区南辺に位置する、大規模風倒木痕である。東隣のA12号土壙と極めて良く似た形状のもので、一連の風倒木と考えられる。

東西の全長8.1m、最大幅4.54mあり、深さは0.6m強となる。土層図に示した如く、地山下層の砂礫層までが、北から順序よく土層横転している。遺構の中央付近でくびれているため、2本の大木が南の強風のために北へ倒れたことがわかる。これは既述したA11号土壙の風倒木と軌に一にしている。



第16図 A28号土壤実測図 (1/60)



第17図 A28号土壤出土縄文土器実測図 (1/3)

・なお、この穴の西端で、片岩の板石6枚を検出しておる、上層もあるし、すわ石棺墓かと考えて精査したが、性格をつかむことはできなかった。

出土遺物（第17図）

1は、粗大な縦位楕円形押型文土器で、厚手である。内面はやや粗い横位ナデを施す。胎土に細砂粒・角閃石をやや多く含み、焼成良好で暗茶褐色をなす。

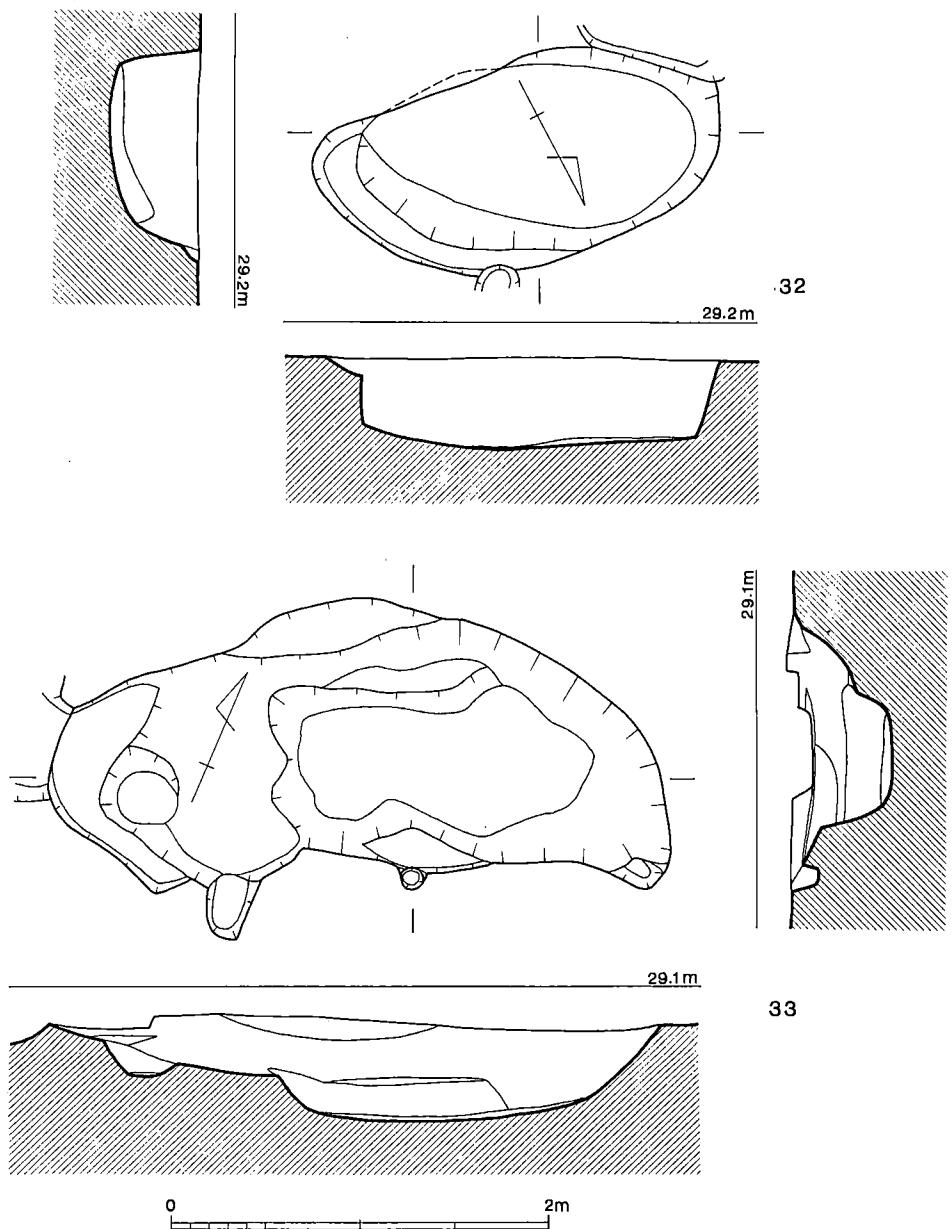
2も同様の粗大な楕円形押型文を縦位に施したものである。器壁が1.3cmと厚く、内面は横方向にナデている。胎土に細砂粒・角閃石をやや多く含み、焼成良好で、外面は茶褐色、内面は暗灰褐色をなす。

3は、外反してやや尖り気味になった口唇部に浅い刻目を施し、外面直下に2条の棒押压刻目を施した連接凸帯を付けている。胎土に細石英粒をわずかに含み、焼成良好で、外面は茶褐色、内面は淡褐色をなす。

4は、口縁直下に連接する凸帯3条を付け、その上に縦長の細い刺突による刻目を施している。口唇部には縦に深い刻目を入れている。外面の凸帯下方には、細めの横位平行沈線がみえる。胎土に細砂粒が多く、金雲母をやや多く、角閃石を若干含む。焼成良好で、茶褐色を呈している。

5は、頸部上半片で、太い平行凹線で幾何学文を構成している。凸帯のこの破片範囲には刻目はみられない。内面はナデかと思われる。胎土に細砂粒・角閃石を多く含み、焼成やや良好で、内面は黄褐色、外面は黄褐色～暗褐色をなす。

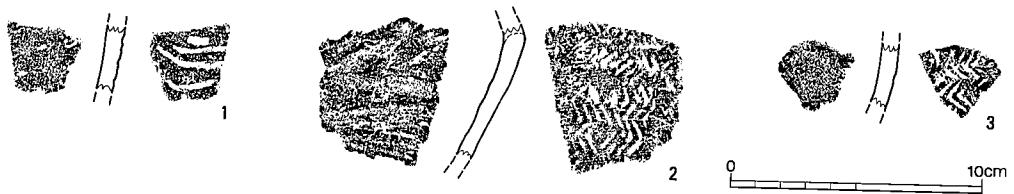
6は、条痕文系土器で、外面には斜位のアナグラ条痕を明瞭に残す。口縁上面から内面は、



第18図 A32・33号土壌実測図 (1/40)

横位ナデを施す。胎土に細砂粒を多く含み、焼成やや良好で、内面は黒褐色、外面は橙褐色を呈している。

7は、外面に横位アナダラ条痕の上に縦方向の沈線を入れた類で、A12号土壌出土品(第13図)



第19図 A32号土壌出土縄文土器実測図 (1/3)

と通じるタイプである。内面も横位条痕を施す。胎土に細砂粒を少し、角閃石を多く含む。焼成やや不良で、暗褐色をなす。外面には煤がこびりついている。

8は、薄手で、縄文晩期のマリ形土器となる可能性も強い。外面は斜位条痕の上をナデ消しており、内面は斜～縦位のナデ調整である。胎土に細砂粒を多く、角閃石・金雲母を若干含む。焼成不良で、内面は薄褐色、外面は暗褐色をなす。

以上の図示した土器の他に、当A28号土壌からは、サヌカイトの横長剝片2点、赤茶色のチャート剝片1点が出土している。

土器は、東隣のA12号土壌出土の状況と極めて良く似ており、粗大な縦位楕円形押型文、手向山式土器、条痕文土器等の組合せとなっている。両者の風倒木痕がほぼ同時期に形成されたことを物語るところであろう。

A32号土壌（第18図）

A区中央付近の、A11号土壌の西隣に接するように位置する風倒木痕である。他の風倒木痕の穴に比べて小規模で、東西に長い楕円形を呈している。長さ2.15m、幅1.1mで、深さは0.48mほどとなる。底面は平坦ではなく、中央やや東寄りの部分が最も深い。

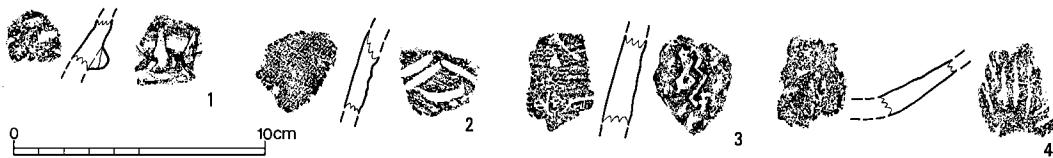
出土遺物（第19図）

1は、左端部が上方へ曲がる平行沈線を施した頸部片で、内面は横方向にナデている。胎土に細砂粒・角閃石をいくらか含み、焼成はやや良好で淡褐色をなす。

2は、屈折部以下の胴部外面に縦位の山形押型文を施す類で、内面は強い削り状横位擦過痕を残している。胎土に細砂粒を多く、角閃石をやや多く含む。焼成やや良好で、淡褐色を呈している。

3は、外面に縦位の山形押型文を施す胴部小片である。内面はナデているかと思われる。胎土はわりと精良で、焼成やや良好、外面は灰褐色、内面は明褐色をなす。

以上の出土土器は、押型文を用いる最終末の手向山段階と考えられ、胴部の形態がわかる、屈折部以下の貴重な資料（2）も含まれている。



第20図 A33号土器実測図 (1/3)

A33号土器 (第18図)

A区西南近くのA 2号落込みの西側に、ガタガタに不定形掘り込みが集中する部分があるが、その北東端に位置する。東西に長い不整形土器である。

長さ3.32m、幅1.4mで深さ0.55mとなる。底面は西側が高めで、中途にテラス状の緩斜面部分がいくつもあり、不定形土器の特徴を示している。この土器の特徴は、サヌカイト片を中心とした石器・剝片の出土であり、石器製作関連を想定させる。

出土遺物 (第20・47図)

土器 (第20図) 1は、開いた上方で、やや屈折気味に立ち上がるくせを持つ口縁近くの小片である。外面には高めの凸帯を付け、上側の器壁にまで至る大きい刻目を施している。胎土に細砂粒・角閃石を少量含み、焼成良好で黄褐色をなす。

2は、斜位の凹線を組み合わせて幾何学文様を構成する頸部片である。内面は横位のナデで、図の断面の上端は接合面が剥げている状態である。胎土に角閃石をやや多く含み、焼成やや良好で、黄味褐色をなす。

3は、厚手の押型文土器で、外面に縦位山形押型文を施し、内面は横位条痕の上をナデしている。条痕と押型文との組合せは珍しく、やはり、これも手向山段階のなせる技かと考えられる。胎土はかなり精良で、焼成不良、黄灰褐色をなす。

4は、底部付近の小片で、外面には縦位の撚糸文を施している。底外面は無文である。内面は粗い縦横のナデが施される。胎土に細砂粒・角閃石をやや多く含み、焼成良好で淡褐色をなす。

石器 (第47図) 1は、長さ2.15cm、幅1.7cmのサヌカイト製鍬形鏃である。厚さ4mmと厚手で、全体に丁寧なつくりである。先端はわずかに欠損しており、表面は風化している。

2は、長さ3.9cm、幅2.25cm、厚さ5mmのサヌカイト製大型石鏃である。表面はやや風化している。調整剝離はわりと雑であるが、うまく形を整えており、手慣れたものの手によるものと考えられる。

8は、サヌカイト製スクレイパーで、横が2.7cm、縦が2.1cm以上となる。厚さ6mmで、小型石匙類になるかと思われる。裏面もわりと丁寧に縁辺のリタッチが施され、全縁辺が使用可能である。

11は、サヌカイト製スクレイパーで、かなり部厚く、異類である。現状での長さ4.2cm、幅は

3.2cm, 厚さ1.5cmとなる。表面中央に自然面を残し, 裏面中央には主要剝離面を残している。厚手の横長剝片を使用しており, 一見, 右先端を切先とする尖頭器状にみえるが, 断面が左右不対称となり, とりあえずスクレイパーとしておく。調整剝離自体はかなりしつこく施しており, 本来は尖頭器類を意図したのかもしれない。

15は, サヌカイト製スクレイパーで, 打面と右側面に自然面を残している。長さ4.3cm, 幅4.4cm, 厚さ1.4cmとなり, 表面のみに縁辺の細調整が簡単に施されている。

18は, 漆黒色良質の黒曜石縦長剝片である。長さ2.35cm, 幅8mm, 厚さ3.5mmで, 縦長剝片採取に伴う皮部分剝片である。

以上の他にも, サヌカイト剝片3点, 黒曜石剝片1点が出土している。

このように当A33号土壙は, 手向山式土器を含みながらも, 石器の製品・未製品が多く出土し, 当遺跡ではかなり異質な様相を示している。当該期における打製石器の状況が殆どわかっていない現状では, 極めて貴重な資料を得たと言えよう。サヌカイトの多用, 小型横長石匙類の存在, 打製石鎌の形態など, 特徴的な指摘が可能となった。

A35号土壙（第21図）

前述のA33号土壙の東隣で, A2号落込みの北端に接するように位置している。東西に長い不整形土壙で, 他の縄文早期土壙に比べてそれ程深くない。

長さ3.16m, 幅1.31m, 深さ0.3mとなる。底面は, 全体に波打っており, 平坦ではない。出土土器のうち図示に耐え得るものは無いが, 縄文早期土器小片の出土や, 埋土の状況などから, 该期の遺構と考えられる。

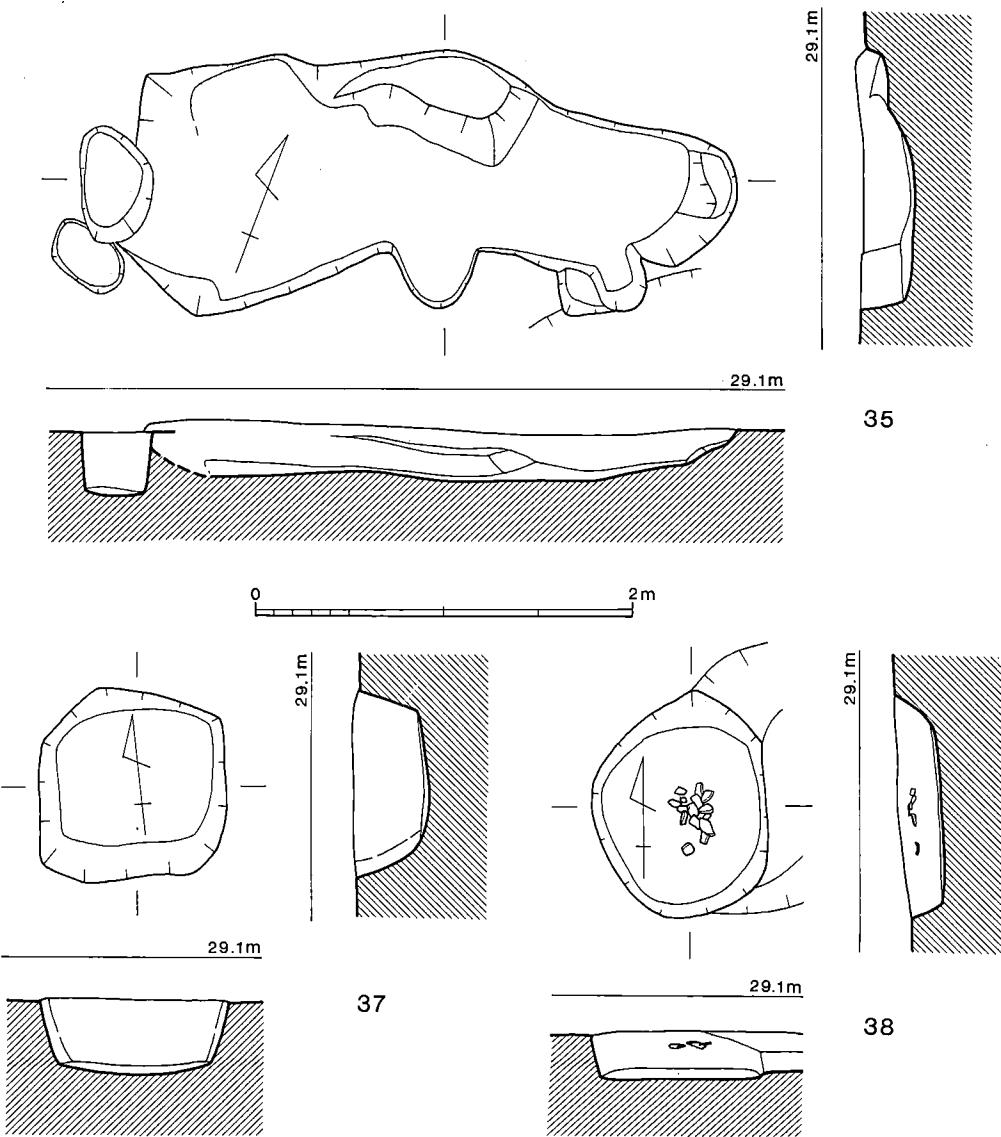
A37号土壙（第21図）

A区西南隅寄りに, 大きな中世落ち込みがあるが, その南方に位置する。不整方形プランをなす小規模縄文晩期土壙である。

東西径99cm, 南北径102~83cmの, 東西にやや長めの略方形プランとなる。壁はわりと直に掘り込まれ, 深さ40cmを測る。わりと整った丁寧な土壙で, 何らかの機能を考えねばならないだろう。というのも, 本遺跡の縄文晩期遺構のうち4基(A1・37・38, B1号土壙)は, すべて径1m前後の円もしくは方形の小規模土壙で, 形態と規模が均一である。そして, いずれも土器を少なからず持っているが, 埋甕や土器埋置といった状況ではなく, 大破片を含んだ一括投棄を思わせるような出土状況をみせている。貯蔵穴的な機能を考えてもよかろう。ただ, ここで決定は難しいので, 類例の増加を待って改めて考察できれば, と思う。

出土遺物（第22~24・48図）

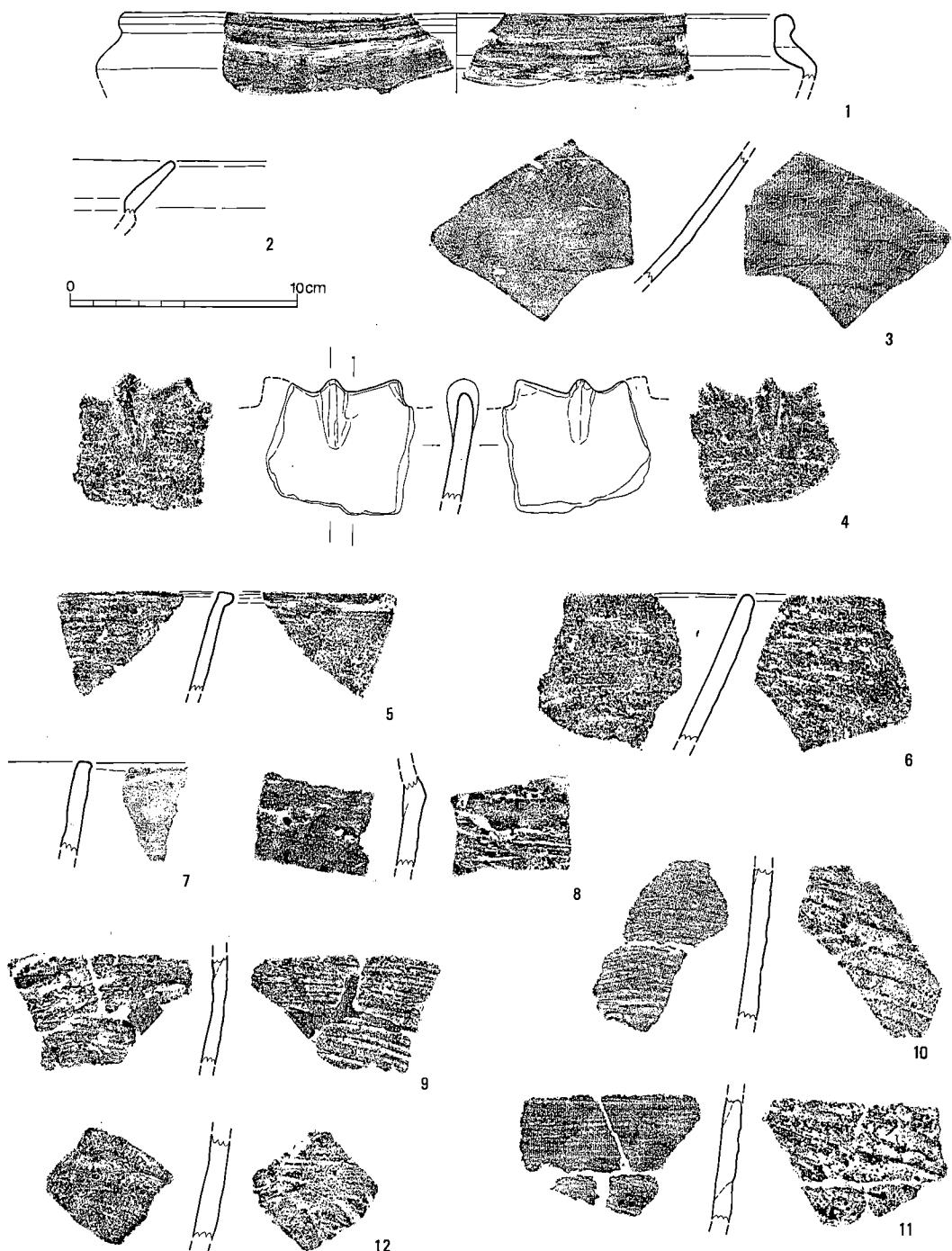
土器（第22~24図）1は, 口径29.4cmの浅鉢形土器で丸く厚味のある口縁部内面には既に沈線



第21図 A35・37・38号土壤実測図 (1/40)

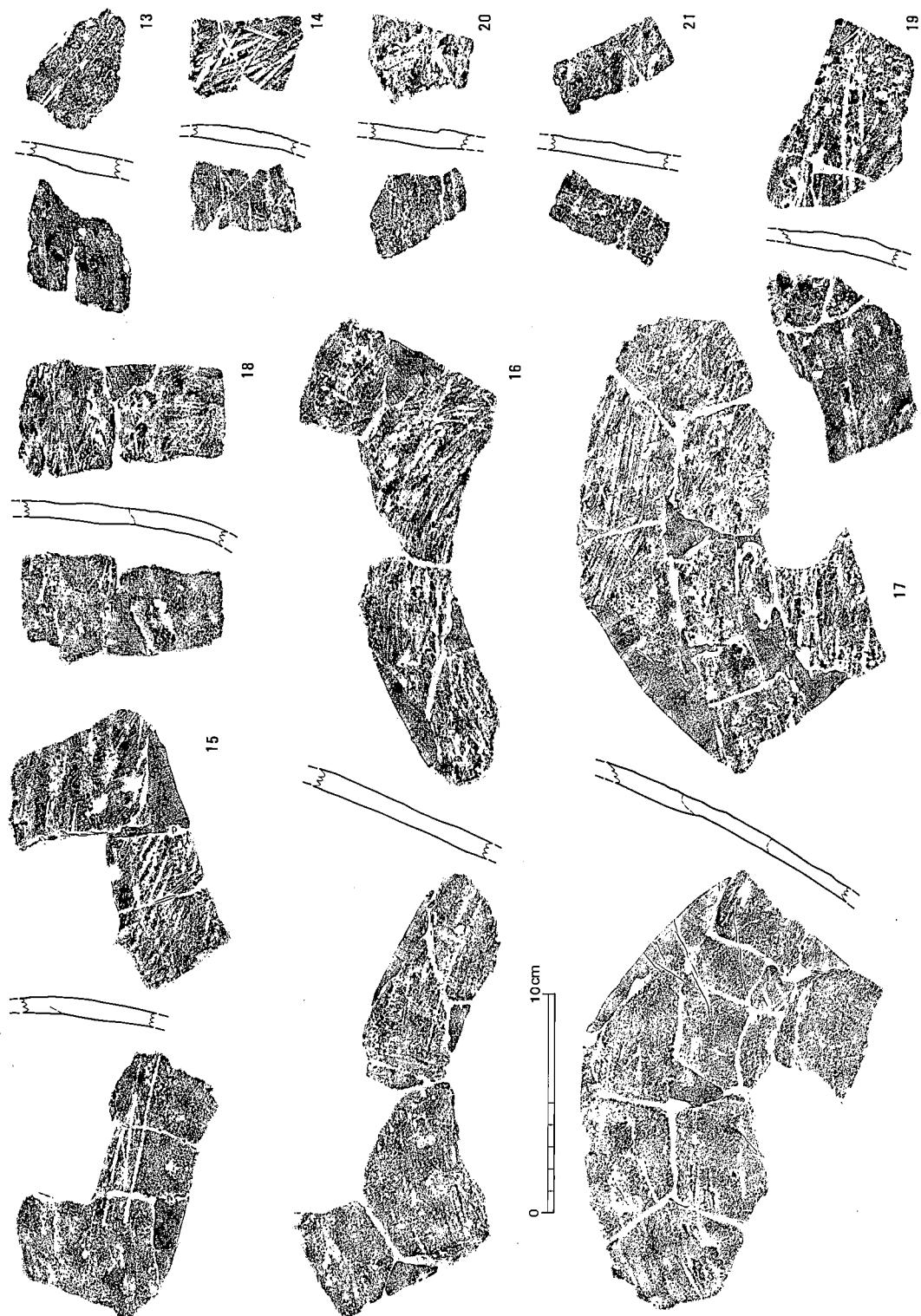
は無く、外面に段状の凹部として残るのみである。体部上端でわずかに外方へ張り、屈折部に稜をつくる。内外面ともに横ヘラ磨きで、胎土精良である。焼成良好で、暗褐色～明橙色をなし、部分的に黒色研磨部分がみられる。

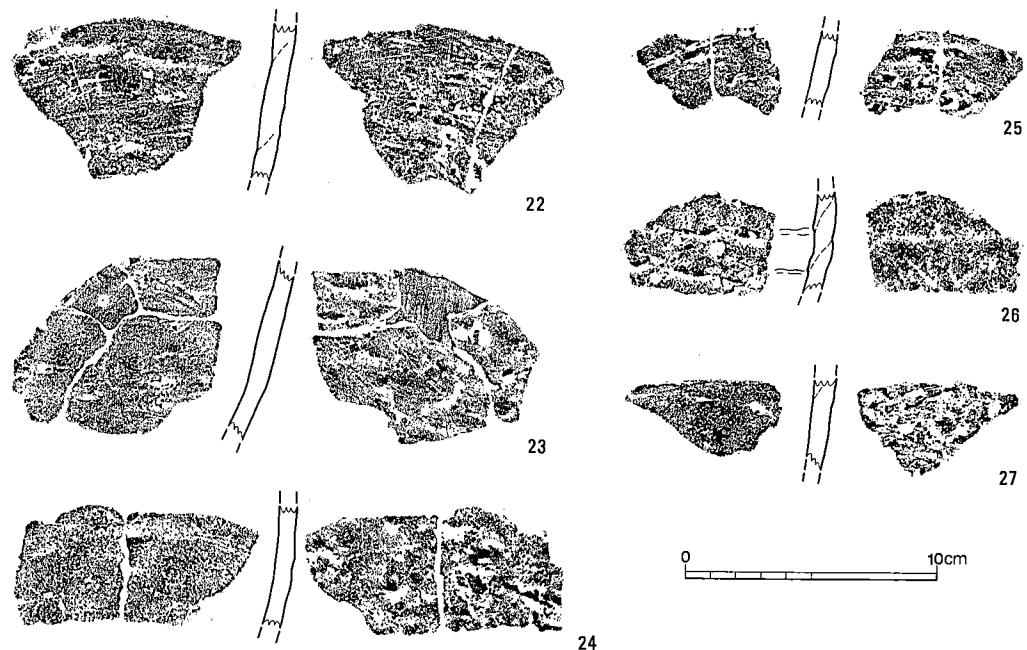
2は、精製浅鉢で、胎土精良、焼成良好で橙褐色をなす。内外面ともに横位ヘラ磨きを施している。3は、浅鉢体部下半片で、外面は横位のヘラ削り状擦過痕がみられ、内面は黒色磨研



第22図 A37号土壤出土縄文土器実測図（その1）(1/3)

第23図 A37号土壌出土繩文土器実測図（その2）(1/3)





第24図 A37号土壤出土縄文土器実測図（その3）(1/3)

となっている。焼成はやや不良で、外面には煤が付着している。

4は、粗製深鉢の上にリボン状突起を付けたもので、リボンの中央に縦長の突起を付け加えた特徴がみられる。内外面ともに横位条痕の上をナデており、胎土には粗砂粒を多く含む。焼成は良好で、内面は暗褐色、外面は赤茶褐色となる。

5は、精製の鉢状となるかと思われる異種で、口縁外端が突出している。口縁部から内面にかけては横位ナデ、外面は丁寧なナデである。胎土に細砂粒を多く、金雲母・角閃石を若干含む。焼成良好で、内面と口縁部周辺は黒褐色、体部外面は黄褐色をなす。

6は、粗製深鉢口縁で、内面は横位ナデ、外面は横方向の粗い擦過の上をナデている。焼成良好で暗茶褐色をなす。外面には煤が付着している。7も粗製深鉢口縁片で、内外面ともに粗雑な横方向のナデ調整を施している。粗砂粒を多く含み、焼成やや不良で、暗～黒褐色を呈している。

8は、粗製深鉢屈曲部付近で、外面にはっきりした稜をつくる。内面と外面上半はナデ、外面下半は横位条痕を施す。9は、胴部片で、外面には横位ヘナタリ条痕、内面は横位ヘナタリ条痕の上をナデしている。10は、外面を横方向の指頭ナデ調整し、内面は細かい横方向ヘラ磨きを施している。焼成不良で、内面は暗褐色、外面は煤が付着して黒褐色となる。図示した断面の上端は接合面で、擬口縁風となっている。11は、10と同一個体と思われ、調整も全く同じである。断面図上端も擬口縁風の接合法をみせている。12は、外面を横位条痕の上を雑なナデで

仕上げており、内面は横方向ナデを施している。13は、外面は斜位の板ナデ風擦過、内面は横方向ナデ仕上げとなっている。14は、斜位の条痕を外面に施し、内面は横位条痕の上をナデている。

15～17は、粗製深鉢の下半大片で、同一個体の可能性もある。15は、外面下間に粗い斜位条痕、他は未調整風で粗雑なままとなっている。内面は横位擦過の上をナデしている。細砂粒をあまり含まず、暗褐色～明褐色をなす。16は、外面を横位条痕の上を雑なナデ調整し、内面には横位条痕の上を横方向ナデを施している。17は、外面に雑な横位条痕、内面は横位条痕を施した上を横方向にナデ消している。細砂粒を若干含み、焼成や良好で、黒褐色～褐色をなす。

18～27は、粗製深鉢胴部片で、外面が未調整風の粗雑なままとなっている類である。18は、外面を粗い未調整風の上を横位ヘラナデしている。内面は横位擦過の上をナデしている。19は、外面未調整で一部横位ヘラナデを施す。内面は横ナデかと思われる。外面には煤が付着している。20は、未調整で凹凸著しい外面で、内面は横位擦過の上をナデしている。内面には炭化物が付着している。21は、外面未調整、内面は横位擦過かと思われる。22は、外面が粗い未調整風の上にヘラナデを施している。内面は横位擦過痕がみられる。23は、外面は未調整風で凹凸著しい。内面は横方向ナデで、下半には炭化物がこびりついている。外面上半には煤が付着している。24は、外面は未調整の上雑なナデで凹凸著しい。内面は横位擦過の上をナデしている。25は、外面が横位未調整風指ナデ調整となっており、内面は横位擦過の上をナデしている。26は、外面は未調整風ナデ、内面は横位ナデで、粘土紐痕が明瞭である。外面には煤が付着して黒褐色をなす。27は、外面が未調整風の凹凸のある状態となっている。胎土に細砂粒をわずかに含み、焼成や良好で、内面は暗褐色、外面は暗い肌色をなす。

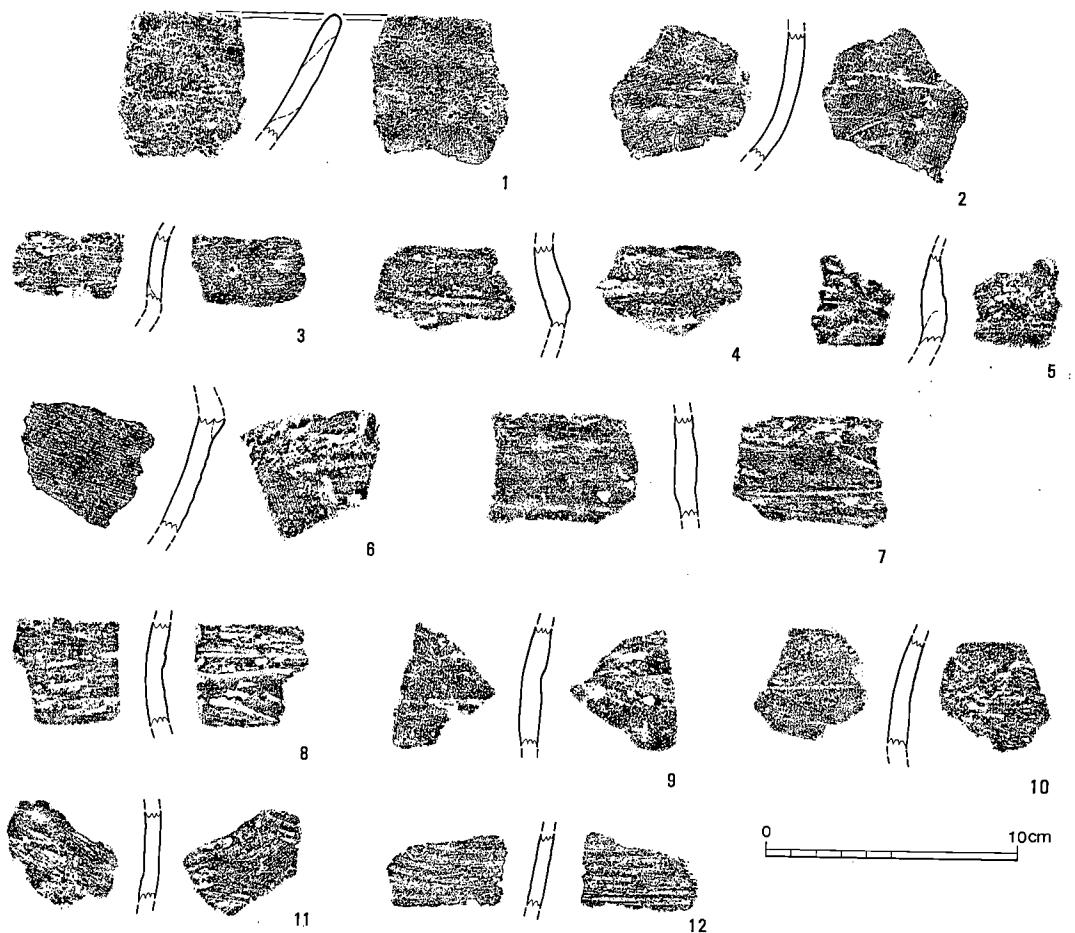
石器（第48図）13は、不純物をいくらか含む黒曜石製小型スクレイパーで、長さ1.8cm、幅1.75cm、厚さ6mmとなる。小型不定形剝片のバルブカットをしたもの右縁辺に刃潰し的な細加工を施し、左縁辺を使用部分としたものである。

この他に、当土壌からは、黒曜石の不定形剝片が6点（19.7g）出土している。

以上のA37号土壌出土品は、典型黒川式期より後出し、学史的に言えば、山ノ寺式の一群の中の古段階にあたる。つまり、既述したA1号土壌出土の土器より一段階新しくなる。1mそこそこの小さな土壌中から一括して出土したこれらの土器は、精製土器の組み合わせ、粗製土器の器面調整法などの上から、貴重な資料を与えてくれたといえよう。

A38号土壌（第21図）

上述のA37号土壌の東側4.3mの位置に在る。このA区南縁辺では、これらの土壌の他からも縄文晩期土器片がかなり散見する。本来このあたりに当時の住居等の生活遺構があったものと推定できる。



第25図 A38号土壤出土縄文土器実測図 (1/3)

略円形プランの小規模土壙で、南北径1.2m、東西径0.93mとなる。底面はほぼ平らで、深さ27cmである。縄文晚期土器片が、やや浮いた状態で出土した。

出土遺物（第25・48図）

土器(第25図) 1と2は、鉢もしくはマリ形の器種となるものである。1は、内外面とも横位条痕の上を横ナデで消している。外面には煤が付着している。2は、外面を横位の雑な擦過を施し、内面は粗い横方向ナデとなっている。胎土はかなり精良で、焼成良好、内面は褐色、外表面は煤が付着して暗褐色～黒色となっている。

3以下は粗製深鉢類である。3は、やや薄手で、小型深鉢になると想われる。内外面ともに横位擦過で、胎土に粗砂粒をいくらか含む。4は、屈折部分で、外面は横位条痕の上をナデ消している。内面も同様かと思われる。5は、外面にしっかりした稜をつくらない屈折部で、

内外面ともに雑な横位擦過を施す。胎土に粗砂粒を多く含む。6は、半精製深鉢で、内面を横へラ磨きして平滑にしている。外面は雑な横位ナデを施す。細砂粒をいくらか含み、焼成不良で、内面は黒褐色、外面は暗黄褐色をなす。7は、粗製深鉢の体部上半と思われ、やや内傾している。外面は雑な横位条痕の上を横ナデしている。8は、粗製深鉢の口縁に近い部分で、外面に意識して段を付けている。調整は雑なヘラナデ状（板状工具擦過）となっている。内面は横位擦過仕上げである。9は、粗製深鉢体部上半部で、内外面ともに雑な横位擦過を施している。10は、粗製深鉢上半部で、内外面ともに雑な横位擦過痕が認められる。11は、胴部下半片で、外面には横位条痕がみられる。内面は、横方向の粗いナデが施されている。12は、外面を横位条痕、内面は横位条痕の上を横方向のヘラナデ調整している。胎土に粗・細砂粒が多く、角閃石を若干含み、焼成やや不良で、内面は黒褐色、外面は暗褐色～暗茶色をなす。

石器（第48図） 14は、やや半透明の良質の黒曜石製小型スクレイパーである。幅2.95cm、長さ1.7cm、厚さ6mmの、横長小剥片の左右両端に縁辺のみの細調整を施しただけのもので、使用剥片の部類である。打面には自然面が残る。

以上のA38号土壙出土遺物は、精製土器が出土していないので確定しづらいが、縄文晩期の黒川式期の前後と考えられる。粗製深鉢の中に口縁下方の外面に段をつけるものがあったり、胴部調整でA37号土壙出土品に多くみられたような未調整風の粗雑な外面の状況が全くここでは無いことなどから、A37号土壙出土品よりは古段階の類ではないかと考えられる。その点からすると、同じ円形プランの小土壙であるA1号土壙と同期の黒川式期と考えてよいだろう。

A42号土壙（第26図）

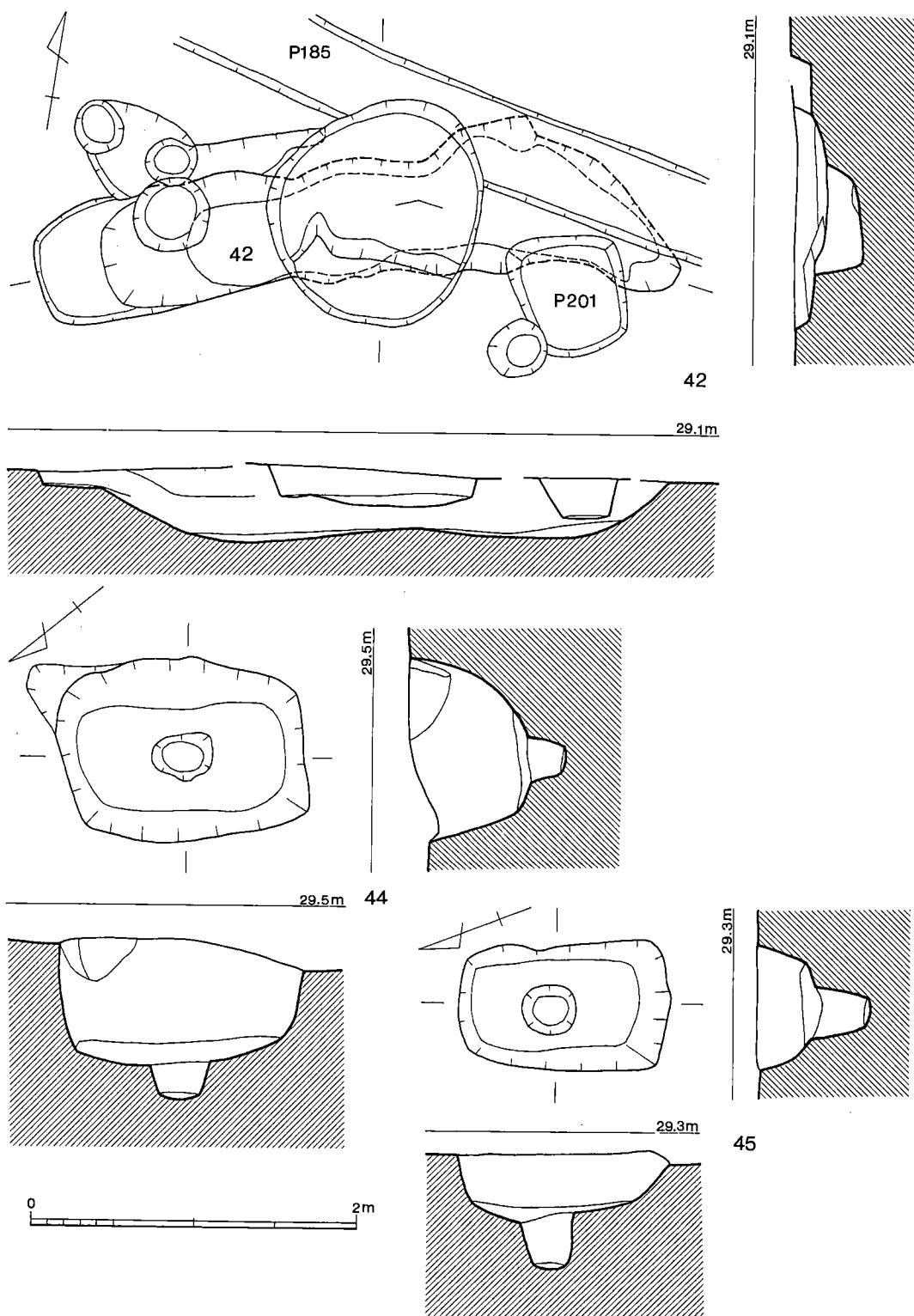
A区西辺寄りの中央付近の、A13号住居跡の西側に位置する。略東西方向に細長い不整形土壙である。中央の上半を大きな円形の浅い穴で切られ、北側でも細長い溝状のP185に切られる。また、東端側でもP201の小ピットに切られ、西端でも円形ピットに切られている。

全長3.98m、最大幅0.95mとなり、底面は凹凸がある。深さは49cmで、西端側はゆるやかな傾斜の壁となっている。

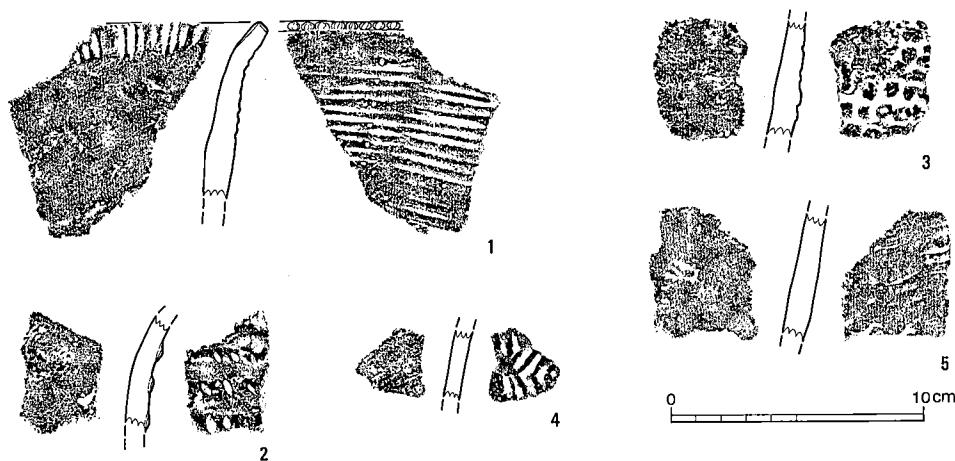
出土遺物（第27図）

1は、口縁内面上端に縦位の短沈線を施し、外面に条痕文と思われる横位平行沈線を施した異類である。口唇部には棒押圧の刻目を連続させる。外面には横位条痕の上から、小さい連点文を縦方向に1条分施している。内面は斜めにナデ上げている。胎土に細砂粒・角閃石を多く含み、焼成やや不良で、内面は暗褐色、外面は暗黄褐色をなす。

2は、頸部上半の口縁部近くで、外面に3条の低い凸帯を付けている。凸帯上にはやや斜位の刻目を施している。内面は横方向のナデ調整となる。胎土に細砂粒・角閃石をやや多く含み、赤褐色粒も少しみえる。焼成不良で、橙褐色をなす。



第26図 A42・44・45号土壤実測図 (1/40)



第27図 A42号土壙出土縄文土器実測図 (1/3)

3は、正円に近い橢円形押型文土器で、内面は横方向にナデている。胎土に細砂粒をわずか、角閃石をやや多く含む。焼成やや不良で、黄味橙褐色をなす。

4は、拓本でみると幾何学文を構成する沈線文のようであるが、実は、まことに粗大な縦位の山形押型文なのである。内面は横ナデかと思われる。胎土に微砂粒をやや多く含み、焼成不良で、内面は暗褐色、外面は淡黄褐色をなす。

5は、外面に貝殻腹縁で引っ搔いた、或は撫糸文原体を押しあてて、回転させずに引いたものかと思われる平行短線文が施された異類である。内面は丁寧にナデしており、器形からみて手向山系ではなさそうである。胎土に細砂粒を少し、角閃石を多く含み、焼成やや良好で、内面は暗褐色、外面は橙褐色をなす。

以上の出土土器の他に、当土壙からは、サヌカイトの不定形剥片が3点出土している。出土土器は、典型例の手向山式土器が1点も無いのが他遺構例に比べて異質であり、当遺跡では特異なものだけがみられる。2・3は手向山式土器の亜種となるかもしれないが、他は全く別系統である。1の、口縁内面に貝殻条痕によるかと思われる短沈線を刻むのは、明らかに押型文土器の伝統を示している。

A44号土壙 (第26図、図版6)

A区の最東端付近に位置する、落とし穴である。上面をA2号溝に大きく切られている。主軸を北東から南西にとる長方形土壙の底部中央に円形ピットを有するタイプである。上端部径1.52×1.12m、下端径1.28×0.63mとなる。深さは、中央ピット脇で0.76mとなるが、本来はもっと深かったであろう。底部中央ピットは、径36×29cmで、深さ24cmほどである。出土遺物は無く、時期は確定できないが、埋土の状況などからみても、縄文時代のいずれかの時期の所産である

ことは間違いかろう。

A45号土壙（第26図）

上述のA44号土壙から西北西へ7.5m離れた位置にて検出された、同様の落とし穴である。A2号竪穴住居跡の床面下から発見された。主軸を北北西から南南西にとる長方形土壙の底面中央に円形ピットを掘り込んだ類である。上端径は $1.32 \times 0.79\text{m}$ 、下端径 $1.02 \times 0.56\text{m}$ となる。深さは42cmほどであるが、本来はもっと深かったと思われる。底面中央ピットは、径 $33 \times 30\text{cm}$ で深さ37cmとやや深い。出土遺物は無く、時期は決定できないが、切り合いや埋土の状況などから、縄文期のものと見てよかろう。

A44号土壙と同様に小規模な類であるが、当地方においては、典型的な形態・規模を示すものである。

A47号土壙（第28図）

A区西南端付近に位置する。北東から南西方向に長い不整形土壙である。南西端をA1号方形周溝墓に切られる。壁がゆるやかに開く形状をなす。長さ 2.75m 、幅 1.44m 、深さ 0.59m となる。図示し得る遺物は無いが、縄文早期の土器小片がいくらか有り、埋土や形態からみても、早期の不整形土壙と考えてよかろう。

B1号土壙（第28図、図版6）

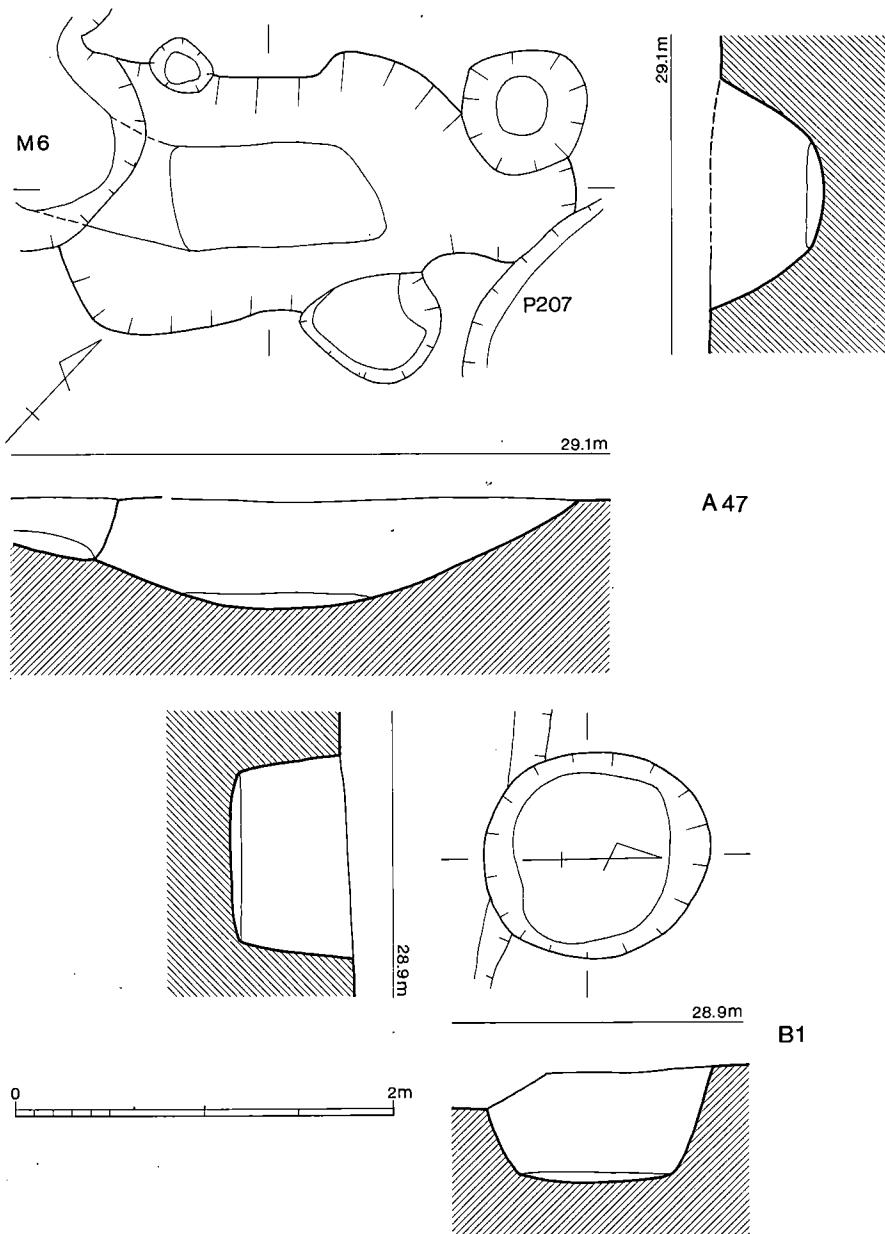
B1号方形周溝墓の北コーナー部分の内側に位置する。円形プランの小規模土壙である。南北径 1.21m 、東西径 1.07m 、深さ 0.6m となる。

底面はほぼ平坦で、全体にしっかりした掘り込みである。中からは他の小規模同類土壙と同じように、かなりの縄文晩期土器片が出土している。

出土遺物（第29・30図）

1は、口径 19.6cm 、復原器高 10.1cm となるマリ形土器で、口縁上端に一对のリボン状突起を付けている。内面はヘラ磨きを施し、外面は擦過の後にヘラ磨きをかけている。胎土に粗砂粒を若干含む。焼成良好で、茶褐色～黒色をなす。

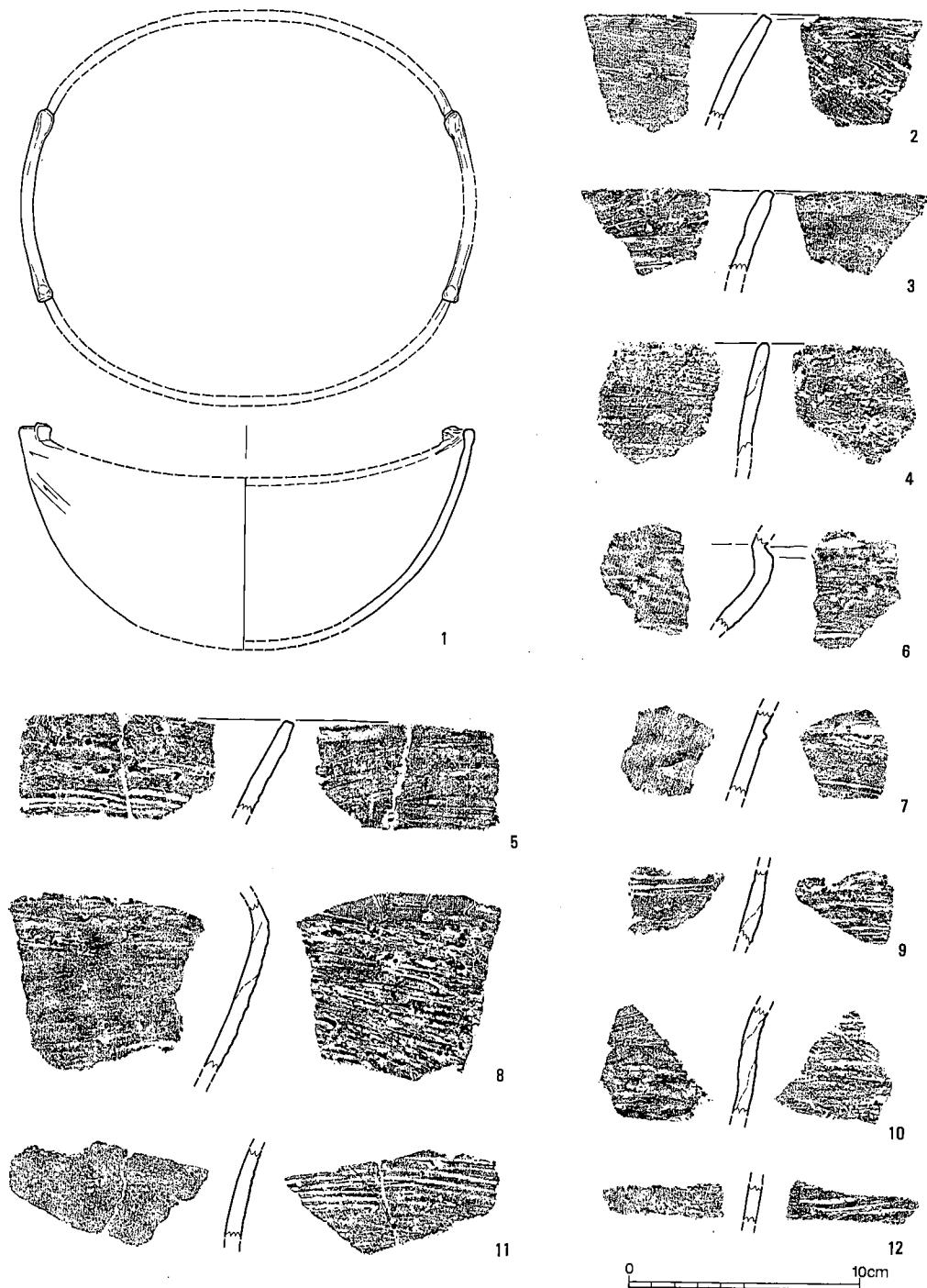
2～5は、粗製深鉢口縁部で、2は、外面に斜位の板状工具による擦過痕を残し、内面は横方向にナデている。胎土に細砂粒・角閃石を少量含む。焼成やや良好で、内面は黒褐色、外面は暗橙褐色をなす。口唇部は平坦面をなし、その両角はシャープである。3は、外面に横位条痕をほどこし、その上からナデしている。内面は条痕の上に横方向擦過がみられる。4は、わずかに外方へ屈折して開く口縁となる。内面は横位条痕、口縁付近の外面は横ナデ、以下の外面は削り状の横位擦過が施されている。胎土に粗石英・長石を多く含む。5は、内面を横位条痕



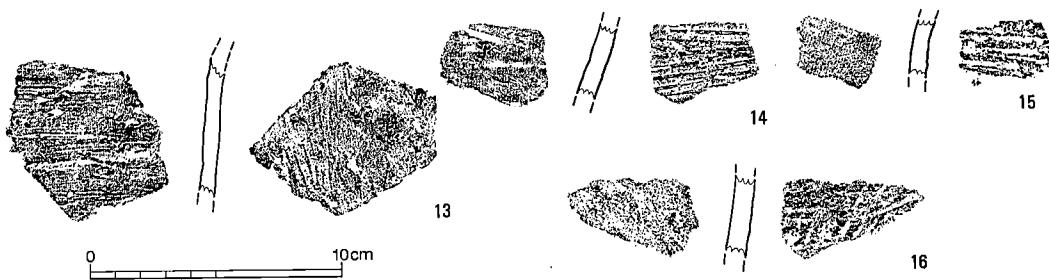
第28図 A47・B1号土壤実測図 (1/40)

の上をナデ、外面は横位アナグラ条痕を施す。

6～10は、粗製深鉢の屈曲部付近である。6は、強くS字状に屈曲する類で、鉢状の器種になるかと思われる。外面には横位条痕が施され、内面は条痕の上をナデている。外面には煤が付



第29図 B1号土壙出土縄文土器実測図（その1）(1/3)



第30図 B1号土壤出土縄文土器実測図（その2）(1/3)

着している。7は、外面中途にわざと段を付けており、口縁部への意識によるものかと思われる。段より下は横位条痕、内面はナデている。8は、屈折部以下の胴部片で、外面の屈折稜より上は横位の板状擦過、以下は横位の雑なアナグラ条痕となる。内面は条痕の上を丁寧にナデしている。外面には煤が付着している。9は、口縁の近くのわずかに肥厚した部分と思われる。外面には横位アナグラ条痕が施され、内面は横方向の擦過がみられる。10は、ゆるやかに屈曲する胴部片で、外面は横位条痕、内面は横方向にナデしている。

11～16は、粗製深鉢胴部片である。11は、上半部分で、外面にはアナグラ条痕を施し、内面は条痕の上をナデしている。胎土に粗砂粒を多く含み、焼成不良で、内面は黒褐色、外面は茶褐色をなす。12は、外面に横位アナグラ条痕を施し、内面は横位擦過がみられる。13は、外面に縦位の条痕を施し、その上からナデしている。内面は横位の板状工具による擦過が施される。14は、外面にアナグラ条痕を残し、内面は条痕の上をナデ消している。15は、外面をアナグラ条痕、内面をナデしている。16は、外面に横・斜位の条痕を一部交叉させている。内面はナデしている。

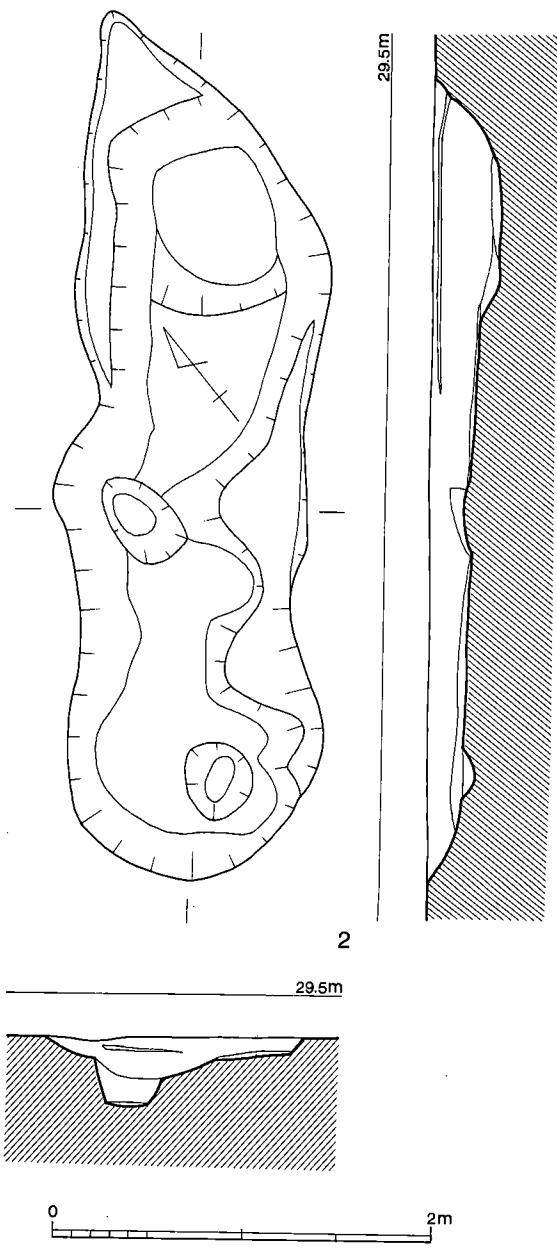
以上のB1号土壤出土の土器は、縄文晚期黒川式期のもので、A37号土壤出土品と比べると、粗製深鉢の口縁形態や、外面調整法に差異がみられ、このB1号土壤出土品の方が古い段階のものであることは明らかである。土壤の形状からみても、黒川式期のものが円形プランをなすことと、次期のものが方形となるという変遷過程からも首肯できる。

B2号土壤（第31図、図版7）

B区の北端近くの西辺に位置する。北東から南西に長い不整形土壤である。全長4.5m、最大幅1.36mである。底面は凹凸が多く、北東端が最も深くなっている、そこは36cmほどある。下端ラインも出入りが激しく、如何にも早期土壤にふさわしい。

出土遺物（第32図）

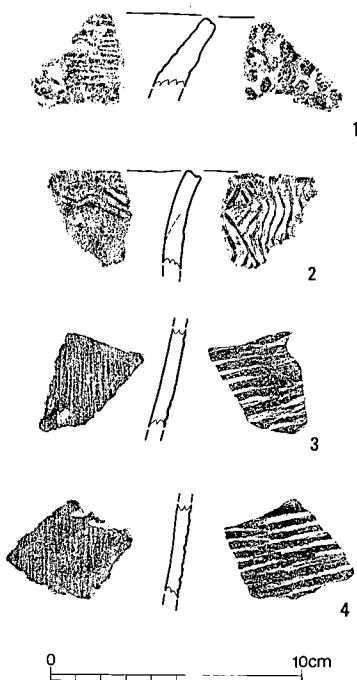
1は、外面に縦位の楕円形押型文を施し、口縁内面上端には、横位の撲糸文と思われる施文がみられる。口縁が短く外に折れるタイプのようである。胎土には、細砂粒が多く、角閃石を



第31図 B2号土壙実測図 (1/40)

金雲母を若干量含む。焼成は良好で、内面は橙褐色、外面は黒色をなす。

以上のB2号土壙出土の土器は、1が押型文単独期の最末期の様相と思われるが、内面に撲糸

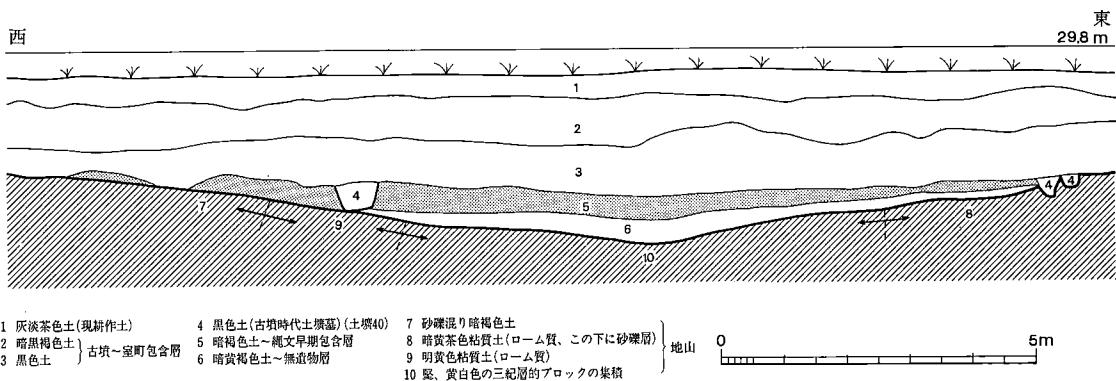


第32図 B2号土壙出土繩文土器
実測図 (1/3)

若干含む。焼成良好で、橙味褐色をなす。

2は、外反する口縁の内面に横位の山形押型文を施し、外面にはくずれた粗大な山形押型文を縦位に施している。内面下半はナデ上げている。胎土に砂粒をやや多く含み、焼成良好で、橙褐色をなす。

3・4は同一個体と思われ、外面には横方向の沈線を入れている。貝殻腹縁による条線の可能性も考えられる。胎土には細砂粒を少量、



第33図 A北端谷縄文早期包含層断面実測図 (1/120)

文を施すなど、異った要素が加わってきている。2は、手向山式系の器形が形成されて、外面に縦位押型文が施される段階のもので、手向山式系統の土器群の中でも古段階のものと考えられる。この押型文だけの手向山器形のものは一つの土器型式として設定できると考える。

A区北端谷包含層（第33図、図版7）

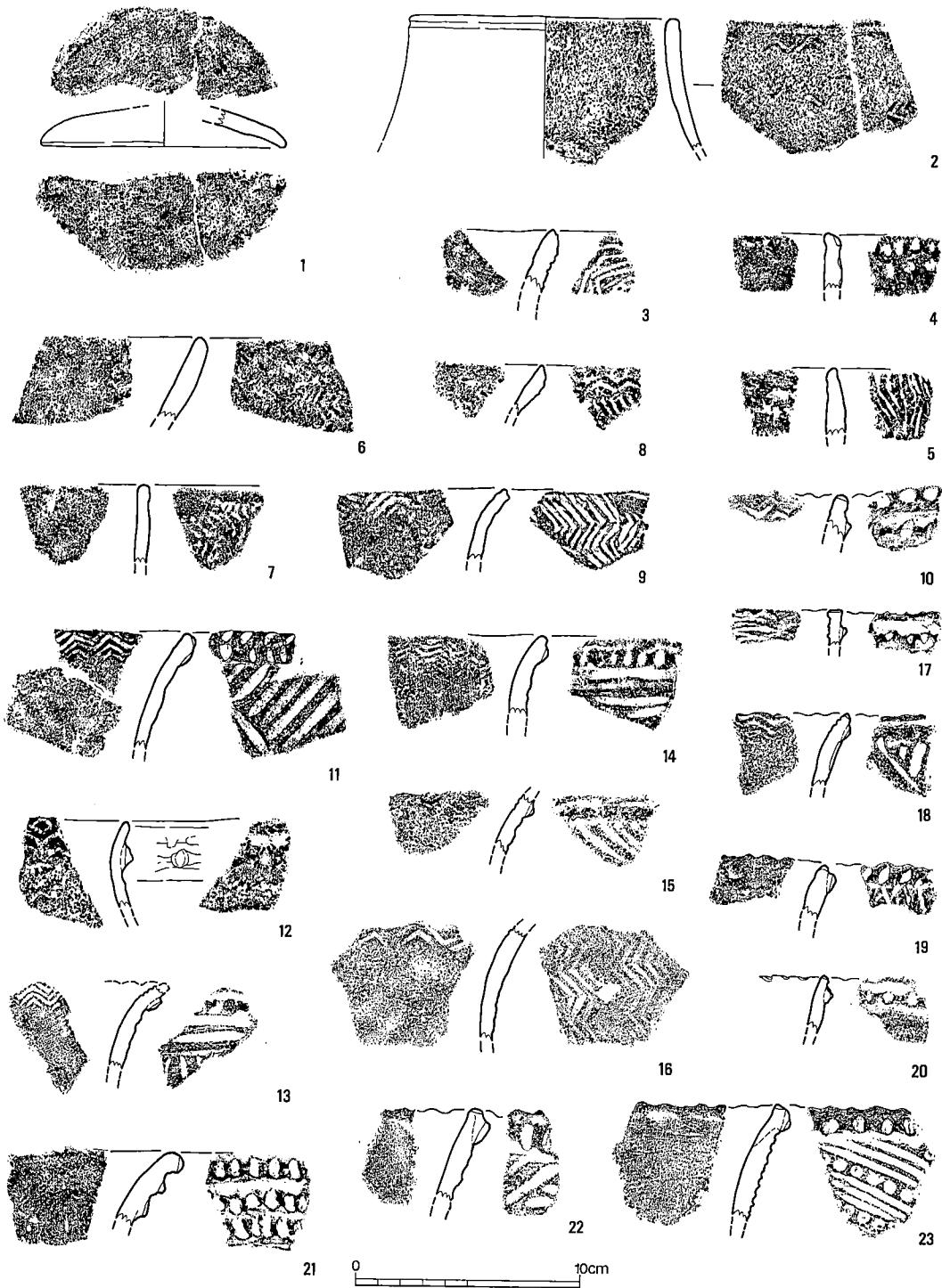
本遺跡の最北端部は、緩傾斜の谷状の地形となり、その谷全体に縄文早期包含層が堆積している。土層断面図に見る如く、現耕作土下に、1.5mほどの厚い黒色土系の古墳～室町期の包含層があり、その下、即ち地表面から1.7～2.0m下に暗褐色土の縄文早期包含層がある。この包含層は、最も厚い部位で45cmほどあり、谷の中心部から南北に離れるに従って薄くなる。南側では、A4号溝あたりまでは確実に層が残っており、本来、もっと広く堆積していたと思われる。もっとも、遺跡中央や南辺の風倒木痕であるA11・12号土壙の横転土層でも厚く確認できるので、当初は遺跡全体にこの縄文早期包含層が存在していたと考えることができる。

ここでは、出土遺物について報告するが、北端谷部より南側沿いの包含層や、遺構検出作業時に出土した近辺のものも含めて記載しておきたい。

出土遺物（第34～38・47～49図）

土器（第34～38図） 1は、無文の蓋形土器と考えられる扁平な異質土器である。口径11cm、器高は1.7cm以上となり、内外面ともにナデている。胎土に小砂粒が多く、赤褐色粒・角閃石を若干含む。焼成良好で、内面は暗褐色、外面は褐色～黒色となる。蓋といえば、弥生前期のものを想起するが、当遺跡では弥生前半期の遺物は1点も出土しておらず、やはり、この北端谷包含層出土の他の土器と同様に縄文時代早期終末と考えざるを得ない。同期の壺形土器が出土しているので、壺の蓋と考えができる。

2は、壺形土器の口頸部で、貴重な資料である。復原口径12cmで、頸部が内傾してわずかに外湾気味に立ち上がる。口縁端部は丸くつくり、外面に1条の沈線を巡らせていている。外面上半



第34図 A北端谷包含層出土縄文土器実測図（その1）(1/3)

には横位山形押型文が、下半には縦位の山形押型文が施されているが、器表が磨滅しているせいか、かすかに見える程度である。内面はナデ上げかと思われる。胎土に細砂粒を多く含み、焼成不良で、黒茶色をなす。口縁全周の1/3しか残存していない。全体の器形は想像もつかないが、底部は第37図107のような小さめの凸レンズ状のものになるかもしれない。

3は、A4号溝に混入していたもので、口縁付近に凸帯や刻目等を付けずに、上端近くまで曲線文を施す類である。沈線文は雑で、具体的な文様構成はわからない。胎土に細砂粒を若干含み、焼成良好で褐色をなす。

4は、刺突文を3段に施す類で、口縁内側がくぼんでいる。凸帯も無しに刺突文だけを施すのは、当遺跡ではこの1点のみである。胎土に小砂粒を若干含み、焼成良好で黄褐色～黒色をなす。

5は、器形は判らないが、外面に細めの沈線を縦に施す類である。雑な施文で、本来の施文具が何かよくわからない。胎土に微砂粒を若干含み、内面は暗褐色、外面は褐色をなす。

6は、単独押型文土器と思われ、全体に磨滅著しいが、外面に縦位の山形押型文を施している。A5号溝の混入品で、胎土に粗砂粒を若干含み、焼成良好で、内面は黄褐色～黒色、外面は黄褐色～橙褐色をなす。

7は、薄手の口縁部で、器形はわからない。外面に縦位の山形押型文を施す。胎土に細砂粒をやや多く含み、内面は灰褐色、外面は褐色をなす。A4号溝への混入品である。

8は、口縁がいくらか肥厚気味となり、その外端面に横位の山形押型文、以下の外面に縦位の山形押型文を施す異類である。内面はナデている。内外面ともに茶褐色をなす。

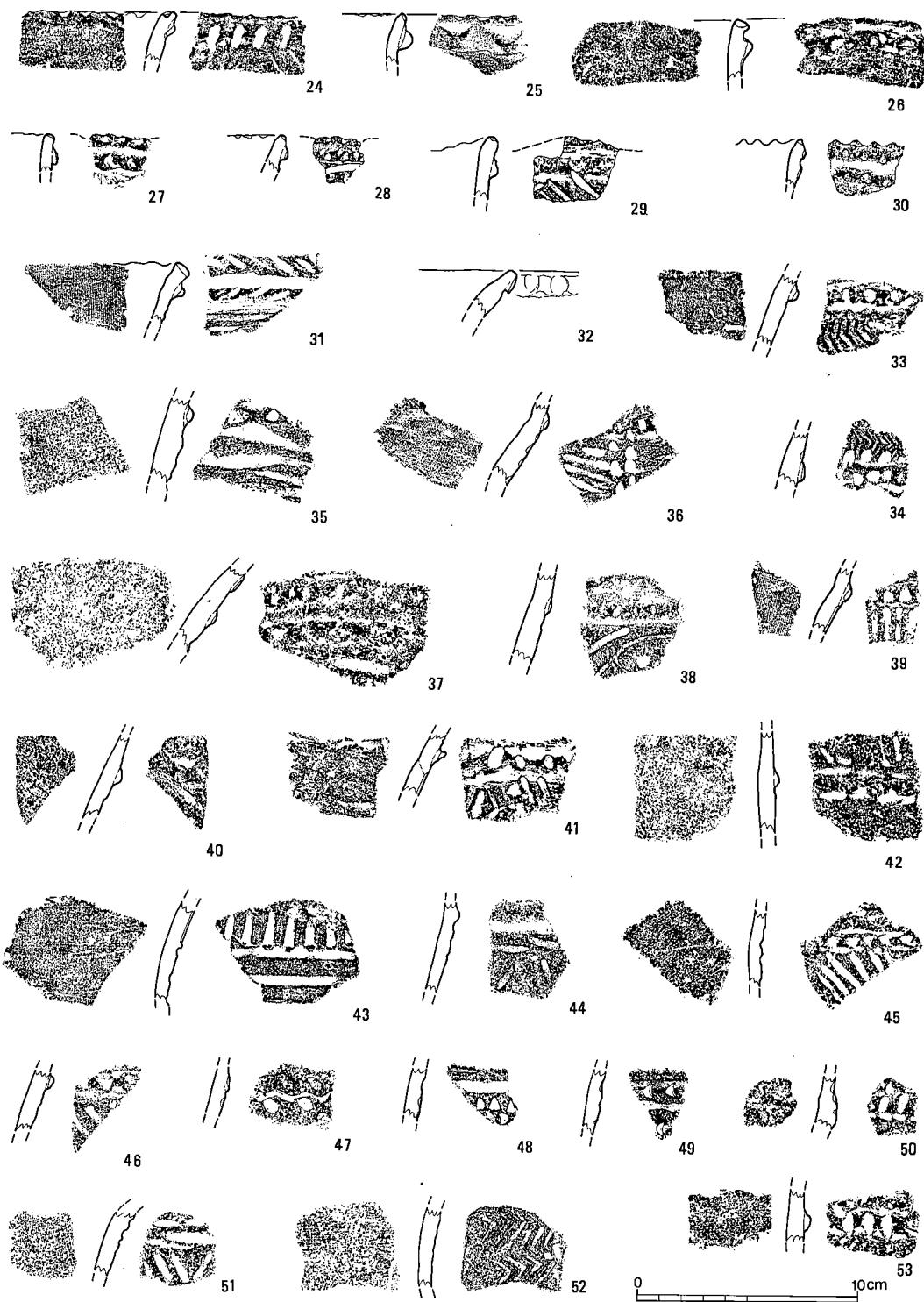
9は、手向山系器形の押型文主施文の型式である。口縁内面上端に横位の山形押型文を施し、外面には縦位山形押型文を施す。胎土に細石英・金雲母を若干含み、灰褐色をなす。A4号溝混入品である。

10は、口縁上端と直下の凸帯上に刻目を施したもので、口縁内面上端に横位山形押型文を付けている。微砂粒を多く含み、内面は橙褐色、外面は黒褐色をなす。

11は、図示したよりももっと外傾し開く。口縁内面上端に横位の山形押型文、口縁上端と直下に刻目を施す。頸部外面には平行凹線による幾何学文が施される。胎土に微砂粒を多く、角閃石を若干含み、焼成不良で、外面は黒～褐色、内面は褐色をなす。A10号住居への混入品。

12は、口縁内面上端に山形押型文を横位に施し、外面の凸帯に指押圧刻目を巡らせていく。図示したよりも、もっと外傾し開く類となろう。内面は磨滅して調整不明。胎土に細砂粒を多く含み、焼成良好で、内面黄橙色、外面は暗茶褐色をなす。

13は、口縁内面上端に横位山形押型文を施し、口縁直下の凸帯には棒押圧の刻目を巡らす。更にその下に3条の凹線を横位に入れた下方に、縦・斜位の沈線文を施している。内面は横位ナデかと思われ、胎土には細雲母・角閃石・長石等を僅かに含む。焼成やや良好で、外面茶褐



第35図 A北端谷包含層出土縄文土器実測図（その2）(1/3)

色、内面は淡褐色～暗茶褐色をなす。

14は、口縁内面上端に横位山形押型文を施し、口縁外面直下の凸帯に刻目を施す。頸部外面には横方向の凹線文を施している。A4号溝への混入品で、焼成良好、内面は淡黄褐色、外面は黄褐色をなす。

15は、口縁上端を欠くが、内面上端に横位山形押型文を施し、頸部外面には斜位の平行沈線がみえる。全体が磨滅著しいせいか、凸帯上の刻目は不明瞭である。細石英・角閃石・長石をかなり含み、焼成不良で、外面は淡黄褐色、内面は黒褐色をなす。

16は、9と同型式で、内面上端と頸部外面に実に粗大な山形押型文を施している。胎土に細雲母・角閃石を多く含む。焼成不良で、外面は暗褐色、内面は淡黄褐色をなす。

17は、口縁内面上端に、非常にくずれた感じの横位山形押型文を施し、口唇部には棒押圧刻目を連続させている。外面の凸帯上には小さめの刻目を施している。胎土に細砂粒、角閃石を若干含み、焼成良好で、内面は明橙褐色、外面は暗褐色をなす。

18は、口唇部と凸帯上に棒押圧の刻目を施し、頸部外面には斜位の凹線文を組み合わせている。内面上端には横位山形押型文を施す。胎土に粗石英粒・角閃石をいくらか含み、焼成不良で、内面黄褐色、外面は暗褐色をなす。

19は、口唇部と直下の凸帯上に刻目を施し、頸部外面には網目状の太めの撚糸文をつける。網目状撚糸文はこの1例だけで稀少な資料である。胎土に小砂粒を若干含み、焼成不良で、暗灰褐色をなす。A17・18号住居埋土混入品。

20は、口唇部と直下の凸帯上に棒押圧の刻目を施している。内面はナデている。外面の文様は不明。胎土に微砂粒が多く、角閃石を若干含む。焼成良好で暗褐色をなす。

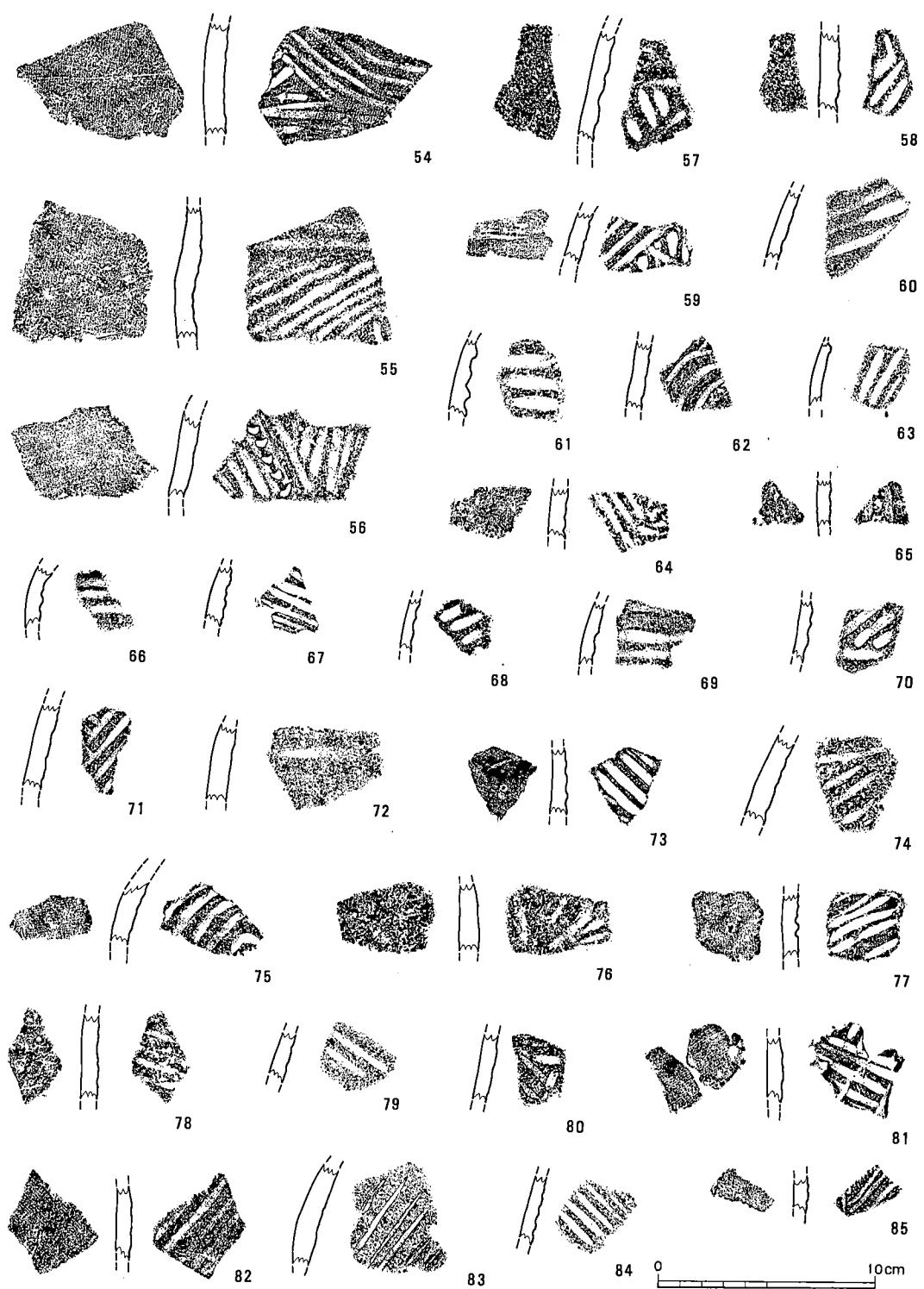
21は、口縁外端を突出させたものを含め、3条の凸帯を接続させ刻目を施したものである。A18号住居への混入品。内面はナデている。胎土に小砂・角閃石・赤褐色粒を若干含む。

22は、口唇部と直下の太い凸帯上に大きな棒押圧の刻目を施し、頸部外面には凹線文を斜交させている。内面上端はわずかにへこみ、内面は丁寧にナデしている。胎土に細石英・角閃石をかなり含み、焼成不良で外面は黒色、内面は淡褐色をなす。

23は、外面上端に接する凸帯の下端と、口唇上面に棒状押圧刻目を施している。外面は、竹管文を斜行させ、その間を3条ずつの凹線で埋めている。内面は横位ナデ。粗石英・長石・細雲母・角閃石をかなり含む。焼成不良で、外面は黒褐色、内面は淡褐～黒褐色をなす。

24は、口縁上端に半裁竹管の刺突文を施し、外面直下に付けられた凸帯の下半に、斜め上からの刺突状の深い刻目を施す。細砂をいくらか含み、焼成やや不良で、内面淡褐色、外面は暗褐色をなす。A-P271出土品である。

25は、口縁上端に押圧状刻目を施し、外面直下の凸帯は指で押さえつけたような、波状の異形凸帯となっている。焼成良好で、明黄褐色をなす。内面は磨滅している。



第36図 A北端谷包含層出土縄文土器実測図（その3）(1/3)

26は、A 3号溝東半出土品で、口縁上面に刺突状の凹点を施している。外面直下の凸帶上には雑な刻目を施す。内面黄褐色、外面は淡褐色～黒色をなす。内面は磨滅している。

27は、A 4号溝出土品で、口縁上端と外面直下の凸帶に刻目を施す。凸帶上の刻目は貝殻腹縁による。細砂粒をやや多く含む。焼成良好で褐色をなす。内面はナデている。

28は、口唇部と直下の凸帶上に刻目を施す。A 4号溝混入品で、外面には横位沈線がみえている。焼成良好で暗褐色をなす。胎土に細砂粒を多く、角閃石を少量含む。

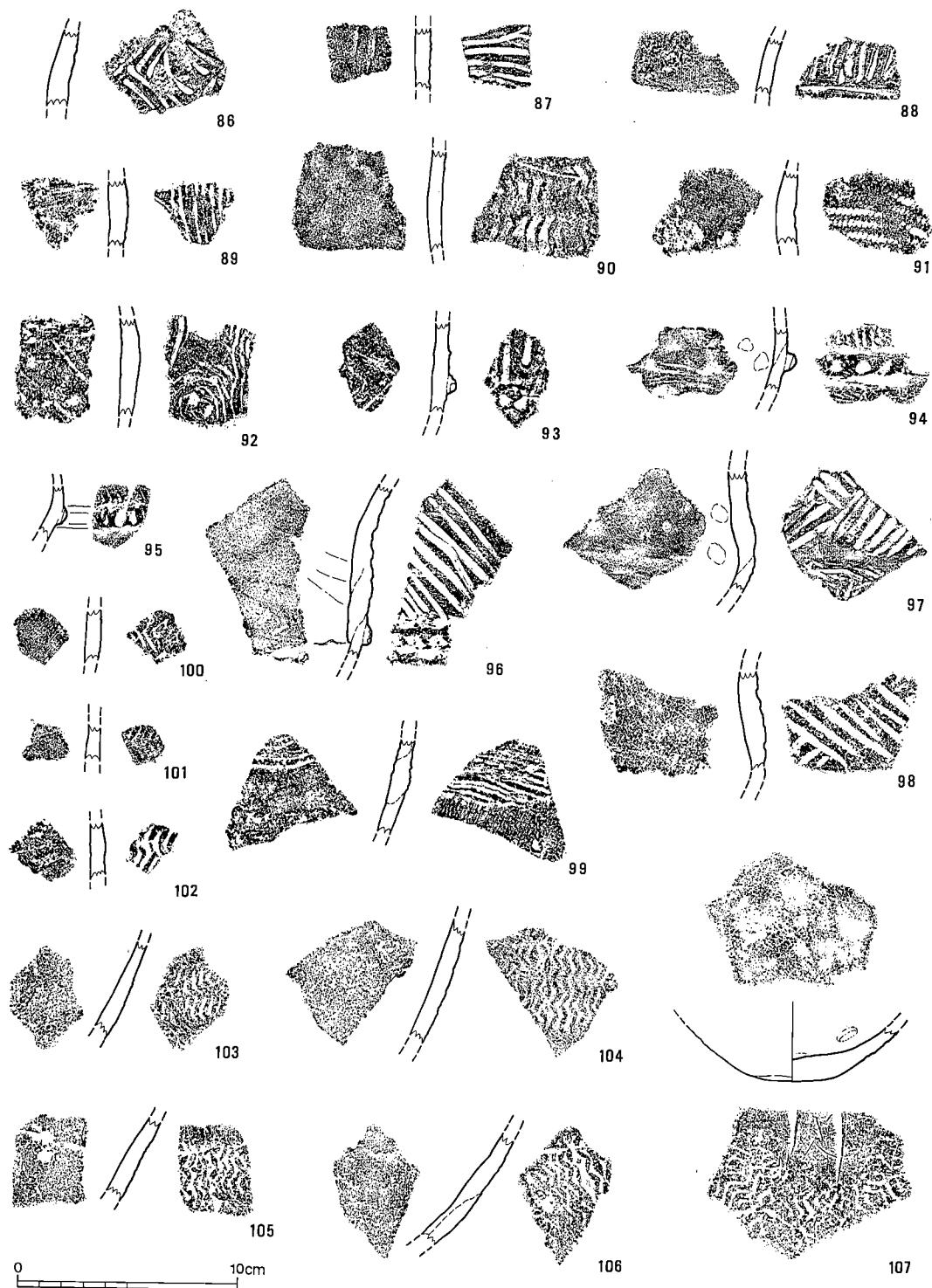
29は、珍しく波状口縁になる類で、上端面に押圧状の刻目を施す。外面の凸帶上の刻目は不明瞭である。頸部外面には斜位の沈線文が施される。焼成良好で黄褐色をなす。

30は、口縁上端と低い2条の凸帶上に浅い押圧刻目を施している。内面は磨滅して調整不明。細砂粒、角閃石をやや多く含み、焼成良好で暗褐色をなす。

31は、口縁上端と外面直下の凸帶上に向きがそれぞれ逆になる斜位の棒押圧刻目を施す。以下の外面には横位凹線文を施し、内面は丁寧にナデている。胎土精良で焼成良好、淡茶褐色をなす。口縁内面上端はへこむ。

32は、口縁外端を肥厚させた部分に太い刻目を施している。他面は磨滅して調整不明。細砂粒を若干含み、焼成良好で橙褐色をなす。

33～53は、凸帶や施文法の位置からみて、頸部上半の口縁部に近いものである。33は、A11号住居跡への混入品で、棒押圧の刻目をもった凸帶の下方に縦位山形押型文を施す。内面は横位擦過調整である。34は、縦位山形押型文の下方に凹点文を横に並ばせ、刻みのある凸帶と接している。内面はナデている。天地逆となって凸帶が上にくる可能性が強い。35は、凸帶上に刺突風の刻目を施し、以下の頸部外面には太い凹線文がみられる。36は、屈曲しながら開く類で、凸帶上には刺突気味の刻目を施す。その下方に縦方向2列に斜め下方へ刺突する連点文を並べている。この左側には横位の平行凹線文が認められる。37は、A 4号溝出土品で、2条の凸帶上には刻目を施す。下端には横位の凹線文がみられる。38は、低い凸帶上に不明瞭であるが刻目が認められ、以下の外面には、曲線文となりそうな沈線文が施されている。内面は横位擦過痕がみられる。39は、下方への刺突状刻目を持つ凸帶の下方に縦位の平行沈線を施している。内面は丁寧なナデ調整。焼成不良で黒色をなす。40は、内外面ともに磨滅しているが、凸帶とその下方に凹線があるらしい。41は、A 9号住居跡への混入品で、棒押圧刻目をもった凸帶下方に、斜位の平行沈線文を粗く施している。内面は横位擦過調整。42は、凸帶下端に刻目を施し、上方には縦位の平行沈線文を施す。内面はナデている。43は、A-P270出土品で、3条の横位凹線の上方に縦位平行凹線を施している。整然とした施法で、内面は横ナデ調整。焼成不良で黒褐色をなす。44は、A 4号溝への混入品で、上端の凸帶状部の下に太い凹線を巡らせ、以下には浅い凹線文を横～斜位に施している。45は、2本の平行線間に刺突文を施し、その下方には平行沈線文を施す。内面はナデ調整。46は、刻目をもつ凸帶下方に斜位の沈線文を施している。



第37図 A北端谷包含層出土縄文土器実測図（その4）(1/3)

内面は縦位ナデ上げ調整。47は、A 4号溝混入品で、中位に山形波状沈線を施し、その上下には楕円形の押点文を施している。内面は横位擦過調整。48は、太い凹線の下に、三角形状の刺突文を施している。49は、横位の平行凹線文の間に、半裁竹管による三日月形刺突文を施している。50は、A 4号溝混入品で、肥厚部上に施された刺突連点文の上方に、縦位の短線状押圧文が平行している。51は、上に横位の凹線を巡らせ、その下に斜位の平行凹線を組み合わせている。52は、頸部外面に縦位山形押型文を施す。53は、棒押圧の大きい刻目を凸带上につけている。上左端には斜位の凹線文がみられる。

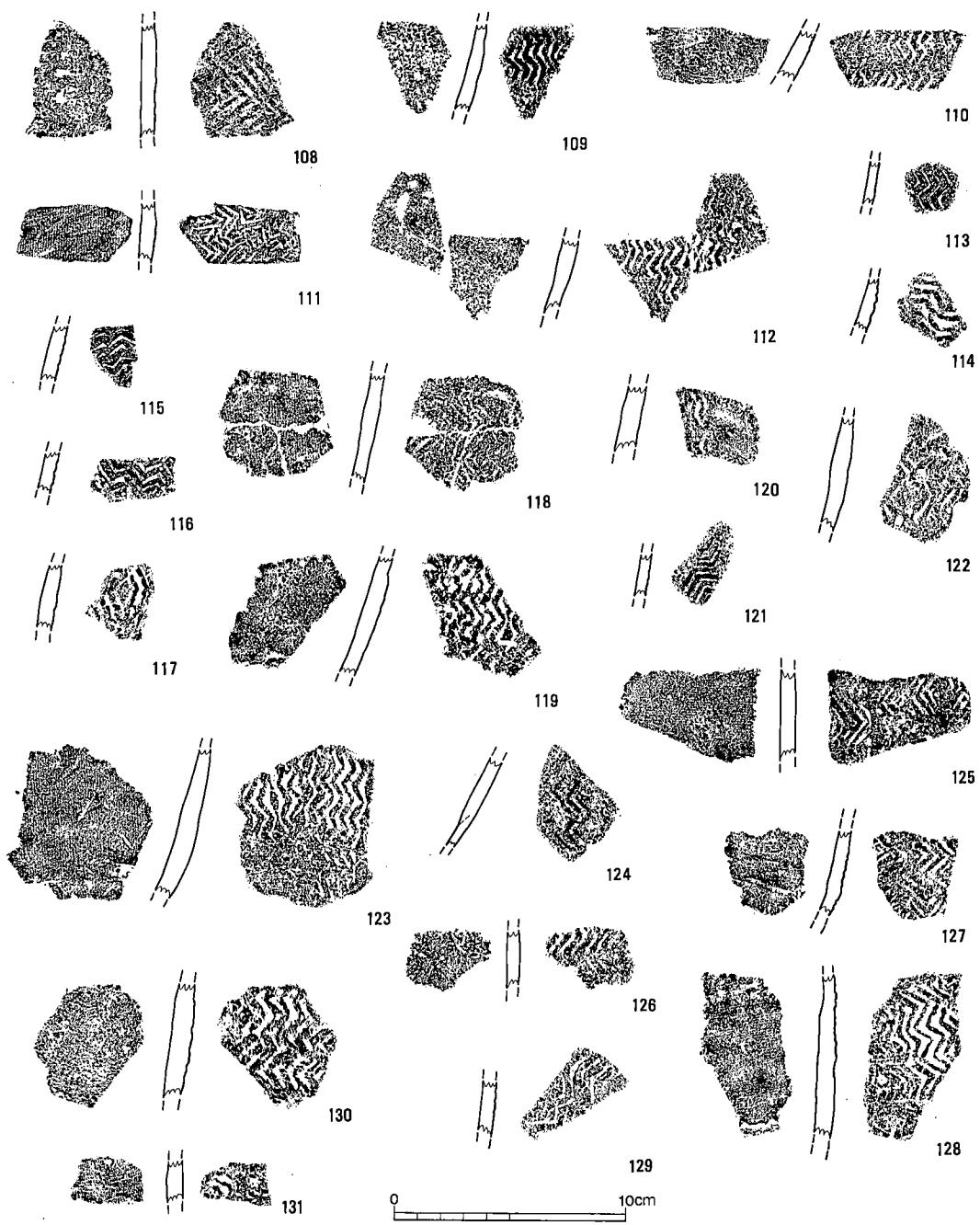
54～89までは、頸部外面に凹線を組み合わせた幾何学文を施す類であるが、若干のバラエティーがある。平行凹線の太・細、刺突文を組み合わせるもの、曲線文となる部分等々である。

54は、A 4号溝混入品で、下方は横位平行凹線文であるが、その上で斜位の平行凹線が交叉する部分となる。55は、上端に2条の太い凹線を巡らせ、その下は斜位平行凹線を施し、幾何学文様を構成する。A 4号溝混入品。56は、斜位平行凹線文中に、半裁竹管刺突文を1条だけ施している。内面は横方向ナデ調整。57は、A 4号溝混入品で、太い凹線文を施す。58もA 4号溝混入品。59・60・61も太い凹線を平行に用いたもの。62は、曲線文となる部分で内面はナデしている。63・64も斜位の平行凹線文部分である。65は、A11号住居跡への混入品で、縦位の凹線文がみられる。66は横位の平行凹線文、67は斜位に施した部分である。68は、A 4号溝混入品で、69・70も太めの凹線文である。71は斜位の平行凹線どうしが交叉する部位で、内面は平滑で丁寧なナデが施されている。72は著しく磨滅している。73は、A18号住居跡への混入品で、74は部厚くA 4号溝への混入品。75は、平行曲線文となる部分で、76はA 4号溝への混入品。77もA 4号溝への混入品。78はA17・18号住居覆土中への混入品で、内面に横位擦過。79・80もやや細めの斜位凹線文で、80は、A 4号溝混入品。81・82も斜位凹線文部分。83～85は細めの沈線を施し、85はA17・18号住居覆土中への混入品である。86・87は斜位の細めの沈線文で、87はA 4号溝への混入品。88・89は浅くて細めの縦位沈線文を施しているが、89はA 4号溝への混入品で、或は胴部下半の撚糸文であるかもしれない。

90～92は、これまでの凹線文を施す頸部片と異り、特殊な施文のものを示す。いずれもA 4号溝への混入品である。90は、粗大な縦位山形押型文を施す頸部片で、91は、外面に繩文が認められ、稀例である。92は、ヘラ先端等の沈線というよりも、撚糸文原体のあて引きによる曲線文部分と考えられる。

93～99は、口頸部下半の屈曲部付近の破片を集めてみた。屈曲部外面に凸帶を付けるものと付けないもの、屈曲部以下に押型文と撚糸文の違いが認められる。はっきりしたのは、「頸部外面に幾何学凹線文を施すもの+屈曲部以下が縦位山形押型文」の組合せの存在が確認されたことである。

93は、A 4号溝混入品で、頸部に縦位の凹線文を施し、屈曲部に円形刺突文を巡らした凸帶を



第38図 A北端谷包含層出土縄文土器実測図（その5）(1/3)

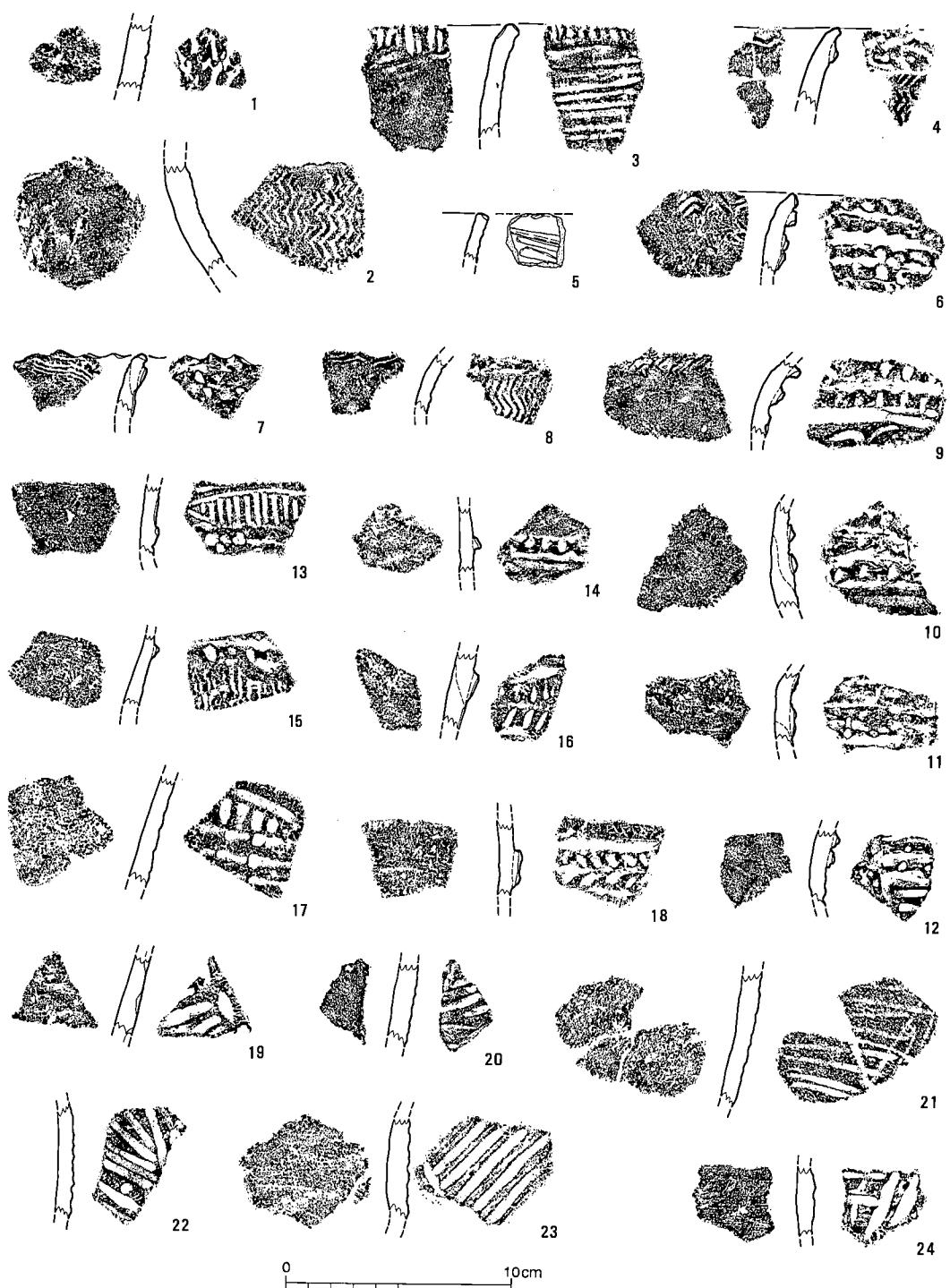
付けたものである。胴下半の施文状況が判断できないのが残念である。94は、縦位の撚糸文を頸部に施文し、屈曲部に斜位の棒押圧刻目を施した凸帯を付ける類である。外面凸帯以下は横

位擦過が認められ、それ以下の施文法が認められないのが残念である。内面は横位擦過の上をナデており、指オサエ痕を残す。胎土に粗石英粒をわずかに含み、焼成やや良好で淡茶色をなす。95は、頸部外面に縦位山形押型文を施し、屈曲部外面に刻目凸帯を付ける類であるが凸帯以下の施文法が判らない。96は、頸部外面に斜位平行沈線文を施し、屈曲部外面に、本来竹管文かと思われる、ぐちゃっとした刺突刻目を施した凸帯を付ける類である。凸帯以下の施文法が判らないのが残念であるが、この1点で、屈曲部の接合法、粘土紐積み上げの技法が理解できて、貴重な資料となった。内面は横位の強い指ナデで、上半は斜位のナデ上げが認められる。胎土に粗石英粒をわずかと、細雲母・角閃石をいくらか含む。焼成不良で黒褐色をなす。97は、これまた屈曲部を挟んで上下の文様構成が判る貴重な資料である。頸部外面に平行凹線による幾何学文の構成をみせ、屈曲部外面には凸帯を付けず、以下に縦位の山形押型文を施している。内面は指頭圧痕を残しながら横位ナデが施される。胎土に雲母・角閃石の微細粒を多く含みながらも、全体としては非常に胎土精良の感が強い。焼成やや不良で外面は淡茶褐色、内面は暗灰褐色をなす。極端に言えば、この1点で、以下に多量に図示する胴下半部の縦位山形押型文の位置付けが説明される根拠となっている。手向山式土器典型と考える、この文様構成の根拠がすべてこの1点にかかっているのである。大切にしたい1点である。98は、頸部下位の屈曲部へとつながる典型例である。斜交凹線文の外面で、内面は横位擦過の上をナデていると考えられる。粗石英粒をかなり含み、焼成不良で外面は灰黒色、内面は淡褐色をなす。99は、非常に特異・稀少例で、ゆるやかな屈曲部外面に細帯状に撚糸文を横位回転（結果的には斜行）させ、それ以上を横位擦過、それ以下をカキ上げ風縦位擦過の上から縦位撚糸文を間隔おいて施している。屈曲部内面の上位には横位条痕がみられ、下位には丁寧な横ナデが施されている。屈曲部外面の横位撚糸文帶の凸帯的意識と言い、内面上半の条痕と言い、この時期だからこそなのかなと、うんとうならざるを得ない1品である。

100～131は、胴部下半の粗大な縦位山形押型文施文部片である。内面は丁寧なナデ調整のものが多い。うち102・108・116・119・123・125は、A4号溝への混入品である。また、126・131は、A11号住居跡への混入品。130はA9号住居跡への混入品。127はA-P194出土。128はA-P273出土品である。ここでは、特色あるものだけを取捨させていただいて報告しておきたい。

107は、壺形土器の小さな凸レンズ状底部であるが、その境は明確でない。外面には縦位の山形押型文を施し、内面はナデしており、指頭圧痕が多くみられる。底外面はナデしている。胎土に細石英・角閃石をかなり含み、焼成やや良好で、内面は淡黄褐色、外面は暗褐色をなす。108は極めて粗大な山形押型文である。111は縦位と斜位の押型文が交錯している部位である。117はカーブの具合から、頸部片と思われる。

石器（第47～49図）3は、サヌカイト製打製石鏃で、裏面に主要剥離面を大きく残している。縦長剥片を使用しており、全体にかなり雑な整形・調整であり、作製中途で放棄されたものと



第39図 A各ピット出土縄文土器実測図（その1）(1/3)

思われる。現存長2.4cm、幅1.7cm、厚さ0.55cmで、表面は風化が進んでいる。

9は、サヌカイト製横型石匙で、表面の風化がかなり進み、古色然としている。A4号溝への混入品で、下辺幅4.5cm、高さ3.2cm、厚さ7mmとなる。横長剝片を使用しており、裏面には主要剝離面を大きく残す。表裏ともに調整剝離は雑であるが、全体の整形はうまい。下縁辺は使用摩耗のためか、剝離状況が不鮮明となっている。

10は、上端のつまみ部分が欠損した石匙と考えたが、異質さが目立ち、疑問が残る。中央が部厚いサヌカイト製で、裏面には大きく自然面を残す。全体に、調整はサヌカイトにしては極めて細かい。上端はつまみを意識して、抉りを入れている。あまり風化していない。

16は、サヌカイト製の使用剝片に近いスクレイパーで、高さ3.6cm、幅3.7cm、厚さ8mmの縦長状剝片の縁辺に使用刃こぼれがみられるものである。横向きに図示したのは、裏面右上肩部分に抉りを意識した加工が施されているからで、上端を撮部分としていたと考えるからである。刃部調整は、簡単なものである。

21は、縦縞が入る良質の黒曜石の大形縦長剝片である。打面と下端、右側面が自然面で、原石の大きさが想像できる。長さ9.1cm、幅2.8cmで、明らかに左側縁は使用されて刃こぼれがみられる。表面がかなり風化しており、旧石器と考えてもおかしくない。

26は、サヌカイト製大型使用剝片で、高さ6.7cm、幅8.9cm、厚さ1.9cmのやや横長の剝片の縁辺を使用したものである。調整リタッチはみられず、刃こぼれがいくらかみられる。打面は自然面のままである。

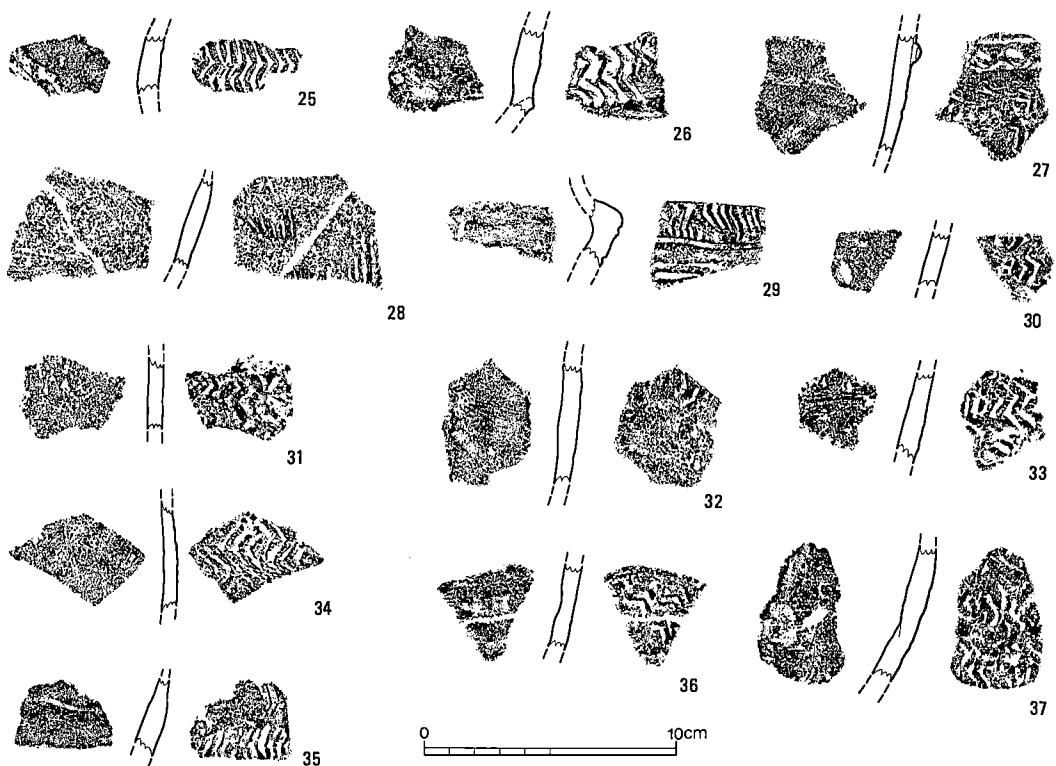
この他に、サヌカイト原石2点が出土している。ひとつは、全面自然粗面で、長さ11.5cm、厚さ4cm、幅7cm、重さ323gのもの、他のひとつは、板状の半折品で、ほとんど自然粗面となっており、長さ6cm、幅5.5cm、厚さ2cm、重さ82gである。両者ともにあまり大きいものではなく、持ち運びにも手頃で、原石の移動の良い資料となろう。

以上のA北端谷包含層からの出土品は、押型文単純段階を含まず、その大半が手向山式土器と考えてよい。ただ、あらゆる要素、撫糸文・刺突文・半裁竹管文・貝殻条痕・縄文・凹線文などの組み合わせが少數例ではあるが認められる。これらすべてが出土資料の中で手向山式土器の中に包括されてしまうのか、確定できない部分も多い。後章にて考察してみたい。

石器については、縄文早期末という限定された土器に伴っていることから、貴重な資料と考えられる。特色としては、サヌカイト製品が多いこと、抉りを入れようと意図した、石匙的使用が考えられるスクレイパーがみされることなどである。

その他の遺構混入の縄文時代遺物

A区各ピット出土土器（第39～42図） 1は、A21号土壙への混入品で、縦位の橢円形押型文土器で、手向山式土器に伴うものではなかろう。本遺跡ではA12・28号土壙から出土しており、こ



第40図 A各ピット出土縄文土器実測図（その2）(1/3)

のA21号土壙例を加えて、A区の最南端部のみから出土していることがわかる。

2は、壺形土器になると思われ、外面には縦位の山形押型文を施している。その上端部分では、押型文の上から横方向のナデが施されている。P225出土品で、内面は丁寧な横ナデを施す。焼成不良で淡褐色をなす。

3は、P185出土品で、口唇部と口縁内面上端に短線刻目を施し、頸部外面には条痕文と思われる平行沈線の上から縦位の刺突連点文1条を施すものである。既に報告したA42号土壙出土品（第27図1）と同一個体と思われる。P185はA42号土壙を切っている遺構で、本来この土器もA42号土壙のものと考えられる。胎土に細砂粒を多く含み、焼成不良で内面は暗灰褐色、外面は淡黄褐色をなす。口縁の開きは図示した程度である。

4は、口縁内面上端に横位の山形押型文を施し、外面直下の凸帶上には刺突状刻目を巡らせる。頸部外面には縦位の山形押型文を施す。口縁直下の凸帶と頸部外面の押型文の組み合わせが明確なものは少なく、貴重な例である。本来は図示したよりももっと外傾するであろう。P225出土品。

5は、A8号土壙混入品で、口縁外面直下に凸帶を持たず、そのまま沈線が施されている異類

である。口縁外端に刻目を施し、内面はナデかと思われる。他の手向山式土器に比べ、薄手で、口縁のカーブも殆ど無く、趣を異にしており、曾畠系統のものとかと考えられる。

6は、P229出土品で、口縁内面上端に横位山形押型文、口唇外端と直下の3条の凸帯に刻目を施す類である。

7は、A15号土壙への混入品で、口縁内面上端に横位の撚糸文を施し、口唇部と凸帯上には斜位の鉛筆大の棒押圧刻目が巡らされる。凸帯以下には凹線が斜位に施文されている。胎土に細砂粒をいくらか含み、焼成不良で内面は薄褐色、外面は黒褐色をなす。

8は、P237出土品で、口縁内面上端に横位山形押型文を、頸部外面には縦位の山形押型文を施す。口縁直下に凸帯を持つものと思われ、上述の4と同類で、稀少な例である。

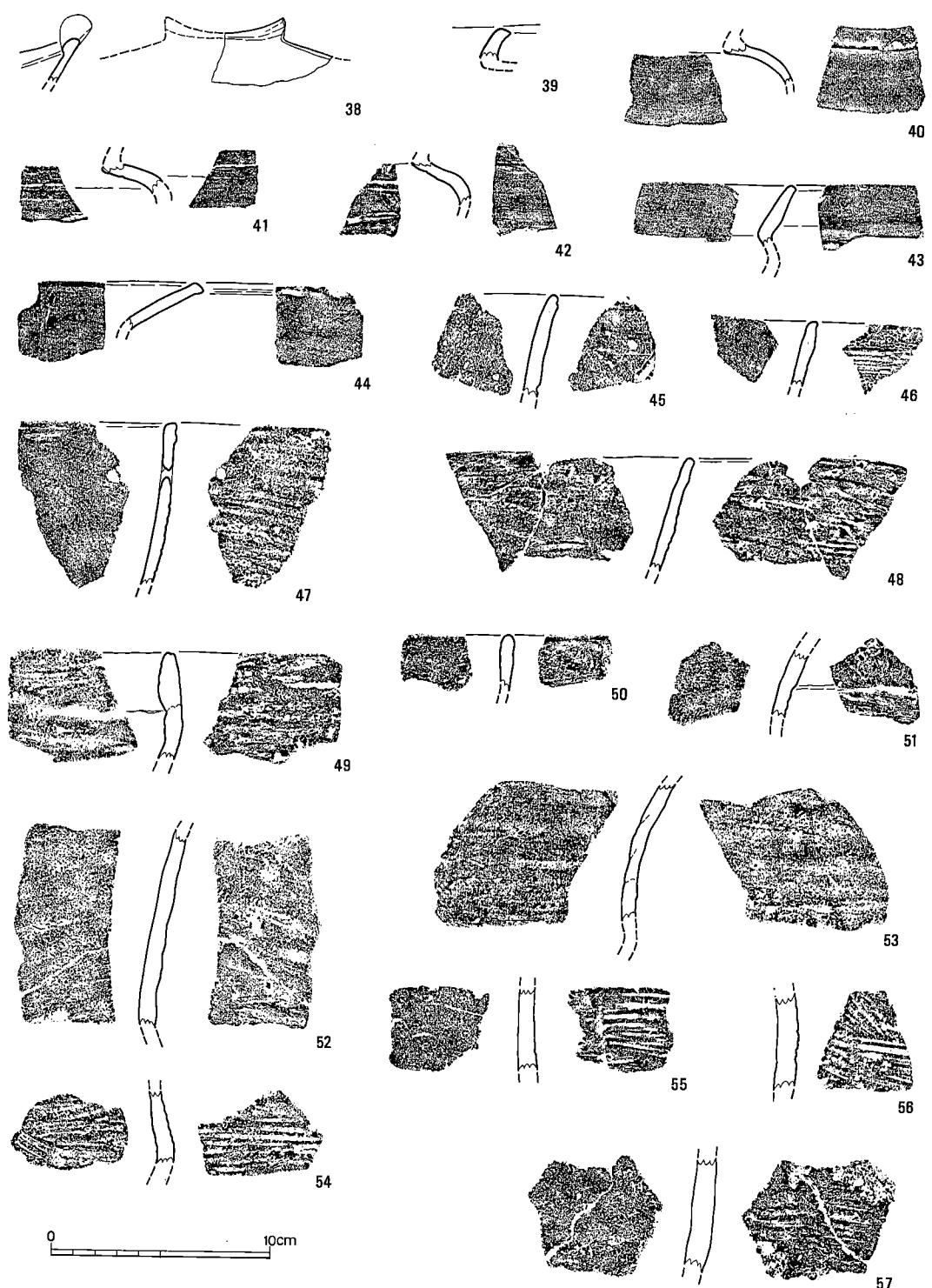
9は、A15号住居跡への混入品で、口縁内面上端に珍しい縦位の山形押型文を施し、外面の2条の凸帯上には棒押圧の刻目がみられる。頸部外面には、凹線文による曲線文様が施されている。内面は丁寧なナデ調整である。

10は、P185出土品で、2条の凸帯上に刻目を施している。11はP19出土品で、2条の低い凸帯上に棒押圧刻目を施し、内面は横ナデである。12は、A5号住居跡混入品で、2条の刻目凸帯下方に横位平行凹線文がみられる。13は、A4号住居跡混入品で、細めの凹線で、縦平行線を曲線で囲むように施文し、凸帯上には凹点を3個並べた装飾がみられる。内面は丁寧なナデ調整。珍しい文様構成である。14は、P35出土品で、天地逆転してくびれ部の凸帯となる可能性もある。凸帯より上はナデている。15は、A34号土壙への混入品で、刻目凸帯以下の頸部外面に縦位撚糸文を施す稀少例である。内面は横位ナデ調整。16は、A16号土壙への混入品で、幅広い凸帯に棒押圧刻目を施し、その下方には斜位凹線文を施している。天地逆転して屈曲部の幅広い凸帯となる可能性もある。17は、頸部外面に、右方向への押し引きによる太い凹線文を施すもので、当遺跡出土例では、この1点のみである。A29号土壙への混入品。18は、A6号溝(A1号方形周溝墓)への混入品で、屈曲部外面と思われる部位に低く幅広い凸帯を付け、中央をへこませて有軸羽状様の刻目を施す稀少例である。

19~24は、頸部外面に凹線による幾何学文を施す類である。19は、A31号土壙への混入品で、長楕円形凹点を斜位に連続させている。内面は横位擦過。20は、浅めの凹線文を施し、胎土精良で、A31号土壙への混入品である。21は、細めの凹線を雑に施した類で、P228出土品である。22は、A1号住居跡への混入品で、凹線文間に円形刺突文が施されている。内面は斜位の擦過調整。23は、P231出土品で、内面は横位の擦過が施される。24は、P102出土品で、内面は横ナデ調整となっている。

25・26は、頸部外面に粗大な縦位山形押型文を施すものである。25は、P214出土品で、内面は横方向のナデを施す。26は、P203出土品で、内面は雑なナデ調整。

27~37は、屈曲部以下の下半部片である。27は、凸帯上に刺突文を連続させ、外面は縦位山



第41図 A各ピット出土縄文土器実測図（その3）(1/3)

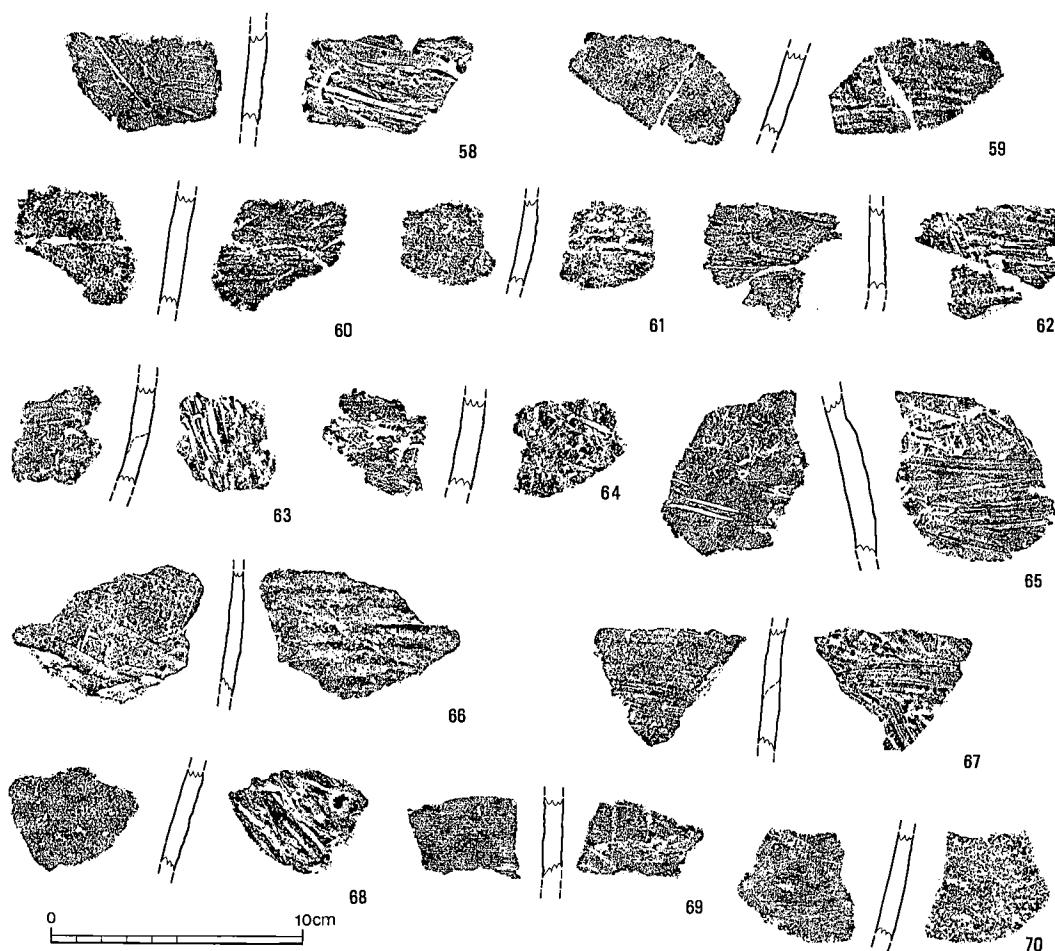
形押型文を施す。内面は丁寧なナデ調整で、P194出土品である。28は、A36号土壙への混入品で、外面に縦位の撚糸文を施している。29は、P105出土品で、屈曲部外面に縦位の山形押型文を施し、その下に沈線を横走させている。天地逆になるかもしれない。30は、A34号土壙への混入品で、縦位山形押型文を施している。31は、P254出土品で、内面は斜めナデ調整。32は、P161出土品で、外面は縦位山形押型文、内面は横ナデ調整である。33は、P250出土品で、内面は横位の粗い擦過痕がみられる。34は、A15号住居跡混入品で、内面は丁寧な横ナデ調整。35は、P254出土品で、36はA16号土壙への混入品。37はA41号土壙への混入品で、縦位の山形押型文の上をナデ消している。内面は粗い横ナデで、指頭圧痕が残る。胎土に細砂・角閃石をやや多く含む。焼成不良で、内面は暗褐色、外面は淡褐色をなす。

38～70は、縄文晚期の土器である。

38～44は、黒色磨研浅鉢形土器で、晩期黒川式土器に該当する。38は、A1号住居跡への混入品で、波状口縁の突起部にリボンを付けたもので、胎土精良で黒～褐色をなす。突起部分と内面は横ヘラ磨き、外面は縦ヘラ磨きが施される。マリ状の器形になるかもしれない。39は、P52出土品で、接合面で剝げている。内外面横ナデを施している。40は、A43号土壙への混入品で、胴部が丸く張る類となる。口縁部が接合面できれいに剝げている。内外面とも横ヘラ磨きで、黒～暗褐色をなす。41は、P151出土品で、外面は横ヘラ磨き、内面は横位擦過状をなす。胎土精良で、外面はこげ茶色、内面は暗灰褐色をなす。これも口縁が接合面で剝げている。42は、P264出土品で、外面横ヘラ磨き、内面は横位ナデ調整。胎土精良で、内面は灰褐色、外面は黒褐色をなす。これも口縁が接合面でとれてしまっている。43は、P151出土品で、胎土精良で、内外面とも横ヘラ磨きである。44は、A9号土壙への混入品で、胎土精良で、内外面横ヘラ磨きを施している。暗灰色をなす。

45～47は、半精製的な、特殊器形のものである。45は、P48出土品で、口縁外面直下に浅く細めの沈線を巡らせ、その下方に太い沈線を斜めに入れている。内外面ともに横位擦過痕がみられ、胎土に粗砂を若干含む。太沈線がどういう文様を構成するのか全く見当がつかないが、特殊な鉢形となるのであろうか。46は、P48出土品で、外面にはアナグラ条痕、内面は横位ナデを施す。薄手で、胎土もわりと精良である。外面には煤が付着している。小型の鉢状となるかと思われる。47は、P206出土品で、外面はヘナタリ条痕で、一見粗製土器のようにみえるが、内面は斜・横位のヘラ磨きが施されている。胎土に細砂粒を若干含み、黒～褐色をなす。補修孔が1ヶ所みられる。

48～51は、粗製深鉢口縁及びその近くの部分である。48は、P254出土品で、外面はヘナタリ条痕の上を横ナデしている。内面は条痕の上をナデ消している。49は、P151出土品で、やや内傾する口縁となる。外面は雑な横位擦過、内面は横位条痕の上を横位擦過を施す。50は、P141出土品で、外面は雑な横ナデ、内面は横ナデを施す。51は、P214出土品で、口縁外面をわずか



第42図 A各ピット出土縄文土器実測図（その4）(1/3)

に肥厚させた類である。外面の肥厚部分はナデ、その下方は横位条痕、内面は横位条痕をナデ消している。黒川式より遡る可能性もある。

52～54は、胴部上半で屈曲部に近い部分のものである。52は、P206出土品で、外面は横方向の雜な指ナデ調整で、内面はナデている。53は、A 8号土壤への混入品で、外面は粗雑なナデ、内面は条痕の上を荒い横ナデを施している。54は、P48出土品で、外面は横位アナグラ条痕、内面は横位条痕の上をナデている。

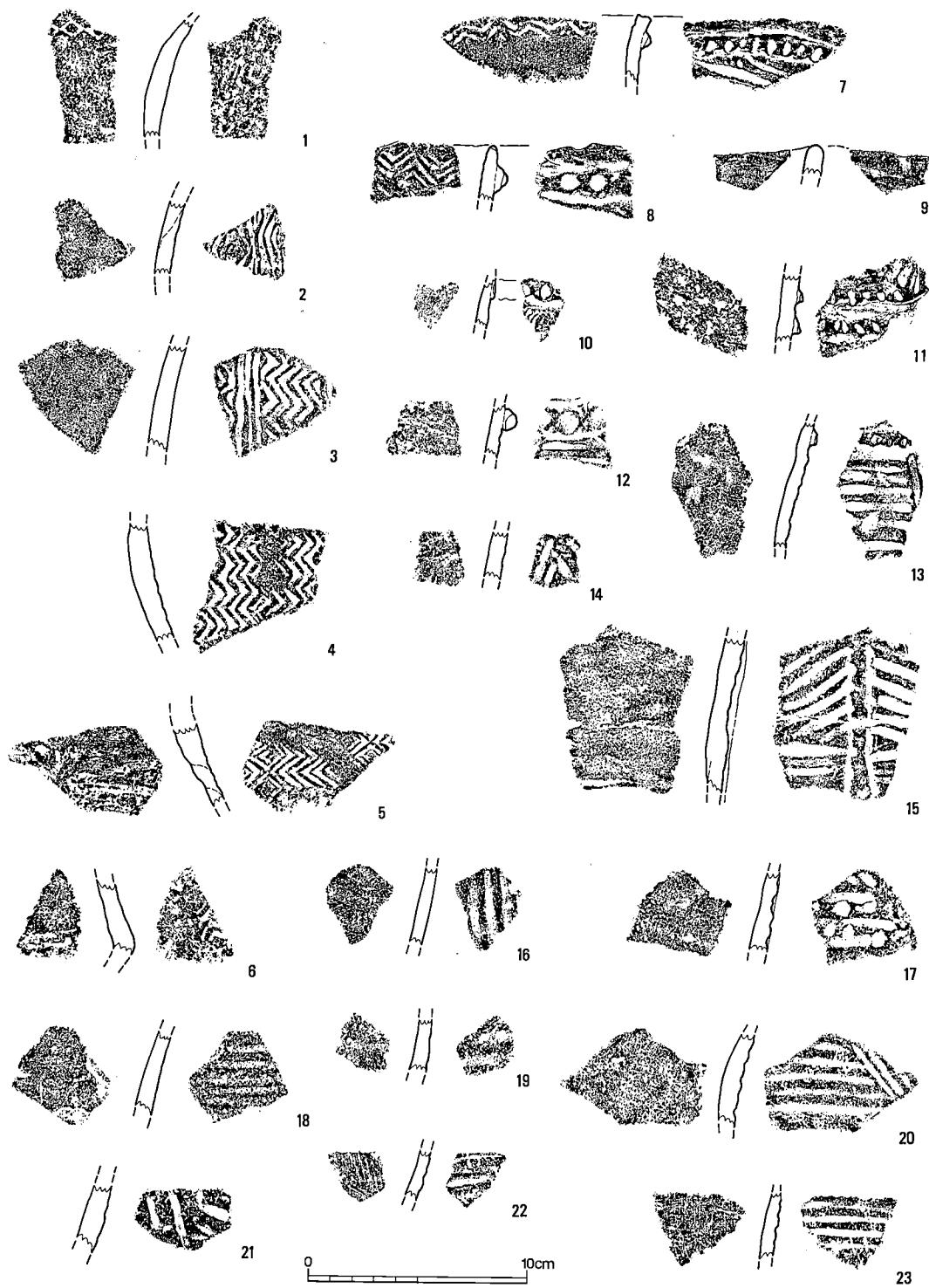
55～63・65は、粗製深鉢胴部片のうち、貝殻条痕を施す類である。55は、P208出土品で、外面はアナグラ条痕、内面は横ナデ調整である。56は、A 1号住居跡への混入品で、外面はアナグラ条痕、内面は横位アナグラ条痕の上をナデ消している。57は、P185出土品で、内面は横ナデ、外面はアナグラ条痕を施す。58は、A 6号溝(A 1号方形周溝墓)への混入品で、外面は雜

な条痕、内面は板による擦過痕がみられる。59は、P254出土品で、外面はアナグラ条痕、内面は丁寧なナデである。60は、A2号土壙への混入品で、外面は条痕、内面は横ナデかと思われる。61は、A29号土壙への混入品で、外面は粗雑な横位条痕、内面は横ナデを施す。62は、P51出土品で、内外面ともにヘナタリ条痕を施す。63は、A19号土壙への混入品で、外面は斜～縦の条痕で、内面は横ナデを施す。65は、P254出土品で、外面はヘナタリ条痕、内面はナデかと思われる。

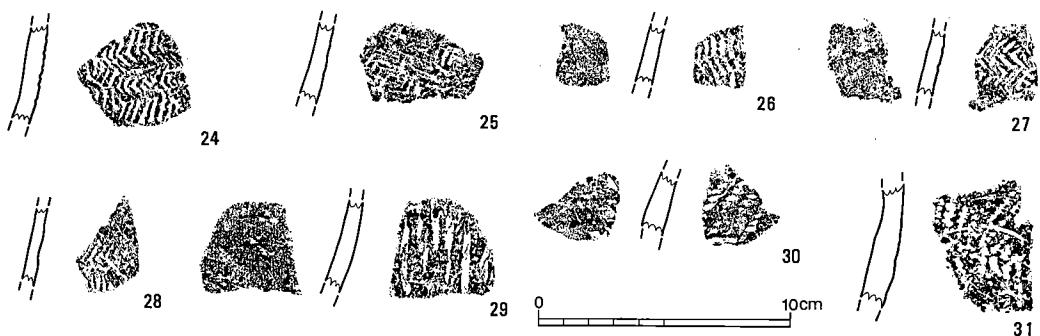
64・66～70は、外面に条痕以外の雑な調整を施した粗製深鉢胴部である。64は、A19号土壙への混入品で、外面は粗雑なナデ、内面は横ナデを施している。66は、P81出土品で、外面は横位板ナデの上を粗いナデ、内面はやや斜位の板ナデを施している。外面には煤がこびりついている。67は、P35出土品で、外面は粗雑な横～斜位の擦過、内面は横位条痕の上を擦過。68は、P52出土品で、外面は未調整風の粗いヘラナデ状をなし、内面は丁寧にナデている。69は、P51出土品で、外面は雑なナデ、内面は横ナデを施す。外面には煤が付着している。70は、A16号土壙への混入品で、外面は横位擦過の上をナデ、内面は横ナデを施している。

B区各ピット出土土器（第43～46図） 1～6は頸部外面に山形押型文を施す手向山式土器である。1は、P93出土品で、口縁内面上端に菱形状の横位押型文を施し、外面にはかなり磨滅しているが縦位の山形押型文が認められる。2は、B1号土壙への混入品で、外面には粗大な変形した縦位山形押型文を施す。内面は丁寧なナデ。3は、B2号住居跡への混入品で、外面には粗大な、中途が直線状となる部分を持つ縦位山形押型文を施す。内面は丁寧な横ナデ調整。4は、B7号住居跡への混入品で、壺形土器となる。外面には縦位の山形押型文。内面は横ナデ調整が施され、胎土に細砂粒・角閃石を多く含む。焼成良好で薄橙褐色をなす。5は、B1号方形周溝墓の北辺周溝内への混入品で、壺形土器である。外面は縦位の山形押型文、内面上半は横ナデ、下半は横位の強い雑な指ナデが施されている。胎土に細砂・角閃石を多く含み、焼成良好で暗茶褐色をなす。6は、P105出土品で、屈曲部分片で外面に横位山形押型文が施される。内面は粗い横ナデ調整である。

7～13は、9を除いて手向山式土器の口縁及びその直下の刻目凸帯付近である。7は、B6号溝への混入品で、口縁内面上端から口唇上面まで横位の山形押型文を施した稀例である。内面はナデ、凸帯下の外面は斜位凹線文を施す。胎土に微砂粒をやや多く、角閃石を少し含む。焼成不良で、暗黄褐色をなす。8は、B7号住居跡への混入品で、口縁内面上端に横位山形押型文を施し、口唇部には棒を斜位に押圧している。外面の凸帯上にも棒押圧の刻目が施される。9は、B区南半の覆土中出土品で、波状口縁になると思われる。内外面ともにナデしており、拓本外面の口縁部が薄く縦長に見えている部分は、へこんで薄手になっている。時期・型式が異なるものと思われる。10は、B1号土壙への混入品で、刻目凸帯の下方は縦位山形押型文かと思われる。



第43図 B各ピット出土縄文土器実測図（その1）(1/3)



第44図 B各ピット出土縄文土器実測図（その2）(1/3)

る。内面はナデている。11は、刻目凸帯2条の部分で、その上には雑な沈線がみられる。B区南半の覆土中出土品で、凸帯は曲線的にまがっている。12は、B3号住居跡への混入品で、丸い押圧刻目を施す凸帯の下方には横位沈線文がみられる。内面は横位擦過。13は、B区南半覆土中出土品で、刻目凸帯の下方に横・斜位の凹線による幾何学文を施している。

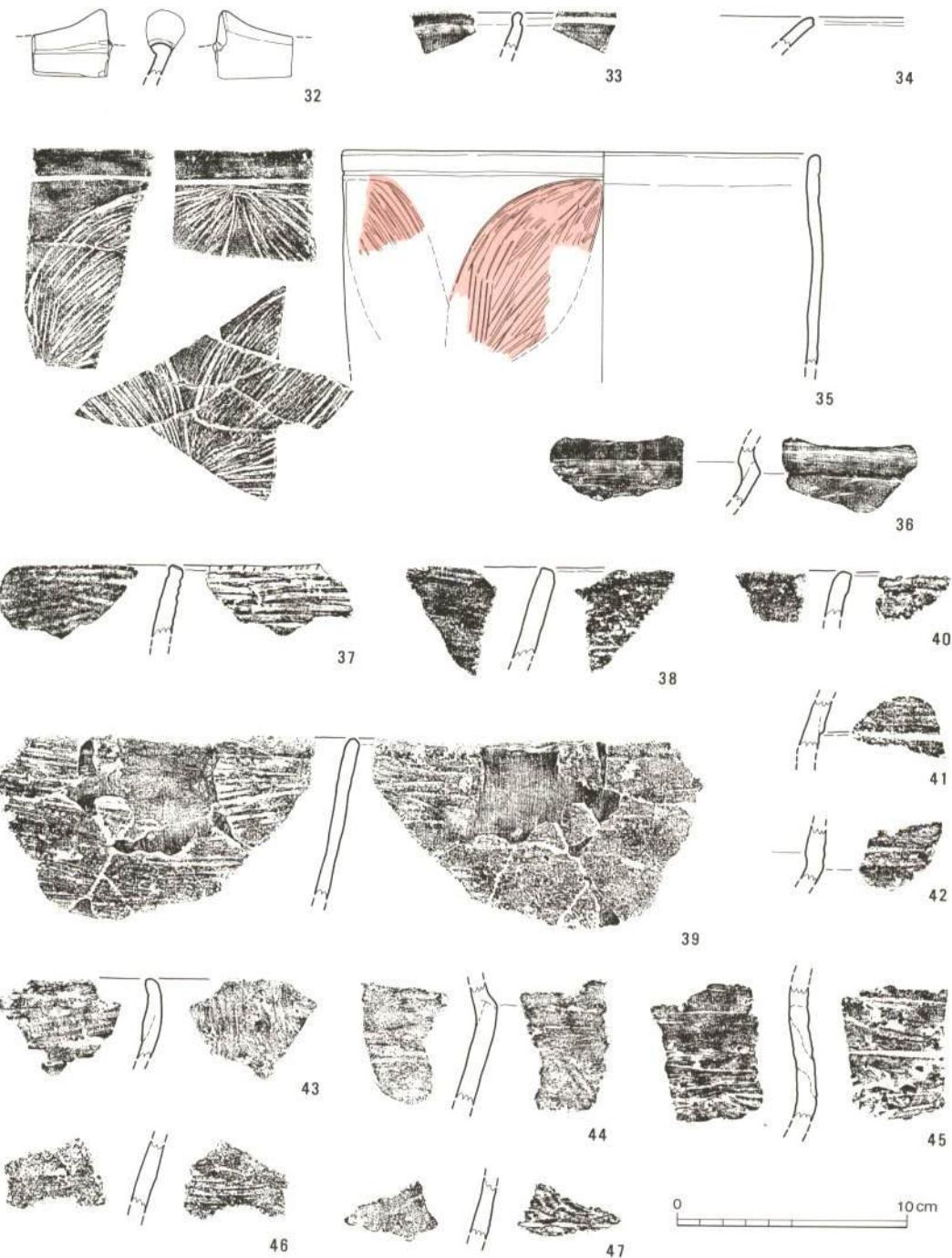
14~23は、手向山式土器の頸部外面に凹線文による幾何学文様を施す類である。各々バラエティーに富む。14は、B4号住居跡への混入品で、斜位の凹線を組み合わせる。15は、中央に縦位の凸帯を付け、それから左右対称に平行凹線を展開させている。内面は横ナデ、胎土に細砂・角閃石を多く含み、焼成良好で淡黄褐色をなす。B4号住居跡への混入品。16は、B12号土壙への混入品で、外面は縦位の平行凹線文、内面は磨滅している。17は、B区南半の覆土中出土品で、外面には横位平行凹線の間に刺突文を並べている。内面はナデ調整。18は、B6~10号住居跡北側包含層出土品で、横位凹線を施す。内面は横位擦過。19も出土地点は同じで、全体に磨滅している。20は、B2号住居跡への混入品で、横~斜位の平行凹線文の組み合わせが明瞭である。内面はナデ調整。21は、B7号住居跡への混入品で、内面は横位板状工具による擦過がみられる。22は、B区南半の覆土中出土品で、外面に横位凹線文、内面に斜位擦過が施されている。23は、B4号住居跡への混入品で、外面に横位平行沈線、内面は横位擦過を施している。

24~28は、外面に縦位山形押型文を施す。手向山式土器胴部下半片である。24・25・28は、B7号住居跡への混入品である。26は、B9号住居跡への混入品で、27は、B2号住居跡への混入品。

29は、外面に縦位の沈線がみられ、手向山式土器だとすると稀例であるが、他型式土器の可能性もある。内面は横ナデ調整。30と31は、外面に縄文を施した稀少例である。30は、P105出土品で、内面は横ナデを施す。31は、B7号住居跡への混入品で、内面は横位の粗いナデ調整を施す。

32~53は、縄文晩期の土器である。

32は、B区表採品で、精製浅鉢のリボン状突起部分である。胎土精良で内外面ともに横ヘラ磨



第45図 B各ピット出土縄文土器実測図（その3）(1/3)

きを施している。内面は黒褐色、外面は橙褐色をなす。

33は、B区南半の覆土中出土品で、口縁外面に1条の沈線、内面もへこませている。内外面ともにヘラ磨きで、胎土精良の黒色磨研土器である。32とともに黒川式期の浅鉢形土器となる。

34は、B9号住居跡への混入品で、口縁外端面をわずかにへこませた黒色磨研浅鉢形土器である。胎土に細砂粒を少し含み、内面は横ヘラ磨き、外面は縦位のヘラ磨きを施している。

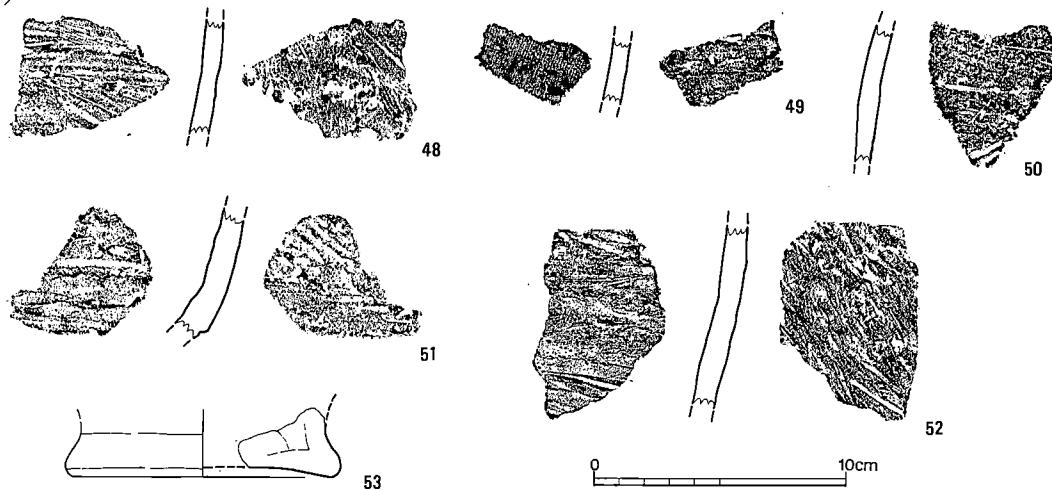
35は、P58出土品で、体部から直行して立ち上がる異類の精製土器である。P58はB5号土壙を切っており、出土遺物から時期の決め手のないB5号土壙が縄文期遺構であることが判る。口縁直下の外面に1条の沈線を巡らし、その下に木の葉状文をヘラ描きし、連続させている。文様部分内にだけベンガラを赤く塗っている。口縁外面の沈線から上と、内面の上から3cmまでは横ヘラ磨きを施し、以下の内面は縦ヘラ磨きがみられる。復原口径21cmとなるが、全体の器形を知りたい優品である。胎土精良で焼成良好、暗褐色を呈している。

36は、B7号住居跡への混入品で、胎土精良で横ヘラ磨きの精製浅鉢である。屈曲部の内外にシャープな稜をつくる類で、黒川式より新段階となる。

37~43は、晩期粗製深鉢の口縁部周辺である。37は、B1号方形周溝墓の北辺周溝へ混入品で、口唇部に細く浅い刻目を施し、外面はアナグラ条痕、内面は条痕の上を横ナデで消している。胎土に細石英粒をわずかに含むが、かなり精良で、黒川式に先行するものと思われる。38は、B22号土壙出土品で、外面は粗雑な横位擦過、内面は横位条痕の上をナデ消す。外面には煤が付着している。39は、P46出土品で、内面は横位条痕、外面は条痕の上を雜にナデしている。40は、B4号住居跡への混入品で、外面は雜な横ナデ、内面は丁寧にナデている。41は、B7号住居跡への混入品で、口縁外面を肥厚させるタイプである。肥厚部外面には横位条痕を施し、内面はナデ調整。黒川式に先行するものである。43は、屈曲部で、外面上半は横位条痕、内面は粗い横ナデを施す。B7号住居跡への混入品である。43は、B12号土壙への混入品で、外面は粗い縦~斜め方向の板ナデ状擦過、内面は横位条痕を施す。内湾する器形で、小型の鉢状の器形となろう。

44~45は、粗製深鉢の屈曲部である。44は、B12号土壙出土品で、外面にはっきりした稜を持つ。稜から下の上半は横位条痕、下半は斜位擦過、内面上半は横ナデ、下半は横位条痕を施す。45は、B1号方形周溝墓の北辺周溝内への混入品で、外面は粗雑な未調整風の横位擦過、内面は横位条痕の上をナデしている。

46~52は、晩期粗製深鉢胴部片である。46は、B3号土壙への混入品で、外面は横位条痕、内面は雜な横ナデを施す。47も出土地点は同じで、外面は横位条痕、内面は横ナデを施す。48は、P58出土品で、内面はアナグラ条痕、外面は粗雑な縦位擦過を施す。49は、B22号土壙への混入品で、外面は横位擦過、内面は平滑であり、精製浅鉢の下半片とも考えられる。50は、B7号住居跡への混入品で、外面は横位条痕の上を粗雑な横方向擦過、内面はやや雜な横ナデを施す。



第46図 B各ピット出土縄文土器実測図（その4）(1/3)

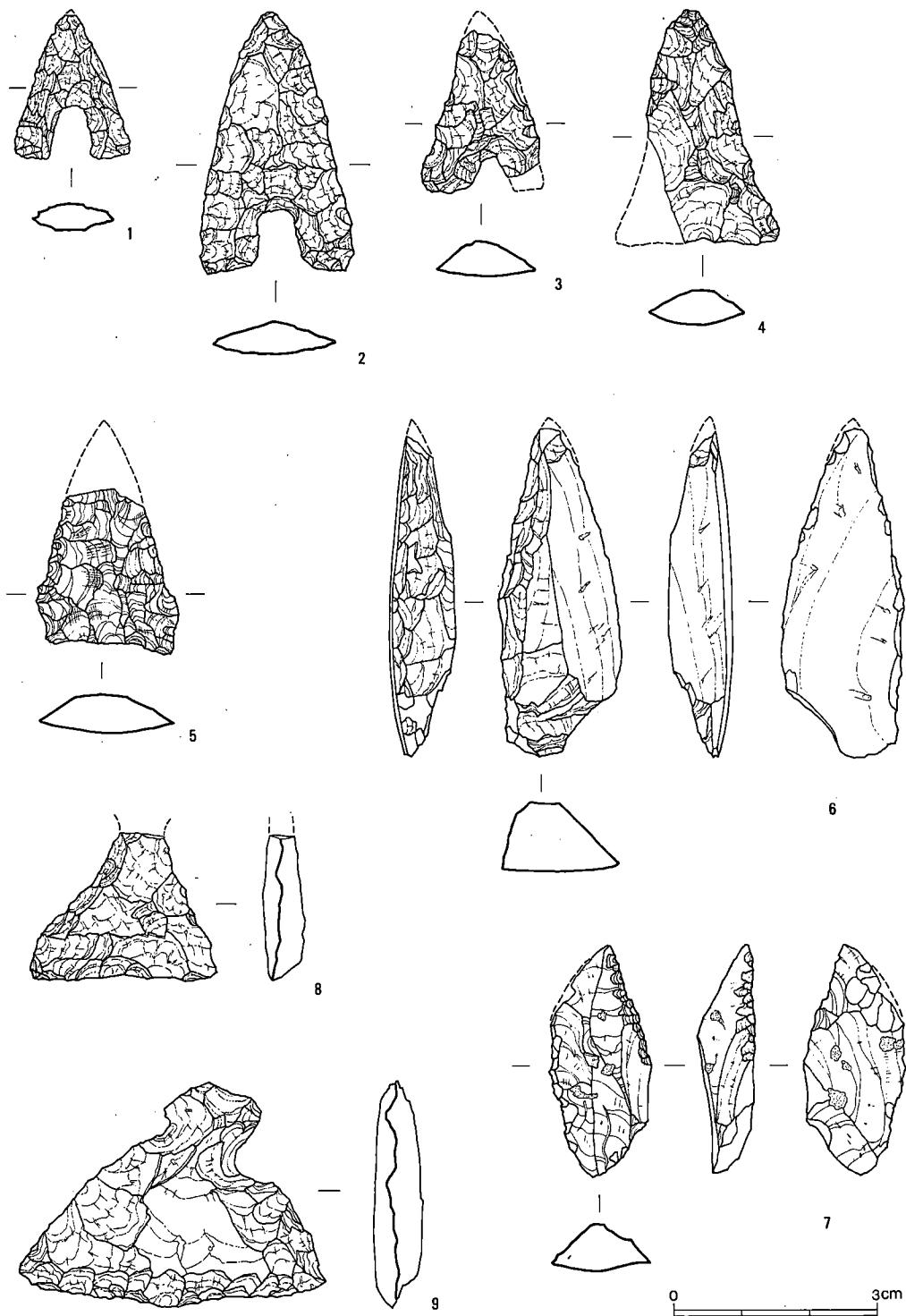
51は、P20出土品で、外面上半は粗い斜位条痕、下半は横位擦過、内面は粗雑な横方向への指押圧ナデが施される。52は、P58出土品で、外面は粗い斜めヘラナデ、内面は雑な横ナデが施される。

53は、晩期粗製深鉢底部で、B 6～10号住居跡北側包含層出土品である。復原径11cmで、わずかな上部底状となっている。細砂粒をやや多く含み、焼成良好で、橙褐色をなす。外面はナデている。

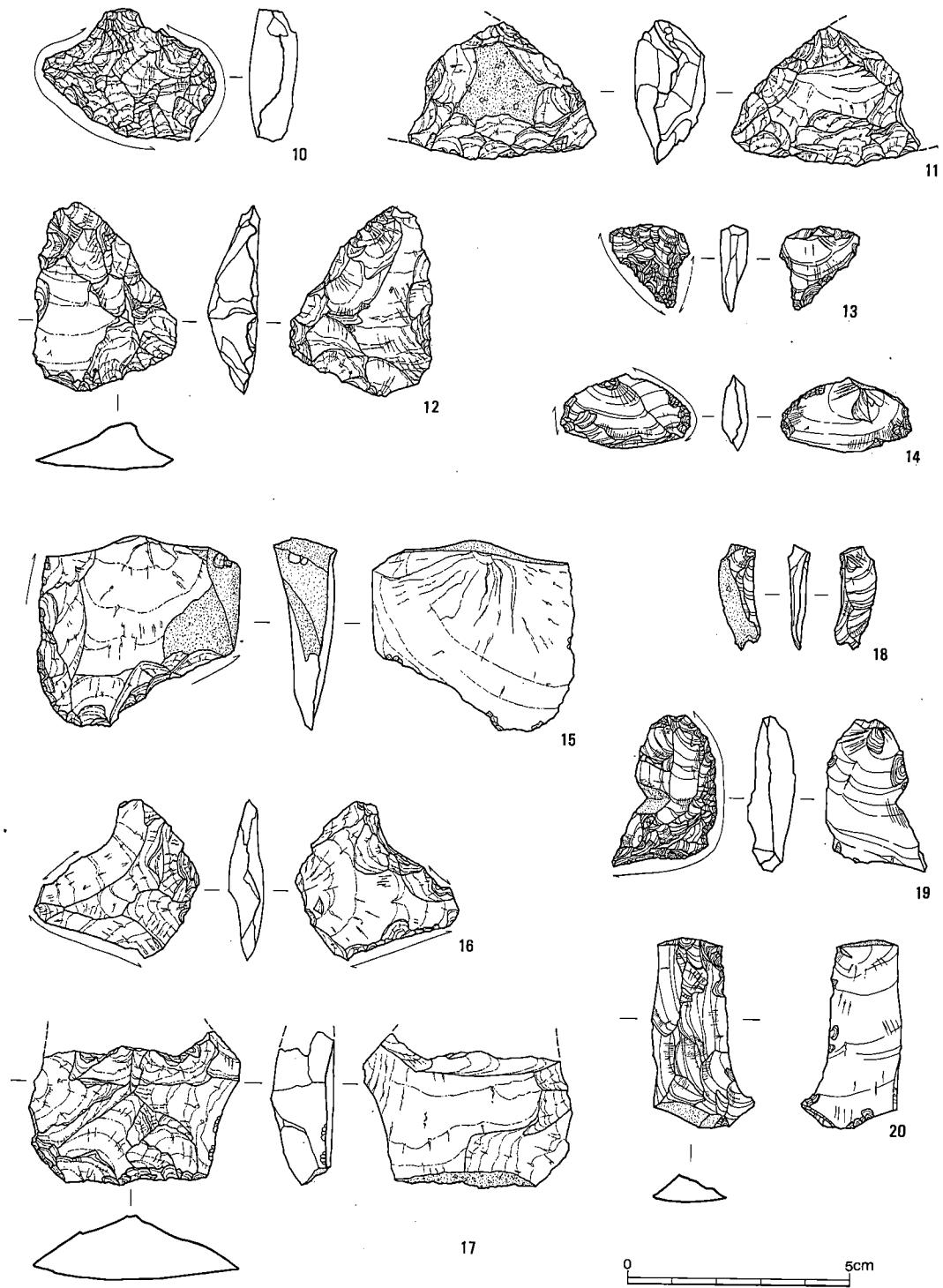
出土石器(第47～49図) ここでは当遺跡出土の縄文時代打製石器について報告しておく。各遺構に伴うものについては、既に各々の項で記述しておいたので省略する。

1～5は打製石鏃で、1・2はA33号土壤出土品で既報告済。3はA北端谷包含層出土品で、報告済。4は、B 6号住居跡への混入品で、サヌカイト製で表面が風化している。長さ3.5cm、復原幅2.5cm、厚さ5mmとなる。調整剝離はわりと雑であるが、うまく形を整えている。先端が丸味を帯びそうな感じで、古相を示している。5は、B 7号住居跡への混入品で、黒色で良質の黒曜石製。裏面の一部に主要剝離面を残し、縁辺の細調整はしつこいが全体につくりはへたである。現存長2.4cm、幅2.1cm、厚さ6mmで、左脚部は折損ではない。

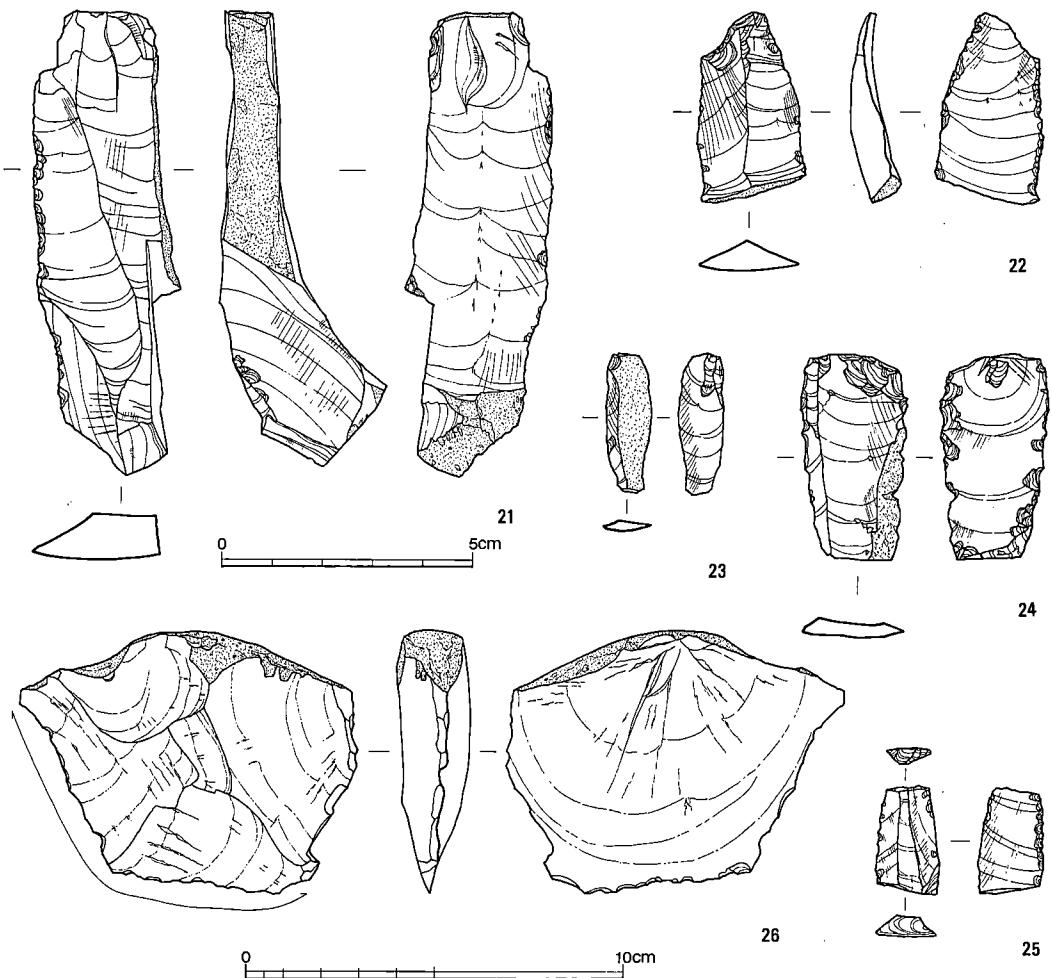
6・7はナイフ形石器である。6は、A 1号溝上層への混入品で、表面が極めて風化したサヌカイト製である。翼状剝片を使用しているがかなり厚手である。長さ5.7cm、幅1.8cm、厚さ1.0cmで、左側辺に刃潰し状加工が基部から上端方向へ施される。右側辺基部は整形加工のままで細調整は施されない。7は、A区P264出土品で、大きい不純物をかなり含んだ黒曜石製。翼状剝片を用いており、一見、典型的なナイフに見えるが、右側縁上半のリタッチ部は鋭角な刃部状



第47図 各遺構出土石器実測図（その1）（実大）



第48図 各遺構出土石器実測図（その2）(2/3)



第49図 各遺構出土石器実測図（その3）(2/3, 26のみ1/2)

を呈し、刃潰し的ではない。左側縁下半の細加工はすべて新しいガジリである。長さ3.45cm, 幅1.5cm, 厚さ7mmとなる。

8~12は、スクレイパーで、8~10は撮部をつくる石匙形である。8・11は、A33号土壙出土品で報告済。9は、A4号溝への混入品で、A北端谷包含層の項で報告済。10は、A北端谷包含層出土品で報告済。12は、B3号住居跡への混入品で、表面がかなり風化したサヌカイト製で、黒色ガラス質の不純物をいくらか含む。裏面には大きく主要剝離面を残し、左側縁を主として、全周使用可能なスクレイパーである。長さ4.2cm, 幅3.2cm, 厚さ1.05cmとなる。

13~19は、不定形・横長等の剥片縁辺を簡単に調整しただけの使用剝片。13はA37号土壙出土

品で報告済。14はA38号土壙出土品で報告済。15はA33号土壙出土品で報告済。16は、A北端谷包含層出土品で既報告済。17は、A11号土壙出土品で報告済。18は、A33号土壙出土品で報告済。19は、A区表採品で、漆黒色良質の黒曜石製。長さ3.4cm、幅2.2cm、厚さ1.0cmとなる。右側縁は細かい調整剝離というよりも、使用刃こぼれの著しい状況のようにみえる。右側縁から下辺が使用可能範囲。

20～25までは、黒曜石のブレイド及び縦長剝片である。20は、A区P140出土品で、小さな不純物を多く含む黒色の黒曜石縦長剝片である。長さ4.25cm、幅2.3cm、厚さ6mmとなる。打面と下端には自然面を残す。裏面左側縁と下辺には使用刃こぼれがみられる。21は、A北端谷包含層出土品で、既報告済。22は、B1号方形周溝墓の東辺周溝内への混入品で、漆黒色良質の黒曜石製縦長様剝片。上端左側に抉りを入れて、バルブ側を折り取っている。裏面右側縁は、単なる刃こぼれではなく、意図的調整である。長さ3.8cm、幅2.1cm、厚さ5.5mmとなる。下端に自然面を残している。縄文晩期に伴うものかと考えられる。23は、B8号住居跡への混入品で、黒色半透明で良質の黒曜石剝片。皮部分で、長さ2.8cm、幅9mm、厚さ2mmで、打面は自然面である。24は、A区P195出土品で、不純物をかなり含む黒曜石縦長剝片である。下端を折り取っており、左右両側縁にはいくらか使用刃こぼれがみられる。長さ4.0cm、幅2.1cm、厚さ3.5mmとなる。25は、A区P3出土品で、黒色良質のやや透明感のある黒曜石製ブレイドである。上下両端ともに折断しており、上端は折断後調整している。長さ2.1cm、幅1.8cm、厚さ4mmで、左右両側縁とともに使用刃こぼれがみられる。

26は、サヌカイト製大型スクレイパーで、A北端谷包含層出土品で報告済。

C 横穴住居跡

治部ノ上遺跡では、弥生後期～歴史時代の横穴住居跡が合計32軒検出された。(うちA区18軒、B区14軒)全体に、遺構の残りは不良で、特にA区ではほとんど床面のみしか残存していない類が数多く、時期の確定もままならない状態である。

集落の状況としては、段丘縁辺際ではなく、やや北寄りの、縁から離れて集中する。このことから、弥生後期～古墳初頭の集落の中心は、もう少し北寄りではないかと思われる。

以下各住居毎に、詳述してゆく。

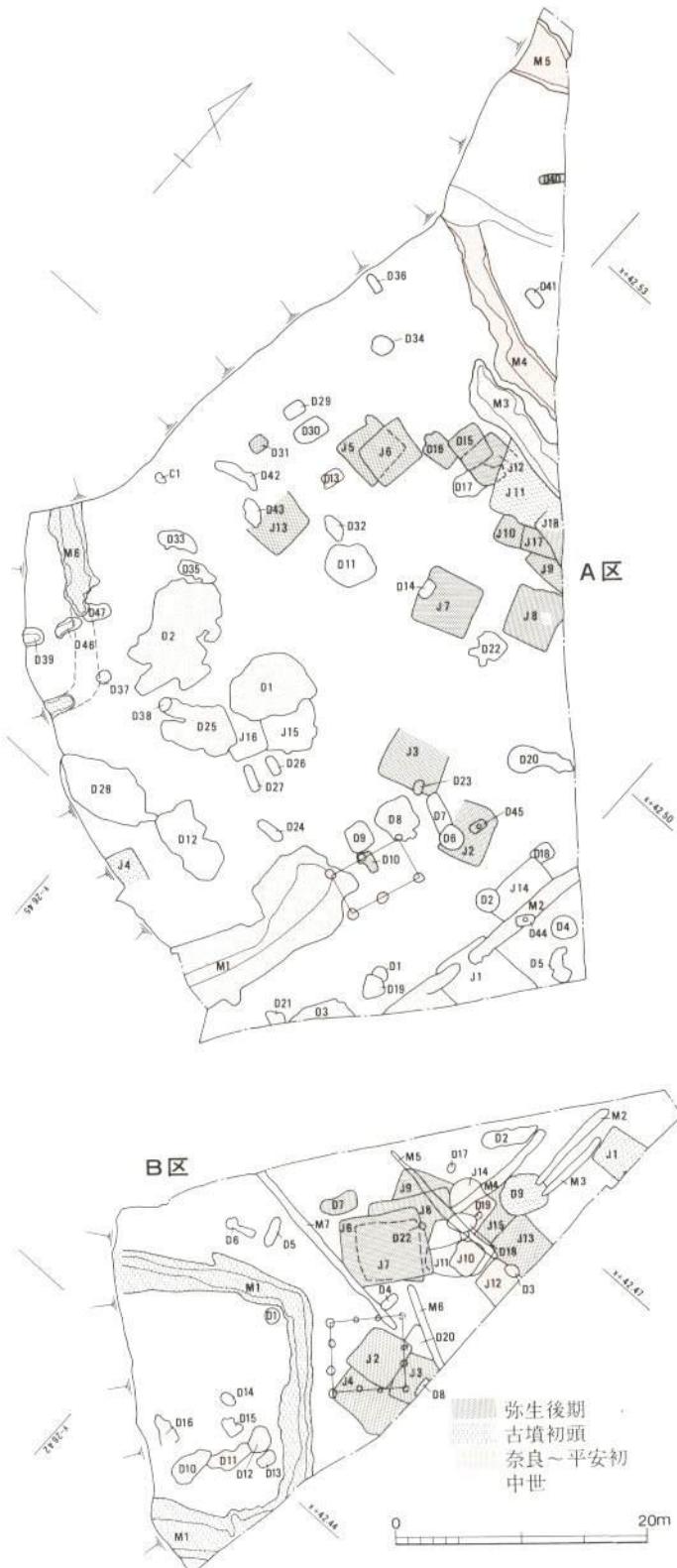
A1号横穴住居跡(第51図、図版8)

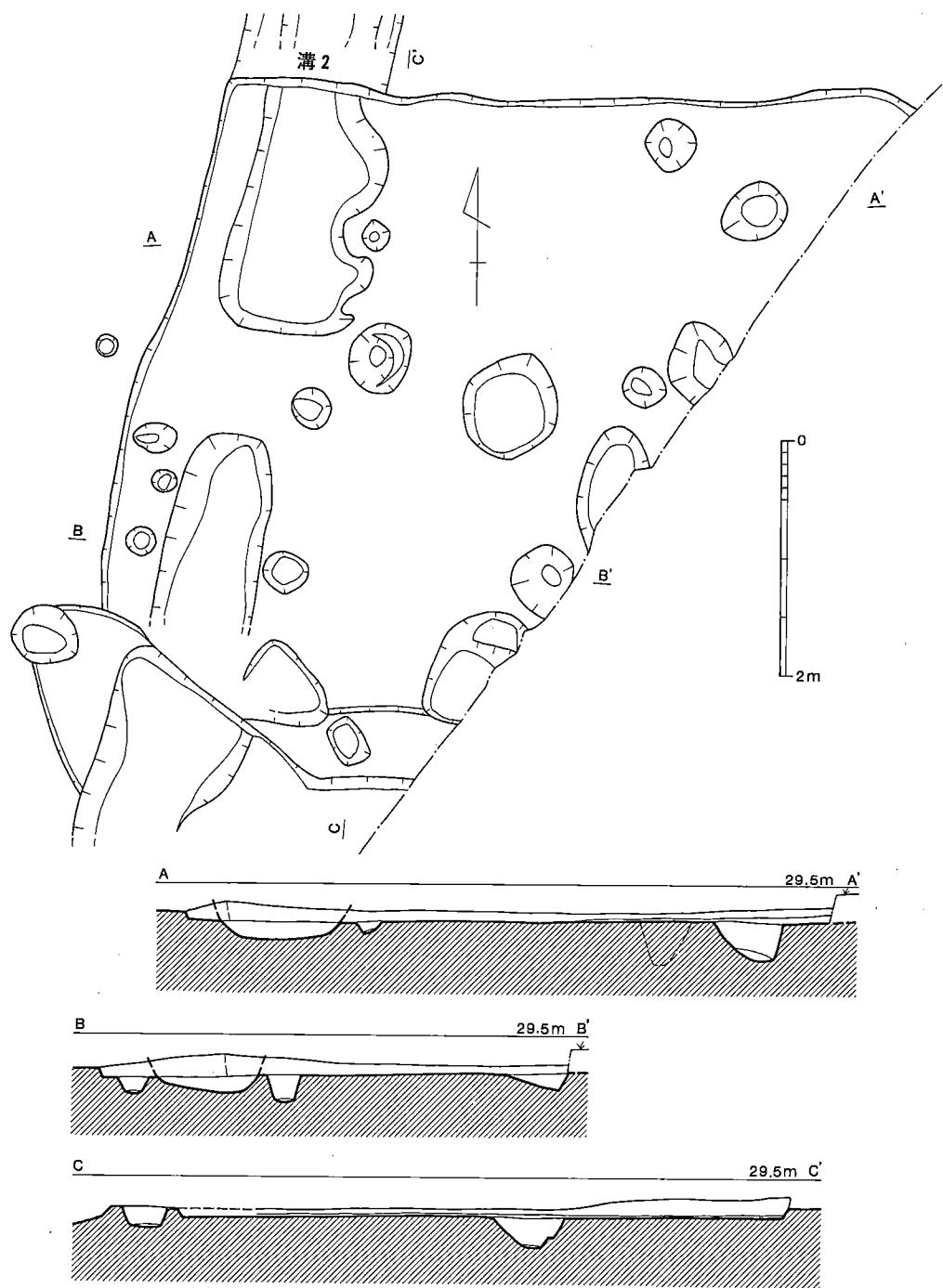
A区の東端に位置する方形住居である。東側は水路部分で調査できなかった。住居の西側を南北にA 2号溝が走り、搅乱を受けている。

南北幅が5.23m、東西は北辺で5.9mほどで、やや東西に長い、方形プランの住居となる。壁は最大高さ17cmほどしか残らず、柱穴も床面上に10以上あるが、主柱穴の配置は明確でない。

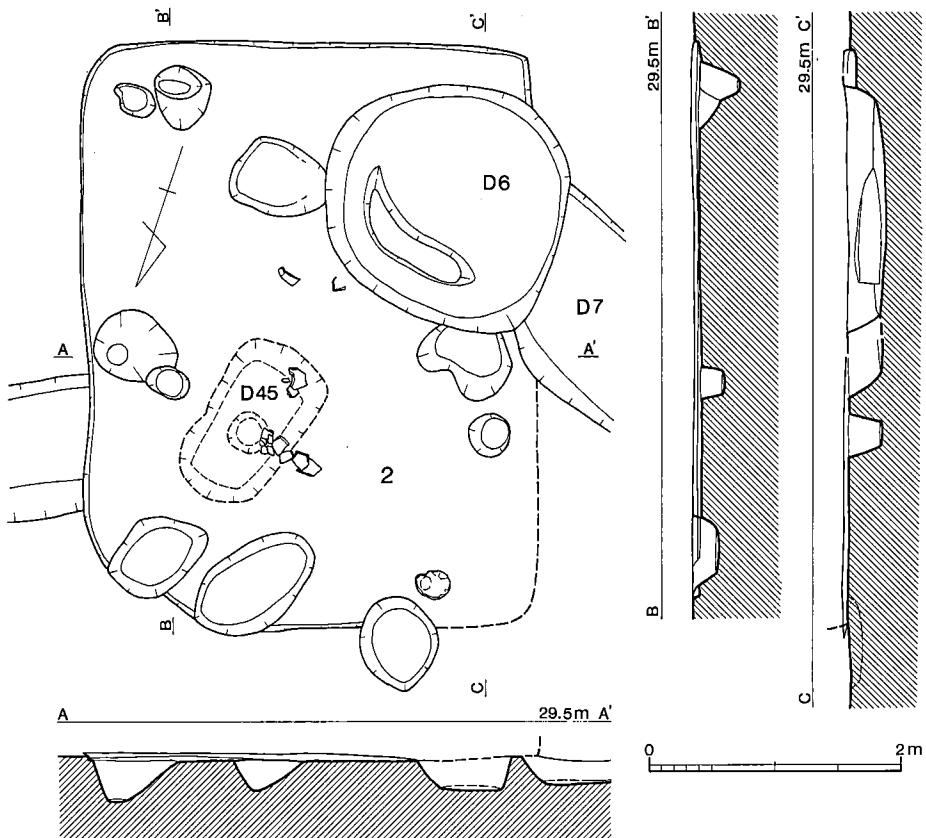
炉の位置は明らかでなく、周壁溝等も検出されていない。図中では、A 2号溝を切っているように示しているが、溝の出土遺物等から検討すると、実際には逆に、溝の方が新しいものと判断される。現地調査時の慎重さを欠いたミスで、深く反省したい。

出土遺物のうち、図示できるものは無く、時期を確定できないが、遺跡全体の遺構の状況から見て、このA 1号住居跡は、弥生後期～古墳初頭期のものと考えられる。





第51図 A1号住居跡実測図 (1/60)



第52図 A 2号居住跡実測図 (1/60)

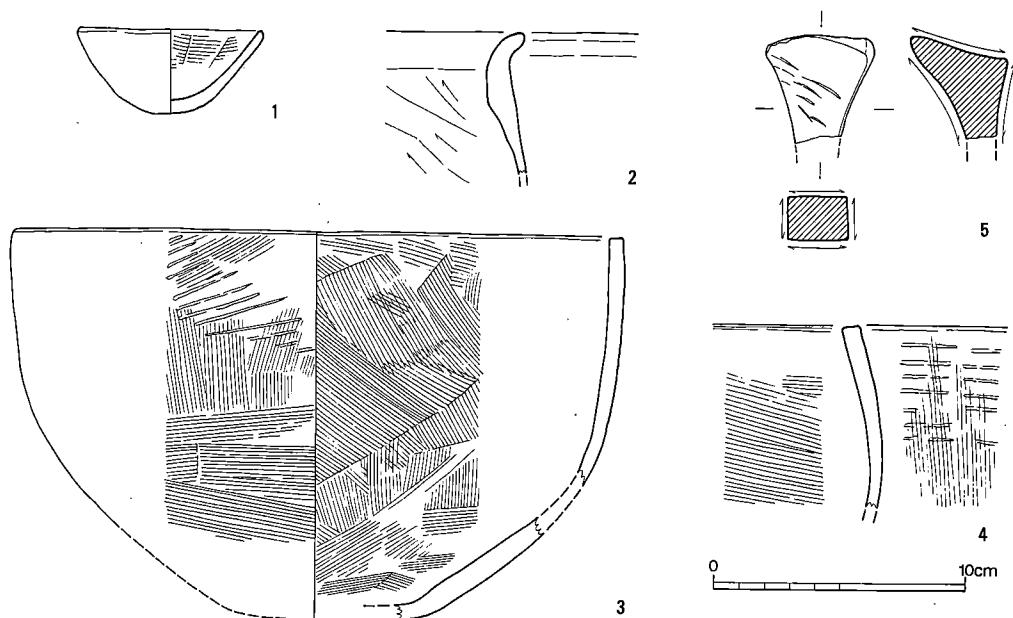
A 2号竪穴住居跡 (第52図 図版8)

A区の東北寄りに位置するやや小型の方形住居である。全体に上半を削平されて、残りが悪く、特に西半では壁の輪郭さえつかめない。西南側で、A 6号土壙とした柿の木穴に切られている。西側のA 7号土壙との切合の関係は明確でない。北寄りの床面下から、落し穴(A45号土壙)が検出されたが、これは明らかにこの住居よりも古いものである。また、北側の住居壁を切っている3個のピットは、この住居よりも新しい遺構である。

南北長4.6m、東西長3.6mの隅丸気味の長方形プランをなし、略16m²強の面積となろう。壁は東側の残りの良い部分で5cm弱のみである。

床面上に炉の痕跡は認められなかった。主柱穴は図中のA-A'にかかる2個のピットかと考えられるが、深さが20~30cm程とあまり深くなく、主柱穴とするには断定し難い。

床面直上には、土器類がいくらかみられ、当住居の時期を示すものと考えられる。



第53図 A 2号住居跡出土土器・砥石実測図 (1/3)

出土遺物 (第53図)

ミニチュア杯 (1) 口径7.4cm, 器高3.35cmで外面はナデ, 内面上半は横位の押し引きハケ, 下半はナデている。細砂粒を多く含む。

甕(2) 口頸部が肥厚して胴部内面はヘラ削りが施される。奈良期のものであり, 混入品と考えられる。胴部外面はナデている。

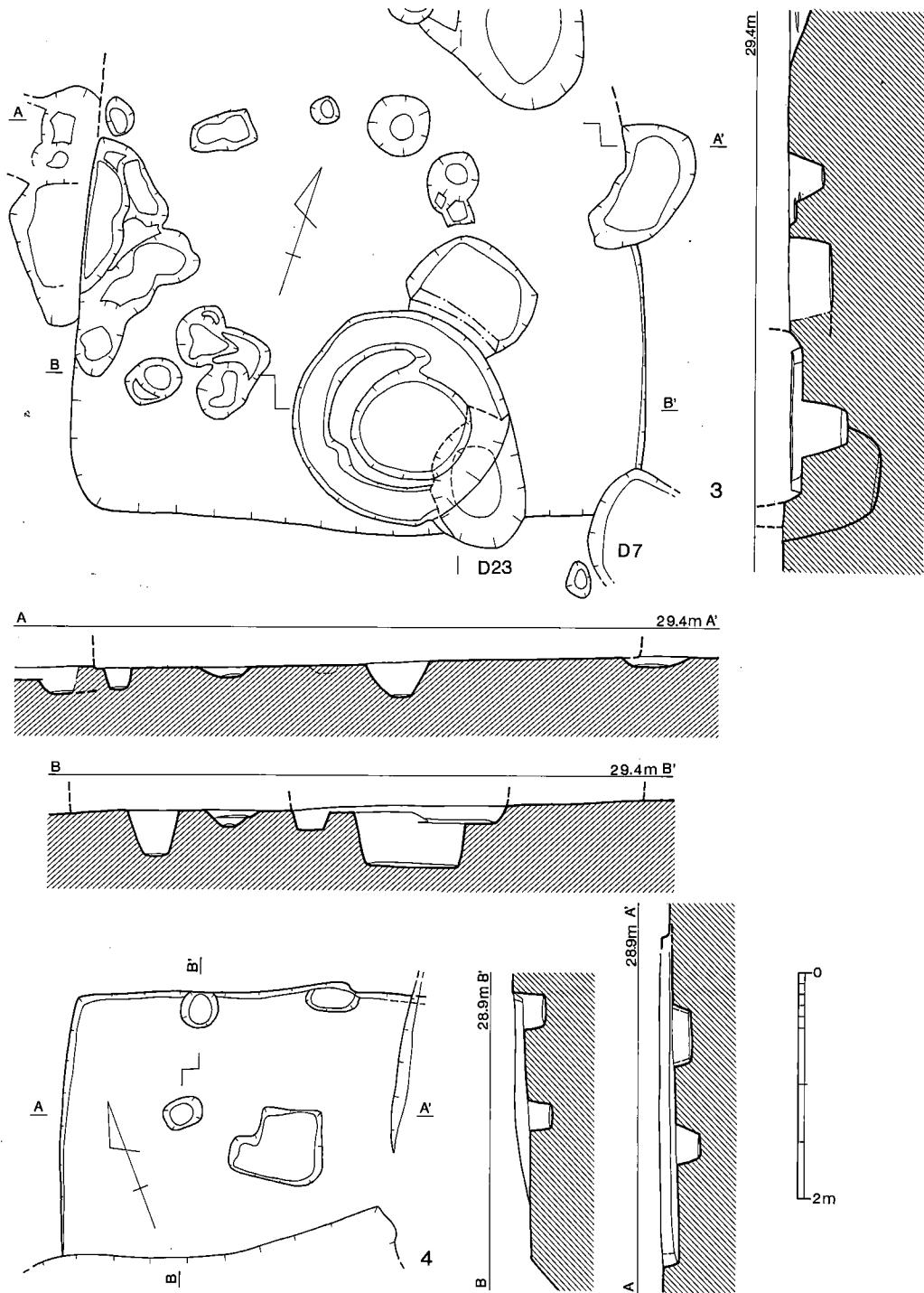
鉢 (3・4) いずれも床面直上出土品で, 3は口径24.4cm, 器高15.2cmとなる。底部が平底状となる点や, 体部中途で屈折の稜をつくることなど古相をみせている。外面上半には叩きのあとハケを施している。内面の一部と外面のほぼ全面に煤が付着している。4は, 内湾気味になる類で, 外面上半は叩きのあと縦ハケを施している。

砥石 (5) 白色粘板岩製の仕上げ砥で, 全面を極めて良く使用している。現存長4.4cm, 最大幅4.3cm, 厚さ3.8~1.2cmとなる。金属利器によるキズがかなり認められる。

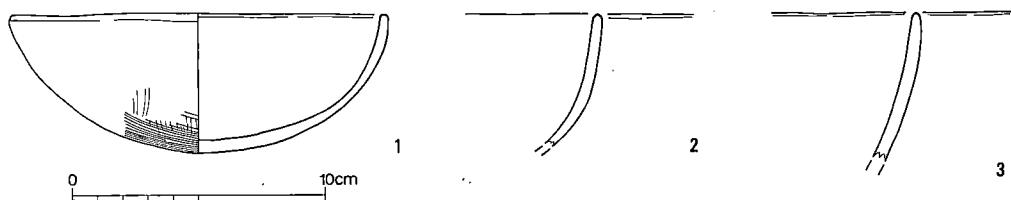
以上の出土遺物は, 2を除き, 弥生後期段階の特徴をよく示しており, 中でも, 3・4の床面出土の土器を主に考えると, 当住居跡は弥生後期後葉でも中頃に近い時期と判断できる。

A 3号竪穴住居跡 (第54図)

前述のA 2号住居跡の西隣に位置する。住居の主軸方向（各辺の方位）が, A 2・7・8号住居跡とほぼ一致する。上半を大きく削平されており, 壁は全く残存していない。検出したのは,



第54図 A3・4号住居跡実測図 (1/60)



第55図 A4号住居跡出土土器実測図 (1/3)

床面のみで、堅く踏み締められた硬化面が明瞭に認められ、住居の輪郭を知ることができたという具合である。

南側にて、P74とした柿の木株痕に切られ、南東隅をA7号土壙に切られている。南縁辺のA23号土壙との切り合い関係は、住居の覆土が残存していない状態のため、遺構検出状況からは新旧を明らかにすることはできない。

東西幅4.8~5.05m、南北幅は北辺の輪郭がつかめなかつたが、少なくとも4m以上はあったと思われる。南西隅は丸味をおびており、隅丸気味の方形住居と考えられる。深さは、前述のとおり、壁が残らないため不明である。

柱穴らしき小ピットは床面上に10余個検出できたが、主柱穴とおぼしき配置は認められない。周壁溝は無く、炉跡も認められない。床面中央炉でないことは確かで、時期的特徴を示しているかもしれない。

出土遺物のうち、図示できるものは無いが、住居の形態・方向からみて、弥生後期のいずれかの段階のものであることは間違ひなかろう。

A4号竪穴住居跡（第54図、図版9）

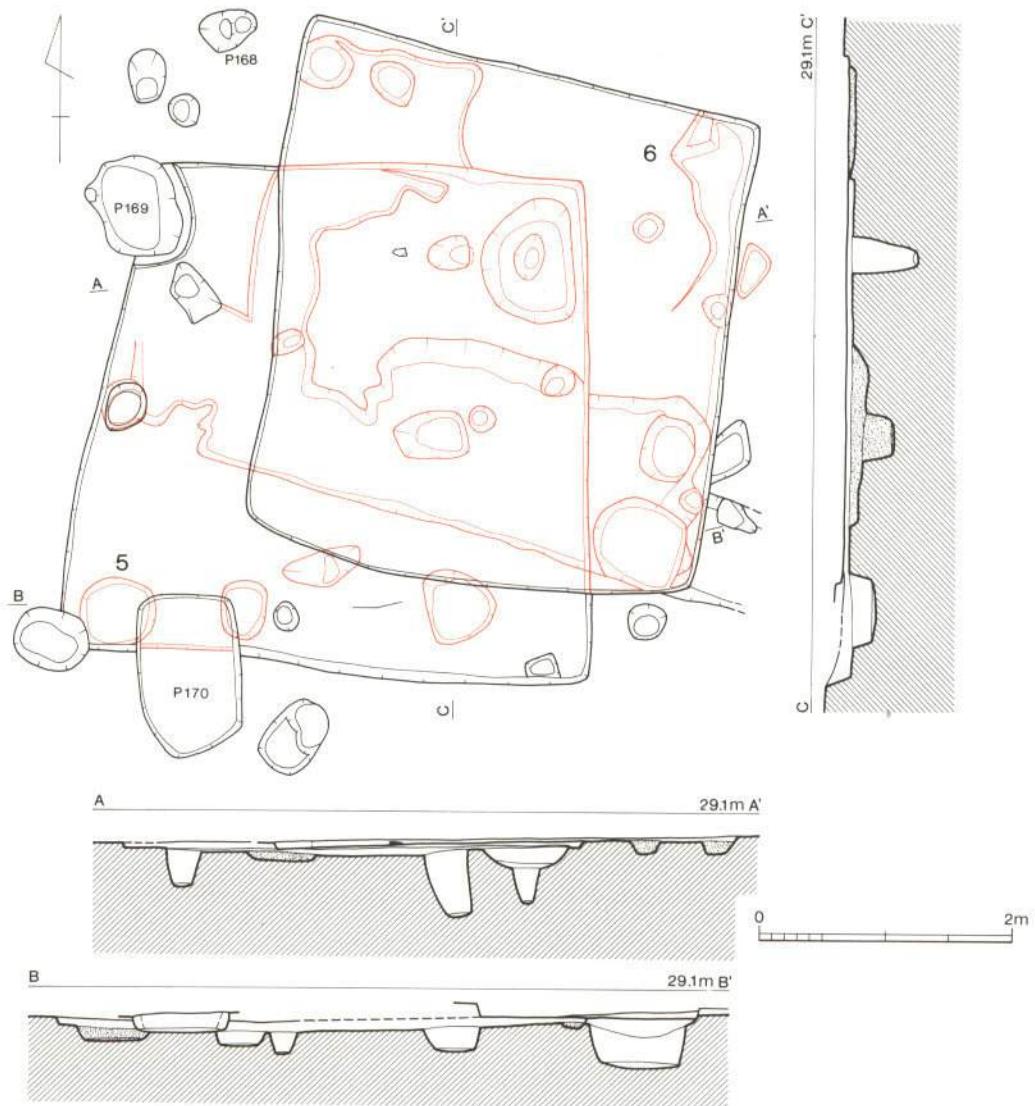
A区の南端中央に位置し、南半は崖となり消失している。東半は段落ち状の中世包含層に切られており、結局、北西隅付近の一角落が残るのみの方形住居である。

東西が2.8m以上、南北が2.35m以上で、壁は北辺部で10cm弱残るのみの規模である。周壁溝、炉等は認められず、柱穴もどのような配置をなすのか、全く不明である。

出土遺物（第55図）

杯（1~3）1は、口径15cm、器高5.4cmで不安定な浅めの器形である。底外面にハケを施し、内面にも一部ハケを残してナデている。2は、深めの器形で、薄手で全体に磨滅して、体部外側下半は丁寧なナデがみられる。3は、深めの鉢であり、口縁内外面は横ナデ、以下の内外面はともにナデ調整である。

以上の出土土器は、薄手で、まだ口縁の内湾化がみられないことなどから、古墳時代初頭の布留式併行期のものと考えられ、当A4号住居跡の時期を示している。

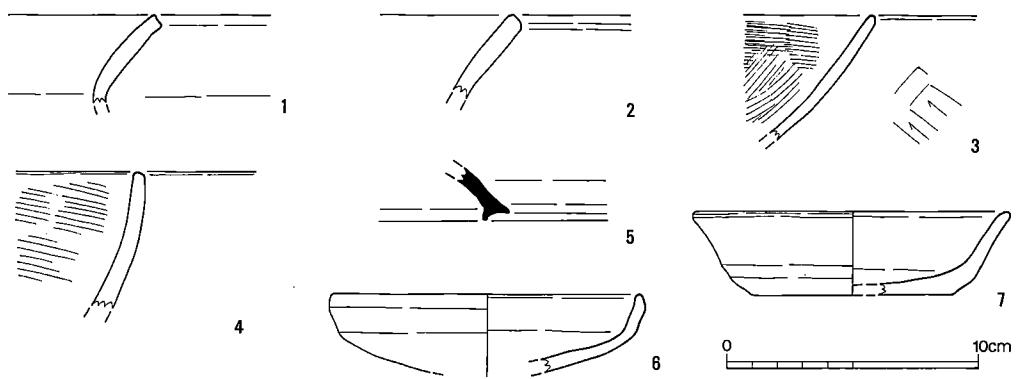


第56図 A 5・6号住居跡実測図 (1/60)

A 5号竪穴住居跡 (第56図、図版10)

A区の西辺寄りの、中央より北側に位置する方形住居跡である。A 6号住居跡と大きく重複しており、当5号住居の方が古い。南西隅とその東隣にて住居南辺壁を切っている小ピットとP170とは、住居より新しい。また、北西隅のP169も当住居より新しい。

住居平面形は南壁が長い台形気味の形態をなし、北辺が3.4m、南辺が4.2m、東辺が3.95m、西辺が3.85mである。約14.8m²の中規模住居となる。深さは、南辺側で20cm弱残っているが、



第57図 A5号住居跡出土土器実測図（1/3）

他辺側は5cm前後と残りは良くない。

床面は貼り床を施しており、中央部分が東西に帯状に10cm弱ほど掘り込まれている。ただ、6号住居が上から切り込んでおり、その貼り床の下部構造との厳密な区別はつけ難い。柱穴は床面に10余個の小ピットが検出されているが、明確な配置を示す主柱穴とおぼしきものはみられない。4隅寄りの4小ピットが主柱穴となる可能性もあるが、その配置がいびつとなり、かなり疑問である。

炉跡は確認できなかった。周壁溝も無い。

出土遺物（第57図）

甕（1） 口縁部小片であるが、口唇部が凹状となり、口縁中途で外方へわずかにふくらみをみせる。内外面横ナデで、外面には煤が付着している。

鉢（2～4） 2は、甕の口縁になるかもしれない。3は、外面下半はヘラ削りを施す。4は、内面横ハケ、外面はナデている。深めの器形となる。

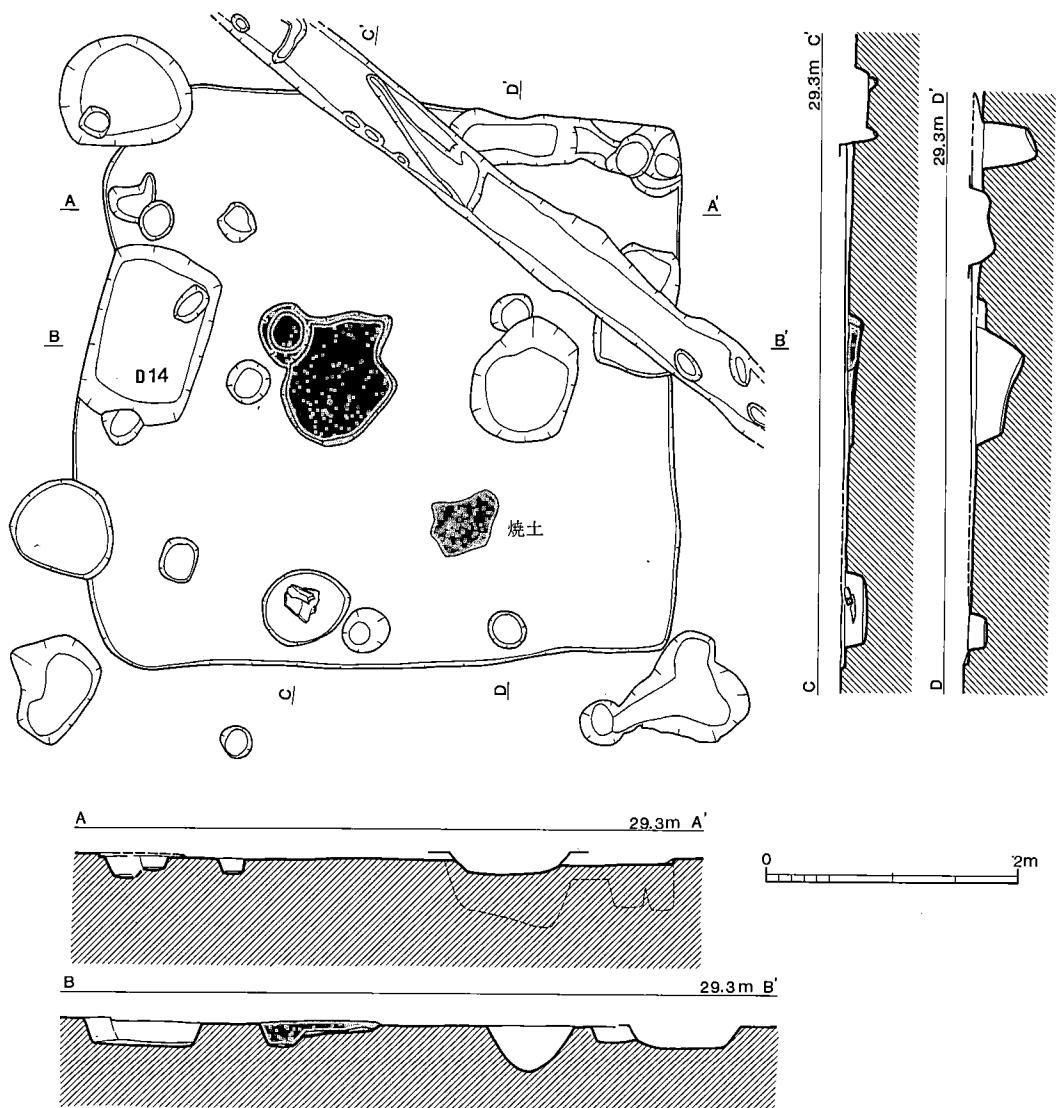
杯蓋（5） 須恵器杯蓋で、内外面横ナデ、天井外面はナデている。7C前半代の所産。

杯（6・7） 6は土師器杯で、復原口径12.6cmとなる。口唇辺が内側に折れる特徴を示し、奈良前半期のものである。7は、復原口径12.6cm、器高3.3cm、底径8.0cmの底部糸切り土師器杯である。13C中頃前後のものであろう。

以上の出土遺物は各時期にわたり、かなりの異なる遺構が住居中に切り込んでいた結果と思われる。これらのうち、5～7は当遺跡の状況からみて、混入品と考え、1～4が当住居の時期を示すと思われる。以上のことから、A5号住居跡は、弥生後期終末或は若干新しくなる可能性も考えられる。

A6号竪穴住居跡（第56図、図版10）

A区の北寄りの西辺近くに位置し、前述のA5号住居跡を大きく切って、重複するように営ま

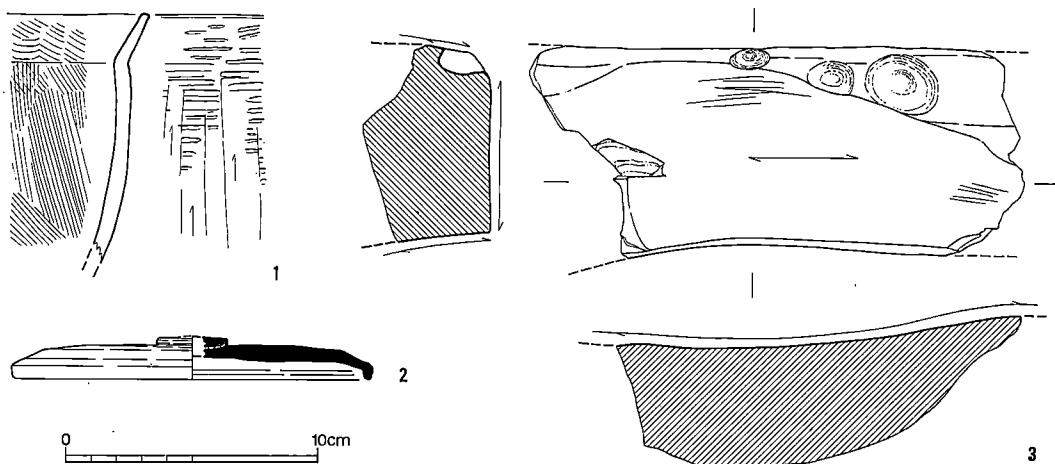


第58図 A 7号住居跡実測図 (1/60)

れた方形住居跡である。

住居の平面形は、北西隅が鋭角状に突出したやや歪つな四角形をなす。北辺が3.65m、南辺が3.55m、東辺が3.7m、西辺が4.0mとなる。約13.9m²の床面積となるやや小ぶりの中規模住居である。深さは、全体に5cm前後しか残っていない。

床面は、貼床を施しており、南側と北西隅付近とが掘り込まれている。南半部の貼床下部構造は5号住居跡のものと重複しており、厳密に両者の違いを区別することは困難である。



第59図 A 7号住居跡出土土器・砾石実測図 (1/3)

柱穴については、小ピットが散在して検出されたが、5号住居跡と同様に、主柱穴らしき配置状況を示すものは無く、不明といわざるを得ない。炉及び周壁溝も認められない。

図示できる出土遺物は無いが、A 5号住居を切ることから、弥生後期終末期あるいはそれ以降若干新しくなる時期の住居であろうと推定される。

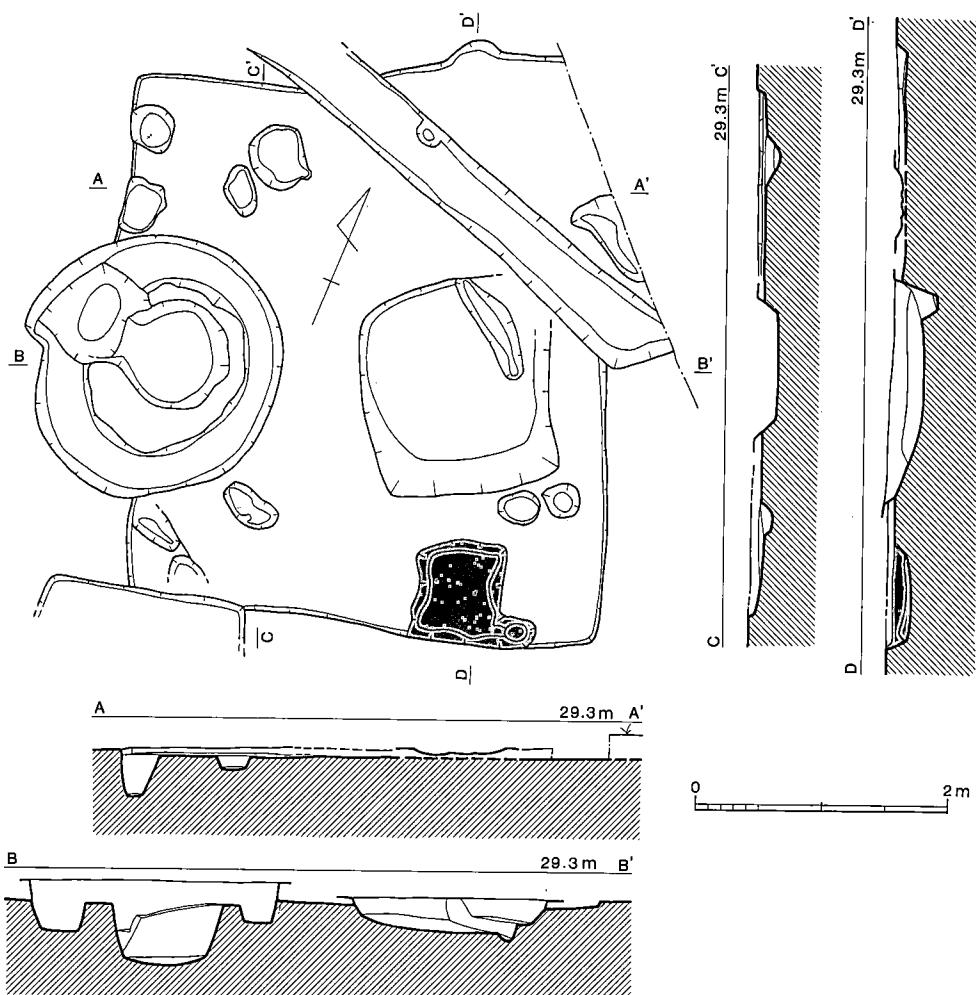
A 7号豎穴住居跡 (第58図、図版10) A区中央北寄りに位置する方形住居跡である。北東側を細長い溝状のP260に切られており、北西隅及び西辺南寄りの大きめの各ピットも、この住居を切っている。西辺中央にあるA14号土壙は、住居壁ラインに接することから、当住居に伴う可能性が強いが、住居覆土がほとんど残存していなかったことから、遺構の面からは新旧関係をつかむことはできなかった。

主軸方向を、東隣のA 8号住居跡や、南方のA 2・3号住居跡などと同じにとっていることから、これらと同時併存の可能性が強い。

住居の平面形は、西辺がやや長く、きちんとした正方形にはならない。北辺が4.55m、南辺が4.7m、東辺が4.1m、西辺が4.6mである。約20.1m²の床面積となる大きめの中規模住居である。深さは3cm前後しかなく、残りは悪い。

床面中央には、炭片・焼土粒を多量に含んだ炉跡が検出された。径1.05×0.9m、深さ10cm強の浅い掘り込みの類である。この中央炉の他に、南東寄りの床面上に60×40cmの範囲に焼土が検出された。住居自体が焼失した時のものであろうか。

床面には10余個の小ピットが検出されたが、2本柱あるいは4本柱となるような主柱穴の配置をみせる類ではない。また、周壁溝は認められなかった。



第60図 A8号住居跡実測図 (1/60)

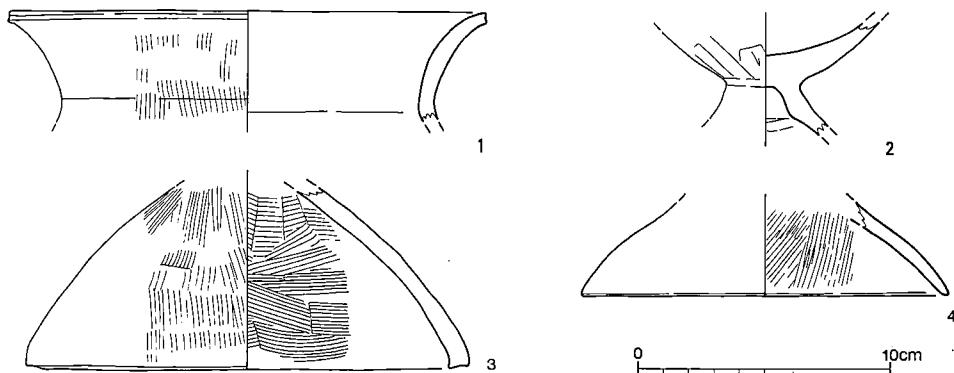
南辺沿いの楕円形ピット中から、甕片とともに、大きめの砥石1点が検出した。甕大片の上にのっており、甕内に納めてあった可能性も考えられる。

出土遺物（第59図）

甕(1) 内面に稜をつくり外傾して開く口縁に、あまり張らない胴部をつける。外面には叩きがみられ、胴部には叩きの上の板状工具によるかき上げがみられる。

杯蓋(2) 須恵器で、復原口径14.4cm、器高1.7cmとなる。鳥嘴状口縁は直に折れるが、端部は丸くなっている。8C代の所産。

砥石(3) 濃灰色の粘板岩製仕上げ砥である。両端と裏面が欠損しており、上面・両側面ともによく使用している。裏面にも擦痕がわずかにみられ、割れた後も使用されたことがわかる。



第61図 A8号住居跡出土土器実測図 (1/3)

上辺に円形のくぼみが3ヶ所みられ、右に行くほど浅くなる。現存長19.6cm、幅8.5~7.7cm、厚さ5cmである。

以上の出土遺物のうち、2は明らかに混入品であり除外すると、1の弥生後期終末の土器がA7号住居跡の時期を示すと思われる。

A8号竪穴住居跡（第60図、図版11）

前述のA7号住居の東隣2.8mの位置にあり、主軸方向が同じである。西辺中央を柿の木穴に切られ、北東側で浅く凹凸著しい溝状のP29に切られている。また、中央～東寄りでは大きな方形ピットにも切られている。更に、南西隅では、A22号土壙に切られる深い方形状のピットにも住居が切られている。

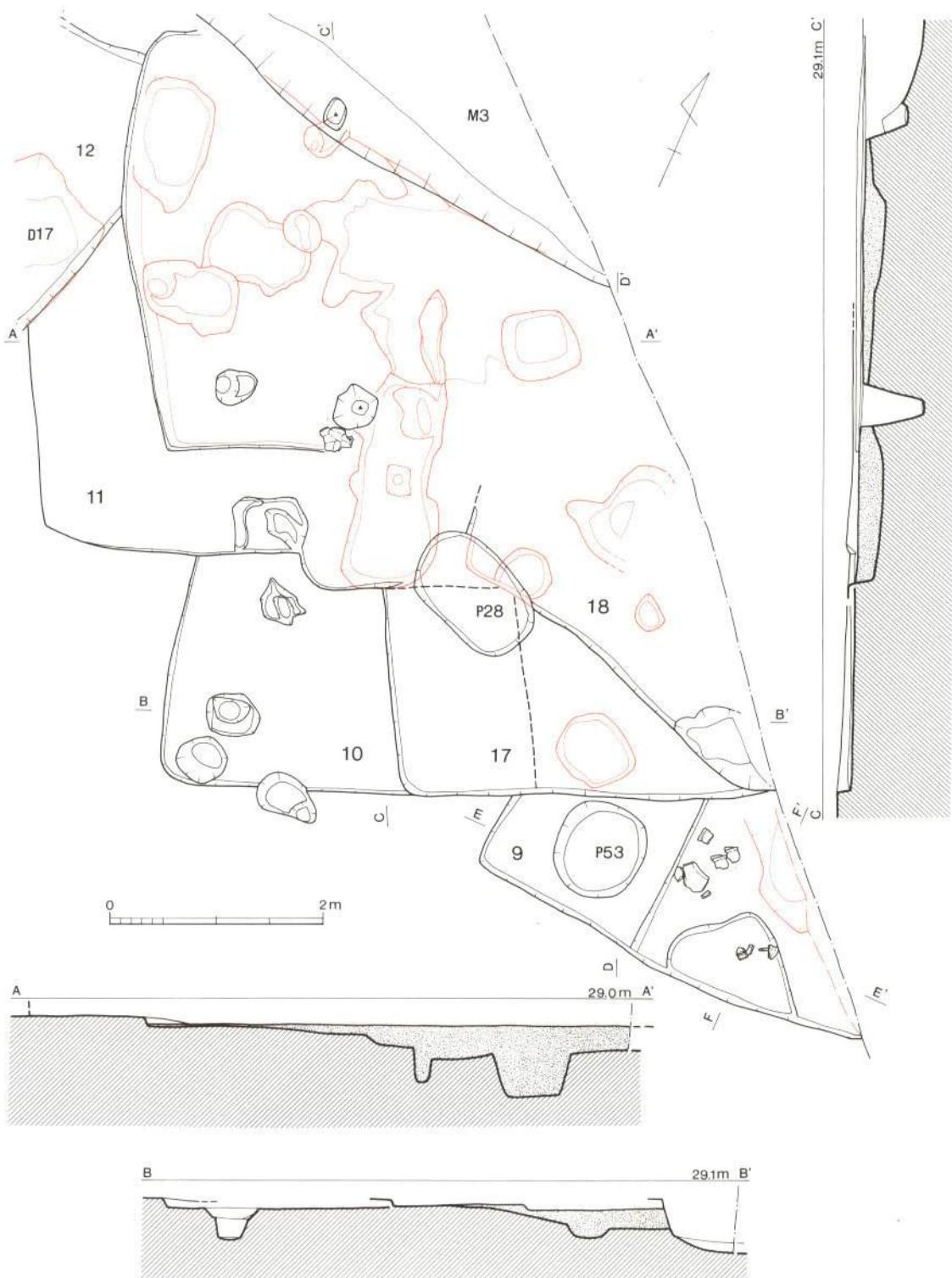
住居の平面形は、残存状況からみて、東西幅3.8m、南北長4.15mのほぼ正方形に近い形状となる。床面積約15.8m²の中規模でも小ぶりの類となろう。

床面には柱穴となりそうな小ピットが7個みられるが、主柱穴の配置は明確でない。他遺構に各所で切られているためもあるかもしれない。中央炉は確認できなかった。ただし、東南隅に近い南辺際に、炭や焼土粒を多く混入した不整形ピットがあり、炉としていた可能性も考えた方がよかろう。

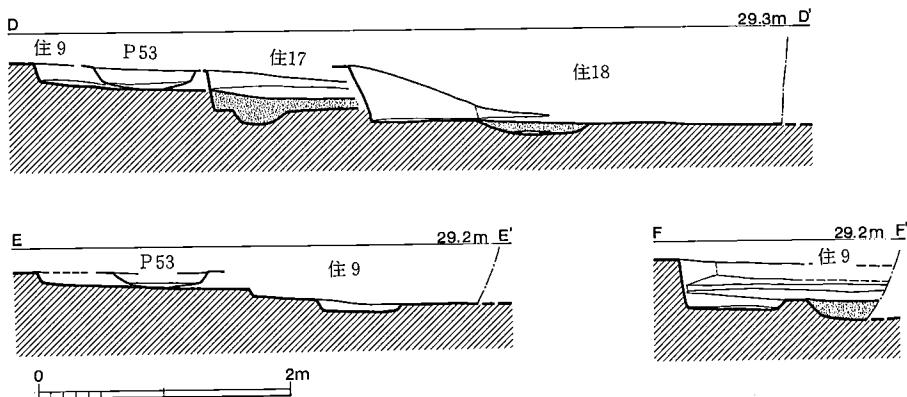
出土遺物（第61図）

甕(1) 復原口径19cmで、頸部内面に稜をつくり丸く外反する口縁となる。内面は横ナデ、外面は縦ハケの上をナデている。口縁端面は凹状になる。

脚付鉢(2~4) 2は、低く大きく開く脚部を付ける類で、脚部内面の中途に稜ができる。それ以下はヘラ削りを施している。3は、復原底径17.6cmで、端部内外面横ナデ調整で、他はハケ調整が頸著である。4は、脚端径14.6cmとなり、内面はハケ、外面は下半が横ナデ、上半はナデている。



第62図 A9～11・17・18号住居跡実測図（その1）(1/60)

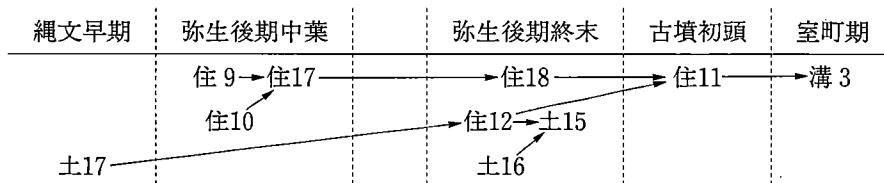


第63図 A 9～11・17・18号住居跡実測図（その2）(1/60)

以上の出土遺物のうち、2は土師器としてよさそうで、新しい土器であろう。他の土器からみて、弥生後期中頃かと思われ、当A 8号住居の年代を示すものであろう。

A 9号竪穴住居跡（第62図、図版11）

A区の北側、発掘区際にA 9～12・17・18号住居が複雑に切り合って検出された。覆土中にA 3号溝関係の遺物も混入していたせいもあって、切り合いの確認は困難を極めた。一応図示した状況まで現地では判断し得た。これらの遺構の新古関係を示すと以下のとおりとなる。（古→新の順序で示す。）

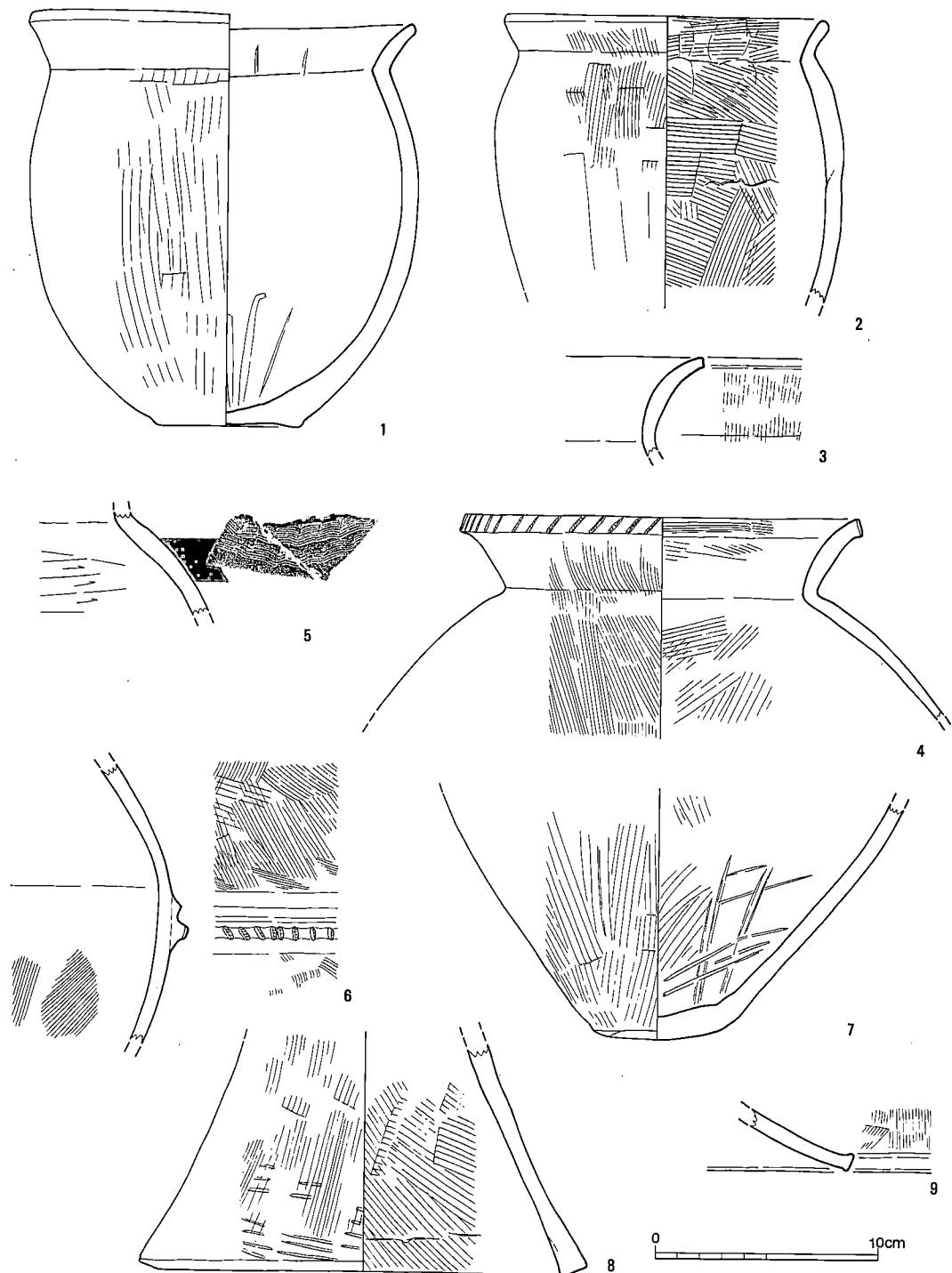


これらの切り合の中では、このA 9号住居跡は最も古い段階であることがわかる。主軸方位からみると、南隣のA 7・8号住居とは異なり、むしろ西方のA 5・6号住居の方位に近いようである。

住居の輪郭は、南西隅付近しかわからないが、西辺沿いに幅1.5m前後のベッド状遺構を削り出した方形住居となる。ベッドは高さ5cmで、その中央はP53の大きい穴に切られている。南壁沿いに浅い土壤状掘り込みがみられるが、本来の壁際土壤になるかどうかは不明である。また、主柱穴や炉等は全く不明である。

出土遺物（第64図）

甕（1～7） 1は、口径17.3cm、器高18.5cm、底径6.5cmで、安定した、僅かに上げ底状とな



第64図 A9号住居跡出土土器実測図 (1/3)

る平底をなす。胴部最大径は口径とほぼ同じで、胴中位よりやや上にくる。胴部外面は目の粗い縦ハケを施し、下半ではナデ消している。内面にはハケ工具端痕がみられ、ハケの後に丁寧にナデ消してしまっているようである。2は、口径14.5cm、胴部最大径16.1cmとなる小甕で、内面はハケを施したままである。外面下半は板状工具による擦過状をなす。胴部最大径は、胴中位よりずっと上にあり、外面には煤が付着する。3は、丸く外反する口縁片で、口唇端面は凹状となる。4は、口径18cmとなる壺状の器形で、口唇面にはハケ工具痕による刻目を施す。口縁内面はハケをナデ消している。5は、肩部に細かい櫛描波状文を施し、内面は横方向のへラ削りを施している。外面一部に丹塗りが残っている。外来系の土器であることは間違いない、瀬戸内地方のいずれかの土器であろう。6は、壺胴部片で、外面上半の一部に叩きが残る。凸帯以下の外面と内面は、ハケをかなり丁寧にナデ消している。凸帯は、断面三角凸帯とコの字状凸帯を連接させた珍例で、下の凸帯上にはハケ工具端による刻目が施されている。7は、胴部下半～底部で、凸レンズ状にふくらむ不安定な底部につくる。内外面ともに粗いハケ調整を施す。内面上半はナデ消している。内外面ともに煤が付着している。

器台(8) 脚端径20cmの大ぶりの類で、外面下半には叩き目が残る。脚端は内端で接地し、全体に精製品である。

脚部(9) 台付鉢等の脚端部分片である。外面下半はハケ調整の上を横ナデ仕上げ、内面は横ナデを施す。

以上の出土遺物のうち、1は弥生後期前葉の古相を保っており、2・3・8も後期中葉の所産である。4・6は、口縁の開き方や凸帯の形状に新しくなる徵候がみられる。5は、外来系土器の当朝倉地域への流入資料として貴重である。以上のことから、このA9号住居跡は、弥生後期中葉の所産と考えられる。これは、切り合い上から最古段階であることとも符合する。

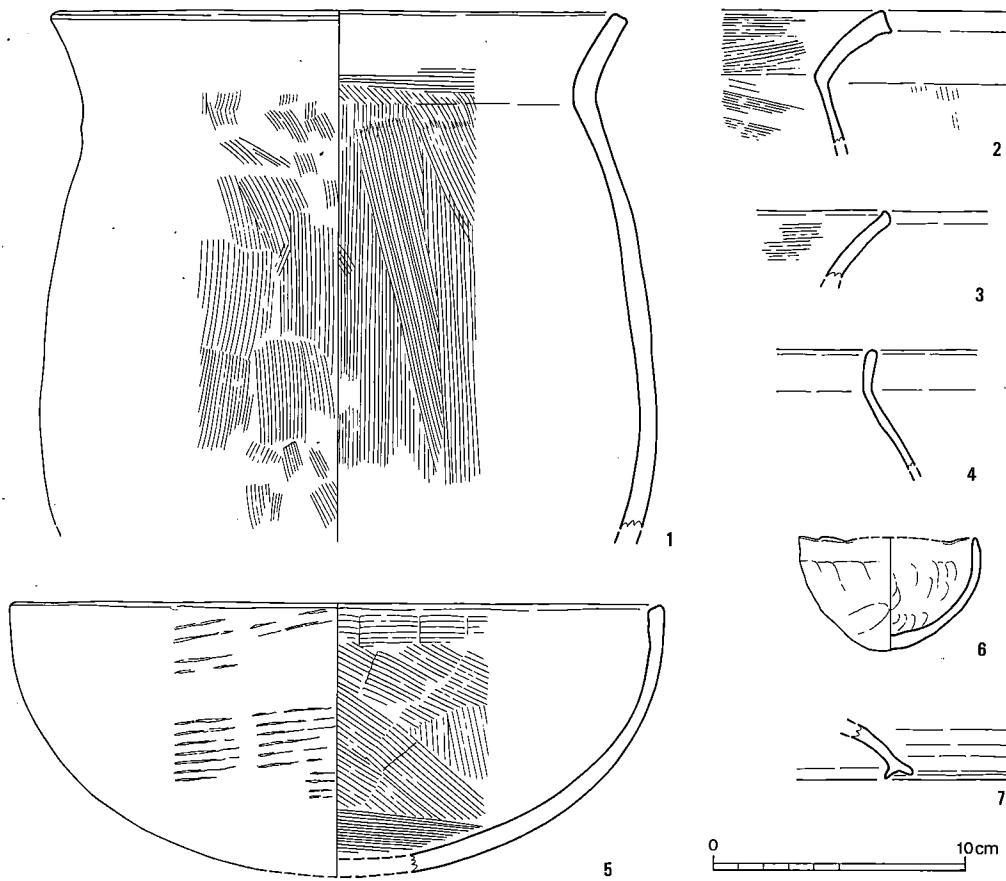
A10号竪穴住居跡（第62図、図版11）

前述のA9号住居と同様に、A区北端住居群の中では、切り合い上古い段階の方形住居となる。ただ、平面形は南西隅が残るのみで、全体の規模は確認できない。深さも10cm弱と残りは良くない。

炉跡や、主柱穴の配置など全く不明である。出土遺物のうち、図示できるものはない。時期の確定はできないが、切り合い状況からみて、弥生後期中頃前後の住居と考えられる。

A11号竪穴住居跡（第62図、図版11）

A区北端の複雑に切り合った住居群の中では、最も新しい部類である。図上では、A12号住居やA17号土壙にあたかも切られているようにもみえるが、実は、11号住居の西辺側が著しく削平されて、壁が残らず、輪郭のみがかろうじて確認されたためで、11号住居が12号住居や17号土



第65図 A11号住居跡出土土器実測図 (1/3)

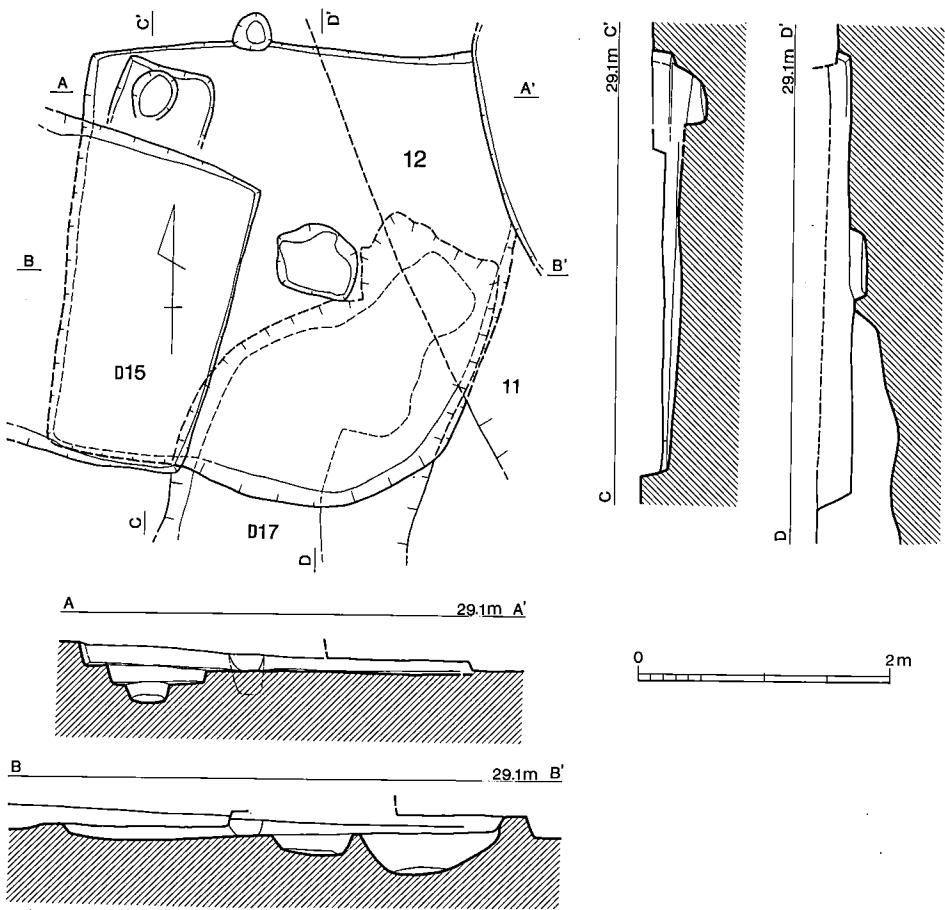
壙よりも新しい。

四周にベッド状遺構を削り出した大型方形住居と考えられ、その規模は、東西が約6m、南北が約5.4mの長方形気味のものと推定されよう。略30m²を超す大型竪穴住居となろう。

主柱穴は、図中▲印の南北の2本主柱と考えられ、その心々距離は約2.7mある。炉は不明で、床面は貼り床が施され、東半部中央を中心に底面が凹凸著しい掘り込みが広く確認された。壁際土壙は、南に張り出した中央部分がそうかとも思われるが、その部分の掘り込みは下層遺構として検出したものであり、主柱穴との位置関係からしても、疑問が残る。

ベッド状遺構上面は硬化面をしており、西辺部の壁は残らなかったが、住居の輪郭は明確につかむことができた。ベッド状遺構の幅は、西辺側で1.1m、南辺側で0.95mと、南辺沿いの方が幅が狭い。

出土遺物（第65図）

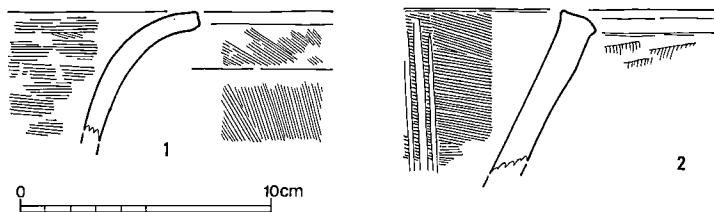


第66図 A12号住居跡実測図 (1/60)

甕(1~4) 1は、口径23cm、胴部最大径24.5cmの、あまり胴の張らないくの字口縁の長胴甕である。内外面ともに煤が付着している。2は、頸部内面にシャープな稜をつくり強く外反する口縁となる。胴部外面はハケをナデ消している。口唇部が凹状となる特徴を示し、外面には煤が付着している。3は、口縁上端がわずかに突出し、薄手となる庄内式系甕口縁片である。外面には煤が付着している。4は、短頸壺で、薄手精製品である。外面と胴部内面は丁寧なナデ、口唇部から口縁内面は横ナデ調整である。

鉢(5・6) 5は、口径26cm、器高10.8cmとなるポール状の器形である。外面には叩きが施されるが、ナデ消している。6は、手捏ね土器で、口径7cm、器高4.5cmの鉢形となる。口縁付近以下の内外面には指オサエ痕が多く残されている。

杯蓋(7) 完全に土師質焼成で褐色をなすが、つくりは須恵器そのものである。天井外面は回



第67図 A12号住居跡出土土器実測図 (1/3)

転ヘラ削り、他は横ナデが施される。7C前半代のものであり、混入品と考えられる。

以上の出土土器は、7を除いて、他は時期的に大差ないものと思われる。1の地元系の長胴甕と、3の庄内式系甕が共伴することも矛盾はなかろう。また、4のような薄手の土師器的なものも、該期の特性を示すものであろう。以上のことから、このA11号住居跡は、古墳時代初頭期の、庄内(新)式併行期の住居と考えられる。

A12号竪穴住居跡（第66図、図版12）

A区北端の住居重複部分に位置し、東側をA11号住居に、西側A15号土壙に切られる。主軸方位としては、南西隣のA5・6号住居と近似している。

東南隅が丸味を持つ平面形で、南北方向で約3.5m、東西方向で3.7~3.1mほどの略方形住居である。床面積が12m²強となる小規模住居類である。

床面には、中央に浅めの穴がみられるが、炉とは確認できなかった。柱穴は、北西隅に1個検出できたが、他には認められなかった。小規模住居に多い、柱穴不明の類であろうか。

出土遺物（第67図）

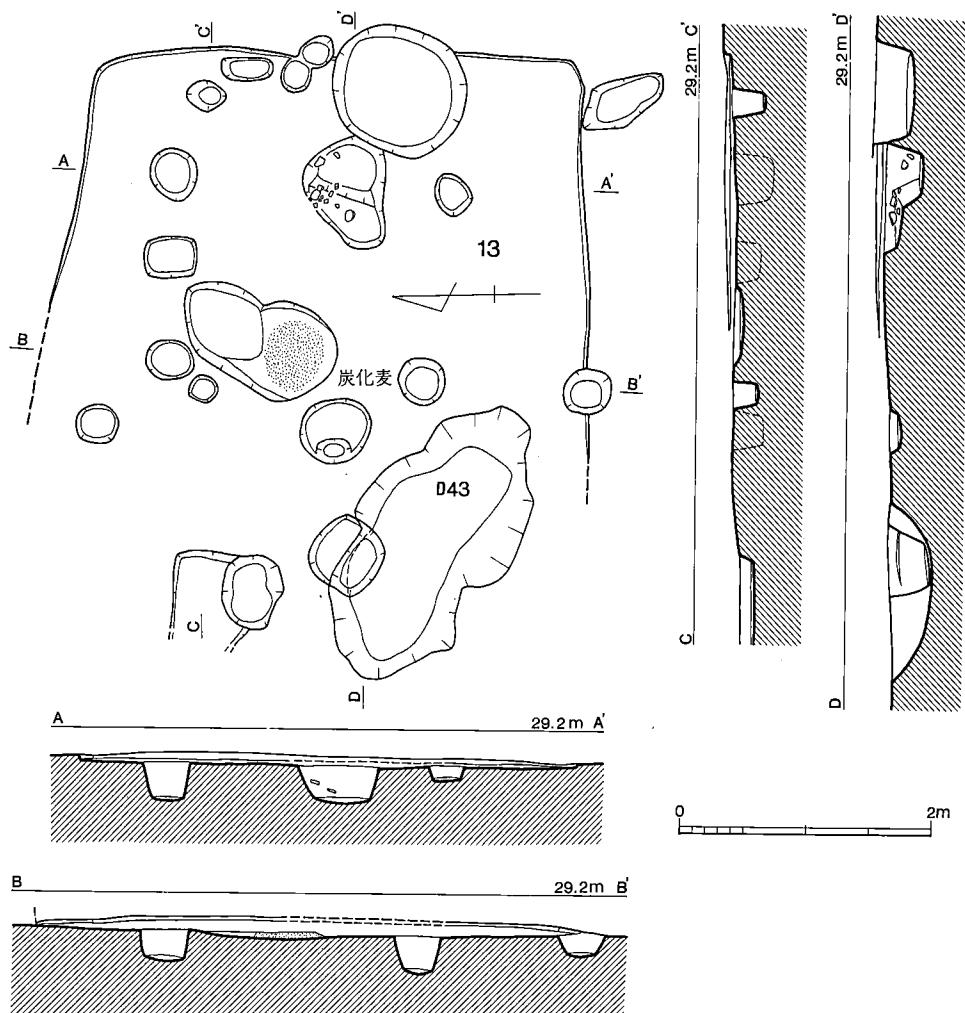
壺（1） 大きく外反して開口する壺となろう。口縁外面はハケの上から横ナデを施している。2段に開く特徴から、西瀬戸内系の壺ではないかと考えられる。

摺鉢（2） 胎土精選、灰色をなす瓦質摺鉢である。外面はハケをきれいにナデ消している。内面の櫛目の数・配置等は明確でない。備前焼を模したとすると、14C前半代の地元生産の瓦質摺鉢と推測される。

以上の土器のうち、2は混入品であるが、1が住居の年代を示すとすると、弥生後期終末を前後する時期と考えられよう。

A13号竪穴住居跡（第68図、図版12）

A区西寄りの中央付近で、A5・6号住居の南方5mに位置する。全体に残りは良くないが、特に西辺側は住居の輪郭すら削平されて残っていない。よって、西側のA43号土壙との切り合い関係は不明である。東辺中央の大きめの穴P183とその北隣の小さなP157は、住居を切って掘り



第68図 A13号住居跡実測図 (1/60)

込まれている。

東壁沿いで3.8m、東西方向は3.3m以上あることは確実で、推定 16m^2 程のやや小規模な方形プランの竪穴住居となる。

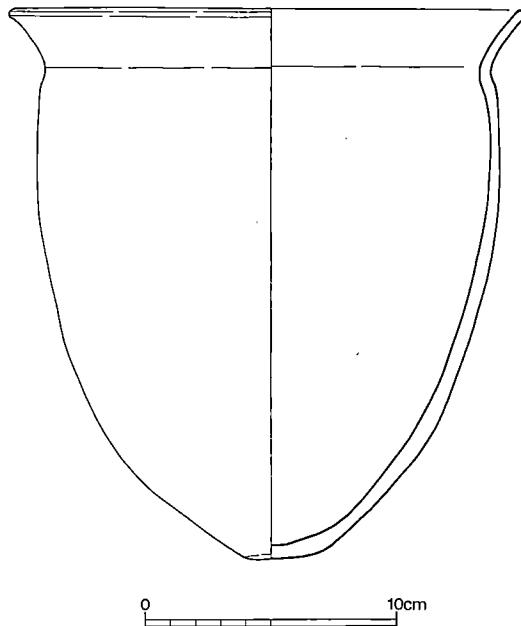
柱穴は、床面上に10余個小ピットを検出したが、整然とした配置を示すものは無い。4主柱穴となりそうなものもみられるが、確定はできない。

特筆すべきは、床面中央よりやや北に寄って浅い掘り込みがみられ、その中に炭化麦がびっしりつまっていたということである。直径50cmほどの範囲に、厚さ3~4cmに炭化麦だけが残っていた。

出土遺物（第69図）

甕 口径20.6cm、器高21.6cmとなる小形甕である。口縁外端が小さく突出するくせがある。底部は3.3cmの小さなもので、凸レンズ状にふくらんでいる。内外面全面が丁寧にナデ調整されている。

出土遺物のうち、炭化米について現在所在不明で、植物学的な分析に出せない状況であるが、再発見次第、機会を得て報告させていただきたいと考えている。図示した甕は、弥生後期終末期のもので、当住居の年代を示している。



第69図 A13号住居跡出土土器実測図（1/3）

A14号竪穴住居跡（第70図）

A区の東端隅付近に位置し、東半をA2号溝に切られ、西南隅を柿の木穴のA2号土壙に切られている。北西側では、おそらく縄文期遺構と考えられるA18号土壙を切っている。住居の東側の輪郭がA2号溝の東外側で発見できなかったため、住居の範囲は溝内でおさまるものと判断できる。

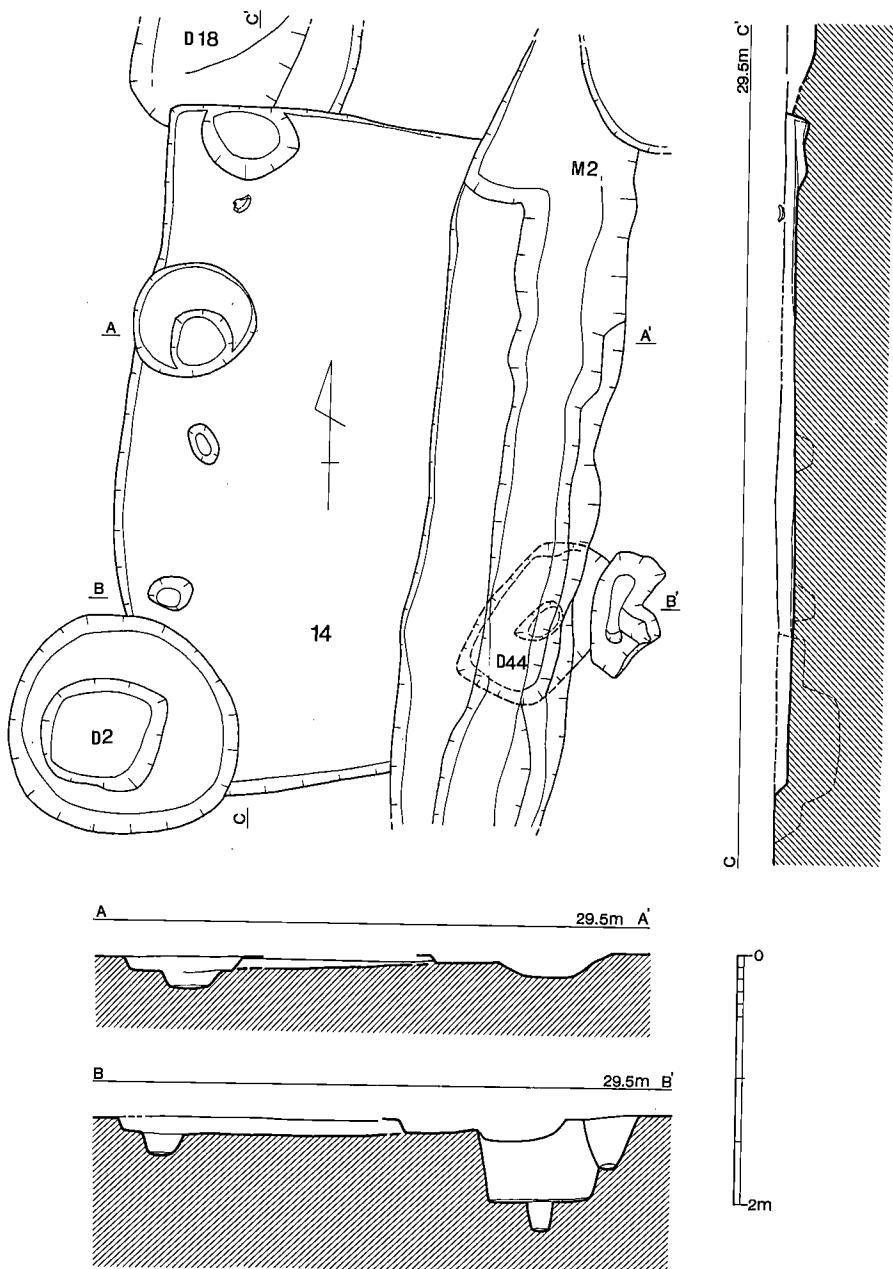
住居の大きさは、南北5.4m、東西3.8m以内の長方形となり、20.5m²ほどの中規模住居と考えられる。壁は10cm強ほどしか残っていない。

床面には、西壁寄りに小ピットが3個ほど検出されたが、柱穴としてまとまりを見せる類ではない。炉跡やその他の施設は検出されていない。

出土遺物（第71図）

瓦質土器 底径15.9cmで、胎土精良、焼成瓦質で黒～灰褐色をなす。内面はナデ、外面最下端付近はヘラ削り状、外面稜線の上下は横ナデ、その上位は板状工具による縦位擦過状をなす。本来の器形が見当つかないが、花瓶の瓦質土器による模倣品とも考えられる。14C前後のものかと推定される。

この土器そのものは、当住居への混入品であり、むしろ、A2号溝に伴うべきものと考えられる。A14号住居跡は、出土遺物から年代を決定することはできないが、遺跡の状況からみて、弥生後期終末期前後のものではないかと推測しておく。



第70図 A14号住居跡実測図 (1/60)

A15号竪穴住居跡 (第72図, 図版12)

A区の中央やや南寄りに位置し、西北側を大きなA1号落込みに切られ、西南側をA16号住居に切られている。また、住居中央を東西の細い溝にも切られている。さらに、住居内北側の大

きなP130も住居より新しい。なお、東壁中央付近で当住居を切るような状況で、他の住居のコーナーらしき掘り込みを確認したが、これの延長線を見出すことができず、不明のままとなつた。

住居の大きさは、南北4.5m以上、東西に4m以上の、中規模方形住居となると思われる。壁の残りは悪く、深さ5cm弱にすぎない。

床面には、小ピットが3個検出されたが、主柱穴となりそうな配置を示すものではない。また、北東側床面上に、13個の小角礫の集石が認められたが、性格は不明である。なお、炉跡についても検出されていない。

出土遺物のうち図示できるものが無く、時期の決定が困難であるが、遺跡の状況からみて、弥生後期～古墳時代初頭の範囲の中のものであろうと思われる。

A16号竪穴住居跡（第72図）

A15号住居の南側を切って営まれた方形住居跡である。西南側をA25号土壙に切られ、北西側をA1号落込みによって切られている。A15号住居同様に上半を大きく削平されて、残りが良くないため、当住居の西壁ラインもつかめなかった。

規模は、南北略2.9mほど、東西は2.5m以上となると思われ、推定10m²前後の小型住居類となろう。

床面には、小ピットがいくらか検出されたが、主柱穴配置をとるものではない。炉も発見できなかった。なお、北東隅付近の大きな掘り込みは、貼り床下部構造を示すものと考えられる。

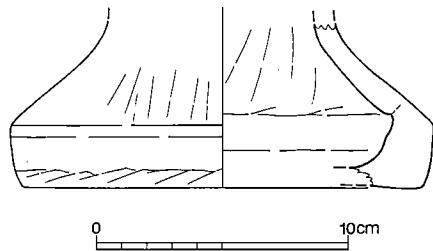
出土遺物のうち図示できるものは無く、年代を決定できないが、遺跡の状況からみて、弥生時代後期～古墳時代初頭の範囲の中におさまる時期のものと推測しておく。

A17号竪穴住居跡（第62図、図版11）

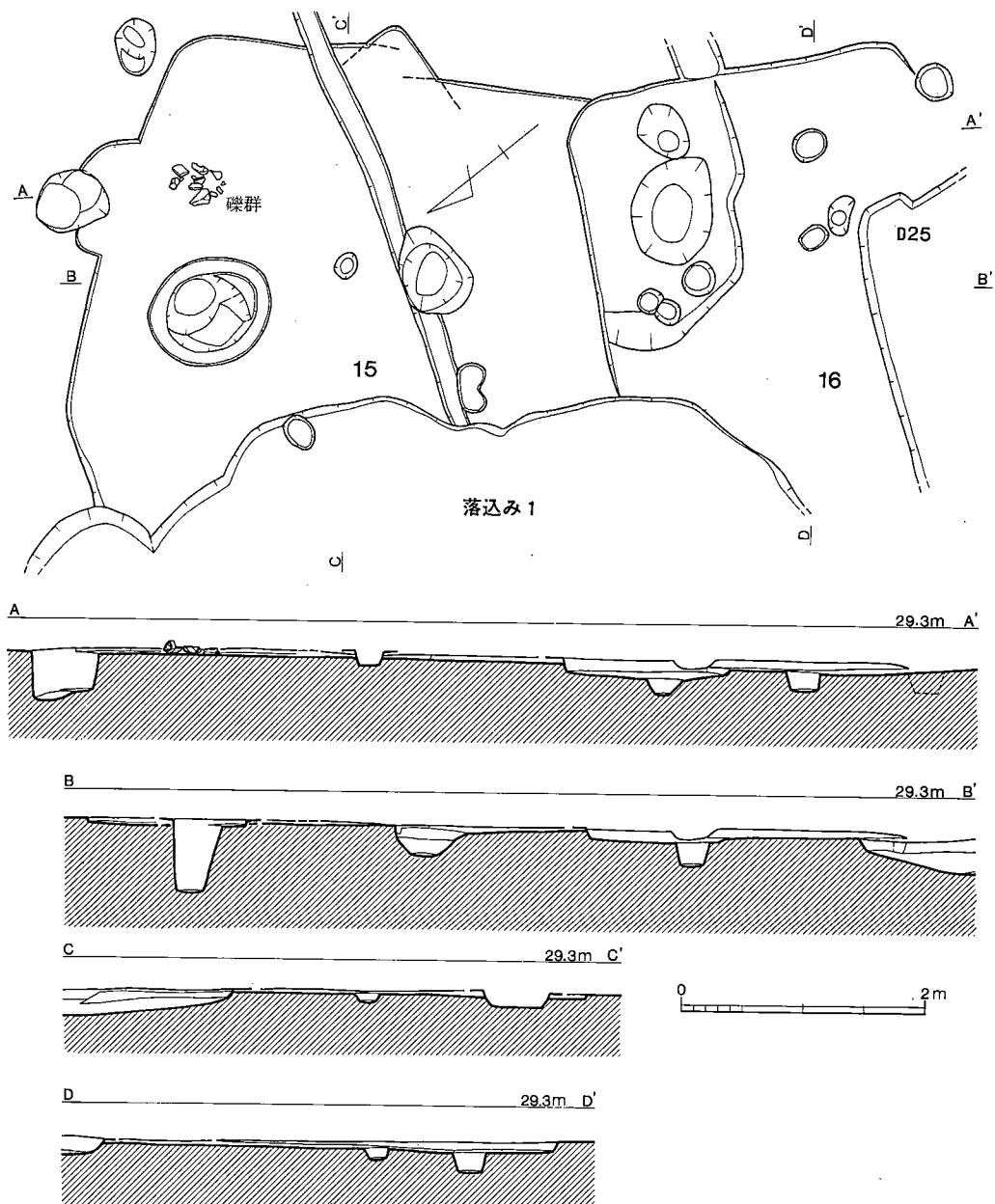
A区北端近くの住居重複部に位置する。西と南でそれぞれA10号住居、A9号住居を切り、北と北東側で各々A11号住居、A18号住居に切られている。つまり、南西コーナー部分しか残っていないことになる。

住居の規模はわからないが、後述するごとくA18号住居の炉としたものが、当17号住居のものであるとすると、炉を中心と考えて、一辺5m前後の中型住居と推定することもできる。

西南隅の床面が一段高く、幅1.2m、長さ1.9mの間が、一部貼り付けのベッド状遺構になると考えられる。柱穴については、該当しそうなものが見当らない。炉は、図中でA18号住居のも



第71図 A14号居住跡出土土器実測図 (1/3)



第72図 A15・16号住居跡実測図 (1/60)

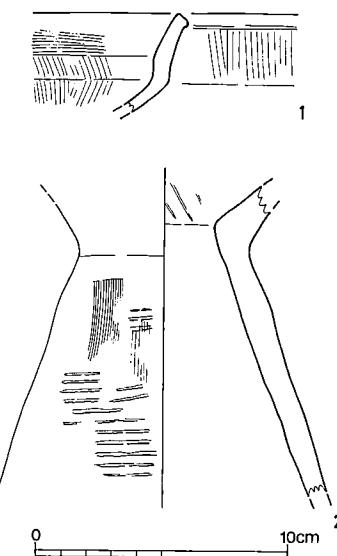
のとして検出図示した底面が焼けたものがあり、住居内での位置関係からみて、むしろこのA17号住居のものと考えた方が、ちょうど中央に位置することからより妥当と考える。

出土遺物（第73図）

高杯(1) 体部中途で屈折して立ち上がり気味に短かく傾する口縁となる。口縁外端は小さく突出するくせがある。口縁外面は縦ハケ、体部外面はナデている。口縁内面上半は横ハケの上を横ナデしており、以下内面は縦ハケを施している。

器台(2) 大ぶりの類で、上半でしまり、上方へ開くタイプとなる。外面下半に叩きが残り、内面とくびれ部外面はナデている。器台にしては精製品である。

以上の土器は高杯も古い様相を示しており、器台も後期後葉以降の雑な仕上げのものとは異なる。よって、これらの土器の示す弥生後期中葉が、当A17号住居跡の時期を示すと考えられる。

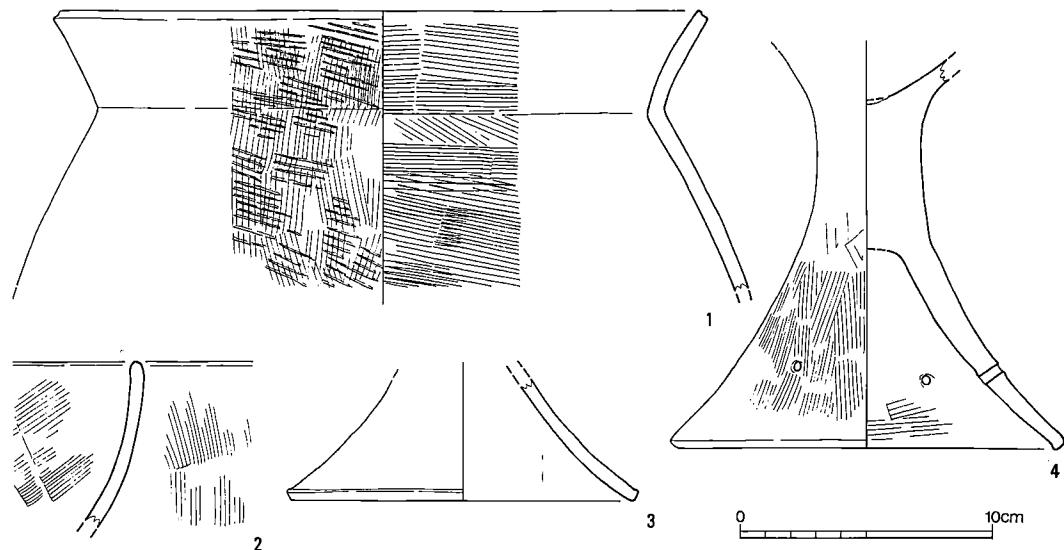


A18号竪穴住居跡 (第62図)

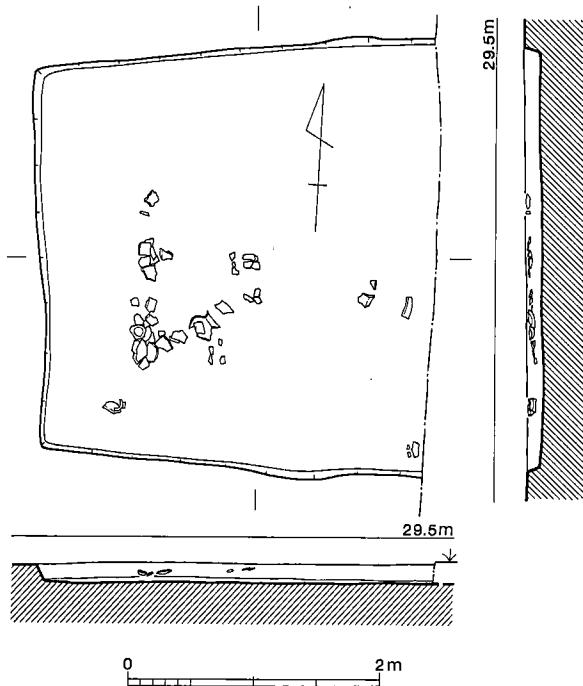
第73図 A17号住居跡出土土器実測図 (1/3)

前述のA17号住居を西南側で切る方形住居である。南

壁ラインしか確認できなかったが、北西側ではA11号住居との切り合い関係を知り得なかった。この不明確さは、中世溝である北側のA 3号溝への流れ込みに伴う削平・堆積に起因するものと考えられる。ただ、出土遺物等から検討すると、A11号住居が当A18号住居よりも新しいことがわかる。



第74図 A18号住居跡出土土器実測図 (1/3)



第75図 B1号住居跡実測図 (1/60)

脚部 (3・4) 3は、復原脚端径14cmとなり、脚付鉢になるかと思われる。外面は縦方向のナデ、内面は横ナデ仕上げである。4は、脚端径15.6cmで、小ぶりの脚付鉢あるいは脚付壺になると思われる。裾部の穿孔は全周で6個配置されると考えられる。脚部内面はナデ、下半部に部分的にハケが残る。脚柱部外面はナデ、その下のハケとの間は、削り状の痕跡がみられる。上の器部分の内面はナデ調整。

以上の出土土器は、1の甕の特徴から、弥生後期末葉と考えられ、当A18号住居跡の年代を示すものと思われる。

B1号竪穴住居跡 (第75図、図版13・14)

B区の北端に位置し、地形的には、東側の小さな谷部に面する場所にあたる。東壁側は、発掘区外となるが、その直下には町道があり、実際には、町道開削によりカットされている。

西壁が3.0m、北壁が3.18m以上、南壁が3.05m以上となる方形竪穴住居で、床面積が12m²前後的小規模類である。深さは15cm前後で、あまり残りは良くないが、覆土中には多量の土師器類が投棄されていた。

床面には、炉はもとより、柱穴1つ検出されなかった。典型的小型住居の故であろうか。

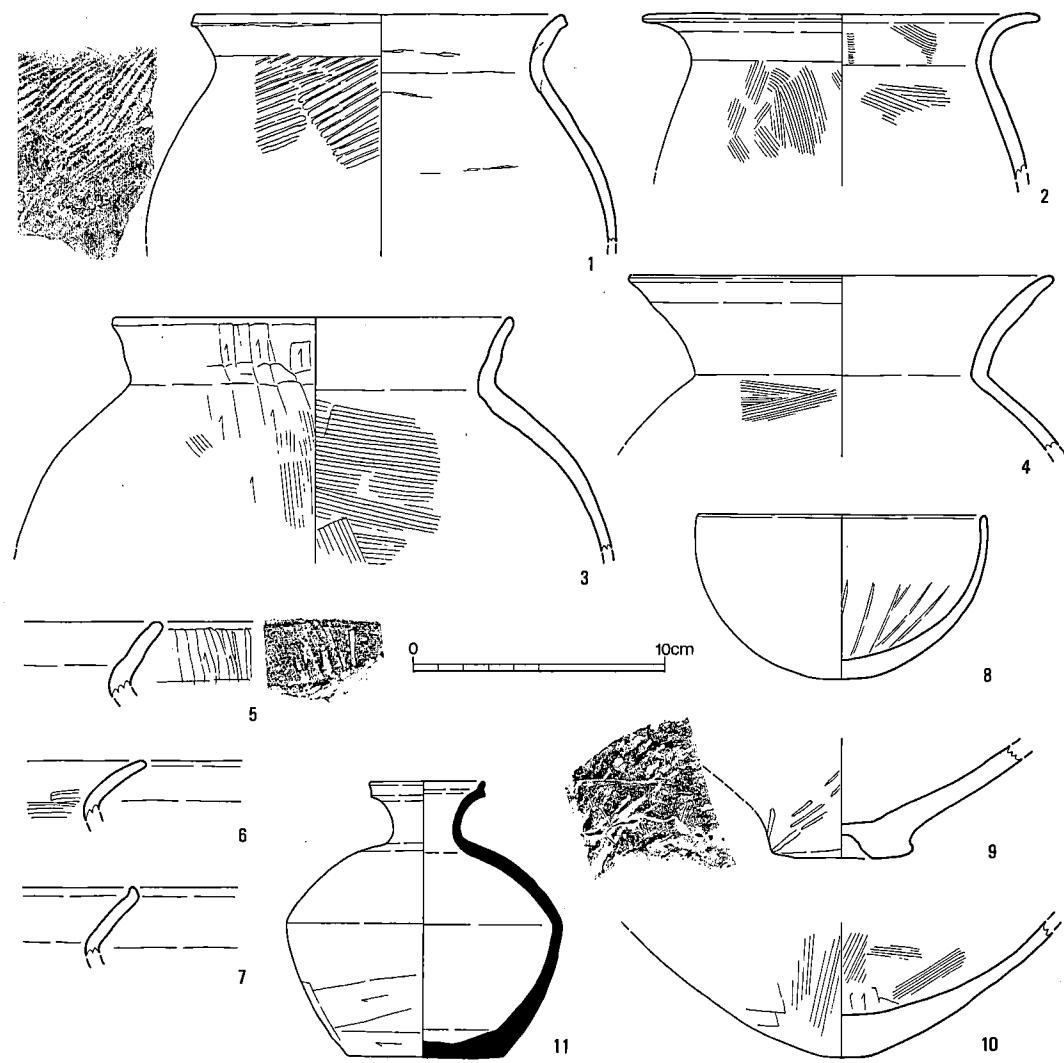
出土遺物 (第76図)

南壁際での深さは約40cmと、良く残っており、炉も検出されたが、位置的に若干南に寄りすぎており、よりA17号住居の炉とした方が妥当と想定できる。床面上の小ピットから柱穴配置を考えるのは困難である。

出土遺物 (第74図)

甕(1) 口径26cmで、直線的に開く口縁となる。口唇面は凹状となり、外面は叩きの上から縦ハケを施している。外面には煤が付着している。

鉢(2) 内湾気味に立ち上がる口縁で、外面には縦ハケ、内面にはハケの上からナデ調整を施す。口縁外面は横ナデ。



第76図 B1号住居跡出土土器実測図 (1/3)

甕(1～7) 1は、復原口径15cmで、外面に粗い叩きを施し、胴の張る器形となる。口唇外端が突出し、内面はナデ、外面の叩き以下もナデている。外面のほぼ全面に煤が付着している。2は、復原口径15.8cmで、丸く外反して長く延びる特徴的な口縁をなす。口縁内外面は横ナデで、内面にはハケが残る。胴部内面はナデで一部にハケが残る。3は、復原口径16cmで、丸く張る胴部に、外傾気味に開く口縁をつける。口縁外面は僅かに中ぶくらみをみせる。胴部から口縁にかけての外面はハケの上を削り状の板状工具による搔き上げがみられる。実は、この土器と10の底部は同一個体かと思われる。4は、復原口径16.8cmで、大きく開く口縁で、壺形土

器といった方がよかろう。口縁外面は中ぶくらみし、頸部内面の稜はシャープである。口縁内外面横ナデ、胴部内面はナデ調整である。5は、3と同一個体かと思われる。6は、大きく開く口縁片で頸部内面にハケを残す。外面には煤が付着している。7は、口縁上端をつまみ上げる類で、内外面ともに横ナデ、頸部以下の内面はナデがみられる。外面には煤が付着し、胎土はかなり精選されている。

鉢（8） 口径11.5～12.2cmで、やや楕円形気味になっている。器高6.5cmの小型で深めのボル状となる。内面はハケの上を完全にナデ消しているよう、ハケ工具端圧痕が残っている。外面はヘラ先による荒いナデを施している。

底部（9・10） 9は、底径5.6cmの壺底部で、底外面中央がへこむ類である。外面は叩きの上を荒く磨いているようあり、内面は丁寧にナデている。第V様式特有の底部である。10は、3と同一個体かと思われるもので、直径2cmという小さな底部をなす。

須恵器壺（11） 口径4.6cm、器高10.9cm、底径6.3cmとなる小型壺である。胴部中途に稜をつくり、外面下半は底部外面まで手持ちのヘラ削りを施す。他は回転ナデ、内底面はナデている。暗灰色を呈し、焼成堅緻である。明らかに奈良期のもので、小ピット等が住居内に切り込んでいたために混入したものであろう。

以上の出土土器は、11を除いて他は、畿内第V様式や庄内式系の口縁などもみられ、在地系土器もかなり新しい様相をみせている。これらのことから、当B1号住居跡は、古墳時代初頭庄内（新）期併行期の年代が考えられる。

B2号竪穴住居跡（第77図、図版14）

B区の中央やや東寄りに位置する方形住居跡である。東側でB3号住居を、南側でB4号住居を切る。北西コーナーで大きめの楕円形穴に切られている。

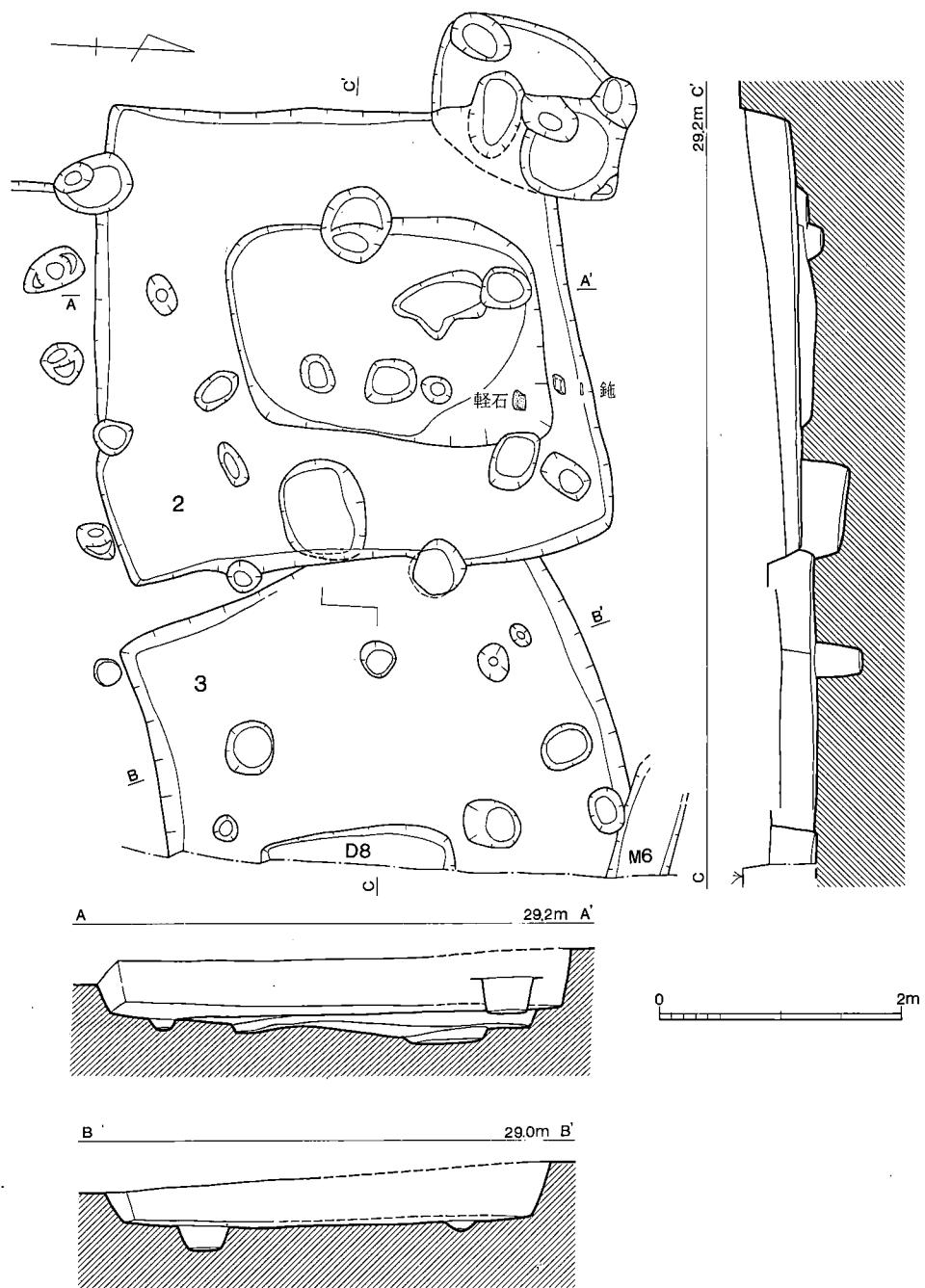
規模は、南北幅3.8～4.1m、東西幅3.7～3.95mで、やや歪つな方形となり、床面積15m²の小型住居類となる。深さは40cm程とよく残り、床面は東側へわずかに傾斜している。

床面中央北寄りに大きな掘り込みがみられ、貼床下部構造の可能性が強いが、B区での他住居に例が無いため、若干の疑問は残る。東壁際中央の楕円形の深いピットの如く、住居壁の下にもぐり込んでいる。明らかに古い遺構もあるので、結論は出しにくい。

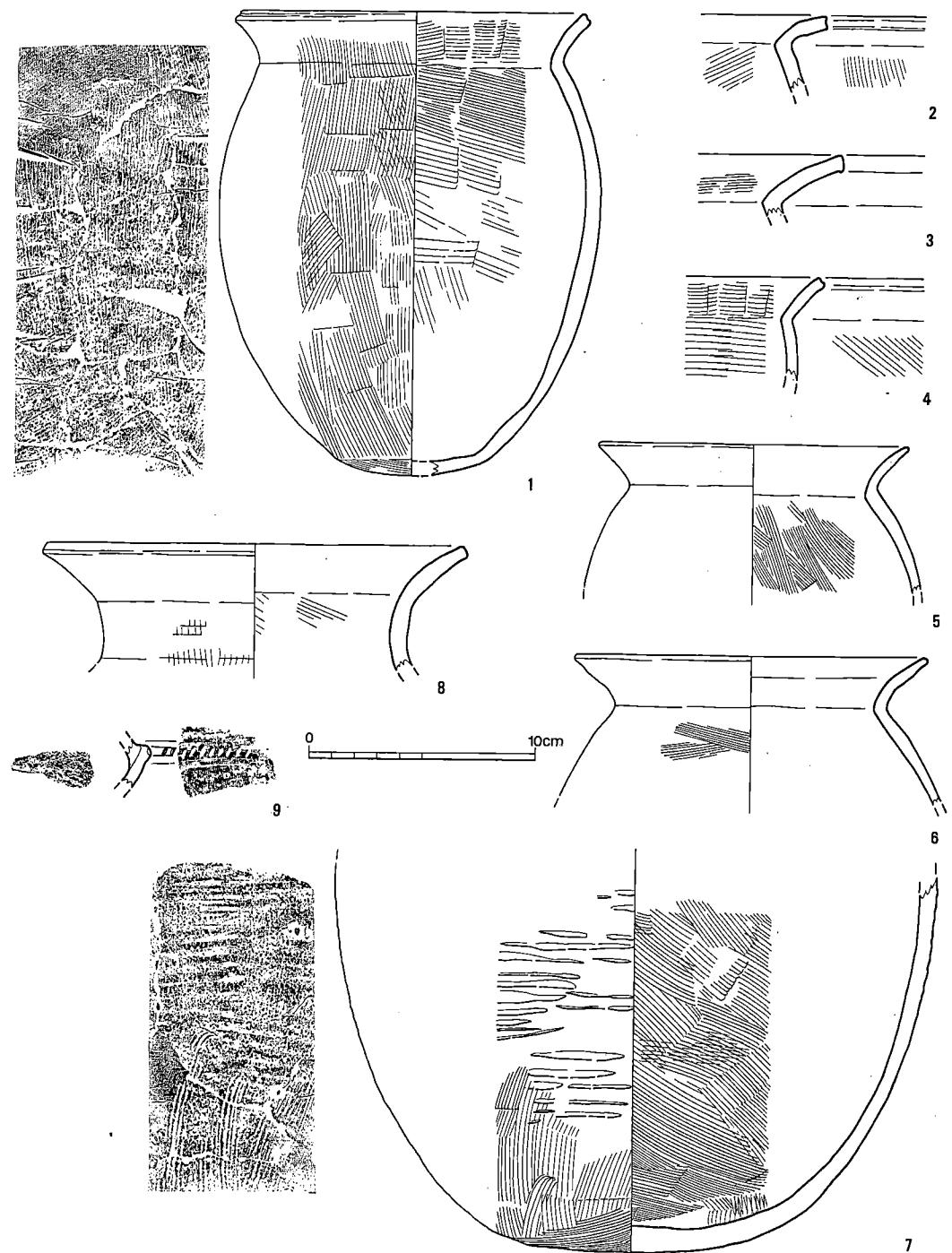
床面には小ピットが多く検出されたが、主柱穴配置を示すようなものは無い。炉もその所在は明らかでない。

出土遺物（第78～80図）

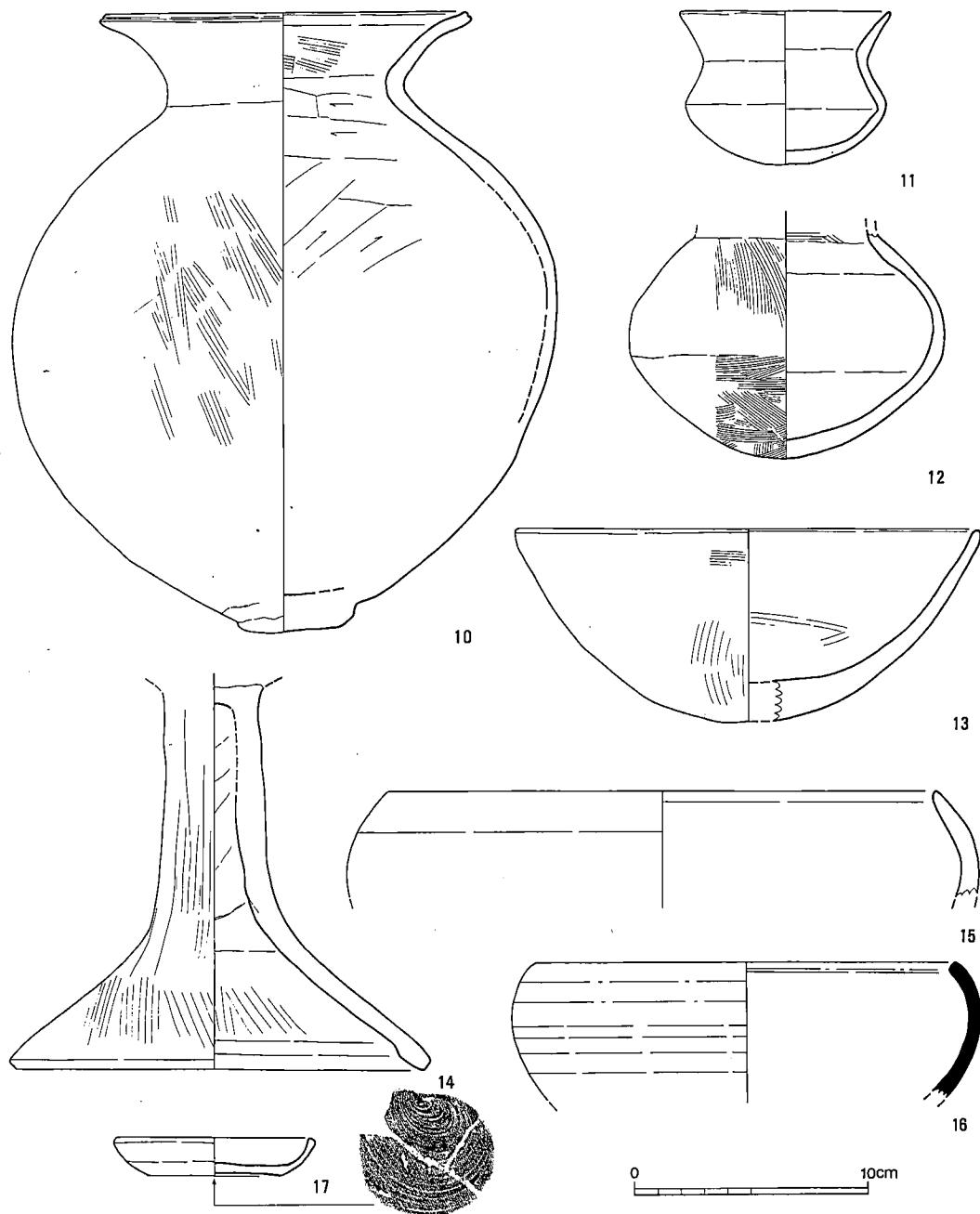
甕（1～6） 1は、口径15.8cm、器高20.4cmの小型甕で、胴部上半に最大径をつくる。口縁端部に凹線を入れ、胴部内面下半はハケをナデ消している。底部は凸レンズ状にふくらむが、かなり薄手である。2は、頸部内面の稜が鋭く、胴部内面はハケの上を横ナデしている。3は、



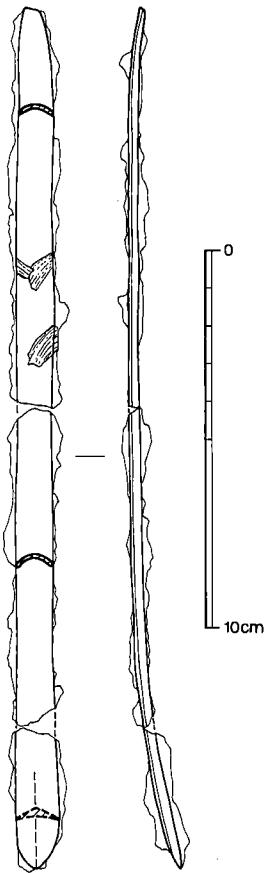
第77図 B2・3号住居跡実測図 (1/60)



第78図 B2号住居跡出土土器実測図（その1）(1/3)



第79図 B2号住居跡出土土器実測図（その2）(1/3)



第80図 B2号住居跡出土
鉄器実測図 (1/2)

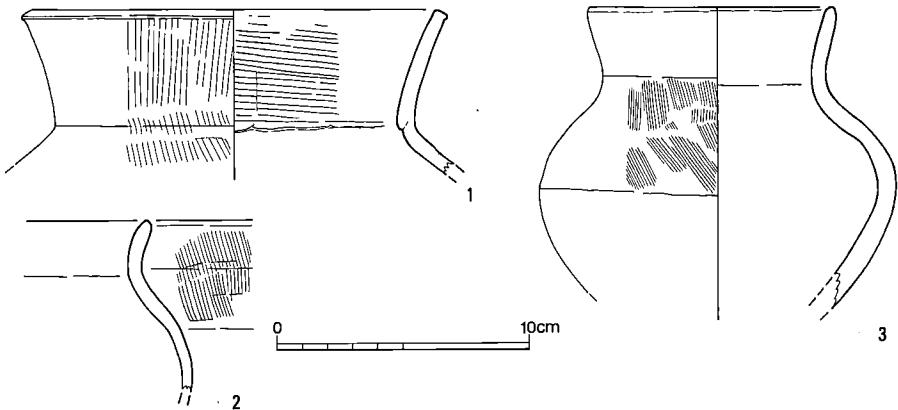
頸部内面に鋭い稜をつくり、長くのびる口縁となる。口縁下端は小さくつまみ出されている。4は、あまり張らない胴部に、内面に稜をつくり直線的に開く口縁をつける。目の粗いハケ調整を施している。5は、復原口径13.8cmの小型品で、内面には目の細かいハケを施すが、外面は磨滅しており調整不明。6は、口径15.6cmで、胴部内面は丁寧にナデている。口縁中途で折れて更に開くような類で、口縁外面は中ぶくらみをみせている。

壺 (7~12) 7は、丸底の底部で、外面上半には粗い叩き、外面下半と内面は荒いハケ調整が施されている。8は、復原口径18.8cmで、外反の途中で少し折れて更に大きく開く形状をなす。頸部内面はハケをナデ消す。9は複合口縁壺の屈折部外端に小さな刻目を巡らすものである。内面上半は斜めハケ、以下はナデ、外面下半はヘラ磨きかと思われる。10は、口径15.8cm、器高26.4cm、胴部最大径24cmとなる。胴部内面上半はヘラ削り、下半はナデ、胴部外面はハケの上から粗雑なヘラ磨きを施している。底部は突出した直径5cmの小さなもので、器表はナデている。外面には黒斑・煤がみられる。11は、口径9cm、器高6.5cmで、内面と胴部外面は丁寧なナデ調整。直径2.2cmの小さな底部をもち、胴下半で屈曲する特異な器形をもつ。12は、尖り気味の丸底を持ち、胴部最大径13.5cmとなる。胴部内面上半はナデ、下半は荒いヘラナデ状、外面中位のハケの無い部分もヘラナデ状。

鉢 (13・15・16) 13は、復原口径19.8cm、器高8.2cmとなる。底部が部厚く、内面は粗いハケをナデ消している。外面は削りの上に粗いハケを施すが、殆ど磨滅している。15は鉄鉢形須恵器を模したもので、復原口径23.5cmとなる。全面磨滅している。16は、鉄鉢形須恵器で、体部外面下半は回転ヘラ削り、内面下端はナデ、他は回転ナデを施す。復原口径18cmで、15とともに奈良前半期の所産で混入品と考えられる。

高杯 (14) 脚端径18cmで、脚端内面が肥厚する異類である。脚柱内面にはシボリ痕がみられ、裾部内面はハケをナデ消している。外面もすべてハケの上をナデている。

小皿 (17) 底部糸切りの土師器小皿で、口径8.6cm、器高1.6cm、底径5.7cmを測る。内底面にナデツケはみられず、すべて横ナデである。体部が内湾気味に立ち上がり、胎土精良である。13C代の混入品である。



第81図 B3号住居跡出土土器実測図 (1/3)

鉄鉗（第80図）全長22.8cm、幅1cmほどで、全体に錆が著しく、詳細は明らかにできないが、鉄板を全体に曲げた類である。刃先の断面等明瞭でない。上半部に革紐を巻きつけた痕跡が認められる。基部端もわずかに反っている。

以上の出土遺物は、15～17を除くと、外は2時期に大別できる。即ち、1・5・14の弥生後期中葉のものと、2～4・6・8・10・11～13の古墳時代初頭庄内式（新）併行期とである。当B2号住居跡は、B3・4号住居を切っており、時期的には後者が適当ではないかと考えられる。

B3号堅穴住居跡（第77図、図版14）

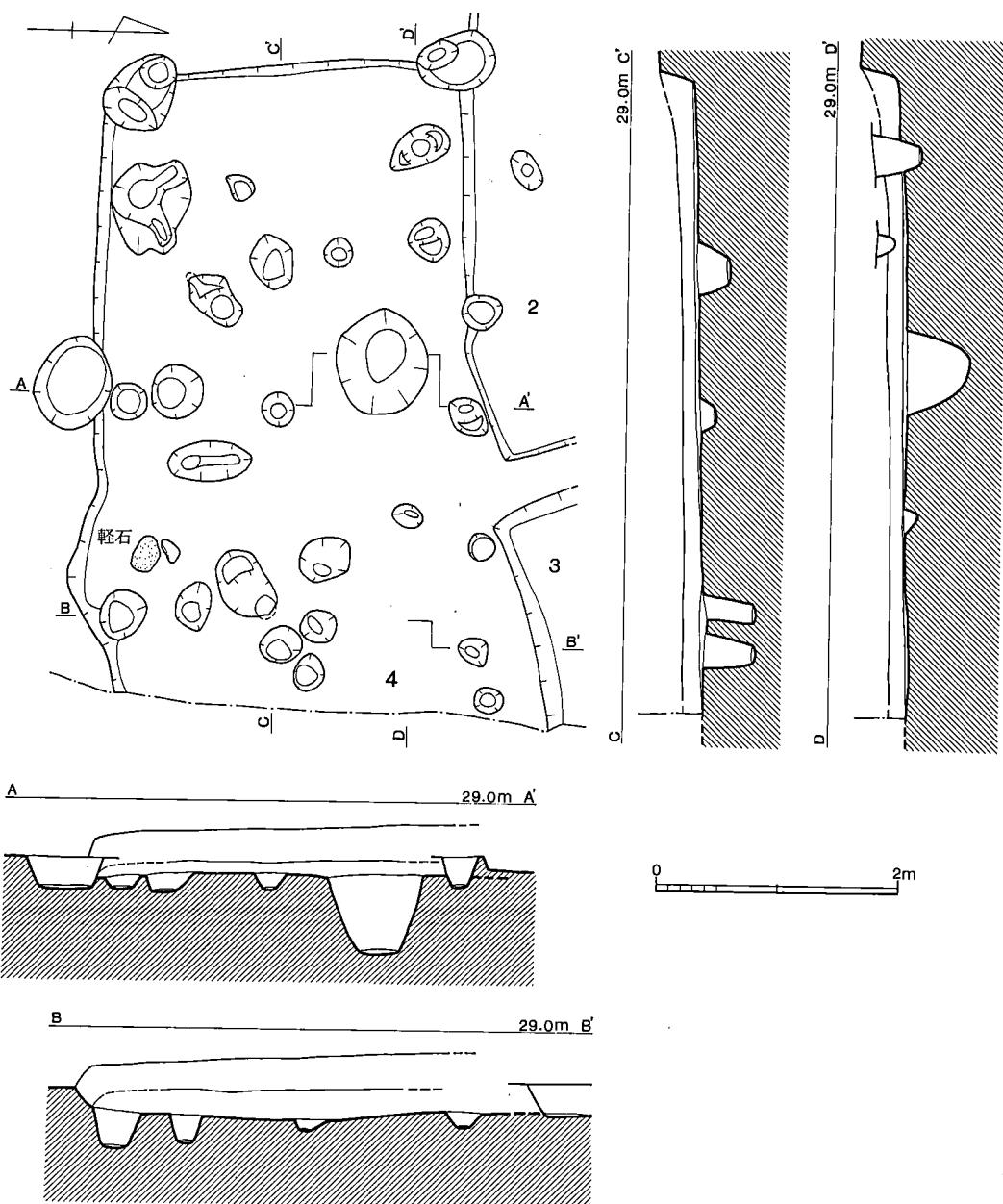
B区中央の東側発掘境界際に位置し、西側をB2号住居に、北側をB6号溝に切られる。東側は発掘区外に拡がるが、実際には直下に町道が走っており、既に開削されてしまっている。また、発掘区際でB8号土壙に切られている。

規模は、南北幅3.7m、東西幅3.5m以上で、床面積14m²弱の小型方形住居となる。主軸方位は、B19号住居跡と近似しており、A区の例をみても、この方位のものは切り合い上古い段階のものと考えられる。

深さは45cmほどと残りは良い。床面上に5個の小ピットを検出したが、明確な主柱穴配置を知ることはできない。炉についても発見できなかった。

出土遺物（第81図）

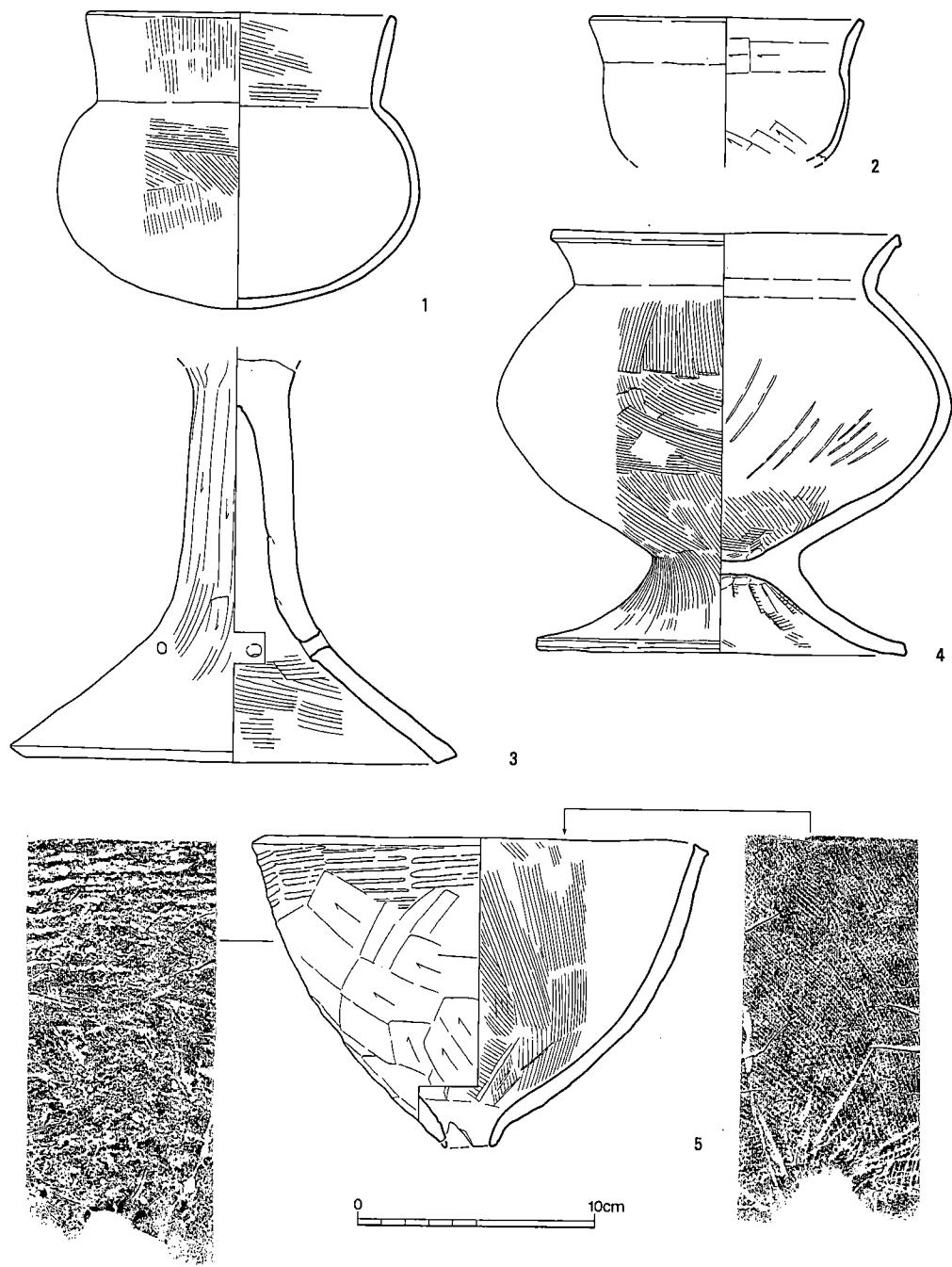
壺(1～3) 1は、復原口径17cmで、口縁部が直線的に外傾気味に開く類である。口唇外端は小さくつまみ出され、胴部内面はナデている。頸部内面は横ナデ、口縁内面と外面はハケの上を横ナデしている。2は、短く外傾する程度の口縁で、内面と胴部外面下半はナデしている。3は、復原口径9.9cm、胴部最大径14.1cmとなり、2と似たような直口壺で、同一個体かもしれな



第82図 B 4号住居跡実測図 (1/60)

い。胴部外面上半はハケ、下半は磨滅、口縁外面から内面上半は横ナデ、以下の内面はナデでいる。

以上の土器は、1の特徴からみて、弥生時代後期末葉の所産と考えられ、当B 3号住居跡の當



第 83 図 B 4 号住居跡出土土器実測図 (1/3)

まれた年代を示すものであろう。

B 4 号竪穴住居跡（第82図、図版14）

前述のB 3・4号住居の南側に位置する。北側をB 2号住居に切られるが、東側の壁の立ち上がりを確認できなかったために、厳密にはB 3号住居との切り合い関係を明らかにすることはできない。

規模は、南北に3m以上、東西に5.4m以上となる。図示した調査結果のままであるとすると、30m²程度の大型方形住居となる可能性がある。深さは30cmほどと、良く残っている。床面は全体に東側へ傾斜を持っている。

床面上にて検出した小ピットは多くあるが、明確な主柱穴配置を見出すことはできない。炉跡についても発見できなかった。

出土遺物（第83図）

壺類（1・4） 1は、口径13.1cm、器高12.4cm、胴部最大径15.2cmとなる。口縁内外面はハケの上を横ナデ、胴部内面はナデ、外面下半もナデている。外面には煤が付着する。4は、脚付壺で、復原口径14.8cm、器高17.6cm、脚端径15.6cmとなる。口縁内外面横ナデ、胴部内面上半には工具端痕が残り、ハケをナデ消したものと考えられる。

鉢（2） 口径11.6cmで、口縁内面下半と胴部内面下半にヘラ削り状の痕跡がみられる。他面はすべて丁寧なナデ調整である。

高杯（3） 脚部上端径4cm、脚端径18.9cmで、全周で5個の穿孔がみられる。脚柱上半外面は上から下への搔きおとし風調整で、裾部外面はナデている。胎土はかなり精選されており、外面には化粧土が施されている。

甌（5） 口径19.2cm、器高13cmで、下端に尖り気味の孔を有する漏斗状器形である。外面は上端に叩きが残るが、それ以下はヘラ削り状の板状工具による搔き上げがみられる。

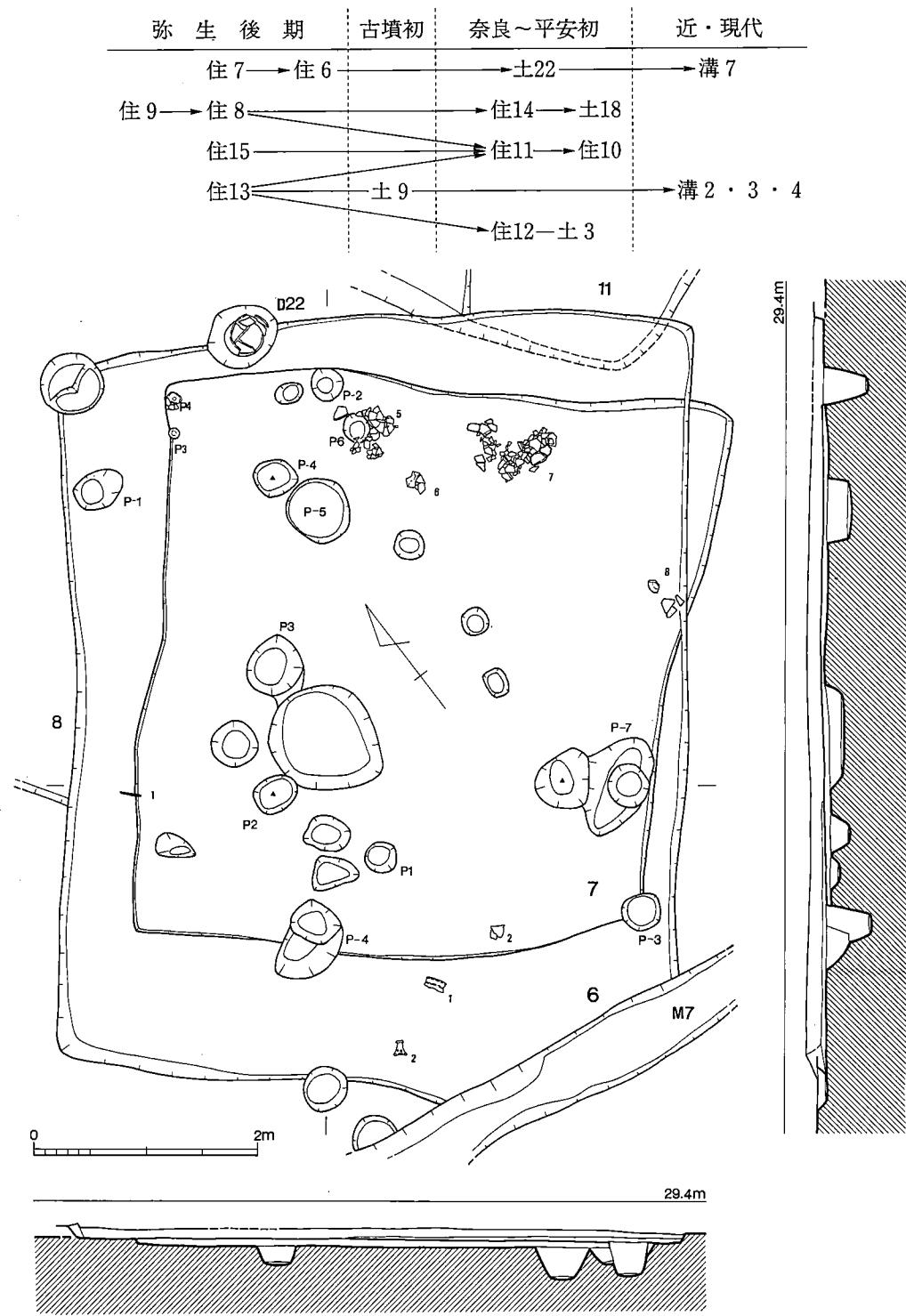
以上の土器は、2・5が調整技法や器形から弥生後期末葉或はより若干新しくなるものであるが、3・4は弥生後期中葉と考えてよい。3は器壁が厚く、裾端の内湾化もみられず、未だ洗練されていない古相を持つ。4は、平底に脚部を付けたもので、口頸部の形状も後期前葉的ですらある。以上のうち、3・4などの弥生後期中葉の土器類が当B 4号住居跡の時期を示すものであろう。

B 6号竪穴住居跡（第84図、図版17・18）

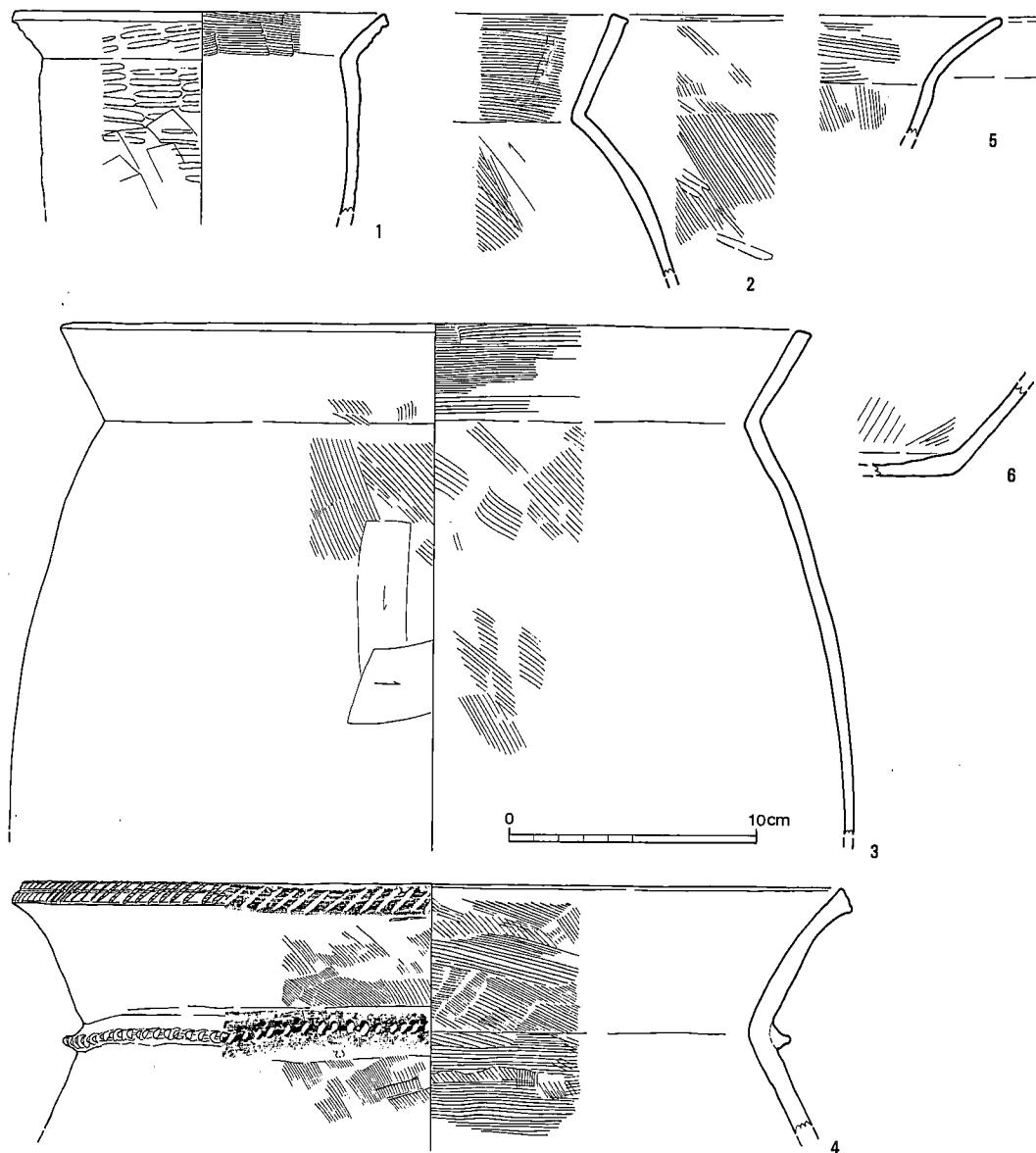
B区中央の複雑に切り合う住居群中の南端に位置する方形住居である。この部分の切り合い関係を整理すると次頁冒頭のようになる。（古→新を示す。）

当B 6号住居は、長辺が6.9m、短辺が5.6mの長方形プランとなり、38.6m²の大型類の床面積規模を誇る。床面までの深さは10cm前後と残りは良くない。

B 7号住居と大きく重複しているため、柱穴について両者を峻別することが困難であった。



第84図 B6・7号住居跡実測図 (1/60)

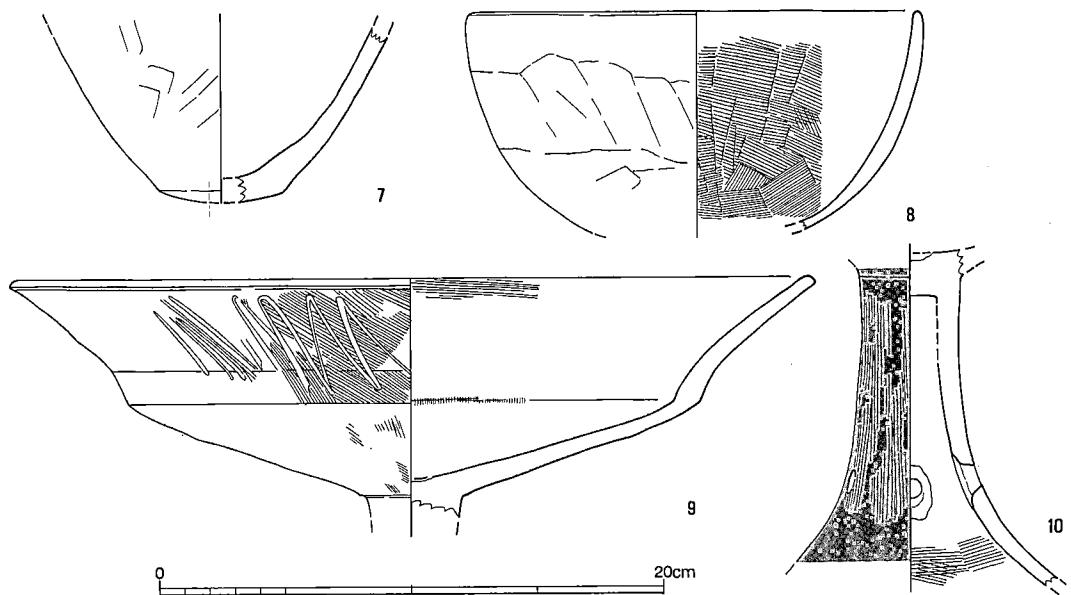


第85図 B6号住居跡出土土器実測図（その1）(1/3)

図中の住6P-2と住6P-4が、深さも充分で、主柱穴の可能性があるが、中心より西に片寄った位置であることが気にかかる。また、炉跡等の他の施設は発見できなかった。

出土遺物（第85・86図）

甕（1～4・6・7） 1は、復原口径15.2cmで、胴部内面はナデ、外面は叩きで、下半は上から板状工具による擦過がみられる。2は、大型甕口縁部で、内面にシャープな稜をつくる。胴



第86図 B6号住居跡出土土器実測図（その2）(1/3)

部内面はナデで、一部にハケと擦過がみられる。3は、口径30.4cmの大型甕で、外面には煤が付着する。胴部内面は磨滅気味で、外面下半には板状工具による擦過調整がみられる。2と3は同一個体かもしれない。4は、復原口径34cmの大型品で、口唇面にはハケ工具端による斜位刻目が、頸部の三角凸帯には小さい刻目が巡らされる。6は、凸レンズ状に僅かにふくらむ底部で、内面はハケの上をナデ、胴部外面はナデ、底外面はハケを施している。7は、直径5cmの凸レンズ状にふくらむ底部で、内面はナデ、胴部外面はナデで部分的に擦過、底外面はナデている。

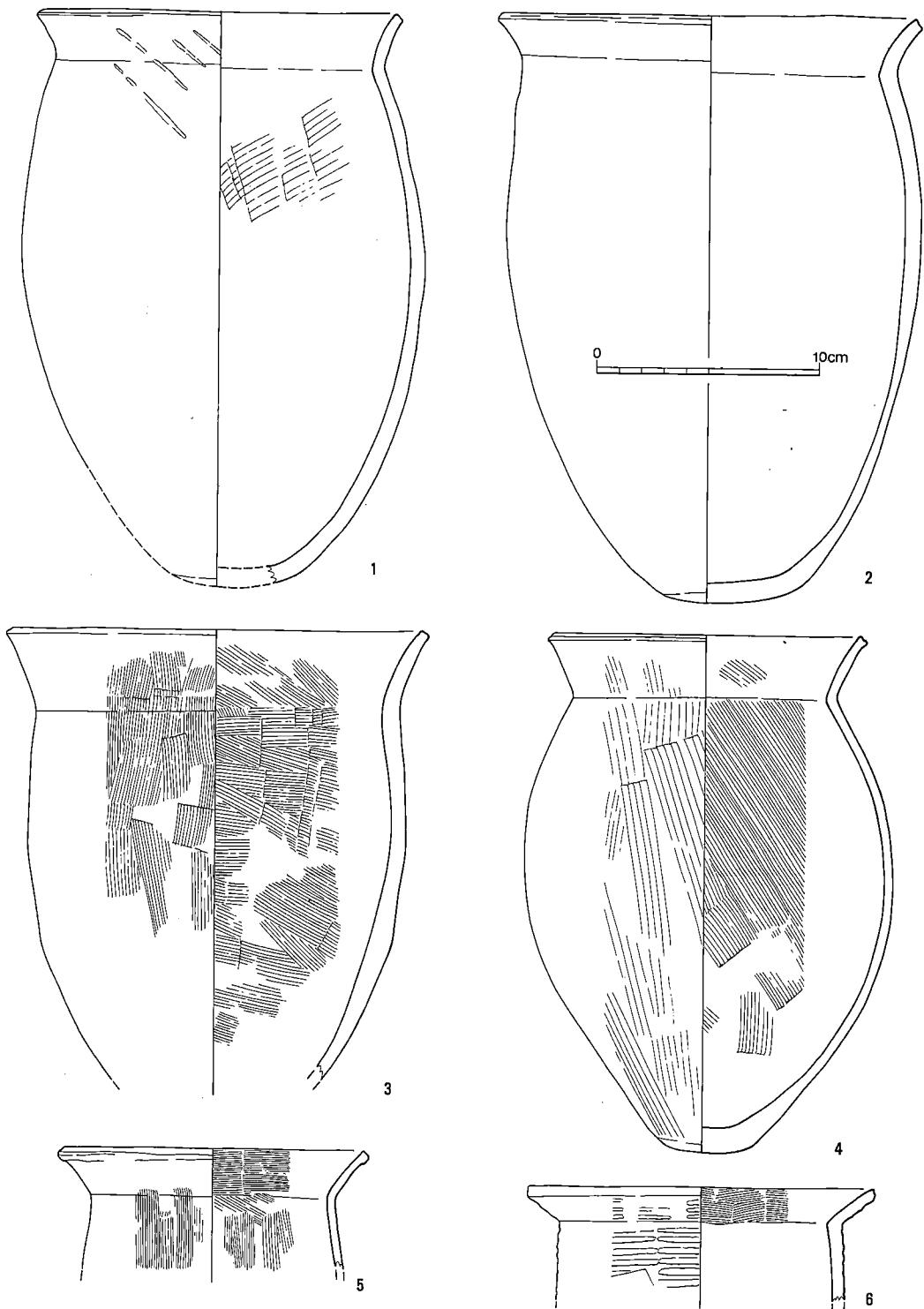
鉢（5・8）5は、反転して開く口縁となる薄手品で、外面は磨滅して調整不明。8は復原口径18.2cmで、深めのボール状となる。外面上端は横ナデ、以下外面はナデ調整を施す。

高杯（9・10）9は復原口径32cm、杯部高8.6cmとなる。口縁内面は縦ヘラ磨き、外面は細かいハケの上を暗文状ヘラ磨き、体部内外面は縦ヘラ磨きを施す。胎土精良である。10は、脚部で、3個の穿孔がみられる。外面は縦ハケの上に丹塗りをして、後にヘラ磨きを施す。

以上の出土土器は、弥生後期後葉～末葉にかけてのもので、殆どは後期末葉であり当B6号住居跡の時期を示すものと考えられる。

B7号竪穴住居跡（第84図、図版17・18）

前述のB6号住居とほぼ重なるようにして検出された方形住居である。上面の大半をB6号住



第87図 B7号住居跡出土土器実測図（その1）(1/3)

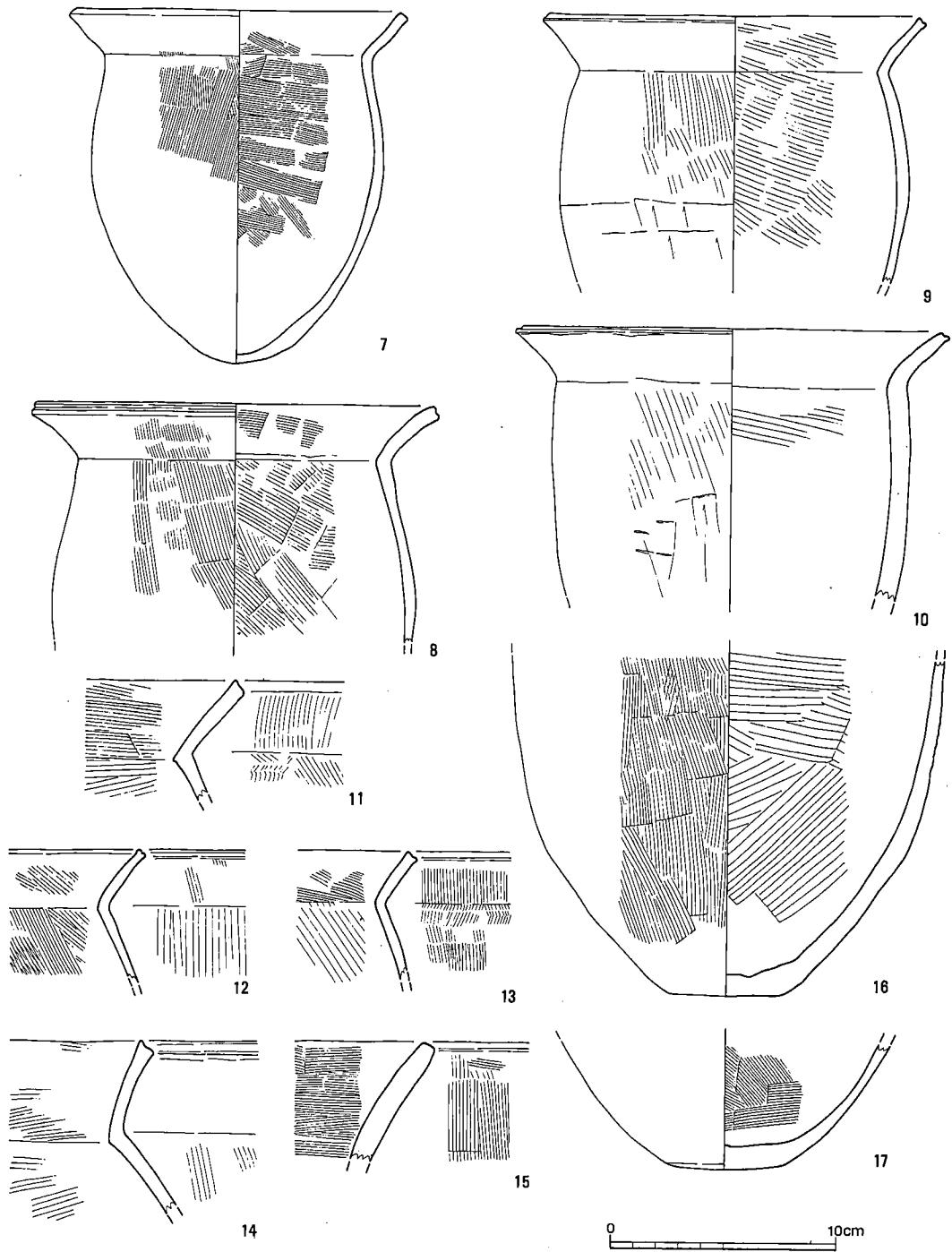
居に切られているため、全体に5cmほどの深さしか残っていない。特に北隅あたりは壁が殆ど残らない。

規模は、北東辺が5.05m、南東辺が4.6m、北西辺が4.9m、南西辺が4.5mの、やや歪つな方形住居となる。床面積が約25m²弱の中型でもやや大きめの部類となる。

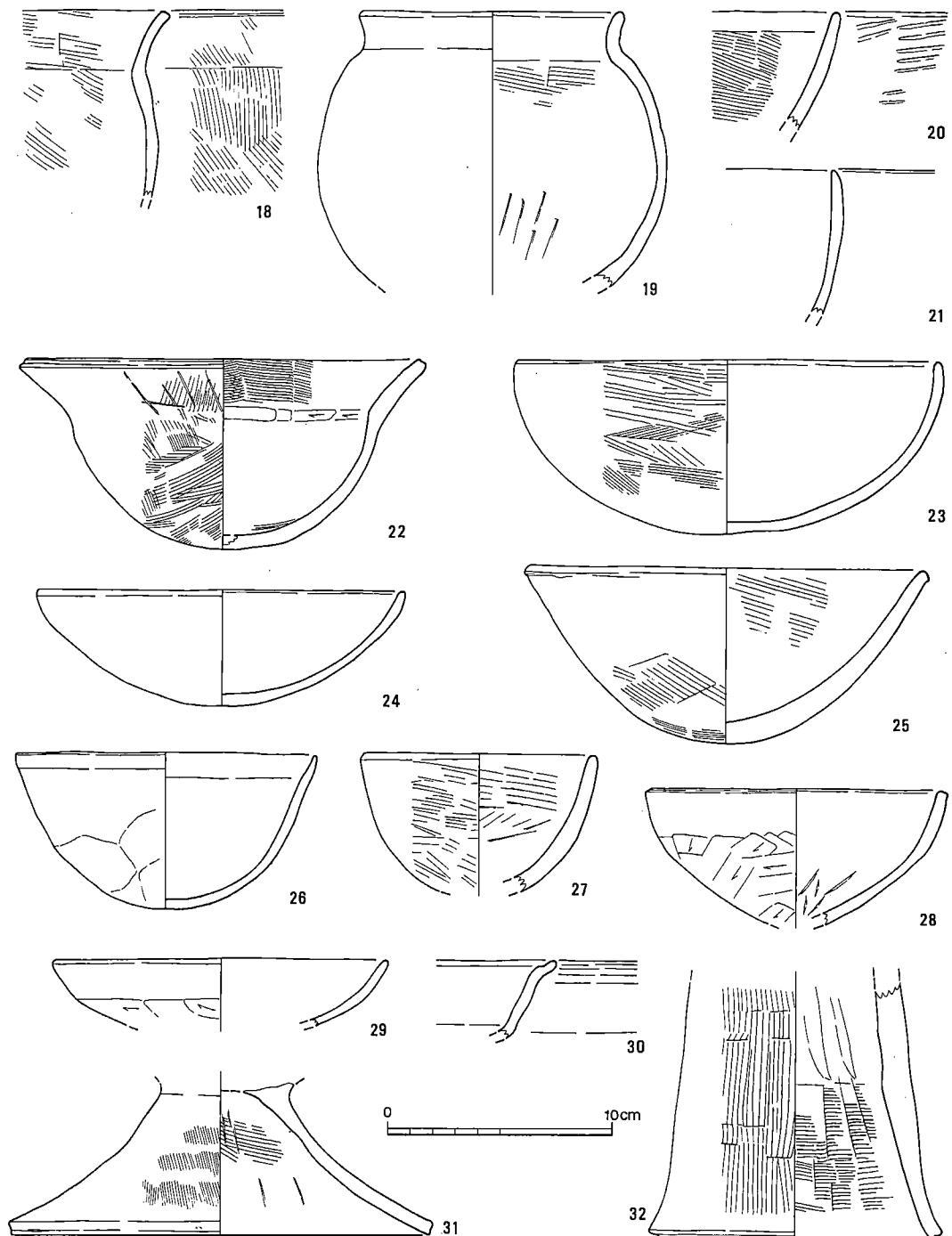
床面には多数の小ピットを検出したが、図中で▲印をつけたP2・4・7が、やや浅めではあるが、4本主柱となると思われる。東隅付近に推定されるもう1個の柱穴は、床面直上土器集中部にあたり、検出を忘れた可能性もある。また、炉跡は発見できなかった。

出土遺物（第87～91図）

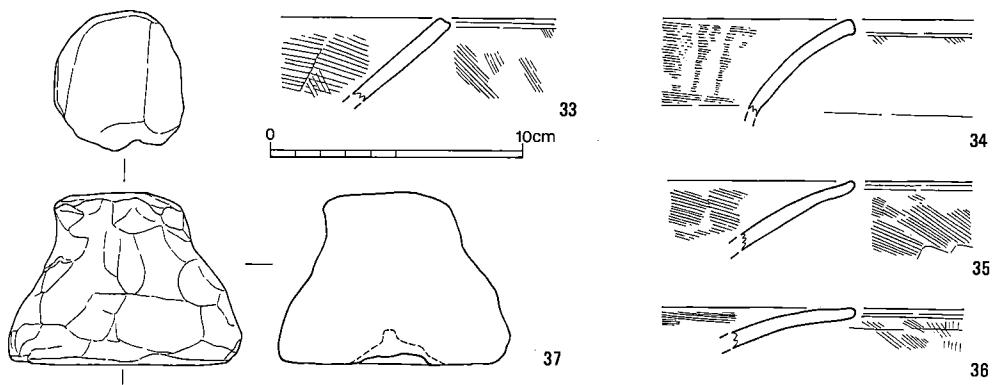
甕(1～19) 1は、口径16.4cm、器高25.7cmで凸レンズ状にふくらむ不安定な底部となり、胴部中位よりやや上で最大径をもつ。外面上半には叩きが残るが、胴部外面は縦方向のヘラナデ状をなす。内面上半は目の粗いハケ、それ以下はナデている。外面に煤が付着している。2は、口径19cm、器高26.2cmで、外面ほぼ全面に煤が付着する。口縁外面から口縁内面、頸部内面稜以下2cmまで横ナデ、他胴部は内外面ともにナデ仕上げである。3は、復原口径19cmで、外面には煤が付着している。口縁が外傾する程度にしか開かず、胴部の張りが無い類で、胴部外面下半はナデている。4は、口径14.3cm、器高23.2cmで、外面には煤が付着する。外面は底部まで目の粗いハケを施し、口縁内外面はハケの上を横ナデ、内面下半はナデている。凸レンズ状の不安定な小さめの底部となる。5は、復原口径14cmで、口縁外端が突出する特徴がある。外面に煤が付着し、口縁外面はナデている。6は、復原口径15.6cmで、外面には叩きが施され、下端附近は擦過痕がみられる。胴部内面はナデている。7は、口径15cm、器高15.6cmで、一見尖り底風である。胴部下半内外面はナデている。口縁内外面はハケをナデ消している。8は、口径18cmで、外面に煤が付着する。口縁内外面はハケの上を横ナデ、胴部外面下半はナデ仕上げである。口唇面に沈線を入れている。9は、復原口径17cm、胴部最大径15cmで、胴部中位で張る器形となる。口縁内外面は横ナデ、胴部内面と外面上半はハケの上をナデ調整。外面下半は削り状擦過がみられる。外面全てに煤が付着している。口唇面を凹状にへこませている。10は、復原口径19.2cmで、口縁内外面横ナデ、胴部内面は横方向にナデており、上半にはハケが残っている。外面下半は削り状擦過がみられる。口唇面に沈線を入れている。11は、頸部内面に鋭い稜をつくり、直線的に開く口縁となる。内外面ともにハケを施す。12は、口縁内外面ともにハケの上を横ナデ、胴部外面には目の粗い縦ハケが施される。口唇内外両端が突出する。13は、口縁内面に細かいハケ目が施されている。14は、口縁内面はハケの上を横ナデ、外面は磨滅のため調整不明。胴部内面はハケの上をナデている。口唇面は凹状となる。15は、厚手で長い口縁であるが、甕というよりも、器台の可能性が高い。16は、直径5cmの平底を持つ。内外面でハケの目の大きさが違う。内面下端はナデしている。底外面もナデ調整。17は、わずかに凸レンズ状にふくらむ底部をなし、内面には炭化物が付着している。外面全体と底内面はナデ



第88図 B7号住居跡出土土器実測図（その2）(1/3)



第89図 B7号住居跡出土土器実測図（その3）(1/3)



第90図 B7号住居跡出土土器実測図（その4）(1/3)

ている。18は、口縁内外面ともにハケの上を横ナデ、胴部内面はハケの上をナデしている。19は、甕というより短頸壺であろう。口径11.8cm。胴部最大径15.5cmで、球形の胴部をもつ。胴部外面上半は雑なナデ、内面は下半にハケ工具端痕がみられ、丁寧にハケをナデ消したものであろう。外面には煤が付着している。

鉢(20~30) 20は、やや深めの器形で、口縁内外面横ナデ、外面は叩きの上をナデしている。外面の下から2cmの範囲は擦過状の痕跡がみられる。胎土はかなり良い。21は、深い器形となり、口縁下2cmまでの内外面は横ナデ、以下の内外面は丁寧なナデ仕上げである。22は、口径18.2cm、器高8.4cmとなる。体部内面はナデ、頸部内面の稜直下は横方向の削り状となる。口縁外面にはハケ工具端圧痕が残る。23は、復原口径19cm、器高7.7cmのポール状となる。全体に薄手で、内面はナデ、外面下半もナデしている。24は、復原口径16.4cm、器高5.2cmとなる。薄手で浅い器形となる。内外面ともにナデ仕上げである。25は、口径18cm、器高7.8cmとなる厚手の類である。内面上半はハケの上をナデ、下半はナデしている。外面下半は、ハケで、それより上はヘラナデ状、底外面も同様の調整がみられる。26は、口径13.4cm、器高7cmで深めの器形となる。薄手で、口縁内外面は横ナデ、体部外面はナデしている。27は、復原口径10.6cm、器高は6.5cmほどとなりそうで、小さな椀状となる。外面は粗雑なハケ、内面底部は擦過状となる。28は、復原口径13.4cmで、尖り底状となりそうな器形である。体部内面はナデ、外面は削り状の搔き取りがみられる。口縁内外面は横ナデ、内面下半にはハケ工具小口端痕がみられる。29は、復原口径15cmで、体部外面下半にはヘラ削りがみられるが、他面は磨滅のため調整不明である。30は、胎土精良で、口縁内面に段をつくり、体部中途で屈折する異類である。高杯の亞種となる可能性もあるが確信は無い。口唇周辺のみ横ナデで、他の体部内外面は丁寧にナデしている。

脚部(31) 脚付壺等になると思われ、脚端径18.9cmとなる。外面はハケの上を横ナデ、内面下半は横ナデを施す。

器台(32・37) 32は、脚端径13cmとなり、やや筒状となる。内面上半はナデ調整。裾端面が凹

状にへこむくせがある。37は、上端径5×5.6cm、下端径9.2cm、高さ6.8cmの土製支脚の類である。底面中央はくぼみ、更にその真中には径5cmの穴がみられる。側面は手捏ね風で、全体にナデている。

高杯(33~36) 33は、口唇面に凹線を入れるくせを持ち、甕の可能性が強い。外面はハケの上をヘラ磨きしている。34は、口縁の立ち上がりがやや古相をみせる。内面は横ハケの上を縦ヘラ磨き、外面は磨滅して調整不明。35は、口縁が大きく外傾し開く類で、外面下端はヘラナデ状である。36は、35と同類で、内外面ともにハケの上から横ナデ調整を施している。

鉄器(第91図) 全長17cmほどで、最大幅8mm、厚さ5mmとなる棒状製品である。先端が片削ぎ的で、横断面がカマボコ形となり、茎のついた小型ノミと考えられる。

以上の出土遺物は、大旨、弥生時代後期後葉の範囲に収まるものであるが、型式学的にみて若干の幅が考えられるものもある。胴の張りの少ない3や、頸部の屈折がシャープで強い6・9・11・14などは、弥生後期末葉に近い新しい様相を持っている。また、7の丸底化や、9・10のような胴下半の削り状調整技法も新しい様相と考えてよい。鉢の中にも28・29のような類似技法がみられるものもある。高杯においては、35・36のように大きく開く口縁で後期末葉に比定できるものもある。土器全体からみて、在地的色彩の濃いのが特徴で、甕の長胴化傾向が始まっていると見た方がよい。これらのことから、このB7号住居跡出土遺物は、弥生時代後期後葉の中でも、より末葉に近い段階のものと位置付けられよう。

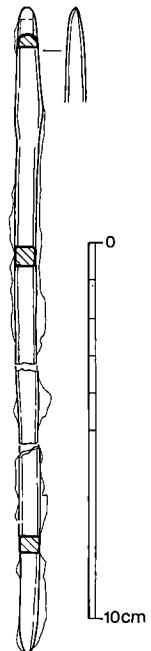
B8号竪穴住居跡（第92図、図版17・18）

B区の中央やや北寄りに位置し、南側を大きくB6号住居に切られ、北東側でB9号住居を切っている。更に、北西側でB18号土壙・B14号住居に切られ、西側でB11号住居に切られている。また、B10号住居のカマドの煙出し部によっても切られている。

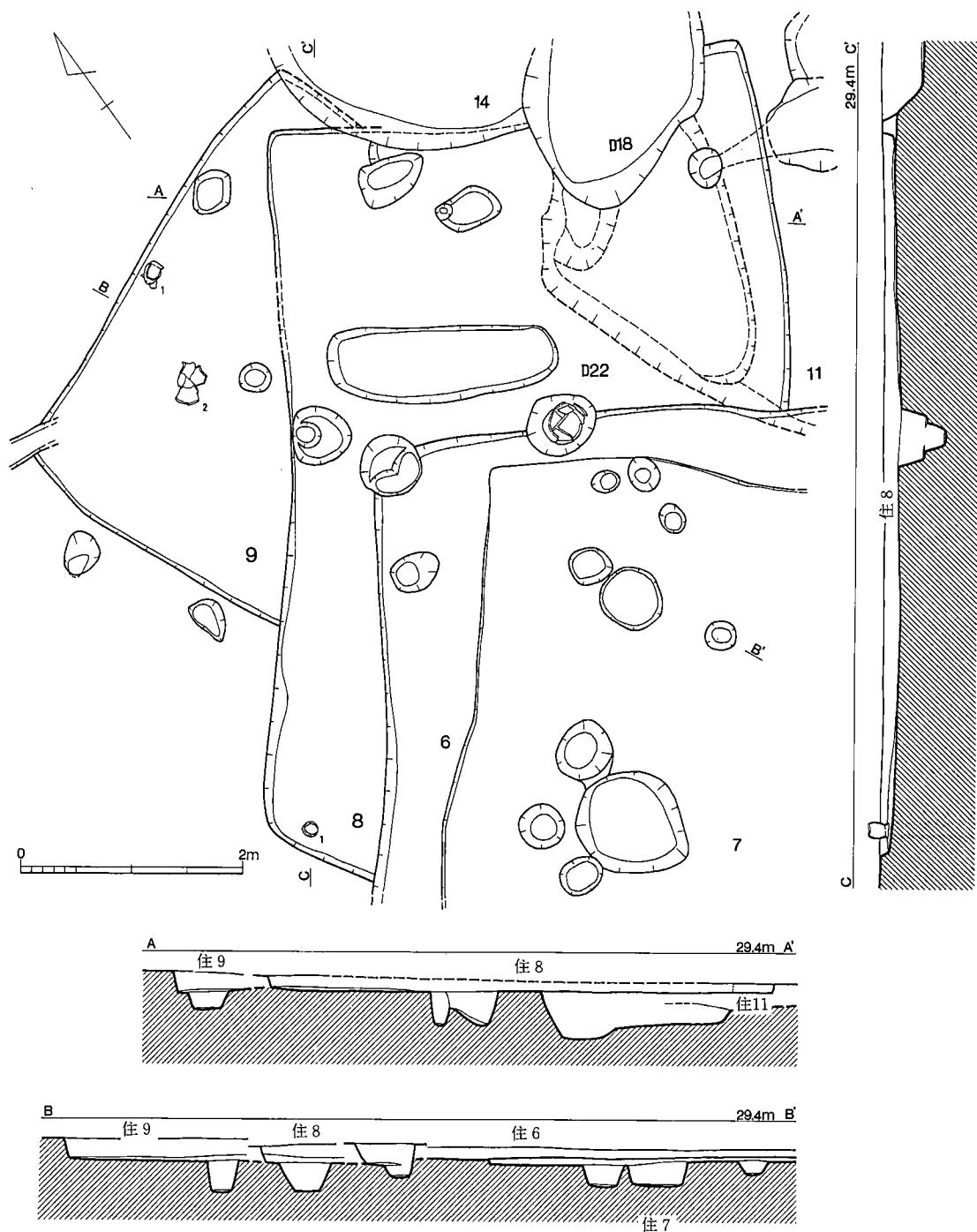
北西辺が6.2m、北東辺が4.4mの長方形住居となり、床面積27m²ほどの大型住居類に近いものと考えられる。床面にはピットが若干認められたが、切り合いが激しい関係上、柱穴配置をつかめなかった。炉跡や他の施設も検出できなかった。

出土遺物（第93図）

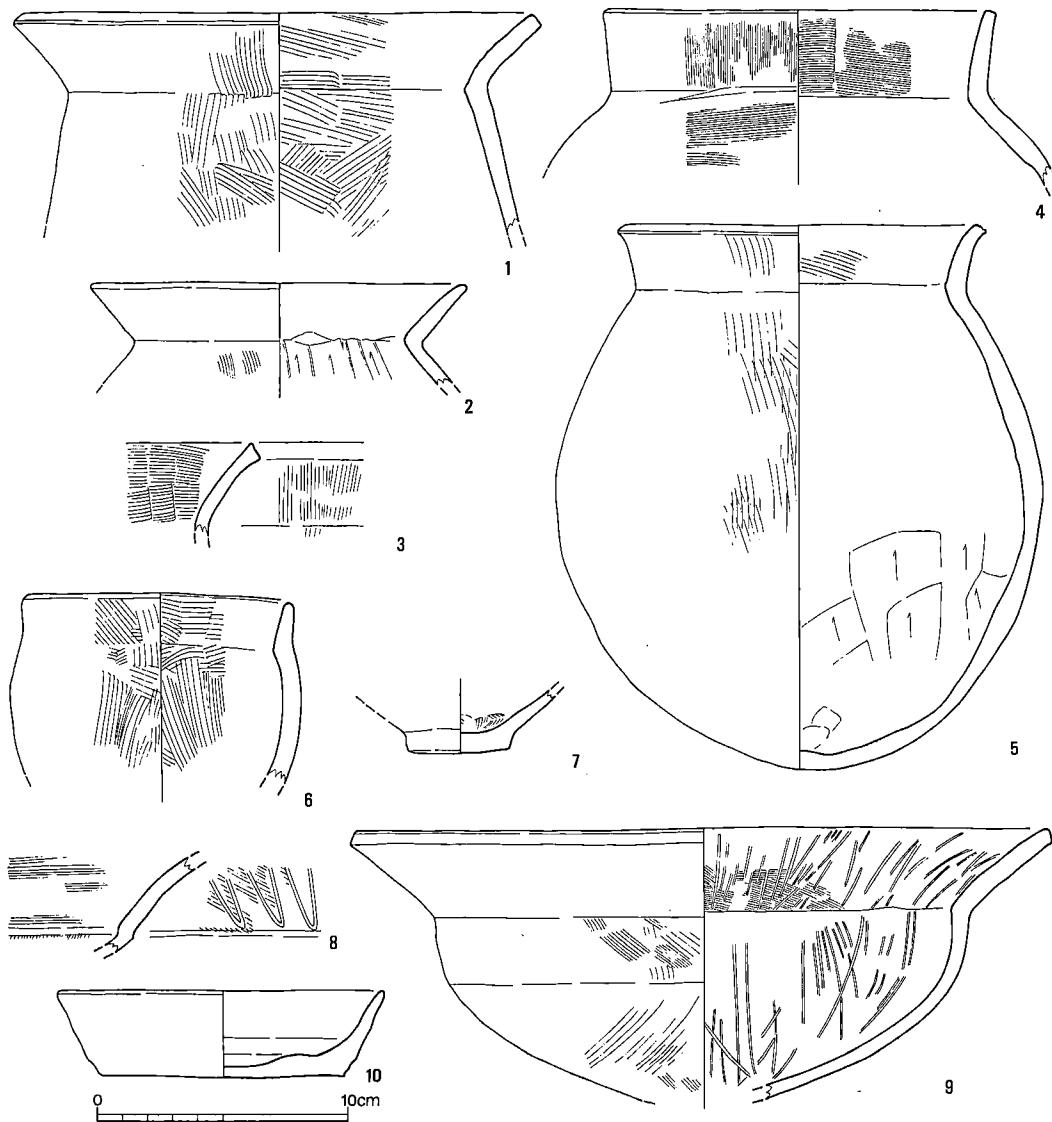
甕(1~3・5) 1は、口径20.1cmで外面には煤が付着する。内外面に雑なハケを施す。2は、口径15cmで、外来系の器形となる。胴部内面はヘラ削り、外面はハケ調整である。庄内新期併行期のもので、混入品であろう。外面には煤が付着する。3は、口唇面が凹状をなす類で、



第91図 B7号
住居跡出土鉄器
実測図(1/2)



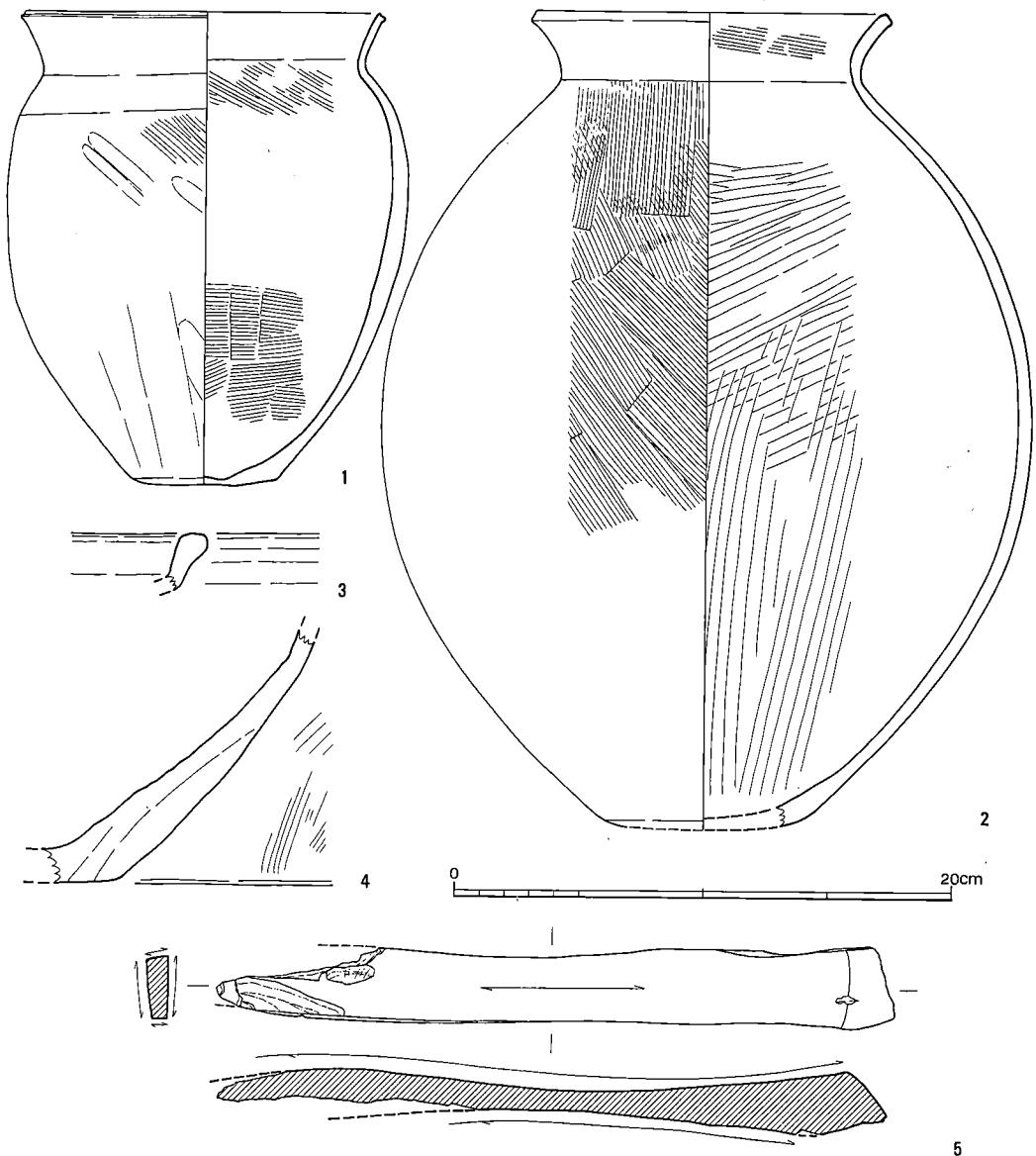
第92図 B8・9号住居跡実測図 (1/60)



第93図 B8号住居跡出土土器実測図 (1/3)

口縁部内外面とともにハケ調整を施している。5は、壺とも甕ともつかない器形で、口径14.6cm、器高20.2cm、胴部最大径19.3cmとなる。胴部内面上半はナデ、下半は削り、底内面はナデで指頭圧痕がみられる。外面上半は荒いハケ、下半はナデでいる。外面には煤が付着している。

壺 (4・7) 4は、復原口径15.6cmの短頸壺である。胴部内面はナデ、他面には細かいハケ調整を施している。7は、底径4cmで、一見弥生前期板付I式小壺の円盤貼付底部のように見えるが、底外面は凸レンズ状のふくらみをみせ、底内面にはハケ目を残すことなどから、弥生後



第94図 B9号住居跡出土土器・砥石実測図 (1/3)

期の壺或は小型鉢類となると考えられる。

鉢 (6・9) 6は、小型の甕的な器形で、口径10.8cmとなる。内外面ともに雑なハケ調整である。9は、復元口径28cm、胎土精良である。口縁内面は細かいハケの上から暗文状ヘラ磨き、外面は横ナデ、体部内面はヘラ暗文、外面はハケを施している。脚台の付く器種であろう。

高杯 (8) 体部中途で屈折反転して、口縁部が開く類である。内面は横ハケの上を縦ヘラ磨

き、外面はハケの上を横ナデし、その上から波状のヘラ暗文を施す。胎土精良である。

杯(10) 復原口径13cm、器高3.5cm、底径9.8cmとなる底部糸切りの土師器である。底内面にはナデツケがみられる。胎土精良で、13C前半代を中心とする時期のものであろう。

以上の出土土器は、2・10を除いた他は、弥生時代後期後葉～末葉のもので、当B8号住居跡の時期を示すものであろう。

B9号竪穴住居跡（第92図、図版17・18）

B区中央北寄りに位置し、東側を大きくB8号住居に切られ、北東隅付近でB14号住居にも切られている。主軸方位は、B3号住居や、A2・3・7・8号住居と近似しており、当遺跡内では、弥生後期でもより古い段階の一群と理解できる。

規模は、北西辺の4.15mが確認されただけであり、詳細は明らかでないが、17m²前後の小型乃至中型規模に近い類となろう。

床面の柱穴配置及び炉跡等は確認できなかった。深さ20cm程度残っていたが、意外と土器が多く出土し、床面直上出土のものもいくつかみられた。

出土遺物（第94図）

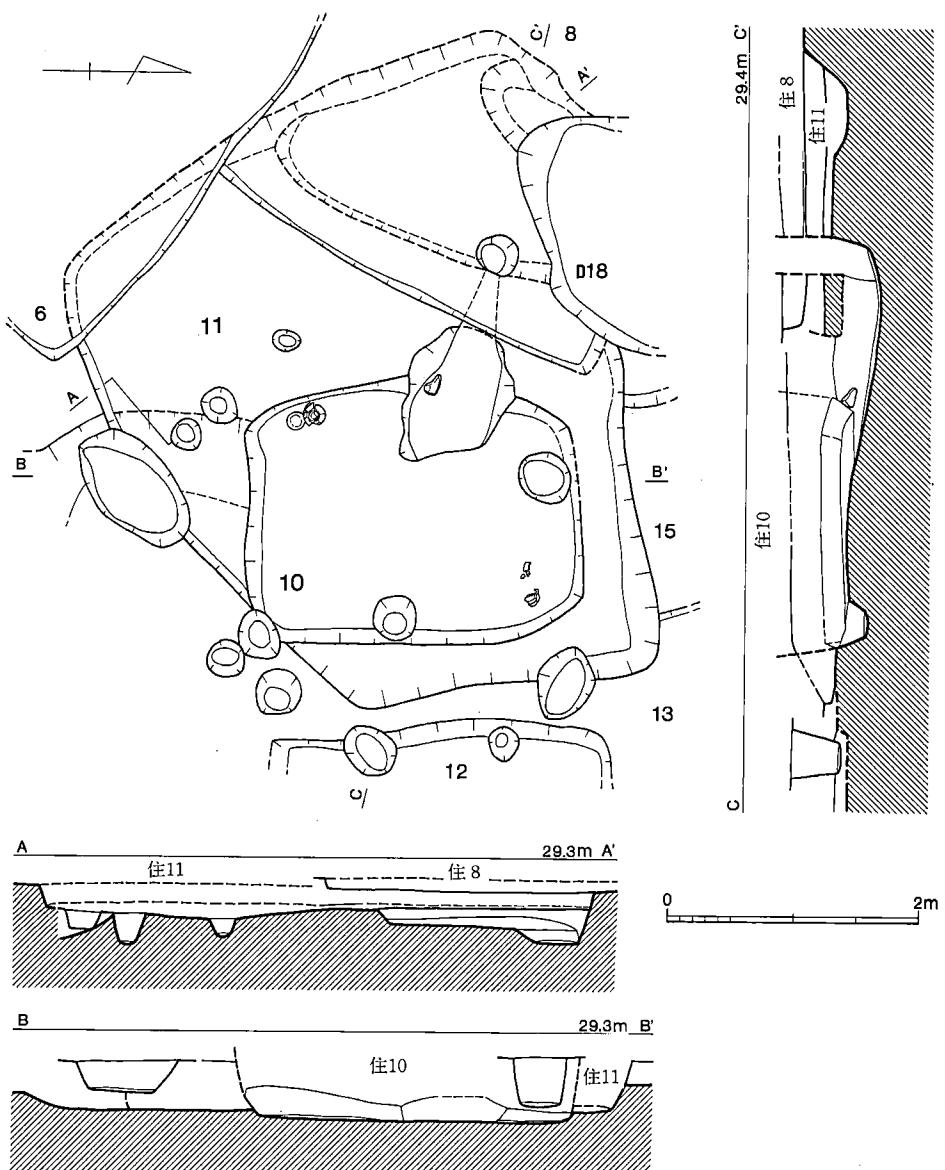
甕(1・2) 1は、口径14.1cm、器高18.9cm、底径5.9cmとなる。底部はわずかに凸レンズ状にふくらみ、胴部上位で最大径をみせる。胴部内面中位と底内面はナデ、胴部外面上半は稜線までが横ナデ、それ以下が叩き後にナデており、下半は搔き上げ状の擦過がみられる。外面に煤が付着している。2は、口径14.5cm、器高32.5cm、胴部最大径26.1cmを測る。胴部が大きくはらみ、甕とも壺ともつかないような形状をなす。胴部内面上端と下端付近はナデ、外面下半もナデている。内と外とでハケの目の大きさが全く異っている。底部は凸レンズ状にふくらむ類となろう。

壺(3・4) 3は、丸っこく厚い口縁部から屈折して内側へ曲がるもので、複合口縁壺の変種かと考える。内外面ともに磨滅しており調整不明。4は、大型壺の底部で、外面はハケをナデ消している。内面はナデ調整。底部は凸レンズ状にふくらむ類になると思われる。内外面ともに煤が付着している。

砥石(5) 茶色の粘板岩製仕上げ砥である。長さ27.2cm、幅3cm、厚さ2.5cmとなるひょろ長いタイプである。表裏・側面とともに極めてよく使用されている。

以上の出土遺物は、1・2からみて、器形に古い様相を残しており、弥生時代後期中葉の所産と考えてよい。当B9号住居跡の時期は、切り合い関係上も矛盾はないことから、この土器等が示している処であろう。

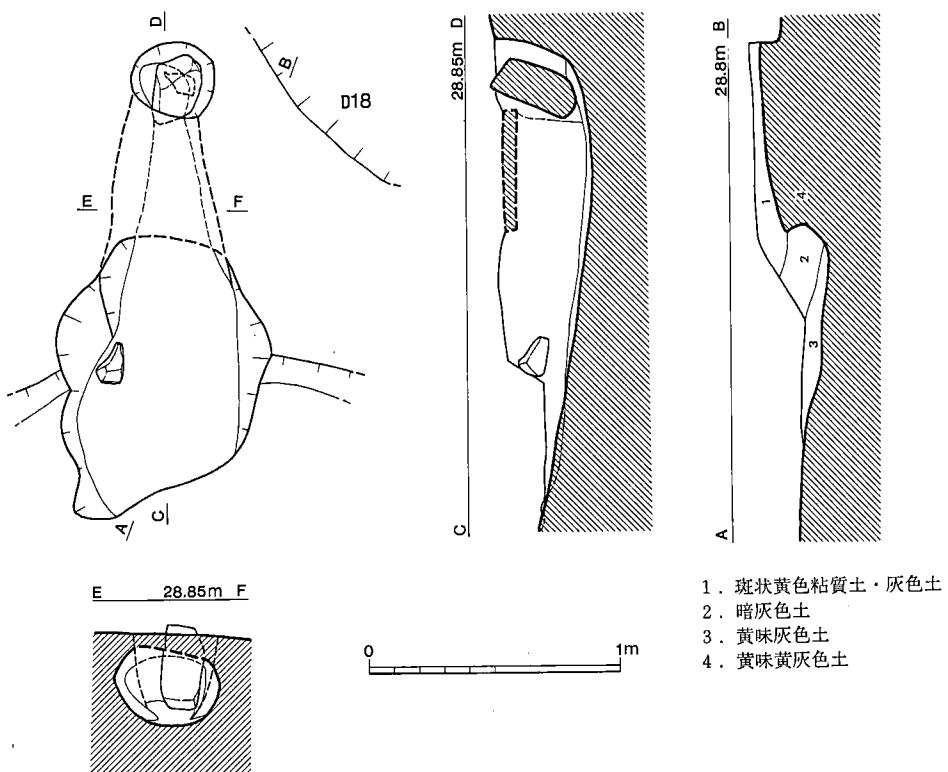
B10号竪穴住居跡（第95図、図版17）



第95図 B10・11号住居跡実測図 (1/60)

B区中央部のやや北寄りに位置し、北西側に煙道付きカマドを設ける小型長方形住居跡である。B11号住居の真中を切って掘り込まれており、この周辺の住居どうしの切り合いの中では最も新しい類となる。

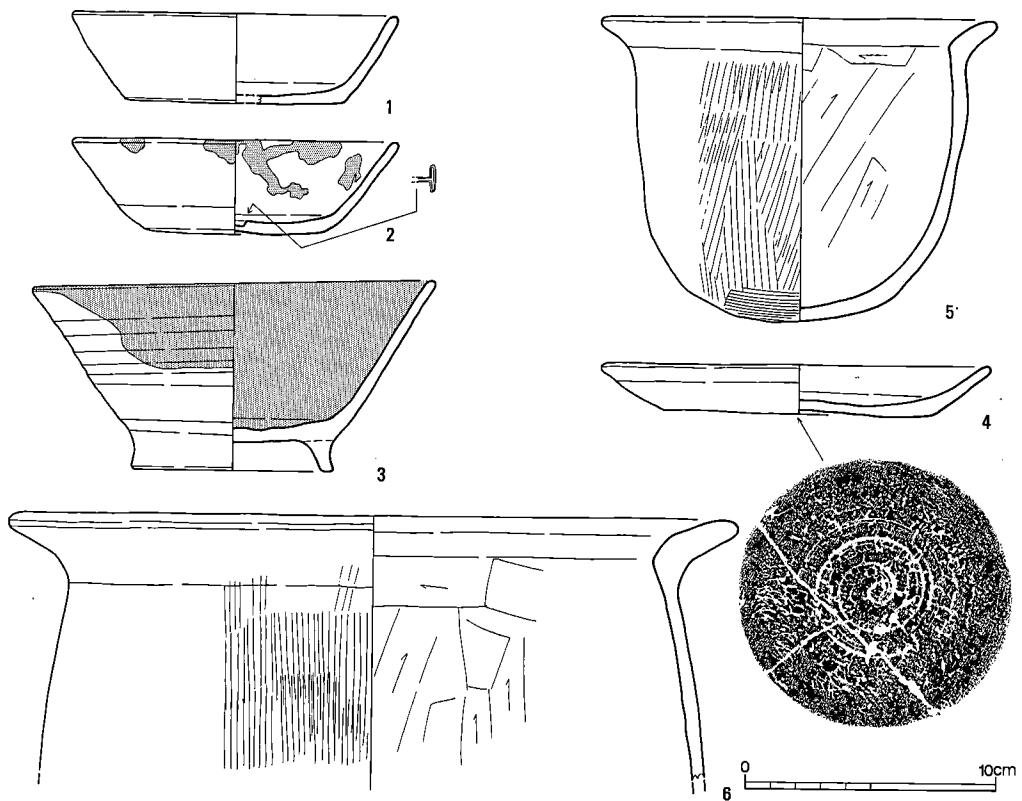
規模は、南北長2.7m、東北幅2.1mで、床面積5.7m²の特小型住居類となる。床面はほぼ平坦であるが、カマド焚口部前面は、カマドにむかって傾斜している。東壁際の中央にピットが1



第96図 B10号住居跡カマド実測図 (1/30)

個だけ検出されたが、柱穴となるかどうか定かではない。床面には土器や鉄釘等の鉄器がかなり残存していた。

カマド(第96図) 住居西壁の北寄りに設けられていた。カマドの袖等の本体部分は残存しておらず、床面下への掘り込みから煙道部分については良好に残っていた。赤く焼けた火床部分は検出されなかつたが、底部最大幅は65cmと広く、全体に大きな規模のカマドであったことが推測される。左壁際に長さ17cm、厚さ11cmほどの花崗岩角礫が出土したが、袖の補強材あるいは、カマド中央の支脚として用いられたのかもしれない。煙道部分を含めて、全体に壁はほとんど焼けていない。また、炭片の出土量に対して、焼土片等はごく僅かである。煙道は断面が丸く奥の方へすばまっている。煙出し部分は、底面がいくらか上がり、上方へ垂直気味に立ち上がっている。この部分に、上から詰め込まれたような格好で、長さ35cm、幅・厚さ15cmほどの角状の花崗岩塊石が検出された。さらにこの石の直下からは土師器甕の大破片が発見された。このような煙出し部分をふさぐ行為は、住居廃棄に伴う儀礼の一種、或は、この異様な形態のカマドが土器焼成等に用いられ、いぶし等の段階で閉塞・密封したものかとも考えられる。こ



第97図 B10号住居跡出土土器実測図 (1/3)

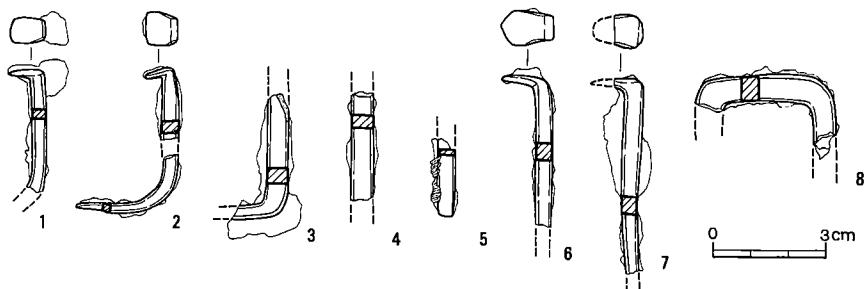
のカマド内からは鉄釘が出土しているが、この異類のカマドの性格を解く鍵になるかもしれない。ただ、現状では上記いずれの性格なのか速断はできず、類例の増加を待って判断したい。

出土遺物（第97・98図）

杯（1・2） 1は、口径13cm、器高3.5cm、底径8.8cmとなる底部ヘラ切りの土師器である。底内面はナデツケがみられる。2は、口径13cm、器高3.7cm、底径7.3cmとなる。底部ヘラ切りで、1と同様に胎土精良である。内底面はナデツケており、外面は磨滅している。口縁周辺に油煙がこびりついており、灯明皿に使用されたものであることがわかる。内面中央にT字（半欠分で）形の押印圧痕がみられる。

黒色土器（3） 高台碗の内面と外面の一部がいぶされたもので、口径16cm、器高7.4cm、高台径8cmとなる。体部下端と底外面中央には回転ヘラ削りを施している。内底面はナデツケである。胎土精良で外面は明橙色をなす。

皿（4） 口径15.6cm、器高1.8~2.1cm、底径10.9cmとなる。底部ヘラ切りで、胎土精良、橙褐色~赤味茶色をなす。内底面にはナデツケがみられる。



第98図 B10号住居跡出土鉄器実測図 (1/2)

甕 (5・6) 5は小甕で、口径15.7cm、器高12cmをなす。胴部内底面はナデ、他はヘラ削りを施す。6は、復原口径29cmで、内外面に煤が付着している。これはカマドの煙道堅壙内出土品である。

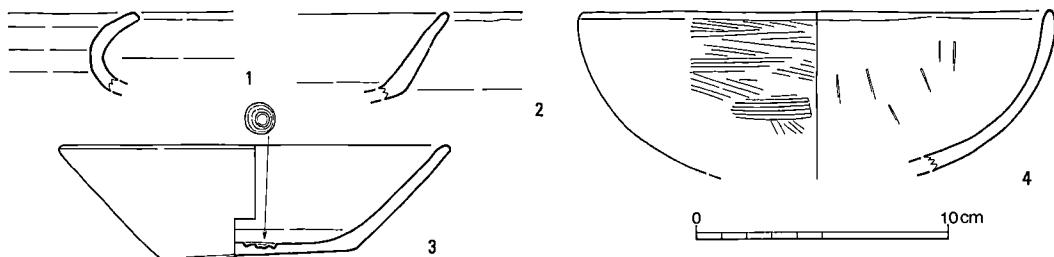
鉄器 (第98図) 1～5はカマド内出土品、6～8は床面上出土品である。1～4・6・7は角釘で、頭部を片側だけに打ち曲げている。1～3の如く、下半が直角に曲がったものがあり、箱形のものに使用された可能性が強い。5は、幅5mm、厚さ1.5mmと偏平で、空目が横方向の木質が付着している。性格はわからない。8は、角棒の両端が曲げられたもので、用途不明。

以上の出土遺物のうち1～4は、大宰府SE400段階に該当し、9C初～前半代の年代が考えられる。5・6については、内面がヘラ削りのままで、口縁の肥厚も顕著であることから、7C後葉代からの古い技法の伝統が引きつがれていることがわかる。大宰府から離れた朝倉の地での地域性と解釈できるのかもしれない。

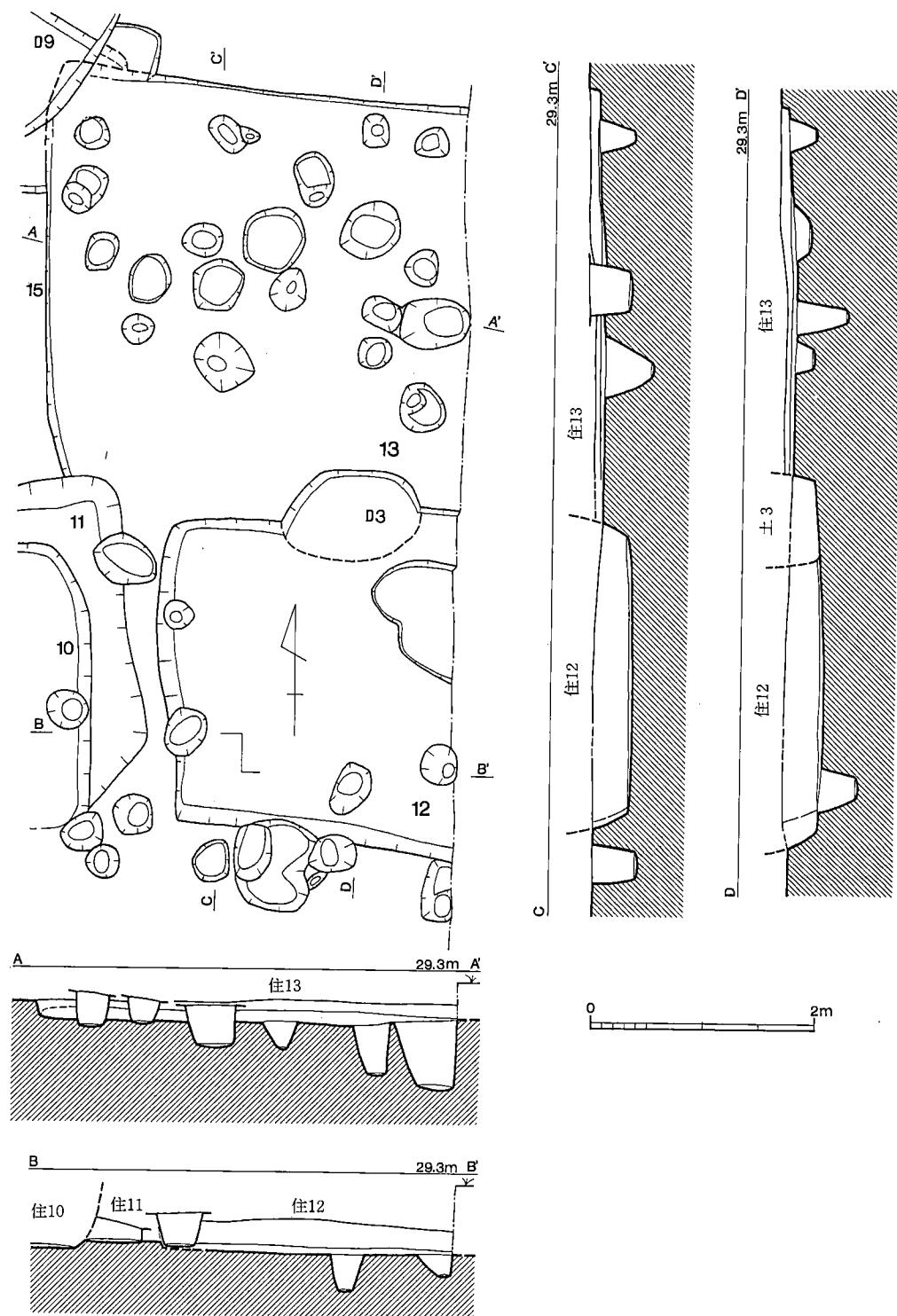
B11号堅穴住居跡 (第95図、図版17)

B区中央北寄りに位置し、前述のB10号住居に中央を切られている。また西側でB6号住居・B18号土壙に切られ、B8号住居を切っている。さらに北側ではB13～15号住居を切っている。複雑な切り合いの中で、当住居の輪郭をつかむのに苦労し、結局、図示したような歪つな台形状プランとして報告せざるを得ない状況となった。

規模は、東西が5.25～4.3m、南北が4.4～2.5m前後となり、本来方形であつたとすると25m²



第99図 B11号住居跡出土土器実測図 (1/3)



第100図 B12・13号住居跡実測図 (1/60)

強の中型住居となろう。床面の西隅付近は大きな掘り込みがみられ、貼床下部構造とみることができる。床面上の小ピットは3個しか検出されず、主柱穴配置を知ることはできない。

出土遺物（第99図）

壺(1) 頸部で丸く外湾して開く口縁部で、内面下端はナデ、他は内外面ともに横ナデ調整である。橙褐色をなす土師器である。

杯(2・3) 2は、底面ヘラ切り離して、外面には煤が付着している。胎土精良で、灰味茶色をなす。3は、復原口径15.6cm、器高4.4cm、底径7.9cmとなる大ぶりの器種である。内面中心に直径1.2cmの二重丸の押印がみられる。胎土精良で、内底面はナデツケがみられる。

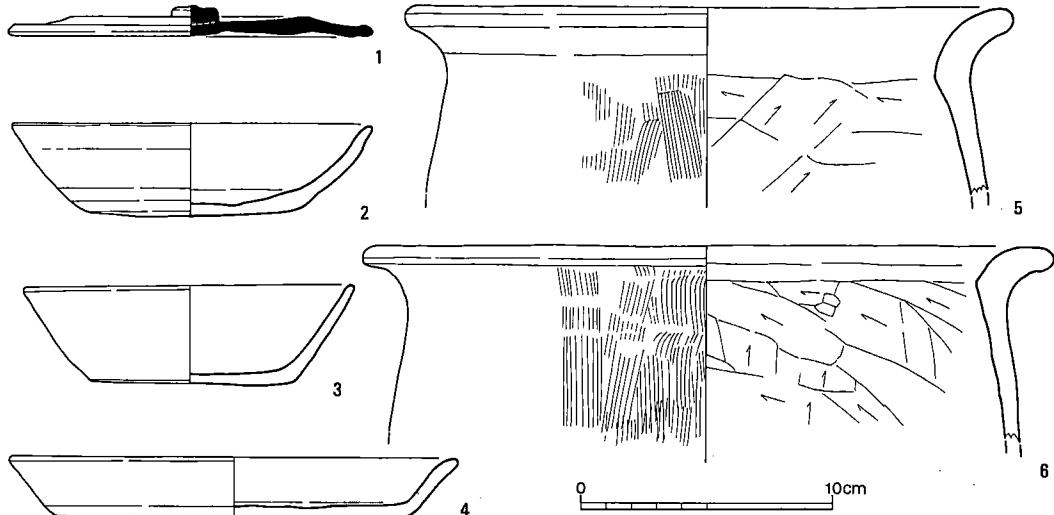
鉢(4) 口径19cmの、内湾して立ち上がるボル状の器形をなす。内面はナデ、外面下半もナデ調整である。内面にはハケ工具端痕が残る。弥生後期土器の混入品であろう。

以上の出土土器は、4を除いて他は、9C初～前半代のもので、B10号住居跡の出土土器とはほぼ同時期と考えられる。それから考えると、当B11号住居跡は、B10号住居跡に切られてはいるが、ほぼ同年代となり、住居を縮小しての建て替えということも想定できるだろう。

B12号竪穴住居跡（第100図、図版18・19）

B区の東側発掘範囲沿いの中央やや北に位置する。切り合い上、北側でB3号土壙に切られ、同じく北側でB13号住居を切っている。東側は発掘範囲外へ拡がるが、現状では直下の町道開削で、既に消失している。

規模は、南北幅2.75m、東西は2.65m以上となり、床面積7.5m²前後の小型方形住居跡と考え



第101図 B12号住居跡出土土器実測図（1/3）

られる。西隣のB10号住居跡と強い関連を有する特殊遺構と推定される。

床面までの深さは35cmほどと、わりと残っている。床面上には3個の小ピットを検出したが、主柱穴配置を示す類ではない。床面東北側に掘り込みがみられるが、5cm前後と浅く、性格は不明である。炉跡やその他の施設は発見されなかった。

出土遺物（第101図）

杯蓋（1） 口径14.5cm、器高1.2cmの扁平な須恵器蓋である。口縁は完全に丸くなり、鳥嘴状口縁の形状を留めていない。天井内面はナデ、他はすべて回転ナデを施す。

杯（2・3） 2は、口径14.3cm、器高3.8cm、底径8.5cmとなる。底外面はヘラ切りで板目が残る。体部内外面横ナデ、底内面はナデツケ、体部外面下端はヘラ削りがみられる。胎土精良で橙褐色をなす。3は、口径13.1cm、器高3.7～4.1cm、底径8.2cmとなる。底部ヘラ切り類で、底内面中心付近だけナデている。胎土精良で、薄橙褐色をなす。

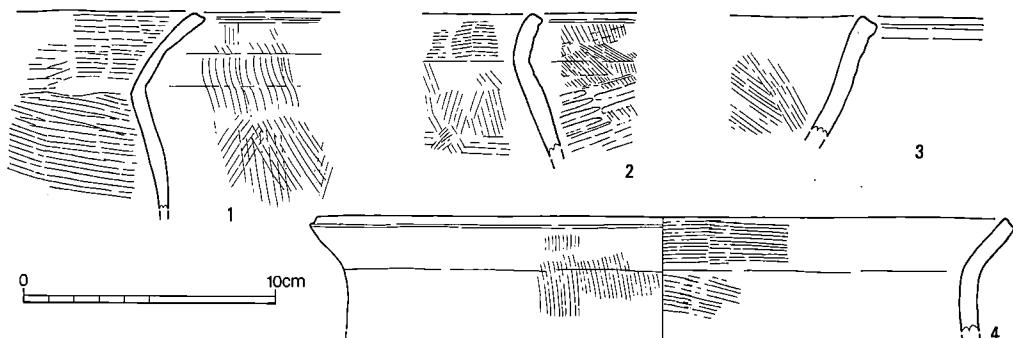
皿（4） 口径17.9cm、器高2.5cm、底径14.1cmとなり、底面から体部外面下端までは回転ヘラ削り、他は横ナデを施している。

甕（5・6） 5は、復原口径24cmで口縁が肥厚し、胴部内面はヘラ削りを施している。6は、復原口径27.4cmで、口縁に化粧土の痕跡がみられる。

以上の出土土器は、2の杯の体部が丸味を持ち、法量も大きく、4の皿の形状も古相をみせている。甕5・6も、B10号住居跡出土品と比べて、口縁が丸くが外反しており、明らかに古段階に位置付けられる。以上のことから、当B12号住居跡の時期は8C末を中心とする年代と考えることができる。

B13号竪穴住居跡（第100図、図版18）

前述のB12号住居の北側に位置し、北西隅でB9号土壙に切られ、西側でB15号住居を切っている。さらに、南側でB3号土壙、B11・12号住居に切られている。東側は発掘範囲外に拡がり、南側はB12号住居に切られているため、住居輪郭はつかめない。



第102図 B13号住居跡出土土器実測図（1/3）

規模は、東西に3.8m以上、南北に4m以上となり、切り合い上古い段階の住居となることが予想されることもある。本来の大きさは、20m²強の中規模住居であったと考えられる。

床面までの深さは10cm前後と浅いが、床面上には多数の小ピットが検出されている。ただし、図で示したピットのうち、P93・15・16は当住居覆土を切って掘り込まれたものである。それ以外の床面上のピットで主柱穴配置となるようなものを探したが、確認できなかった。

また、炉跡やその他の施設については発見できなかった。

出土遺物（第102図）

甕（1・2・4） 1は、口縁が長めに外反するもので、内外面ともに粗いハケ調整を施している。口縁端面が凹状にへこむ。2は、外面に叩きの上からハケ目を施しており、内面も粗雑なハケ調整である。4は、頸部からゆるやかに開くタイプで、復原口径28cmとなる。内外面ともにハケの上から横ナデしている。

鉢（3） 口縁内外面は横ナデ、外面は磨滅しており調整不明である。口縁外端部が突出するくせがみられる。深めの器形となろう。

以上の出土土器は、すべて床面直上の土器で、当住居跡の時期を示すと考えられる。これらの甕の形状から、弥生後期後葉を中心とする年代が推定できる。

B14号竪穴住居跡（第103図、図版17）

B区の中央北寄りに位置し、検出した平面形としては、竪穴住居跡と判断しづらい形状をみせているが、底面が平坦となり、切り合いもきちんと確認できたため、竪穴住居跡としてとり上げることとした。南側でB18号土壙に切られ、B8・9号住居を切り、西側でもB15号住居跡を切り、北側ではB4号溝に切られている。また、南側で小さな土壙（B19号土壙）にも切られている。

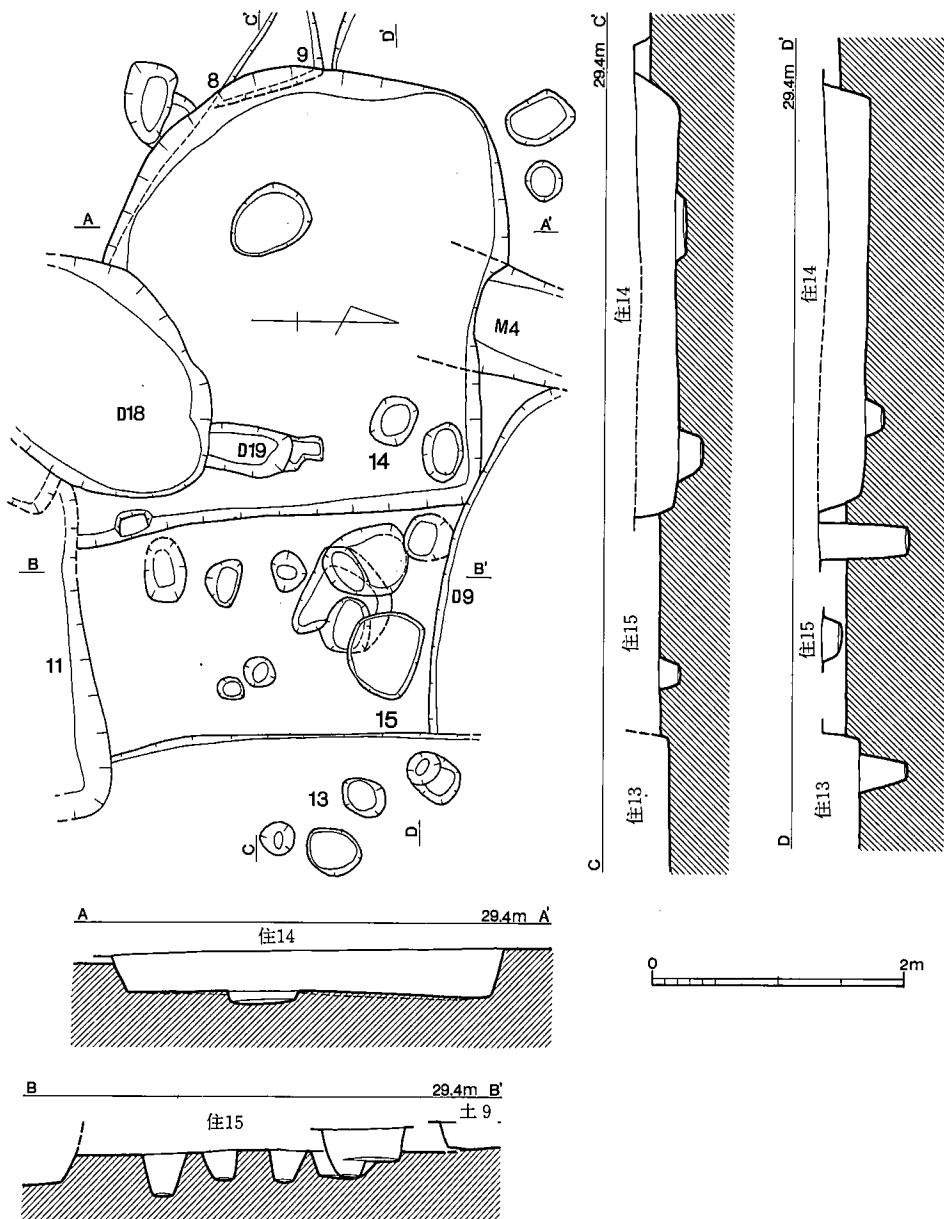
遺構の平面形としては、南西隅が丸くなるが、他隅は大旨角ばる形状となると思われ、本来方形住居であったろうと想定される。

規模は、東西幅が3.5m、南北が3.3m前後となり、床面積12m²強の小型住居の部類に入るものとなろう。床面までの深さは、40cm弱とわりと残りは良い方である。

床面には、小ピットが3個検出されたが、他住居例と同様に、主柱穴配置を示す類とは考えられない。小型住居特有の、床面に主柱穴を有しない例故であろうか。また、炉跡や他の諸施設については発見できなかった。

出土遺物（第104図）

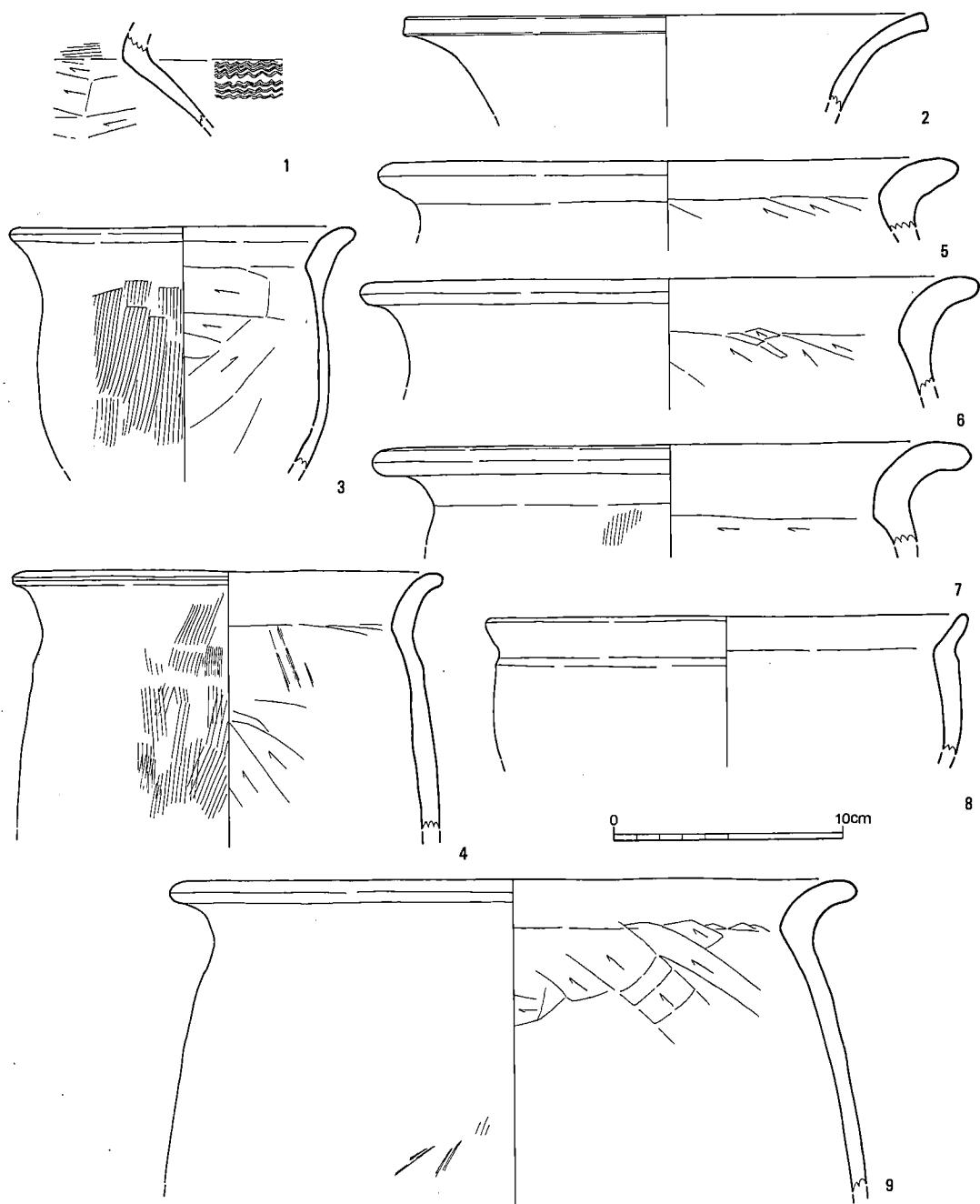
壺（1・2） 1は肩部に山形の櫛描波状文を施すもので、瀬戸内系の外来土器であろう。頸部内面には横ハケ、胴部内面はヘラ削り、外面は縦ヘラ磨きが施される。庄内新～布留古段階の混入品である。2は、弥生後期前～中葉の開口壺で、復原口径23cmとなる。胎土精良で、外面



第103図 B14・15号住居跡実測図 (1/60)

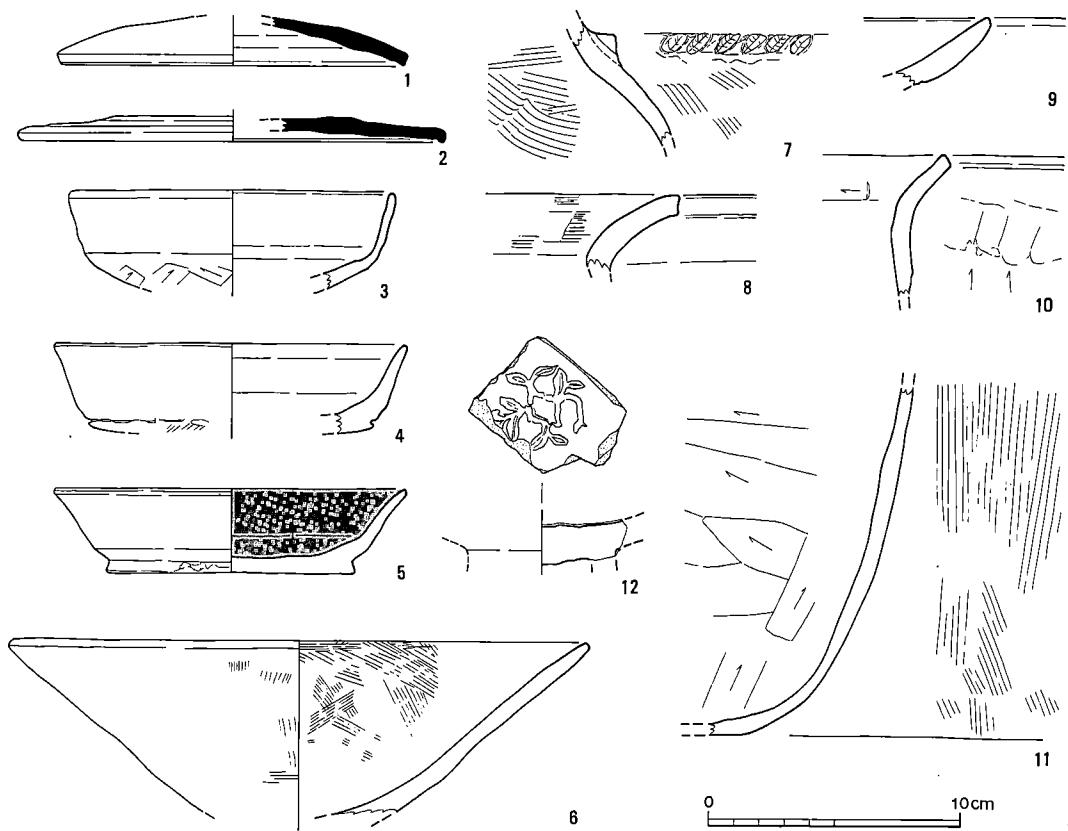
下半には細かいハケが施され、他は内面まで横ナデ仕上げとなる。胎土精良で黄褐色を呈している。

甕(3~9) 3は、口径15.2cmの小甕で、内外面ともに煤が付着する。4は、口縁があまり肥厚せず、胴部内面上半はナデ調整を行う類である。復原口径18.8cmで、胎土はかなり精選され



第104図 B14号住居跡出土土器実測図 (1/3)

ている。5は、復原口径25.2cmで、頸部内面稜線までヘラ削りを施している。6は、口径27cmで、胎土はいくらか精良である。7は、復原口径26cmで、大きく外反屈曲する厚手の口縁となる。



第105図 B15号住居跡出土土器実測図 (1/3)

る。8は口縁内外面横ナデ、胴部内面はナデ、外面は磨滅のため調整不明である。鉢状の器形になると思われる。口径21cmである。9は、復原口径30cmの大型品で、外面には煤が付着している。外面はハケをナデ消している。

以上の出土遺物のうち、1と2を除いた他は、大旨8C末～9C前半代の中でとらえられる。甕のうち、口縁の外湾度が強い5～7・9は、胴部の張りもみられ、8C末の所産と考えてよい。3・4は、これらに比べて、新しい様相を示し、9C初～前半代と考えた方がよさそうだ。遺構の切り合い状況をみると、B11号住居跡に切られており、その点から、当B14号住居跡は、8C末を中心とする時期の所産と考えられる。

B15号竪穴住居跡 (第103図、図版17)

B区中央の北寄り、前述のB14号住居跡の東側に位置する。竪穴住居跡とするには、全くその平面形・規模・住居付属の諸施設等が不明で、確定しづらい面があるが、底面がきれいな平坦

面をなし、出土遺物も切合に反しない時期を示していることから、とりあえずここでは住居跡と判断しておきたい。北側をB9号土壙に、西側をB14号住居に、東側をB13号住居に、南側をB11号住居に、つまり四面をすべて他遺構に切られている状態である。

規模については、上述のとおりであるので全く推測できない。おそらくは、中規模住居であったと想像できる。床面に小ピットがかなり検出されたが、そのうち、P94・95とP94の東側のピットは、住居覆土上面から掘り込まれたものである。よって、当住居における主柱穴配置については、皆目見当もつかない状況である。さらに、炉跡及びその他の住居内施設についても発見できなかった。

出土遺物（第105図）

杯蓋（1・2） 1は、復原口径14cmの須恵器蓋である。天井外面はナデ、口縁外端面から内面にかけては回転ナデ、天井内面はナデ調整である。口唇部は全く形骸化している。2は、復原口径17cmで、扁平な器形で、端部も丸くなっている。撮部周辺はナデ、その外側は回転ヘラ削り、その更に外側の天井外面から内面にかけては回転ナデ、天井内面中央寄りはナデツケている。外端から7mm内側の天井外面には、ほぼ一巡する重ね焼き痕が残る。

杯（3～5） 3は、復原口径13cmで、体部下半で屈折している。体部内面上半は横ナデ、下半はナデ、外面上半はナデ、下半はヘラ削りを施す。胎土精良で橙褐色をなす。4は、口径14cmの底部糸切り類である。全体に磨滅著しく調整不明。5は、口径14cm、器高3.4cm、底径9.8cmの底部糸切り類である。胎土精良で、内面には丹塗りを施す。赤漆かもしだれない。内底面はナデている。

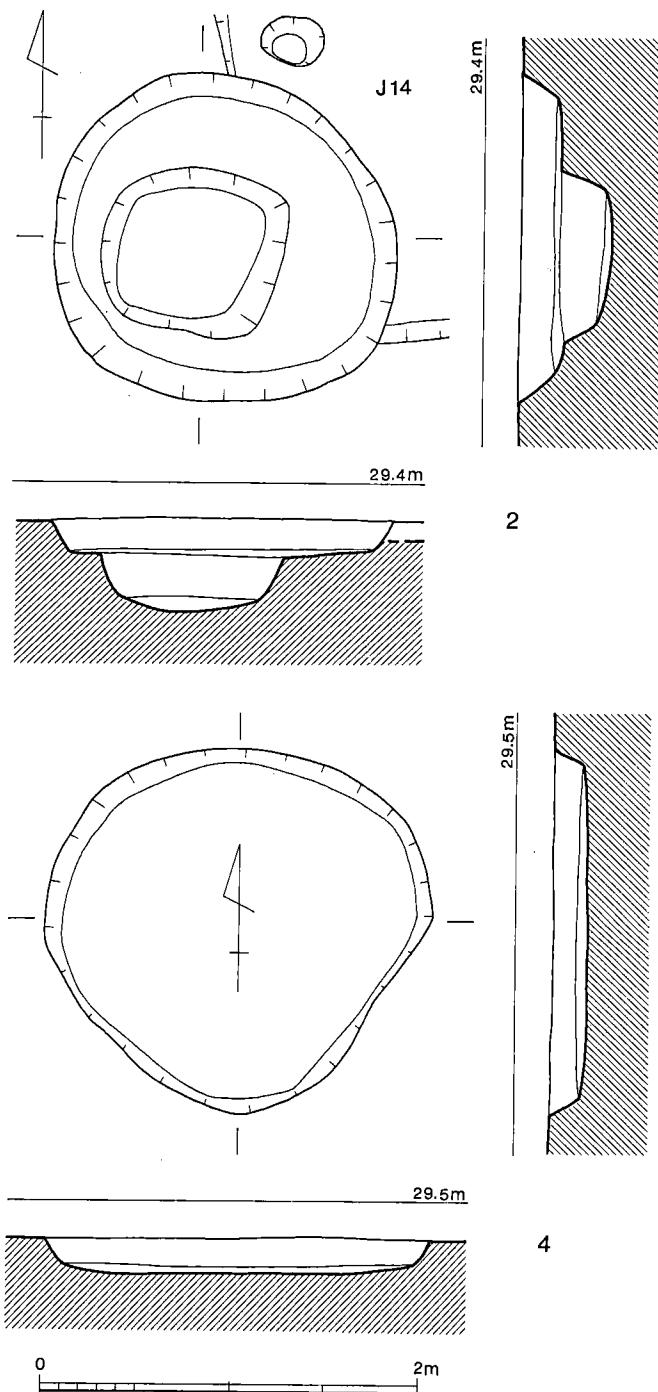
鉢（6・9） 6は、復原口径23cmで、内面上半はハケの上を磨いており、下半はヘラ磨きを施す。口縁外面はハケの上から横ナデ、以下外面はハケをナデ消している。9は、内湾しながら開く口縁で、実際にはどのような器形になるものかわからない。内外面ともに磨滅している。

壺（7） 肩部に断面三角凸帯を付け、その上にハケ工具による刻目を斜位に施す類である。胎土精良で褐色をなす。

甕（8・10・11） 8は、大きく外反して開く口縁で、外面は横ナデを施す。内面もハケの上を横ナデしている。10は、頸部でゆるく外反する口縁となり、胴部内面はナデ、外面には板ナデ状の擦過がみられる。外面には煤が付着している。11は、下半片で、外面には煤が付着している。外面は部分的にナデている。

青磁（12） 龍泉窯系青磁碗で、見込みに草花文を彫り込んでいる。底部は削り出しており、薄い黄橙色に発色している。

以上の出土遺物は、各時代にわたっている。1・2は8C末～9C前半代、3は8C前半～中頃、4・5の土師器杯は12C後半～13C代で、12の青磁もこの時期と考えられる。10・11も奈良期のものであろう。6・7・8は、弥生後期中～後半代のものである。これらの土器のうち、



第106図 A2・4号土壙実測図 (1/40)

切り合ひ状況等からみて、
6～8が当B15号住居跡に
伴うものと考えられる。

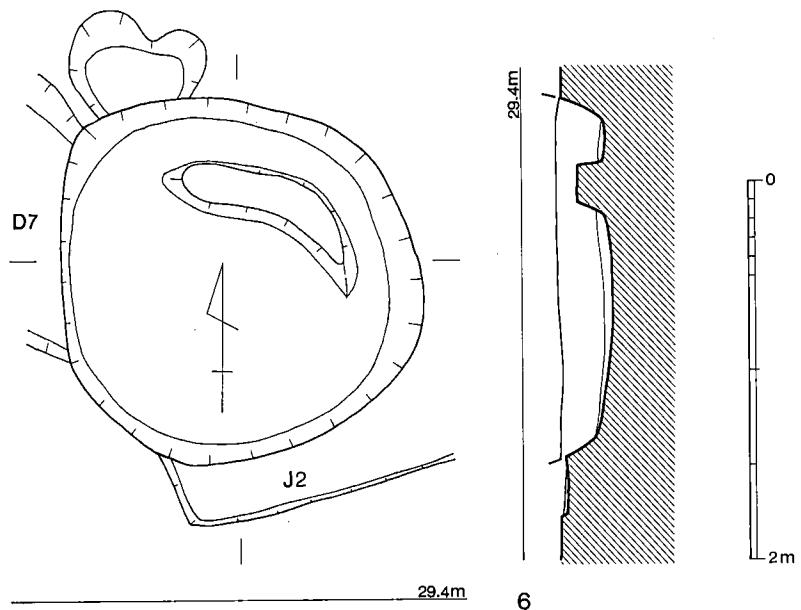
D 土壙

ここでは、豎穴住居跡以外の、掘り込みのみられる大ぶりの穴について報告しておきたい。うち、縄文期に含まれる土壙・風倒木痕・落し穴等については既述しているので、ここではそれ以降の、弥生・古墳・奈良～平安・室町期及び時期不明のものについてのみ記述しておきたい。

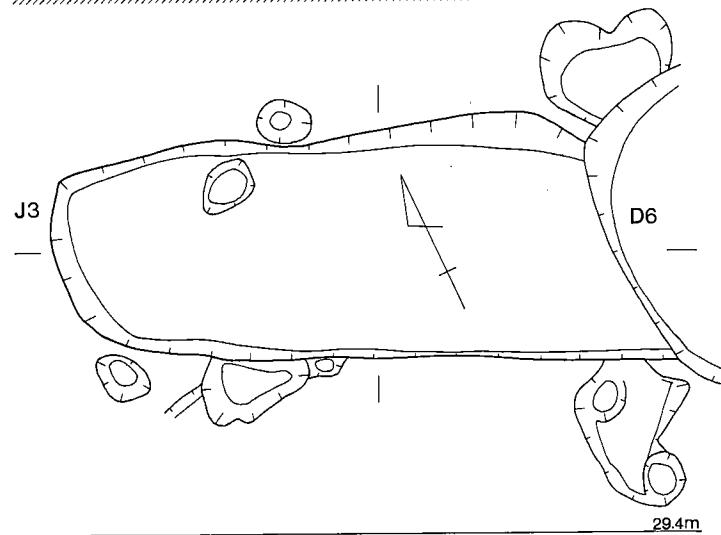
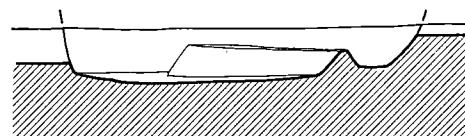
A2号土壙 (第106図)

A区の東端近くに位置する円形柿の木穴である。A14号住居跡の南西隅を切っている。南北1.74m、東西1.82mで、中央に更に穴を掘り込んでいる。深さ50cmで、埋土中から宋銭「治平元寶」(初鑄 仁宗1064年)1枚(第169図-2)が出土した。

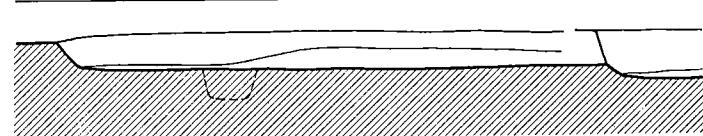
この土壙自体は、遺構全体図(付図)の中で破線で示したように、A区北半全面に並ぶ柿の木の植付穴であ



6



7



第107図 A-6・7号土壤実測図 (1/40)

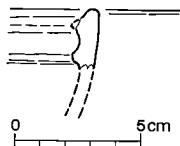
る。この柿の木穴は、ほぼ正確に 4 m ずつ離れて整然と並んでおり、その構造は、中央の植付穴の周囲に肥料溝をドーナツ状に掘り込んだものとなっている。

A 4 号土壙（第106図）

A区の西端隅に位置する浅い円形土壙である。南北に 1.93m、東西が 2.04m の不整円形プランをなし、深さ 18cm ほどと浅く、底面は平坦である。時期を示す遺物も出土しておらず、性格も判断できない。

A 6 号土壙（第107図）

A区西寄りの、前述の A 2 号土壙の西隣に位置する柿の木穴である。A 2 号住居跡と A 7 号土壙を切っている。



南北 1.9m、東西 1.94m の円形土壙で、深さ 28cm ほどである。柿の木穴そのものであるが、若干の土器が混入していたので、報告しておきたい。

出土遺物（第108図）

第 108 図 A 6 号土壙
摺鉢 器表に暗茶色の肌が出る中国製陶器で、胎土はザックリと粗い。
出土土器実測図 (1/3) 内面に 2 条の凸帯を連接させる類で、全面ロクロナデを施す。

A 7 号土壙（第107図）

上述の A 6 号土壙に切られており、西端では A 3 号住居跡を切っている。西北西から東南東に長軸をもつ長方形土壙で、長さ 3.25m 以上、最大幅 1.3m、深さ 20cm ほどとなる。底面は平坦で、北西寄りに小ピットが検出された。

平面形や底面の状況から、土壙墓の可能性が考えられるが、図示し得る出土遺物も無く、時期も、弥生後期よりも新しいとしか言えず、性格は決定できない。

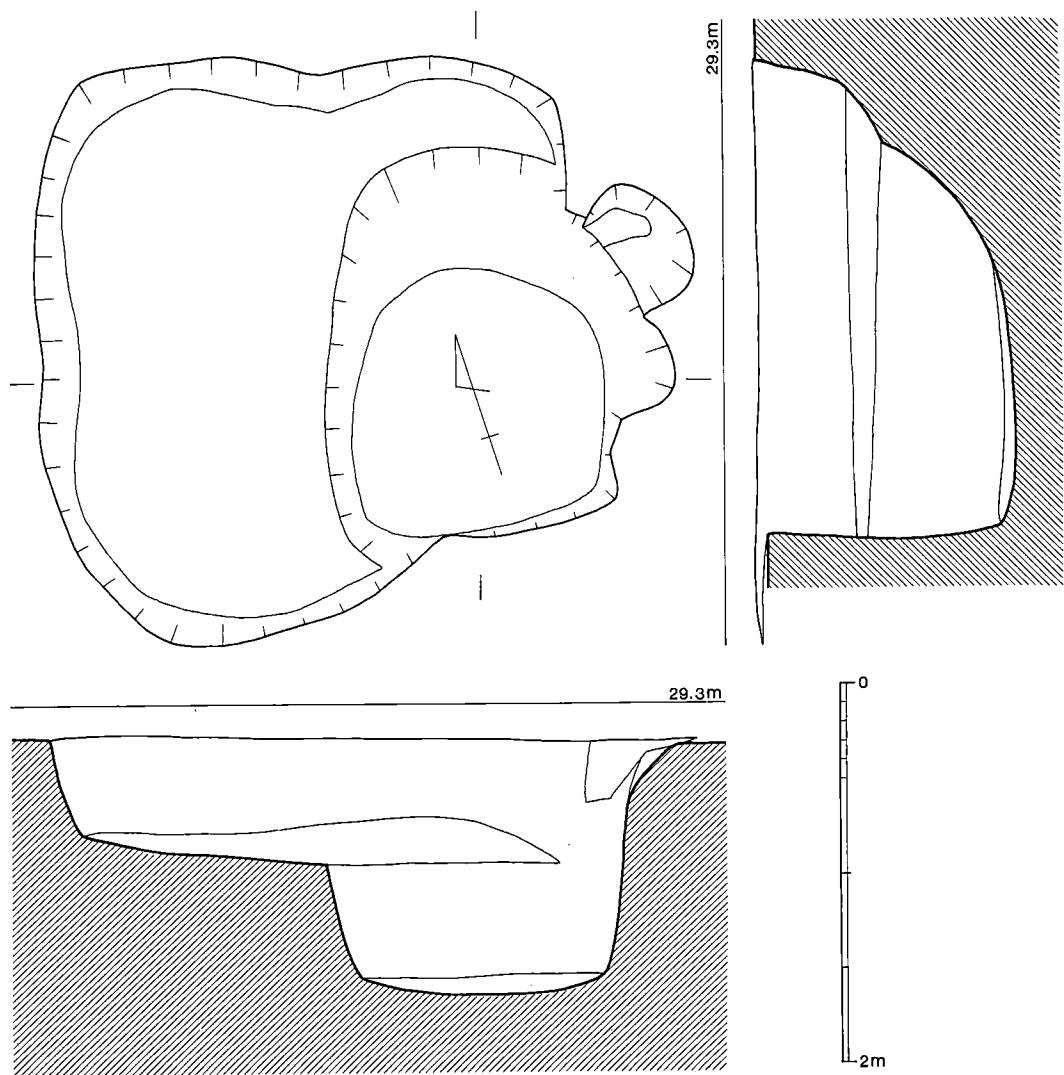
A 8 号土壙（第109図、図版20）

A区西寄りの、前述の A 7 号土壙の南隣に位置する。西半分が途中でテラスをつくる形状をなし、東側が深い大穴となっている。東西 3.35m、南北の最大幅 3.1m で、深さはテラス部分で 50~65cm、東側の最深部で 1.34m となる。

掘り込みの形状からみて、井戸が考えられるが、この基盤は河岸段丘の礫層であり、水は全く溜まらない。遺構の性格としては、中世の地下倉と考えた方がよさそうである。

出土遺物（第110図）

甕(1~3) 1 は、胎土精良で橙褐色をなし、開口壺の口縁となろう。外面上半は横ナデで、ハケ

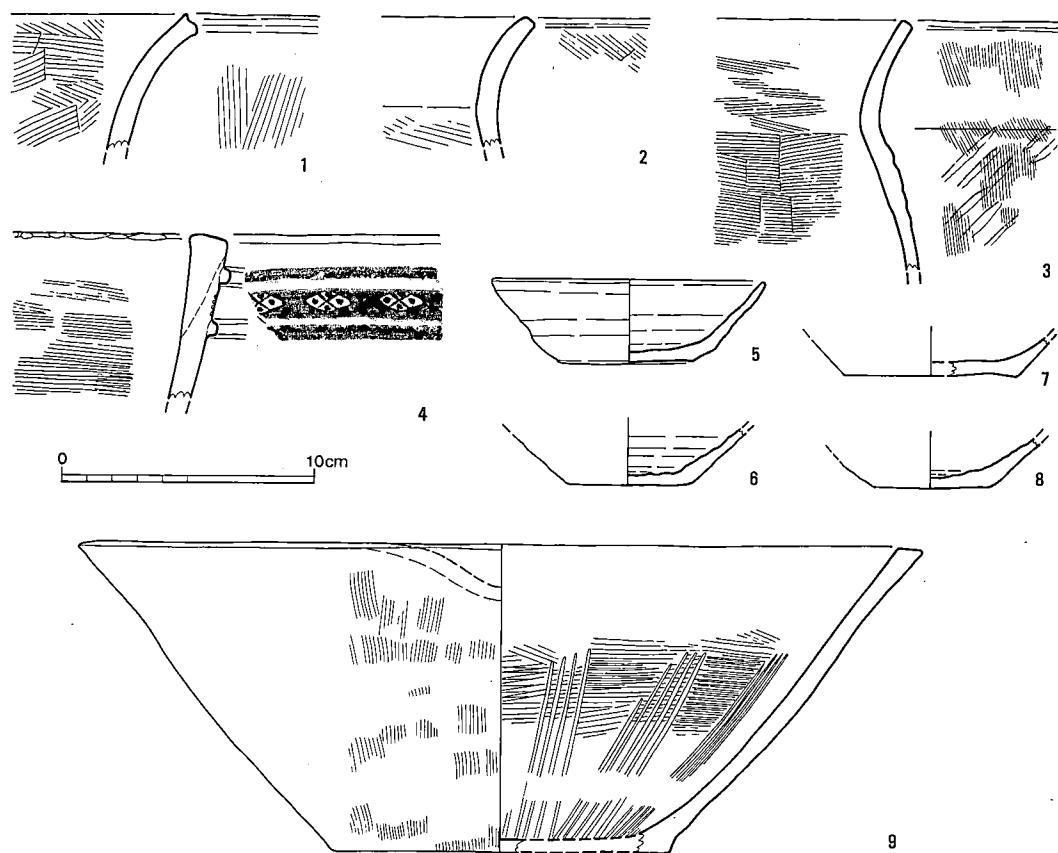


第109図 A 8号土壤実測図 (1/40)

を消している。2は、ゆるやかに開く口縁部で、口縁内面はナデ、外面はハケの上を横ナデしている。3は、胴部外面には叩きを施した上からハケ、口縁外面はハケの上から横ナデしている。

火舎(4) 黒灰色にいぶされた瓦質土器で、四菱の印文を2条の凸帯間に施している。胎土精良で、内面には細かいハケが施されている。

杯(5～8) 5は、底部糸切り土師器で、口径10.9cm、器高3.3cm、底径5.4cmとなる。体部～内底面まで横ナデで、稜線が多くつくられる類である。胎土精良で白橙色をなす。6は、底径4.9cmの糸切り土師器で、内底中心まで横ナデが施される。胎土精良で黄褐色をなす。7は、底径

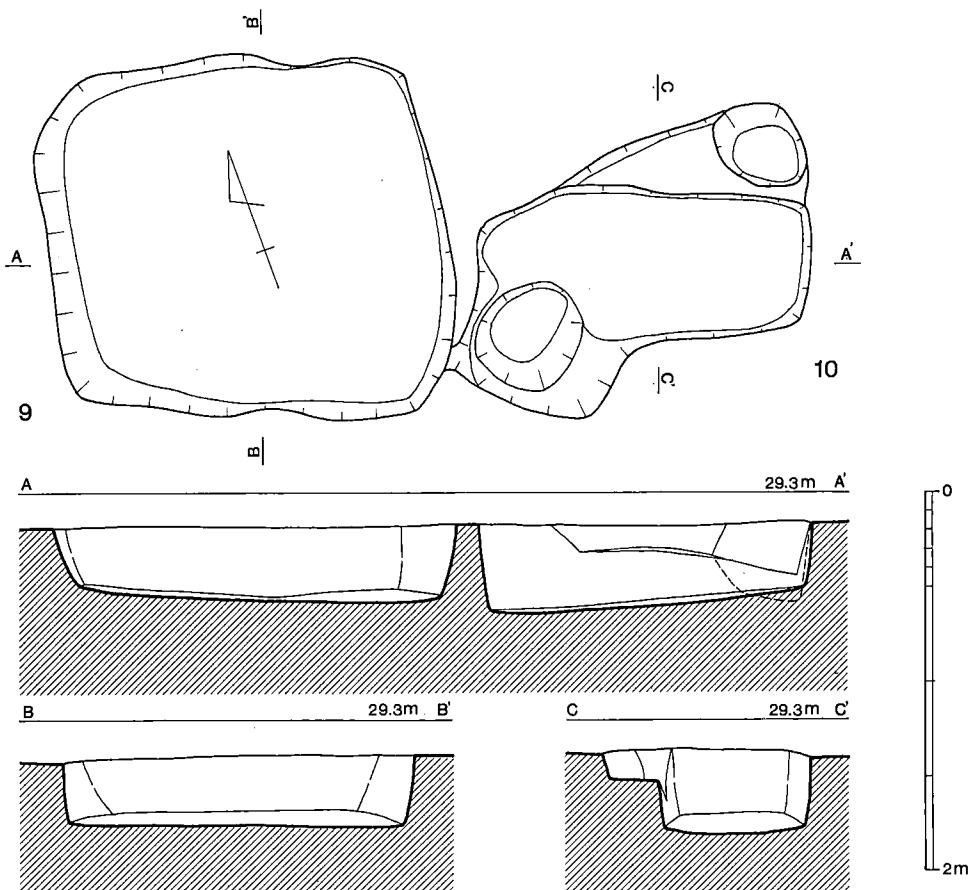


第110図 A8号土器出土土器実測図 (1/3)

7cmの糸切り底で、内外面とも横ナデを施す。胎土精良で橙褐色をなす。8は、底径4.6cmで、内底面中心まで横ナデが施されている。底部糸切りで、胎土精良、橙褐色をなす。

摺鉢(9) 明橙褐色の土師質焼成品で、口径35.6cm、器高12.2cm、底径15.4cmとなる。内面は横ハケの上に5本組の櫛目を間隔をおいて施している。外面は縦ハケの上を部分的にナデしている。胎土に細砂粒をやや多く含む。

以上の出土遺物のうち、1～3は弥生時代後葉代のもので、当遺構に対しては混入品として扱うべきであろう。4～9が、このB8号土器に伴うものであろう。5～8の土師器杯は、7が底径が大きい他は、口径に対して底径がやや小さめとなりつつあり、体部はナデによる凸をつくりながら大きく開く類になってきている。これらのことから、杯の示す15C後半～16C前半代がA8号土器の時期と考えられる。



第111図 A9・10号土壤実測図 (1/40)

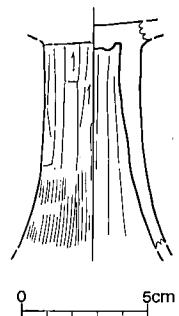
A9号土壤 (第111図、図版20)

A区西寄りの、大溝北端側に位置する。上述のA8号土壤の南隣で、略方形の整った土壤となっている。東西が2.14m、南北1.9mの寸詰まりの長方形プランをなし、深さ40cmとなる。底面はほぼ平坦で、壁もほぼ直立しており、整然としている。

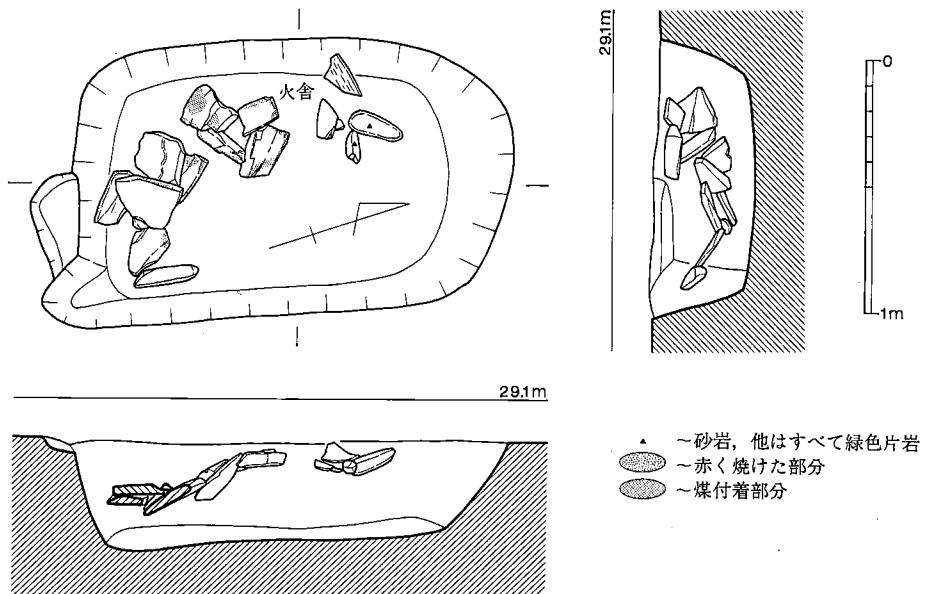
図示し得る遺物は無いが、覆土が黒色土であることや、土器小破片からみて、北隣のA8号土壤や、南側の大溝とほぼ同時期の中世遺構と考えられる。遺構の性格は確定できない。

A10号土壤 (第111図)

前述のA9号土壤の東隣に接している。長軸を西北西から東南東にとる



第112図 A10号土壤
出土土器実測図 (1/3)



第113図 A13号土壙実測図 (1/30)

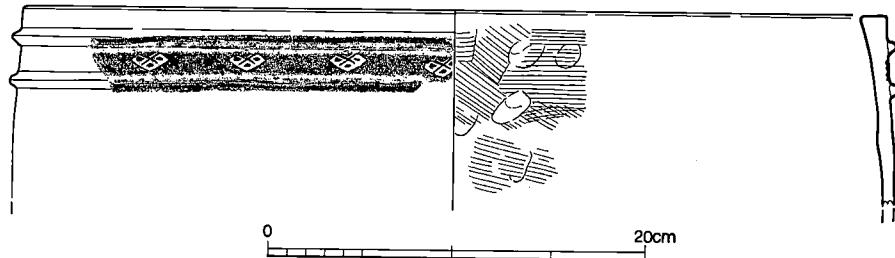
長方形土壙で、南西側をA1号掘立柱建物の柱穴に切られている。長さ1.75m、幅0.8mで、深さ45cmほどとなり、底面は東側が高く、西へ傾斜している。

東端の両隅は角ばっているのに対し、西端は先細り状に丸味をもった平面形となっている。このの形状からみて、土壙墓の可能性が高いと考えられる。

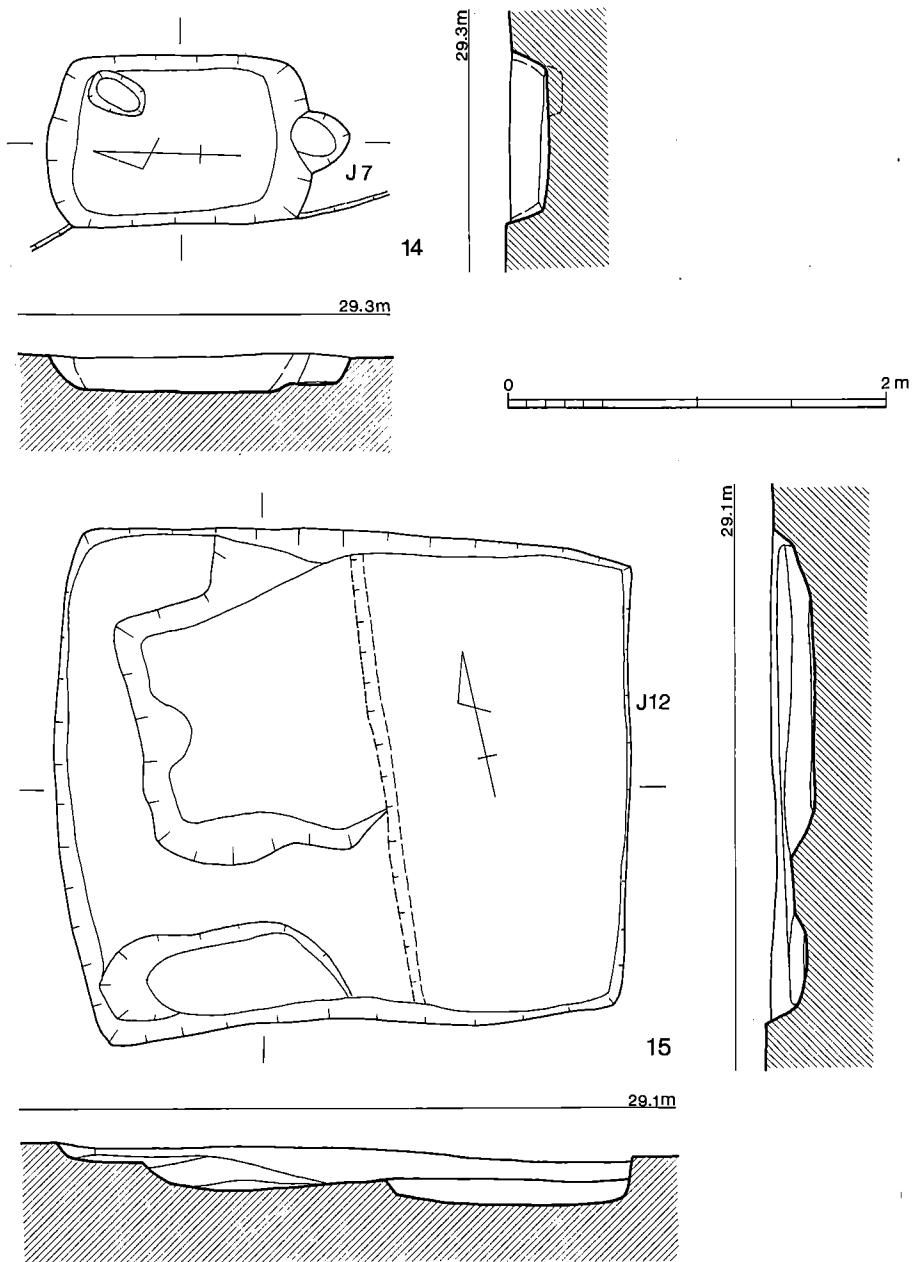
出土遺物（第112図）

高杯 脚柱径3.8cmで、外面上半は縦方向のヘラ削り、下半は縦ハケとなる。内面はナデているが、シボリ痕が残る。杯部内底面はヘラ磨きである。胎土に細砂粒が多く、金雲母を少し含む。焼成良好で橙褐色をなす。

この土器は弥生後期後葉～末葉のもので、当遺構への混入品であろう。



第114図 A13号土壙出土火舍実測図 (1/4)



第115図 A14・15号土壙実測図 (1/40)

A13号土壙 (第113図、図版21)

A区の西寄りで、A 5・6号住居跡の南側に位置する南北にやや長めの長方形土壙で、主軸は

やや東に振っている。南北長1.75m、東西幅1.1mの、北側が丸味を持つプランとなっている。深さは40cmほどあるが、北側の壁は傾斜が緩やかになっている。

土壙内には、緑色片岩の板石片が10個、赤く焼けたり、煤が付着した状態で出土した。また北寄りの上層からは砂岩の河原石が2個出土している。覆土中には全体に焼土や灰が多く混入しており、この中で火を焚いたことがわかる。ただ、これらの石は、底面に据え置かれたようなものではなく、すべて中位以上に浮いた状態であり、上から覆いかぶせたものようである。更に、これらの石の間に瓦質火舎の大破片が混入していた。

以上のことから、火葬所の可能性も考えて精査したが、焼骨片等は全く発見できず、当遺構の性格は決定できない。

出土遺物（第114図）

火舎 復原口径46cmの大型品で、外面灰黒色、内面は黒色～黄褐色をなす瓦質土器である。2条の凸帯の間に四菱文の印文を施している。内面はハケで指頭圧痕が残っている。外面の凸帯下8mmまでは横ナデ、それ以下は丁寧なナデ調整となっている。

この火舎は、四菱文といい器形といい、既述のA8号土壙出土品と酷似しており、A8号土壙が出土土師器杯から15C後半～16C前半と考えられていることから、当A13号土壙も同様の時期が考えられる。

A14号土壙（第115図）

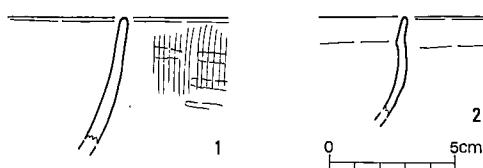
A区中央やや北寄りに、A7号竪穴住居跡があるが、その西壁内側に沿うように掘り込まれている。A7号住居の残りが悪く、埋土がほとんど無かったため、両者の切り合い関係は確認できなかった。よって、A7号住居に伴う土壙である可能性もある。

南北1.4m、東西0.9mの長方形プランをなし、深さ18cmほどとなる。底面は平坦で、図示できる出土遺物は無い。

A15号土壙（第115図、図版21）

A区北側の竪穴住居集中部分に位置する方形土壙である。東側でA12号住居を、南西側でA16号土壙をそれぞれ切っている。

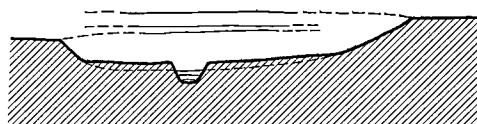
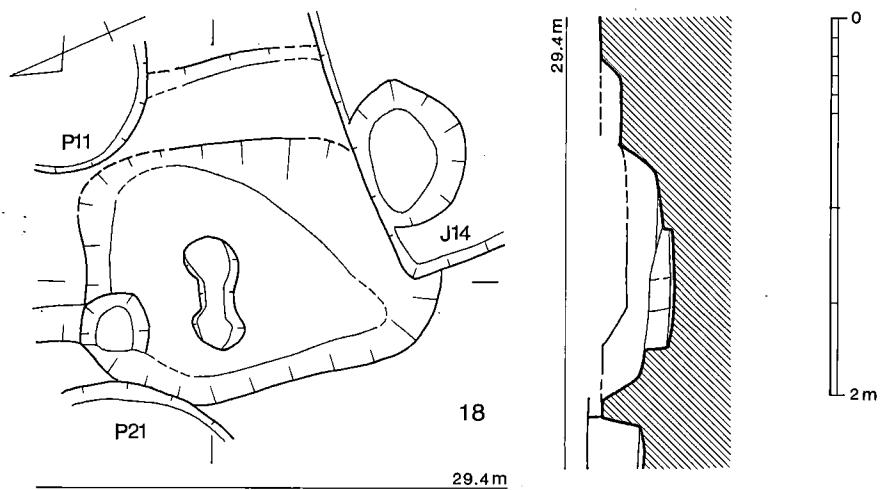
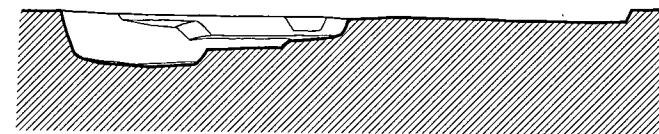
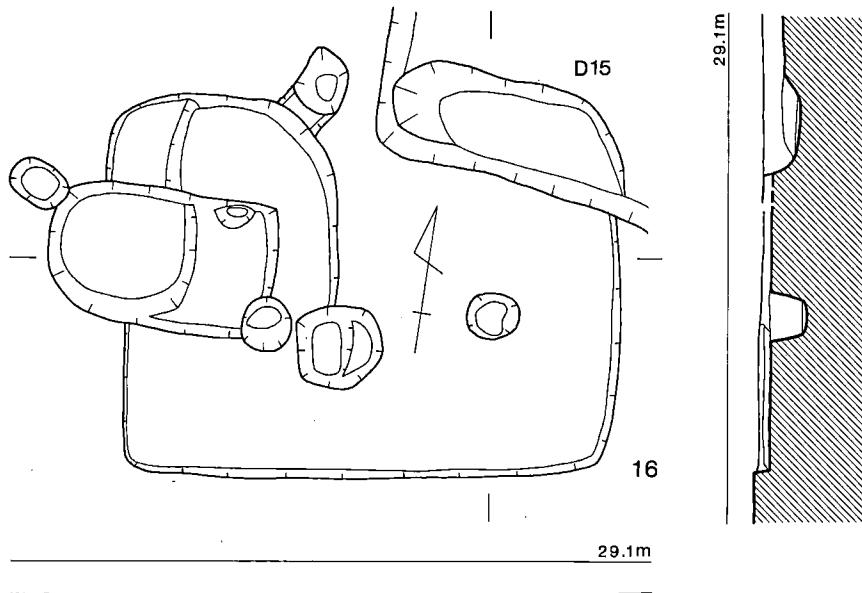
東西3.04m、南北2.6mで、各コーナーが角ばった寸詰まりの長方形プランとなる。底面は凹



第116図 A15号土壙出土土器実測図 (1/3)

凸が著しく、最深部で24cmとなる。

規模や形状からみて、特小型住居と考えられなくもないが、時期的に弥生後期の例が稀れであるため、ここでは土壙としてとり上げた。



第 117 図 A16・18号土壤実測図 (1/40)

出土遺物（第116図）

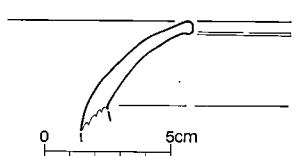
鉢（1・2）1は、深めのボル状器形となるもので、外面には叩きの上からハケを施し、内面は横ナデ調整となる。2は、薄手の椀状の器種で、内面に稜をつくり、わずかに外傾して立ち上がる口縁につくる。内外面ともにナデ仕上げで、胎土精良、焼成良好で、黄味褐色を呈しており、土師器的である。

以上の出土遺物からみて、このA15号土壙は、弥生時代後期末葉～古墳時代初頭の遺構であることが推定される。

A16号土壙（第117図）

前述のA15号土壙に切られて、南西側ではA6号住居跡に接するように位置する。全体に残りが悪く、北辺側では輪郭も不明確であるが、本来は東西に長めの長方形プランであったと思われる。

東西長2.63m、南北幅2.0m、深さは6cm前後と浅い。西壁中央の大きめの穴との新旧関係はわからない。また、中央南寄りのP106とその西側の小ピットは、当土壙を切って掘り込まれている。



第118図 A16号土壙出土土器

出土遺物（第118図）

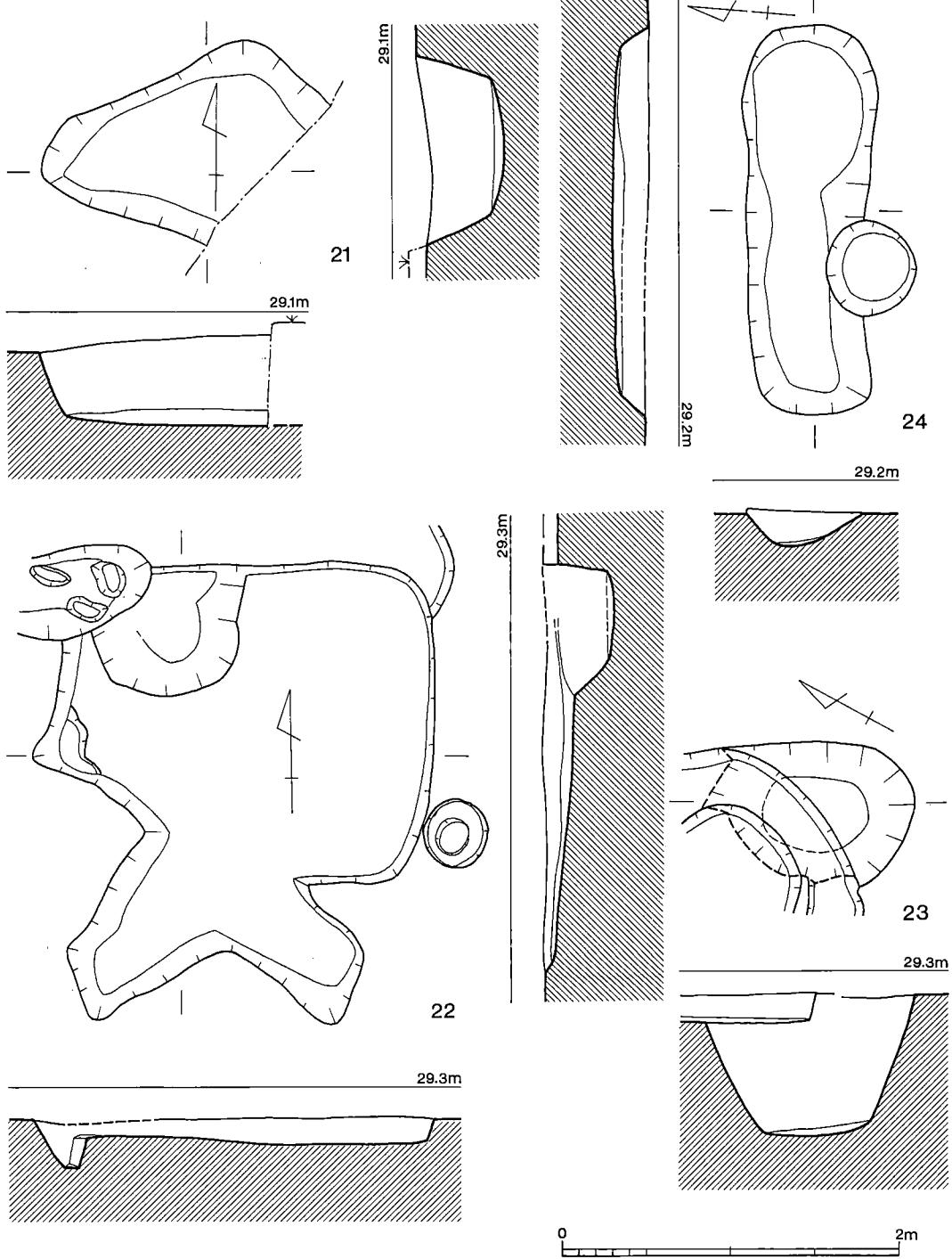
壺 長く大きく外湾気味に開く口縁部で、口唇下端は突出する。内面はナデ、外面は横ナデ仕上げである。胎土に細砂・金雲母が多く、赤褐色粒を若干含む。焼成良好で、明橙褐色を呈している。

実測図（1/3） この土器は、弥生後期末葉～古墳初頭のものであろうと思われるが、小片であり、確実にこのA16号土壙の時期を示すものかどうかは判らない。とりあえずは、この土壙の上限を示すものとしておくが、A15号土壙に切られることや、周辺の状況からみて、A16号土壙の年代は、大旨弥生後期末葉～古式土師器の時期と考えても大過ないようである。

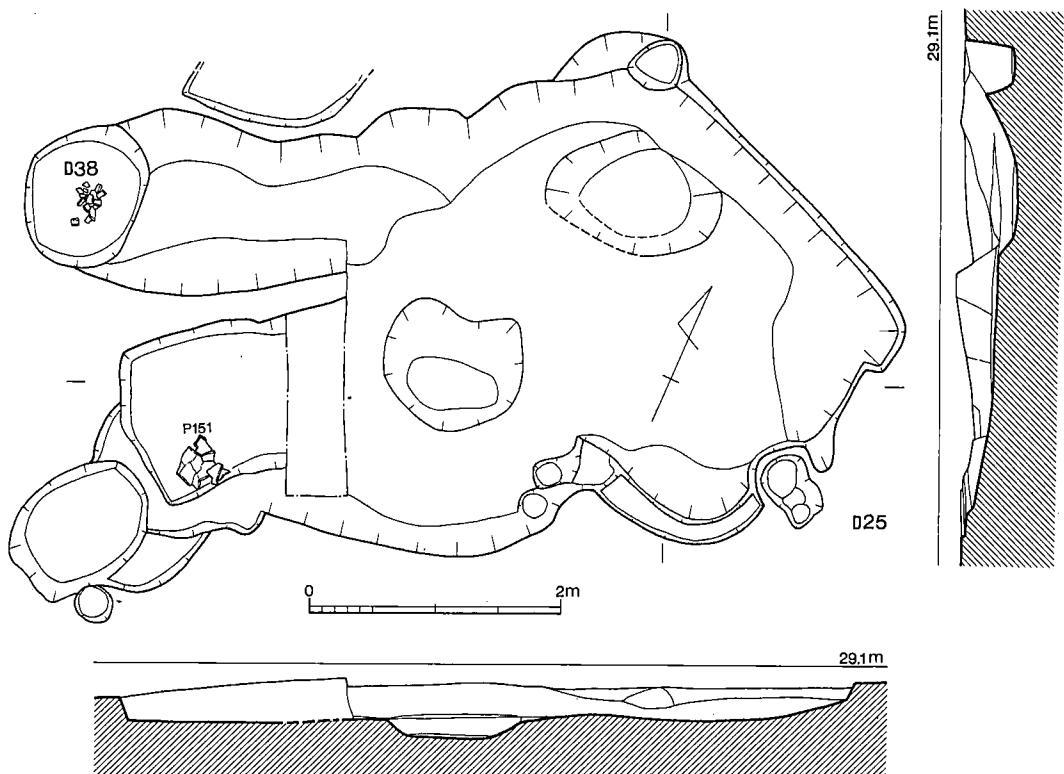
A18号土壙（第117図）

A区東端近くで、南側をA14号住居に切られ、西北端を柿の木穴のP21に、東北側ではP11に切られている。更にこの遺構全体がA14号住居以北に延びる溝状の落ち込みによって上半を切られている。

南北長1.86m、幅1.35mの不整楕円形プランをなす。深さは30cm前後あり、底面は断面皿状となる。底面中央に東西方向に2連結状の小ピットが検出された。時期を決定できる出土遺物も無く、切り合ひ状況や、不整形掘り込みの形態などから、縄文期遺構の可能性もある。



第119図 A21~24号土壤実測図 (1/40)



第120図 A25号土壌実測図 (1/60)

A19号土壌 (第5図, 図版3)

A区西端近くの大溝の東側に位置する。北側で縄文晩期のA1号土壌を切っている。南北の長さ1.75m, 東西は1.8mほどの不整形プランの土壌で、深さは25~10cmと浅い。底面は、いくらくか凹凸はあるが、わりと平坦となっている。

埋土中から、細い竹の炭化したものが若干出土しているが、火を焚いたような痕跡は認められない。図示し得る遺物は無いが、糸切底の土師器小皿小片が出土しており、西側の大溝や、南側のA3号落込みと関連する中世のある時期のものと考えられる。

A21号土壌 (第119図)

A区東南端の発掘範囲際に位置する。東半は発掘範囲外へ拡がる。東西1.75m以上、南北1.2mの不整形プランをなす。深さ55cmほどと深めで、底面はやや丸味をもつ。

図示できるような出土遺物は無く、時期決定もできない。遺構の性格も推定困難である。

A22号土壌 (第119図)

A区中央北寄りのA 8号住居の南側に位置する。北側でA 8号住居を切る方形土壙を切っている。西北側では、溝状のP260に切られている。当土壙の北半は方形をなしており、本来この土壙の形状は寸詰まりの長方形であった可能性がある。

図示できる出土遺物が全く無く、時期決定は困難であるが、切り合ひ状況から、奈良期以降の歴史時代の所産ではないかと思われる。全体に掘り込みは浅く、底面は平坦であるが特徴が無く、遺構の性格を明らかにすることはできない。

A23号土壙（第119図）

A区中央西寄りのA 3号住居と切り合う位置に検出された。西半を柿の木穴のP94に切られるが、A 3号住居との新旧関係は、明らかにできない。これは、住居の埋土が全く残っていないかったためであるが、おそらくは住居より新しいと考えられる。

南北長1.25m、東西幅0.85mで、楕円形状の平面形をなす。深さは、85cmほどとしっかりと掘り込まれている。図示できる出土遺物は無く、時期は決定できない。遺構の性格についてもイメージが湧かない。

A24号土壙（第119図）

A区の南端に大きなA 1号溝があるが、その西側に、東西に長軸をとて位置する。東西の長さ2.3m、幅0.8mの長楕円形をなす。壁が全体にだらっとしており、底面も横断面は皿状をなす。南辺中央付近で円形ピットに切られている。

平面形からみると、土壙墓的な感じを受けるが、掘り込みの形状が整然としておらず、若干の疑問を残す。図示に耐え得る出土遺物も無く、時期の決定はできない。

A25号土壙（第120図）

A区中央南寄りの、A 1号落込みの南隣に位置する。大きな不整形の掘り込みで、1・2号落込みと同性格のものかもしれないが、深さがいくらかみられるため、土壙として分類した。

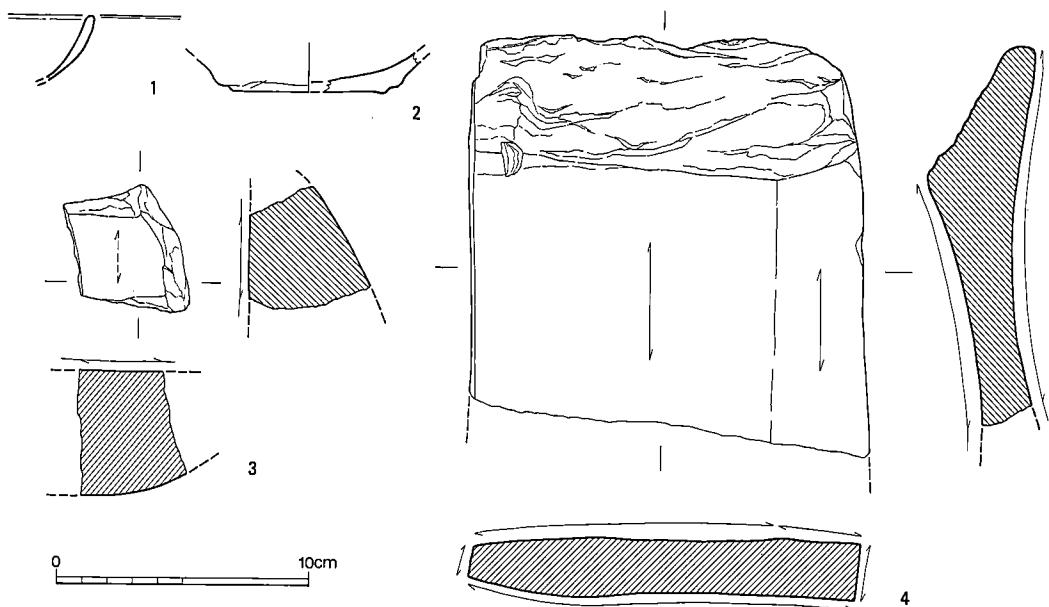
東西長6.2m、南北最大幅4.05mとなり、深さは45cmほどとなる。底面は凹凸がいくらかあり、何回かの掘り返しが行われたものと考えられる。

東北端は縄文晩期のA38号土壙と連続しており、南東端近くの上面からは古式土師器底部（第164図-16、P151として取り上げた）が出土している。

出土遺物（第121図）

鉢（1） 小型で浅めの鉢で、体部下半の器壁が薄くなるタイプである。外面下半はナデているが、他は磨滅している。古墳時代初頭期のものの混入品であろう。

杯（2） 底径6.3cmの底部糸切り類土師器である。胎土精良で、体部がかなり外傾して開く類



第121図 A25号土壙出土土器・砥石実測図 (1/3)

になりそうである。

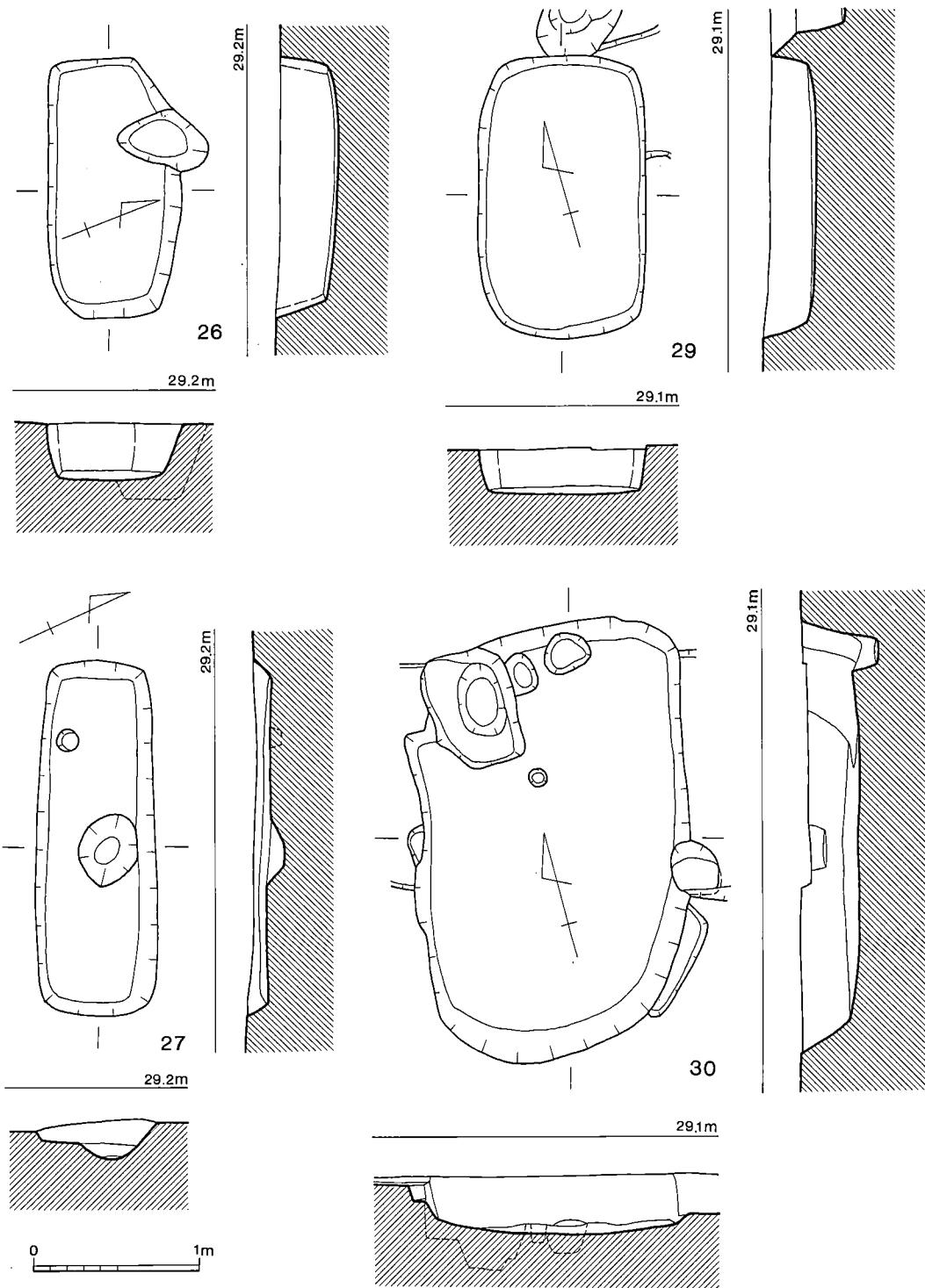
砥石 (3・4) 3は、凝灰岩製の粗砥で、表面のみ使用している。裏面は平滑であるが自然面と思われる。石材の表面は淡茶～淡褐色をなすが、中は灰色となっている。厚さ5cm以上となる。4は、片麻岩製中砥で、極めて良く使い込まれている。左右両側面は平滑でツルツルしているが、表裏面はややザラザラした感じである。現存長16.5cm、幅15.8cm、厚さ3.5～1.8cmの大型類である。

以上の出土遺物のうち、2がこのA25号土壙の時期を示すものと考えられる。ただし、破片資料であるため、確実な判断はむつかしい。とりあえず、室町期のものと考えておきたい。

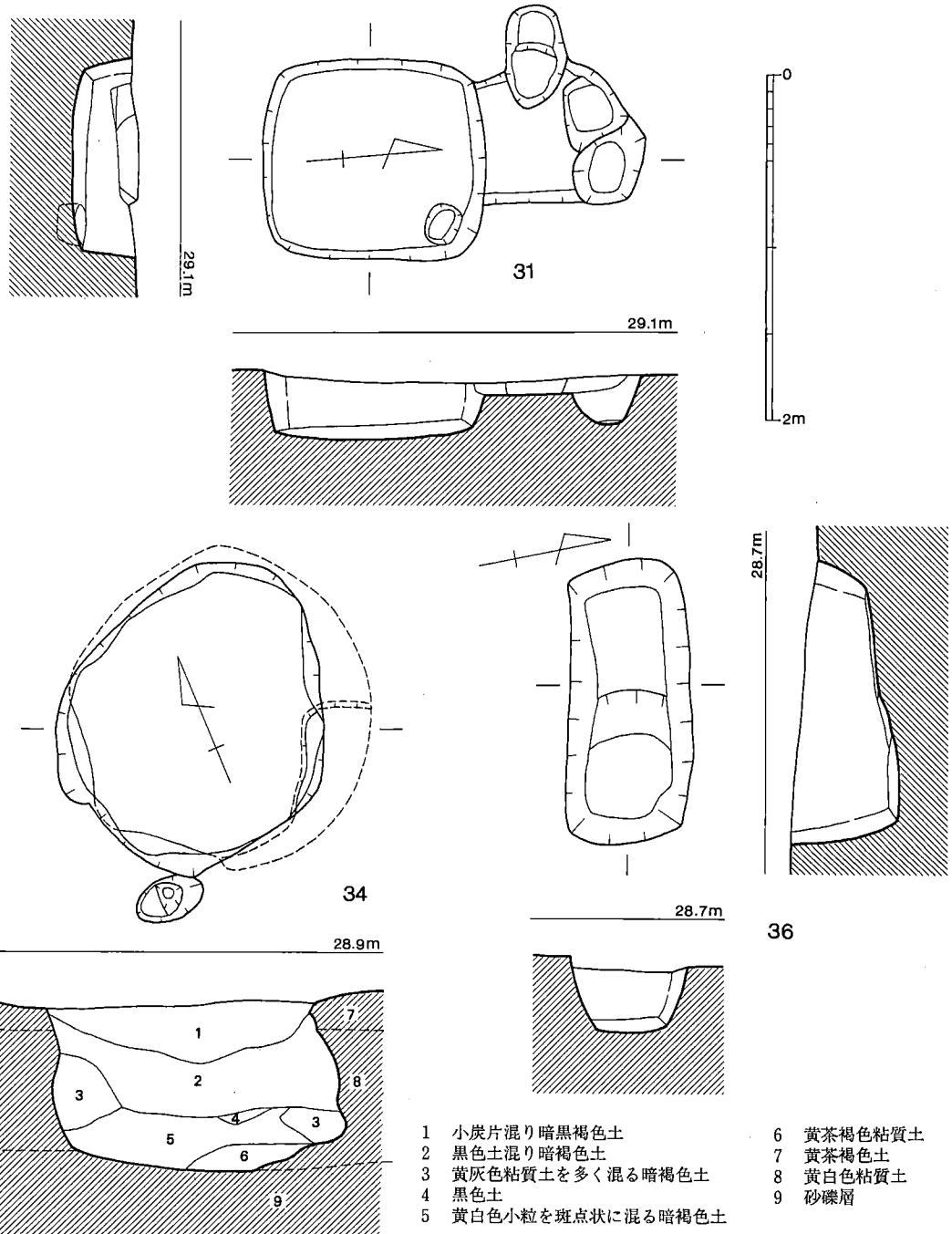
A26号土壙 (第122図)

A区中央のやや南寄りのA15・16号住居跡の東側に位置する。長軸を西北西から東南東にとる長方形土壙である。東西長1.56m、南北幅0.8mで、四隅はやや角ばっている。深さ34cmほどで、底面は中心付近がやや低くなっているが全体に平坦である。北辺にみられる小ピットとの切り合い関係は不明である。

出土遺物のうち、図示できるものは無く、時期を決定することはできない。ただ、南隣のA27号土壙と並行していることから、一連の土壙墓群となる可能性が高いといえよう。



第122図 A26・27・29・30号土壤実測図 (1/40)



第 123 図 A31・34・36号土壤実測図 (1/40)

A27号土壙（第122図）

前述のA26号土壙の1.5m南隣に位置する。長軸を西北西から東南東にとり、整然とした長方形プランの土壙となる。東西の長さ2.15m、南北幅0.72mとなる。小口側は東端の方がやや幅広い。深さは15cmほどと浅く、残りは良くない。底面は平坦で、2個の小ピットが検出されたが、当土壙に伴うかどうかは不明である。

出土遺物のうち図示できるものが無く、時期を知ることができない。A26号土壙と並んでいることから、一群の土壙墓と考えることができる。

A29号土壙（第122図）

A区西端中央付近の、A5・6号住居の西側に位置する。長軸を僅かに東に振って南北にとり、東隣のA30・13号土壙と類似している。南北長1.7m、東西幅1.01mのやや隅丸の長方形プランをなす。深さ27cmほどで、底面はほぼ平坦である。

出土遺物のうち図示できるものは無く、時期を判断できないが、遺構の形状からは、寸詰まり長方形の土壙墓と考えることもできよう。

A30号土壙（第122図）

上述のA29号土壙の東隣70cmの所に、ほぼ並行して検出された。長軸をやや東に振った南北方向にとる。南北長2.65m、東西幅1.6mで、南端は丸くなっている。深さ35cmほどで、底面はいくらか凹凸はあるものの大旨平坦である。北西端の小ピット群は、当土壙に伴うものかどうかわからない。

出土遺物のうち図示できるものは無く、時期を判断することはできない。東隣に位置する中世のA13号土壙と主軸方向も近似しており、一連の土壙群ではないかと想像される。

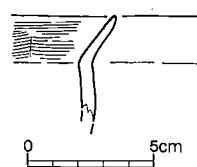
A31号土壙（第123図）

A区西端中央の、前述のA29号土壙の南2.3mの所に位置する。北側の一段深い掘り込み部分との切り合い関係は確認できなかったが、本来南半部のみの方形土壙ではなかったかと推定される。

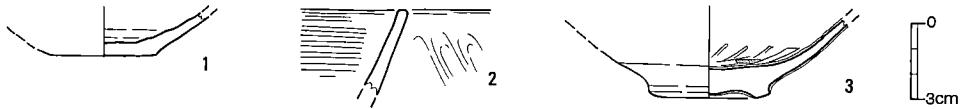
南北長1.3m、東西幅1.14mのほとんど正方形に近い平面形をなす。深さ35cm強のしっかりした掘り込みをみせる。底面はゆるやかに中央が低くなっている。

出土遺物（第124図）

甕 口縁の上方へ先細りするような、くの字口縁の小型甕である。口縁内面横ハケ、胴部内面と外面は丁寧なナデ調整仕上げである。



第124図 A31号土壙
出土土器実測図 (1/3)



第125図 A34号土壙出土土器実測図 (1/3)

口縁上端外面は横ナデ。胎土に細砂粒を多く、金雲母を少し含む。焼成良好で黄褐色をなす。

A34号土壙 (第123図)

A区西端沿いの北寄りに位置する。当遺跡では珍しい円形で深い土壙で、弥生時代の袋状豊穴と断面形態・規模ともに酷似している。

上端径は $1.55 \times 1.85\text{m}$ 、下端径は $1.75 \times 1.75\text{m}$ とほぼ正円形に近い。深さは 1.0m ほどあり、中央から東南側が低くなっている。

埋土状況は図に示したとおりであるが、上半に炭混りの黒色土がレンズ状に堆積しており、底部の基盤は、河岸段丘の砂礫層となっている。このことから、井戸としての機能は考えられないことになり、A8号土壙と同様な地下倉的な用途を想定する方がより妥当と思われる。

出土遺物 (第125図)

杯 (1) 底径が 4.2cm と小さい類で、体部が大きく広がるタイプとなろう。底部糸切りで、胎土はかなり精選されており、体部外面下端がナデ、それ以上と内面は横ナデを施す。15C後半段階以降のものと考えられる。

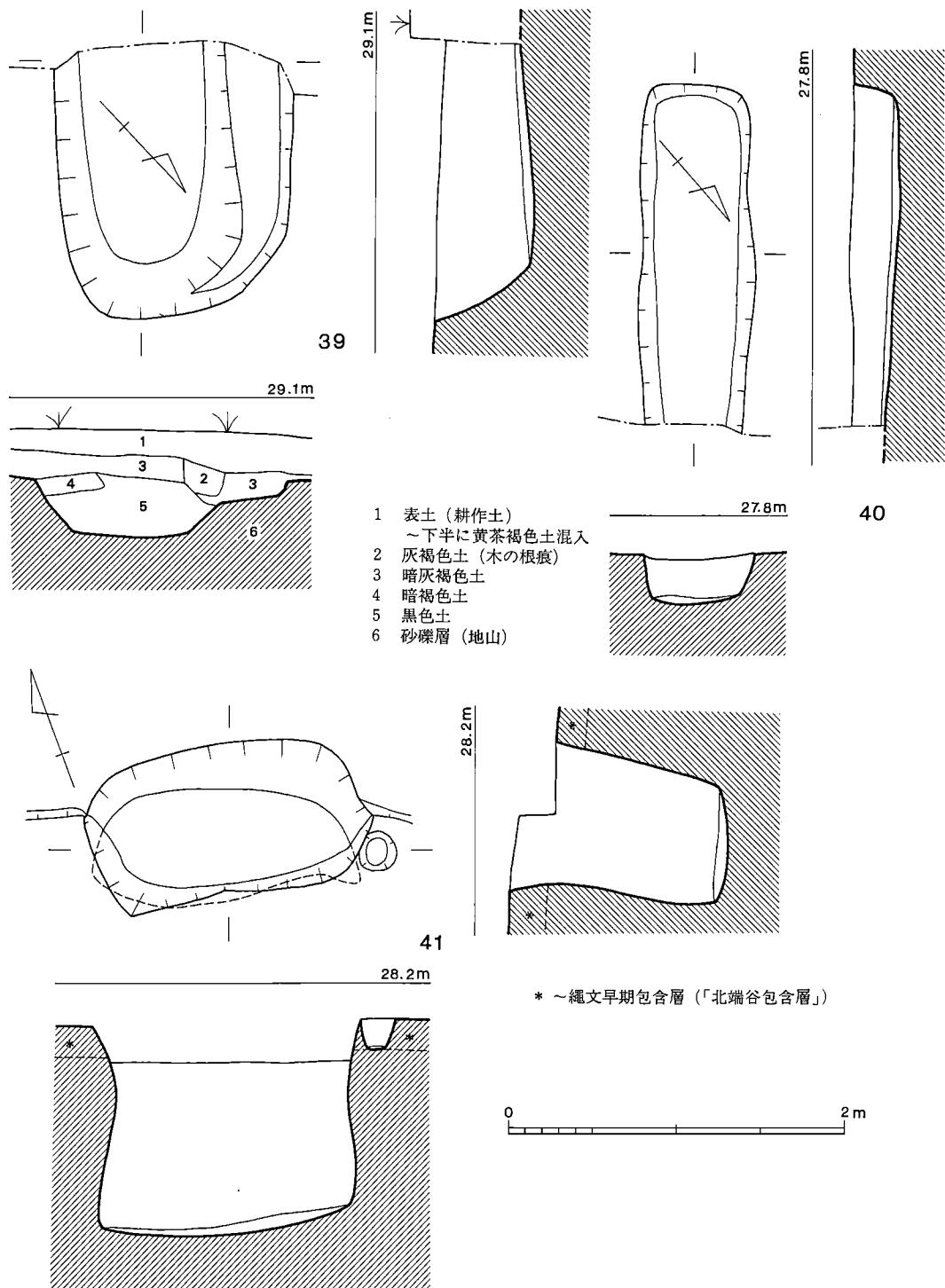
鉢 (2) 内面に横ハケを整然と施し、それ以下はナデている。外面には指オサエ痕がみられ、胎土はわりと精良で明澄味茶色をなす。弥生後期の小型鉢とも考えられるが、外面の指オサエなど、技法的に疑問点がある。室町期の土鍋製作法と類似することから、中世のものと考えておきたい。3は、疊付部分のみ無施釉の中(近)世陶器で、高台径 4.8cm を測る。釉調は内面が黄味白色、外面は茶白色で萩焼風である。内面見込み部にはやや斜め方向の放射状押し引き圧痕がみられ、目土跡もみられる。胎土には細砂を多く含む。

以上の土器のうち、3の陶器は産地、時期ともに明確にできない。高麗時代の雑器の可能性も考えられる。いずれにしろ、1の示す15C後半～16C前半のものと考えられる。

A36号土壙 (第123図)

A区北端近くの最西縁に位置し、前述のA34号土壙の北西 3.5m に位置する。東西に長軸をとる長方形土壙で、東半部が一段低くなる。

東西長 1.63m 、南北幅 0.73m で、深さは西端で 30cm 、東端の深い部分で 60cm となる。出土遺物で図示できるものは無く、時期を決定できないが、遺構の形状や主軸方位からみて、弥生後期～古墳初頭の土壙墓ではないかと想定される。



第126図 A39~41号土壤実測図 (1/40)

A39号土壙墓（第126図、図版22）

A区の南辺西寄りの発掘範囲際にて検出された。南半は発掘範囲外へ延びる。主軸を北東から南西にとり、北側のA 6号溝（A 1号方形周溝墓の北側溝）と直交するような方位となる。

長さ1.65m以上、東西幅は1.05mとなる。西側が2段掘り状となっているが、土層図で示したように、後世の別の掘り込みによるテラス様形成であることがわかる。深さは、現地表から67cm、遺構面から55~45cmとなる。底面はゆるやかに丸くなり、壁も全体に大きく開いた形状をなす。

出土遺物はわずかな土器小片のみで、時期を決定できないが、掘り込みの形態や、位置から考えて、A 1号方形周溝墓の埋葬主体部のうちの1基にあたるのではないかと考える。推定復元した方形周溝の中心より東に寄っているため、他にも主たる主体部が在ると考えられる。

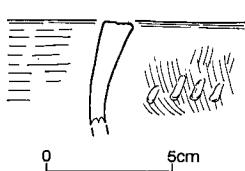
A40号土壙（第126図）

A区最北端に谷があり縄文早期包含層を形成しているが、その緩斜面に位置する。長軸を南北から北東にとる長方形土壙で、北端谷包含層土層図（第33図）に見る如く、地表下170cmの暗褐色土（縄文早期包含層）上面から掘り込まれている。埋土は黒色土で、その上の層（古墳~室町期包含層）と同じである。

長さ2.02m以上、幅0.67mの細長い長方形プランをなし、深さは0.3mほどである。底面は、南西側へ傾斜を持つ。底面近くから有茎の鉄鏃が副葬されていた記憶があるが、現物が所在不明である。

遺構の性格としては、上記副葬品の在り方や、形態上から、明らかに土壙墓と判断できる。

出土遺物（第127図）



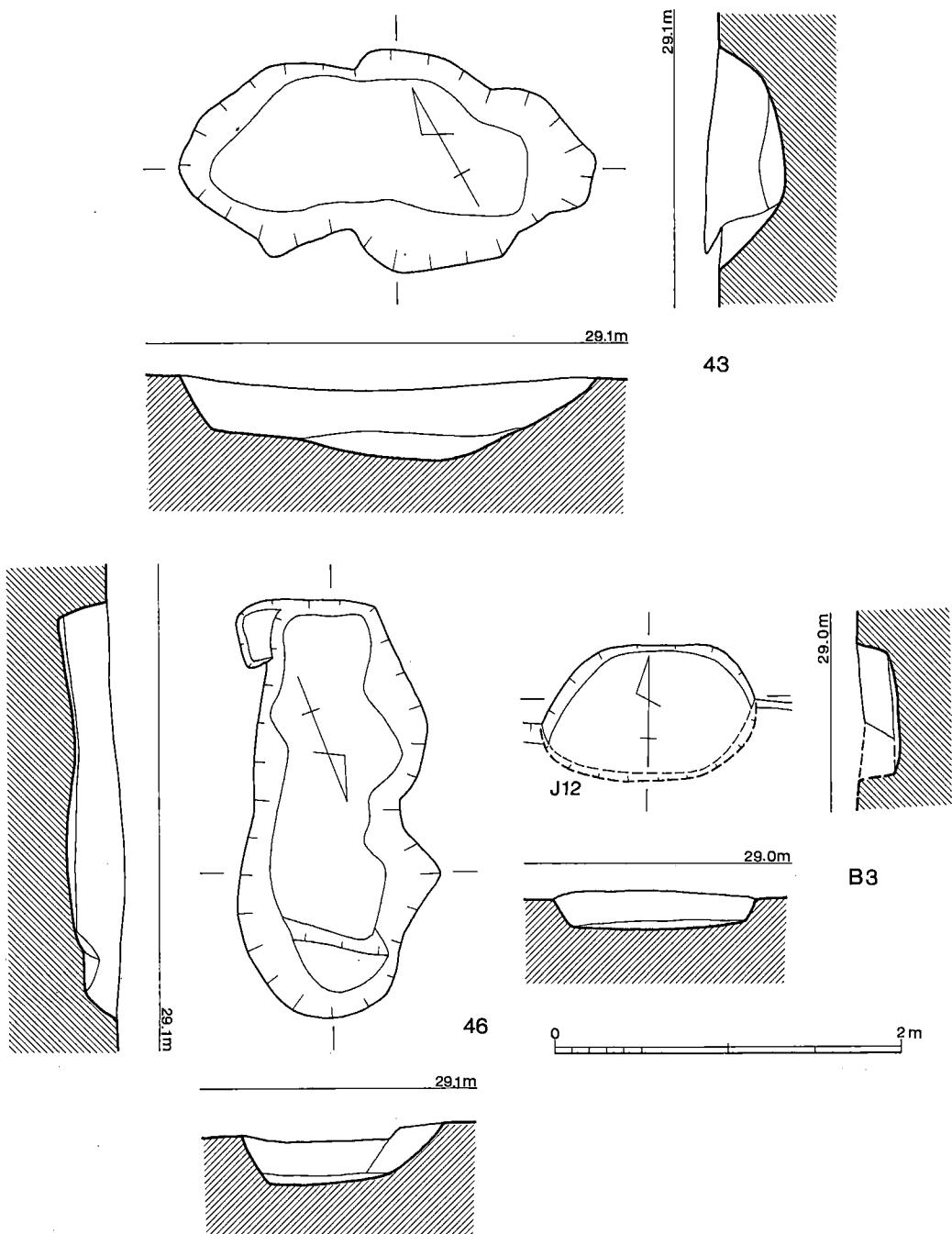
第127図 A40号土壙出土
土器実測図（1/3）

壺 異類の短頸壺口縁部片である。外面にはやや斜めの短沈線をハケの上から連続施文している。口唇部上端面には浅い沈線を入れている。上端部が最も厚くなるという特徴があり、明らかに在地系土器ではなく、瀬戸内系の流入品であろう。

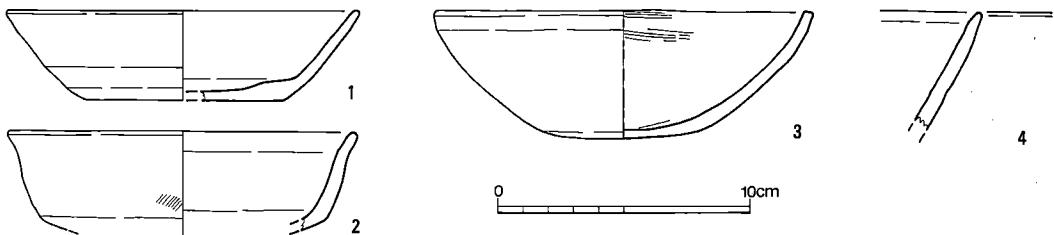
この土器自体は弥生後期の外来系土器であろうが、当A40号土壙墓は、鉄鏃の出土などからみて、古墳時代の遺構であろう。

A41号土壙（第126図）

A区北端の谷状の縄文早期包含層の南端付近に位置する。東西に長軸をとる楕円形土壙である。東西長1.73m、南北幅0.9m、深さ1.25mの規模となり、南半は壁が袋状断面となる。深くて、一見、弥生期貯蔵穴にも似ているが、時期的に合わない。



第128図 A43・46・B3号土壤実測図 (1/40)



第129図 B3号土器実測図 (1/3)

縄文早期の包含層上面から掘り込まれており、それより新しいことは判るが、時期を明示する遺物が無く決定はできない。性格も推定が困難であるが、南方11mにあるA34号土壙と共に通ずるような、地下倉的なものなのかもしれない。

A43号土壙 (第128図)

A区の西辺近くで、A13号住居跡の西側に位置する。住居とは重複していると思われるが、住居の覆土がほとんど残っていない状態で、特にこの土壙付近では西壁ラインが全く確認できず、両者の切り合い関係を示すことができない。

北西から南東に長い不整形プランをなし、上端最大長2.4m、最大幅1.27mで、深さは0.48mある。壁は全体に緩やかに開き、底面も大きく凹凸がある。北辺のP184は、当土壙を切るピットである。

出土遺物のうち、明確な時期を示すものは無いが、掘り込みの形状等から、縄文期の土壙の可能性も考えられる。

A46号土壙 (第128図)

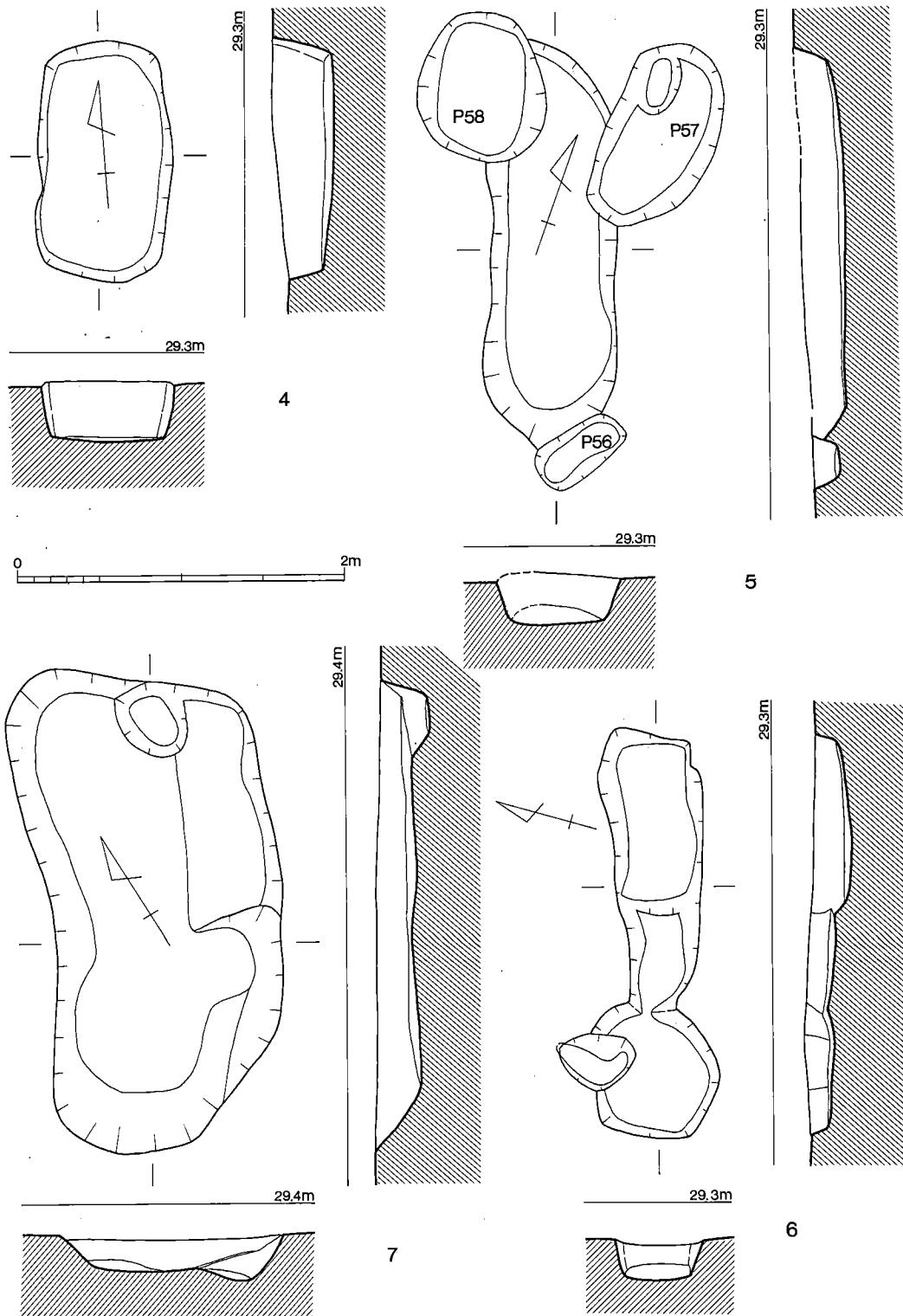
A区の南西隅に、方形周溝墓の北辺溝と考えた6号溝があるが、その東南端側に位置する。北北東から南南西に長軸をとる不整形土壙で、長さ2.42m、最大幅1.15m、深さ0.34mとなる。北端では小さなテラス部分をつくり、底面は全体に大きく波打っている。

このような不整状掘り込みの形態から、遺構の性格を推測し難く、時期についても図示に耐える出土遺物が無いことから、不明と言わざるを得ない。

B3号土壙 (第128図)

B区東縁寄り北側で、B12・13号住居跡を切って営まれている。当初B12号住居と同時に掘り下げていたものを中途で確認したものである。よって南辺は推定線で示した。

東西1.24m、南北は推定0.78mの楕円形土壙で、深さは25cmほどと浅い。底面は平らで、わりと整った掘り込みである。



第 130 図 B 4 ~ 7 号土壤実測図 (1/40)

出土遺物（第129図）

杯(1～4) 1は口径14cm, 器高3.5cm, 底径7.9cmとなる底部ヘラ切り類である。体部下半から回転ヘラ削りを施している。底内面にはナデツケが施される。胎土精良で、橙褐色をなす。2は、復原口径14cmの底部ヘラ切り土師器である。胎土精良で、内面は茶褐色、外面は黒色をなす。3は、口径15cm, 器高5cm, 底径6.4cmとなる底部ヘラ削りの土師器である。杯の部類ではなく、椀とした方がよいだろう。底部は丸底風となり、内面はナデ、上端にハケがわずかにみられる。外面上端は横ナデ、以下はナデであろう。特殊な器種である。4は、口縁小片であるが、外面下端には横方向のヘラ削り痕がみられ、胎土精良で、橙褐色をなす。

以上の出土土器は、2・3が特殊な形状を示すが、1からみて、9C初頭頃のものと考えられる。

B 4号土壙（第130図）

B区中央付近の、B 6・7号住居跡の東側のに位置する。南北に長軸をとる長方形土壙で、長さ1.47m, 幅0.81m, 深さ0.39mとなる。

底面は平坦で、整然とした掘り込みを見せており、土壙墓の可能性が考えられる。出土遺物は僅少で、図示できるものは無く、時期を決定できない。

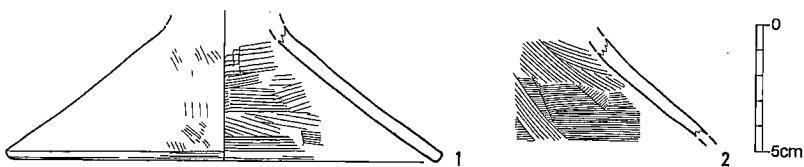
B 5号土壙（第130図）

B区やや南の西寄りに位置し、長軸を北北西から南南東にとる長楕円形土壙である。南端をP56に、北側をP57・58の各ピットに切られている。長さ2.5m, 最大幅0.82m, 深さ0.28mとなる。南北両端の平面形は丸くなっている。底面は、北半側がゆるく高くなっている。

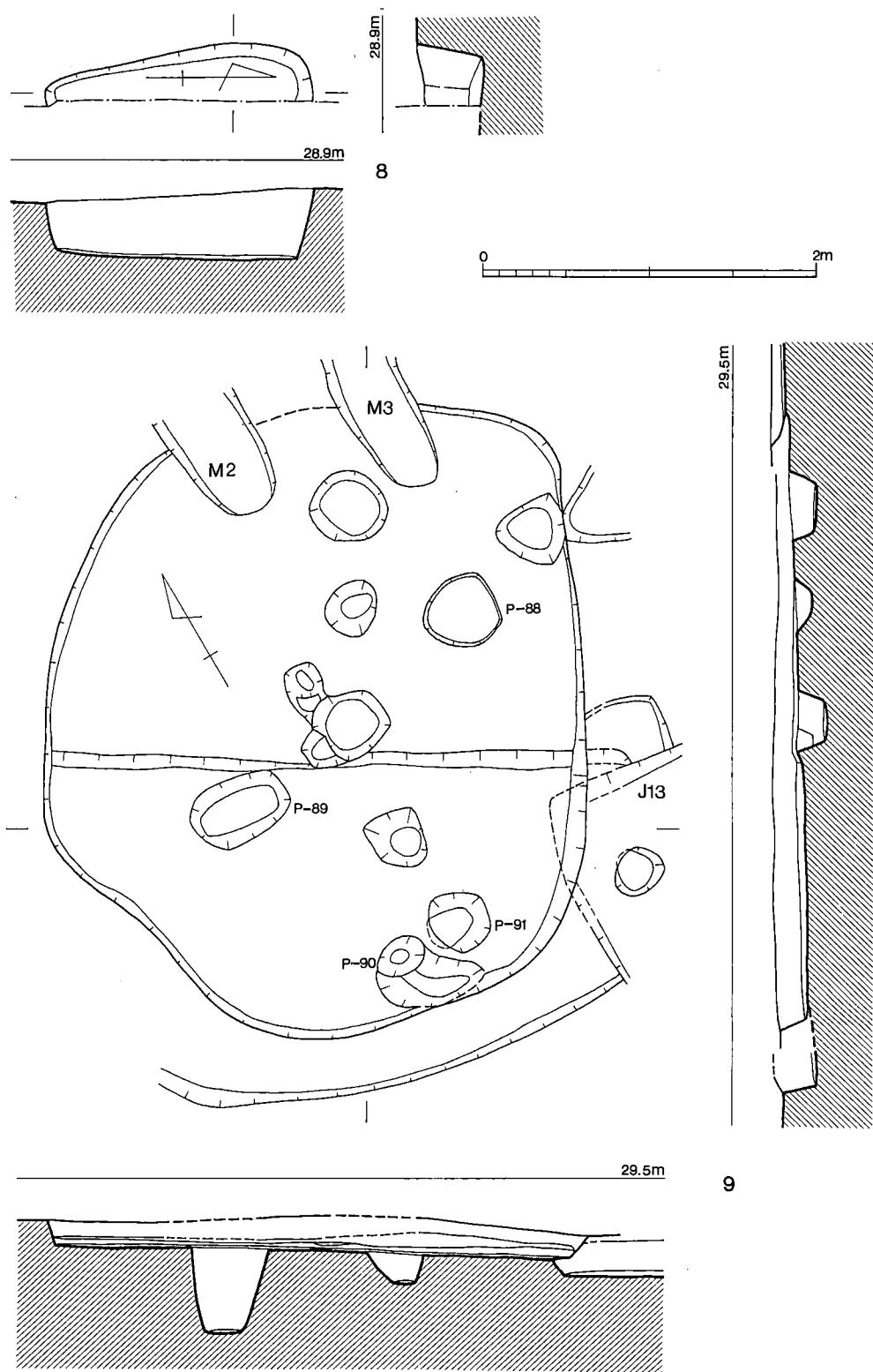
遺構の形状からして、土壙墓的な感じはするが、確証は無い。また、出土遺物のうち、図示に耐えるものは無い。ただ、当土壙を切っているP58は、明らかに縄文晚期の小ピットであり、この土壙の時期は少くとも、縄文晚期黒川式期以前ということは言える。

B 6号土壙（第130図）

前述のB 5号土壙の西隣に位置する。長軸を東北東から西南西にとる細長い土壙であるが、西



第131図 B 7号土壙出土土器実測図 (1/3)



第132図 B8・9号土壤実測図 (1/40)

端は丸い大きめのピット状であり、東半は小型の長方形土壙状であり、本来は両者別個のものであったと考えられる。

全体の長さは2.5m、うち西端部の円形部分が0.8m、東半の一段深い部分が1.1mとなる。幅は、西端が0.75m、東半が0.63mとなり、深さは、西側で16cm、東側で23cmとなり、その中間が一段高くなっている。

遺構の性格としては、東半部分が小規模土壙墓状にもみえるが、確証は無い。また、出土遺物のうち図示できるものは無く、時期も決定し難い。

B 7号土壙（第130図、図版22）

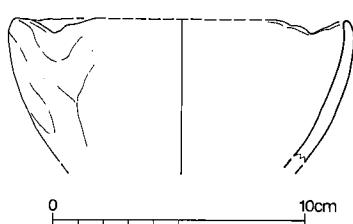
B区中央西寄りで、B 6～8号住居跡の西隣に位置する。長軸を北東から南西にとる不整隅丸方形プランの土壙である。長さ2.88m、最大幅1.5mを測り、深さは15～27cmと全体に浅めである。底面は波打っており、壁も全体に緩やかに掘り込まれている。東辺側は特になだらかな斜面状となっている。これらの形態からは、特定の性格を判断することは難しい。

出土遺物（第131図）

脚部（1・2） 1は、脚端径17.4cmとなる脚付鉢であろう。直線に裾が拡がる類で、外面はハケの上を縦ヘラ磨き、内面は横ハケを施す。2は、外面は縦ヘラ磨き、内面は目の細かい横ハケを施している。1と2は同一個体かもしれない。胎土はわりと精良である。

これらの出土土器は、弥生後期後葉前後のものであるが、直ちにこれが当B 7号土壙の時期を示すかどうかはわからない。

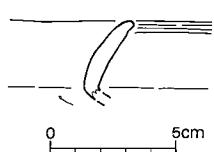
B 8号土壙（第132図）



B区東縁の発掘範囲際に位置し、B 3号住居跡を切っている。東半は発掘区外に拡がっているため、全体の形状は確かではないが、おそらく、南北に長軸をとる長方形土壙になると思われる。

南北長1.6m、東西幅0.35m以上で、深さは0.42mとなる。底面は平らで、北側へ下がり気味となっている。

第133図 B 8号土壙出土土器実測図（1/3） 出土遺物（第133図）



鉢 口径13.8cmで、口縁部付近でわずかに内湾する形態となる。若干手捏ね的で、口縁が波打ったり、外面に凹凸がみられる。内外面ともにナデている。胎土はわりと精選されており、焼成良好で、黄味橙褐色をなす。

第134図 B 9号土壙出土土器実測図（1/3）

よって当土壙は古墳時代初頭、古式土師器段階と考えられる。

B9号土壙（第132図）

B区北側の、B13・14号住居跡の北側に位置する。北側で新溝のB2・3号溝に切られ、東南端でB13号住居跡を切っている。南側ではB15号住居も切っている。浅く大きな略楕円形の土壙である。

南北の長さ3.67m、東西幅3.8m、深さは南半の最深部で20cm前後となる。中央に北西から南東へ直線的に落ちる段が図示されているが、当初はこれを下層遺構の輪郭の一部（例えばB15号住居跡の北壁ライン等）と考えて線を入れたが、最終的には床面レベルも周辺遺構とは全く合わず、この土壙内での底面の落ちを示すものと判断した。

底面はわりと平坦で、小ピットが10個検出されたが、建物としてまとまりそうにもなく、全体にこの土壙の性格も推測し難い。

出土遺物（第134図）

甕 口縁小破片であるが、口唇外端が突出する特徴をみせる。胴部内面はヘラ削りで、口縁内外面ともにナデ調整である。胎土に細砂・角閃石・赤褐色粒を少量含むが大旨精選されている。焼成良好で、白黄土色をなす。

この土器は、古墳時代初頭、庄内新～布留古併行期のものと考えられ、当B9号土壙の時期を示すものであろう。北側のB1号住居跡とほぼ同時期であり、関連がある遺構となろう。

B10号土壙（第135図、図版23）

B区の南端で、B1号方形周溝の内側に位置する。北東隣のB11号土壙と連続するように図示しているが、実際には当土壙の方が新しく、切っていたものと考えられる。

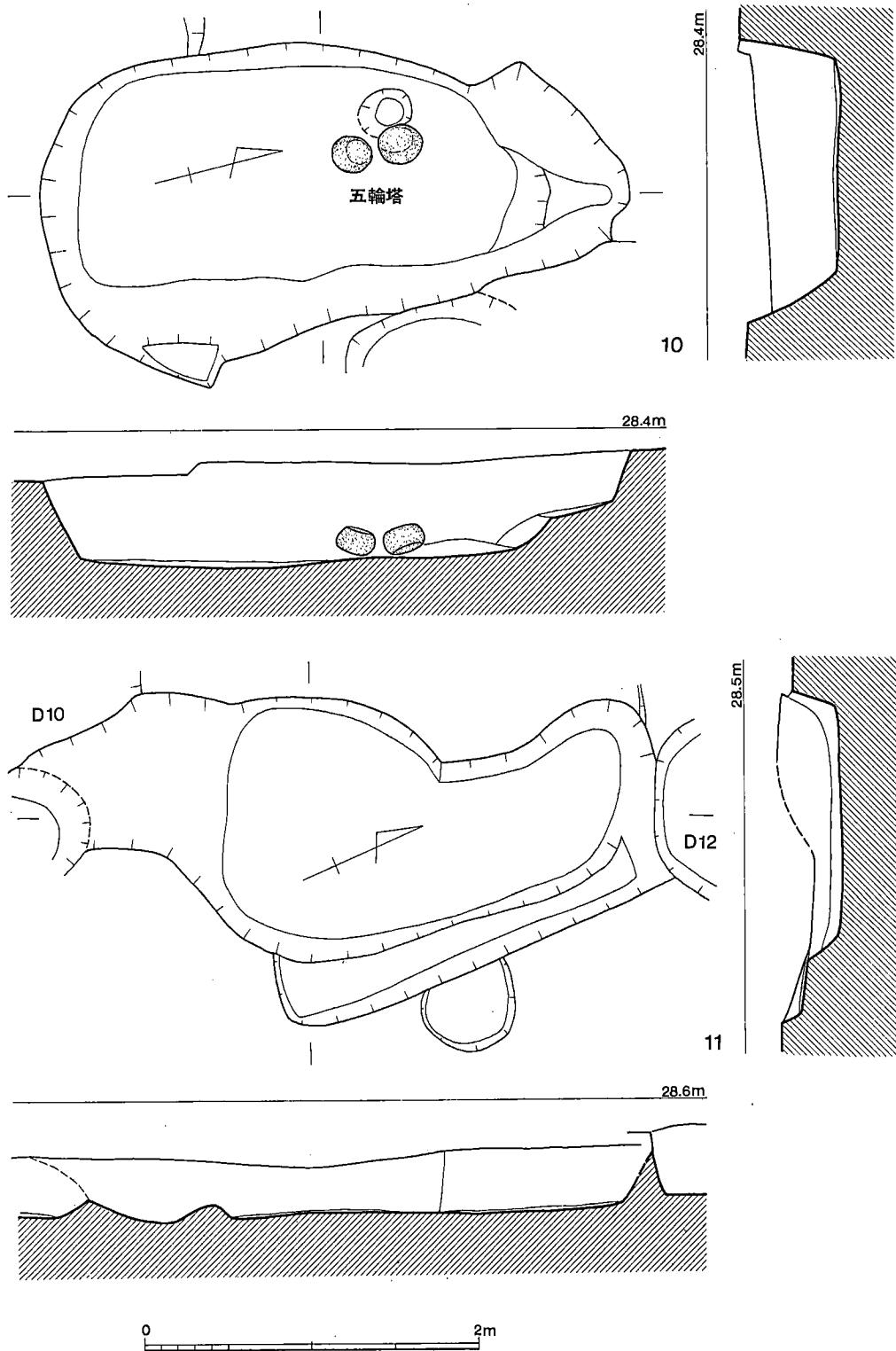
長軸をやや東に振る南北に長い楕円形土壙である。南北長3.5m、東西最大幅1.98mのなすび状の平面形をなす。深さは0.63mで、北端は小さなテラスをつくり、底面はいくらか凹凸がみられる。

出土遺物（第136図）

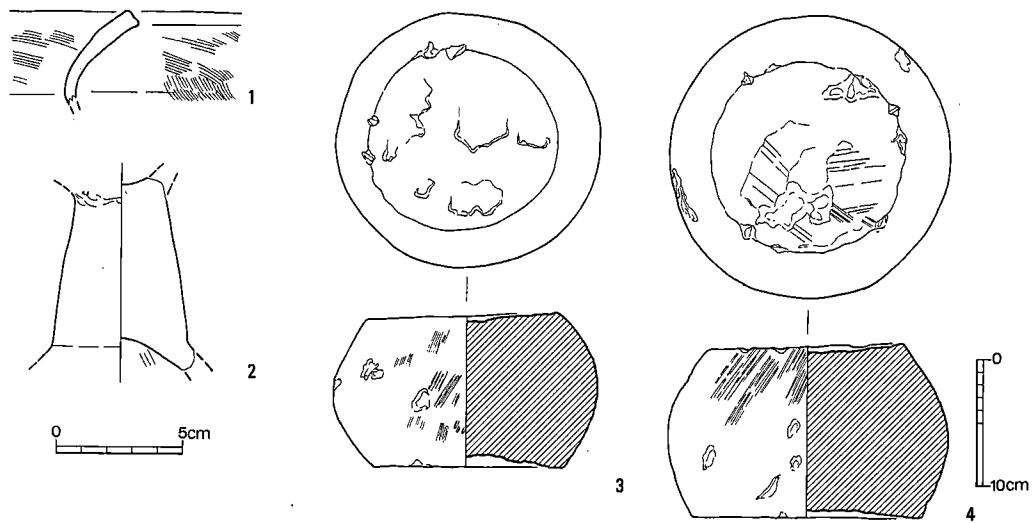
甕（1） 頸部から丸味をもって外反する口縁となる。口唇面は凹状となる。外面には煤が付着している。内外面ともに細かいハケ調整を施している。

高杯（2） 脚柱中途でわずかに中ぶくらみする充実した脚部である。全面かなり磨滅しており、調整不明である。胎土に粗砂粒を若干含み、焼成良好で、茶褐色をなす。

五輪塔（3・4） いずれも水輪部分である。3は、最大径21cm、厚さ11.6～12.3cmで、上下面ともに窪みをつくっている。凝灰岩製で、上下両面は未調整のまま、側面は一応研磨しているが、細かい線状のノミ痕がかなり残っている。4は、灰色の凝灰岩製で、角閃石が目立つ。直径22.3cm、厚さ13.2～13.7cmで、上下面ともに浅い窪みをつくっている。側面は一応研磨するが、かなりの部分に線状の細かいノミ痕を残している。



第135図 B10・11号土壙実測図 (1/40)



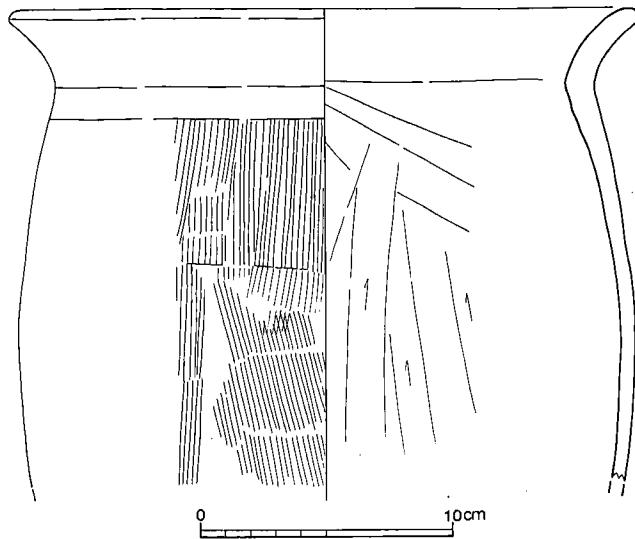
第136図 B10号土壌出土土器・五輪塔実測図 (1/3・1/6)

以上の出土遺物のうち、1は、弥生時代後期のもので、2は、古墳時代初頭、布留式期であろう。3・4は、詳しき年代は確定できないが、周辺構造・遺物出土状況からみて、15~16C段階のものではないかと考えられる。よって当B10号土壌も、その時期のものかと思われる。

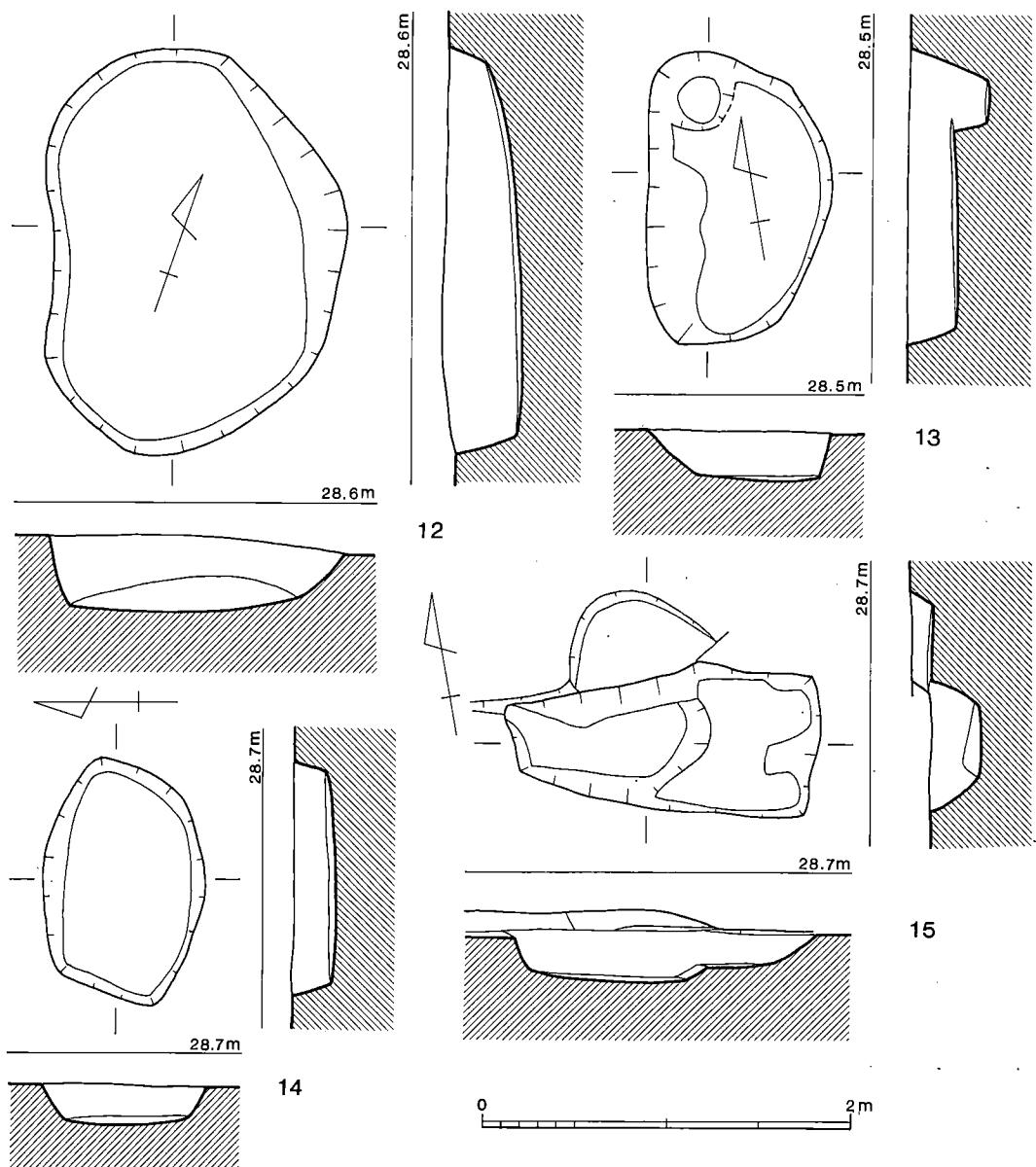
B11号土壌 (第135図)

前述のB10号土壌の北東隣に位置する。北端をB12号土壌に切られる。南端も既述の如く、B10号土壌に切られる。全体にだらっとした不整形土壌である。

南北長3.5m強、東西最大幅1.62mで、最深部は0.43mある。北半はわりとしっかりした掘り込みで、底面も平坦であるが、南半は大きなくぼみ状となっている。あるいは、何度かの掘り返しが重複した結果ともみられる。



第137図 B11号土壌出土土器実測図 (1/3)



第138図 B12~15号土壤実測図 (1/40)

出土遺物 (第137図)

甕 復原口径25cm、胴部最大径24.4cmの土師器甕である。外面には煤が付着しており、口縁部の肥厚の度合いがそれほど顕著ではない。

この土器は、内面はまだヘラ削りのままで、口頸部がいくらか肥厚を残し、内面にも稜をつ

くっている。胴部の張りもいくらか残っており、全体に古い様相をかすかに保っている段階であり、8C後半を中心とする時期と考える。

B12号土壙（第138図）

前述のB11号土壙の北隣に位置し、南端でB11号土壙を切っている。南北に長い不整橈円形プランを呈する浅めの土壙である。

南北長2.21m、東西最大幅1.63mで、深さは南端付近で0.43mとなる。底は北端が0.2mほどと浅く、南へゆるく傾斜している。

出土遺物（第139図）

須恵器杯（1）復原高台径10.2cmで、高台が内側に入る類である。底内面はナデツケ、外面中心側はナデ、体部は回転ナデである。

杯（2～4）2は、復元口径14cmで、内底面はナデツケ、体部外面屈曲部以下はヘラ削りである。胎土精良で、8C前半代のものであろう。3は、口径12cm、器高4.5cm、底径7.2cmで、丸味をもった体部と底部が特徴的である。8C後半代であろう。底内面は、体部中途ぐらいまでナデツケ、底外面は未調整風である。4は、口径13.9cm、器高3.7cm、底径8.2cmとなる底部ヘラ切離し類である。底外面には板目圧痕が付き、内面はナデツケている。胎土精良で、8C末～9C前半代の範囲のものであろう。

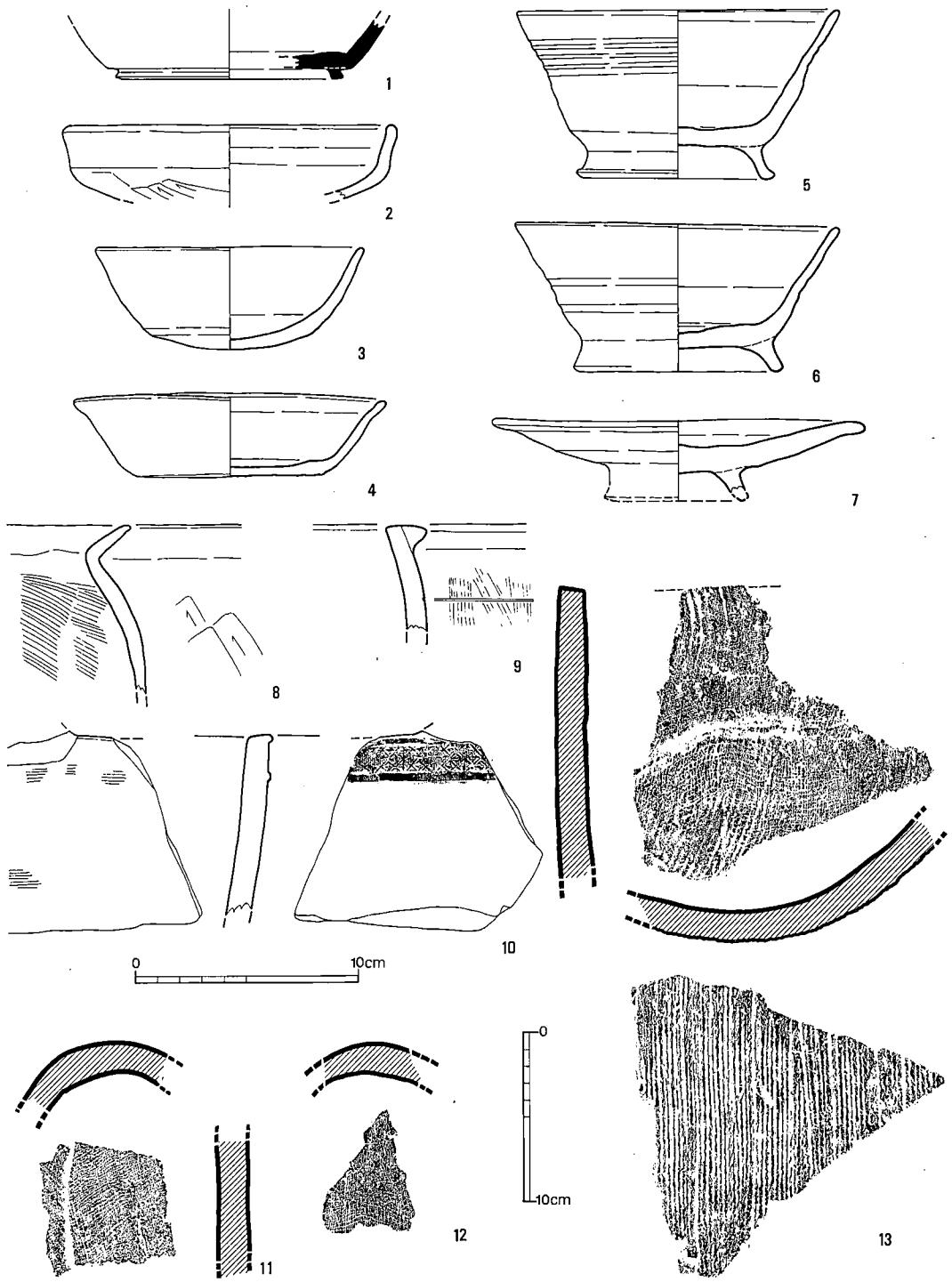
椀（5・6）高台付土師器椀で、5は、口径14.4cm、器高7.4cm、高台径8.3cmで、高台は外方へ長く踏ん張っている。8C末～9C初段階のものであろう。6は、口径14.4cm、器高6.5cm、高台径9.3cmとなる。5と比べやや新しい傾向がみられるが、ほぼ同時期とみてよいだろう。胎土精良で、内底面はナデツケている。

高台付皿（7）口径16.6cmの部厚い土師器で、体部外面下半にヘラ削りを残す。高台部内面と体部内外面は横ナデ仕上げである。8C末～9C前半代の中に収まる時期のものであろう。

甕（8・9）8は、胴部内面ハケ、外面は板による搔き上げがみられる。弥生後期後葉のものである。9は、弥生中期初頭亀ノ甲式新段階のものである。本遺跡でこの時期のものは唯一これのみである。胴部内面はナデ、外面はハケの上をナデ消している。口縁外端部には煤が付着している。

火舎（10）灰～暗灰色をなす瓦質土器である。2条の凸帯間に斜格子様のスタンプ文を巡らせている。内面はハケをナデ消している。外面は磨滅。口縁に突起部分がみられ、或は上下逆になって底部に脚が付く類になる可能性も強い。

瓦（11～13）11は、須恵質丸瓦で、凸面はナデ、凹面側には2ヶ所切り込みを入れた部分がみられる。12は、凹面にやや粗い布目を見せる丸瓦片である。やや生焼け気味の須恵質焼成で、暗灰～灰色をなす。粗石英粒をいくらか含む。13は、灰橙褐色の生焼け品で、凸面に縄目の叩



第139図 B12号土壙出土土器・瓦実測図（瓦のみ1/4, 他は1/3）

きをみせる平瓦である。胎土に粗大石英粒を少量含む。上端小口面はヘラ削りである。

以上の出土遺物は、多くの時期のものが混在している。うち最も新しいのは、10の室町期のもので、当B12号土壙の時期を示しているものと思われる。なお、瓦については、産地、使用官衙・寺院等の追求を行う時間的余裕は無いが、出土土器の4～7と伴う時期、つまり8C末～9C前半代のものと考えられる。

B13号土壙（第138図）

前述のB11・12号土壙の東隣に位置する小ぶりの略楕円形土壙である。南北方向に長いのは、この周辺の一群の土壙（B10～12号土壙）と軌を一にしている。

南北長1.57m、東西最大幅0.99mの上端規模を持つ。深さは南端寄りで28cmほどで、西辺の壁のみがゆるやかな傾きを持つ。北端に深さ40cm強の柱穴様ピットが掘り込まれているが、性格は不明である。

出土遺物（第140図）

甕（13） 土師器小甕口縁片で、丸っこく肥厚した口縁となる。胴部内面はヘラ削り、外面は粗い縦ハケの上を横ナデ調整している。

この土器は、通常8C初～前半段階のものであるが、当遺跡での状況をみると、8C後半まで下げるよいかかもしれない。小片であるので当B13号土壙の時期を示すものとは確言できないところである。

B14号土壙（第138図）

B区南端近くの、方形周溝墓の中央寄りに位置する。上述のB12号土壙の西側2.5mの所である。東西に長い、小規模楕円形土壙である。

規模は、東西長1.38m、南北幅0.89mで、深さ0.25mほどとなる。底面はわずかに中央が低い程度でなだらかである。

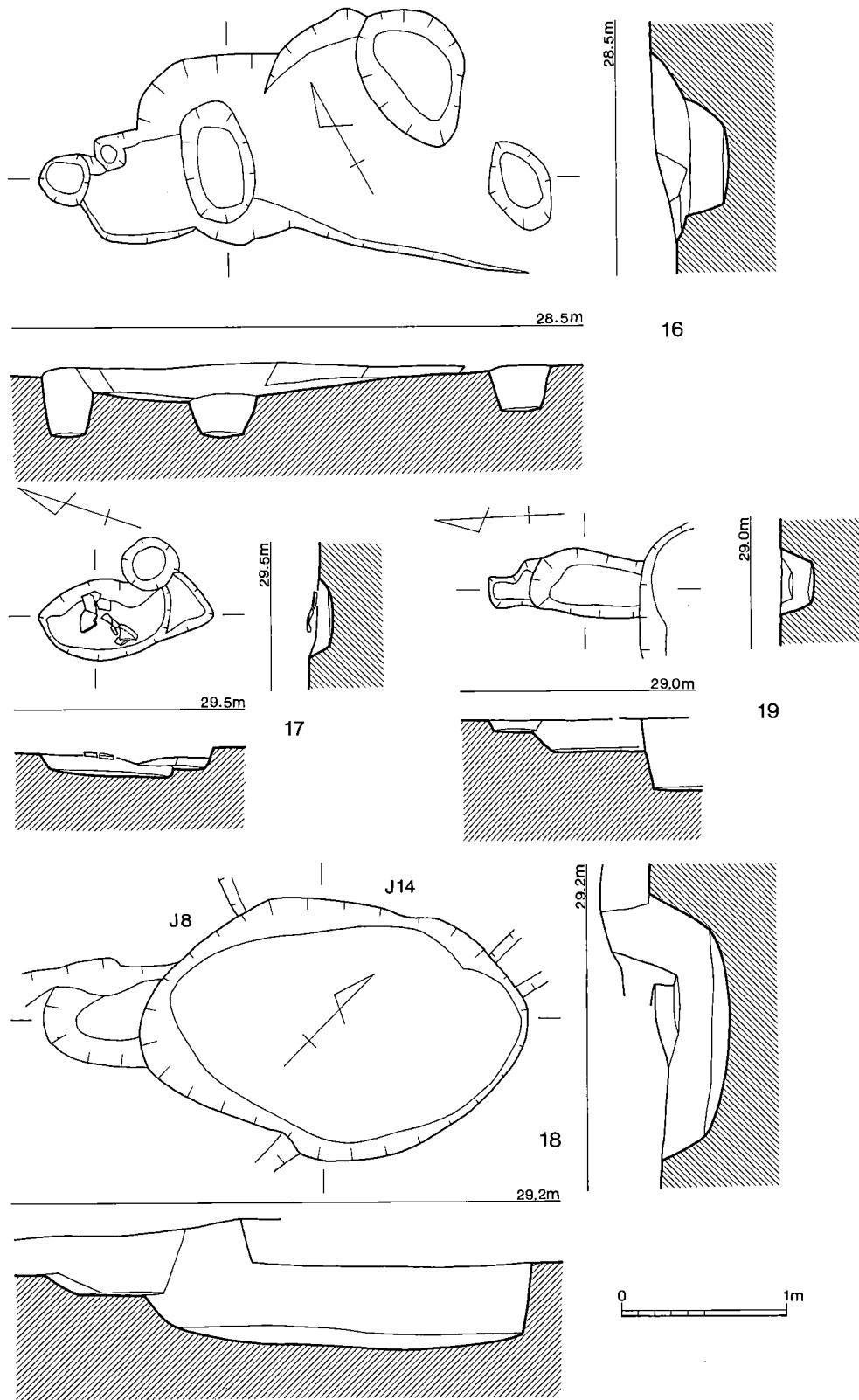
図示できる出土遺物が無く、時期は確定できない。また、遺構の性格についても、全く見当がつかない。

B15号土壙（第138図）

前述のB14号土壙の南東隣、B11・12号土壙の西側に位置する。北側の浅いピットP115を切っ



第140図 B13・16・17号土壙出土土器実測図（1/3）



第141図 B16~19号土壤実測図 (1/40)

ており、東西に長い不整形小規模土壙である。

東西長1.65m、南北幅は東端で0.75m、西端で0.4mとなる。中央に段があり、西半が更に一段深くなっている。深さは、西半部で0.3m、東側で0.2mほどと浅い。壁の法の広い部分や、直に掘り込まれた部分などがあり、全体に不整然とした土壙である。

出土遺物のうち、当土壙の時期を確定し得ると思われるものは無い。また、遺構からの性格把握も困難と言わざるを得ない。

B16号土壙（第141図）

B区最南端の、B10号土壙の西隣に位置する。西北西から東南東に長い不整形土壙で、東端付近は削平を受けたためか、その輪郭すらつかめない。

全体にまとまりの無い、落ち込み状の穴で、規模は、東西が2.7m以上、南北幅が1.45mとなる。底面は西側へ傾斜しており、中央のピット付近が最も深く、0.24mほどとなる。西端付近や底面上に小ピットが5個検出されたが、どのような性格のものか推測できない。

出土遺物（第140図）

杯（16）復原口径15.2cm、器高3.5cm、底径13.8cmとなる土師器である。底外面はヘラ削り、内底面はナデツケがみられる。屈折部以下の深さがあまりみられないことから、この手の杯の最終段階のものと考えられ、8C中葉の年代が与えられよう。

B17号土壙（第141図）

B区北寄りの、B14号住居跡の西側、B9号住居跡の北側に位置する。浅く広い掘り込みの西端に更に一段掘り窪められた小規模土壙である。土師器甕片がこの穴にのみ出土したため、意図して小規模ながら土壙としてとり上げたものである。

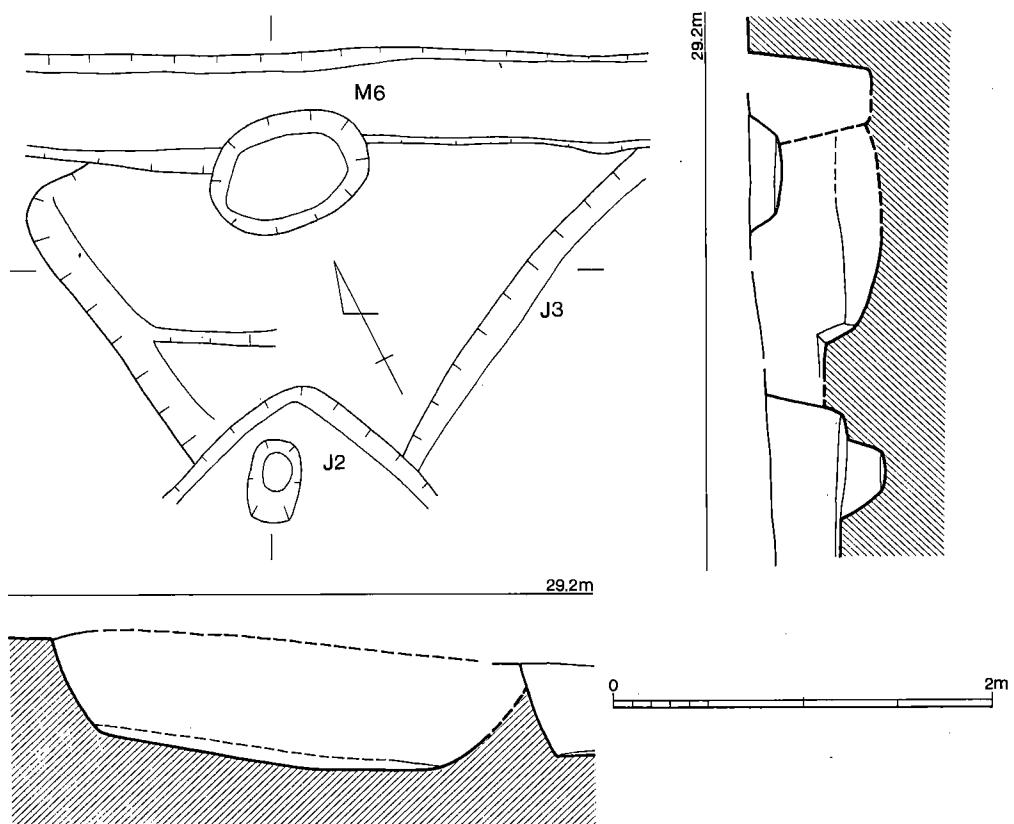
規模は、東西に1.05m、南北幅が0.48mとなる。東端側が一段浅くなつて深さ14cmで、西側は19cm前後である。当初、小規模土器埋納遺構、或は小児用土器棺墓等を考えていたが、土師器が全体に浮いていることや、埋置した状況ではないことから、単なる土器廃棄土壙と考えざるを得ない。

出土遺物（第140図）

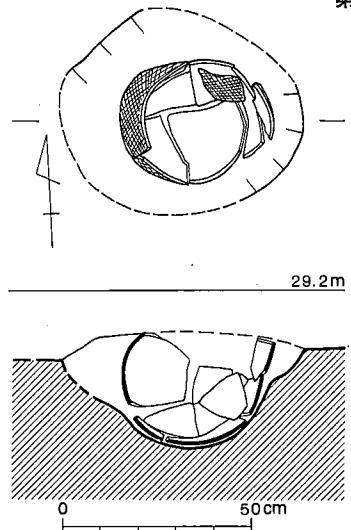
杯蓋（17）須恵器の宝珠撮部分である。残存範囲では、外面が回転ナデ、内面がナデツケとなる。胎土精良で灰色をなす。8C前半段階のものであろう。

B18号土壙（第141図、図版23）

B区の北寄りに住居が複雑に切り合つて集中する部分があるが、その中心部に位置する大型の楕円形土壙である。B8・11・14号住居、B19号土壙を切つてゐる。



第142図 B20号土壙実測図 (1/40)



第143図 B22号土壙 (蔵骨器)
実測図 (1/20)

北東から南西方向に長軸を持ち、規模は長さ2.38m、幅1.59m、深さは0.78mとなる。底面はなだらかに中央が下がり、皿状の断面形態をなす。

深くて大きめの土壙であるにも関わらず、出土遺物が少く、図示に耐え得るものがない。ただ、切り合い状況からみて、奈良期或いはそれ以降の歴史時代の所産であることは間違いない。

B19号土壙 (第141図)

前述のB18号土壙の北側に位置する小規模土壙である。B14号住居跡に上半を切られ、B18号土壙に南側を切られる。

南北に細長く、長さ92cm以上、幅40cmで、深さ19cmほどとなる。図示できるような出土遺物は無く、性格も判断つかない。ただ、遺構の切り合い関係からみて、奈良期以前の所産であることは間違いない。

B20号土壙（第142図）

B区の西縁近く中央部に位置する。深く大型の土壙のようであるが、周囲を切られているため、はっきりした輪郭がつかめない。北側をB6号溝とP43に、南側をB2・3号住居跡に切られている。

東西は3.2m以上、南北1.7m以上あり、深さは0.7mとなる。底面は南半が一

段高くなっている、全体に東側へ傾斜している。図示できるような出土遺物が無く、時期を確定できないが、遺構の切り合い状況から、弥生後期の中でもより古い段階のものと推測される。性格は明らかにできない。

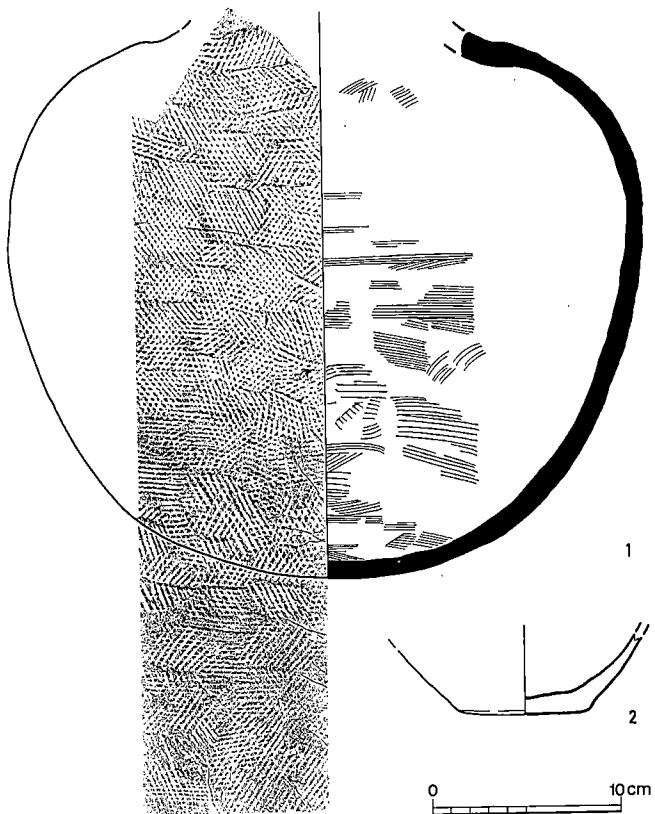
B22号土壙（第143図、図版24）

B区中央北寄りの、B6号住居跡の北壁ラインを切るようにして掘り込まれている。よって、B8号住居跡も同時に切っている。正確には須恵器壺転用の単独埋納遺構である。

東西1.3m、南北1.1mほどの楕円形土壙の中に須恵器壺をほぼ正置させたもので、頸部以上が削平されている。壺の中から焼骨等は検出されなかったものの、炭片等多く、蔵骨器或はそれに類する遺構と考えてよかろう。

出土遺物（第144図）

壺(1) 蔵骨器に使用された須恵器の球形胴をなす丸底壺である。口頸部が無いのが残念であ



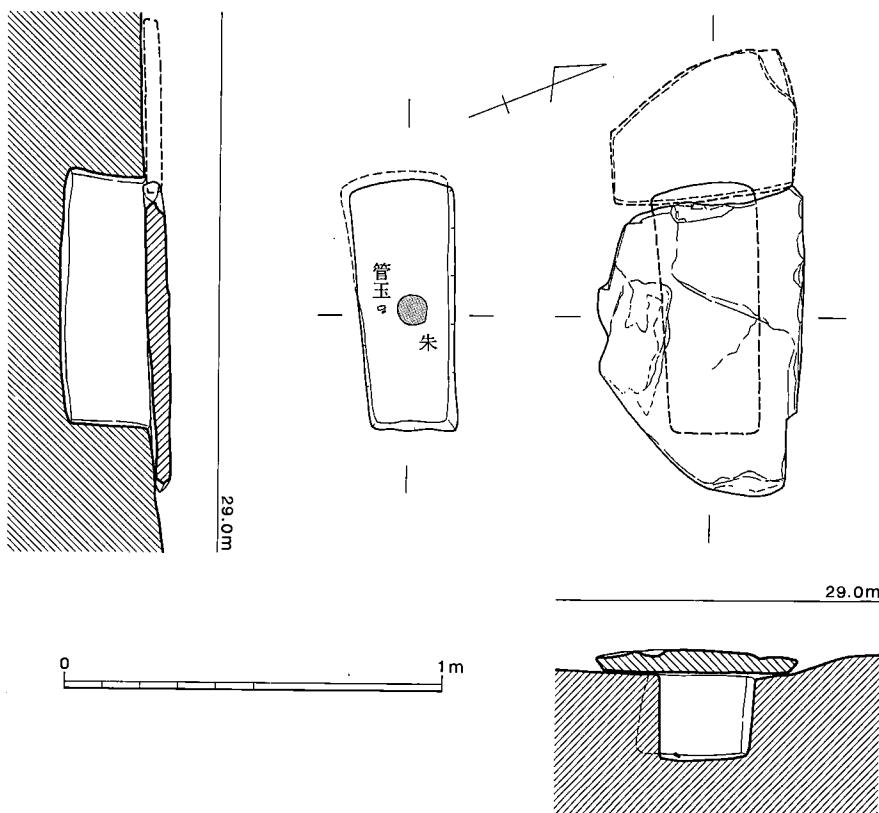
第144図 B22号土壙（蔵骨器）出土土器実測図（1/4）

る。胴部最大径33.9cmで、現存高29.9cmとなる。外面は全面に有軸羽状文様の叩きを密に施し、内面は青海波状のあて具痕の上をナデ消しており、ハケもかなりみられる。底外面の直径17.7cmの範囲は正円形に灰色で、焼台の痕跡が明瞭である。他の外面は黒色の自然釉でテカテカしている。内面は暗灰色をなす。

甕底部（2） 弥生後期中葉頃の底部片である。復原底径6.9cmとなり、内外面ともに丁寧にナデている。内面には炭化物がこびりついている。底外面はいくらか凸レンズ状にふくらむ。

須恵器壺は、詳さに時期を確定できないが、周辺遺構の年代等からみて、8C後半～9C前半代の中に収まる時期のものと考えられる。

E 石蓋土壙墓



第145図 A1号石蓋土壙墓実測図 (1/20)

A 1号石蓋土壙墓（第145図、図版25）

A区最西縁の南寄り、つまり、東側の谷に面した縁に位置する。周辺には同類の墓は発見されておらず、単独占地する小児用墓と考えられる。主軸をN66°30'Wにとり、棺にあたる土壙部西端幅の方が広いため、西側に頭を置いたと考えられる。

蓋石は長さ83cm、幅54cmで厚さ6cmの大きい緑色片岩の板石1枚が原位置を保っていた。この蓋石の下面中央（土壙範囲内）には赤色顔料が塗布されていた。また、現存蓋石の1/3程の大きさの板石が、ユンボで動かされて1枚残っており、片面中央付近にはやはり赤色顔料の塗布がみられる。この1枚を復元して置いてみた状態を図示した。それから考えると、当初、大きな1枚の板石で土壙全体を覆いきるつもりで被せてみたところ、僅かに足りずに、もう1枚つぎ足したという事情のようである。これにより、蓋石部全長は1.19mとなる。

土壙部分は、下端で、長さ67cm、幅は西端で29cm、東端で19cmとなる。壁は西壁以外はほぼ垂直に掘られ、西壁では袋状に外方へ掘り込まれている。深さは、中央付近で23cmほどで、底面は全体にはほぼ平坦である。

底面のほぼ中央には、朱と思われる赤色顔料が8×10cmの範囲に残存していた。更に、その南側には、大小2個の碧玉製管玉が床面に密着して見つかった。

なお、この2点の管玉は、整理時に行方不明になっており、再発見し次第追って報告するつもりである。記憶によると、長さ約2cm、太さ1cmほどの大型タイプのものと、長さ1cm弱、太さ3～5mmの小型類の各1点ずつであった。

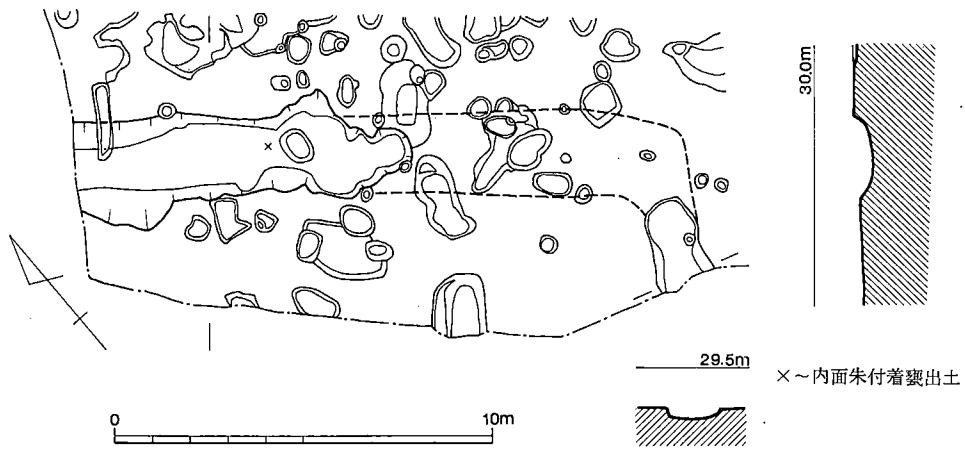
さらに、蓋石北側や東側の現地山面が僅かに蓋石下面の地山面よりも高まりをみせており、本来二段掘りの掘方の形態をなしていたものと考えられる。それから考えると、当時の地表面から、少くとも20cm以上は削平されてしまっていることがわかる。

この石蓋土壙墓は、細身類の管玉とともに、太身の類を併せ持っていることや、土壙部分掘り込みが箱形の棺状を意図した丁寧さが認められること、更に、弥生期蓋石の如く小さめの石を横長に数多く連続して用いるものではなく、古墳時代箱式石棺墓の如く、大きめの板石で数少なく用いる方法がとられていること、等から、古墳時代初頭期の所産と考えられる。

強いて推測するならば、南方6.5mに位置するA 1号方形周溝墓と関連して、直接周溝内に入れる者ではないが、周辺に葬られ得る近縁の家族の墓であったと考えることもできる。

F 方形周溝墓

治部ノ上遺跡では、低位段丘のほぼ最先端部分を調査し、そのうちA区西南端部分と、B区南端部に、方形周溝墓の周溝と確信できる溝状遺構を2ヶ所発見した。更に、東側の谷を挟んだ



第146図 A 1号方形周溝墓実測図 (1/200)

段丘先端の座禅寺遺跡においても、同様の遺構が検出されている。このように、当朝倉町近辺においては、古墳時代初頭には、筑後川氾濫原に面する低位段丘上最先端部に方形周溝墓をつくり、墓地としていたことがわかる。

A 1号方形周溝墓（第146図）

A区の最南西端部に位置し、北東辺の溝と南東辺の溝の一部が検出されている。北西から南東へ走る溝（A 6号溝）は、幅2.5m前後、深さ50cm弱で、北西端は谷で削られ、南東側は地山面が削平されて東へ傾斜しているため、消滅している。本来は、P213とした南北方向の落ち込み

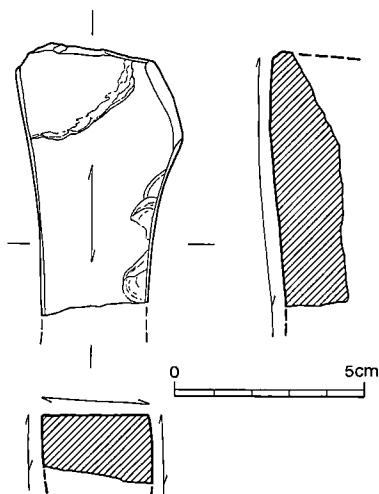
へと連続して、方形周溝による区画を形成していたものと考えられる。この推定でゆくと、周溝の内側径で15m以上、外側径で16.5m以上の規模であったと考えられる。

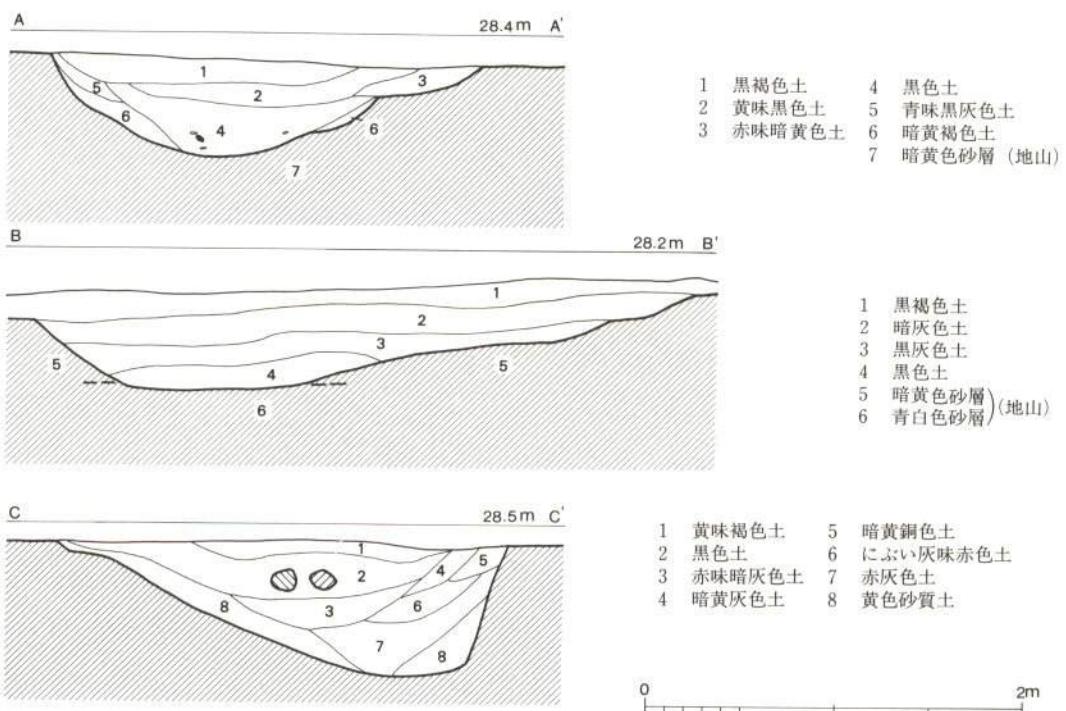
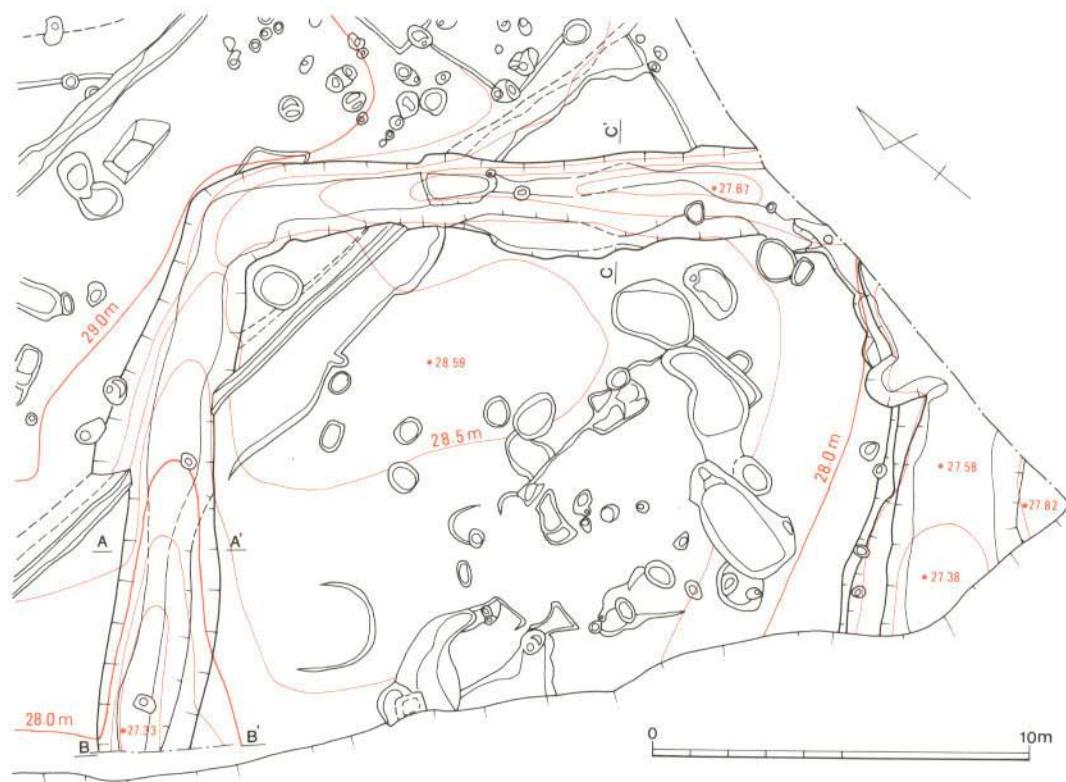
また、この主体部としては、中心主体自身は発掘区外の南側に在ると思われるが、A39号土壙を従たる主体部の一つと考えた。推定される方形周溝の中心より東へ寄った位置であり、素掘りの土壙墓状を呈することからも、複数想定される埋葬主体の一つにとり上げる事は可能であろう。

出土遺物（第147図）

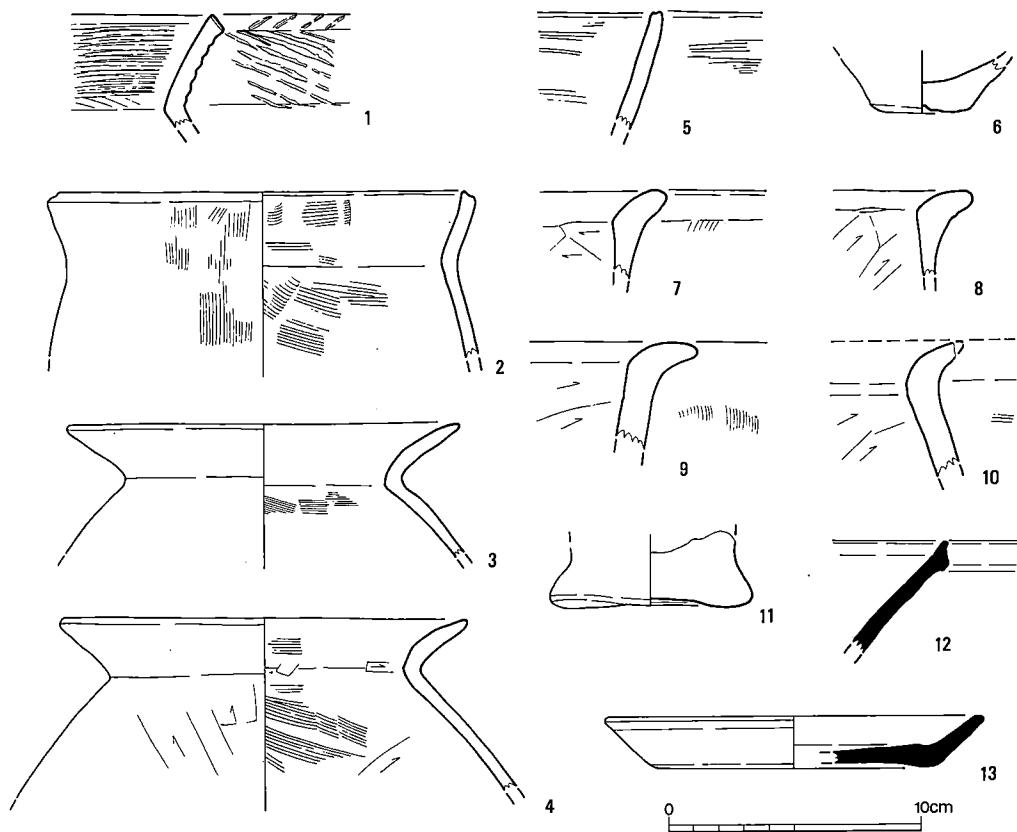
遺構図のA 6号溝中に×印をつけた所から、内面に朱の付着した土師器甕胴部片がまとめて出土した。こ

第147図 A 1号方形周溝墓出土砥石
実測図 (1/2)





第148図 B1号方形周溝墓実測図 (1/200・1/40)



第149図 B1号方形周溝墓出土土器実測図 (1/3)

の土器は、薄手で復原不可とのことで図示できなかったが、周溝底部に置かれた朱の容器の存在は、古式古墳期にたびたび見られる特徴的な習俗と考えられる。

砥石 (第147図) 黄白色のシルト岩製仕上げ砥である。現存長7.2cm, 最大幅4.4cm, 現存厚さ1.8cmである。上面, 両側面ともによく使い込まれている。

B1号方形周溝墓 (第148図, 図版26・27)

B区南端に位置し、北東辺・北西辺・南東辺の一部がコの字状に検出されている。南西辺はすでに段丘先端で崩されていて残らない。

方形周溝区画の規模は、周溝内側で幅18m, 周溝外側で24mほどある。周溝の幅は南東辺が広くて、3.7~4.3mあり、北東辺の狭い所で1.7mとなる。底面は北コーナー部分が最も浅く50cmほどで、ここから南西へと、南東方向へ低くなつてゆく。西端付近で70cm, 南端付近でも同程度の深さとなる。

周溝の掘削状況をみてみると、全体的に溝の内側壁を緩やかにして、外側壁を急角度で掘り込んでいる。また、土層断面を見てみると、C-C'部分で第3層下面の掘り直し状況がみられる。A-A'部分でもどうもその状況が感じられる。特定個人墓ではないため、複数回の埋葬過程を経る間に、砂質で埋まりやすい地山土のために、周溝の掘り直し作業がなされることもあったと考えておきたい。

周溝内側は、主体部探査のために、かなり精査したが、図示の如く後世の土壠群で掘り返されたり、上面の削平のために、主体部と確認できるものを検出できなかった。ただ、北東辺周溝底部にて検出した土壠墓状掘り込みは、長さ1.9m、幅0.8mほどで、北西端側が幅広い形状をなしていて、周溝内埋葬主体と考えてよからう。

出土遺物（第149図）

壺 (1～4, 6～12) 1・2は弥生後期、3・4・6は古墳初頭期、7～10は奈良期、11は弥生中期初頭前後、12は須恵器である。1は、外面に叩き、内面横ハケ、口唇面に斜位の刻目を施している。胴部内面はナデのようである。2は、復原口径17cmで、内外面雑なハケを施す。1・2ともに弥生後期末葉の特徴をよく示している。3は、復原口径15.6cmで、内外面ともに磨滅しているが、胴部内面上端には横ハケが残っている。4は、口径16.2cmで、胴部外面は削り上げ状、内面はハケで下半には削りがみられる。頸部内面稜部分にも一部ヘラ削りがみられる。3・4は庄内新（～布留古）期併行段階の外来模倣の在地製作土器と位置付けられる。6は、内面ヘラ削り、外面はナデしており、直径4cmと小さな底部を持つ、畿内第V様式の伝統を引く類である。7は、胴部内面ヘラ削り、外面はハケをナデ消している。8は、外面に煤が付着する。9・10ともに内面ヘラ削り、外面にはハケを施す。7～10は、奈良後半期のもので当遺構への混入品である。11は、充実した底部で、わずかに上げ底状となる。底径9.5cmで、弥生前期末～中期初、あるいは縄文晩期のものの可能性もある。外面は横方向にナデている。12は、黒灰色をした須恵器壺口縁部で、口縁部外面は黒色の自然釉がかかっている。奈良期のものの混入品であろう。

鉢(5) やや深めの器形となりそうで、内面は横ハケ、外面はハケを施して、下半はナデ消している。弥生後期のもので、周辺遺構からの混入品であろう。

皿 (13) 復原口径15cm、器高2.1cm、底径10.9cmの須恵器皿である。内底面はナデツケており、底外面もナデ仕上げである。8C後半～末の所産で、当周溝埋土への混入品であろう。

以上の出土遺物のうち、B1号方形周溝墓に伴うものは、3・4・6のみで、他は別時期の混入品である。このことから、当周溝墓の時期は庄内新期併行期の3C前半代と考えられる。

G 掘立柱建物

治部ノ上遺跡では、遺跡全体に夥しい数の柱穴や小ピットが検出された。発掘時にも多くの時間を掘立柱建物探しに費やしたが、あまりにも柱穴が密集して困難を極めた。ここでは、はつきりと確認した2例のみを報告しておきたい。大多数の他のピットから出土した遺物については、項を改めて報告することにしたい。

A 1号掘立柱建物（第150図）

A区南端に、小谷状の大溝（A 1号溝）があるが、その北端に位置する 2×1 間（ 5.87×3.6 m）の南北棟建物である。棟方位をN 20° Eにとる。梁行の柱間心々距離が、360cm（12尺）あり、通常の倍のスパンとなっている。桁行柱間は、南側が270cm（9尺）、北側が317cm（10.5尺）となっている。

北西隅の柱穴は中世のA 8号土壙に切られて消滅しており、更に西列中央の柱穴は弥生後期のA10号土壙を切っている。南西隅の柱穴は上半を中世のA 1号溝に削られている。

これらの切り合い関係から、この掘立柱建物は、古墳初頭～平安後期の幅が考えられるが、当遺跡全体の遺物の出土状況から判断すると、古墳初頭期あるいは奈良～平安初期のいずれかの可能性が高いと思われる。柱穴径が80cm平均もあり、方形プランの掘方がみられること等も含めると、より後者の時期が妥当とされよう。

B 1号掘立柱建物（第151図）

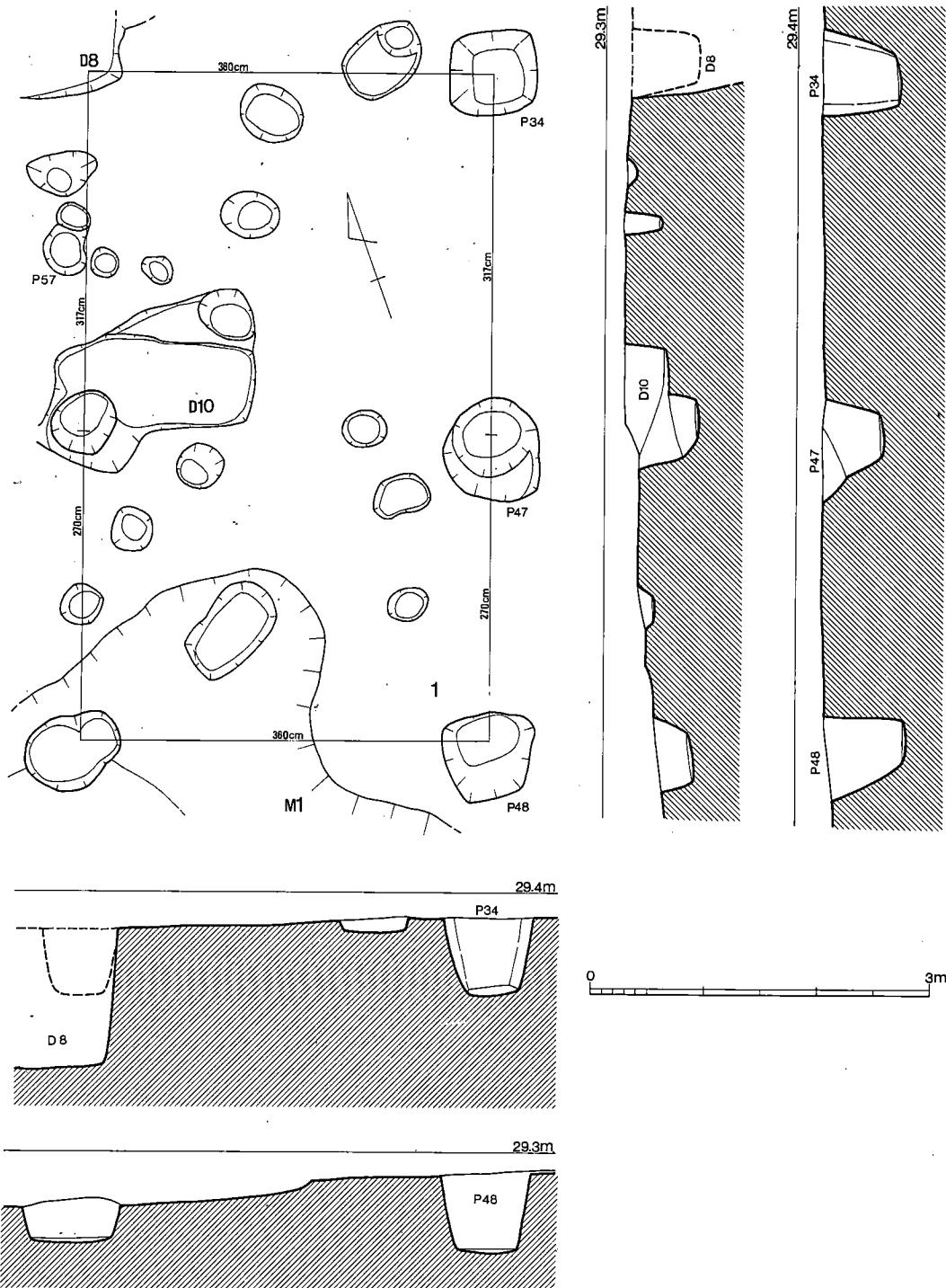
B区中央やや南寄りの、B 2～4号住居跡と重複する位置にて検出された。北東～南西方向を棟方位とするならば、N 47° Eとなり、全体規模が 5.85×5.55 mの、方形に近い 3×3 間の建物である。この建物で特異なのは、各辺ともに中央の柱間心々距離が165cmと、その両脇の柱間距離210～180cmに比べ短いことである。この点から、当建物については、特殊な構造・用途を考えざるを得ないだろう。

南西辺柱列のP 1は、柱痕を確認している。その柱径は14～18cmあり、径75cmの柱穴に深さ58cmほど残っている。南東辺では、P47・P81が明らかにA 4号住居を切っており、北東辺では、P104がA 2・3号住居を切っている。なお、北隅の柱穴は検出し忘れたようだ。

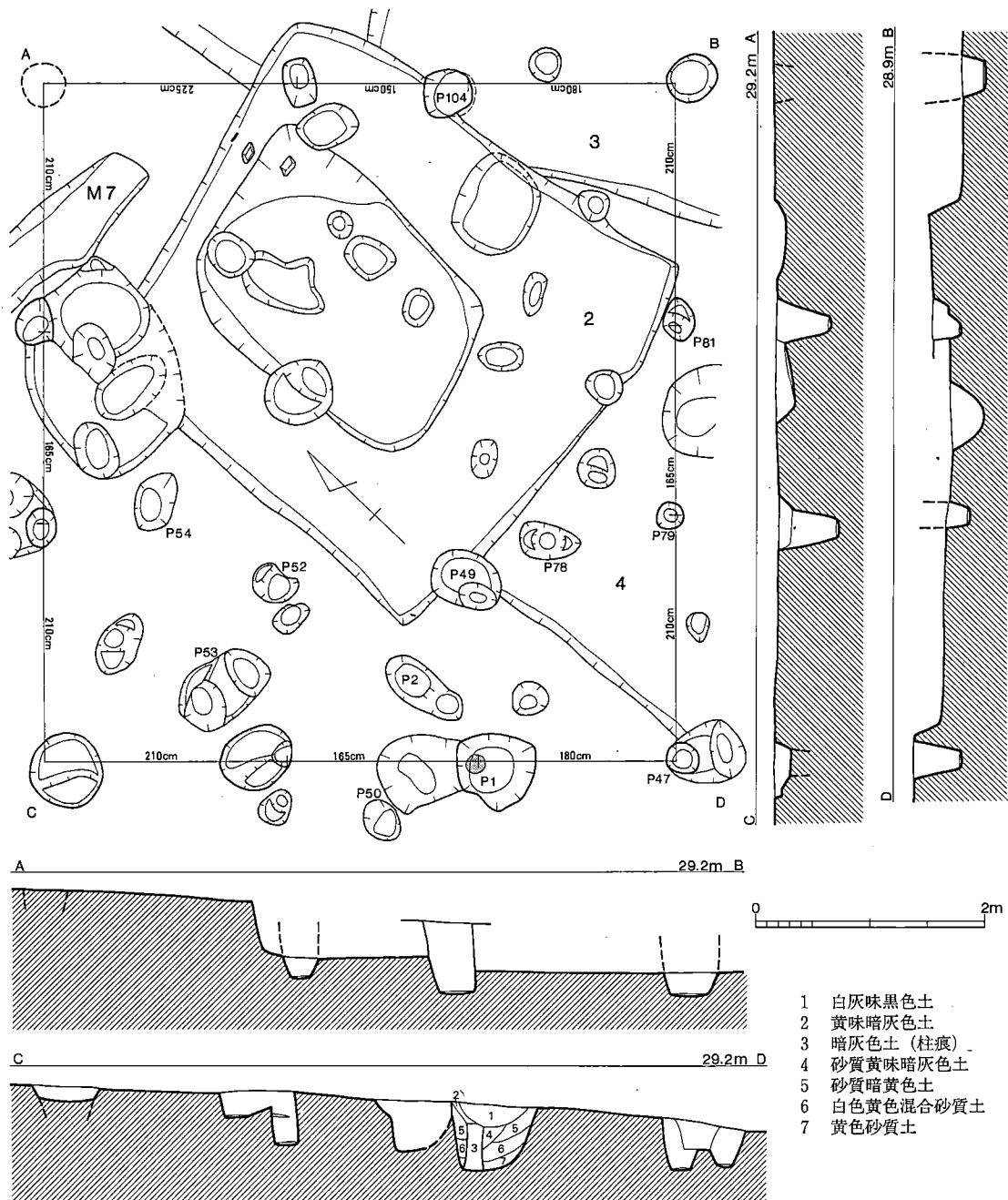
柱穴の大きさをみると、径80cm程の大きいものもあるが、殊に中央側の各柱穴には径30～20cmのものが多い。

出土遺物（第167図）

壺（3・6）いずれも北東辺柱穴のP104出土品である。3は、大きくラッパ状に開く口縁片



第150図 A1号掘立柱建物実測図 (1/60)



第151図 B 1号掘立柱建物実測図 (1/60)

で、口唇部に刻目を施している。頸部は内外面ともにハケをナデ消しており、口縁内外面は横ナデ仕上げである。胎土に細小砂粒を多く含み、赤褐色粒も認められる。焼成良好で白橙色を

なす。6は、頸部と胴部の境目に三角凸帯を付ける壺片で、凸帯直下に押し引き文を施し、更にその下方には、縦ハケの地文の上から櫛描連弧文を施している。内面は粗いハケを施し、上半はその上からナデている。胎土に細砂粒を若干含み、焼成良好で、内面は黄土色、外面は橙褐色をなす。以上の2点は、明らかに、当地方の所産ではなく、瀬戸内地域からの流入品であり、交易圏の広さを感じさせてくれる。

これらの土器や、切り合い状況から、このB1号掘立柱建物は、弥生後期終末～古墳初頭期のものと考えられる。住居の完全な埋没後の遺構であることを考えると、より古墳初頭期に近い時期とした方がよそうである。

なお、この掘立柱建物の南隣は既報告のB1号方形周溝墓である。この方形周溝と建物の並び方が、いかにも計画的に、両者併存しているように見える。もしそうだとすると、この建物に、殯屋的な特殊性格を想定することも可能であろう。

H 落 込 み

A区の中央南寄り付近に、浅くて広い、ダラダラとした黒色土埋土の部分が何ヶ所か見えていた。当初、住居等の大型遺構の切り合い等かとも思ったが、埋土中に瓦質火舎片など中世遺物が点々と見出されたので、土壤と呼称を別にして、落込みと称することにした。これらの範囲は、小河原石の礫層が遺構面に露出した部分であり、あたかも、そういうガラガラ部分をわざと選んで掘り込まれた浅い遺構のようにも感じられる。

A1号落込み（第152図）

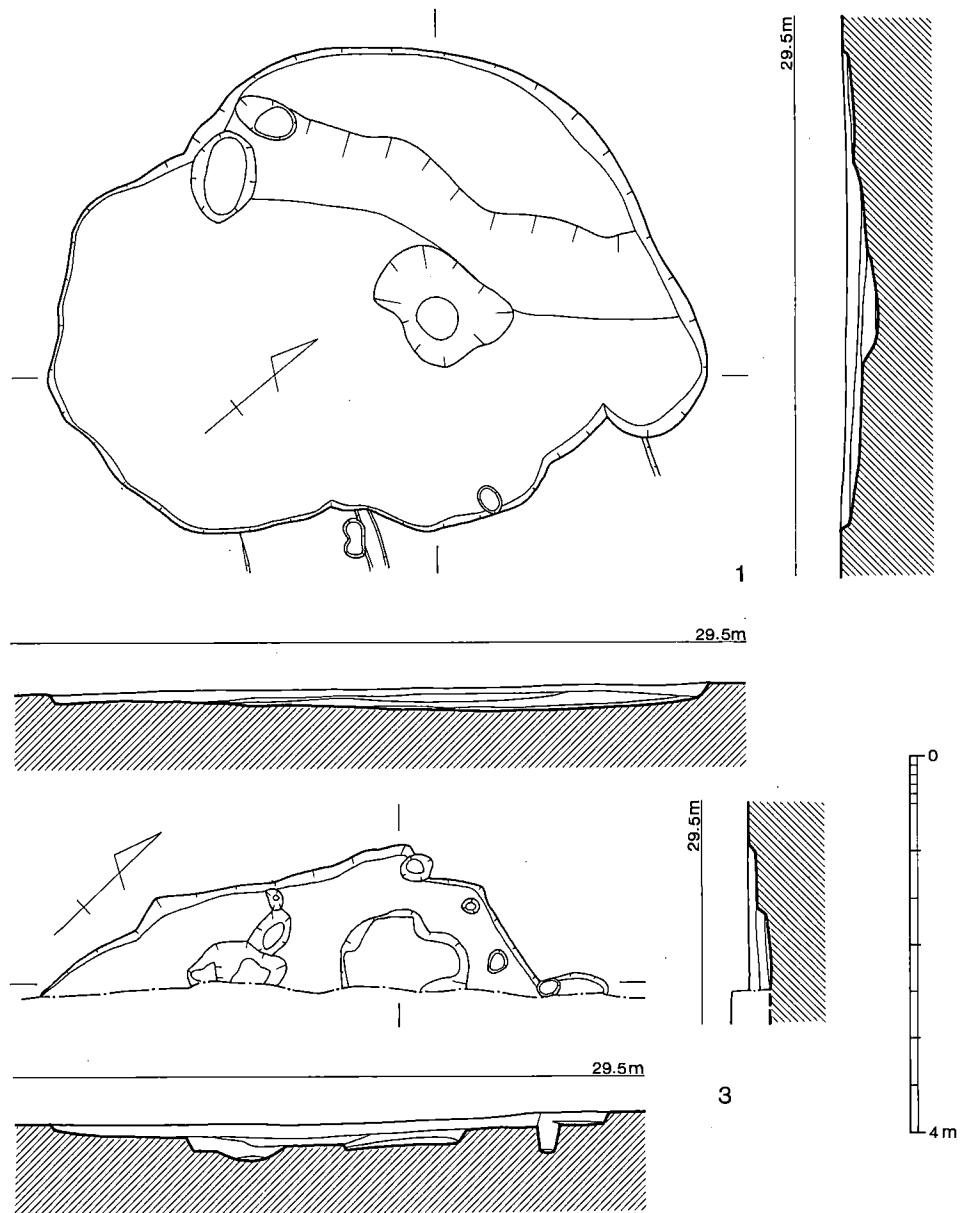
A区中央南寄りに位置する。大型の不整橜円形遺構である。南東側でA15・16号住居跡を切っている。浅くて広い、礫層上のくぼみ的な部分に黒色土が溜まった感じである。

長径6.98m、短径5.02mで、北西側が一段浅く、深さ5cmほどで、その東側の下がった広い部分が10～25cmの深さとなる。中央に皿状断面のだらっとした穴があり、そこが35cmほどの最深部となる。

出土遺物（第153図）

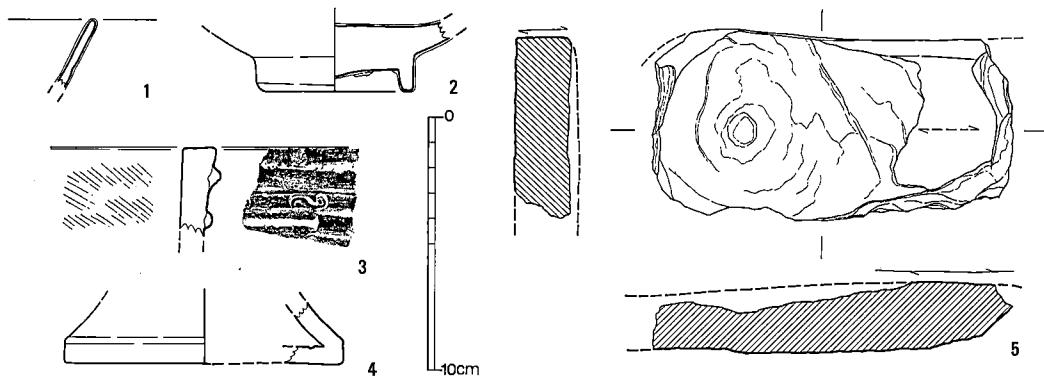
青磁（1・2） いずれも龍泉窯系青磁碗である。1は松葉色に発色している。2は、高台内側つけ根部から中心寄りの8mmの間だけ釉を搔き取っている。胎土は密で、焼成は良く、松葉色に発色している。

瓦質土器（3・4） 3は、火舎口縁で、2条の凸帯間に逆S字文をスタンプしている。内面は



第152図 A1・3号落込み実測図 (1/80)

ハケ目を施し、暗灰～灰色をなす。4は、復原底径11.1cmとなる安定した平底である。最下端側面は横ナデ、他の全面は丁寧なナデ仕上げである。内面黄味灰色、外面は橙褐色をなし、瓦質の生焼け的な焼成である。瓶子の底部となろうが、14C前後における瓦質土器による各種器種の模倣の流行が読みとれる。



第153図 A 1号落込み出土土器・砥石実測図 (1/3)

砥石(5) 片麻岩製中砥で、側面はツルツルによく使い込まれている。裏面も割れて剝げた面で、本来もっと厚かったと思われる。現存長14.3cm、幅7.3cm、厚さ2.2cmとなる。

以上の出土遺物から、詳しい時期を確定することは困難であるが、隣のA 2号落込みとほぼ同時期と考えられ、15C代の遺構と推定される。

A 2号落込み（第154図）

前述のA 1号落込みの西隣2mの位置にある。広く、出入りのある不整形で、中央の土壙状の深み部分以外は、浅いくぼみ状である。

南北の最長径10.3m、東西の最大幅6.2mとなり、A 1号落込みより広い。中央には2段になった不整形の掘り込みがあり、そこが最深部で60cmあり、他の広く浅い部分は10~20cmの深さしかない。これも全体が礫層で、その中に溜まった黒色土部分といった感じである。

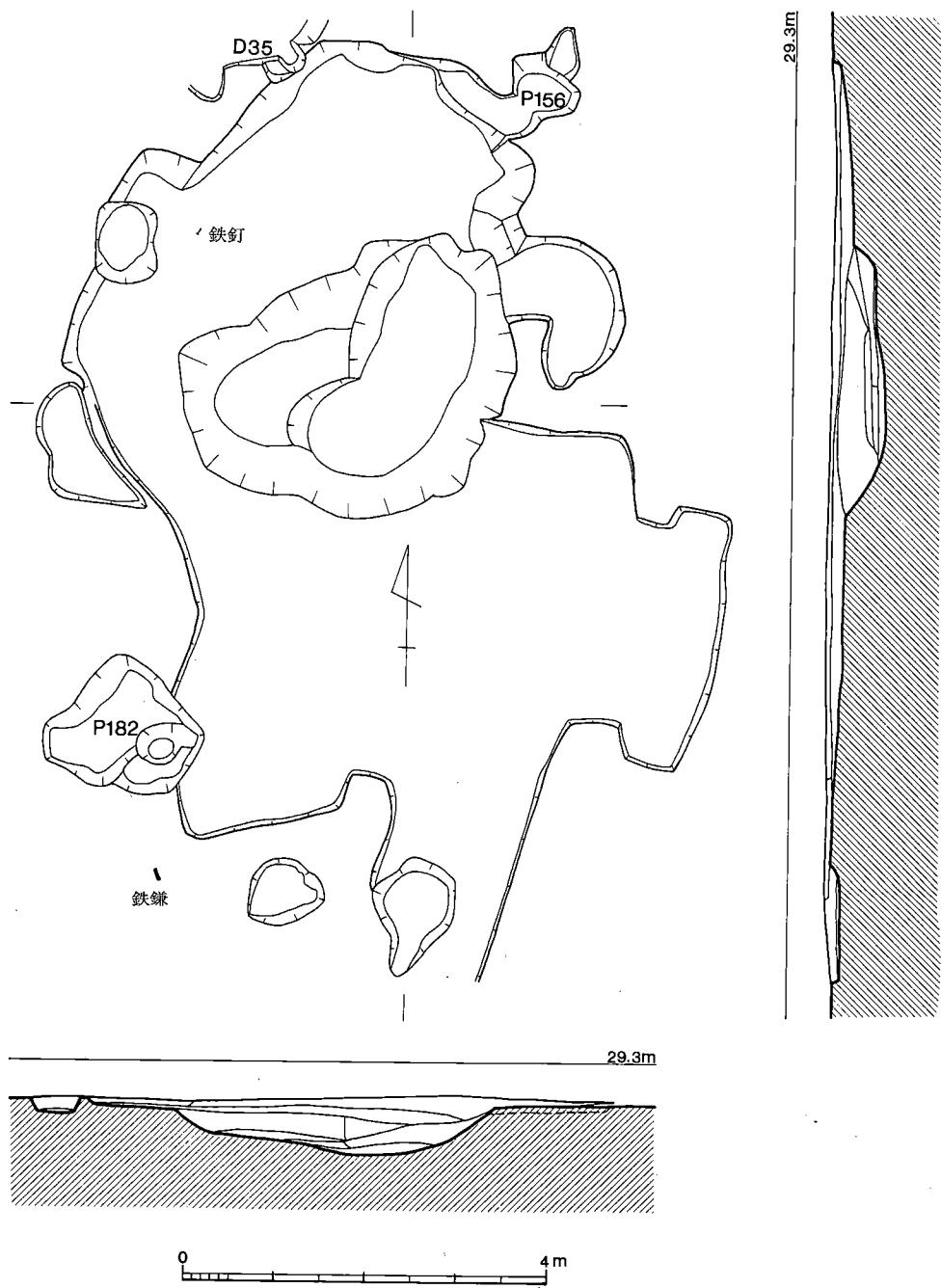
出土遺物（第155図）

遺構実測図中に図示したが、北西寄りの位置から鉄釘1本が出土した。底面から5cm浮いた状態で、5cmほどの細身の角釘である。

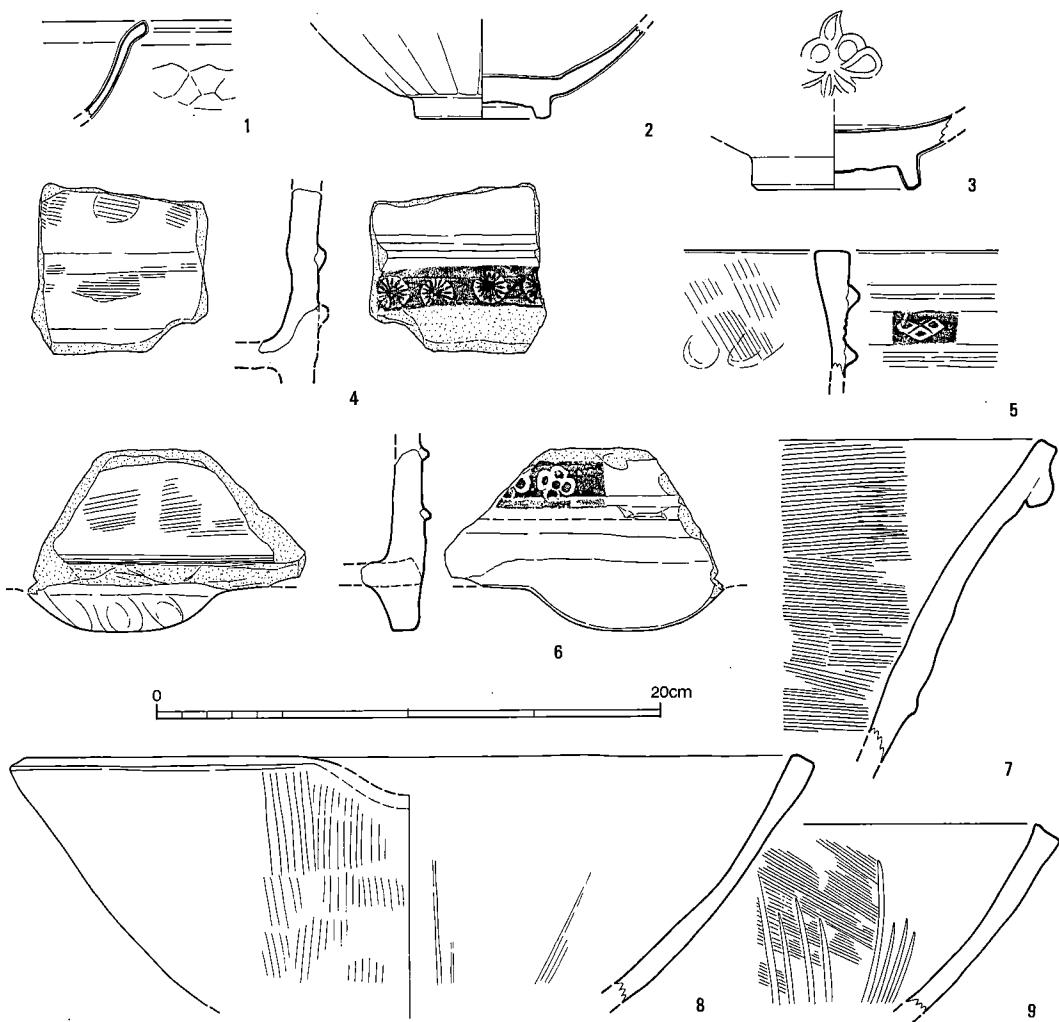
白磁(1) 口縁が短く折れて外反し、体部下半をヘラ削りで面取りしている類である。胎土は密で、内外面とも釉がかけられ、黄味灰色に発色している。

青磁(2・3) 2は、高台径5.4cmで、体部外面に蓮弁文を彫り込んでいる。外面の釉は高台外側面までかけられており、松葉色に発色している。3は、見込みに花文を浅く施した龍泉窯系青磁碗で、高台径6.75cmとなる。外面の釉は、高台内側面つけ根から内側の1.8cmの間だけ掻き取られており、少し黄味がかった松葉色に発色している。胎土は濁った桃色で焼成やや不良である。

火舎(4~6) いずれも瓦質土器で、4は、底部近くで、凸帯間に菊花文のスタンプがみられる。内面はハケをナデ消している。5は、口縁部で2条の凸帯間に四菱のスタンプを押してい



第154図 A 2号落込み実測図 (1/80)



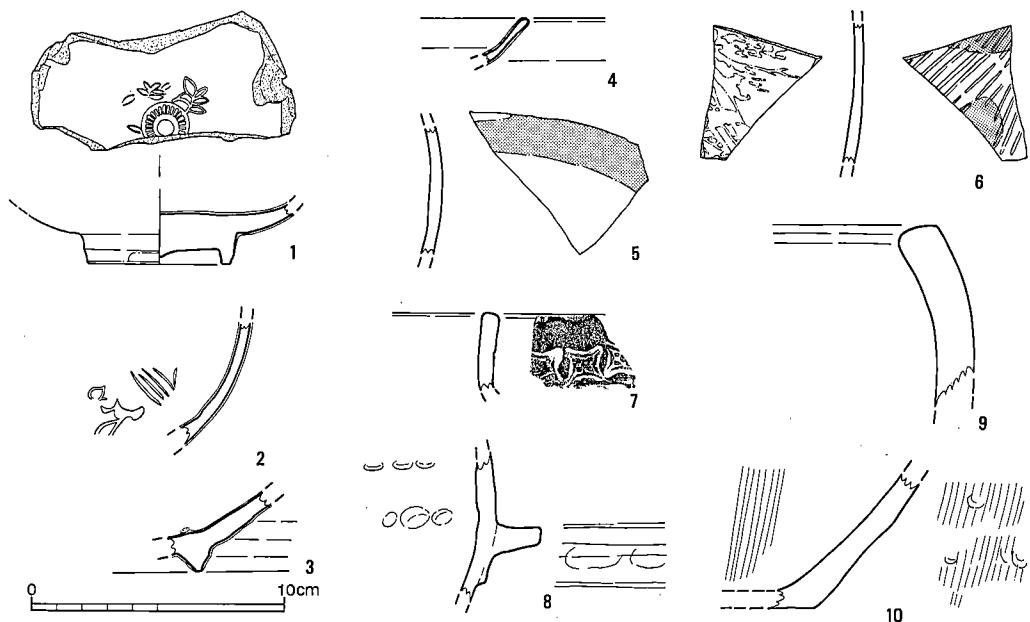
第155図 A2号落込み出土土器実測図 (1/3)

る。内面白褐色、外面黒色で、内面には指圧痕がみられる。6は、底部に低い脚を付ける部分で、凸帯間には4弁の梅鉢状の印文を施している。胎土精良で、内外面ともに黒色にいぶされている。

土鍋(7) 内面橙褐色、外面灰味黄褐色をなす土師質焼成品で、口縁外面に垂れ下がったような凸帯をつける。内面は横ハケ、外面は凹凸が多く、ナデている。

摺鉢(8・9) 8は、復原口径32cmの土師質焼成品であり、部分的に片口部が残っている。外面は粗い縦ハケ、内面は櫛目がかすかに残るが殆ど磨滅している。胎土精良で橙褐色をなす。

9は、内面黄褐色～灰色、外面は灰味黄褐色をなす。瓦質土器の生焼け品である。内面には4



第156図 A 3号落込み出土土器実測図 (1/3)

本一組の櫛目がみられる。外面はナデている。胎土精良である。

以上の出土土器は、2が若干古い様相を持つが、他は大旨14~15C代のものであり、当A 2号落込みは、隣のA 1号落込みと同時期の15C代の遺構と考えておきたい。

A 3号落込み（第152図）

A区の最東南端に位置し、東側の大半は発掘区外へ拡がっていると思われる。全体に浅い遺構で、中世遺物を含んだ黒色土で覆われていたため、落込みとしてとり上げた。

調査範囲での長さ6.02m、幅1.5mで、浅い部分での深さは5~15cm、中央の深い穴部分で38cmほどとなる。全掘していないので、A 1・2号落込みと全く同じ性格のものかどうか確定はできない。ただ、東側のB区側にも中世の遺構・遺物は拡がっているので、該期の主要遺構の一つとなるであろうと思われる。

出土遺物（第156図）

磁器(1~3) 1は、見込みに高麗期象嵌にみられるような菊花文を施す青磁碗である。高台径5.7cmで、外面の釉は、高台外面中途までかかっている。胎土は密で、松葉色の釉調となっている。2は、内面下半に草花文を施す青磁碗で、釉は厚く松葉色に発色している。3は、高台疊付面のみ釉を搔き落している磁器碗で、黄味灰色の釉調となっている。高台の断面形にも特徴があり、李朝青磁の粗製品と考えられる。内底部には目土跡がみられる。

陶器(4~6) 4は、胎土がやや精良でさっくりした感じで、褐色がかかった白色の釉調となる

皿である。産地等わからない。5は、褐釉壺の胴部片で、上半にはオリーブ色の藁灰釉がかかっている。胎土には細砂を少量含む。6は、平行線状叩きの上に黄味茶色の褐釉をかけ、上端にはうぐいす色の藁灰釉が施されている。5と同一個体かもしれない。

羽釜（7・8） 7は、橙褐色をなす土師質焼成品で、外面に、中に5小円文を入れた四角いスタンプを巡らせている。胎土は極めて精良である。8は鍔部分で、内外面横ナデの瓦質焼成品である。胎土精良で外面には煤が付着する。指オサエ痕が各所にみられる。

火舎（9） 瓦質製品で、部厚く内湾する器形となる。口縁付近は横ナデ、体部内外面ともにナデ仕上げとなっている。

摺鉢（10） 8本の櫛目を内面に施した瓦質製品である。外面はハケの上をナデしている。胎土精良で橙褐色をなす。

以上の出土品は、A1・2号落込み出土品と比べて、新しいものが多くみられるが、李朝系と思われるものもあり、16Cにかかる可能性もある。室町後半期の屋敷の変遷を示すものと思われる。

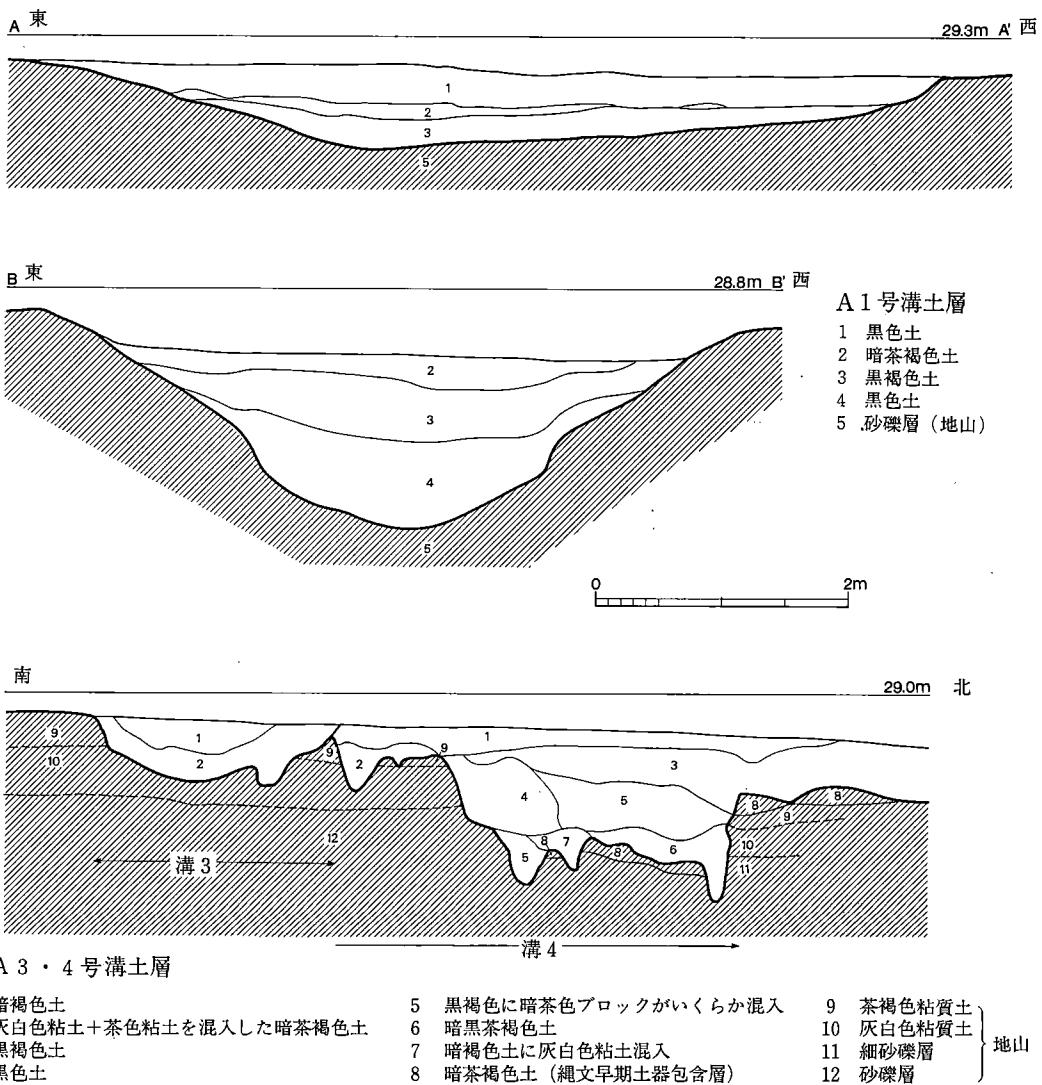
I 溝状遺構

ここでは、治部ノ上遺跡で検出した、新古・大小の溝状遺構のうち、最も新しい現代の耕作関連の溝を除き、番号を付けたものについて報告しておきたい。なお、A6号溝とB1号溝は、それぞれA1号方形周溝墓、B1号方形周溝墓と認定して、先に報告しているので、ここでは除く。

A1号溝（第157図、図版28）

A区東南端に検出された、北々東から南々西へ下る大溝である。南端での幅5.8m、北端付近の大きく拡がった部分で幅7.5m、その中途で細くなった部分の幅3.7mとなる。深さは、南端部で1.7mあり、北へ向かって浅くなり、最北端あたりは、自然と遺構面へと連続している。埋没状況は、黒色土を中心とした大まかな自然堆積で、地山がすべて砂利層のためか、流水のあったような痕跡も見当たらない。

これらのことから、この大溝は、溝というよりも、この段丘上に在った中世居館への登り口と考えた方がよさそうである。そして、この溝底部の北端近くでの曲がり方を見ると、この道（小谷状部分）を登って行って左側へ上がった場所、つまり溝の西側に居館があったと考えられるのである。

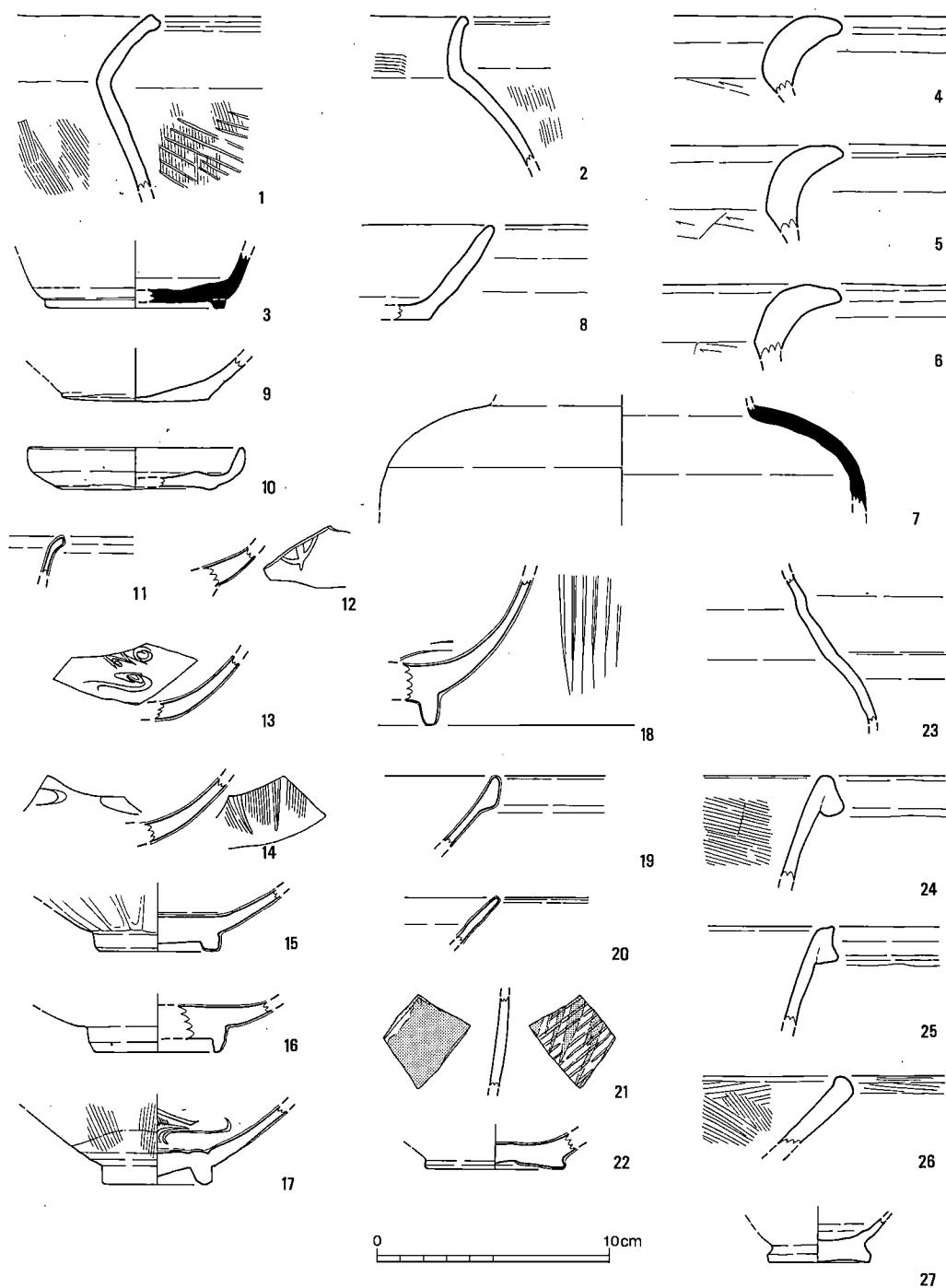


第157図 A 1・3・4号溝土層断面実測図 (1/60)

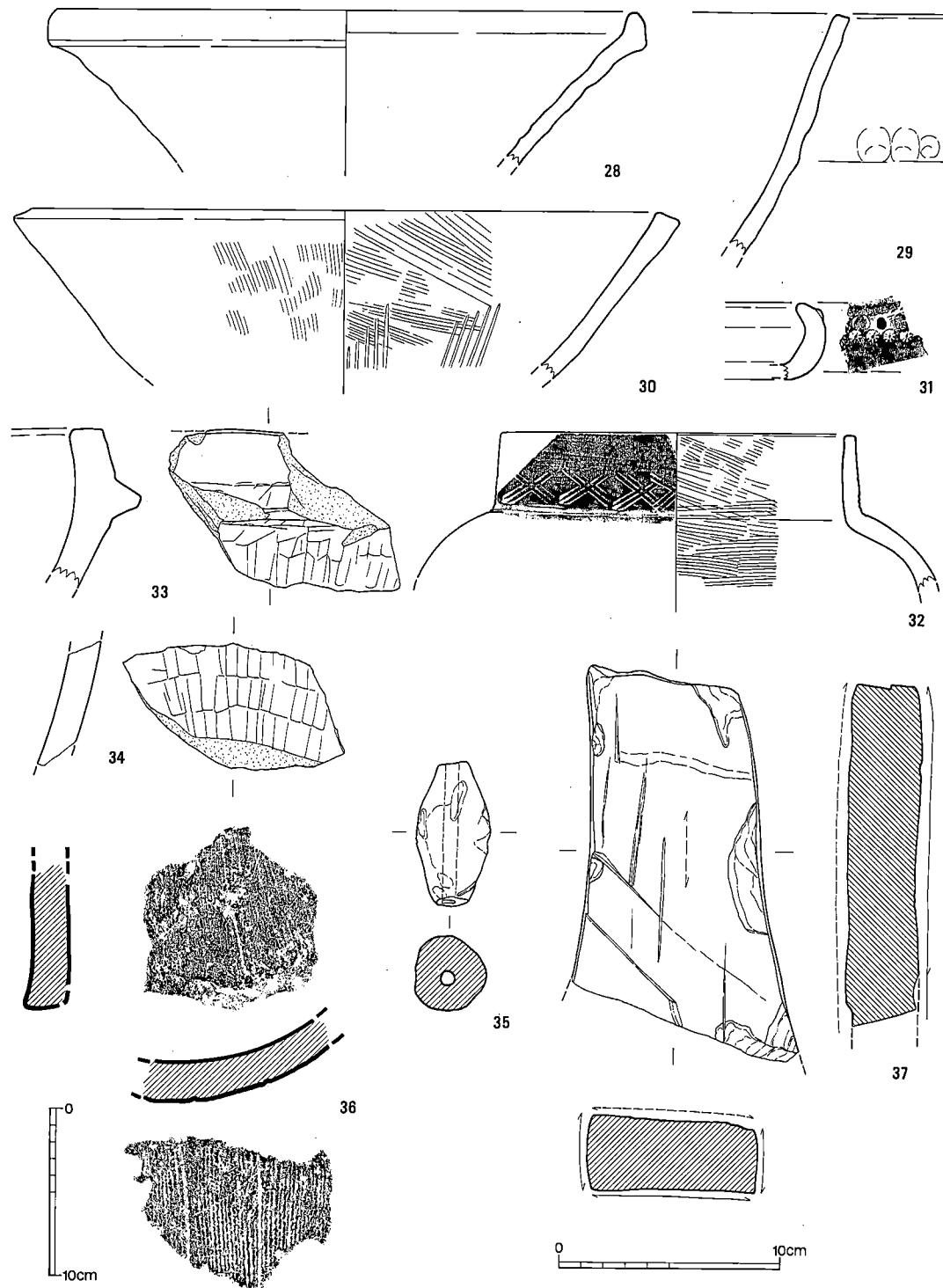
出土遺物 (第158・159図)

甕 (1・2・4~6) 1は、頸部内面に稜をつくり、胴部内面はハケ、外面は叩きの上からハケを施している。外面には煤が付着する。2は、胴部内面は丁寧なナデ、外面はハケの上から部分的にナデている。1・2は弥生時代後期末葉の混入品である。4は、胴部内面ヘラ削り、他は横ナデ調整である。5・6も同様で、これらは奈良期の混入品である。

杯 (3・8・9) 3は、高台径7.8cmの須恵器で、底内面はナデツケ、底外面はすだれ状圧痕



第158図 A 1号溝出土土器実測図 (1/3)



第159図 A1号溝出土土器・石器等実測図 (瓦のみ1/4, 他は1/3)

の上をナデている。8C前半のもの。8は、底部糸切り土師杯で、4cmほどの器高となろう。9も、底径6.3cmの糸切り底土師杯で、8・9ともに12C中頃前後の大ぶりになる時期のものであろう。

小皿(10) 復原口径9.4cm、器高1.8cmとなる。底部糸切りで、体部が内湾して立ち上がる。内底面まで横ナデである。12C中頃のもの。

壺(7・27) 7は、胴部最大径20.8cmとなる須恵器短頸壺である。内外面横ナデで、外面には灰をかぶって、黒灰色をなす。奈良前半期のものであろう。27は、底部糸切りの土師質焼成品で、小壺状となるか。胎土精良で明橙色をなし、内外面ともに磨滅している。

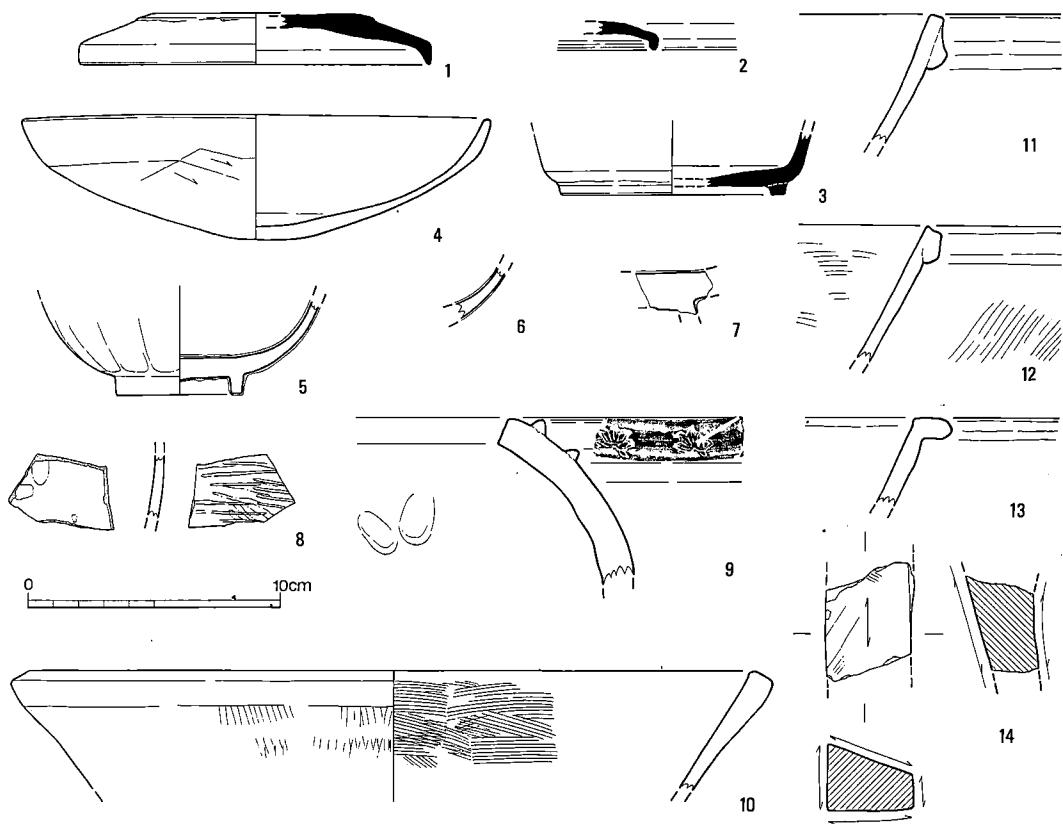
磁器(11~19・22) 11は、青磁口縁で、小さく折れて外反する類となる。12は、うぐいす色をした青磁碗片で、線彫りの蓮弁がみえる。13は、龍泉窯系青磁碗でヘラ描き雲文が施される。14は、松葉色の青磁碗で、外面には櫛目を入れた蓮弁文、内面にはヘラ片彫りによる文様が施される。15は、鎧蓮弁青磁碗で、釉は暈付面まで施されている。16は、高台径5.5cmの龍泉窯系青磁碗で、外面の釉は高台側面まで施されている。17は、同安窯系青磁碗で、外面の釉は体部下半までかけられている。高台径4.4cmで、黄茶灰色をなす。18は、外面に縦位平行線を施す青磁碗で、現存部ではすべて釉が厚くかかっている。内面にも文様が施されている。19は、玉縁の白磁碗で、薄いオリーブ色をなす。22は、越州窯系青磁碗で、蛇の目高台につくる。底外面中央のみが露胎となっている。復原底径6cmで、灰味黄茶色の釉調をなす。

陶器(20・21・23) 20は、内外面ともに黄味灰色の薄い釉をかけ、細砂を多く含む。半磁器的な感じで、近世国産陶器もしくは李朝青磁の粗製品と思われる。21は、褐釉壺の胴部片で、外面は下地に平行線状叩きを施している。黄味茶色の褐釉の上から、うぐいす色の藁灰釉を内外面にかけている。A3号落込み出土品と同一個体であろう。23は、褐釉壺の外面に黒褐色の鉄釉をかけたものである。内面は焦茶色をなし、胎土に褐色粒を少し含む。

土鍋(24・25・29) 24は、明澄褐色をなす土師質焼成品で、外面はナデ、垂れた口縁内外面は横ナデ、内面はハケを施す。25は、外面に煤が付着し、胎土精良で橙褐色をなす。体部は内外面ともにナデ調整で、口縁部分だけ横ナデを施している。29は、明澄褐色をなす土師質土鍋で、外面には煤がこびりつく。A3号落込み出土破片と接合している。内面と外面上半はナデ、外面下半は横ナデ調整である。

鉢(26・28・30) 26は、瓦質捏鉢で、外面は磨滅している。胎土に細砂を少し含み、暗灰黄色をなす。28は、復原口径27cmで、内面下半が剥落しているが、内外面横ナデの瓦質鉢である。30は、口径30cmの土師質焼成摺鉢である。胎土はかなり精良で、内面は橙褐色、外面は灰橙褐色をなす。

火舎(31) 小型の瓦質品で、外面に円形凸文とその下に小菊花文を押印している。内面は横ナデ、外面はナデている。



第160図 A2・3号溝出土土器等実測図(1/3) (1のみA2号溝出土)

羽釜(32) 口径15.9cmの瓦質品で、直口部外面には×印のスタンプを巡らせてている。胴部外面はヘラ磨きしている。直口部外面も横ヘラ磨きしている。胎土精良である。

石鍋(33・34) 33は、灰味黄褐色の滑石製石鍋口縁で、内面は平滑で、外面鍔部以下はノミ痕を残したままである。鍔外端部から以下の外面には煤が付着している。34も同様の石材の石鍋胴部片で、外面には煤がこびりつく。内面は極めて平滑である。

土錘(35) 長さ6.5cm、最大径3.3cm、孔径6mmの紡錘状品である。胎土精良、焼成良好で淡褐色をなす。手捏ね的で凹凸がかなりある。重量60g。

瓦(36) 凸面に繩目叩きを施した平瓦で、小口面はヘラ切りしている。細砂を多く含み、黄～橙褐色をなす生焼け品である。

砥石(37) 片麻岩製中砥で、上面はあまり使っていない。下面是中央がへこみ、両側面が最もよく使い込まれている。現存長17.8cm、最大幅10.2cm、厚さ3.4cmとなる。

以上の出土品は、多時代、多器種にわたる。うち、このA1号大溝に関係するものは、8～35

で、他は混入品として埋没したものと考えられる。うち8～19については、大旨12C代を中心とするもので、他は15C代のものが若干みられる。これらのことから、大溝の当初掘削時期は、12C中ごろ前後で、埋没しながら15C頃まで利用されていたものと考えられる。

A 2号溝（付図参照）

A区東端に検出された南北方向に走る溝で、調査分の長さ19.6m、幅は1.1～1.5mある。深さは30～40cmほどと浅い。A1・14号住居跡、A44号土壙（落し穴）を切っている。底面は凹凸がかなりあるが、おそらく南方へ流れたものと考えられる。以下に報告する遺物以外に、A14号住居出土品で報告した瓶子形瓦質土器（第71図）も、当溝に伴うべきものと考える。

出土遺物（第160図）

杯蓋（1）口径14cmで、天井外面に撮が付く類である。鳥嘴状口縁は長く尖り、天井外面には回転ヘラ削りを施す。天井内面はナデツケが広く施されている。暗灰色の須恵器。

この土器は、当A 2号溝の時期を示すものではなく、前述のように瓦質土器の示す14～15C代が当溝の年代として適当であろう。

A 3号溝（第157図）

A区北側の住居跡集中部分の北側にて検出された、わりと大きめの東西方向の溝状遺構である。土層断面図に見るとおり、北側に並行して走るA 4号溝の最終埋土を切っており、A 4号溝が埋没した後に掘り込まれたことがわかる。また、南側では、A11号住居跡を切っており、特にこのあたりでは人工的に掘り込まれた逆台形状の形態がしっかりと残っている。

発掘全長13mで、幅は2.1～3.4mとなる。溝底は東へ傾斜しており、西端からの水の流入の痕跡が、その部分のみに複雑な抉りや窪みとなって検出された。深さは西端のえぐれた部分で50cmほど、東端で1mほどとなる。

出土遺物（第160図）

杯蓋（2）端部が丸味をもつ須恵器で、天井外面はナデている。胎土に細砂粒を少し含む。天井内面は横ナデで、小径の扁平な特殊品用蓋かと思われる。

杯（3・4）3は、高台径9cmの8C前半期の須恵器杯身である。4は、口径18.7cm、器高5cmの土師器杯で、内面はナデ、外面中位はヘラ削り、底外面はナデしている。3と同時期。

青磁（5～7）5は、全面にうぐいす色の釉がかかる碗で、高台内側底外面には目土跡が残っている。体部外面は蓮弁文を削り出している。6は、オリーブ色の釉が厚くかった龍泉窯系青磁碗片である。7は、松葉色の釉を高台外側面までかけた碗である。

陶器（8）褐釉壺胴部片で、A1号溝、A3号落込み出土品と同一個体であろう。外面には叩きがみられ、松葉色の藁灰釉をかけており、内面にも一部みられる。胎はねずみ色で、砂粒を

やや多く含む。

火舎(9) 瓦質で表面は極めて平滑の上質品である。口縁内側1.8cmまでと外側凸帯下1cmまでは横ナデ、他の内外面は丁寧なナデ仕上げである。7弁の蓮華文を2条の凸帯間に押印している。最上端は小さく面取りしている。胎土精良。

鉢(10) 復原口径30.2cmの土師質焼成捏鉢である。細砂粒を多く含み、外面はハケをナデ消している。明橙褐色をなす。

土鍋(11~13) いずれも土師質焼成品で、外面には煤がこびりついている。11は、内面は横方向ナデ、外面は煤のため不明。細砂粒を多く含む。12は、内面はハケをナデ消している。13は、口縁外端が鍔状になる類で、口縁上面はハケ、内面は横方向ナデ、外面はナデている。

磁石(14) 赤茶色の淡い筋が入る淡灰色のシルト岩製仕上げ砥である。表裏面ともによく使い込まれている。現存長4.6cm、幅3.5cm、厚さ2.6cmとなる。

以上の出土遺物は、大別して、1~4の奈良期のもの、5~7の12C代のもの、9~13の14~15C代のものの3時期に分けられる。当A3号溝の時期としては、後2者が、既報告のA1号溝と対応しており、12C代に掘られ、15C代まで利用されたと考えておきたい。

A4号溝（第157図）

上述のA3号溝の北隣に並行するかのように走る東西溝である。土層断面図に見る如く、A3号溝に切られている。この溝の上層に溜まる黒褐色土は、北側の谷へと連続して堆積して、縄文早期包含層の上を厚くおおっている。

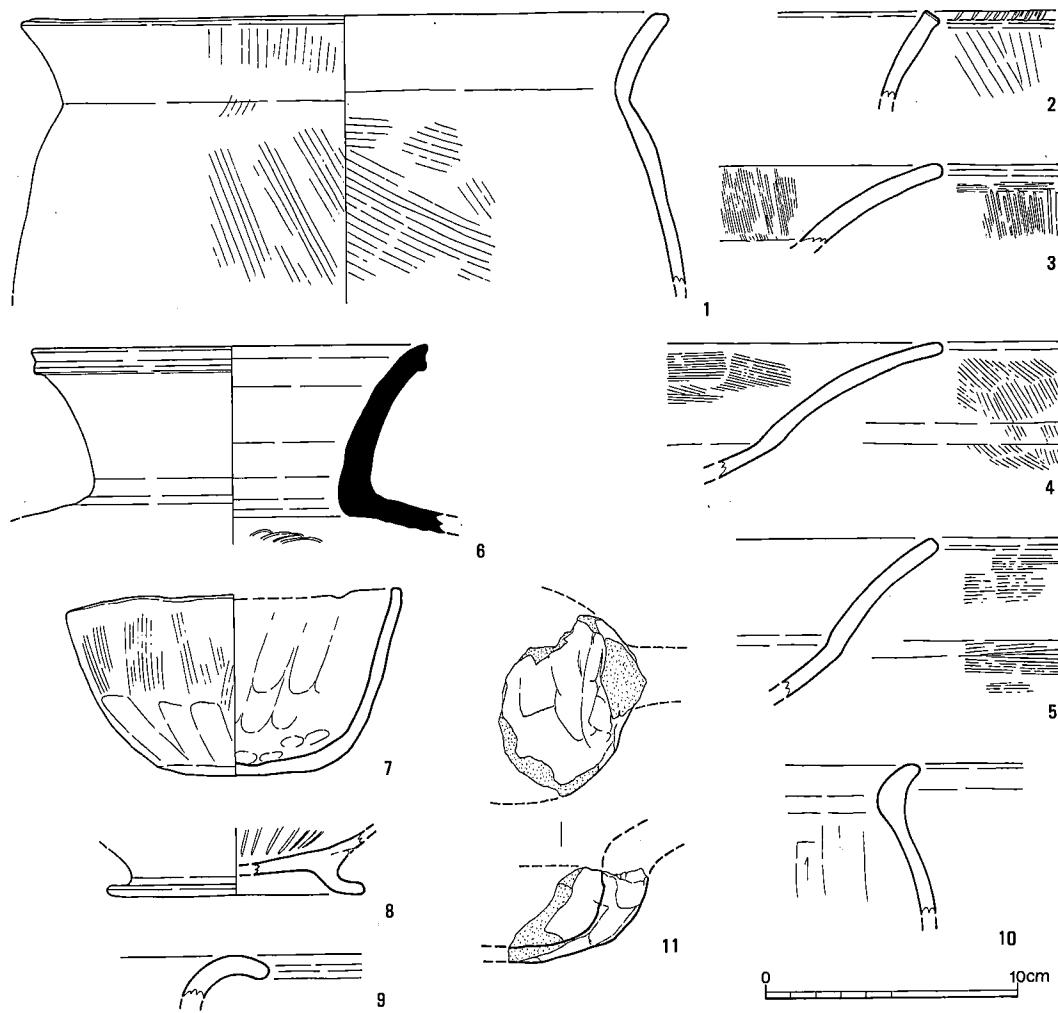
溝底は西へ傾斜して、西側の大きな谷へ流れ込むようになっている。発掘全長19m、幅は2.2~3m、深さは1~1.5mとなる。底面は全体に激しい流水の痕跡である、両壁沿いの狭く深いえぐれ溝や、底面の凹凸が著しく認められる。これは南隣のA3号溝と対照的である。さらに、南壁沿いの上端付近には小規模な溝方向への流水痕が顕著に残っている。

これらのことから、当初は人工的掘削溝であったと思われるが、実際には降雨時の排水大溝として、常に浸蝕を受けていたことがわかる。

出土遺物（第161図）

甕(1・2・10) 1は、復原口径25.8cmで、胴部外面はハケの上をナデしている。外面ほぼ全面に煤が付着する。2は、口縁端面に刻目を施し、外面はハケの上を横ナデ調整している。1・2は、弥生後期後葉~末葉のもので当溝への周辺住居跡からの混入品。10は、土師器小甕で、胴部内面はヘラ削り、他面は磨滅して調整不明である。外面には煤が付着する。奈良前半期のもの。

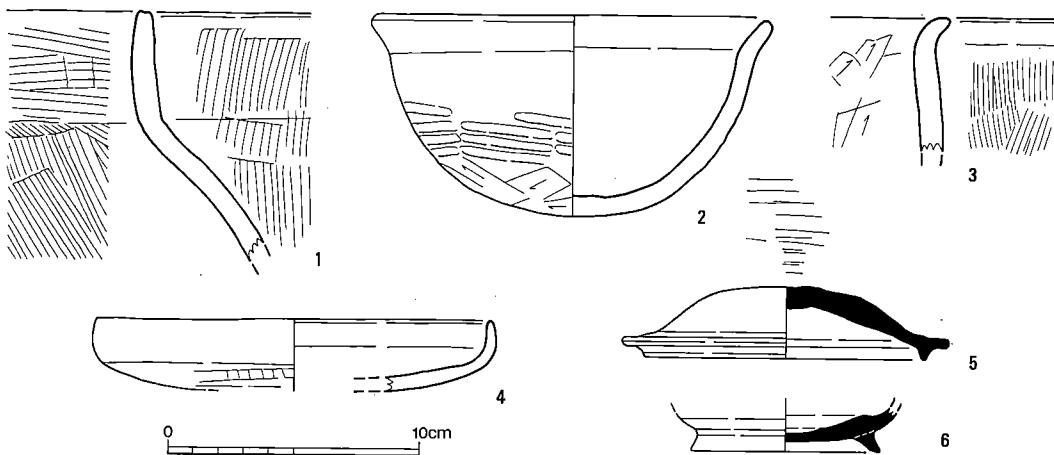
壺(6) 口径15.8cmの須恵器で、口頸部内外面は回転ナデ、胴部外面は格子目の叩き、内面は青海波のあて具痕が残っている。奈良前半期のものであろう。



第161図 A4号溝出土土器実測図 (1/3)

鉢 (7・8) 7は、口径13.4cm、器高6.5~7.4cmで、全体に手捏ね風で、内面は指頭圧痕が多く残っている。外面上半をハケの上を部分的にナデており、下半は強いナデが施されている。8は、高台径10.2cmの土師器で、内面に縦方向の暗文を入れている。胎土精良で、内面と底外面はナデしている。高台周辺は横ナデ。高台付の特殊な鉢状の器形になると思われる。7は弥生後期末葉、8は、奈良初~前半期かと思われる。

高杯 (3~5) いずれも弥生後期の大きく開く高杯口縁であるが、3・5が口縁の長さ、調整技法等からみて、4よりも古式であり、前者が後期後葉、後者が末葉のものとなる。3は、内面は縦ヘラ磨き、外面上部は横ハケの上に縦ヘラ磨きを施している。4は、内面に横ハケを施し、それ以下は丁寧にナデしており、外面上部には斜~縦ハケを施したままである。5は、内面はすべて



第162図 A5号溝出土土器実測図 (1/3)

縦ヘラ磨き、外面屈折部稜までの上半は横ハケの上に縦ヘラ磨き、下半は横ハケのままとなっている。

土製匙 (11) 柄の部分と先端側の半分以上を欠いているが、深さが3cmほどとなる類である。全体に手捏ねによる作りで、表面の凹凸がはげしい。弥生後期後葉～末葉のものであろう。

以上の出土遺物をみると、大きく2時期に分けられる。弥生後期の住居を当溝が切っているのは確実で、弥生後期土器の出土が多いのも、このせいであろう。よって、A4号溝は、6・8・10の示す、奈良前半期の所産であろう。

A5号溝 (付図参照)

遺跡の最北端の発掘区ぎりぎりの所にて検出された、幅の広い東西溝である。縄文早期包含層が形成される北端谷の下端部から、北へゆるやかに10mほどの間高くなつてゆき、その先にこの溝が形成されている。現状の地形からみると、實際にはこの北側に拡がる台地の直下にあたり、人工的な掘削溝というよりは、台地縁辺下の自然の深い溝の可能性が高い。

発掘全長5m、幅は3～4.8mあり、下方(西方)へ拡がっている。深さは30cmほどと深い。

出土遺物 (第162図)

壺(1) 短頸壺で、口縁内面横ハケ、胴部内面は斜めハケ、外面は縦ハケを施している。弥生後期後葉のものであろう。

鉢(2) 口径15.9cm、器高8cmで、頸部内面稜線以下は丁寧なナデ、それ以上から外面上半は横ナデ、体部外面中位は叩き、底外面はヘラ削りを施す。弥生後期末葉前後のもの。

甕(3) 頸部で丸く外反して小さく開く口縁となる小甕である。内面ヘラ削りで、7C後半代のものとなろう。

杯(4) 復原口径16cmとなる土師器で、底外面はヘラ削りしている。他面は磨滅して調整不明である。胎土精良で、黄味橙色をなす。7C後葉～末葉のものであろう。

須恵器(5・6) 5は、口径11cm、受け部外端径13cm、器高2.8cmの蓋で、天井外面中央にはヘラ先条線痕がみられる。その外周縁部はナデており、天井内面も広くナデツケがみられる。6は、高台径7.5cmで、底外面には回転ヘラ削りが施され、内底面にはナデツケがみられる。高台が外方へ踏ん張っている。この5・6は、7C中～後葉代のもの。

以上の出土土器のうち、A5号溝の時期を示すのは、3～6で、7C後葉代が掘削された年代と考えられよう。

B2号溝 (付図参照)

B区北端近くに検出した南北溝である。南端でB9号土壙を切る。発掘全長8.4m、幅は0.5～0.85mとなる。深さは最大25cmほどと浅い。

底面の高低から、南北いずれの方向へ水が流れたかを知るのは困難である。出土遺物が無く、時期を決定できないが、埋土の状況から、近世の畑の耕作に関する遺構ではないかと考えられる。

B3号溝 (付図参照)

前述のB2号溝の東隣に、70cmほど離れてほぼ平行に走る南北溝である。全長6.5mであるが、本来は、南北両方向へ延びていたものと考えられる。南端でB9号土壙を切っている。

幅は最大70cmほどで、深さは20cmほどと全体に浅い。B2号溝同様に、図示できる出土遺物が無く、時期決定は困難であるが、近世の畑作関連の溝ではないかと考えられる。

B4号溝 (付図参照)

B区北端の、前述のB2号溝の西隣に並行して走る南北溝である。南端でB14号住居跡を切っている。発掘全長6.5m以上で、図示したよりも南方へ延び、B6号住居跡の上あたりまであつたと記憶している。幅は70cmほどで、深さは20cmほどと浅い。

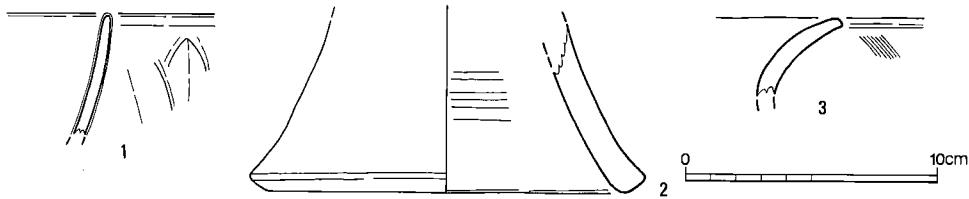
切り合い状況や、埋土からみて、B2・3号溝と同様な、畑作に伴う近世溝ではないかと思われる。

出土遺物 (第163図)

青磁(1) 龍泉窯系青磁碗で、外面に鎧蓮弁を施す。胎土は密で、緑灰色釉をかけている。

器台(2) 脚端径15.6cmで、下から3.5cmまでの内外面は横ナデ、それ以上の外面はナデ、内面は粗い横ハケを施している。弥生後期後葉のものであろう。

以上の出土遺物は、もちろん、他遺構からの流入品で、当溝の時期を示すものではない。



第163図 B4・5号溝出土土器実測図(1/3)(1・2:4号溝, 3:5号溝)

B5号溝(付図参照)

B区北寄りに、東西に走る浅い溝で、図示した部分以東にずっと延びて、すべての遺構を切っていた。西端では幅が狭いが、B8号住居跡の上あたりでは、70~80cmほどの幅があったと記憶している。深さ20cmほどである。

切り合ひ状況や、埋土の状態から、近世~近代の畑作に伴う溝であろうと推定される。

出土遺物(第163図)

甕(3) 丸味をもって外反する口縁片で、口唇内外面は横ナデ、口縁内面はナデ、外面はハケ調整を施している。弥生後期末葉~古墳時代初頭のもので、当溝に混入したものである。

B6号溝(付図参照)

B区中央の、B7号住居跡西側から南西方向へ走る、深い溝である。発掘全長7mで、幅0.6m、深さは西端で0.8mとなる。明らかに西方へ流れるように溝底が西へ深くなっている。中途でP39・43に切られ、B20号土壙とB3号住居跡を切っている。埋土はしっかり締まっており、出土品は少なく、図示できるものは無い。

時期は、P39が奈良末前後であり、B3号住居跡が弥生後期後葉頃であることから、この溝はその間に収まる時代のものであろう。

B7号溝(付図参照)

B区の中央を東西に走る直線条溝である。発掘全長11.8m、幅は70cm前後で、深さは20cmほどと浅い。中途でB6号住居跡を切っている。

溝底は西方へ低くなっている。埋土の状況や、南側の現代の畑の段落ラインと平行していることなどから、近~現代の畑作に伴う溝であろうと思われる。

J その他の遺構と遺物

治部ノ上遺跡では、全体図(付図参照)に見るごとく、遺跡全体に夥しい数の土壙状の不整

形遺構や小ピットが検出された。掘立柱建物の柱穴探しをあきらめさせる程に小ピットが密集している。

ここでは、これら的小遺構から出土した遺物や、表面採集遺物等について、縄文土器以外のものを報告しておきたい。

A区各ピット等出土遺物（第164～166図）

弥生～古墳時代遺物（1～16）

甕（1～3・15・16） 1はA28号土壙への混入品で、外面はハケの上から横ナデを施している。2は、1と同様に弥生後期の小甕で、外面はハケ、内面はナデている。A2号土壙への混入品である。3は、A38号土壙への混入品で、古式土師器甕口縁である。内外面に細かいハケを施し、内面には朱が付着している。15は、胴部最大径39.4cmの大型品で、北端谷包含層上層出土品である。外面には粗い叩きが施され、内面には細かいハケがみられる。弥生後期末葉のものであろう。16は、P151出土品で、内面ヘラ削りの大型品である。外面には煤が付着する。古墳時代初頭のもの。

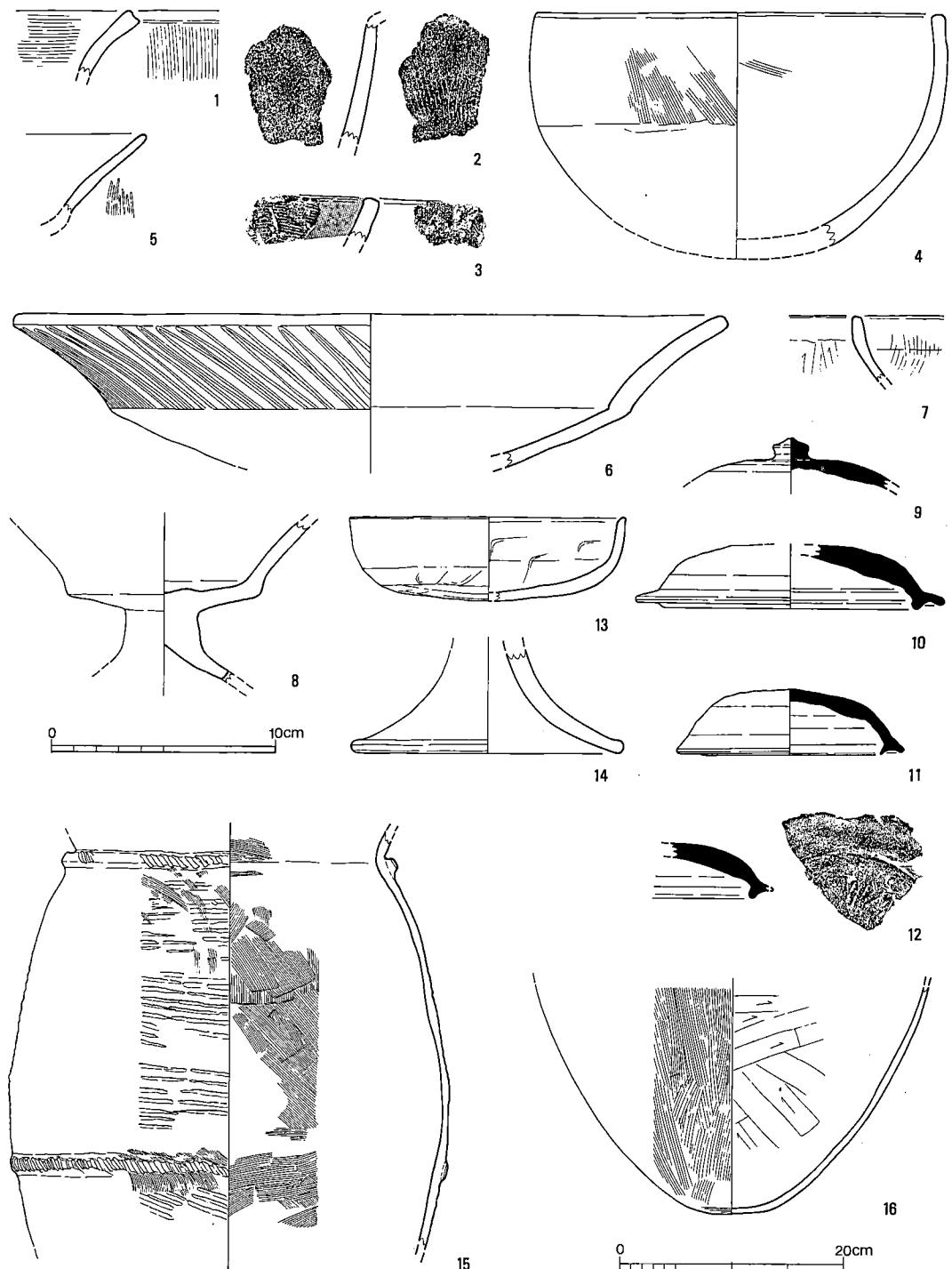
鉢（4） 表採品で、口径18.4cm、器高は21cmほどとなろう。内面と体部下半はナデ。やや内湾する深い器形で、弥生後期中～後葉のものであろう。

高杯（5・6・8・14） 5は、P254出土品で、外面は細かい縦ヘラ磨き、内面もヘラ磨きかと思われる。6は、P267出土品で、内面は縦ヘラ磨き、口縁外面下半はハケの上から、それ以上は横ナデの上から波状暗文が施されている。体部外面は縦ヘラ磨きを施す。復原口径32cmで、5と同様に弥生後期後葉のもの。8は、表採品で、脚裾に小円孔が1個残っている。杯部上半はヘラ磨きかと思われるが、全体に磨滅しており調整不明。古墳初頭の他地域系のもの。14はP94出土品で、外面上半は縦ヘラ磨き、他面は磨滅している。

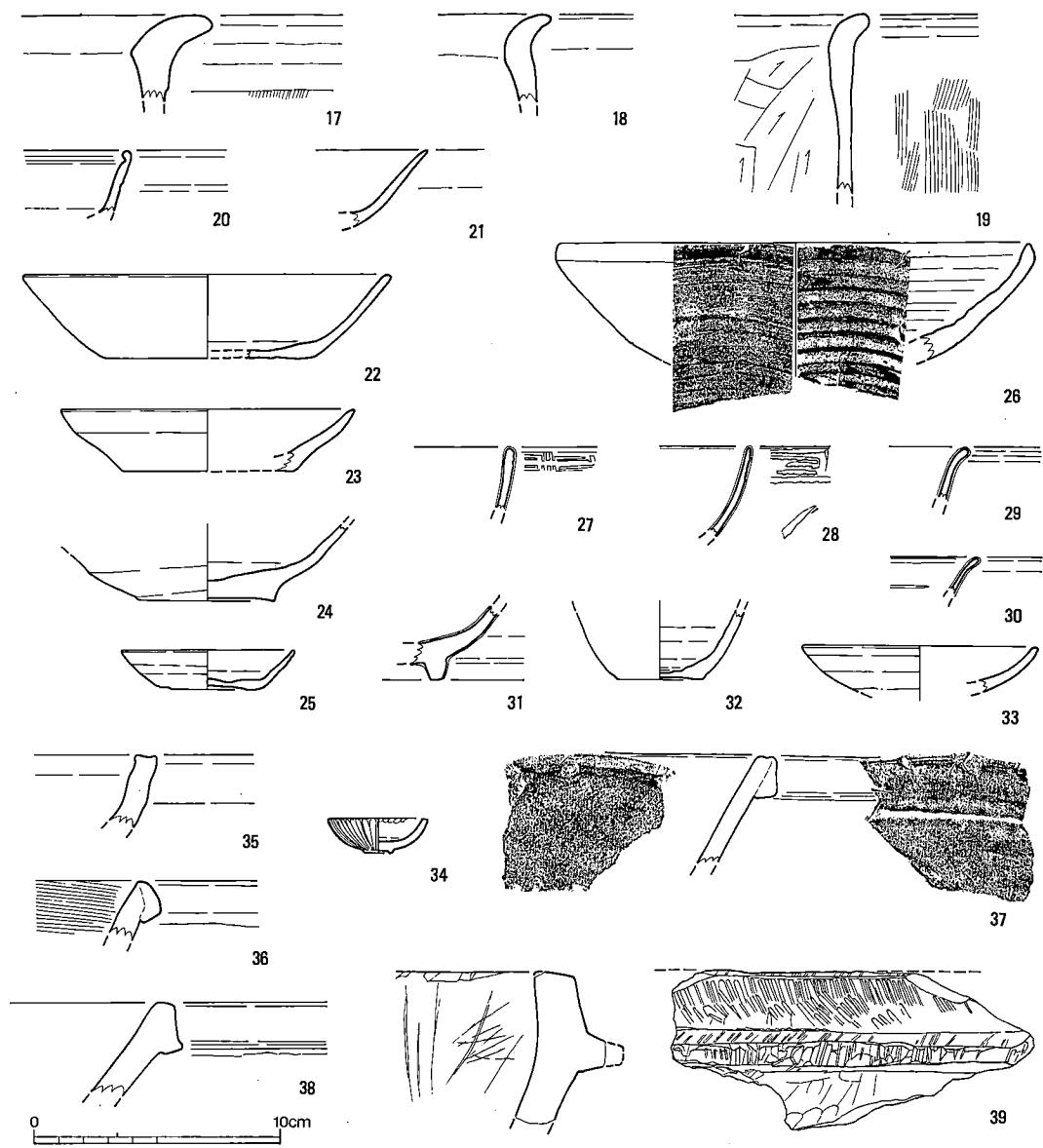
杯類（9～13） 9～12は須恵器蓋で、7C前葉～後葉のもの。9は、北端谷包含層上層出土品で、天井外面は回転ヘラ削り、内面はナデツケが施される。10は、径13.8cmで、P118出土品である。天井部は内外面ともにナデている。11は、北端谷包含層上層出土品で、径10.2cm、器高2.9cmとなる。天井外面は未調整で、内面は中央部だけナデツケる。外面に3本沈線のヘラ記号がある。12は、P170出土品で、天井外面は雑なヘラナデ状で、その周縁は手持ちヘラ削りである。内面黒色、外面褐色の生焼け品である。13は、北端谷包含層上層出土品で、口径12.4cm、器高3.8cmの土師器で、底外面はヘラ削り、内面中央はナデツケている。

歴史時代遺物（17～49）

甕（17～19） 17・18は北端谷包含層上層出土品で、17の内面は横位ヘラ削り、18は磨滅して調



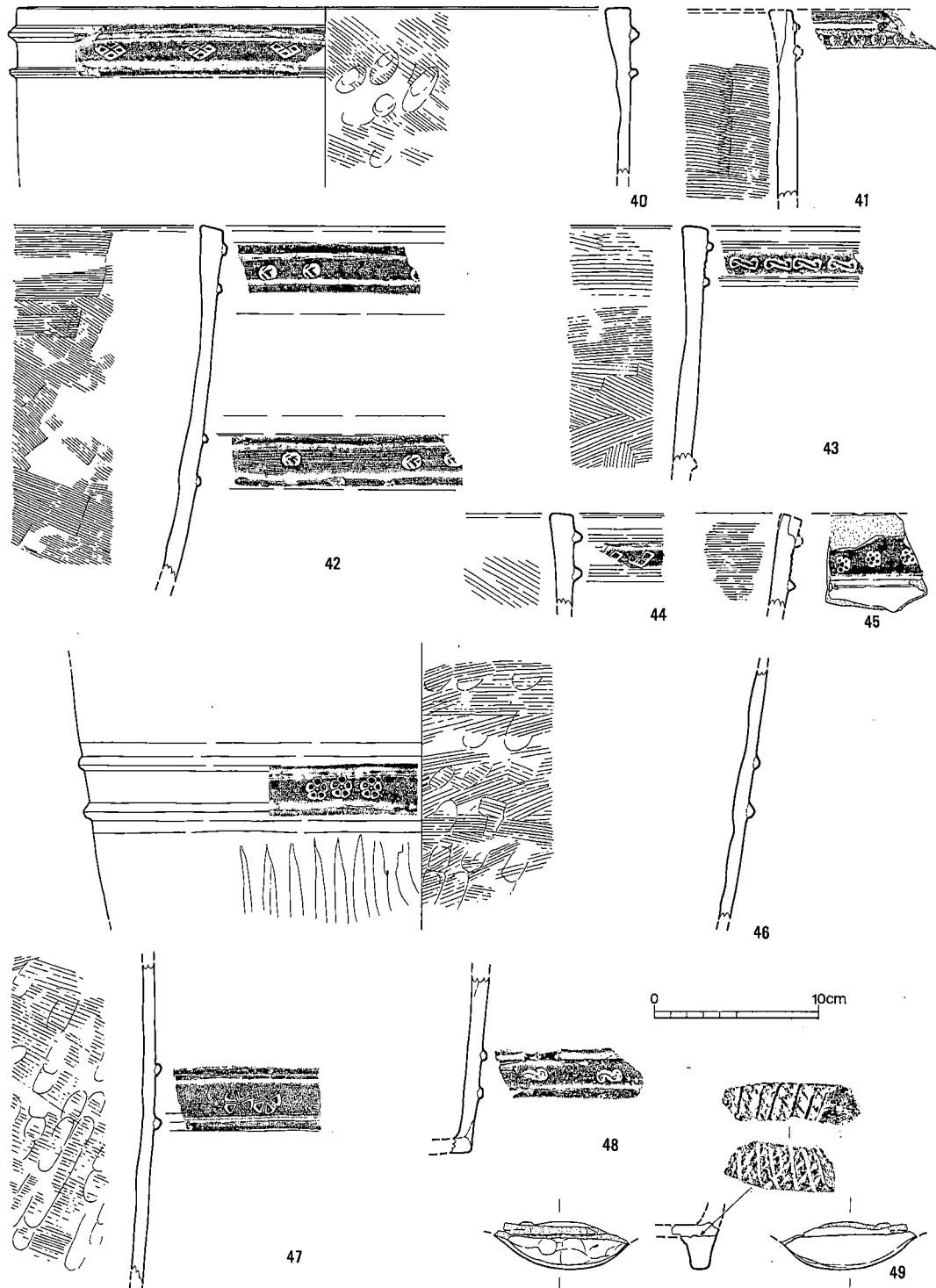
第164図 A区各ピット等出土土器実測図（その1）(1/3, 15・16のみ1/6)



第165図 A区各ピット等出土土器実測図（その2）(1/3)

整不明。19は、A17号土壙への混入品。いずれも奈良前半期のもの。

杯(20~24) 20は、P170出土品で、黒色をなし瓦質に近いが須恵器であろう。内外面回転ナデで、胎土精良。器形が見当つかない。21は、A17号土壙への混入品。土師器杯で、内外面横ナデ調整、22は、P40出土品で、底部ヘラ切りの土師器。口径15cm、器高3.4cm、底径8.5cmとなる。平安初頭のもの。23は、糸切底土師杯で、口径12cm、器高2.5cm、底径7cmとなる。P157出土品



第166図 A区各ピット等出土土器実測図（その3）(1/4)

で、14C前後のもの。24は、A17号土壙への混入品で、底部糸切り土師杯で、14~15C代のものか。

特小皿(25) P130出土品で、口径7cm、器高1.6cm、底径4.4cmの糸切り底土師器である。内底面中央はナデツケている。14C代のもの。

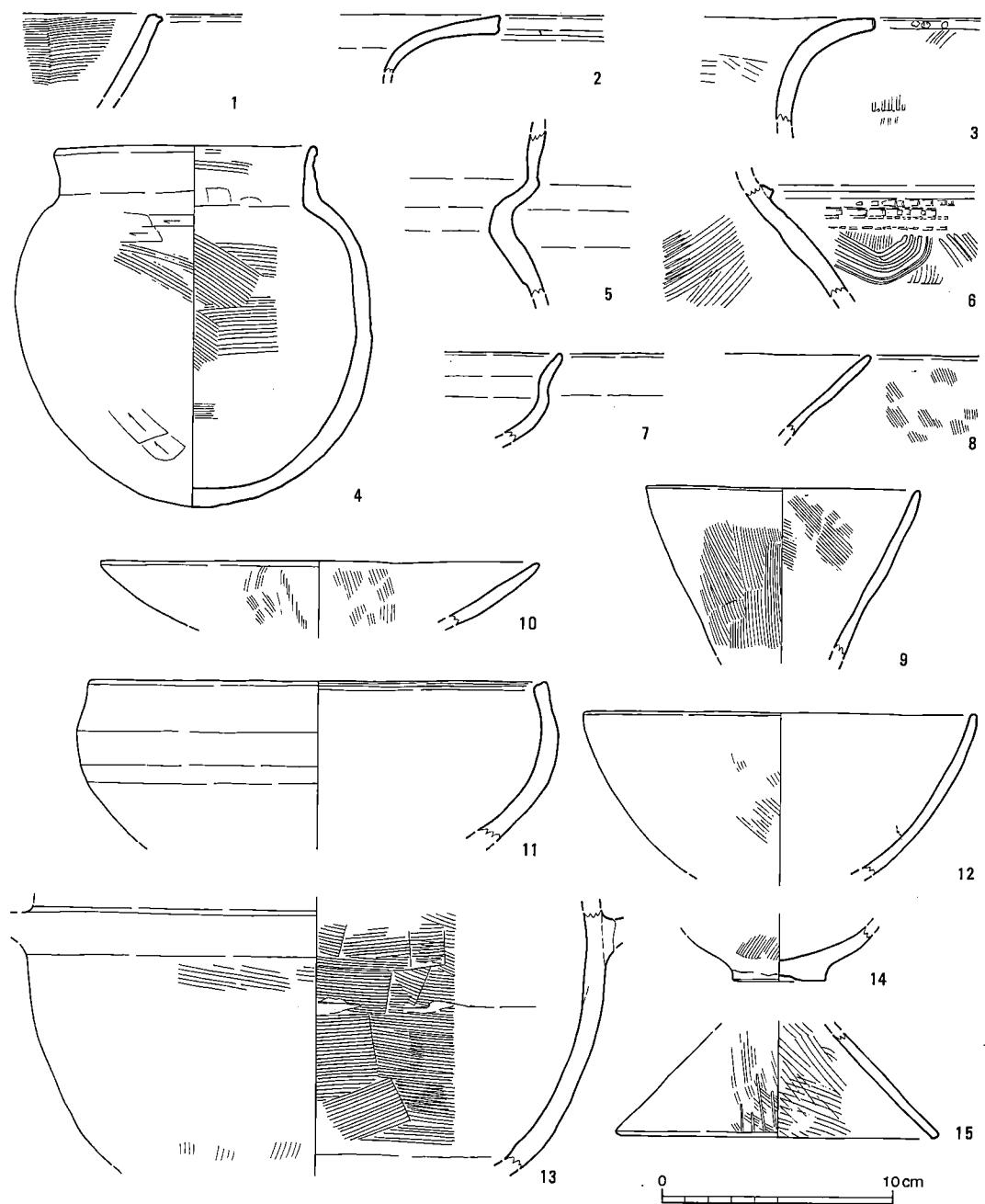
瓦質鉢(26) P101出土品で、口径19.6cmの小型品である。内外面回転ナデで、内面に多くの稜線をつくり出す特徴がある。胎土精良で、内面暗灰褐色、外面は黒~暗褐色をなす。

陶磁器(27~34) 27は、P167出土品で、外面に雷文状の文様を施す青磁碗である。28は、P221出土の青磁碗で、口縁外面に雷文、体部外面にもヘラ先による文様がみられる。29は、表採品で、うぐいす色の青磁碗片である。30は、P75出土品で、灰色の釉をかけた白磁皿である。31はP70出土品で、さっくりした胎土に灰色の釉をかけている。畳付き部分が露胎となっている。李朝青磁碗の粗製品と思われる。32は、底部糸切りの小壺風陶器で、褐色をなす。P96出土品で、胴部内外面回転ナデである。産地等不明。33は、表採品で、復原口径9.6cmの白磁皿である。外面下半は露胎で、淡茶灰色をなし、釉は灰味白色をなす。34は、P7出土の白磁紅皿で、口径4.1cm、器高1.4cmの型押し品である。

土鍋(35~37) 35は瓦質の小型鉢になると思われる。P216出土品で胎土精良、黄味灰色をなす。器表は殆ど磨滅している。36・37は北端谷包含層出土の土師質土鍋である。37の内面と外面下半はナデている。外面には煤がこびりついている。

石鍋(38・39) 38は、P126出土の、粗い雑な滑石製で、内面は平滑、外面には煤がこびりつく。39は、P123出土の滑石製品で、外面には煤が付着している。破棄後に鍔部分に粗雑な切り込みがなされて、何かに再加工しようとしている。

火舎(40~49) 40は、P199出土品で、復原口径37.2cmとなる瓦質品。四菱文をスタンプしており、凸帶下面には沈線を入れている。外面の凸帶以下は丁寧にナデしている。41は、北端谷包含層上層出土品で、菊花文のスタンプを押している。外面は縦方向に磨いている。42は、P65出土品で、小判形のスタンプを2個ずつ間隔をおいて押している。外面の凸帶付近以外は丁寧にナデしている。43は、P116出土品で、逆S字文のスタンプを施している。外面は縦方向に磨いている。44は、北端谷包含層出土品で、凸帶間に四菱のスタンプを2個ずつ施している。45は、梅鉢文を押したものである。P152出土品。46は、胴部径42cmとなるもので、P105出土品。梅鉢文を3個寄せてスタンプしている。外面の凸帶より上は、縦方向の磨きがみられ、凸帶より下はナデた上から縦方向のヘラこすりで暗文風の痕跡がみられる。47は、P199出土品で、5弁の桜花状のスタンプが2個寄せて押されている。外面は磨いている。48もP199出土品で、43とは異なるS字文をスタンプしている。基本的に瓦質であるが、外面がやや土師質っぽくなっている。磨減のため内外面の調整は不明。49は、P55出土品で、脚部分のみである。接合面がうまくはずれしており、本体底部側に格子目の沈線を入れて接合したことがわかる。



第167図 B区各ピット等出土土器実測図（その1）(1/3)

以上その他に、P258から鉄滓1点が出土している。（図版45） $7.5 \times 6 \times 2.5\text{cm}$ で90gのものである。時期は明確にできない。

B区各ピット等出土遺物（第167・168図）

弥生～古墳時代遺物（1～15）

甕（1） 表採品で、やや中ぶくらみし、口唇外端部が突出する布留式土器口縁部である。外面には煤が付着する。

壺（2～6・9・13・14） 2は、B6～10号住居跡北側の包含層出土品で、内面はナデ、外面下半はハケで部分的にナデしている。3と6は、P104出土品で、B1号掘立柱建物の柱穴にあたるため、既にその項で報告済。5は、南側包含層出土品で、口縁が直に立ち上がり、頸部で丸く屈曲する山陰系の布留併行期の二重口縁壺。口頸部内外面は横ナデ、胴部内外面はナデている。外面には煤が付着している。4は、P83出土の短頸壺で、口径11.4cm、器高15.5cm、胴部最大径15.5cmとなる。胴部内面上半はハケ、下半はナデで一部にヘラ削りがみられる。外面には煤が付着している。9は、P94出土の長頸壺で、口がかなり開く。内面上半はハケの上を横ナデし、部分的に縦方向へラ磨きを施す。下半は縦方向のヘラ磨き。13は、P67出土品で、内外面に煤が付着している。外面はハケをナデ消しており、幅広い凸帯は上半が欠けている。14は、B1号住居跡南側の表採品で、中央だけが上げ底となる直径4cmの小さい底部である。内面はナデで、底外面中央のくぼみは削り込んでいる。

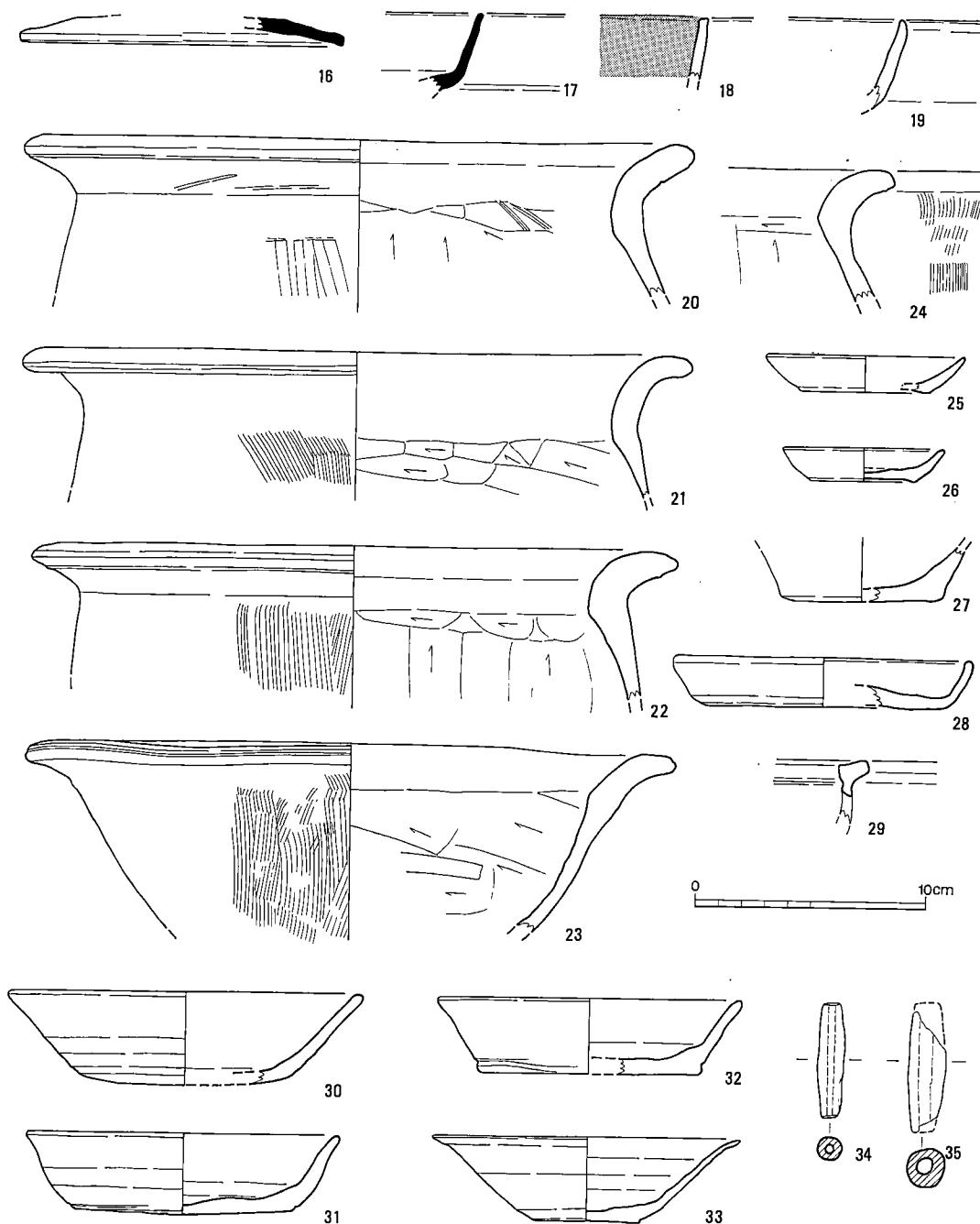
鉢（7・10～12） 7は、P105出土品で、外面下端はヘラ削り、他は横ナデしている。10は、表採品で、内外面ともに細かいハケの上を磨いている。11は、P63出土品で、外面下半ヘラ削り、他面は横ナデを施す。口径19.8cm。12は、畦部分の搅乱層出土品で、復原口径17cmとなる。内面はナデ、外面下半はハケを削りで消している。胎土精良で、口縁には化粧土がかかる。

高杯（8・15） 8は、南側の包含層出土品で、外面はハケの上を磨き、内面は横位のヘラ磨きの上を暗文風の縦方向へラ磨きを施す。胎土精良で、弥生後期末葉頃のもの。15は脚部片で、P8出土品である。脚端径14cmで、外面はハケの上を縦方向に磨いている。胎土精良で小型脚付椀となろう。

歴史時代の遺物（16～35）

蓋（16） 南半包含層出土品で、復原口径13.9cmとなる須恵器杯蓋である。端部はすでに退化してしまっており、天井外面はナデている。

杯（17～19・27・28・30～33） 17は、P3出土の須恵器で、内外面回転ナデ調整。18は、P121出土の内黒土師器椀で、胎土精良、内外面ともに磨いている。19は、底部ヘラ切り土師杯で、包含層出土品。27は、畦の搅乱部出土品で、底部糸切りの土師質焼成品である。特殊な器形になるかもしれない。28は、口径13cmの奈良前半期土師器杯で、底外面はヘラ削りしている。30



第 168 図 B 区各ピット等出土土器実測図（その 2）(1/3)

は、P39出土品で、口径15.4cm、器高4cm、底径9.2cmとなる。底部はヘラ切離し後、ナデしている。31は、P89出土品で、口径13.6cm、器高3.4cm、底径9.7cmとなる。底部糸切りで板目圧痕が付く。32は包含層出土品で、口径13.2cm、器高3.3cm、底径9.8cmとなる。底部糸切りで胎土精良、明橙色をなす。33は、P63出土品で、口径13.3cm、器高3.6cm、底径4.7cmとなる。底部糸切りで15C代のもの。

小皿 (25・26) 25は、P57出土品で、口径8.6cm、器高1.6cm、底径5.6cmとなる。底部糸切りと思われ、13C代のものか。26は、特小皿で、P57出土品。底部糸切りで、14C代のもの。

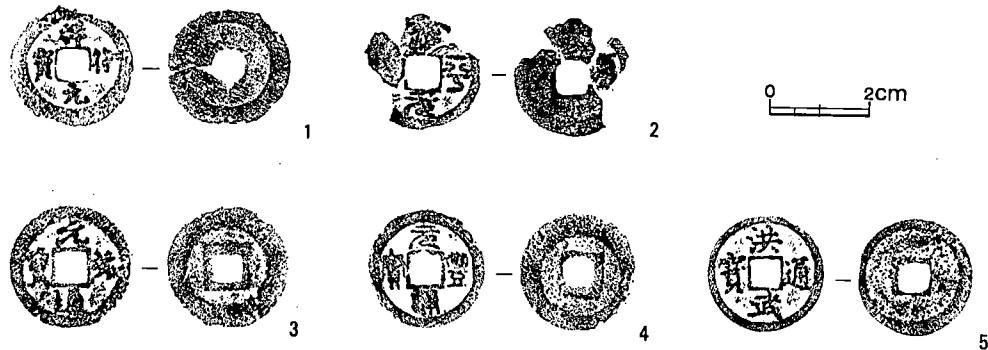
陶器(29) 茶～黒釉の片口の口縁片で、P121出土品である。胎土は精良で灰色をなす。口の切り込み部分にあたっている。産地等不明。

壺(20～24) 20は、P105出土品で、口径29cm。胴部内面ヘラ削り、外面は粗いハケを施す。外面に煤が付着している。21も、P105出土品で口径29cmとなる。22もP105出土品で、口径28cmとなる。23は、P24出土品で、鉢となり、口径28.2cmを測る。外面には煤が付着する。これらは、いずれも奈良初～前葉期のものであろう。

土錐 (34・35) 34は表採品で、長さ4.9cm、最大径1.2cm、孔径3mm、重さ5gとなる。表面に凹凸があり、胎土精良で赤茶色をなす。35は、B6～10号住居跡北側の包含層出土品で、現存長5.2cm、最大径1.7cm、孔径5～6mmとなる。胎土精良で、薄茶～黄味茶色を呈する。

各遺構出土銅錢 (第169図)

ここでは、治部ノ上遺跡の各遺構から出土した銅錢をとりまとめて報告をしておく。1は、直径2.55cmの祥符元寶(宋 真宗1008年)で、A区P187出土品である。2は、直径2.5cmの治平元寶(宋 仁宗1064年)で、A2号土壙出土品である。3は、直径2.5cmの元祐通寶(宋 哲宗1086年)で、A区P1出土品である。4・5も同じP1出土品である。4は、直径2.4cmの元豐通



第169図 治部ノ上A区出土銅錢拓影 (2/3)

寶（宋 神宗1078年）である。5は、直径2.3cmの洪武通寶（明 1368～）である。以上の銅錢の出土状況は、当遺跡の12～16C代の屋敷跡の想定に合致している。

J ま と め

『手向山式土器について』

分布 治部ノ上遺跡内での出土地点からみた分布状況を確認し、集落の想定を行ってみたい。第4図に示した縄文早期遺構・出土地点をみると、最大の出土地点は北端谷であり、その南側の台地のへりにかけて集中部分が認められる。遺跡全体からみると西側の谷に面した縁辺台地上にあたる。次に、遺跡中央南端のA12・28号土壙のあたりから東側のA区東端にかけてが、それ程密ではないが、第2の分布域として認められる。第3は、B区の中央付近で、東側の谷に面した台地のへりと言えよう。

集落の変遷 第2の分布範囲の中ではA12・28号土壙の風倒木痕から粗大な楕円形押型文土器が出土しており、この付近に最初の居住域が想定される。次の手向山I式段階では、北端谷や東側のB2号土壙から出土していることから、この双方へ拡大したものかと思われる。更に、次の手向山II式段階では、北端～西端部に最も集中するが、他の第2・3の分布地区でも拡がり、確実に複数の家からなる2～3集団の居住が想定され、縄文早期での最盛期となる。その後は、若干の新しい様相の土器の散見はあるが、殆ど当遺跡での足跡は消え失せてしまう。数千年の静寂の後、縄文晩期人が登場するまで、この地に留る者は無かった。おそらく、落し穴の存在からみて、獵場となった時期もあっただろうが。

分類 当遺跡出土の手向山式土器を中心とした早・前期の土器を分類してみた。まず、押型文土器単純段階の最終末のものとして、粗大な縦位楕円形押型文を施すもの。次に、手向山式土器の壺。更に、手向山式土器の深鉢形のものを2型式に分けた。鹿児島県姶良郡横川町星塚遺跡（註1）でIII類として縦位山形押型文土器が報告されているが、口縁外面に凸帯（隆帯）を持つものや、頸部外面に凹線幾何学文を施す類が出土しておらず、この種を一つの型式として認定して良いと判断した。星塚遺跡は、地域的にも手向山式土器分布範囲の中でも集中地域にあり、地域性によるものではなく、時期の差であると考えた。よって、以下に示すごとくI・II式と分類することにした。時期的には、隆帯文、凹線幾何学文、刺突文等の他の文様要素が、

第1表 手向山式土器各部位の文様組合せ(その1)

< I 式口縁部 >

類	口縁内面	口唇刻目	口縁下凸帯	頸部文様	屈曲部凸帯	胴下半文様	底部	出土点数
a	山形	×	×	縦山形	—	—	—	2
a	山形	—	×	縦山形	—	—	—	2 } 4
b	×	横山形	×	縦山形	—	—	—	1 } 2
b	×	×	×	縦山形	—	—	—	1 } 2
—	—	—	—	縦山形	—	—	—	2
								小計 8

<第1～6表の凡例> ○：有り， ×：無し， —：欠損して不明， 山形：山形押型文

後から入ってきて混合したと考えて、I式を古、II式を新段階のものと理解している。以下に、各型式毎に、当遺跡での出土状況を分析しておきたい。

押型文土器 ここでは、手向山式土器に施文された押型文を除き、まだ前段階からの押型文単純期の様相を残した最終段階のものについて述べる。A区12・28号土壙に集中しており、粗大な縦位楕円形押型文で、器壁も1.2cm前後と部厚く、明らかに後出する手向山I式とは異なる。楕円文の最大のものの長径は1.7cmもあり、他部位でも1cmを超えており。口縁内面に撚糸文を施すものもあり、手向山式のような混合文化への萌芽を示しているようである。この期の出土量は少く、10点程であり、手向山I・II式の合計223点に比べれば、微々たるものである。型式としては確実に示し得ないが、器形は、大分県下背生B遺跡(註2)出土の粗大な楕円形押型文土器を施し胴部中途に屈曲部を持ち口縁が外反する形状は参考になろう。この土器は手向山式土器の器形へと繰がる接点を示すものとして重要である。

手向山式壺 近年、南九州においてこの器種の出土例を多く聞くに及んで、手向山式土器の多様性と、この文化を荷負った人々の発想の豊かさにただただ驚嘆するばかりである。本遺跡では、破片ばかりで、全体の器形のわかるものはないが、計13点出土している。口頸部がやや内傾する直口壺状の器種の出土は貴重である。ただ、その他は長い頸を持つ類のようで、縦位山形押型文を地文としており、頸～肩部に凸帯を付けるものもある。底部は、小さな凸レンズ状にふくらむ不安定なもので、安定した上げ底の深鉢形土器と比べて、明らかに用途の違いを意図した作りとなっている。また、山形押型文は、極めて粗大なものがみられ、I式深鉢にみられる状況と同じである。この視点から、壺もI式の段階で既に発生していたと考えることも可能であろう。この場合、I式に併行するものは長頸のものとなりそうである。さらに、丹塗りのものの出土も重要で、壺形土器そのものが当初から特殊な用途を荷負って発生したものであることを示唆してくれる。

第2表 手向山式土器各部位の文様組合せ（その2）

<II式口縁部>

類	口縁内面	口唇刻目	口縁下凸帯	頸部文様	屈曲部凸帯	胴下半文様	底部	出土点数
1	山形	×	1条刻目	縦山形	—	—	—	1
1	山形	—	—	縦山形	—	—	—	1
1	山形	—	1条刻目	縦山形	—	—	—	3
2-a	山形	山形	1条刻目	幾何学凹線	—	—	—	1
2-a	山形	○	1条刻目	幾何学凹線	—	—	—	2
2-a	山形	—	1条刻目	幾何学凹線	—	—	—	2
2-a	山形	×	1条刻目	幾何学凹線	—	—	—	1
2-a	山形	—	2条刻目	幾何学凹線	—	—	—	1
-a	山形	○	1条刻目	—	—	—	—	3
-a	山形	○	3条刻目	—	—	—	—	1
-a	山形	×	1条刻目	—	—	—	—	2
2-a'	撚糸文	○	1条刻目	幾何学凹線	—	—	—	1
2-b	×	○	1条刻目	幾何学凹線	—	—	—	6
2-b	×	○	3条刻目	幾何学凹線	—	—	—	1
2-	—	—	1条刻目	幾何学凹線	—	—	—	13
2-	—	—	2条刻目	幾何学凹線	—	—	—	3
2'-b	×	○	1条刻目	凹線と竹管	—	—	—	1
2'-	—	—	1条刻目	凹線と刺突	—	—	—	1
3-b	×	○	1条刻目	網目撚糸文	—	—	—	1
3	—	—	1条刻目	縦撚糸文	—	—	—	1
-b	×	○	1条刻目	—	—	—	—	4
-b	×	○	2条刻目	—	—	—	—	2
-b	×	×	1条刻目	—	—	—	—	1
—	—	—	1条刻目	—	—	—	—	1
—	—	—	2条刻目	—	—	—	—	2
-b	×	×	3条刻目	—	—	—	—	1
—	—	—	3条刻目	—	—	—	—	1
								小計57

第3表 手向山式土器各部位の文様組合せ（その3）

<II式 頸部～屈曲部>

類	口縁内面	口唇刻目	口縁下凸帯	頸部文様	屈曲部凸帯	胴下半文様	底部	出土点数
2-	—	—	—	幾何学凹線	1条刻目	縦山形	—	1
2-	—	—	—	幾何学凹線	1条刻目	—	—	2
2-	—	—	—	幾何学凹線	×	縦山形	—	1
2-	—	—	—	幾何学凹線	—	—	—	61
2'-	—	—	—	凹線と刺突	—	—	—	10
2'-	—	—	—	凹線と縦凸帯	—	—	—	1
1	—	—	—	縦山形	1条刻目	—	—	1
1	—	—	—	縦山形	—	—	—	6
3	—	—	—	縦撚糸文	1条刻目	—	—	1
4	—	—	—	縦凸帯と刺突	—	—	—	1
5	—	—	—	繩文	—	—	—	1
								小計86

第4表 手向山式土器各部位の文様組合せ（その4）

<I・II式 胴部下半>

類	口縁内面	口唇刻目	口縁下凸帯	頸部文様	屈曲部凸帯	胴下半文様	底部	出土点数
IIか	—	—	—	—	1条刻目	縦山形	—	2
	—	—	—	—	×	縦山形	—	1
	—	—	—	—	—	縦山形	—	46
II	—	—	—	—	横撚糸	縦撚糸	—	2
II	—	—	—	—	—	縦撚糸	—	4
II	—	—	—	—	—	繩文	—	2
II	—	—	—	—	—	縦沈線	—	1
	—	—	—	—	縦山形	—	—	1
								小計59

手向山I式 手向山式土器をI式とII式に分けた根拠については、先に述べた。本遺跡では、口縁～頸部のI式と確実に判別できるものが8点出土した。うち、口縁内面に山形押型文を施すa類が4点、施さないb類が2点ある。これは、押型文文化の流れの中で、口縁内面上端に短

第5表 手向山式土器各部位の文様組合せ（その5）

〈壺形土器〉

類	口縁内面	口唇刻目	口縁下凸帯	頸部文様	屈曲部凸帯	胴部文様	底部	出土点数
	×	×	×	横→縦の山形	—	—	—	1
	—	—	—	縦沈線	1条刻目	縦山形	—	1
	—	—	—	縦山形	—	—	—	4
	—	—	—	横山形	×	—	—	2
	—	—	—	—	連点2段	縦山形	—	1
	—	—	—	—	—	縦山形	丸底	1
	—	—	—	—	—	横山形	—	2
	—	—	—	—	—	丹塗	—	1
								小計13
第1～5表の合計 223点								

第6表 その他の型式土器各部位の文様組合せ

類	口縁内面	口唇刻目	口縁下凸帯	頸部文様	屈曲部凸帯	胴下半文様	底部	出土点数
縦沈線	○	×		平行条痕 +刺突連点文	—	—	—	2
×	○	×		平行沈線	—	—	—	1
×	○	×		刺突連点2条	—	—	—	1
×	×	×		曲線沈線	—	—	—	1
×	×		隆起線状	縄文	—	—	—	1 平椿系か
横条痕	×	×		横条痕+縦沈線	—	—	—	2 蘿系か
								小計8

沈線や押型文を施す伝統をいまだ堅持していることを示しており、この傾向は、II式や、他の型式へも受けつがれており、永々と続いた習俗への固執の強さを感じさせる。口縁端は角ばっており、丁寧なつくりである。器壁も6～8mmと薄手で、本遺跡で出土した粗大な楕円形押型文の土器とは明らかに一線を引ける程に異っている。外面は縦位山形押型文で、粗大で変形したものもある。口縁下外面に凸帯を持たないのが特色である。胴中位の屈曲部や下半～底部のものでI式の口縁と接合するものが無いので確実ではないが、おそらく、胴下半も縦位山形押型文を施すと考えられる。その点から、第4表に示した胴下半縦山形類の49点のうちのかなりの数がこのI式のものである可能性を持っている。器形としては、鹿児島県姶良郡溝辺町木佐

第7表 手向山式土器各部位の文様組合せ（その6）

〈II式各部の総計点数〉

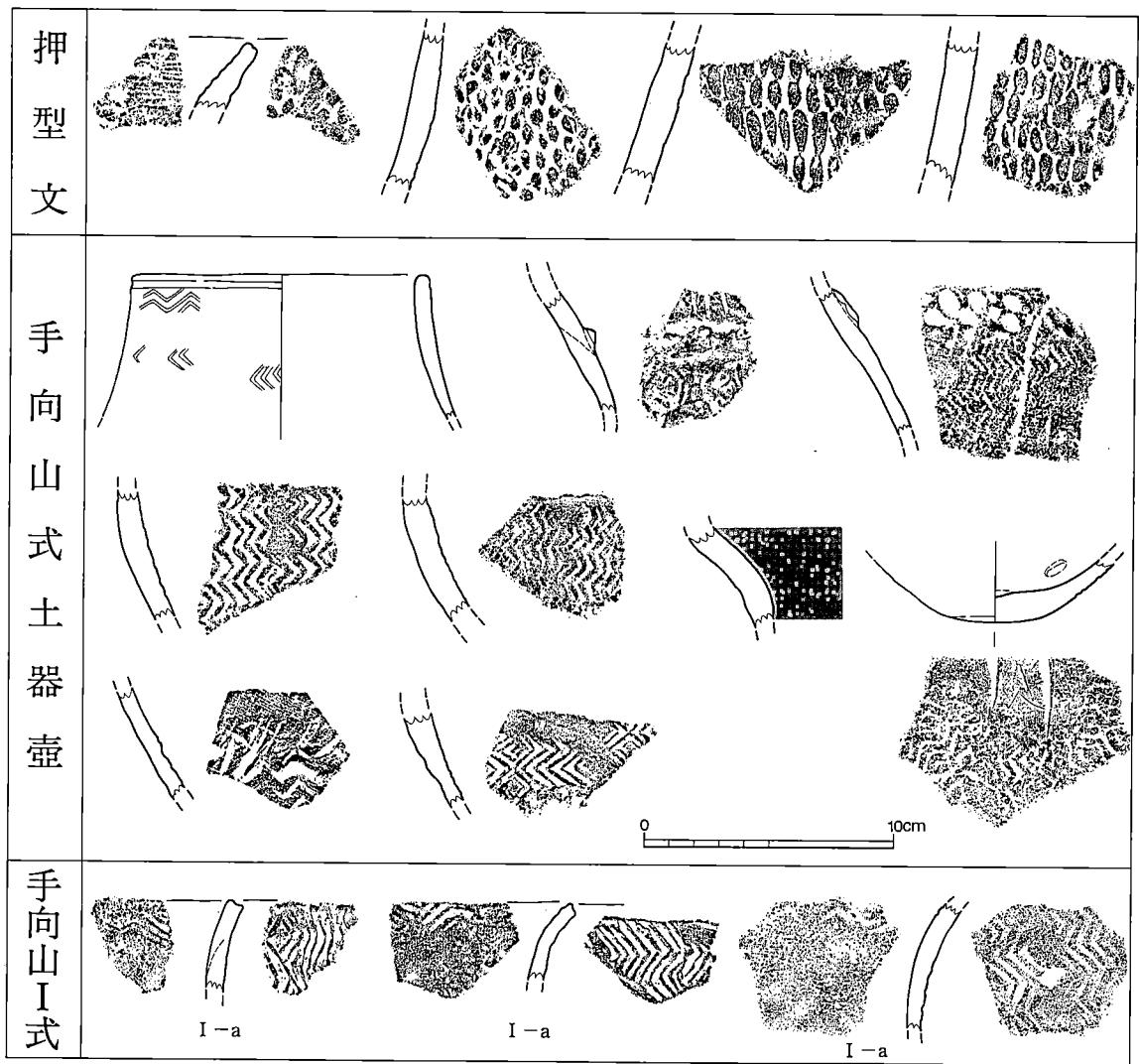
口縁内面	口唇刻目	口縁下凸帯	頸部文様	屈曲部凸帯	胴下半文様	底部
× 17 (52%)	○ 22 (76%)	1条刻目 45 (79%)	幾何学凹線(2類) 95 (77%)	1条刻目 7 (64%)	縦山形 51 (85%)	—
山形 15 (45%)	×	2条刻目 8 (14%)	凹線と刺突(2類) 13 (10%)	横撚糸 2 (18%)	縦撚糸 6 (10%)	
撚糸 1 (3%)	山形 1 (3%)	3条刻目 4 (7%)	縦山形(1類) 11 (9%)	縦山形 1 (9%)	縄文 2 (3%)	
			撚糸(3類) 3 (2%)	×	縦沈線 1 (2%)	
			縦凸帯と刺突(4類) 1 (1%)			
			縄文(5類) 1 (1%)	* I式を含む可 能性あり	* I式をかなり含 む可能性あり	
(100%) 33	(100%) 29	(100%) 57	(100%) 124	(100%) 11	(100%) 60	0

×：文様無し，○：刻目あり，山形：山形押型文，刺突：刺突文・凹点文・竹管文

貫原遺跡（註3）第1地点第V層出土の土器が参考になろう。この手向山I式土器に該当するのは、上記の鹿児島県星塚遺跡のIIIf・IIIh類、木佐貫原遺跡第V層第1地点出土の口～胴下半まで縦位山形押型文を施した土器、大分県下菅生B遺跡V1～V2層出土の外面に間のびした縦位山形押型文を施した深鉢、鹿児島県姶良郡横川町中尾田遺跡第9e類（註4）などが、良好な器形のわかる資料として、標式となる。

手向山II式 本遺跡で最も多く、胴下半片のII式の可能性のあるものまで入れて154点出土している。文様の組合せも複雑でなかなか整理できない雑多な様相を持っている。最大の特徴は、所謂手向山式土器の器形と口縁外面直下の凸帯の存在である。胴屈曲部から上の文様の多彩さは目をうばわんばかりである。以下第2～4表と第7表に従って、各部位毎に文様構成を分析してみたい。

口縁内面は、山形押型文を横位に施すものと何も施文しないものとが略半々で、横位撚糸文を施すものが1点みられる。口～頸部がつながるもので判断する限り、口縁内面が無文のものには、頸部外面に山形押型文を施すものは無いということがわかる。つまり、山形押型文は頸部外面に幾何学凹線文やその他の新しい文様が施されるようになっても、口縁内面と、胴部外面下半に残るが、その習俗だけが最後まで残ったと考えることができる。口縁内面に山形押型

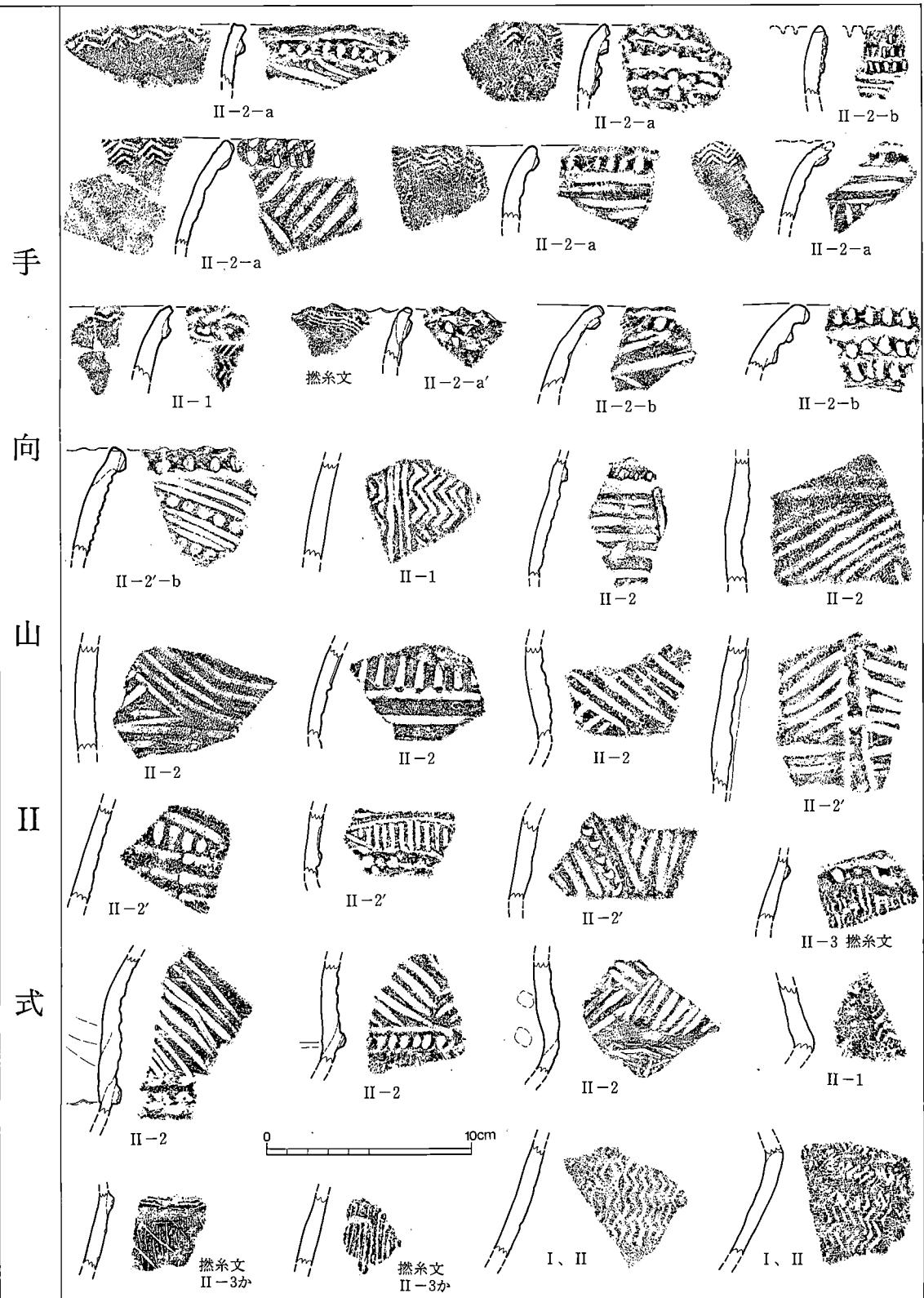


第170図 治部ノ上遺跡出土縄文早・前期土器の分類（その1）(1/3)

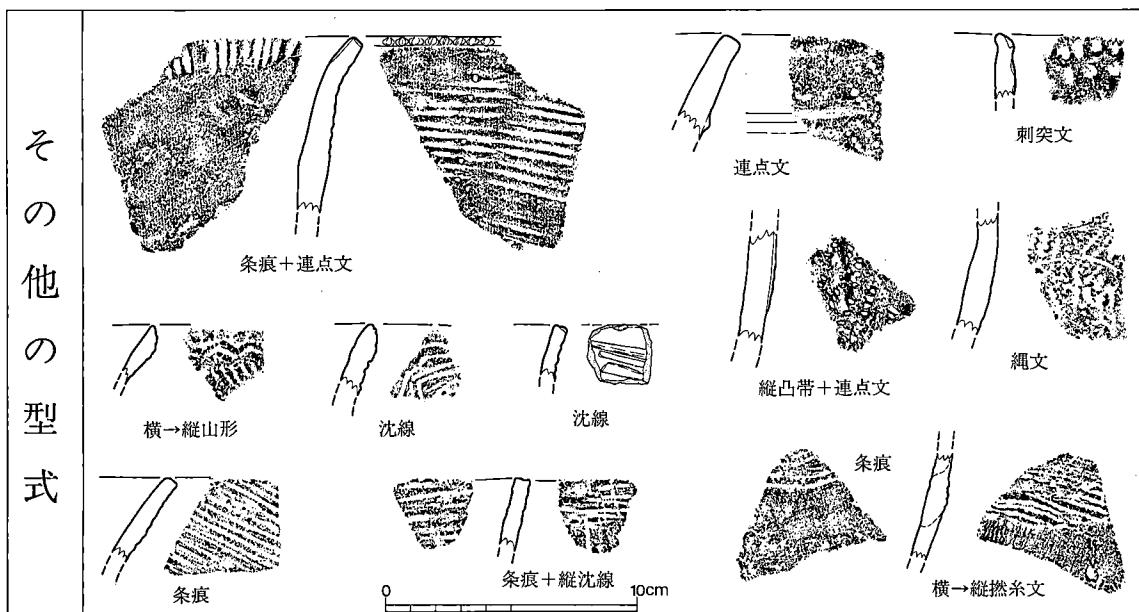
文を施さなくなった時点が、連綿と続いた押型文文化の最期なのであった。

口唇部の刻目は、8割近く施されており、明らかに施していないものが2割である。口唇面に山形押型文を施したものも1点ある。この刻目の有無は、他の部位の施文状況との相関関係は無さそうである。棒状の工具をやや斜めに押圧したものが大部分であるが、上方からの刺突文もいくらかみられる。

口縁外面直下の凸帯は、この手向山II式の大きな特徴である。8割が1条であるが、2条、3条のものもみられる。この凸帯の数によって他の部位の文様との相関は見出せない。凸帯



第 171 図 治部ノ上遺跡出土繩文早・前期土器の分類（その 2）(1/3)



第172図 治部ノ上遺跡出土縄文早・前期土器の分類（その3）(1/3)

に施された刻目も各種あり、鉛筆よりやや細めの棒の押圧が最も多い。指頭と思われる大きいものや、円形刺突文、細い箇で直真に密に施したものなどもみられる。

頸部外面、つまり凸帯下から屈曲部までの間は、最大のキャンバスとなっており、土器製作者の腕の見せどころであったろう。類似パターンは見出せても、同じ画面構成はまず無いと思われる程、多様性に満ちている。この頸部の文様施文法によって、手向山II式を分類することができると確信して、次のように分けた。1類は、I式から引き続き行われた縦位山形押型文である。これが1割程度みられる。2類は、8割近くを占める幾何学凹線文である。これは斜位の平行凹線を組み合わせるもので、横位の数条の凹線を上・下に配置してその間に斜位凹線を組み合わせることが多いようである。凹線の太さも、指先の太いものから箇沈線状の細いものまである。また、縦位凸帯の両側に綾杉状に斜位凹線を施すものもある。さらに、部分的に曲線となる施文法もみられる。次に2'類としたのは、2類の凹線文と刺突連点文・竹管文・半裁竹管文・凹点文等を組み合わせた文様構成のものを指す。これは気まぐれに後から刺突文等を追加施文したものではなく、当初から計画的に文様構成の中に組み込まれているものである。この類は、1割みられる。3類は、撚糸文を施すもので、わずか3例みられる。撚糸文は数こそ少いが、口縁内面・屈曲部外面凸帯上・胴下半部の各部位にそれぞれ少數の例がみられ、次型式以降へと継がる重要な文様要素として無視できないものがある。また、網目撚糸文が1例みられ、注目される。4類は、縦方向の凸帯周辺に斜位の刺突連点文を配するものである。1

点のみであるが、カーブの状況等から、手向山式以外の異型式である可能性もある。5類は、縄文を施した1点であるが、これも平格式等の他型式である可能性もぬぐえない。

以上の頸部の文様で分けた手向山II式の分類は、圧倒的に2類の幾何学凹線文が多いものの、1類の山形押型文の頸部での消滅と、他の刺突文類や撚糸文等の施文法の多様性を示している。つまり、私見による型式学的変遷は、I式→II-1類→II-2-a類→II-2-b・II-3類となるわけで、頸部文様が大きな要素と考えている。もちろん、この変遷は理論上のもので、今回はII式の中での時期差を証明する材料は持っていないので、とりあえず、II式の中は同時期としておく。

屈曲部外面の稜の部分については、資料数が11例しか無いが、凸帯を1条付け、刻目を施すものが多く、横位の撚糸文を施すものが2例、縦位の山形押型文を施すもの1例、施文無しが1例ある。ただし、縦位山形の1例はI式となる可能性もある。また、撚糸文を施すものうち1例は、凸带上ではなく、不明瞭な屈曲付近に施したもので、他型式土器の可能性も強い。分類図では他型式の欄に掲載した。

胴下半部の文様は、頸部外面のような主たる文様帯をなすものではなく、文様を施すという意識すら薄れているのではないかと思えるほどマイナーな部分となっている。施文法は、縦位山形押型文が85%と大半を占めており、他は縦位撚糸文が10%，縄文が2例、縦沈線が1例となっている。後2者は手向山II式のものであるか疑わしい。さらに、山形押型文のうちのかなりが、I式のものである可能性がある。ただし、第3表に見る如く、確実にII-2類のものの胴下半に山形押型文を施すものが2例あり、量の多さからみても、II-2類も大部分が胴下半に押型文を施していると思われる。

底部については、I・II式に伴うものが1点も出土していないので不思議な気がするが、事実だから仕方がない。おそらく、他遺跡の手向山式土器にみられるような、直径が大きく、全体が上げ底状になる安定したものとなるのだろう。

手向山I・II式文化 土器文化からみた社会状況の把握を試みてみよう。押型文単純期の土器の器種は不安定な尖底、丸底の押型文土器の他に無文の粗製土器が少量知られるのみである。基本的には、单一器種の時代と言っていいだろう。押型文土器の外面に埋めつくされた施文を見ると、いかにも空閑を嫌うかのようである。しかし、近くで見るとおどろおどろしい程の執念と、強い規制に裏付けられた単調な押型文土器も、少し離れてみると、意外と素朴な、何の興感も沸かせない生活臭しか感じない土器に見えてくる。

これに対して、手向山式土器は、壺という新しい器種の登場に加え、器形・器面装飾という点でも、華やかなものがある。また、安定した底を持つということは、押型文時代とは正反対に、土器とはそこに置いておくものだという基本的な土器の用途・機能に対する発想の転換があったことを裏付ける。器形の優美性、器面装飾が「見せる土器」へと、がらりと180°機能転

換したことを示している。そこに社会の大きな変革を見ないわけにはいかない。

まだ山形押型文のみの施文であった手向山I式期に対して、手向山II式期になると、凸帯(隆帯)文、凹線文、刺突文、撚糸文等の組合せが加わってくる。これらの施文法の個々の系統論については、諸先学の検討があり、また、凸帯文以外については現状においてあまりにも不明確な点が多いので、憶測は避けたいが、いずれにしろ、この期における創造性についてはきちんと評価すべきであろう。土器製作者個人の創作意欲というよりも、南九州から大分・福岡まで間違なくほぼ同一型式が分布するということは、手向山II式社会全体における風潮・規制の中で育ったと解すべきであろう。その社会は、その前段階では間違なく押型文文化の範囲の中に入っていたものであり、それからの発展ということをまず第一に考えるべきであろう。手向山II式で突如発生し、圧倒的割合で受容された幾何学凹線文については、太さはかなりばらつきはあるが、押型文原体の棒端で施文したとすれば、全く別個の工具による必要もない。同様のことが、口唇部上面の棒押圧刻目、凸帯上の棒押圧刻目、円形凹点状の刺突文、三日月形にみえる刺突連点文などにも考えられよう。撚糸文についても、押型文原体の日常からの使用があれば当然に創意でき得るものである。以上のように、押型文原体1本からの工夫で、手向山II式の文様の施文法の発生は説明できる。押型文文化の社会規制が崩れかかってきた時に、いち早くその枠の中であがいて一步前進した進歩的集団が、手向山文化社会であった。それが実態に近い評価ではなかろうか。従来あった、単なる吹きだまり文化、山岳民の特殊様相といった手向山式土器文化に対する評価は適切ではないと思われる。

手向山文化に対して、土器文様の観点から光をあてようと苦心してみたが、残る問題も山積している。集落・墓制等の各遺構については、これ程開発が進む世の中であれば、近い将来に見通しが立てられるであろう。壺の発生の解明も出土状況等の蓄積で、少しはわかってくるかもしれない。文様施文具については上記に私案を提示したが、その文様構成については、今のところその系譜について見当がつかない。この後の丁寧な横位貝殻条痕文については、手向山II式の平行凹線の作業を省力・均正化する意味での工具の変換が原因となっているのではないかと思われる。また、凸帯の由来についても明確にできない。いずれにしろ、今後に残された若者の課題である。

(文責 中間研志 1994年2月8日脱稿)

註1) 鹿児島県立埋蔵文化財センター「星塚遺跡」鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(7)

1993

2) 竹田市教育委員会「下脅生B遺跡」「脅生台地と周辺の遺跡」1986

3) 鹿児島県教育委員会「木佐貫原遺跡」九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財報告書 III 1979

4) 鹿児島県教育委員会「中尾田遺跡」鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(15) 1981

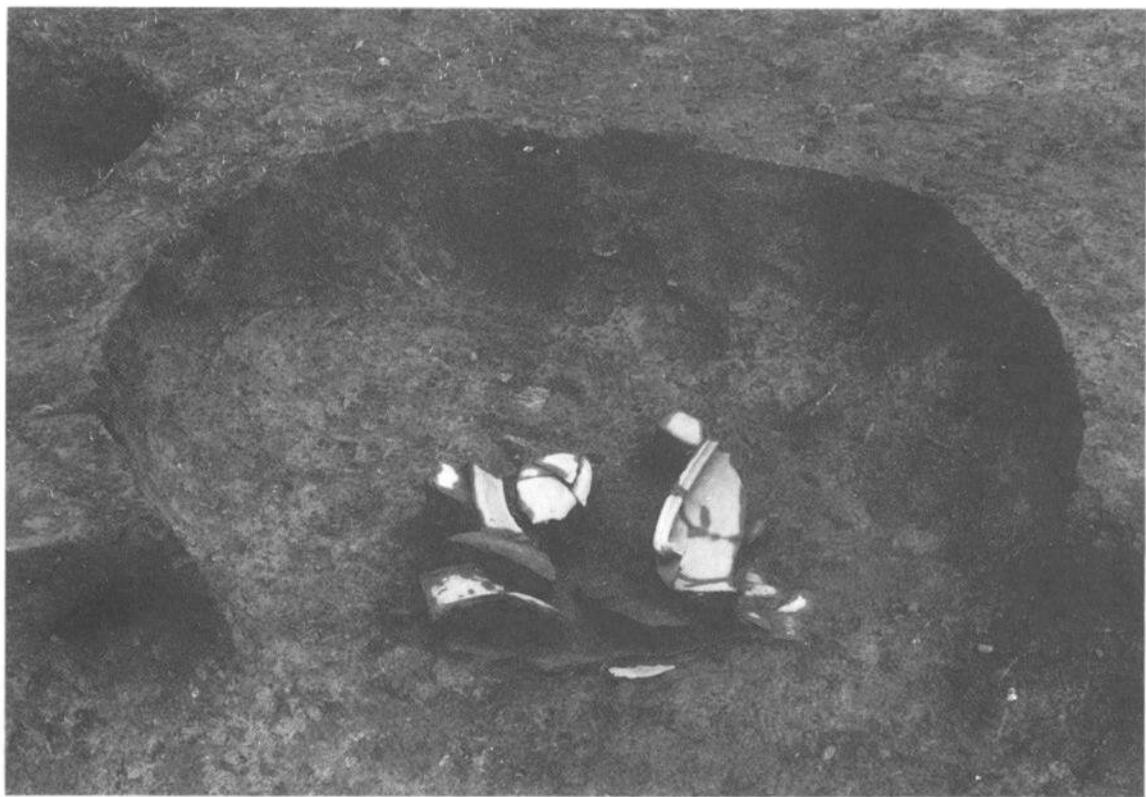
図 版



治部ノ上遺跡全景（北から）



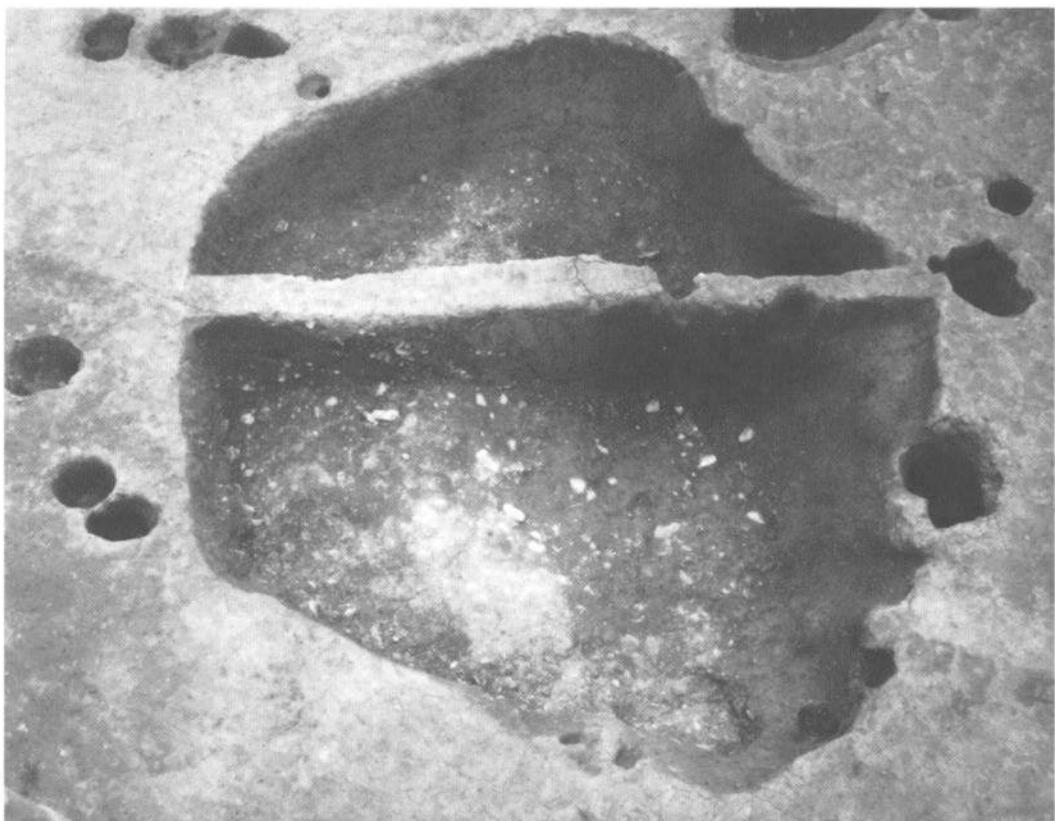
(1) 治部ノ上遺跡A区上空から東南方向のB区・座禅寺遺跡を望む
(2) B区全景（上空から）



(1) A 1 号土壤 (南東から)



(2) A 1 号土壤土器出土状態 (北東から)



(1)



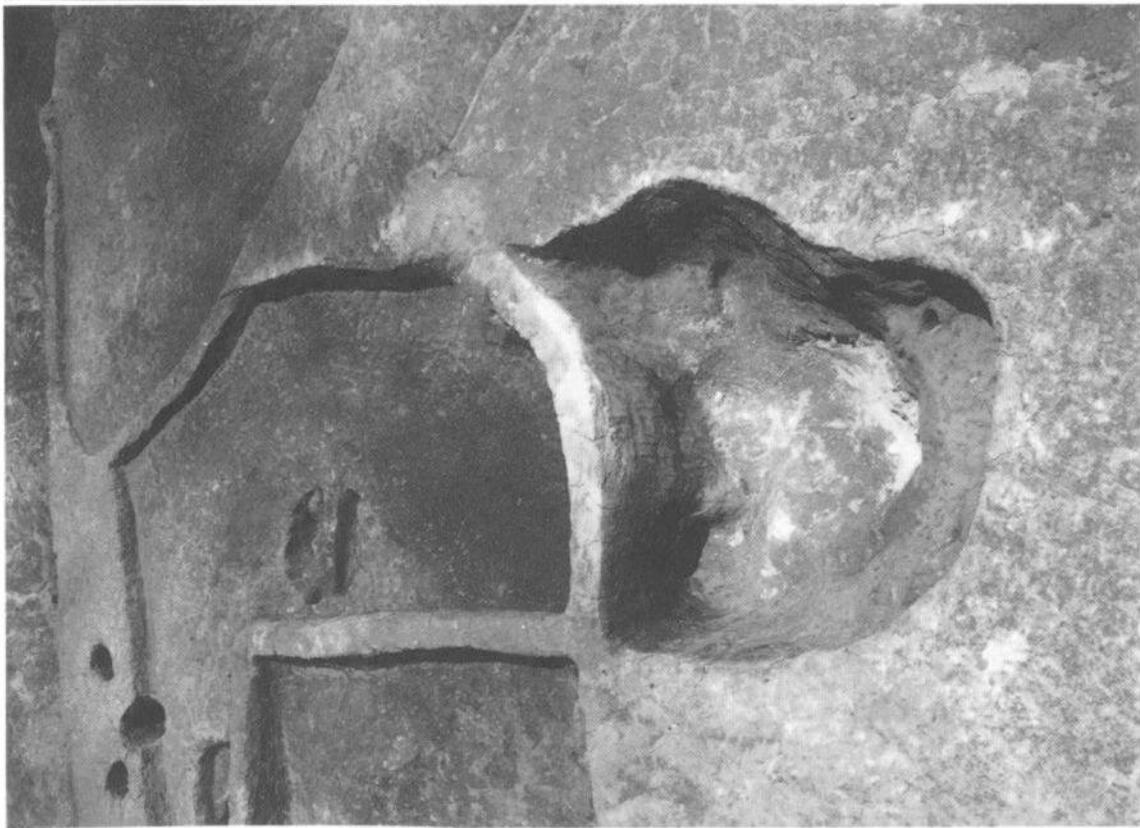
(2)

(1) A11号土壤（東から）

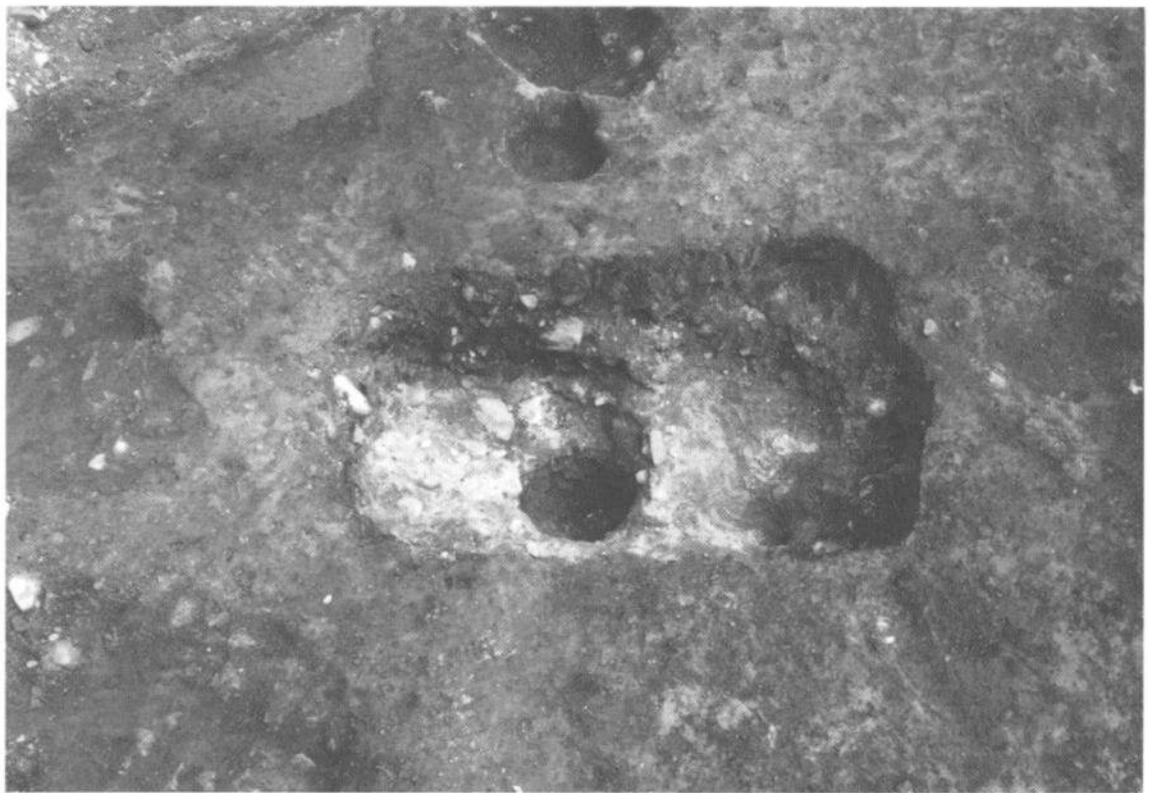
(2) A11号土壤土層断面（東から）



(1) A12号土壤 (東から)



(2) A17号土壤 (南から)



(1) A44号土壤（北西から）



(2) B1号土壤（西から）



(1) B 2 号土壤 (北西から)



(2) A区北端谷縄文早期包含層断面 (南西から)



(1) A 1号住居跡（西から）



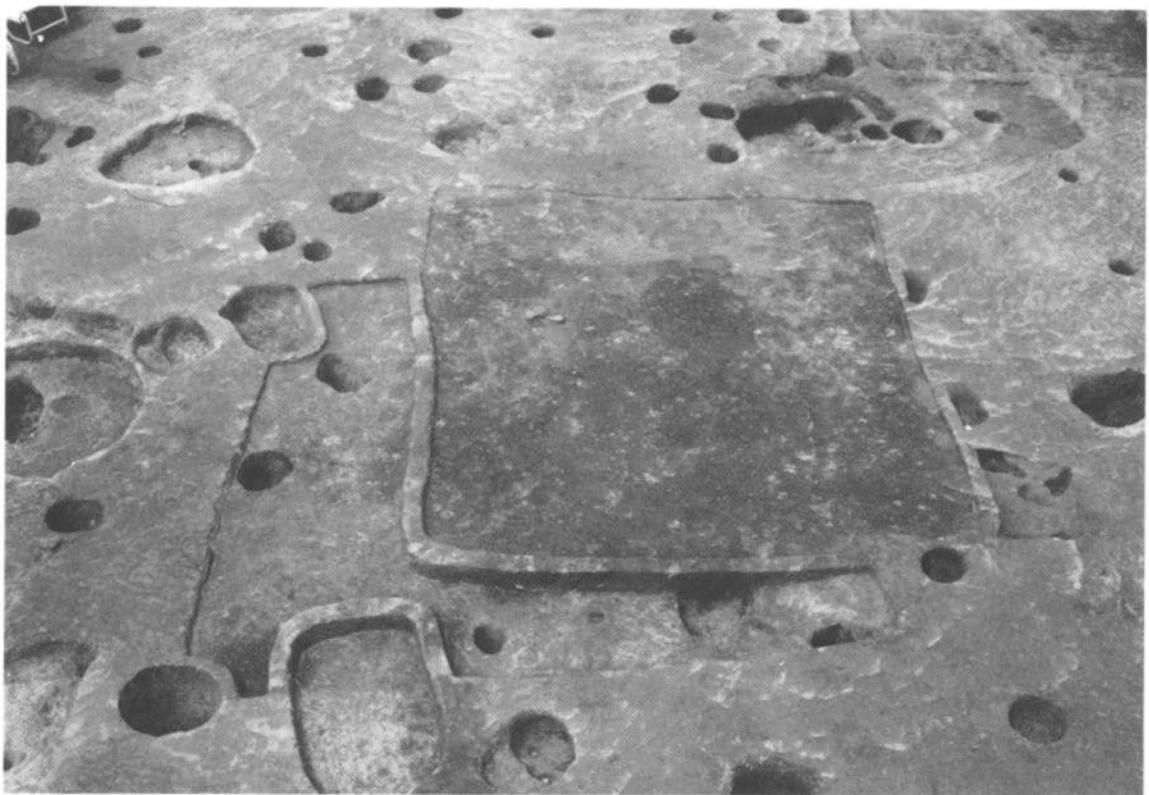
(2) A 2号住居跡（南から）



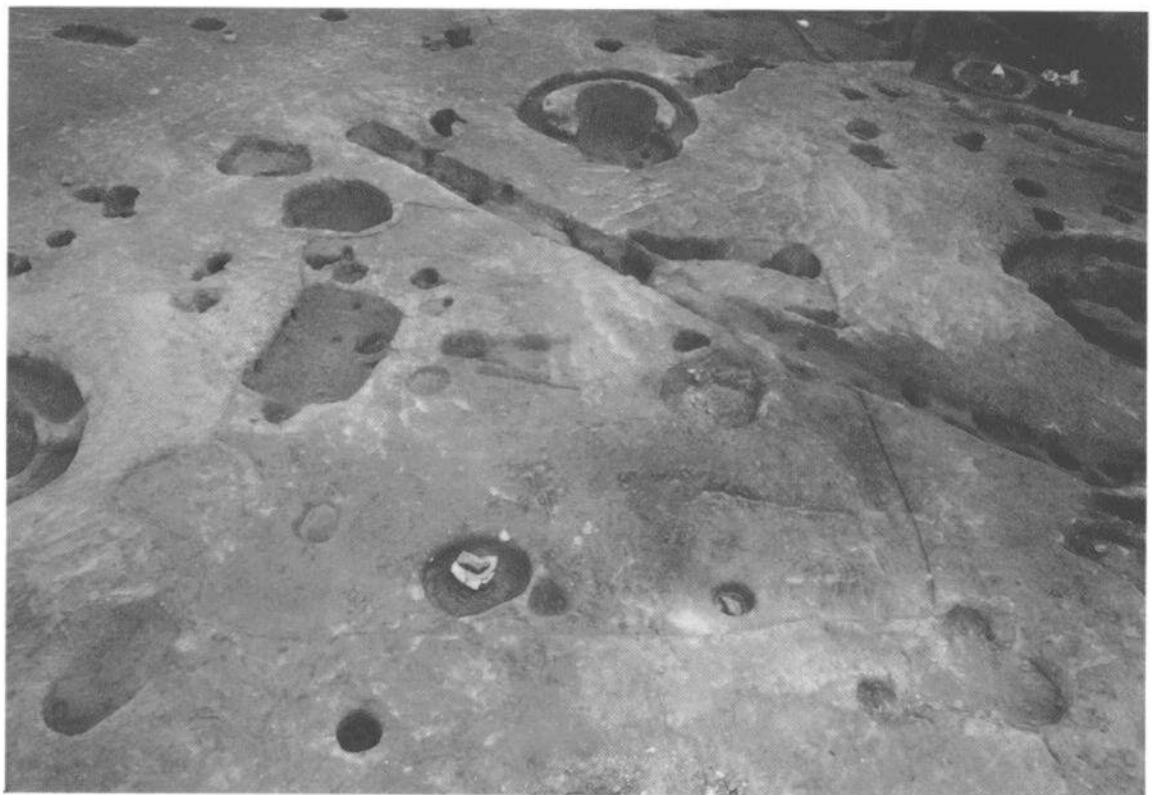
(1) A 2号住居跡土器出土状態



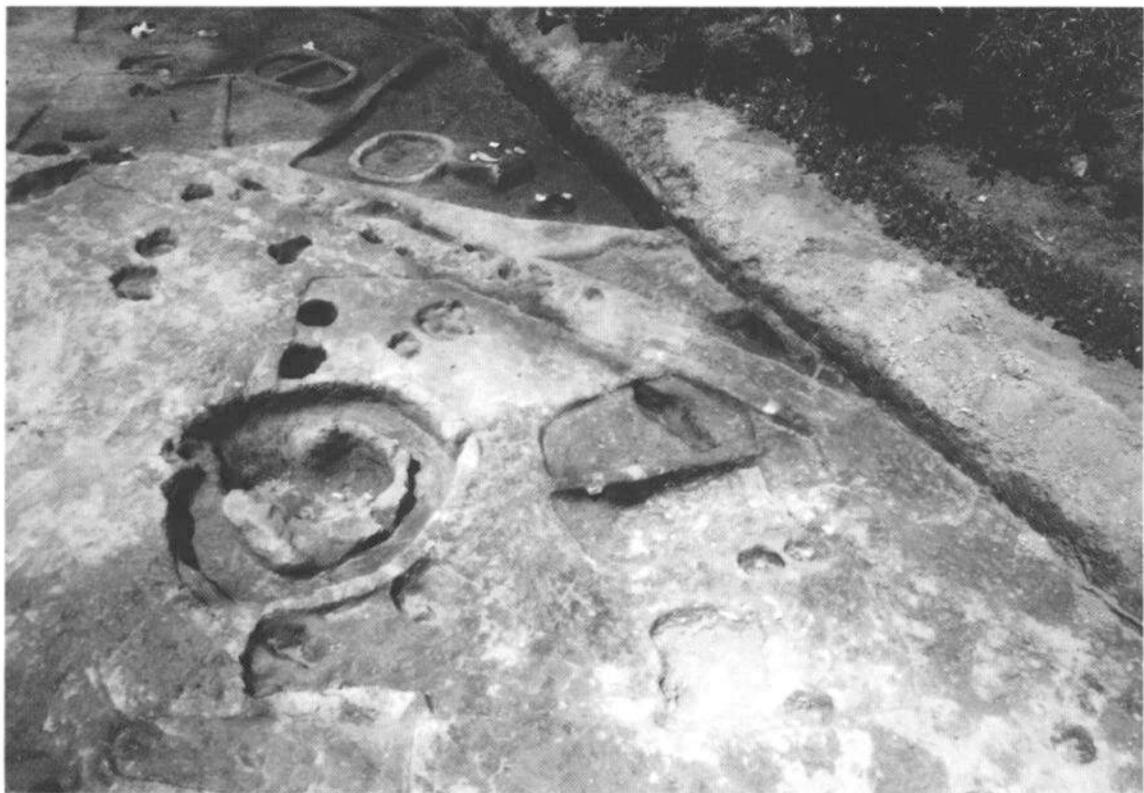
(2) A 4号住居跡（南西から）



(1) A5・6号住居跡, A16号土壤(南から)



(2) A7号住居跡, A14号土壤(南から)



(1) A8・9号住居跡（南から）



(2) A10・11・17号住居跡（南西から）



(1) A12・15号住居跡, A17号土壤 (南から)



(2) A13号住居跡 (東から)



(1) B区北半遺構全景（南から）

(2) B 1号住居跡（西から）



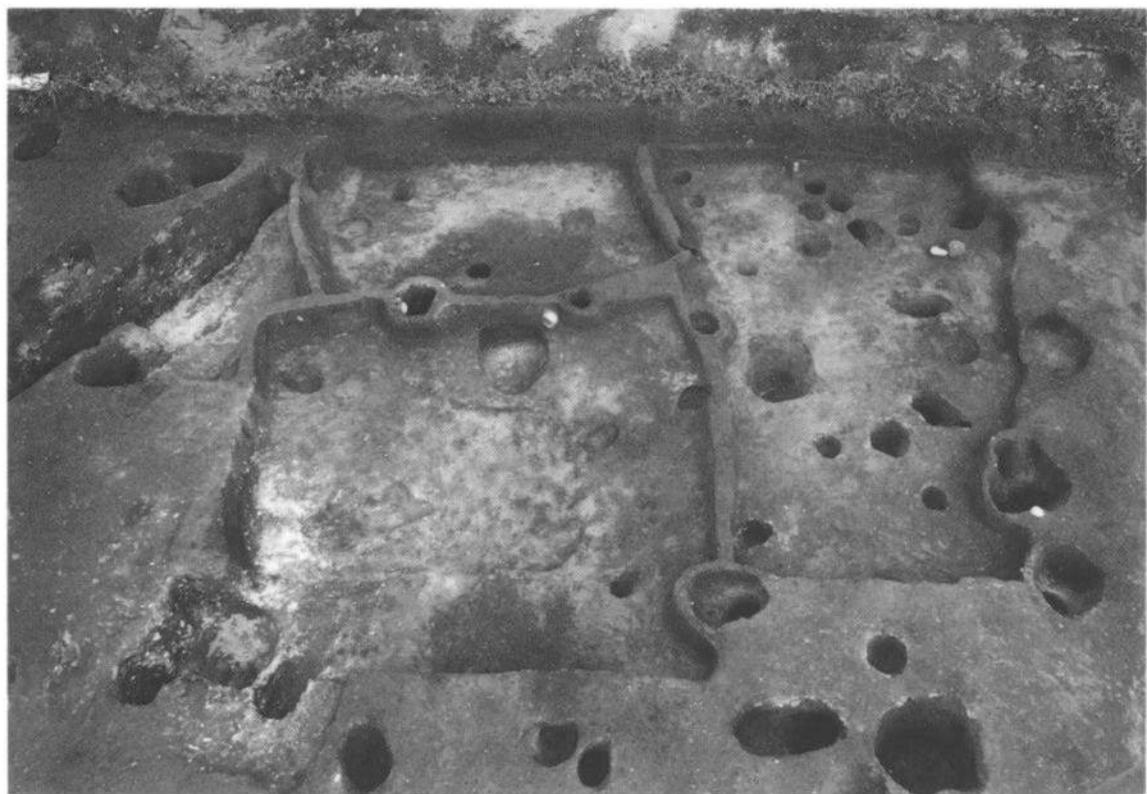
(1) B 1 号住居跡完掘後（南から）



(2) B 2 ~ 4 号住居跡, B 1 号掘立柱建物, B 6 号溝（上空から）



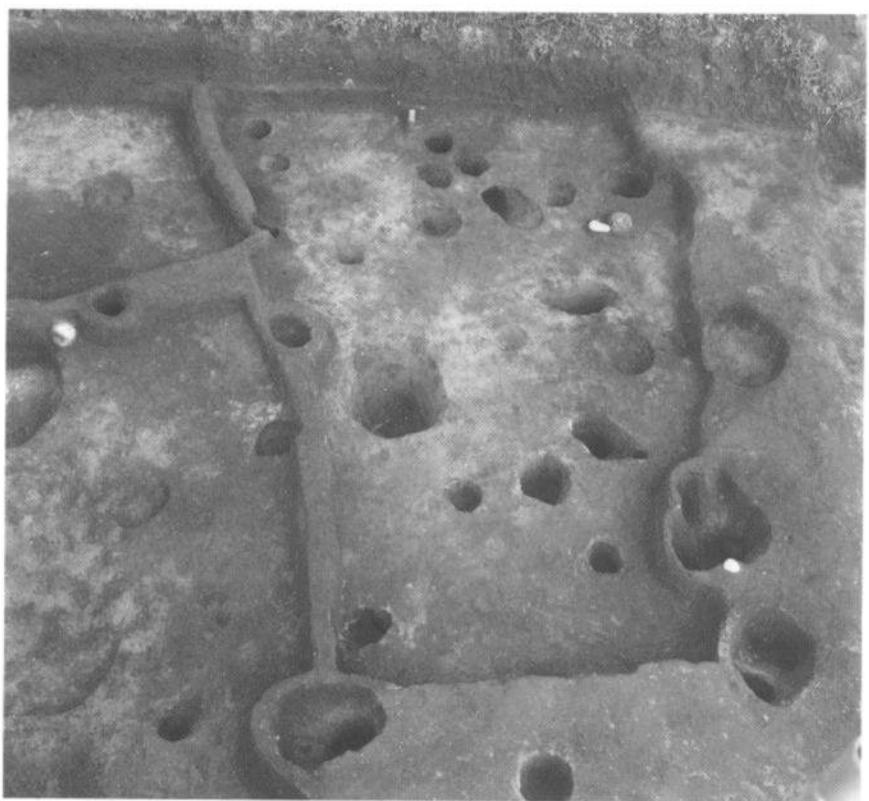
(1) B 2 ~ 4 号住居跡, B 8 ~ 20号土壤 (西から)



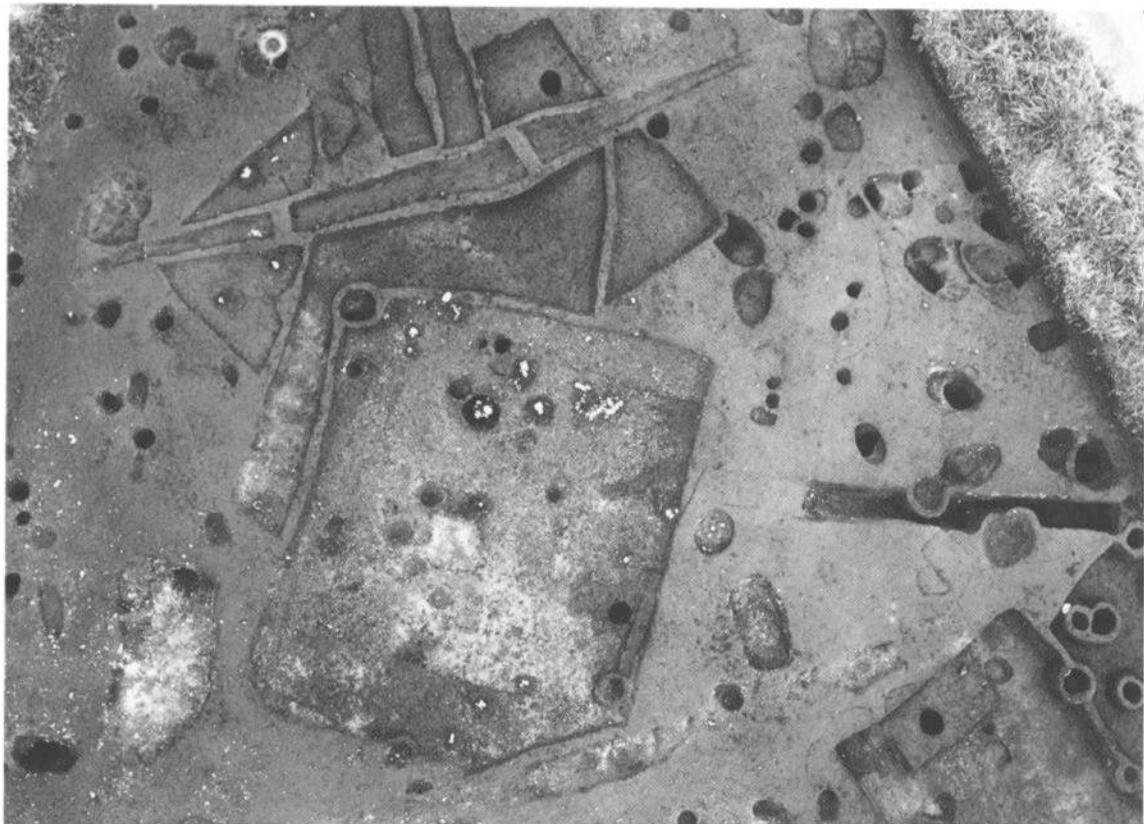
(2) B 2 ~ 4 号住居跡, B 20号土壤 (完掘後) (西から)



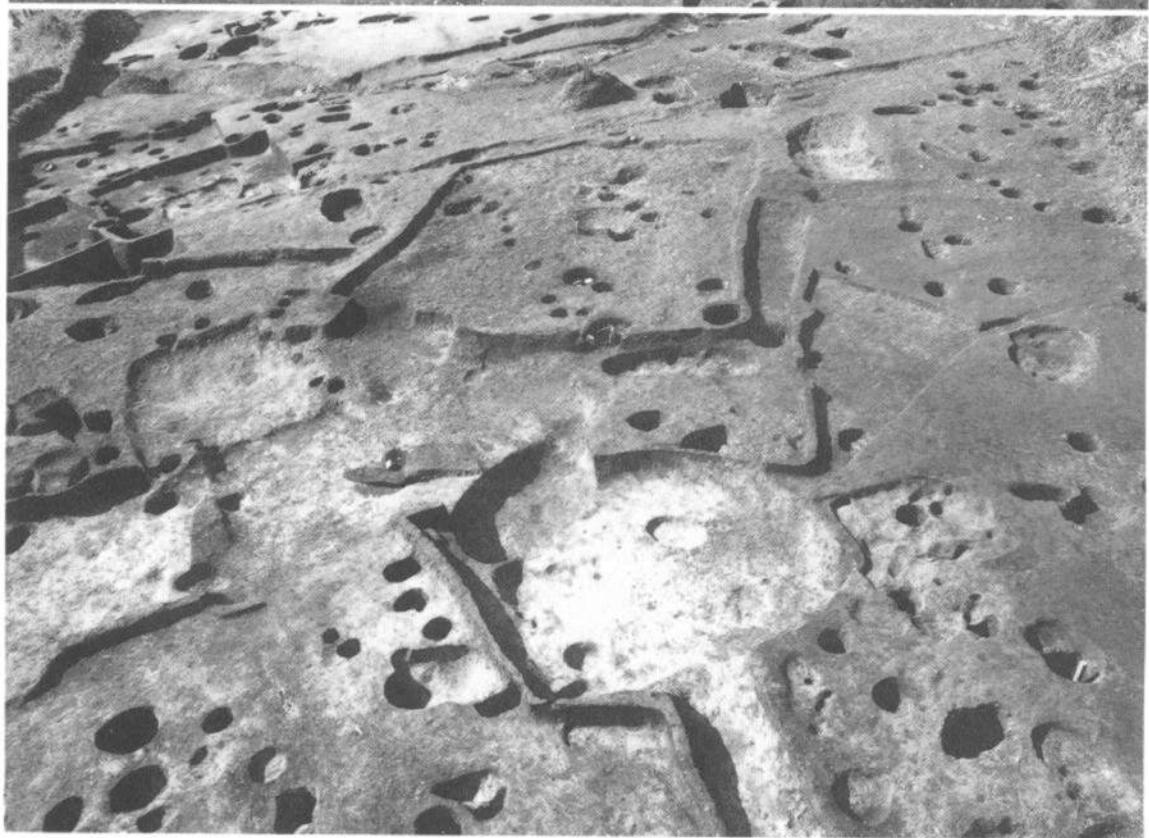
(1) B 2 号住居跡（西から）



(2) B 4 号住居跡（西から）



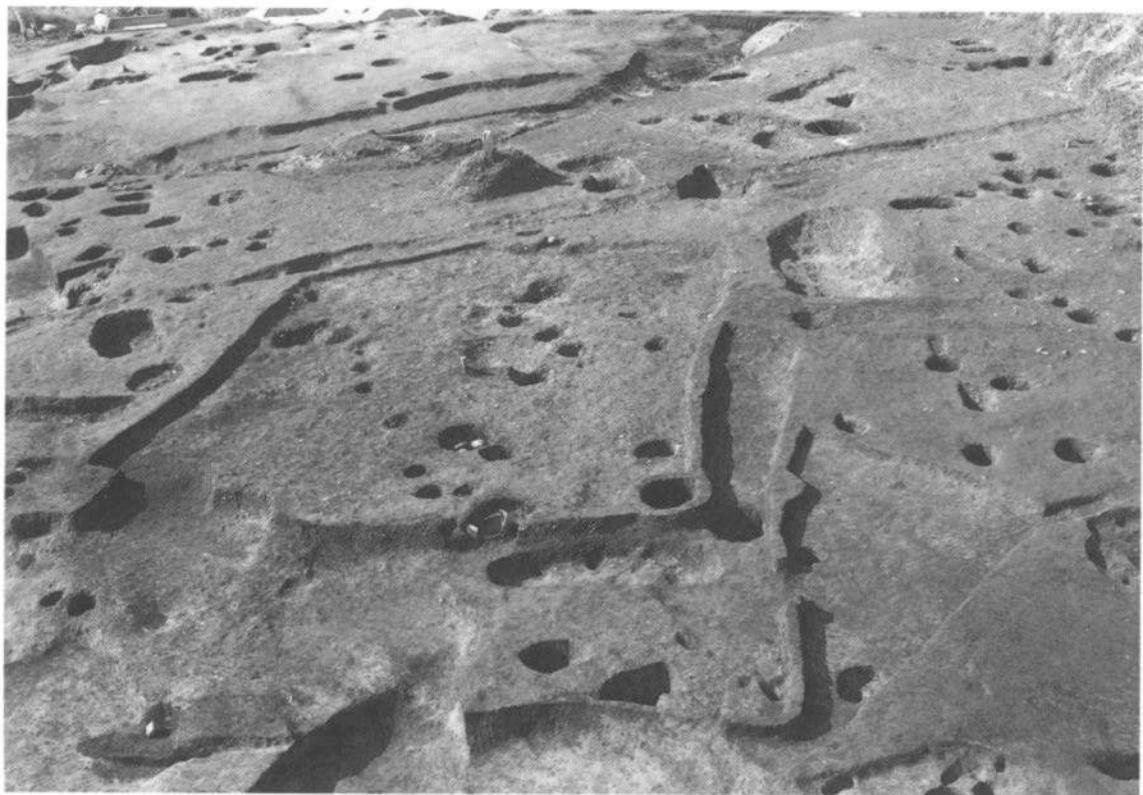
(1)



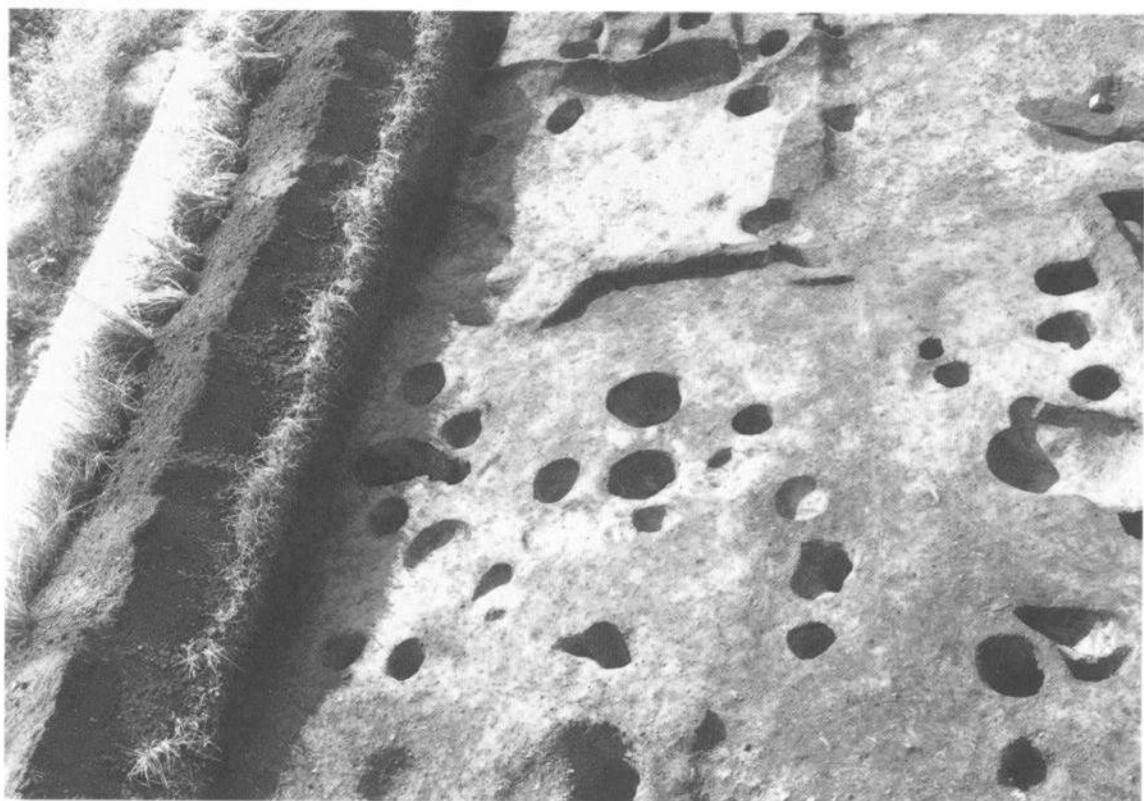
(2)

(1) B 6 ~ 9 号住居跡（上空から）

(2) B 6 ~ 11・14・15号住居跡, B17・18・22号土壤完掘後（北から）



(1) B 6 ~ 9 号住居跡, B18・22号土壤 (北から)



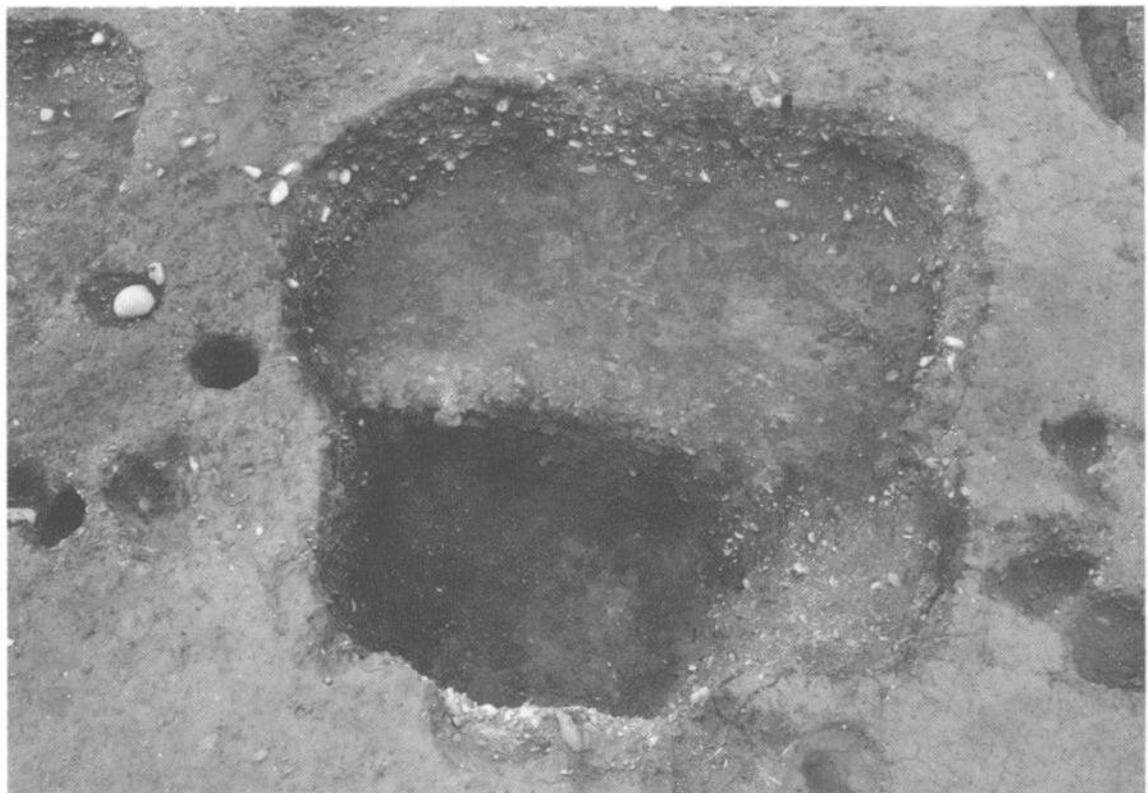
(2) B12・13号住居跡, B3号土壤 (北から)



(1) B8・14号住居跡, B18号土壤 (北から)



(2) B10~12号住居跡, B18号土壤 (完掘後) (北から)



(1) A 8 号土壤 (東から)



(2) A 9 号土壤 (東から)



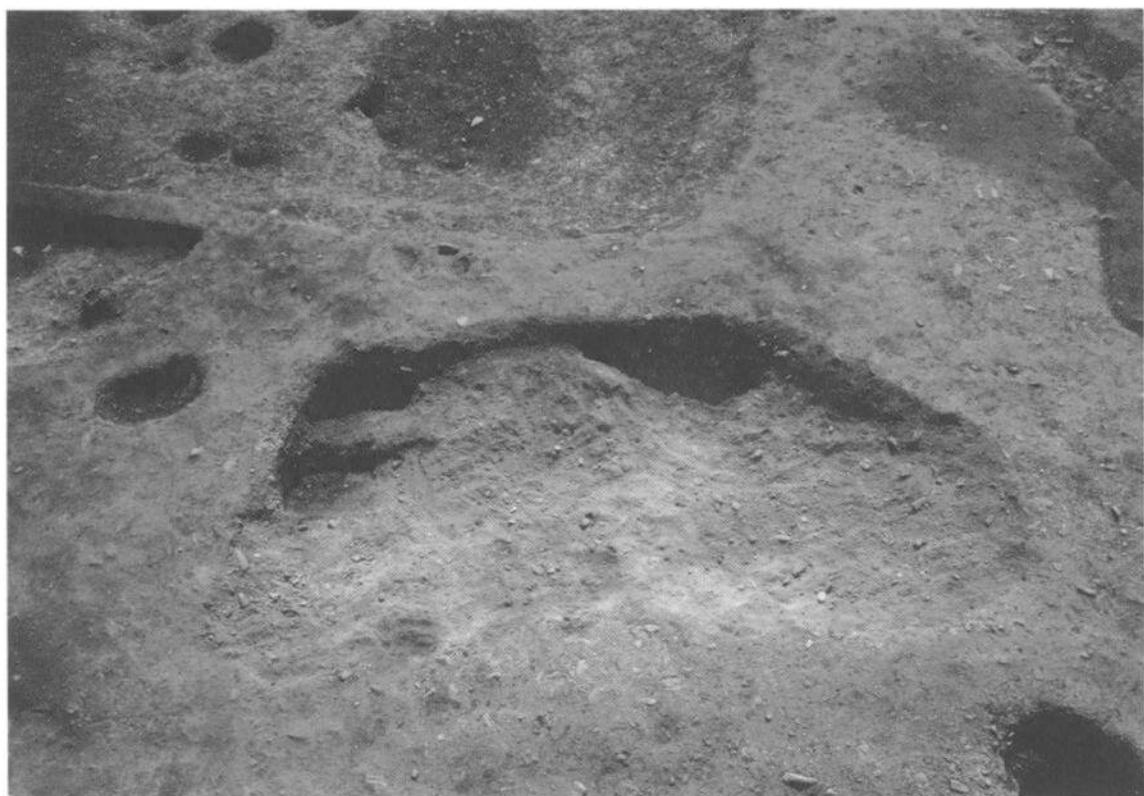
(1) A13号土壤（南から）



(2) A15号土壤（南から）



(1) A39号土壤（北東から）



(2) B7号土壤（西から）



(1) B10号土壤（西から）



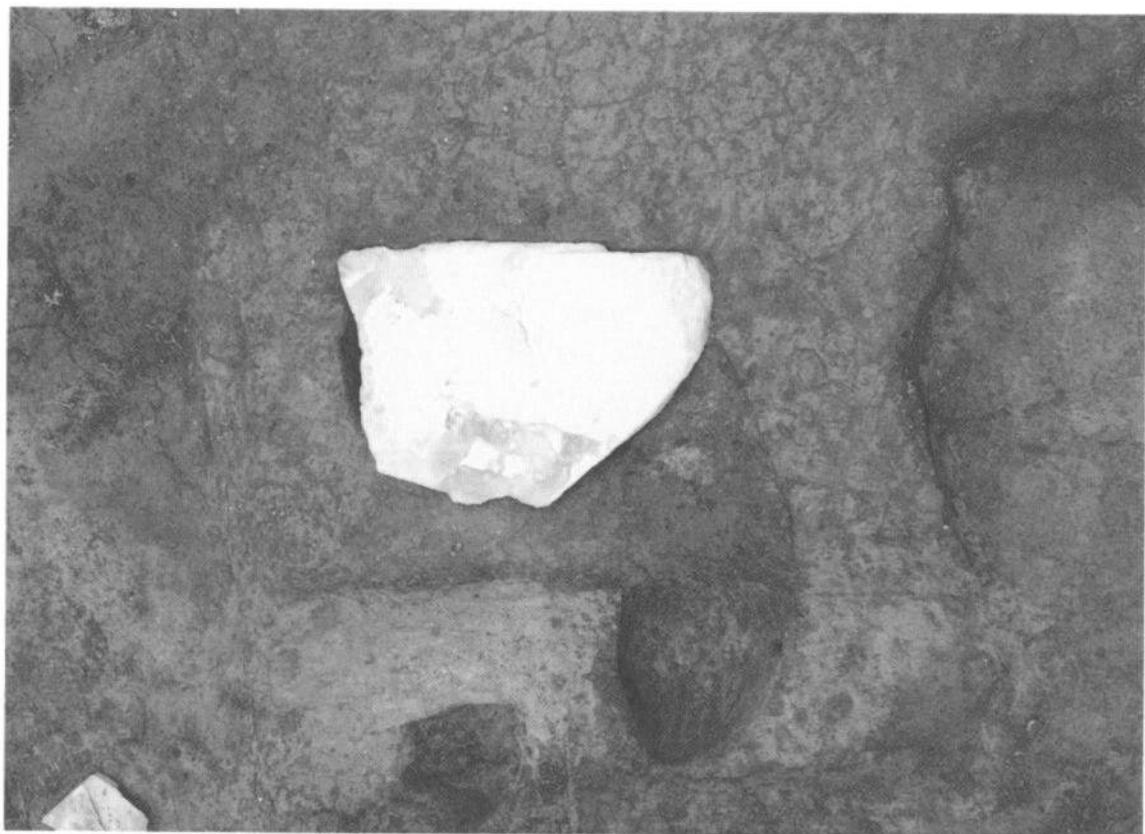
(2) B18号土壤（北東から）



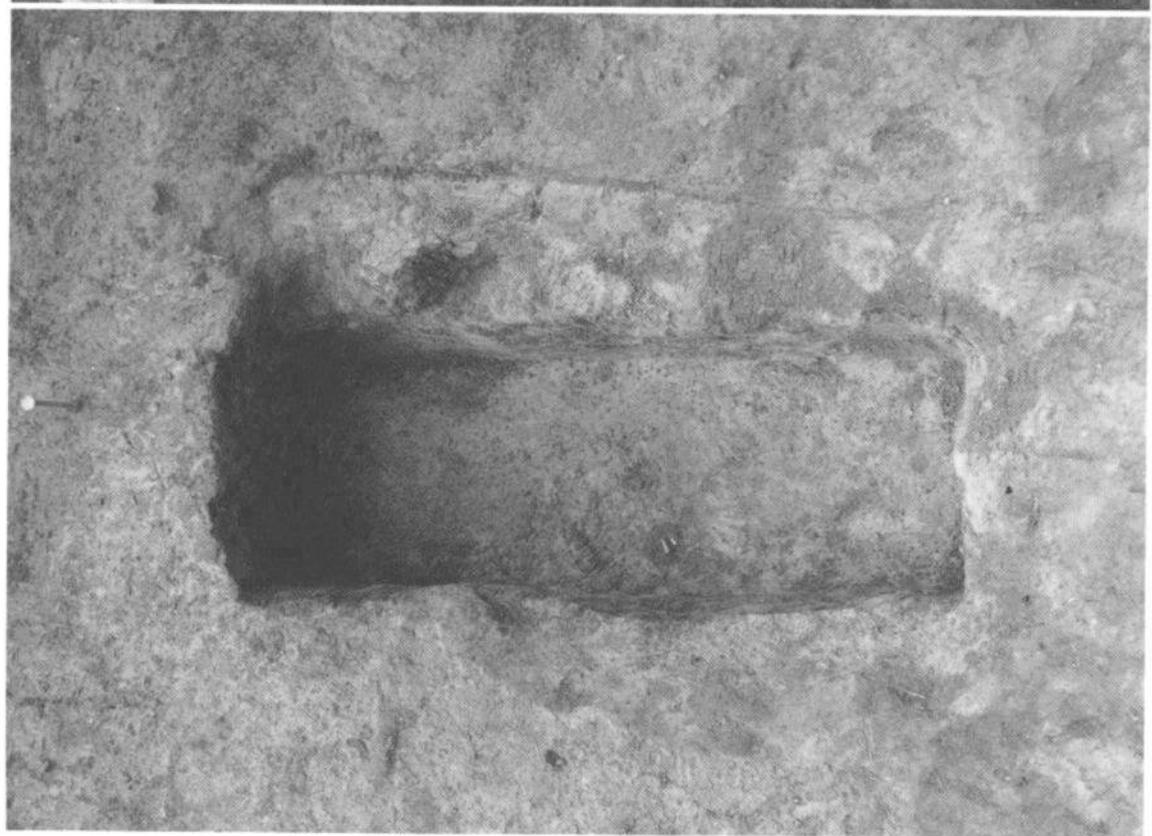
(1) B22号土壤(藏骨器)(西から)



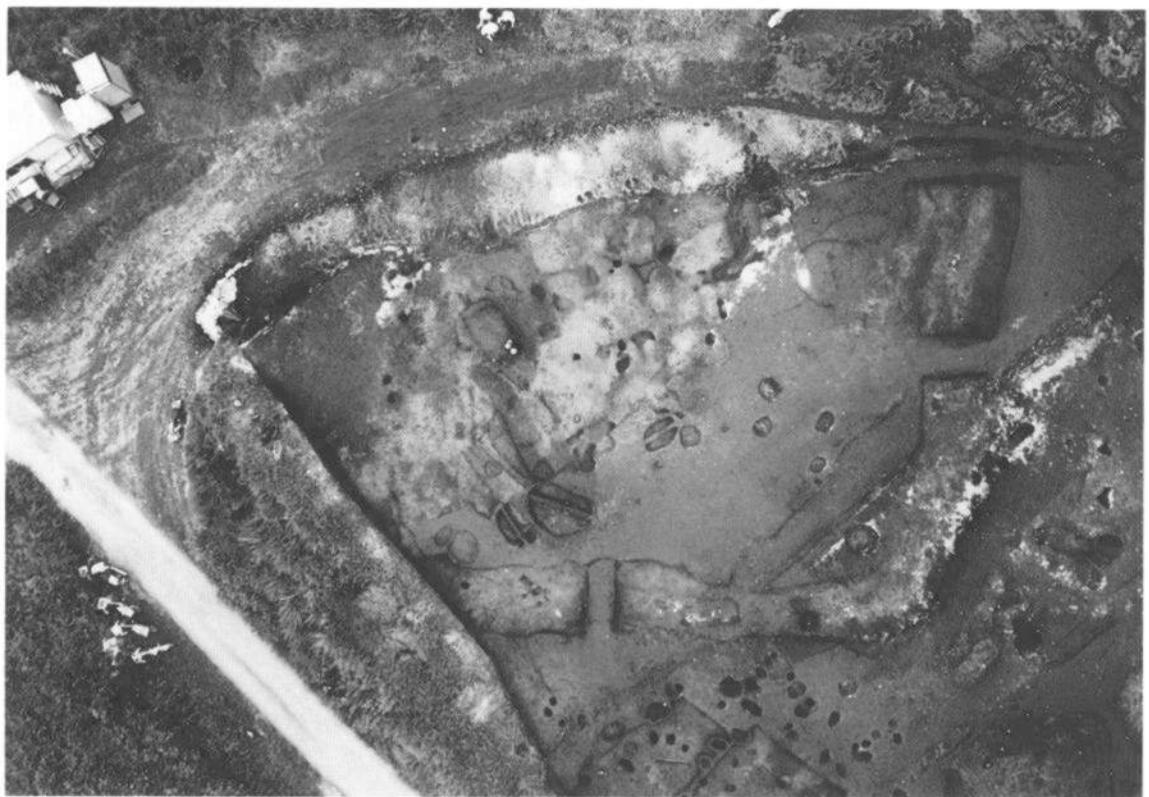
(2) B8号住居跡床面検出土壙(東から)



(1) A1号石蓋土壙墓（東から）



(2) A1号石蓋土壙墓（蓋石除去後）（東から）



(1) B 1 号方形周溝墓（上空から）



(2) B 1 号方形周溝墓西南端土層（北東から）



(1) B 1 号方形周溝墓北西辺中央部土層（南西から）



(2) B 1 号方形周溝墓北東辺中央部土層（南東から）



(1) A 1号溝、A12・24・28号土壤（西から）



(2) A 1号溝（北から）



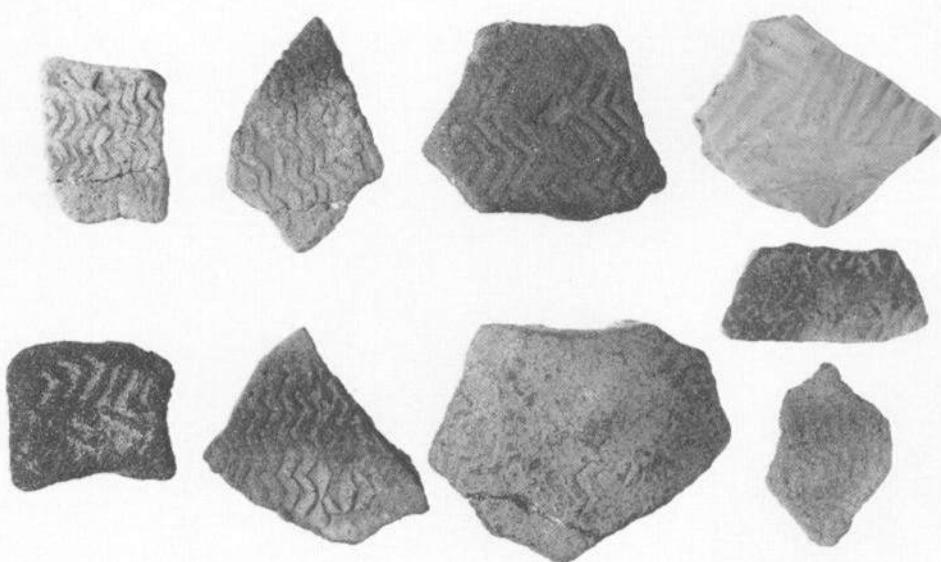
(1) A 1号溝（中途から南を望む）



(2) 治部ノ上遺跡から県指定史跡狐塚古墳（中央の森）を望む（東南から）



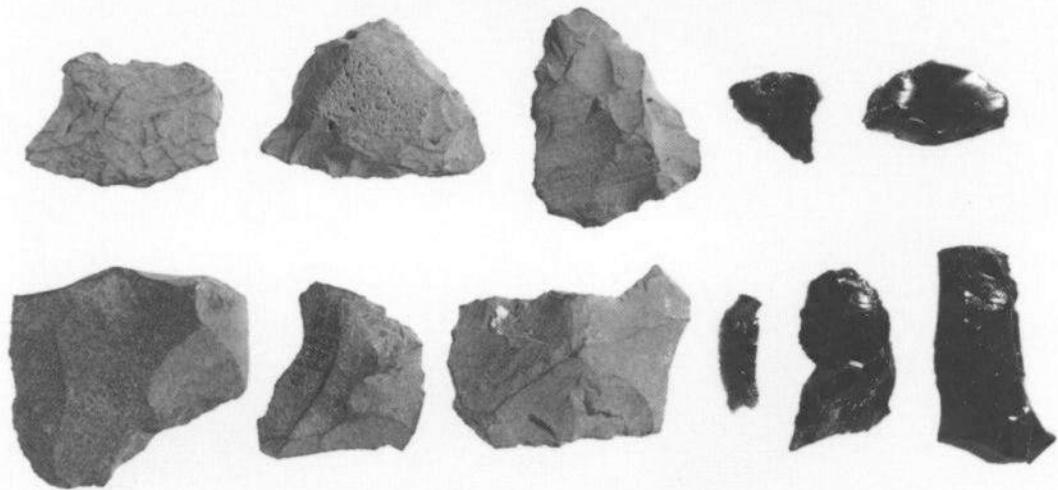
(1) 手向山式土器（その1）



(2) 手向山式土器（その2）



(1) 各遺構出土打製石器・ナイフ形石器・石匙



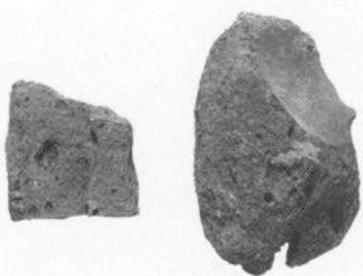
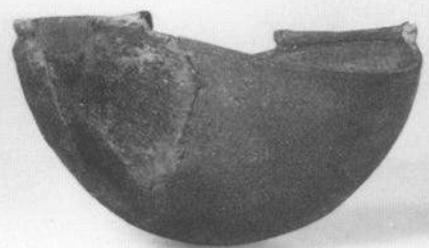
(2) 各遺構出土打製石器類（その1）



(1) 繩文晚期打製石斧



(2) 各遺構出土打製石器類（その2）



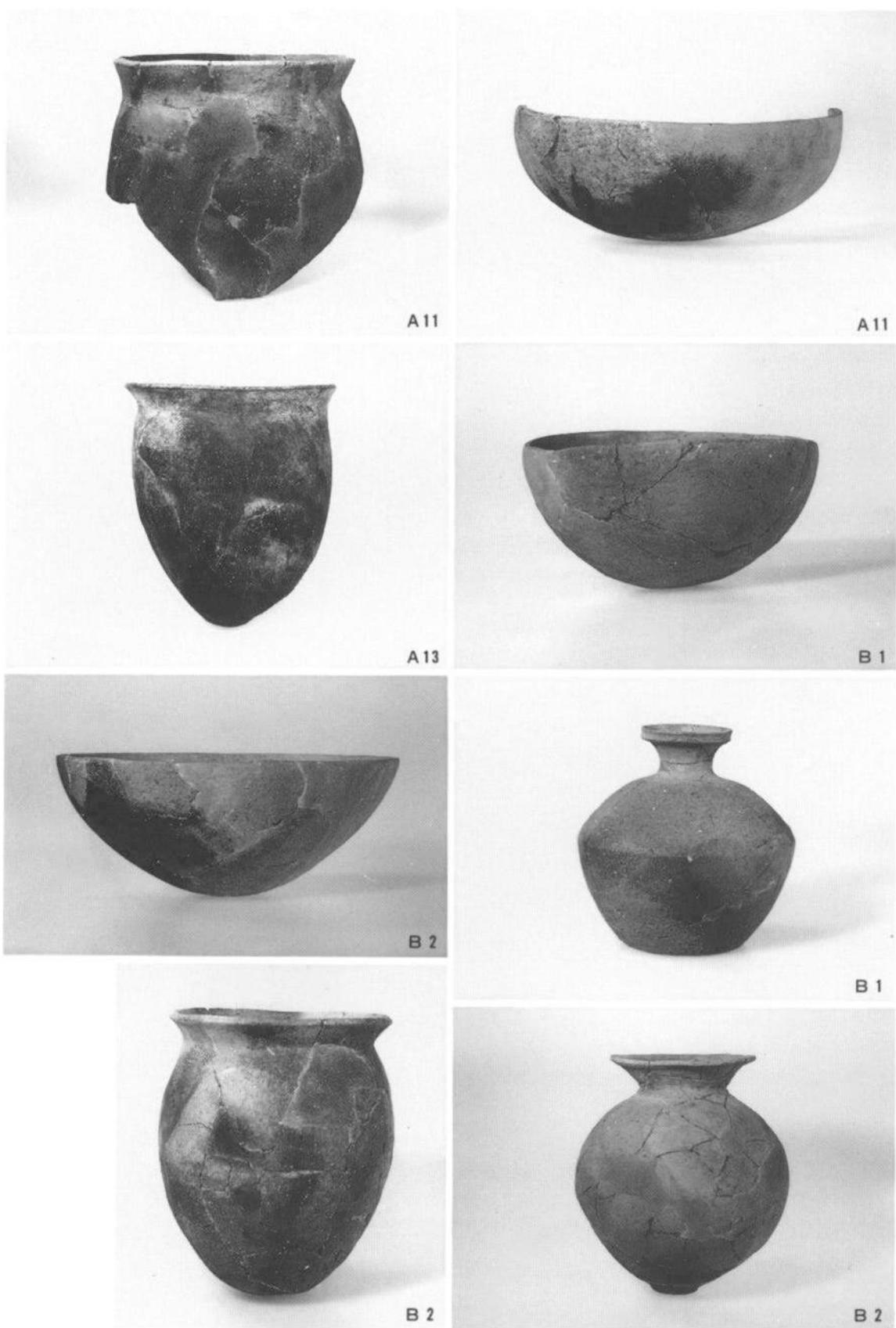
A 2



A 9

A 11

各遺構出土縄文晩期土器、サヌカイト原石、A 2・9・11号住居跡出土土器



A11・13, B1・2号住居跡出土土器



B 2



B 2



B 2



B 2



B 2



B 3

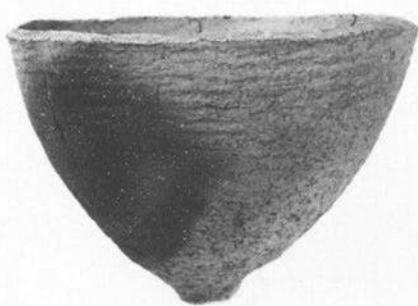


B 4



B 4

B 2・3・4号住居跡出土土器



B 4



B 4



B 5



B 6



B 6



B 6

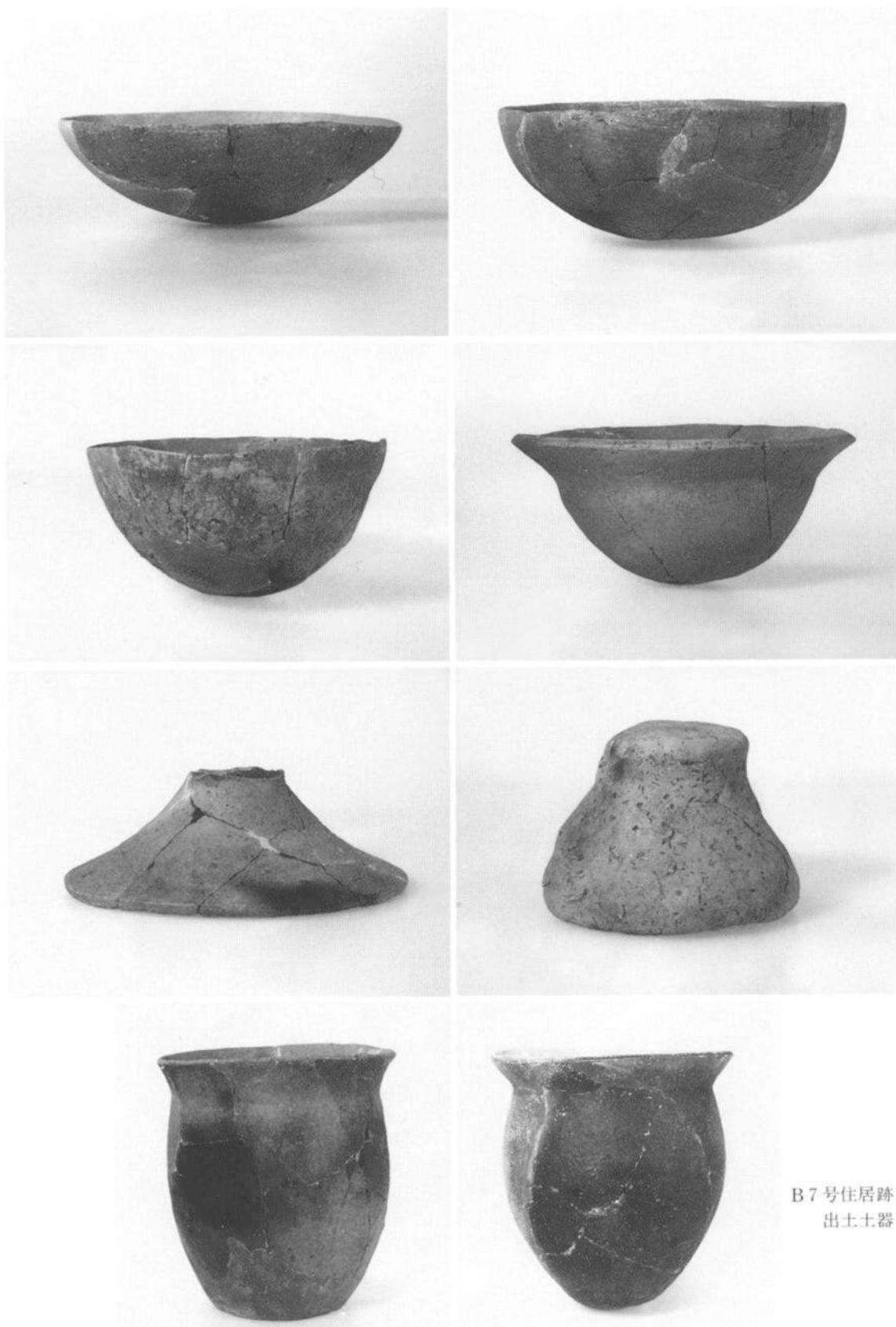


B 7

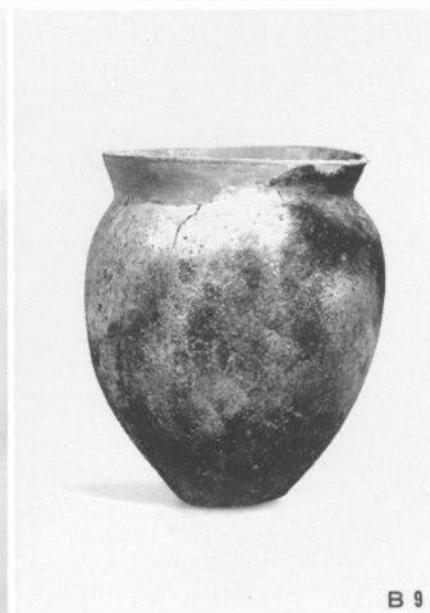


B 7

B 4～7号住居跡出土土器



B7号住居跡
出土土器



B 7・9号住居跡出土土器



B 8



B 8



B 8



B 8



B 8



B 8



B 10



B 10

B 8・10号住居跡出土土器



B10



B10



B10



B11



B12



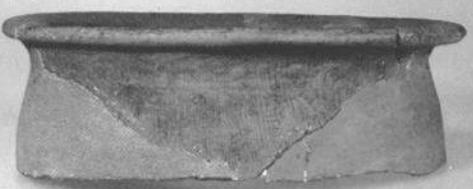
B12



B12



B12



B12



B14



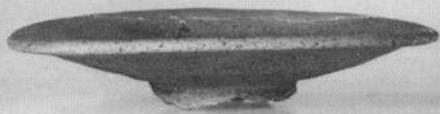
B15



A 8



B12



B12



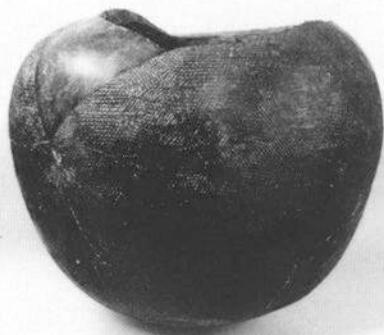
B12



B16



B12



B22

B14・15号住居跡, A 8号土壤, B12・16・22号土壤出土土器



B 1



A 1



A 3



A 4



A 5



A 5



AP96



AP151

B 1 号方形周溝墓, A 1 · 3 · 4 · 5 号溝, A 各ピット出土土器



BP83



BP94



A 北谷



BP63



BP 24



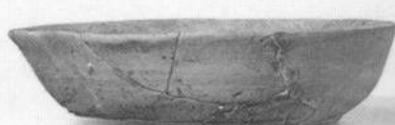
A 北谷



BP 45



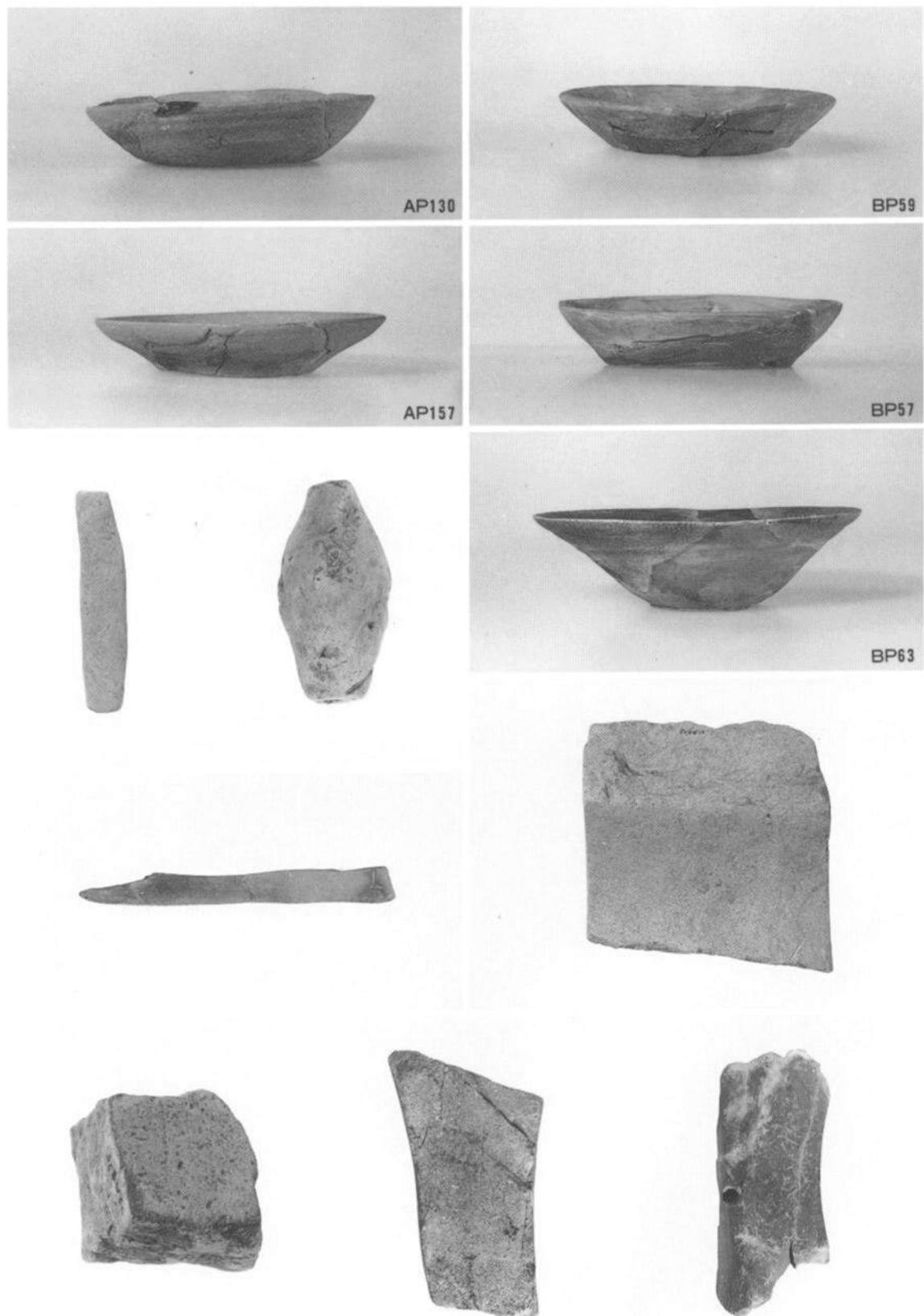
BP39



BP 89



AP 140



各ピット等出土土器・土錘・砥石



各遺構出土砥石・鉄滓、治部ノ上遺跡全景（空中写真、東から）

IV 座禪寺遺跡

本文目次

	頁
A 遺跡の概要	219
B 縄文時代の遺物	222
C 壴穴住居跡	228
D 掘立柱建物	239
E 土壙	240
F 溝	244
G 方形周溝墓	245
H 土壙墓	251
I おわりに	254

IV 座禅寺遺跡

A 遺跡の概要

座禅寺遺跡は福岡県朝倉郡朝倉町大字入地字座禅寺^{いりじ ざぜんじ}に所在する。地形的には周囲の田面とは約7mの比高差を有する南面した台地先端部に立地する。

この台地は先端部が削平されており、遺構の遺存状態は台地の先端部に近づくほど悪い。また、道路の用地範囲が台地先端部の狭い範囲であり、遺構の多くは調査区外に延びるため、全容を知ることが不十分な遺構が多々あった。

検出した遺構は、竪穴住居跡9軒、掘立柱建物跡1軒、土壙7基、溝1条、方形周溝墓1基、土壙墓4基及びピット群である。なかでも、竪穴式住居跡のうち1軒（5号住居跡）は弥生時代前期に属し、この地域では数少ない例である。

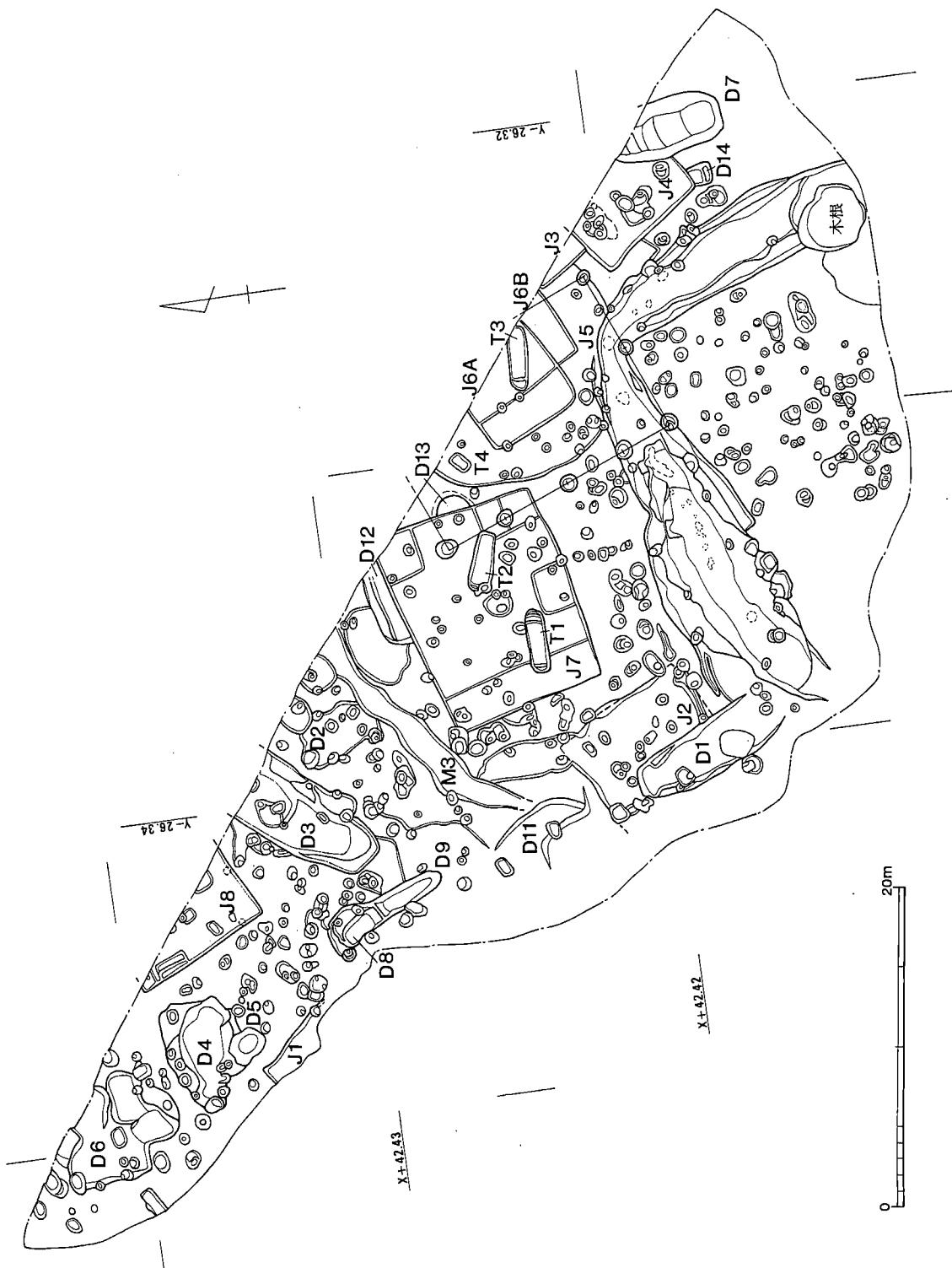
出土遺物は縄文時代～中世までのものがある。後述のように、縄文土器は弥生時代の竪穴柱居跡を検出した面の下層で出土した（第174図－9層）。磨滅したものが多く見受けられ、大半は早期に属するが一部は晩期に属する資料がある。早期に属する環状石斧は完形品で方形周溝墓の溝底近くで検出している。これらの縄文時代の出土品は、本来の所属する遺構が不明ではあるが、資料価値は極めて高いものである。竪穴住居跡から出土する土器や鉄製品、石製品は流入あるいは投棄されたものが多く、竪穴住居が使用されていたか、廃棄される直前に属する出土品は以外と少ない。このことは、竪穴住居跡の出土資料を中心に土器編年等が組み立てられる場合が多いが、出土遺物個々の出土状態を入念に検討する必要があることを示している。また、方形周溝墓で検出した供献土器は溝の底面直上から出土するものは皆無で、土器と溝底との間に間層をかんでいる。この状況は立野遺跡（註1）の方形周溝墓群と全く同様である。また、縄文時代早期に属する環状石斧も供献土器と同様な出土状況をしており、方形周溝墓の供献土器の性格や所属時期を考えるうえで貴重な示唆を与える遺構であろうと考えられる。

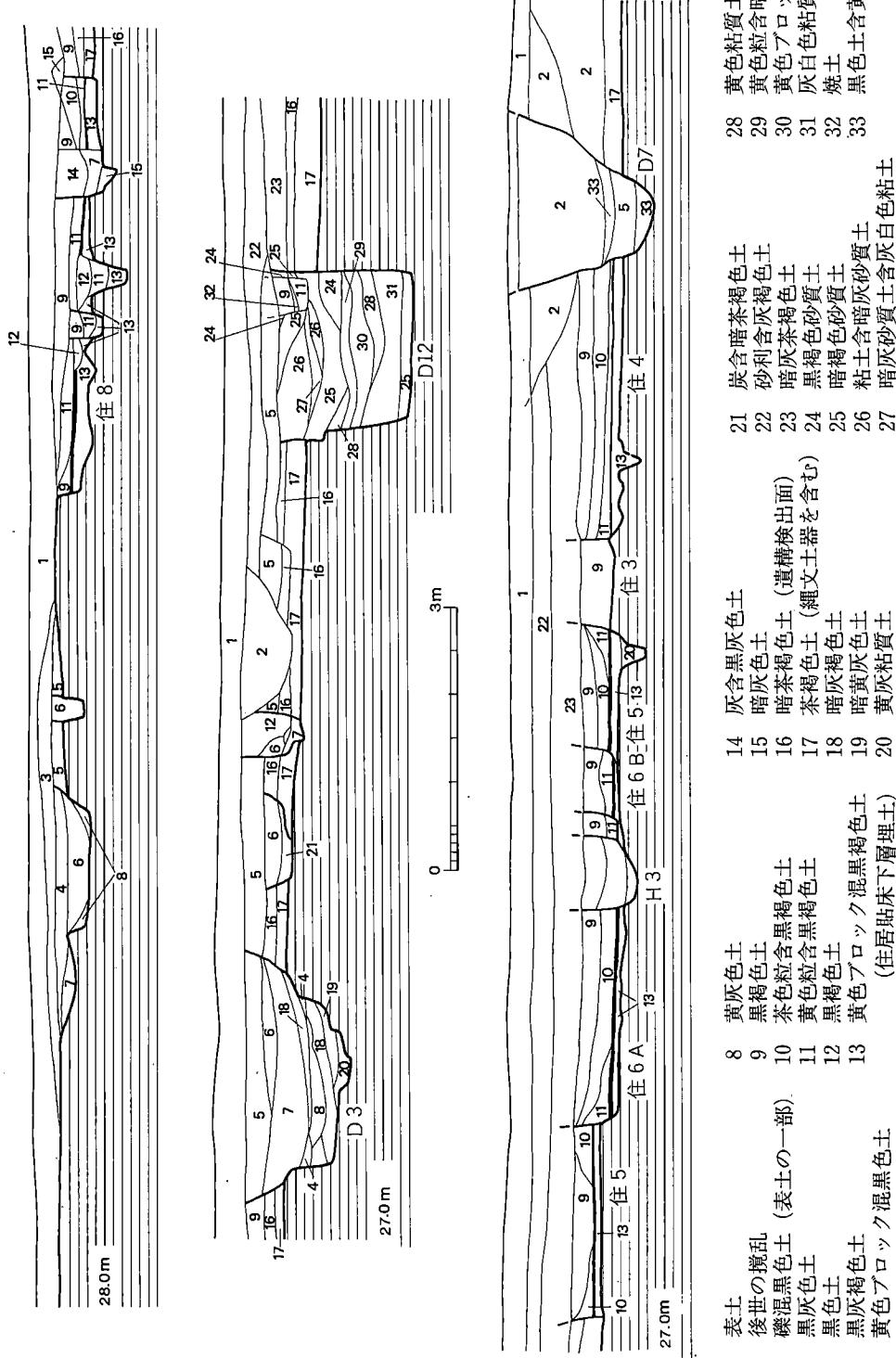
座禅寺遺跡は、先述のように狭い範囲の調査であり、また、台地の先端部は削平され、特に竪穴住居跡についてはその全容を知りうるものは7号竪穴式住居跡だけで、遺構及び出土遺物について、その歴史的価値判断ができるものは極めて少なかった。

以上の限界を承知したうえで、以下、座禅寺遺跡の報告をする。

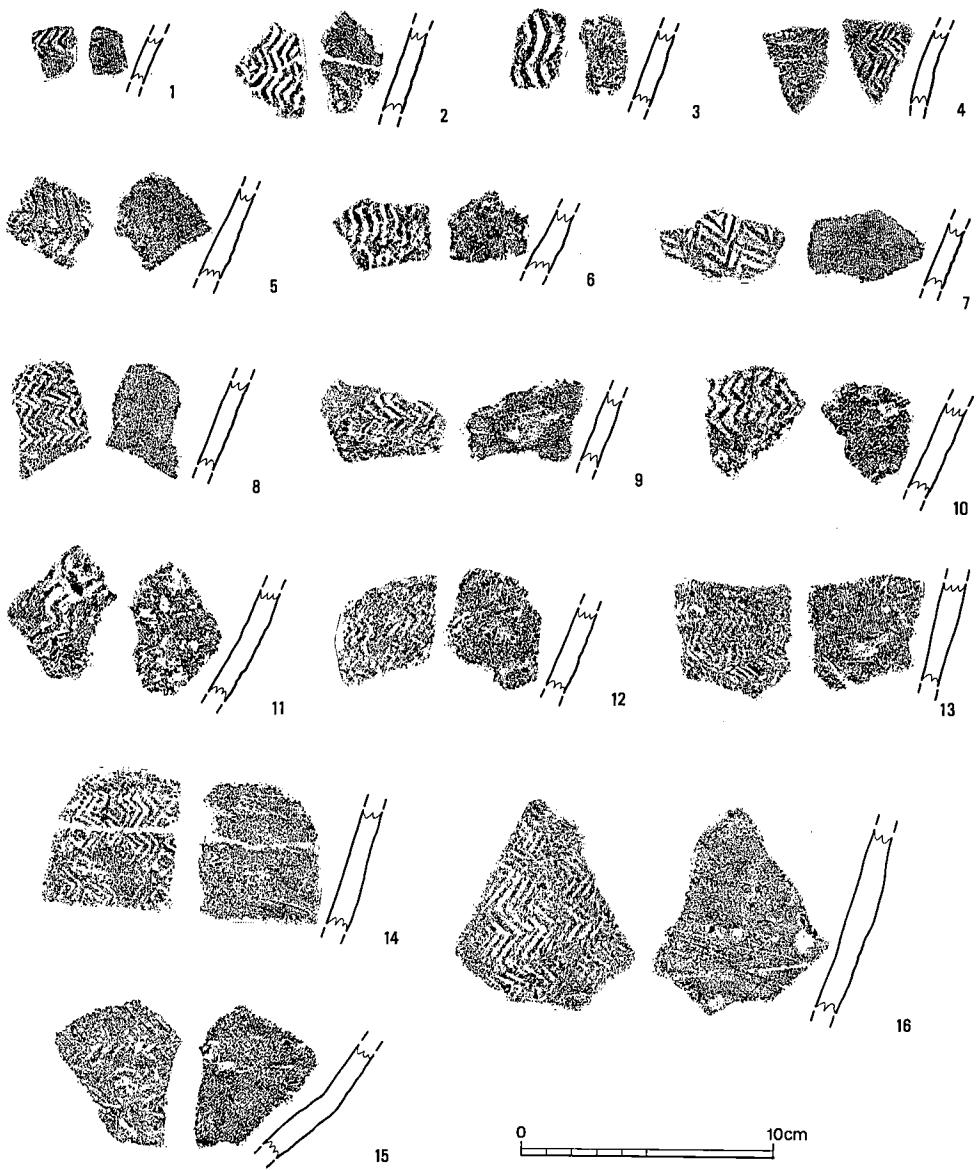
なお、遺構配置図（第173図）で、遺構番号が連続しないものがあるが、たとえば調査時に10号土壙としたものを、今回、1号竪穴式住居跡と報告しており、欠番となったことによる。

第173図 座禅寺遺跡遺構配置図 (1/400)





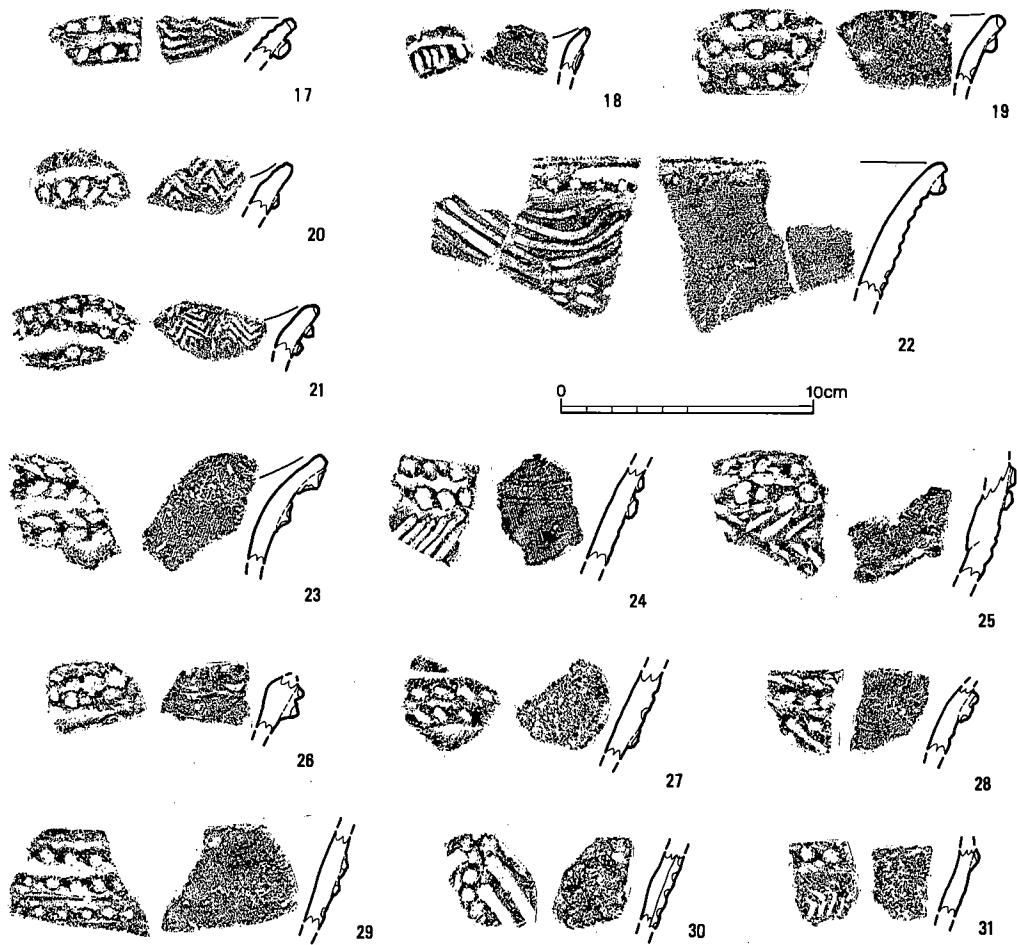
第174図 調査区東壁土層図 (1/100)



第175図 縄文土器実測図① (1/3)

B 縄文時代の遺物

座禅寺遺跡において縄文時代の明確な遺構は検出できなかったが、弥生時代以降の遺構の埋土や包含層からは約150点の縄文土器が出土した。これらはいずれも小破片で摩滅も著しく、器形の復原もできないが、ここでは67点の土器片を図示した。そのうち大部分は縄文早期に、一



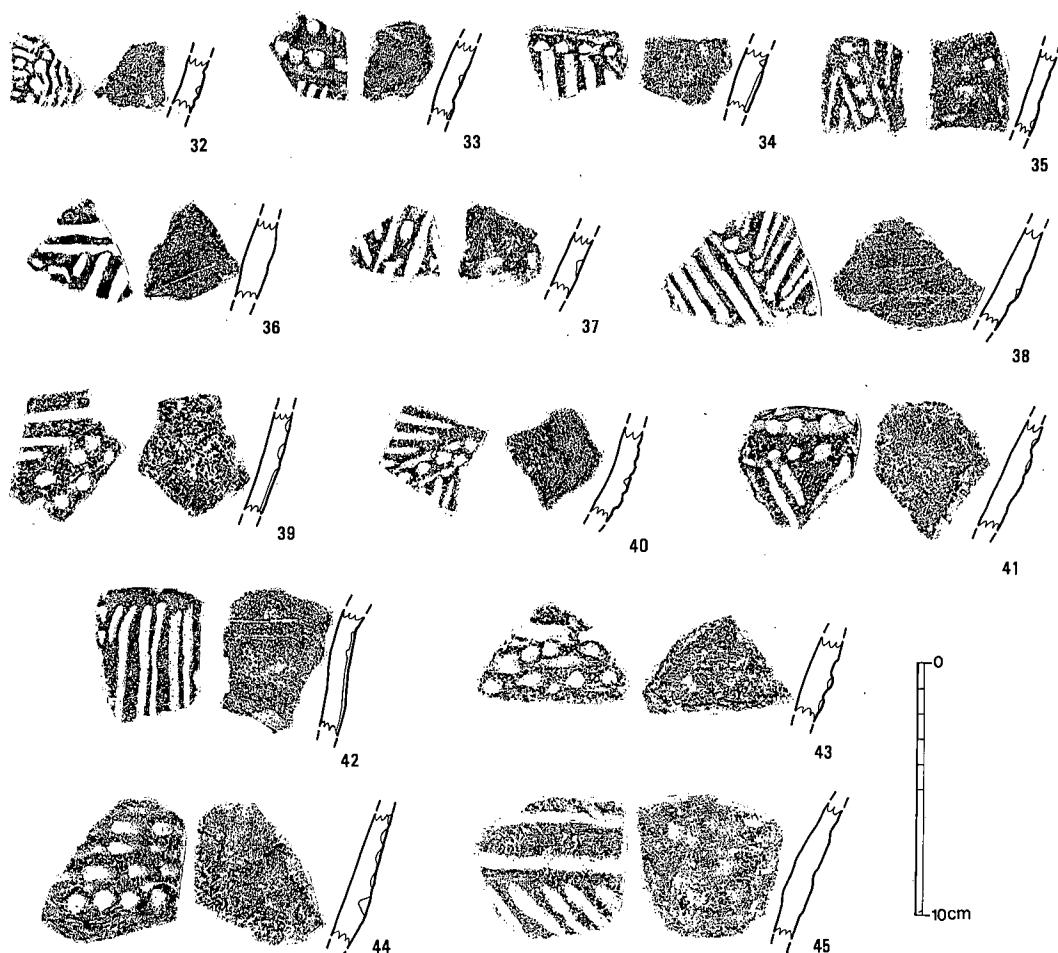
第176図 縄文土器実測図② (1/3)

部は縄文晩期前半代に属するものである。また、石器としては環状石斧1点と石鎌2点があるが、前者については縄文早期に属するものであろう。

縄文土器 (第175~179図)

第1類土器 (第175図)

第1類土器とは、山形押型文のみを文様とする一群の土器である。施文方向はほとんどが縦位であるが、7のみ横位である。山形の単位はおよそ2単位とみられるが、施文原体幅は不明。2・3のように山形の起伏が緩やかで波状文に近いものもあれば、7・14のように施文原体の端が接近して一部に菱形文を形成するものも窺える。ここでは16点の山形押型文土器を図示したが、いずれも胴部破片ばかりで口縁部が全く存在しない。おそらく、第2類とした土器の口縁部の中にそれに相当するもの、つまり、口縁部に刻み目突帯文が付き、内面に横位の山形押型文が施される土器が第1類の口縁部になるものもある。ただし、あまりに小破片であるた



第177図 繩文土器実測図③ (1/3)

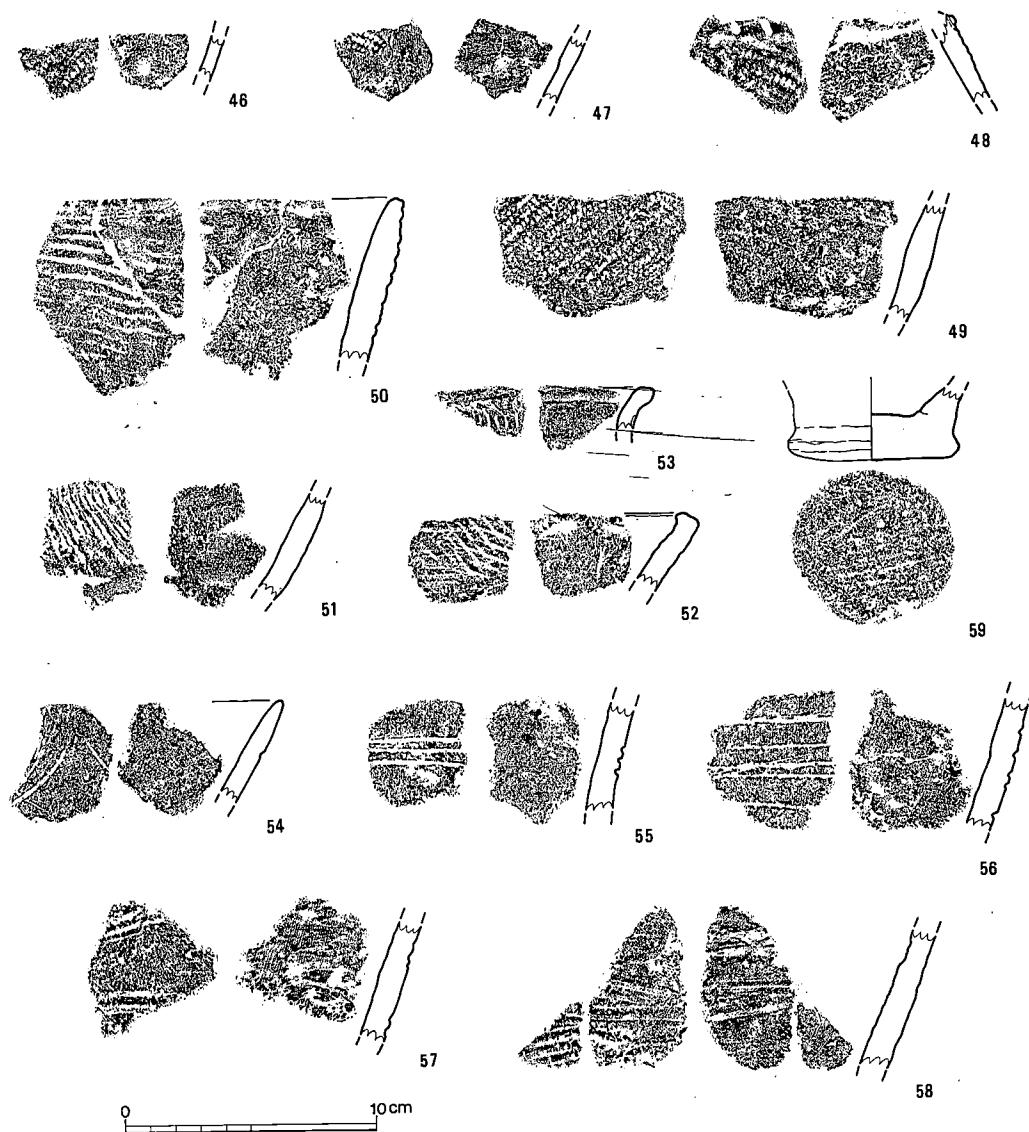
め確定できず、敢えて別類型として便宜的に取り扱った。

第2類土器（第176図）

ここでは刻み目突帯文の付く土器を第2類とした。16点中、7点が口縁部、他の9点もそれに近い部位と考えられる。突帯文は1～2本で、30のように縦位のものも稀にある。刻み目については、普通の刺突文と同じように先端部が比較的丸い工具で押圧されるように施されるが、23には半截竹管状の2本単位の工具で施される。17・20・21の口縁部には山形押型文が横位に施され、おそらくこういった一群が縦位山形押型文の口縁部になると想われる。ここでみる限り、刻み目突帯文と組合わざる文様は沈線文や刺突文ばかりで、山形押型文は窺えない。

第3類土器（第177図）

ここでは刺突文と沈線文によって文様が構成される土器を第3類土器とした。文様の切り合については、刺突文が沈線文を切るもの、また沈線文が刺突文をきるものと両方のパターン

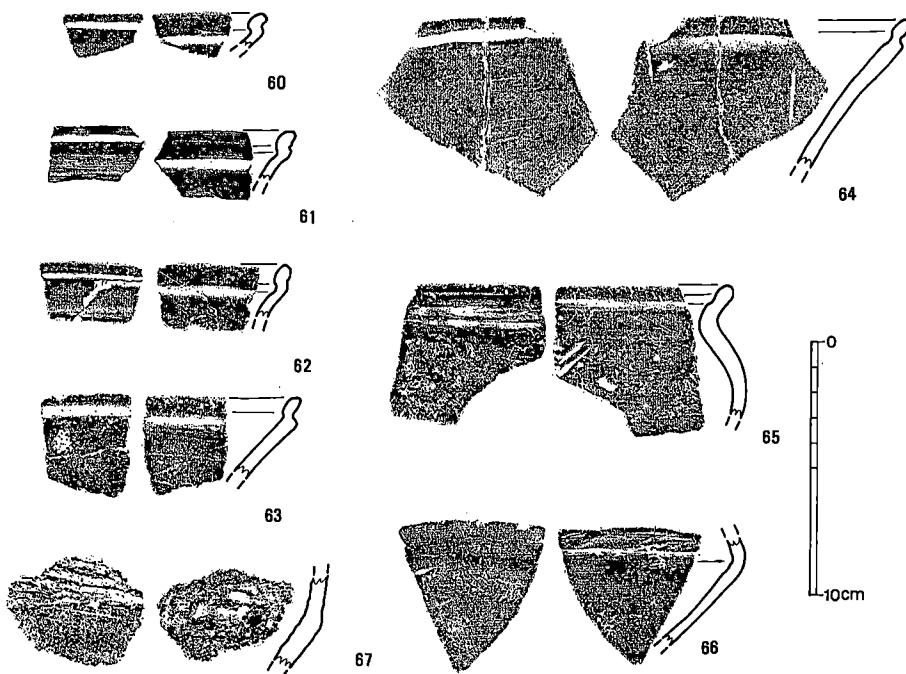


第178図 縄文土器実測図④ (1/3)

が存在するが、基本的には1ないしは2列の刺突文が、沈線文の集積によって構成される文様（主に三角形か？）を区切る役割を果たしているようである。32の縦位波状文が山形押型文である可能性は高いが、小破片であるため単位が確認できず、とりあえずこの類型に位置づけた。

第4類土器（第178図46～49）

縄文が施される土器を第4類土器とした。器面調整はナデがほとんど。48については刻み目突带文が付き、頸部のかなりすぼまった器形になると考えられる。



第179図 縄文土器実測図⑤ (1/3)

第5類土器 (第178図50~52)

撚糸文を有する土器を第5類土器とした。器面調整はいずれもナデ。50の口縁部は緩やかに外傾して端部をやや細く仕上げるが、52は大きく傾き強く押さえて端部に面を作る。

第6類土器 (第178図54~57)

第6類土器とは細くて深い沈線文によって文様が構成される一群である。全体的に器壁は厚くて、器面はナデ調整。2本以上が1つの単位となっている。54の口縁部の比較的大く外傾し、端部は舌状に尖って仕上げられる。

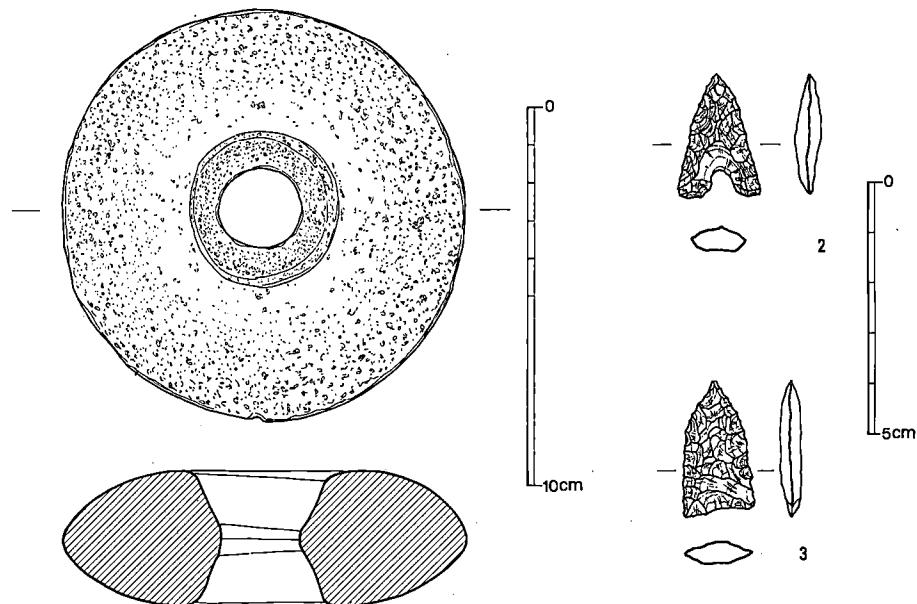
第7類土器 (第178図53・58・59)

第7類土器は、第1~6類土器に属さない縄文早期の土器を纏めた。53は端部が丸く仕上げた口縁部で、爪形文が施される。58は内外面とも粗い条痕文が施される。器壁は厚い。59は平底の底部でわずかに条痕文が窺える。

第8類土器 (第179図60~67)

第8類土器は縄文晚期前半代に属するものである。本来は内外面とも丁寧な研磨であるが、摩滅が著しくその痕跡はわずかにしか窺えない。67のみ粗製土器で外面に条痕文が観察される。

小結 縄文土器は第1~7類の早期土器と第8類の晚期土器とに大きく分れる。第1類は縦位の山形押型文だけにおよそ限られるが、九州の押型文土器でこのような特徴を見せるのは手



第180図 縄文時代石製品実測図 (1/2・2/3)

向山式だけである。口縁部の刻み目突型文と、その内面の横位山形押型文が一般的で、第2類の一部がそれに相当する。第2類と第3類は刺突文と沈線文とによって文様が構成される一群で、概して平椿式と考えられるが、中には手向山式でも山形押型文より後出的要素として位置づけられそうなものもある。第4類の縄文や第5類の撚糸文も手向山式に属するものであろう。また、第6類は塞ノ神式土器と考えられるが、器面調整や文様構成に若干の問題を残す。第8類は縄文晩期前半代でも、中葉の黒川式に近いものであろう。

縄文時代の石器（第180図）

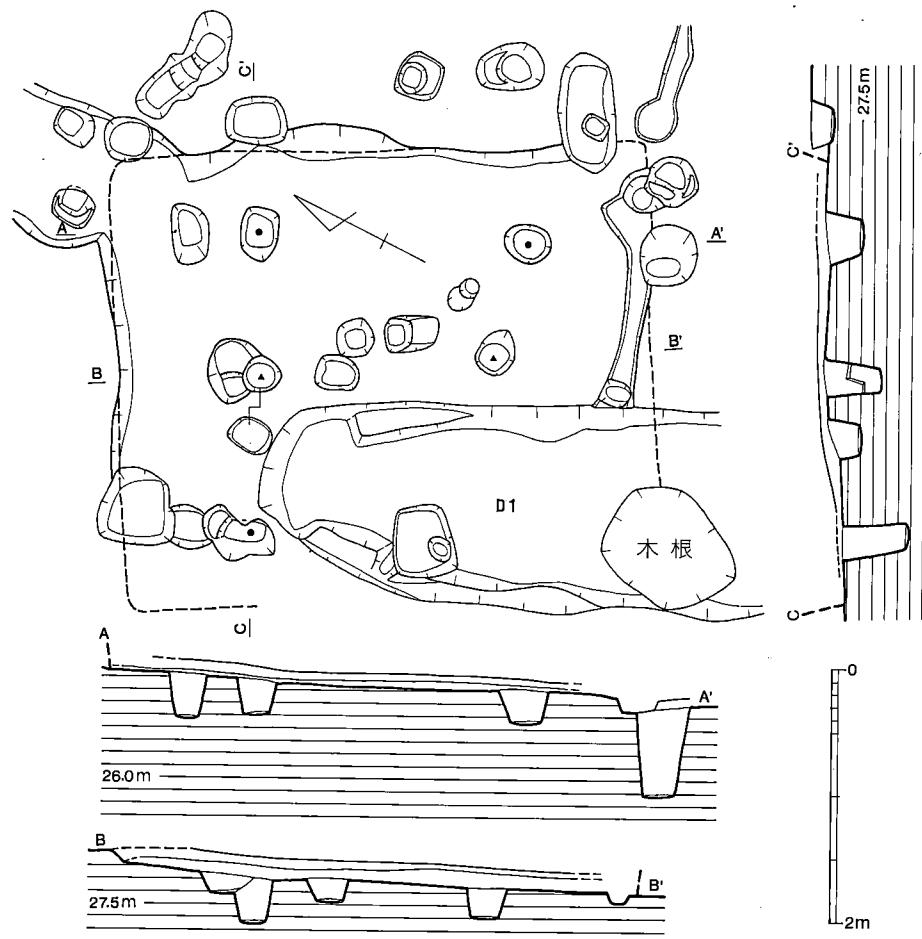
1の環状石斧は $10.8 \times 10.7\text{cm}$ のほぼ正円形で、最大厚 3.7cm 。中央部の穿孔は両側から行われ、最大径 3.7cm 、最小径 2.1cm を測る。石材は玄武岩質で、全面に研磨が施され成形されるが、その痕跡を肉眼で観察することはできない。周縁部はそれほどシャープに尖っているわけではない。確かに若干の凹凸は窺えるが、敲打や擦り潰しを継続的に行った痕跡でもない。中央部の穿孔部にも擦れた痕跡はなく、仮に軸棒のようなものを挿入したにせよ、それを固定して使用するには困難であったとみられる。なお、この穿孔部内の研磨は、全体の研磨に比べてかなり粗い。縄文早期に属するものであろう。2・3の石鏃はいずれもサヌカイト製であるが、早期・晩期のいずれに属するかはにわかに決しがたい。

C 竪穴住居跡

(1) 1号竪穴住居跡 (第173図)

調査区北側の台地縁辺部に位置する。調査時に土壌と考え、10号土壌としたが、住居跡の可能性があり、1号竪穴住居跡として報告する。

竪穴部の大半は削平され、全容は不明である。弥生時代終末期頃の土器小片が若干量出土している。

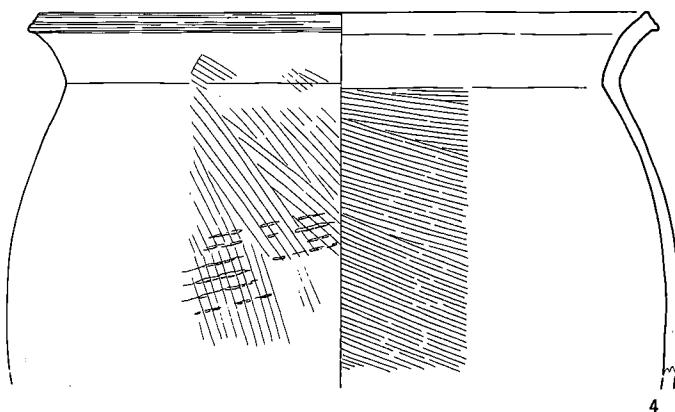
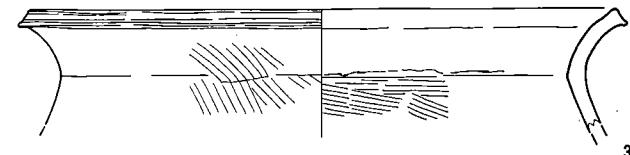
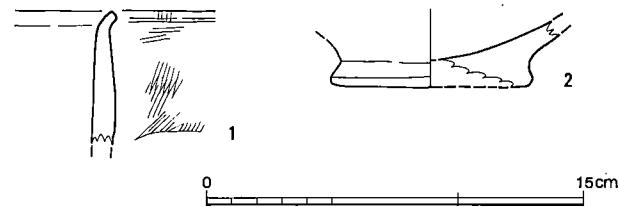


第181図 2号竪穴住居跡実測図 (1/60)

(2) 2号竪穴住居跡

(第181図)

調査区中央部、7号住居の西側に位置する。所属時期を想定できる出土品がなく、ベッド状遺構や屋内土壌等も検出しておらず、主柱が2本であるのか4本かは明瞭ではないが、2本柱の場合は図に▲印を付したもの、4本柱の場合は同じく●印を付したものを主柱穴と考える。西壁が遺存しないが、柱配置から判断して、竪穴部は正方形に近い長方形のプランを呈すると考えられる。古墳時代初期を前後するころの所産と推測する。

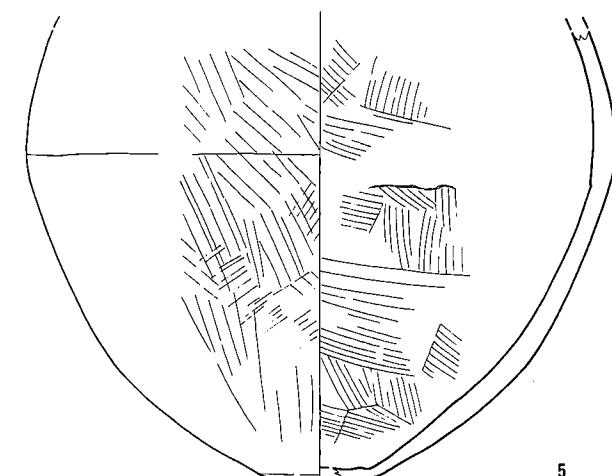


(3) 3号竪穴住居跡

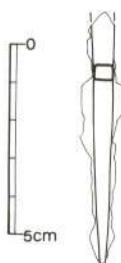
(図版60、第182・183図)

方形周溝墓の東側に位置し、5号住居を切り、4号住居に切られる。方形プランを呈するが、竪穴部の殆どが調査区外に延びるので、個別に図示しなかった。出土品には弥生土器及び鉄製品がある。

土器 小破片が多く、図示できるのは5点である。1は覆土中から出土し、小片のため傾きは不正確である。内面はナデ、外面は摩滅するがハケ目が残る。細砂粒を含み焼



第182図 3号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)



第183図 3号竪穴
住居跡出土鉄製品
実測図 (1/2)

成良好で、黄褐色を呈する。2は貼床の下層から出土した前期の壺底部で、5号住居を切って本住居を造る際に混入したものであろう。砂粒を多く含み、焼成良好で内外面に煤が付着している。3は覆土上層から出土した甕小片ある。細砂粒を多く含み、焼成良好で内外面に煤が付着するため黒褐色を呈する。4は床面に検出した小片の反転復原図である。外面にタタキ目が残る。細砂粒を多く含み、焼成良好で外面に煤が付着する。5は覆土上層で検出した。内外面は粗いタッチのハケ目の上からナデ調整を行う。細砂粒を多く含み、焼成良好で内外面に煤が付着し、黄褐色・赤褐色～黒褐色を呈する。

鉄製品 覆土下層から出土した。錆に覆われて不明な部分を残すが鉄鎌の茎かと思われる。現存長6.7cmを測り、断面は方形である。

小結 上述の出土品はすべて流入品であり、本住居の営存時期を示すものではない。3～5の出土土器から弥生時代の終末期頃に埋没したと考えられる。

(4) 4号竪穴住居跡 (図版48, 第184・185)

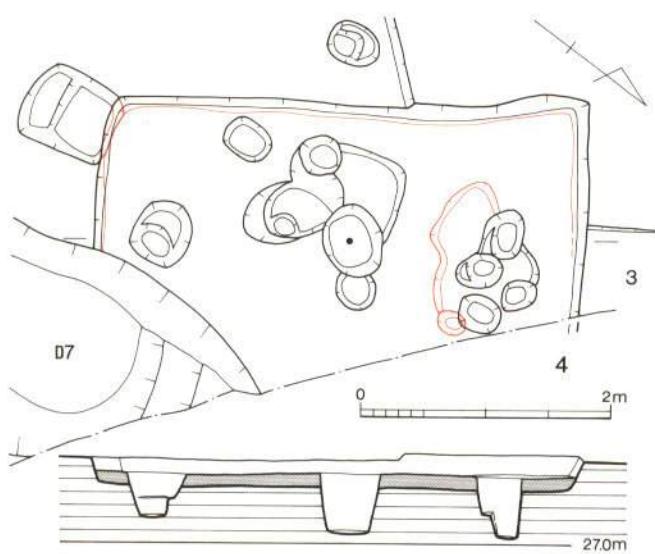
3号住居の南東に位置し、3号住居を切り、7号土壤から切られている。大半が調査区外に拡がるため不明瞭な部分を残すが、竪穴部の長軸は東西方向、主柱は2本だと推定され、●印を付したピットが西側の主柱穴であろうと考える。このピットには主柱痕は遺存せず、柱は引

き抜かれたようである。主柱穴の西側にベッド状遺構は検出しなかった。また、上述の理由により、炉跡・屋内土壤も検出していない。竪穴部の西壁辺の長さは上端で3.8mで、壁高は貼床面から15cm程である。

出土品は弥生時代終末期頃の土器の小破片である。

土器 図示できるのは2点だけである。

1は壺形土器で、小破片のため、傾きは不正確で径は不明である。口辺部の内外面はヨコナデ、その下部はハケ目調整を施す。



第184図 4号竪穴住居跡実測図 (1/60)

口辺部直下の外面に煤が付着している。胎土は精良で少量の砂粒を含み、焼成良好で黄褐色～黒色を呈する。2は反転復原図で、口径19.4cm程である。内面の頸部直上にハケ目が残る。口唇部の作りは3号住居出土の3・4と異なり、丸くおさめる。外面に煤が付着する。胎土は精良で省力的砂粒を含み、焼成良好で黄褐色～黒色を呈する。

小結 上述の出土品はすべて流入品であり、本住居の営存時期を示すものではない。出土土器から弥生時代の終末期頃には埋没したと考えられる。

(5) 5号竪穴住居跡

(図版48・62、第186・187

図)

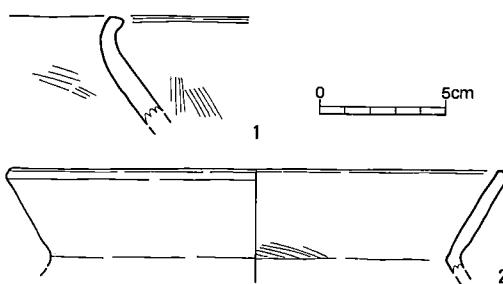
3・4号住居の北、方形周溝墓の北東に位置し、ほぼ半分が調査区外に拡がる。中央を6A・B住居及び3号土壙墓に、南壁を方形周溝墓に切られる。円形プランを呈するが、壁はきれいな円弧を描かずいびつである。

壁高は10cm弱で残存状態は悪い。床面は貼床を行

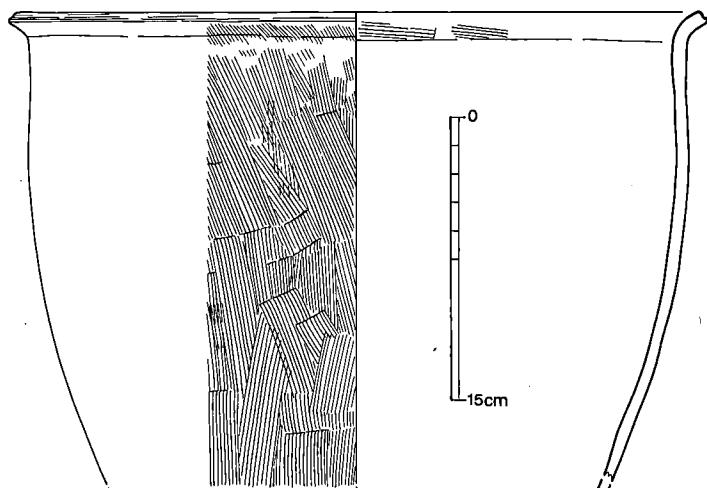
い、貼床と竪穴部掘方底面との間には地山の黄褐色土のブロックを混入した黒褐色土を充填している。床面に多数のピットを検出したが、本住居の主柱穴を特定できなかった。

土器 小破片が出土しているが、本住居の営存時期を示す出土品はなく、図示できるものは流入品の甕1点のみである。

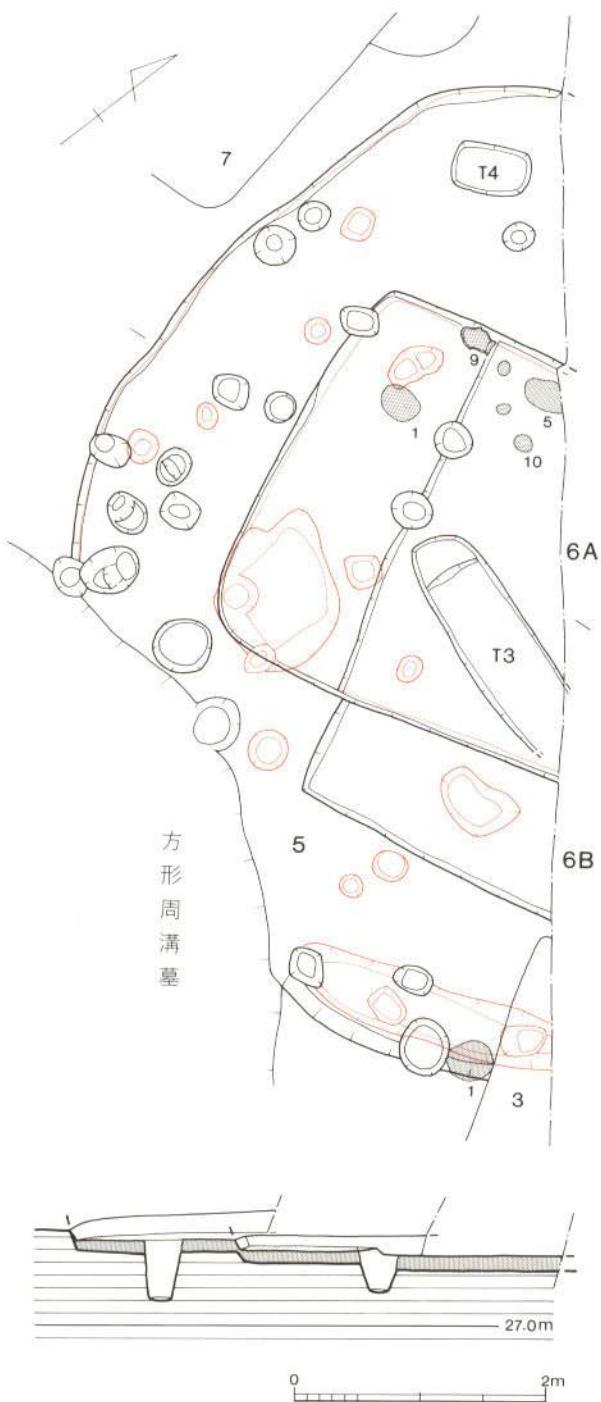
この土器は南壁際に流れ込んだ状態で検出した。貼床面との間に2～5cmの間層をかんでいた。図は反転復原図で口径36cm、残存高25cmである。胎土に細砂粒を多く含み、焼成良好で内外面に煤が付着している。黄褐色～黒色を呈する。



第185図 4号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)



第186図 5号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4)



第187図 5・6A・6B号竪穴住居跡実測図 (1/60)

小結 この土器は先述のように本住居伴うものではない。よって、本住居は弥生時代前期後半頃に廃棄されたと考えられる。

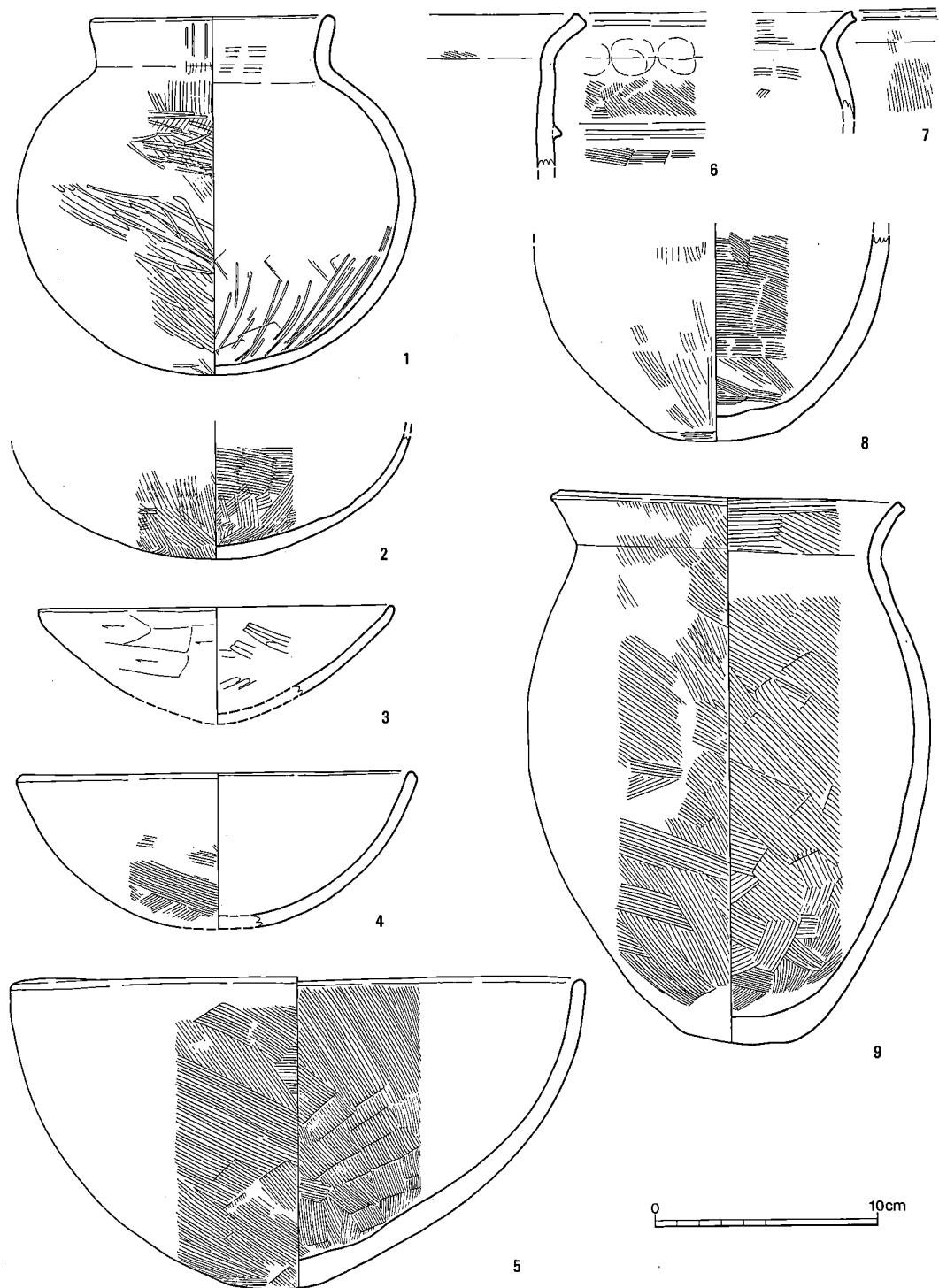
(6) 6A・6B号竪穴住居跡

(図版48・61・62, 第187~189図)

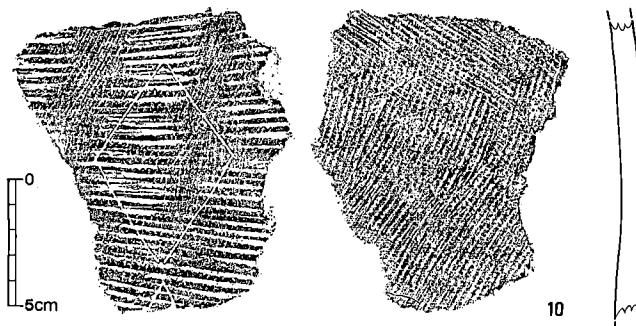
5号住居の中央部分に位置し、過半は調査区外に拡がる。調査当初は6A号住居1軒だと考えて調査を実施したが、調査の過程で、この南側に6B号住居の存在の可能性を示す遺構を検出した。6B号の西壁と6A号のベッド状遺構のラインが一致しており、両住居は一方が平行移動して建てられたようである。

出土品は土器だけである。貼床との間に間層をかんでおり、本住居に直接伴うものではない。

土器 1は口径10.5cm, 器高16.1cmを測る。胎土は精良で少量の砂粒を含み、焼成良好である。内面に煤が付着し、外面に黒斑があり、褐色～黒色を呈する。2は壺の底部であろう。胎土は精良で少量の砂粒を含み、焼成良好で黄褐色～黒色を呈する。3は口径16cm, 器高5.5cm程に復原される。内面は部分的にミガキ調整の跡が認められる。細砂粒を多く含み、焼成良好で橙褐色を呈する。4は口径18cm, 器高7cmに復原される鉢



第188図 6 A号竪穴住居跡出土土器実測図① (1/3)



第189図 6 A号竪穴住居跡出土土器実測図② (1/3)

である。細砂粒を多く含み、焼成良好で黄褐色を呈する。5は口径27.8cm、器高14.1cmを測るややいびつな形状を示す鉢である。細砂粒を多く含み、焼成良好で黄褐色～黒色を呈する。煤が付着し黒斑がある。6・7は甕の小片である。ともに細砂粒を多く含み、焼成良好で橙褐色を呈する。

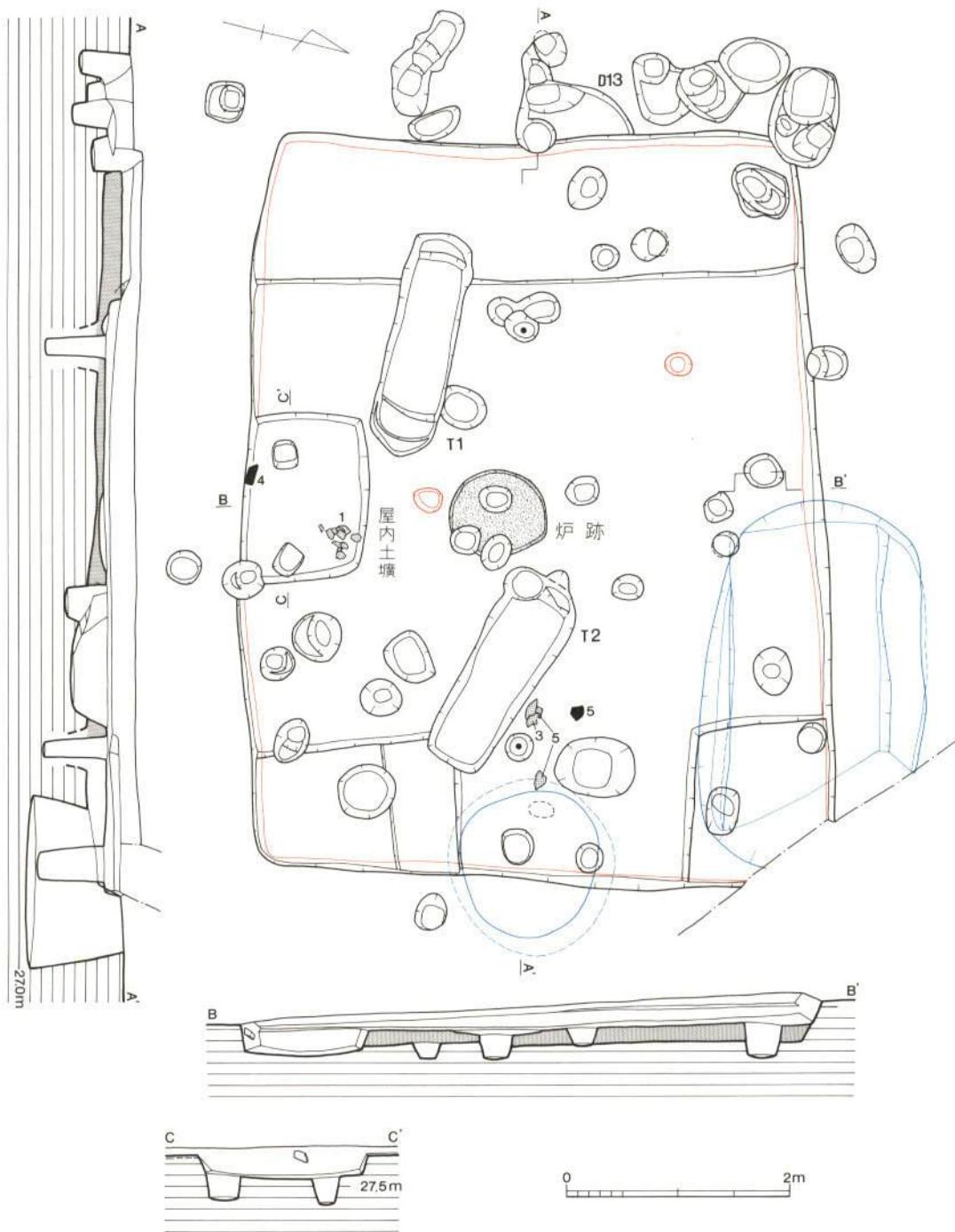
8は甕の底部で外面に煤が付着する。砂粒を多く含み、焼成良好で橙褐色～黒色を呈する。9はかなりゆがんだ土器で、口径は15.1～17cm、器高24.5cmを測る。内外面にハケ目が残るが、外底面及び内面の頸部直下はナデ消されている。胎土に砂粒を含み、焼成は普通程度で橙色～黒色を呈する。外面の過半に煤が付着している。10は甕の胴部の破片で、外面にヘラによる菱形の線刻が上下二つ残っている。両菱形線刻の隅角部は8mm離れ、一边の長さは5cm前後である。上の菱形線刻の筆順は下の2辺が上の2辺から切られているので、下の2辺の先に線刻されたものであり、上の2辺は上の隅角部で左辺が右辺から切られているので右辺が最後に線刻されたことがわかる。下の2辺は下の隅角部に切りあい関係がないので先後関係は不明である。したがって、先後関係は不明ながら下の左右両辺の後に、上左辺、最後に上右辺が線刻されたものである。砂粒を多く含み、焼成良好で内面は暗褐色、外面は淡茶褐色を呈する。

土器の出土状況は、4・6は貼床下層、他は覆土中である。

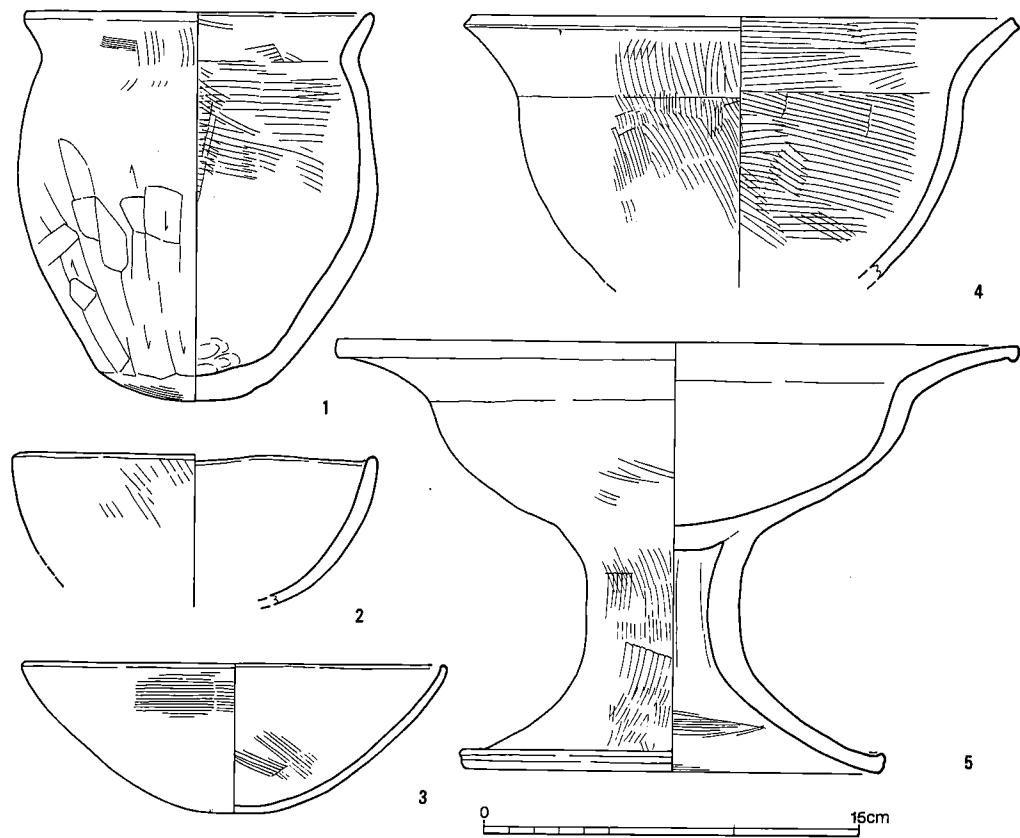
小結 本住居に直接伴う土器はなく、貼床下層出土の4・6から弥生時代終末に建てられ、覆土中の土器から判断して短期間のうちに廃棄されたものと考えられる。

(7) 7号竪穴住居跡 (図版49・60～62、第190～192図)

調査区のほぼ中央に検出した。北東隅がわずかに調査区外に延びるが、全形を知るに支障はない。竪穴部は長方形に近いプランで、西側の短壁長4.5m、南側の長壁長6.5m、面積は30m²程である。12・13号土壙を切り、床面は1・2号土壙墓に切られている。ベッド状遺構は西側短壁に沿った部分と北東及び東南隅の計3ヶ所に付設している。ほぼ中央に炉を、南壁のほぼ中央に屋内土壙を設置する。主柱穴は図中●印を付した二つのピットだと考える。また、対をなすピットが存在し、家屋の上部構造は不明であるが、支柱穴の可能性もある。床面は竪穴部底面から10～20cm上部に貼床し、その間には地山の黄色土のブロック状のもを含んだ黒褐色土を充填する。先述の炉及び屋内土壙は貼床面から切り込んでいる。ベッド状遺構も客土して表



第190図 7号竪穴住居跡実測図 (1/60)



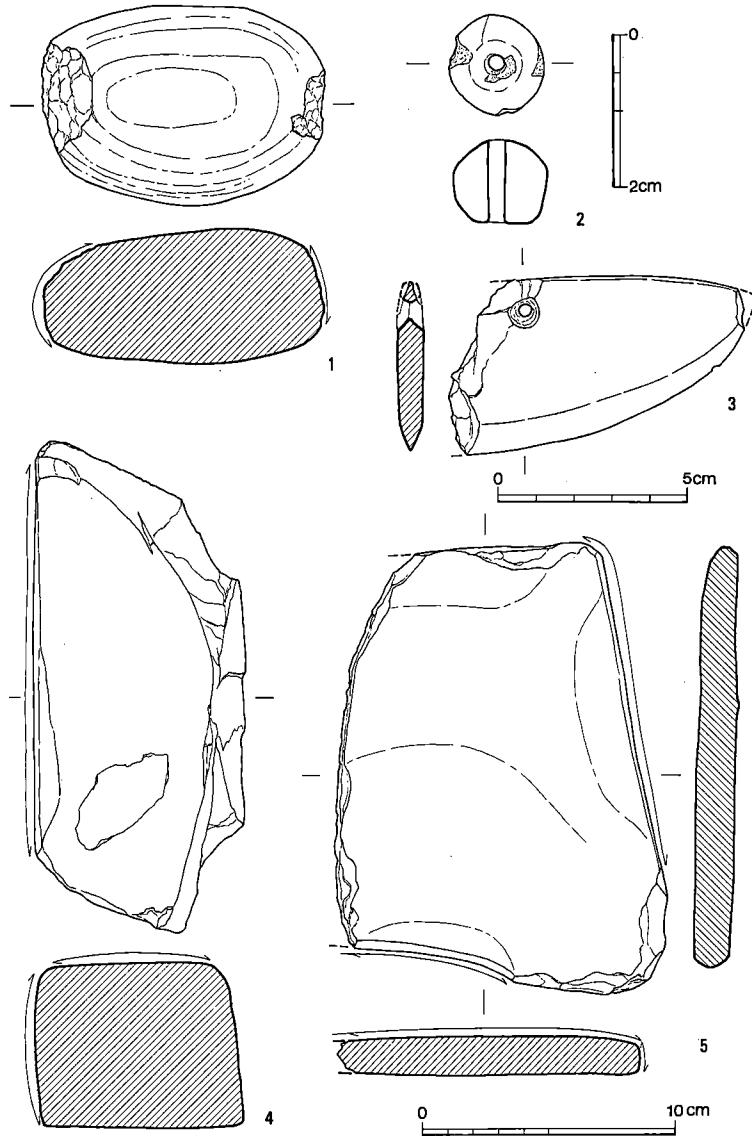
第191図 7号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

面を整えたもので、地山を削り出したものではない。

出土品は土器、土製品及び石製品である。

土器 1は貼床面～屋内土壙埋土上に細片に割れた状態で検出した。図上でほぼ完形に復原される。頸部以下の外面と内底面に煤が付着する。砂粒を多く含み、焼成良好で灰褐色～黒色を呈する。2は覆土中から出土した破片資料で、外面にハケ目が残るが大半はナデ調整である。細砂粒を多く含み、焼成良好で黄褐色を呈する。3は5とともに東側主柱穴の横に、貼床面との間に10cm前後の間層をはさんだ状態で検出した破片資料である。一部にハケ目が残るが大半はナデ消している。細砂粒を多く含み、焼成良好で黄褐色～黒褐色を呈する。4は覆土中から出土した破片資料である。砂粒を含み、焼成は普通程度で褐色～黒色を呈する。5は先述のように3とともに出土した。図上でほぼ完形に復原される。細砂粒を多く含み、焼成良好で黄褐色～黒褐色を呈する。

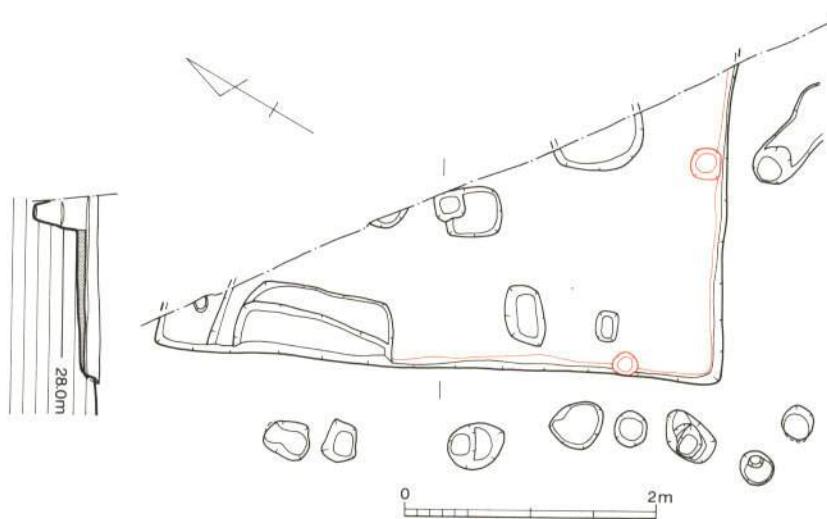
石製品 1は覆土中から出土した敲き石である。2は覆土中から出土した土製の玉である。径12mm、高さ11mm程で中央に径2mm程の孔を穿つ。表面に砂粒が目立ち、焼成良好で淡茶褐色を呈する。3は覆土中から出土した石庖丁片で、小豆色の片岩製である。4は竪穴部南壁際、屋内土壙の埋土上に流れ込んだ状態で検出した砥石である。二次火熱をうけたようで図の下方割れ面、裏面が変色し、一部に焼土かと思われる異物が付着している。砂岩製である。5は貼床面との間に10cm程の間層を噛んだ状態で検出した砥石である。割れた面はやや摩滅しており、意識的に打ち欠いて、使いやすいように整形したものと推測する。雲母片岩製である。



第192図 7号竪穴住居跡出土品実測図（原寸・1/2・1/3）

小結 他の住居に比べて出土品は多彩であるが、直接に伴う出土品は甕1にわずかな可能性が残るだけで他はない。甕1も一部が貼床面に、他の破片のはほとんどが屋内土壙の埋土上に検出されたもので、本住居に伴うか否かは、屋内土壙の使用のされ方及び埋まり方と密接に関連がある。つまり、屋内土壙に木蓋等をしてその上に甕1が置かれ、住居を廃棄し、蓋が腐食して落下する前に土壙内に埋土が流入したのであれば、甕1は本住居に伴うと考え差し支えなかろう。が、屋内土壙のそのような埋まり方の可能性は高くはない。よって、本住居は出土品から、弥生時代終末期前後する頃に廃棄、埋没したと考えられる。

(8) 8号竪穴住居跡 (図版50・61・63, 第193・194図)



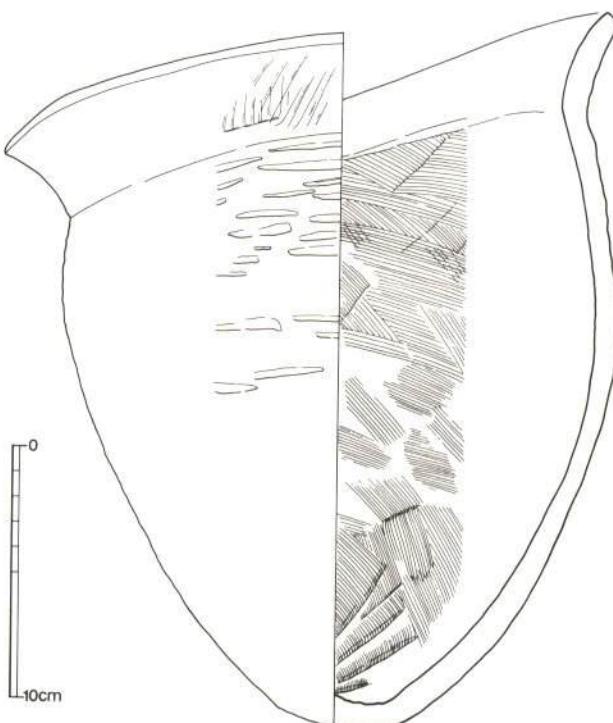
第193図 8号竪穴住居跡実測図 (1/60)

調査区北側に検出した。竪穴部の大半が調査区外に及び、不明な部分を多く残すが、長軸は北東～南西方向であろう。北東隅に幅40cm程のベッド状の高まりがある。また、そのすぐ南に西壁に接して屋内土壌状の落ち込

みがある。が、両者とも竪穴部内での通常の配置状況を示さず、所謂屋内土壌、ベッド状遺構とは別個のものであろう。主柱穴は不明である。

土器 床面近くから出土したひどくゆがんだ甕である。体部外面の上半には粗いタタキ目が残る。細砂粒を含み、焼成良好で黄褐色～黒色を呈する。外面、内底面に煤が付着している。

小結 出土状況から、本住居に直接に伴うとは言い難い。流入品の可能性が高く、本住居は弥生時代後期後半～末頃に埋没したものであろう。



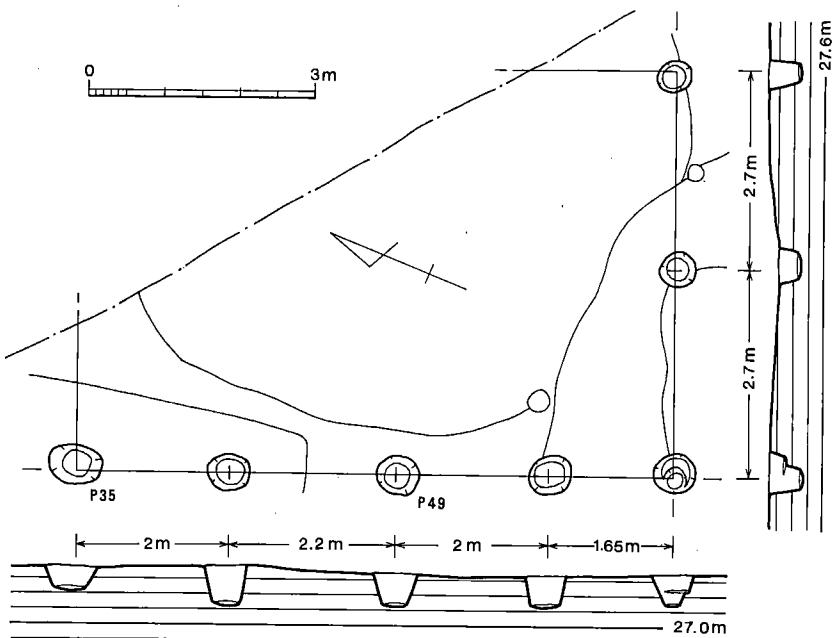
第194図 8号竪穴住居跡出土品土器実測図 (1/3)

D 掘立柱建物

調査区内に多くのピットを検出したが、掘立柱建物としての柱配置を認められるのは1棟分だけであった。調査面積が狭いため、掘立柱建物の柱穴の一部が調査区内に顔を出しているものがあるかも知れないが、それについては遺構として把握することは困難であった。

(1) 1号掘立柱建物 (第195図)

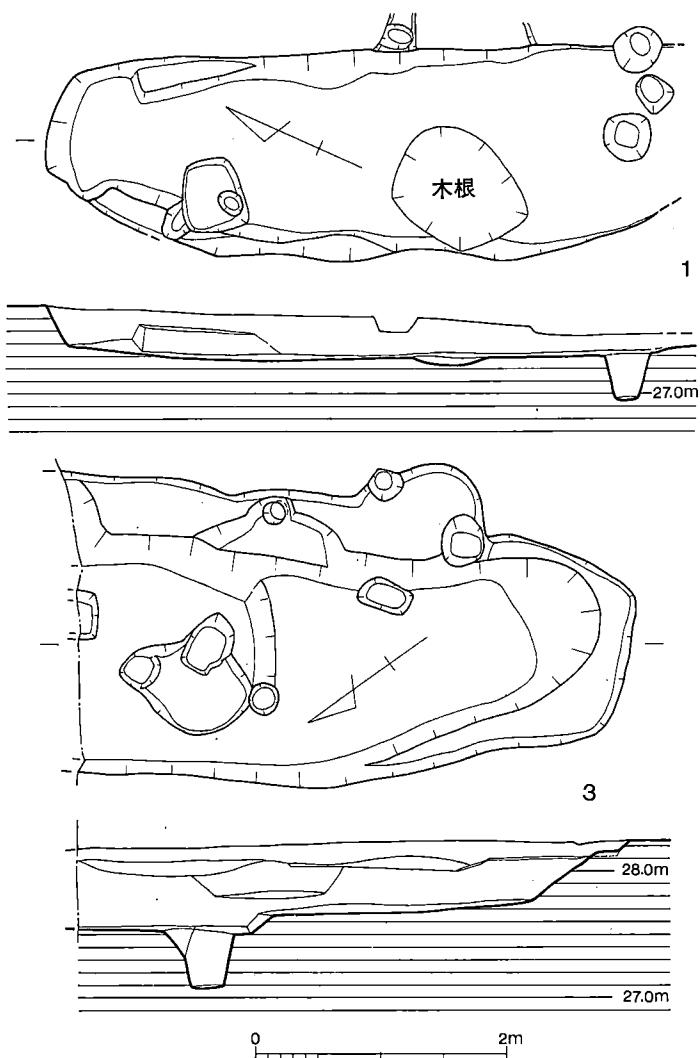
調査区の南半部に方形周溝墓の北東隅、5・6A・6B・7号住居等を切って建てられている。南北4間、東西2間分を検出した。東にさらに延びるのか否かは、調査範囲の関係でわかつには判断できない。しかし、掘方の規模が大きくなないことから本建物の規模を想定すれば、東西分は現在検出している柱穴までで完結し、2間×4間の建物である可能性が高いと考える。柱間寸法は下図のとおりで、梁行寸法は2.7m等間であるが、桁行寸法はまちまちである。柱穴からの出土品は、P35・P49で検出したがすべて弥生土器で終末期頃の小片であった。本建物の所属時期の理論的な上限は弥生時代終末期であるが、建築時期は不明である。



第195図 1号掘立柱建物実測図 (1/100)

E 土 壤

調査区全体にわたって15基に遺構番号を付したが、調査の過程で住居跡、土壙墓、木根跡、黒褐色土のシミで浅く遺構と認められないものなどがあった。それらを整理すると、2号土壙→シミ・5号土壙→木根跡・6号土壙→搅乱・10号土壙→1号竪穴住居跡・11号土壙→2号竪穴住居跡・14号土壙→通常のピット・15号土壙→4号土壙墓となり、1・3・4・7・8・9・12・13号の計8基が土壙である。



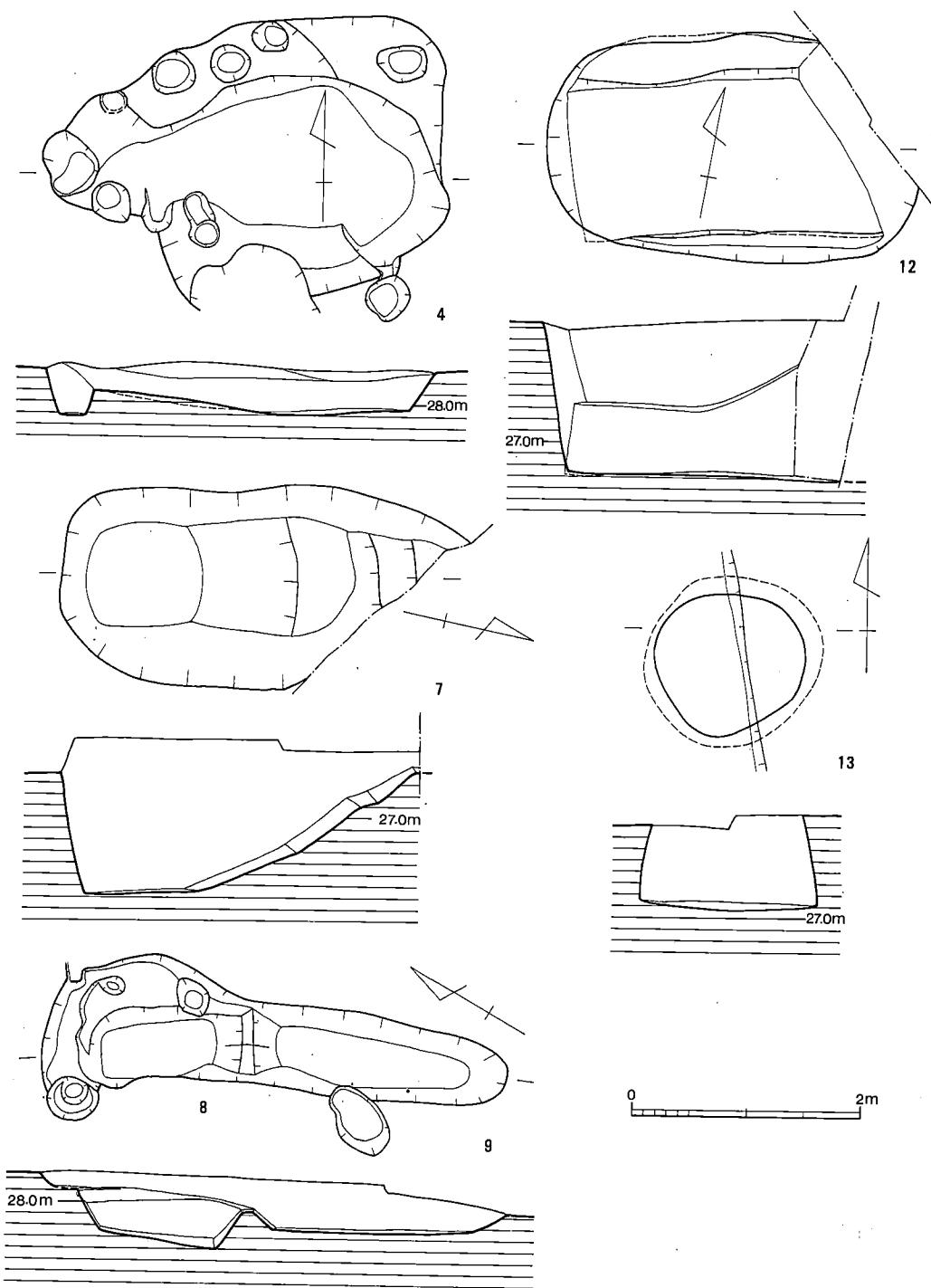
第196図 1・3号土壙実測図 (1/60)

12・13号の計8基が土壙である。

(1) 1号土壙D 1 (第196・199図)

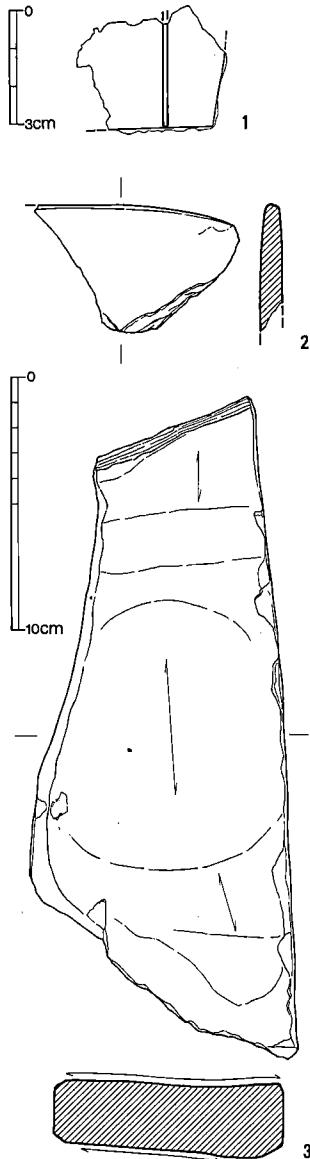
調査区中央部の西側に検出し、2号住居を切っている。南側の遺構範囲はピット等の搅乱で不明であるが、上端で長さ5m以上、最大幅1.7m、深さ0.3m程を測る。ピットや木根等の搅乱を受けている。出土品は少量の土器片を検出した。

1は土師器坏の小破片で、口径は不明で傾きは正確ではない。内外面をナデ調整し、細砂粒を多く含み、焼成良好で黄褐色～黒色を呈する。2は弥生土器の壺か甕の底部で、細砂粒を多く含み焼成良



第197図 4・7・8・9・12・13号土壤実測図 (1/60)

好で褐色～黒褐色を呈する。3は口辺部の小破片で傾きは不明である。細砂粒を多量に含み、焼成良好で褐色を呈する。



第198図 7・8・12号土壙出土品実測図 (1/2・1/3)

(2) 3号土壙D 3 (第196・199図)

調査区北半部、8号住居の南側に位置し、東の部分は調査区外に延びる。掘り込み面は土層図(第174図)によれば表土直下である。遺構検出面において、上端で長さ4.4m以上、最大幅2.4m、深さ0.6m程である。出土遺物は弥生土器及び青磁の小破片である。

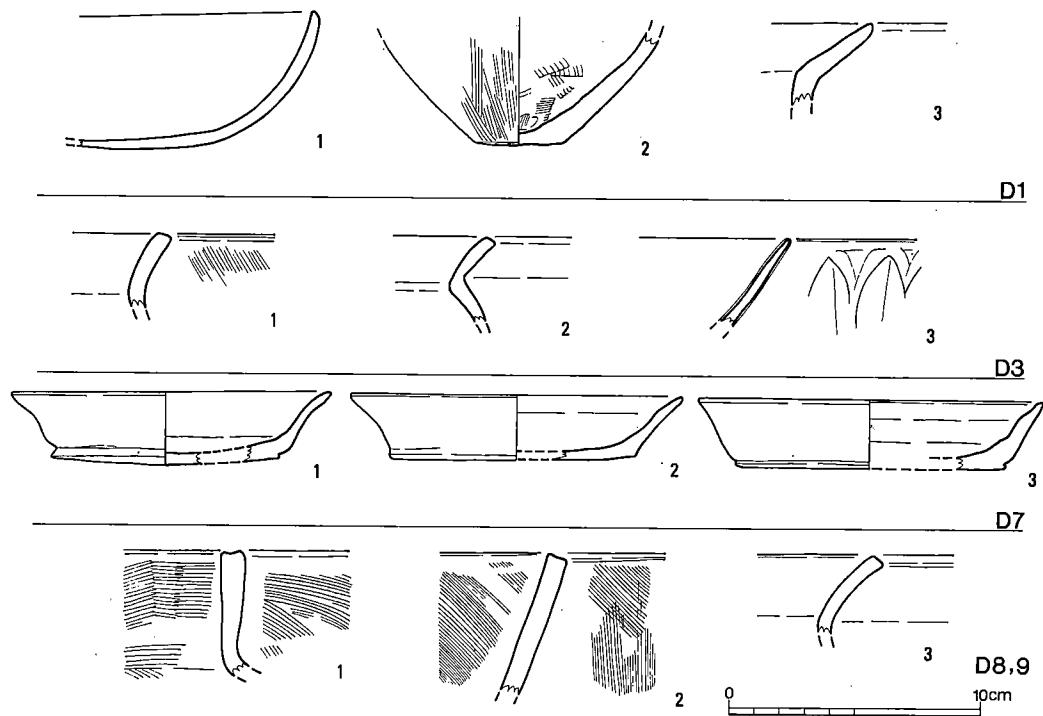
1は甕口辺部の小破片で傾き不明である。細砂粒を多量に含み、焼成良好で黄白色～褐色を呈する。2は壺かと思われる口辺部の小破片で傾きは不明である。細砂粒を多量に含み、焼成良好で褐色を呈する。3は龍泉窯系の青磁碗の小破片で傾きは不明である。

(3) 4号土壙D 4 (図版52、第197図)

調査区北部、8号住居の西側に位置する。肩及び傾斜部分を多数のピット等で搅乱されている。プランは不整楕円形で、上端で東西長3.5m程、南北幅2.4m程、深さ0.4m程である。出土遺物は弥生土器の極小片少量である。

(4) 7号土壙D 7 (図版60、第197・198図)

調査区南端部、4号住居の南側を切った状態で検出した。東の部分は調査区外に延びる。掘り込み面は土層図(第174図)によれば表土中からのようにある。遺構検出面の上端で東西長3.6m程幅2m弱で、深さは床面が階段状に掘られているので、最深部で1.4m弱、東の最浅部で0.1m程である。出土遺物は鉄製品と土器である。土器1～3はいずれも糸切底の壺である。口辺部の形状に各々差異があるが、口径13cm前後、器高2.5cmである。ともに調整は口辺部内外面はヨコナデ、内底面はナデ調整である。細砂粒をわずかに含み、焼成良好で、1；明茶色、2；橙褐色、3；褐色を呈する。鉄製品1は鍛造品で、図の下・右辺は生きているが、原形不明である。



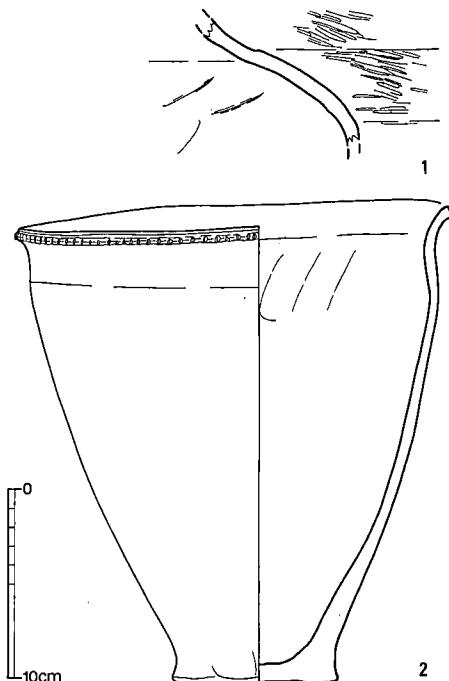
第199図 1・3・8・9号土壤出土土器実測図 (1/3)

(5) 8・9号土壤D8・9 (第197~199図)

3号土壤の西側に検出した。北にD8, 南にD9と連接して掘り込まれている。検出時には細長いひとつの土壤として掘り進めたため、当初、出土遺物は8・9号土壤上層として取り上げた。二つの土壤と認識して以後、各々別個の遺構出土として取り上げた。8号土壤の北側は二段掘のように見受けられるが下段の上端で寸法を取ると、南北長1.45m, 幅0.7m, 深さ0.4m程で、床面は北側に比べて南側が18cm低い。9号土壤は上端で南北長2.25m, 幅0.75m, 深さ0.4m程である。床面が水平で規模から見て土壤墓の可能性もあるが、一応、土壤として報告する。

出土品は弥生土器及び石製品である。

土器1・3は8・9号土壤上層として取り上



第200図 12号土壤出土土器実測図 (1/4)

げた口辺部で、小片のため傾きは不正確である。ともに細砂粒を多く含み、焼成良好で、外面に煤が付着し黄褐色～黒色を呈する。土器2は9号からの出土品で小片のため傾きは不正確である。細砂粒を多く含み、焼成良好で黄褐色～橙褐色を呈する。他に石庵丁の破片が出土している。刃部・穿孔部を欠失するので形状は不明である。

(6) 12号土壙D12 (図版63, 第198・200図)

調査区のほぼ中央部で7号住居北壁に切られた状態で検出し、東側の上端は調査区外に延びる。上端は崩落のため長楕円形を呈するが、下端は長方形である。本来は上端は長方形プランであったろう。形状の上端で東西長3.3m以上、幅2m、深さ1.4m程である。出土遺物は弥生土器と石製品である。

土器1・2は前期の弥生土器である。1は埋土上層から出土した壺の肩～胴部にかけての破片で、傾きは不正確である。外面はヘラミガキし、内面はヨコナデ、工具によるナデ調整を施している。胎土は精良で細砂粒を若干量含み、焼成良好で、外面に煤が付着し黄褐色～黒色を呈する。2は埋土下層から出土した口径23cm、器高24～25cmを測るほぼ完形の甕である。頸部下でゆるく屈曲し、口唇部に刻み目を施す。内外面はナデ調整である。細砂粒を多く含み、焼成良好で、外面に煤が付着し黄褐色～黒色を呈する。3は埋土上層から出土した片岩製の砥石である。図の表裏面が使用面で、右側面も若干摩滅している。

(7) 13号土壙D13 (図版52, 第197図)

調査区のほぼ中央部で7号住居の東壁に切られた状態で検出した円形の土壙である。断面はフラスコ状を呈し、現状で上端径1.3m前後、下端径1.5～1.6m、深さ0.8mで、底部は中央が低くなる。出土遺物は土器の極小片である。

F 溝

調査中に溝としたのは3条あった。ひとつは方形周溝墓として後述するもので、当初は単なる溝状の遺構としてしか検出できず、2号溝とした。二つ目は7号土壙の南に1号溝としたもので、これは、溝状に搅乱されたもので埋土も極めて新しいもので、報告から除外し図示していない。三つ目は7号住居の北側に検出した幅1m弱、長さ7.5m程のもので3号溝とした。

(1) 3号溝M3 (第173図)

7号住居の北側にほぼ東西に走る溝で深さ15cm程、幅1m弱で、長さ7.5m分を検出した。西側は傾斜地のため消えているが東にはまだ延びる。出土遺物は土器の極小片である。

G 方形周溝墓

調査区の南に検出した。本遺跡は低丘陵の先端に位置し、後世の削平により遺構の遺存状態が全体に悪く、本方形周溝墓もその例にもれず主体部及び南・西の周溝は遺存しない。1基しか検出しなかったが、1号方形周溝墓として報告する。

(1) 1号方形周溝墓H1 (図版53~55・63・64、第201~204)

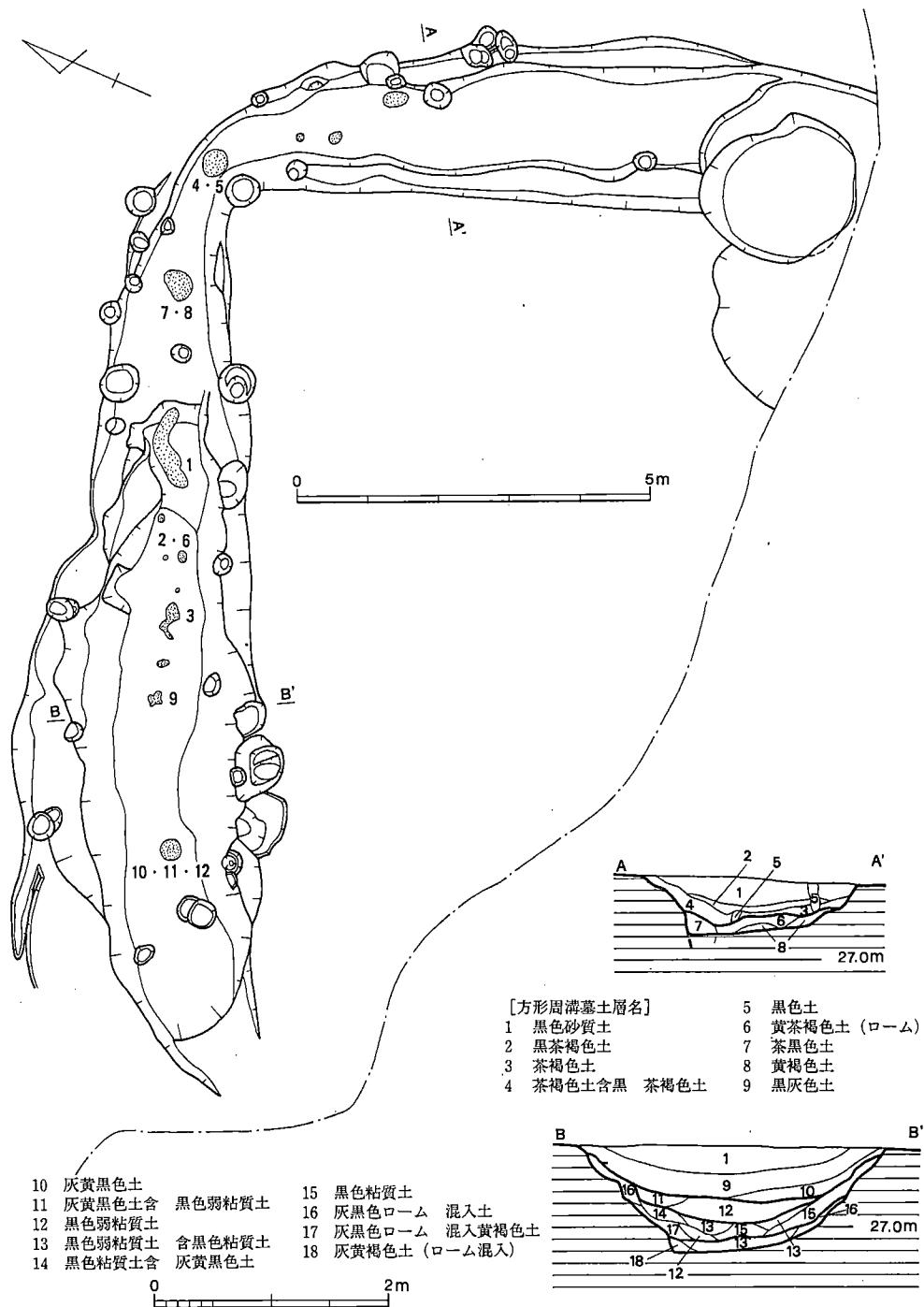
遺構検出をして時点では矩形の溝という認識で2号溝として調査を実施したが、掘り進めていくと、溝底から少し浮いた状態で各個体づつある程度まとまった状態で古式土師器が出土し始めたため、主体部は見つからなかったが方形周溝墓と判断した次第である。そのような事情のため土器を中心とした出土遺物は「溝2」として取り上げた。

東及び北の周溝の過半を検出したが、北周溝は丘陵斜面側では標高が下がるに従って周溝は相対的に浅くなり最後には消える。東周溝の南側調査区外についてダメ押し調査をした結果は北周溝と同様であった。北周溝は13m、東周溝は10mについて確認した。北周溝の西端部は消えかかりながらも南側にわずかながらカーヴしており、北周溝と遺存しない西周溝との隅角部の存在をこの部分に想定できるのではなかろうか。

周溝の形状は特異で、北隅角部は他の部分と比べて極端に狭く、浅くなっている。この隅角部を境に、北周溝は西に向かって底面の標高が下がり最深部で1m程で、東周溝も南に向かって底面は緩やかに下降し最深部は0.5m程である。周溝の2ヶ所の土層断面によると、周溝内側からの土砂の流入を明確に示すものではないが、地山の黄色ローム混じりの層が存在し、周溝の地山部分の掘削土の処理を本周溝墓の盛土に使用したと推測することが合理的であろうと考えられることから、本周溝墓は盛土が存在した可能性が高い。また、主体部を地山面で検出できなかったことは、盛土内に主体部が構築されていたことを示している。

方形周溝墓15基を検出した甘木市立野遺跡(註2)では、調査区外に遺構の大半が延びる5・8・15号、傾斜が急なため中心主体部が検出できなかった12・13号周溝墓を除いて、この遺跡最大の9号周溝墓は主体部があるべき部分は調査区内に含まれたが地山面で主体部を検出できなかった。その他の周溝墓は地山面で主体部を確認している。これは盛土内に主体部が構築されていたことを示す事例で、座禅寺遺跡の方形周溝墓を考えるうえでは示唆的な遺構である。立野遺跡の埋葬施設は箱式石棺が主体を占めた。座禅寺遺跡でも埋葬施設は土壙や木棺ではなく箱式石棺であろうと推測する。

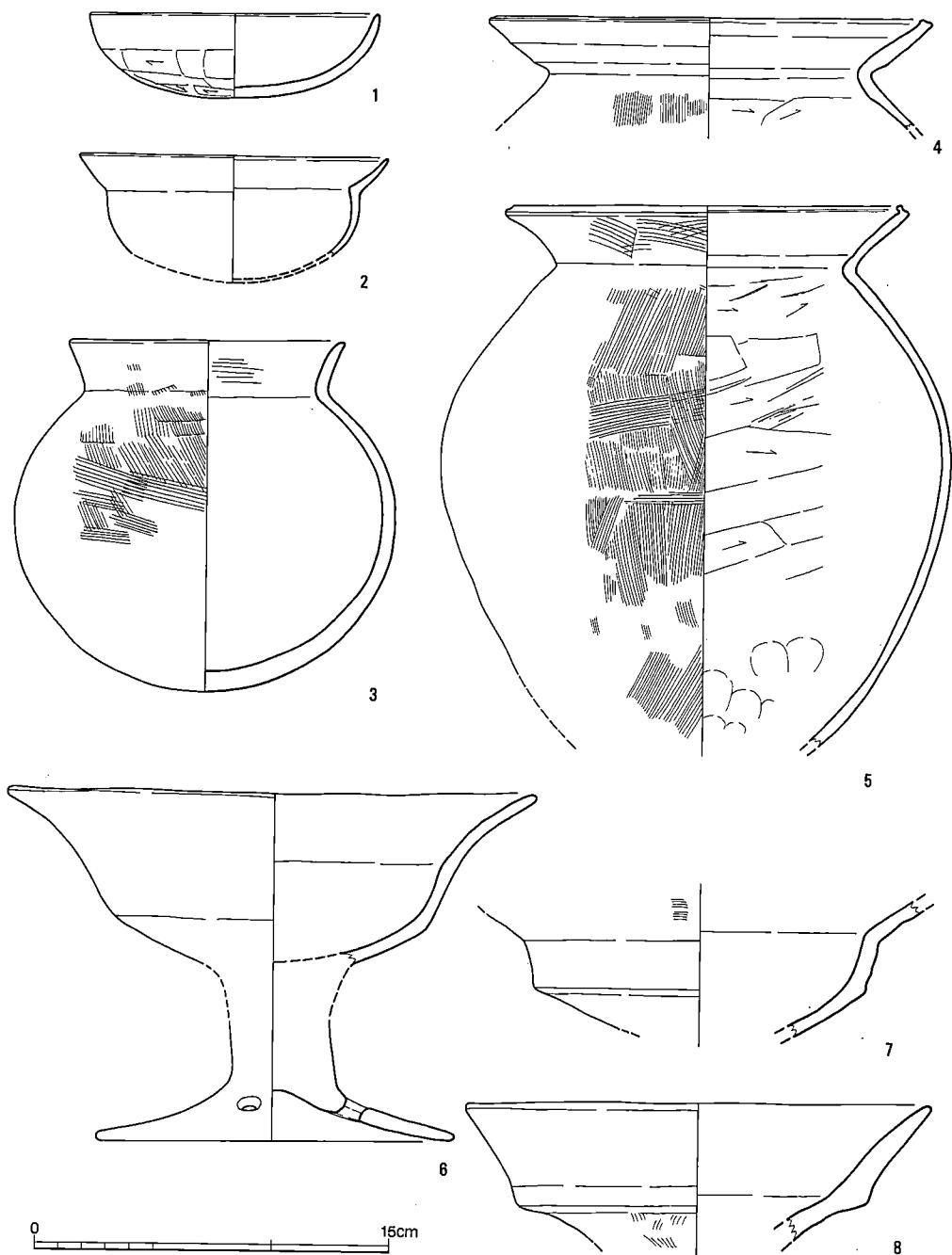
出土遺物は溝上層では歴史時代の土器破片を検出したが、本周溝墓に伴う出土遺物は溝底と間層をはさんで検出した土師器である。この土師器と伴うかのようにして接近して同一層位から出土した環状石斧(第180図)があり、遺構に伴う出土品については考えられざられる。



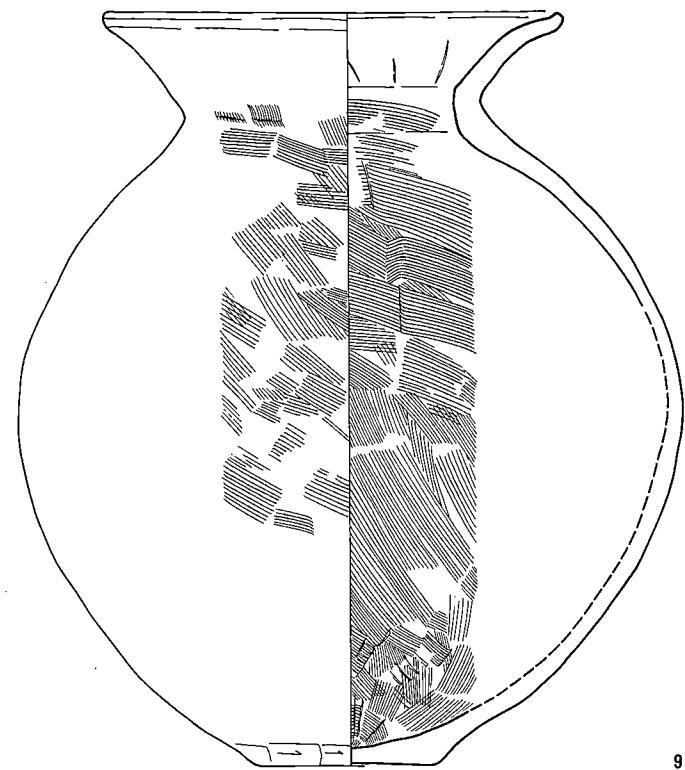
第201図 1号方形周溝墓実測図 (1/100)

土器 本周溝墓に伴う土器は土層図に即して説明すれば、東周溝の土層断面A-A'では6~8層の直上、北周溝B-B'では13・16・18層が流入した後の埋土中に検出した。朝倉地方の方形周溝墓では通常の供獻土器の出土状況である。以下に図示した14個体の土器はそのすべてが本周溝墓に伴うと即断できない。ただ、転落あるいは置かれた状態である程度まとめて出土した土器を中心に提示した。なお、土器番号は溝内で検出した土器の出土位置番号と対応する。

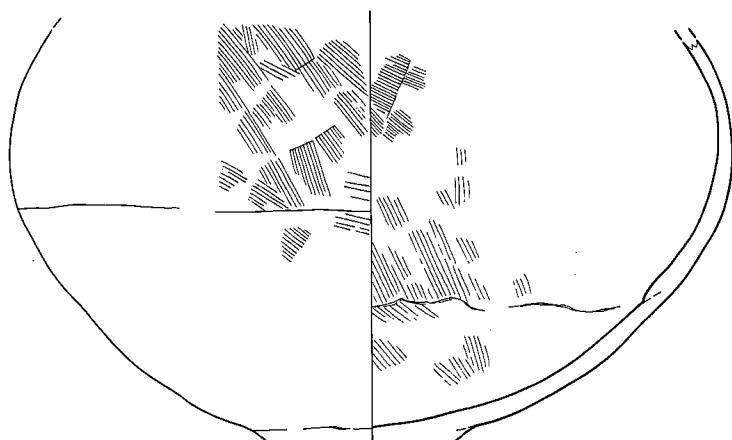
1は一部を欠失するが図上で、口径12.4cm、器高3.6cmに復原される。外面は底部を中心に広い範囲をヘラケズリする。口辺部内外面はヨコナデ、内底面はナデ調整を施している。胎土は精良で若干の細砂粒を含み、焼成良好で、黒斑があり黄褐色・茶褐色・黒色を呈する。2は口辺部の一部と底部を欠失し、口径12.9cm、器高5.3cm程に推定復原される。現存部は磨滅しており、調整は不明である。胎土は若干の細砂粒を含み、焼成良好で茶褐色を呈する。3は反転図で、口径11.6cm、胴部最大径16cm、器高14.8cmに復原される。胴部中位以下の内外面は磨滅して調整は不明であるが、口辺部内外面はヨコナデ、内面の頸部以下はナデ調整、その他はハケ目調整を施している。胎土に細砂粒を多く含み、焼成良好で内面は褐色、外面は茶褐色で底部は一部黒色を呈する。遺存部分が少ないので確証はないが、外面に黒斑がある可能性がある。4は小破片の反転図で、復原口径18.6cm、現存高4.6cmである。頸部直下までの内外面をヨコナデ調整し、それ以下は内面はヘラケズリをし、外面はハケ目調整を施す、胎土に金雲母等の細砂粒を多く含み、焼成良好で黄褐色を呈する。ヘラケズリをされた部分は器壁は薄い。5は復原口径16.4cm、現存高22.6cm、胴部最大径は胴部中位より上にあり21.5cmを測る。口唇部はツマミ上げられて古式の要素を残すが、体部はナデ肩・長胴でだれており、内面をヘラケズリするが器壁の厚味は変わらない。胎土に金雲母等の砂粒を多く含み、焼成良好で褐色を基調とし、外面の一部に煤が付着する。6は中実の脚柱部の一部及び脚裾部の大半を欠失するが、坏部口径20cm、脚裾部径15.1cm、器高14.7cmに復原される。脚裾部に円形の3孔を配する。風化・磨滅が著しいが坏部外反部及び脚裾部外面には暗文の痕跡が認められる。胎土に金雲母等細砂粒を多く含み、焼成良好で茶褐色を呈する。7は高坏の小破片で、器面は磨滅しているがミガキ調整の痕跡を残している。胎土は精良で小砂粒を若干量含み、焼成良好で茶褐色を呈する。8は高坏の小破片であろうと思われ、器面は磨滅しているが外面の一部にハケ目を残す。口径19.5cm、現存高5.8cmである。胎土は精良で細砂粒を若干量含み、焼成良好で茶褐色を呈する。9は口径17.8cm、胴部最大径26.2cm、器高30cmを測る壺である。平底で底部付近の外面はヘラケズリを行う。口辺部内外面は磨滅するがヨコナデ調整のようで、それ以外の部分は丁寧なナデ目調整を行う。胎土は精良で細砂粒を若干量含み、焼成良好で、胴部下半の外面に黒斑があり、口辺部内外面及び体部外面には煤が付着しており、褐色~黒色を呈する。10は平底の壺で胴部中位以下が残存する。胴部最大径28.6cm、現存高16.3cmを測る。粘土の継ぎ目が器面に残る。外面のハケ目の上から部分的にナデ調整を行い。胎土に細砂粒を多く含み、焼成良好で外面



第202図 1号方形周溝墓出土土器実測図① (1/3)



9

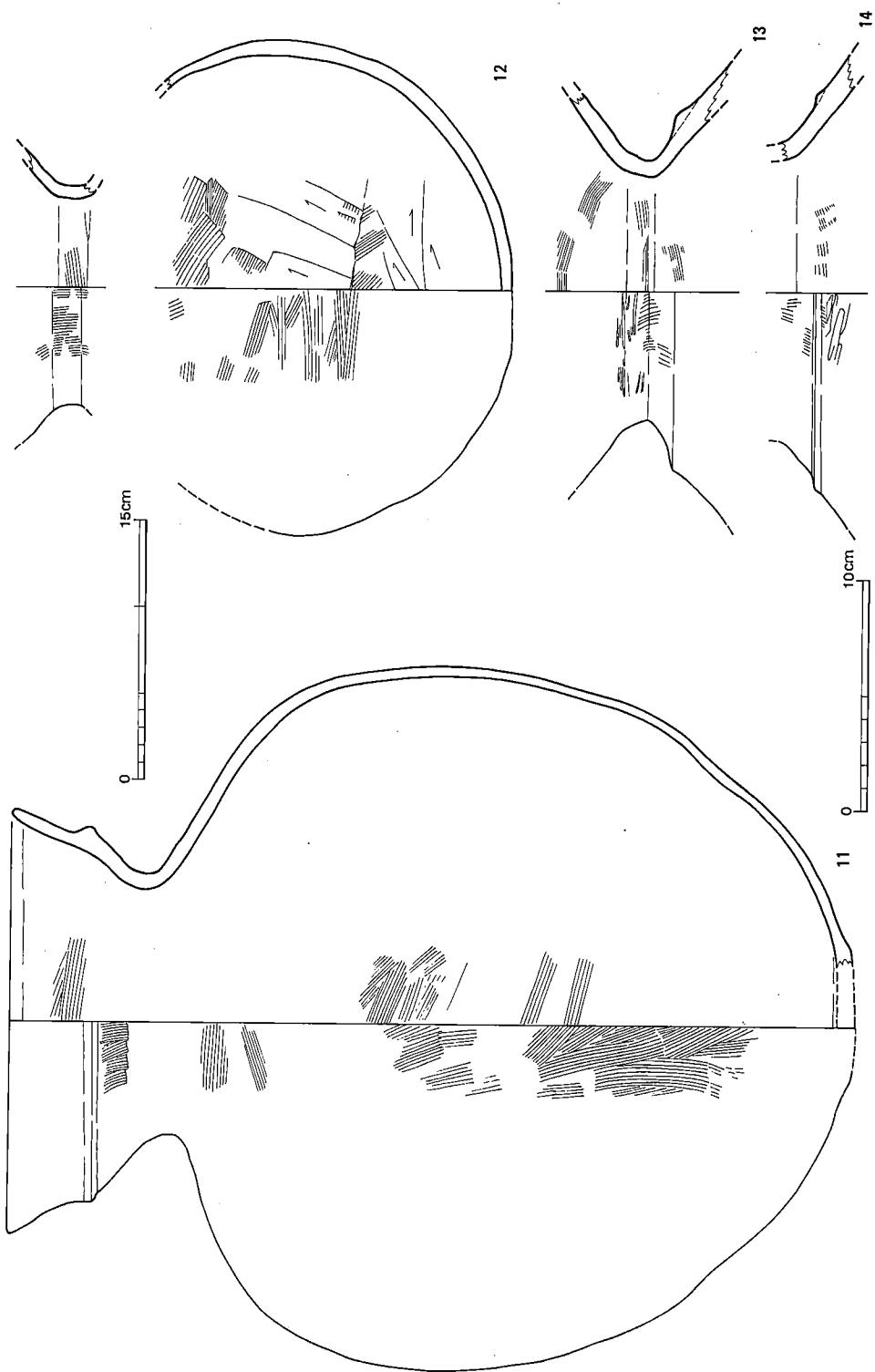


10



第 203 図 1 号方形周溝墓出土土器実測図② (1/3)

第204図 1号方形周溝墓出土土器測量図③ (1/3・1/4)



に黒斑が残り、褐色～黒色を呈する。11は図上で口径25cm、胴部最大径42cm、器高49cmを測る平底の二重口辺の壺である。内外面は磨滅しており、部分的にハケ目が残る。胎土に砂粒を多く含み、焼成は良かったのであろうが二次加熱を受けており、ややもろい。12は球胴の壺で、口辺部上半及び肩部を欠く。平底で器壁は割と厚い。外面はミガキの痕跡が残り胴部内面はヘラケズリの後にハケ目調整を行う。胎土に細砂粒を多く含み、焼成良好で茶褐色を呈する。13・14は鼓形台の破片資料である。内外面にハケ目調整を行い、外面にはミガキ調整痕が残る。胎土は精良で細砂粒を含み、焼成良好で黄褐色～茶褐色を呈する。

小結 先述のように本周溝墓は削平され、周溝も過半を失い、主体部も残存しない。が、朝倉地方の地域的特性から主体部は箱式石棺の可能性が高いと思われる。また出土資料は、周囲に前代の竪穴住居跡等の遺構があることから、周溝埋土には縄文時代～歴史時代の破片資料を中心に多くの他時期の土器等を含んでいるが、図示した土器は溝底が若干埋まった後に転落したか置かれたような状態で検出したものであり、本周溝墓の構築時期を示す資料である。図示した土器は布留式並行期の古式の様相を示しており、本周溝墓の構築時期は布留式古段階並行期頃と考えられる。

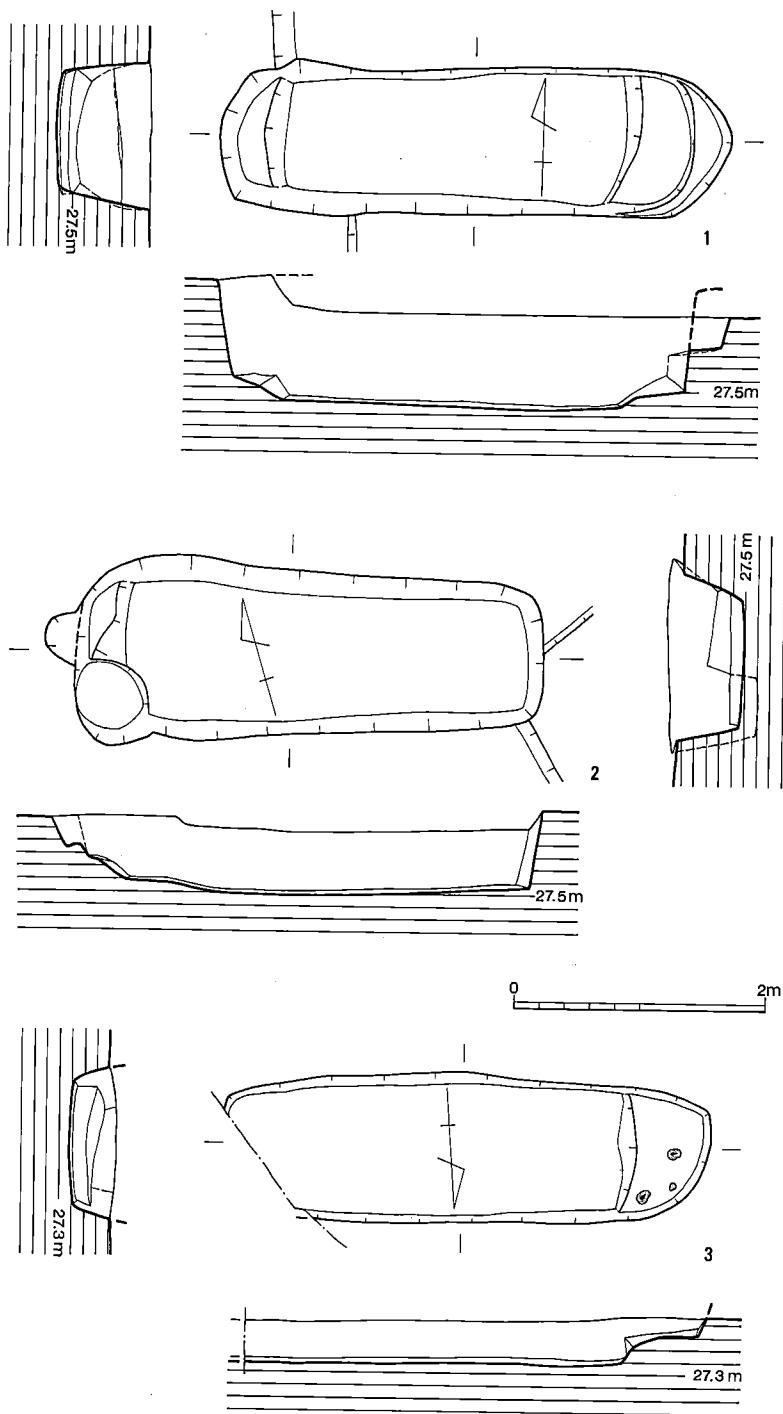
H 土 壤 墓

方形周溝墓の北に、古墳時代前期の所産と推定する土壙墓3基(T1～T3)、平安時代の土壙墓1基(T4)計4基を検出した。T1～T3の主軸は周溝墓の北溝とほぼ平行する。竪穴住居跡を切って當まれているため、出土遺物には前代の住居跡に含まれる弥生土器の破片が存在する。T1～T3は副葬品等、土壙墓に直接伴う出土品はない。T4も竪穴住居跡を切って當まれており、埋土に弥生土器の破片を含むが、内黒土師器2点を供獻していた。

また、土壙として説明したD8・9は主軸の周溝墓の北溝とほぼ直交し、プラン及び規模から土壙墓の可能性を残している。

(1) 1号土壙墓T1 (図版56、第205・206図)

7号住居の西側のベッド状遺構及び貼床を切って當まれている。住居を廃棄した後に掘られたものであるが埋土上面でプランを確認できなかった。短壁の底部は西側は2段で、東側は3段に図示しているがこれは掘り方の間違いで、当初から東西とも2段に掘っている。上端で主軸長1.88m、幅0.6m前後、深さは0.5m以上である。東西の段に挟まれた部分は上端で主軸長1.5m、段の高さは東側5cm、西側5～10cmである。右に図示した土器は埋土中から出土した大甕頸部の破片で、外面に菱形のヘラ描文様がある。筆順は下2片の後に上右片、最後に上左片を描く。上片の長さは左右両片とも2cmである。砂粒を多く含み、焼成良好で淡茶褐色を呈す



第 205 図 1 ~ 3 号土壤墓実測図 (1/30)

る。

(2) 2号土壙墓T2 (図版56, 第205図)

7号住居を切って営まれており、埋土及び出土遺物はT1と同様である。上端で主軸長1.85cm, 幅0.55~0.6m, 深さ0.3m以下である。西側床面は5cm程高まり枕かと推測される。また、この枕状構造と西側短壁には高さ10cm程の段を造っている。

(3) 3号土壙墓T3 (図版57, 第205図)

6号住居を切って営まれている。東側短壁は調査区外に延びる。上端で主軸長2m弱, 幅0.55m, 深さ0.2m以上である。西側の床面に高さ10cm程の枕状のものがあり、上面に赤色顔料をわずかに検出した。

(4) 4号土壙墓T4 (図版57・64, 第207・208図)

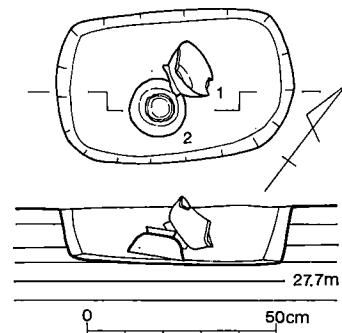
5号住居を切って営まれた小型の土壙墓である。プランは住居の埋土上面で明瞭に確認できた。上端で主軸長63cm, 幅40cm, 深さ15cm以上である。中央に土師器の碗2個が転落した状態で出土した。おそらく、木蓋の上に供献されたものであろう。

土師器 1は口径15.4cm, 器高7.8cmを測るほぼ完形の内黒の碗である。内底面はナデ、他はヨコナデ調整を施す。胎土は精良で砂粒をわずかに含み、焼成良好で内面の一部は黒く、外面は橙色を呈する。2も内黒の碗で、口径14.3cm, 器高6.6cmを測る。内面は横方向のヘラミガキ、外面は一部磨滅して不明ながらヨコナデ調整を施している。

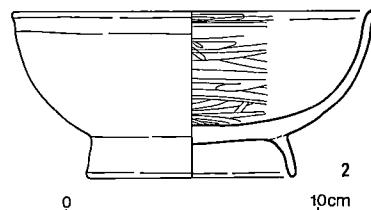
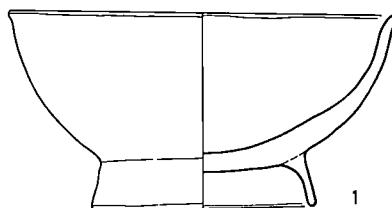
小結 4基の土壙墓は二時期に分かれ、T4は平安時代前期(9世紀末頃)に営まれたであろうことが出土土器から知ることができる。規模から火葬人骨を納めたものであろう。他の3基は、方形周溝墓とさほど遠からぬ時期に営まれた隨葬墓であろうと推測され、頭位はT3で明色顔料が出土したことより、西側であろう。



第206図 1号土壙墓出土土器実測図 (1/3)



第207図 4号土壙墓実測図 (1/20)



第208図 4号土壙墓出土土器実測図 (1/3)

I ま と め

ここに報告した座禅寺遺跡は、先述のように低台地先端部の一部を路線がかすめる状態のため（第2図-6頁），調査対象地は2,600m²とごく狭いものであった。台地縁辺部は削平及び自然崩壊等のため遺構の遺存状態が悪く、また、遺構の多くは調査区外に延びるものが多く、全容を知ることはできるのはごく一部であった。

竪穴住居跡は同じ立地条件の他遺跡と同様に床は貼床され、本遺跡では弥生時代前期の5号住居においても貼床されており、その手法は同終末期頃の住居と同様であった。前期の住居の貼床例は稀で、今後の資料の増加をまって、その系譜や手法等の検討が必要であろう。

住居跡の出土品については完形品に近い資料も存するが、その出土状態から各住居に伴うものはほとんど無く、貼床下からの出土例を除いてはすべて流入品か投棄されたようである。よって、住居の使用時期あるいは廃棄の直前の時期を示す資料はなく、他の遺構から移動したものであり、住居の営存時期を出土資料から正確に特定することはできなかった。

福岡県下の方形周溝墓の出土土器は在地系土器は少なく、中国・近畿地方の外来系土器と思われるものがほとんどである。本周溝墓の出土土器もその流れに沿ったものである。また、土器の出土状態も溝底直上ではなく間層を挟んでおり、この点も他の例と同様である。

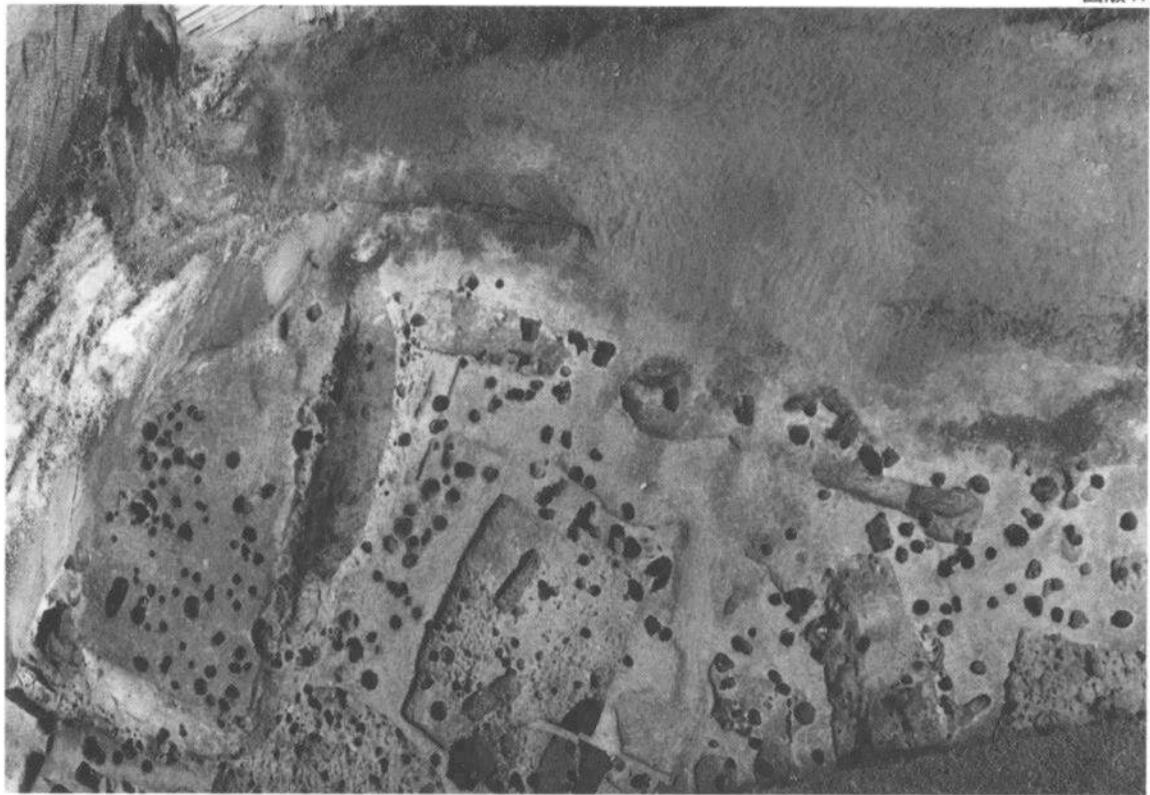
以上のように本遺跡は調査面積が狭く、その一部を調査したにすぎなかつたため、遺跡の性格を明らかにするには不十分であった。が、縄文時代の出土品に見るべきものがあり、ささやかな成果であった。

註1 福岡県教育委員会 「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告-5- 立野遺跡(2)」 1984
註2 同 上

図 版



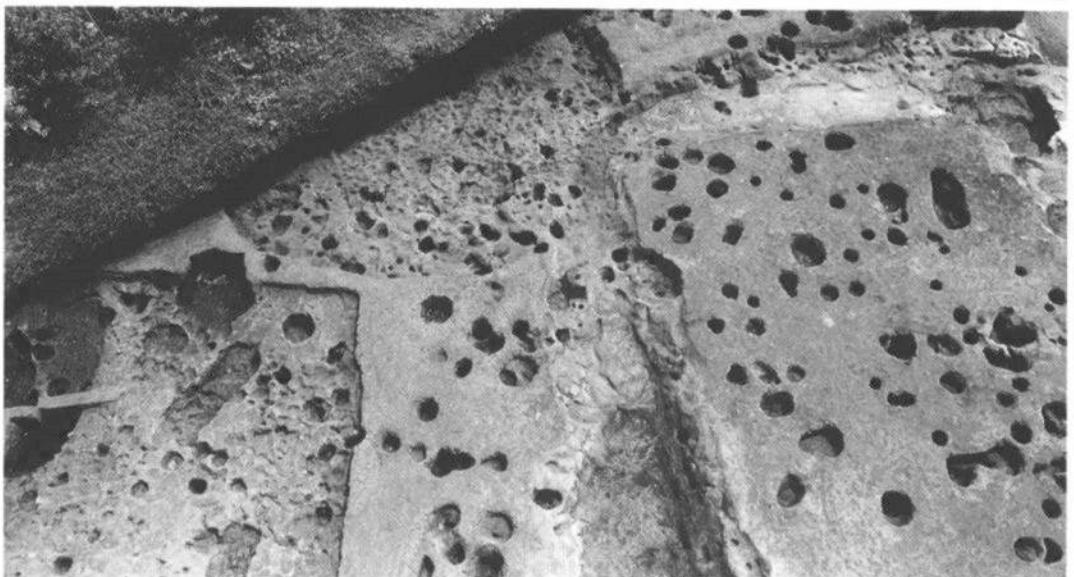
座禅寺遺跡全景



(1) 座禪寺遺跡南半部

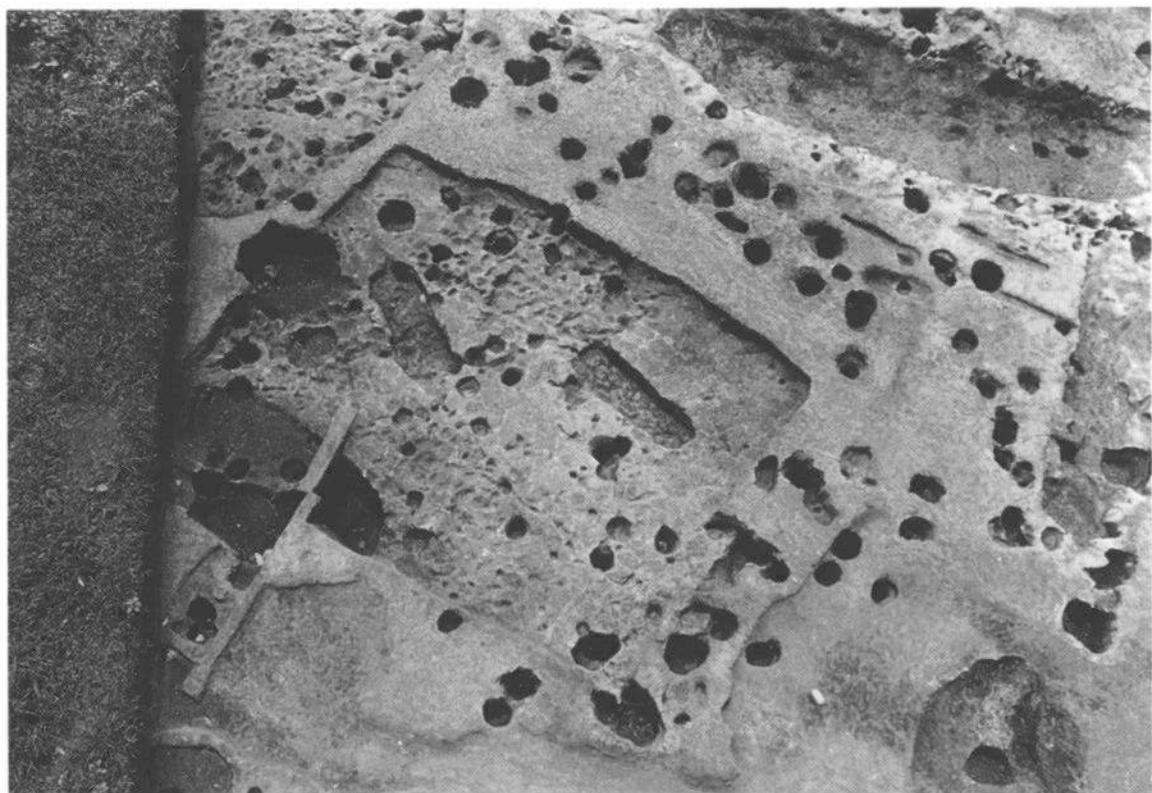


(2) 座禪寺遺跡北半部





(1) 7号竪穴住居跡



(2) 7号竪穴住居跡貼床下層



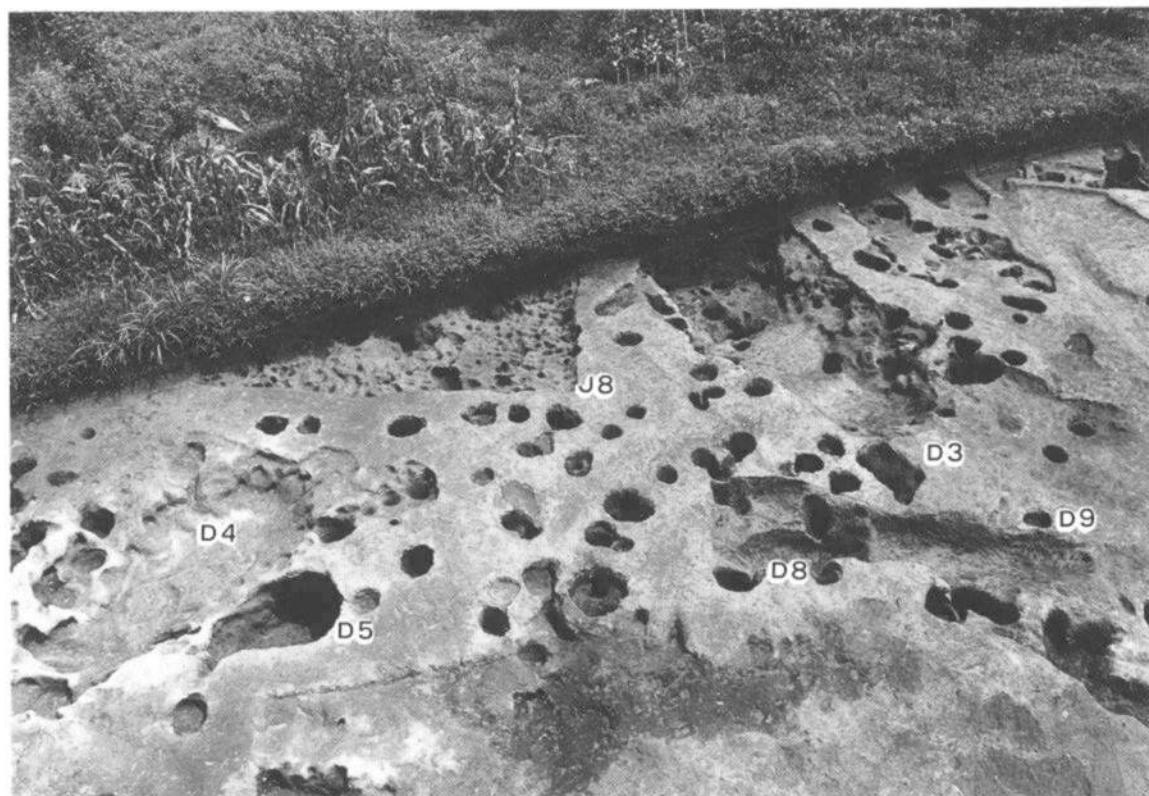
(1) 8号竪穴住居跡



(2) 8号竪穴住居跡貼床下層



(1) 4 ~ 5 号土壤



(2) 3 · 5 · 8 · 9 号土壤



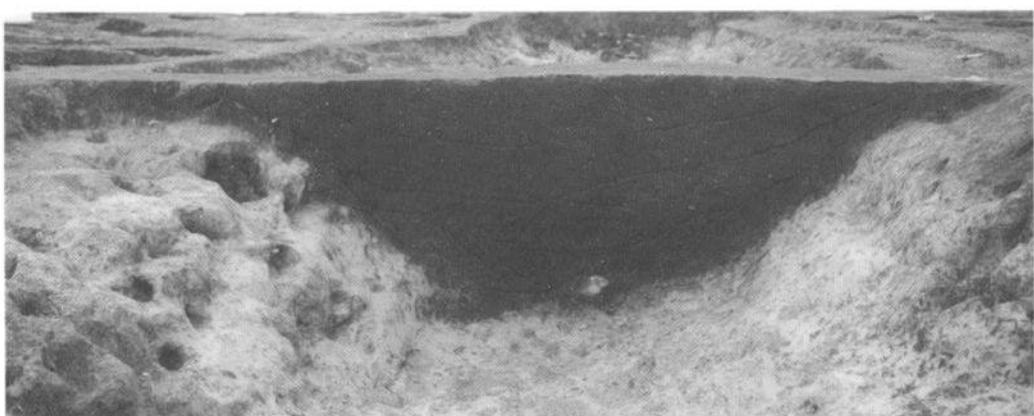
(1) 3号土壤



(2) 13号土壤



(1) 方形周溝墓全景



(2) 北周溝土層断面



(1) 方形周溝墓土器（4・5）出土状態



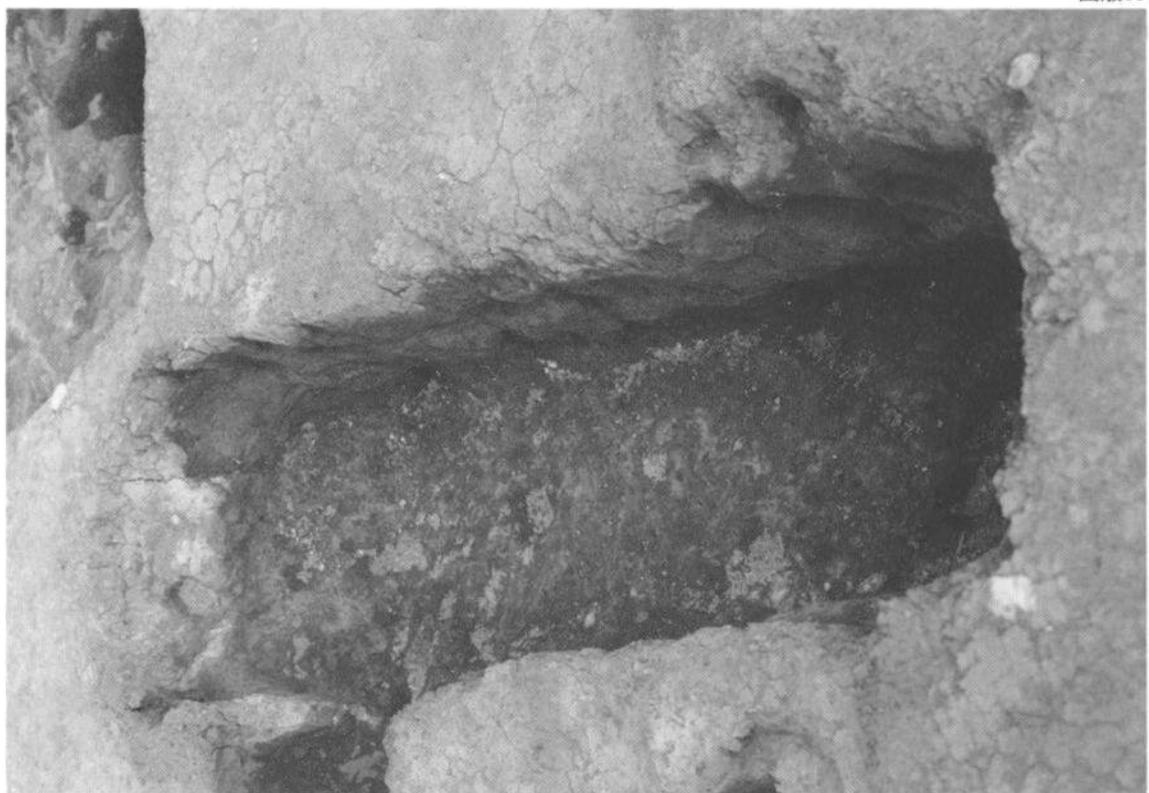
(2) 方形周溝墓土器（7・8）出土状態



(1) 方形周溝墓土器（9）・環状石斧出土状態



(2) 方形周溝墓土器（10・11・12）出土状態



(1) 1号土壤墓



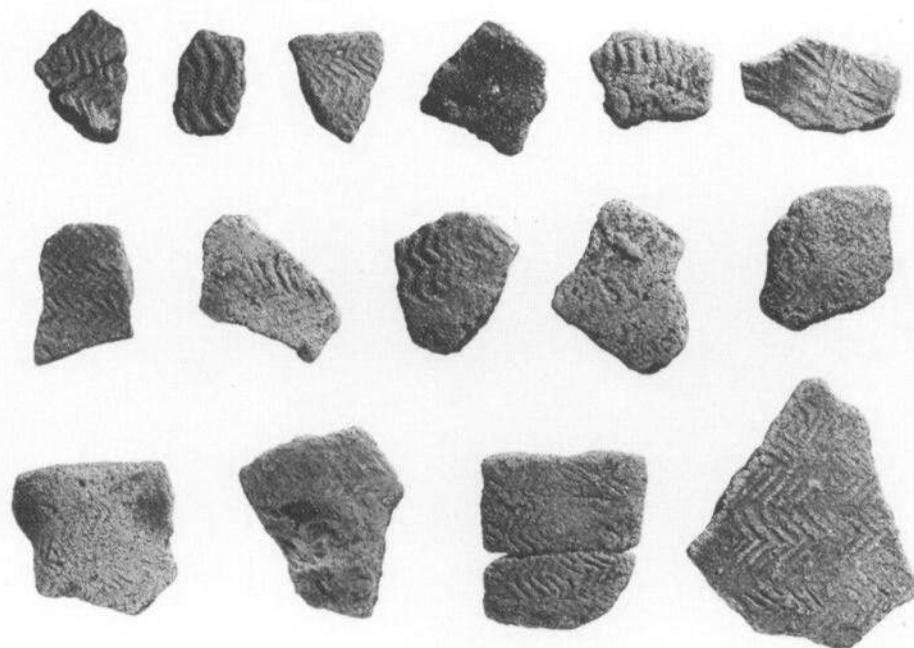
(2) 2号土壤墓



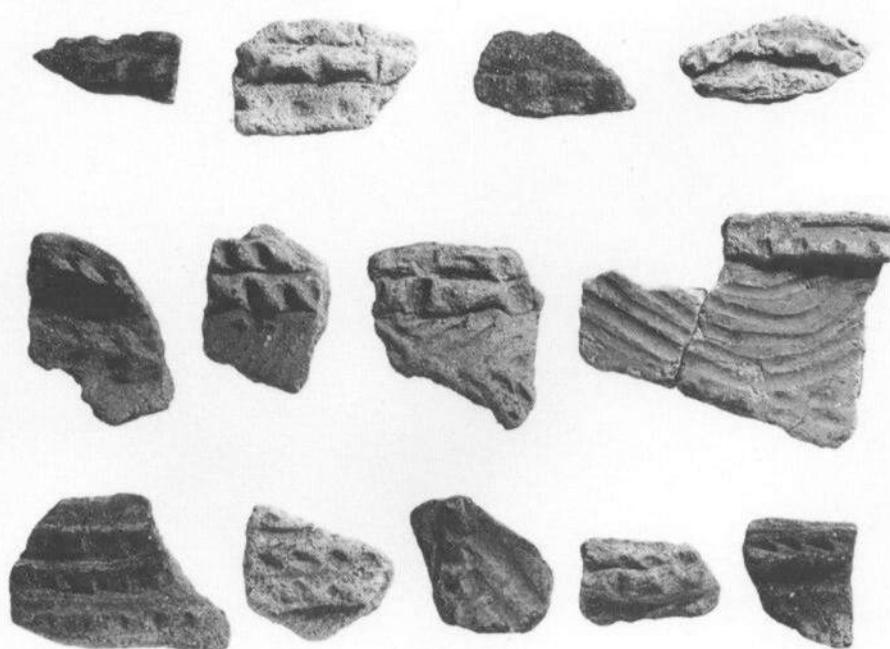
(1) 3号土壤墓



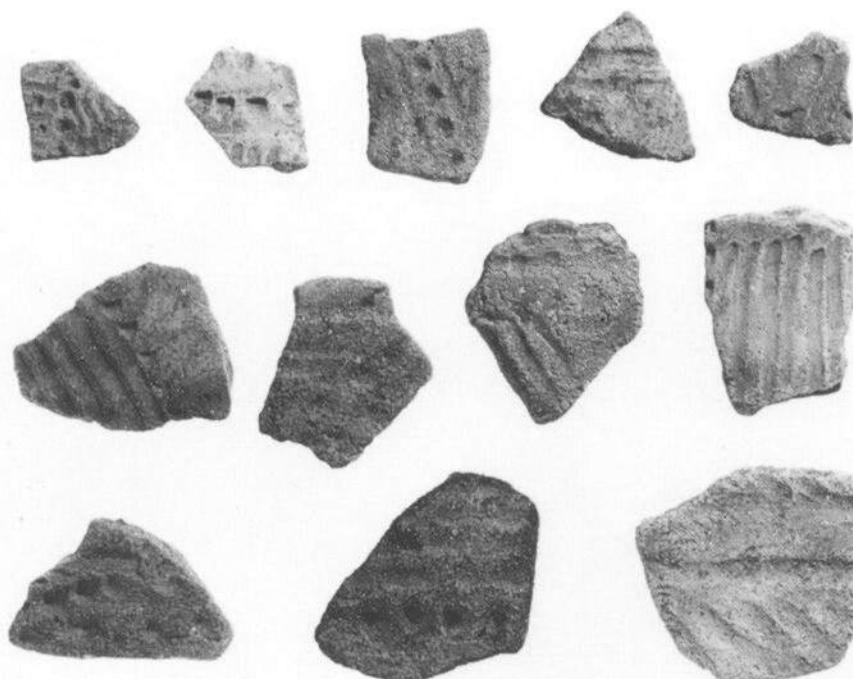
(2) 4号土壤墓



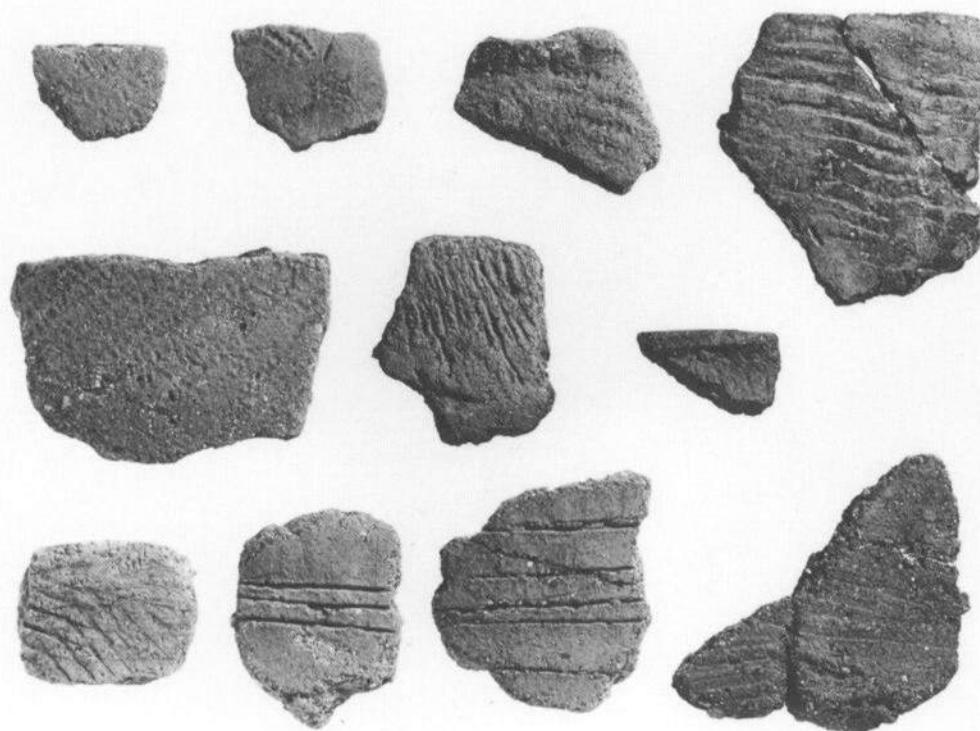
(1) 縄文土器①



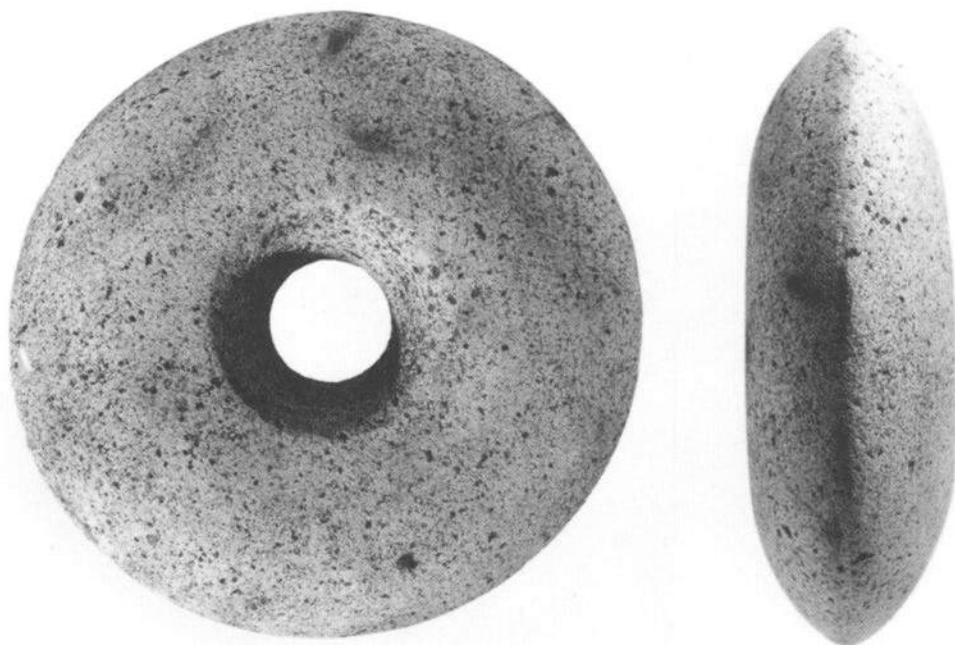
(2) 縄文土器②



(1) 繩文土器③



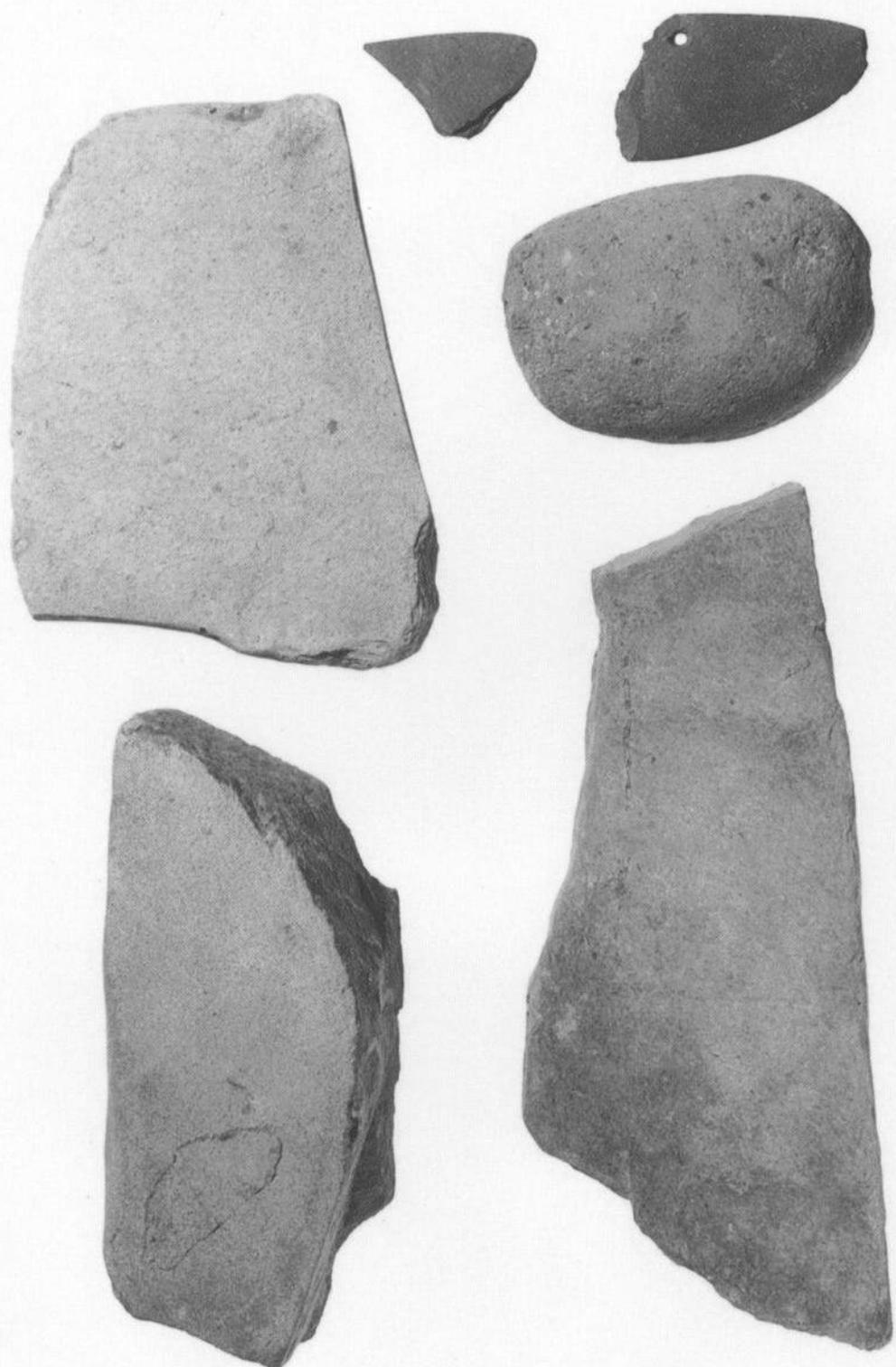
(2) 繩文土器④



(1) 環状石斧



(2) 鉄製品（左：3号住居，中：7号土壙墓）・土製品（右：7号住居）



6B・7号住居及び8・12号土壤出土石製品



住5



住7-1



住6-1



住7-2



住6-5



住7-4



住6-9



住7-5



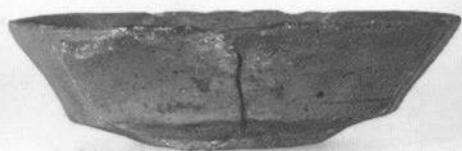
住 8



周 - 5



D 12 - 2



周 - 8



周 - 1



周 - 2



周 - 6



周 - 3



周 - 9



周-11



H 4-1



H 4-2



周-12



1号土壤墓



6A号住居

報告書抄録

ふりがな	きゅうしゅうおうだんじどうしゃどうかんけいまいぞうぶんかざいちょうさほうこく 32
書名	九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告—32—
副書名	朝倉郡朝倉町所在治部ノ上・座禅寺遺跡
卷次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	中間研志 児玉真一 水ノ江和同
編集機関	福岡県教育委員会
所在地	〒812 福岡県福岡市博多区東公園7番7号 TEL092-641-2903
発行年月日	西暦1994年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯度分秒	東経度分秒	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
治部ノ上	福岡県朝倉郡 朝倉町大字入地 字治部ノ上2645他			33°22'57"	130°42'23"	昭和59年 5月9日 ~10月9日	4,800	九州横断 自動車道建設
座禅寺	福岡県朝倉郡 朝倉町大字入地 字座禅寺2585-1			33°22'57"	130°42'36"	昭和59年 5月9日 ~8月10日	2,600	同上

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項
治部ノ上	散布地 集落墓	縄文早期	土壙、風倒木痕	10	手向山式土器、石器		
		縄文晚期	土壙	5	縄文晚期土器、粗製石斧		
		弥生~古墳	住居跡	31	弥生土器、鉄器		
	奈良 室町	石蓋土壙		1	管玉		
		方形周溝墓		2	土師器		
		掘立柱建物		1			
座禅寺	集落墓	住居跡		2	土師器、鉄釘		
		溝		3	陶磁器、土師器、石鍋		
	平安	住居跡		9	弥生土器		
		掘立柱建物		1	弥生土器		
		土壙		7			

福岡県行政資料	
分類番号 J H	所属コード 2 1 3 3 0 5 1
登録年度 5	登録番号 5

九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告

— 32 —

平成 6 年 3 月 31 日

発行 福岡県教育委員会
福岡市博多区東公園 7 番 7 号

印刷 赤坂印刷株式会社
福岡市中央区大手門 1-8

九州横断自動車道関係
埋蔵文化財調査報告

— 32 —

朝倉郡朝倉町所在 治部ノ上・座禅寺遺跡

付 図



号方形周溝墓

図 治部ノ上遺跡遺構全体図 (1/200)



2-B